

ご注文は家出人ですか？

Alkali

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

親を失って天涯孤独となった高校生の兄と妹。

施設に入所することを選ばず、逃げることを選んだ高校生の「七瀬悠」は、妹「里恵」を連れて、遠くへ、遠くへと向かった。

——たどり着いた先は、木組みと石畳の街だった。

オரி主以外の警告タグは保険です。

目次

第1章 木組みの家と石畳の街編

第一話	終わりの始まりと始まりの始まり	1
第二話	落ち着きのない喫茶店	5
第三話	お姉ちゃんが不在(前編)	9
第四話	お姉ちゃんが不在(後編)	13
第五話	奇妙な甘味処	19
第六話	優しさ	23
第七話	チノのイタズラ	26
第八話	ココアと買い物	30
第九話	出撃!路地裏探検隊!	33
第十話	出撃!洋館探検隊!	37
第十一話	出撃!洋館調査隊!	41
第十二話	帰還!探検隊!	45
第十三話	チノが風邪をひいたようです(前編)	49
第十四話	チノが風邪をひいたようです(後編)	57
第十五話	図書館で勉強	64
第十六話	悪夢 1	68
第十七話	悪夢 2	71
第十八話	悪夢 3	75
第十九話	悪夢を見終わった後は	80
第二十話	ココアの様子がおかしい	83
第二十一話	お姉ちゃん襲来!	86
第二十二話	お姉ちゃんのお姉ちゃん	90
第二十三話	街案内	94

第二十四話	相談兼仲介役	98
第二十五話	サプライズパーティー	101
第二十六話	尊い妹	104
第二十七話	チノとデート!?	107
第二十八話	デート大追跡!	111
第二十九話	デート包囲網!	115
第二十九話	ゲームセンター	118
第三十話	軍法会議!?	121
第三十一話	因縁	125
第三十二話	職業体験	128
第三十三話	3日だけ……	131
第三十四話	休日の過ごし方	134
第三十五話	山へ出発!	138
第三十六話	サバイバルキャンプ	141
第三十七話	ゾンビとマイムマイム	144
第三十九話	願い事	147
第四十話	山の夜は2人きりで	151
第四十一話	チノは写真家	154
第四十二話	ココアの相談	157
第四十三話	マヤのホラー映画	160
第四十四話	ラビットハウスで事案発生!?	164
第四十五話	もふもふな大喧嘩	167
第四十六話	大喧嘩はお嬢様の力で	170
第四十七話	お姉ちゃんって呼んで!	173
第四十八話	フアツションショー	176

第四十九話	雨宿りはラビットハウスで	179
第五十話	みんなで夜ご飯	182
第五十一話	リゼの恋バナ	185
第五十二話	ババ抜きでチノが壊れた話	188
第五十三話	ココアとデート!?	191
第五十四話	マメ隊に会って、リゼに会って	195
第五十五話	甘兎庵で遭遇!	199
第五十六話	ココアと本探し	202
第五十七話	チノのモヤモヤ	206
第五十八話	ラビットハウスで事故発生!?	210
第五十九話	暴れると出血してしまいます!	214
第六十話	リゼのお説教	218
第六十一話	悠と里恵のルーティーン(前編)	222
第六十二話	悠と里恵のルーティーン(後編)	227
第六十三話	制服が暑すぎる!	231
第六十四話	夏服を作ろう!	236
第六十五話	倉庫の掃除は肩車で	240
第六十六話	友は世代を超えて	244
第六十七話	雨の日は温水プールで	248
第六十八話	泳ぎの練習	252
第六十九話	ココアとチノが入れ替わった(前編)	257
第七十話	ココアとチノが入れ替わった(後編)	261
第七十一話	ココアの計画	265
第七十二話	みんなで肝試し	270
第七十三話	お化けと狙撃手	275

第七十四話	もふもふなお化け	280
第七十五話	雨の日は添い寝が一番	286
第七十六話	夏休みに突入!	291
第七十七話	ココアと旅立ち	295
第七十八話	ココアの実家に到着	299
第七十九話	ココアシツクとチノシツク	303
第八十話	チノと長電話?	307
第八十一話	お店のお手伝い	311
第八十二話	ココアの夢は魔法使い?	317
第八十三話	店の模様替え	322
第八十四話	花火大会は全員で	326
第八十五話	夏祭りで……(前編)	331
第八十六話	夏祭りで……(後編)	335
第八十七話	ホームシツクなココア(前編)	339
第八十八話	ホームシツクなココア(後編)	343
第八十九話	振り回され隊隊員会議	347
第九十話	お泊り会の開会式は激闘から	351
第九十一話	お泊まり会は洋酒入り菓子とコーヒーで	356
第九十二話	告白ブーム到来?	361
第九十三話	お泊まり会の定番! 王様ゲーム	366
第九十四話	真夜中の内緒話	371
第九十五話	真夜中の恋愛相談室	376
第九十六話	バレーボールは命がけで	380
第九十七話	ココアが開く試食会は不人気	384
第九十八話	チノとりゼの悩み事	389

第九十九話	ドライブはココアとティッピーとともに	394
第一百話	ドライブは夕日と好きな人を乗せて	399
第一百一話	新学期早々トラブル発生!	412
第一百二話	チマメ隊、解散の危機!?	416
第一百三話	出撃! 深夜探検隊!	422
第一百四話	コーヒーの匂い	426
第一百五話	恋愛すごろくゲーム (前編)	430
第一百六話	恋愛すごろくゲーム (後編)	436
第一百七話	制服と進路	441
第一百八話	夏風邪は治りにくい (前編)	444
第一百九話	夏風邪は治りにくい (後編)	447
第一百十話	怪盗ラパン参上!	452
第一百十一話	怪盗ラパンの悩み事	456
第一百十二話	怪盗ラパンとシヤロ	460
第一百十三話	千夜に緊急事態発生!	464
第一百十四話	早朝ランニング≡犬の散歩	467
第一百十五話	早朝ランニング≡戦場	471
第一百十六話	早朝ランニング≡ラジオ体操	475
第一百十七話	マラソン大会はツインテールで	479
第一百十八話	リゼ宅にて	483
第一百十九話	リゼⅡ (ミリタリー+ホームエコノミクス) ÷ 2	488
第一百二十話	お揃いのうさぎ	493
第一百二十一話	サバイバルゲーム in リゼ宅	498
第一百二十二話	対お姉ちゃん遊撃部隊	502

第二百二十三話	姉妹、いざ決戦！	506
第二百二十四話	古物市の商品	510
第二百二十五話	雑貨店ラビットハウス・開店！	513
第二百二十六話	雑貨店ラビットハウス・閉店！	517
第二百二十七話	ココアのマジックショー	521
第二百二十八話	夢の中の記憶	524
第二百二十九話	振り回され隊・宝探し任務開始！	528
第二百三十話	思い出は宝箱の中に	532
第二百三十一話	ココアとりぜは1日カップル？	535
番外編	七夕祭り in 木組みの街	540
第二百三十二話	ココアの「カップルごっこ」	547
第二百三十三話	カップルごっこは修羅場ごっこ？	552
第二百三十四話	危険な遊びが流行中！	557
第二百三十五話	カップルごっこの後遺症	561
第二百三十六話	魔法少女爆誕	565
第二百三十七話	シャロ宅防衛隊（前編）	569
第二百三十八話	シャロ宅防衛隊（後編）	573
第二百三十九話	部屋から追い出された話	577
第二百四十話	ポポロンパーカー	580
第二百四十一話	ココアとお留守番	584
第二百四十二話	ラビットハウスのトラブルメーカー	588
第二百四十三話	鈍感な2人	592
第二百四十四話	チマメ隊とお茶会！（お知らせ有）	595
第二百四十五話	お茶会でハプニング!?	599
第二百四十六話	カラオケにて	603

第百四十七話	シヤロと密会	606
第百四十八話	ココアとチノと里恵と	609
第百四十九話	ポツキーゲーム(前編)	613
第百五十話	ポツキーゲーム(後編)	617
第百五十一話	倉庫で……	620
第百五十二話	一人っ子なりゼ	624
第百五十三話	姉妹ごっこ(1日目)	627
第百五十四話	姉妹ごっこ(2日目)	632
第百五十五話	姉妹ごっこ(3日目)(重要なお知らせ有)	638
第百五十六話	チノと深夜徘徊	641
第百五十七話	深夜の進路相談会	645
第百五十八話	先生になるための特殊訓練	649
第百五十九話	志望理由	653
第百六十話	買い物と幽霊	656
第百六十一話	魔法の勉強会?	660
第百六十二話	ココアと悠と壁	663
第百六十三話	ティツピーの占い	667
第百六十四話	正夢にならないように	670
第百六十五話	鈍い恋心	674
第百六十六話	照れ隠しとゲームと対抗心	678
第百六十七話	好きな理由	682
第百六十八話	反省と歌の特訓	685
第百六十九話	過酷な訓練	689
第百七十話	特殊訓練の準備とチノの悩み	692
第百七十一話	甘兔庵カラオケ大会!	695

第七十二話	音楽会の前夜祭	698
第七十三話	音楽会	702
第七十四話	千夜のプレッシャー	706
第七十五話	クラスの弟	709
第七十六話	文化祭	713
第七十七話	振り回され隊 in 文化祭	717
第七十八話	文化祭は写真と思い出を残して終了する	720
第七十九話	ココアの夢は路上ミュージシャン?	724
第八十話	演奏会 in ラビットハウス	728
第八十一話	ハロウィンイベント	732
第八十二話	魔法との再会	735
第八十三話	ハロウィンも終わり、塾の季節がやってくる。	
738		
第八十四話	青山さんの休日	741
第八十五話	メリーゴーランド≡対悠用の罨	744
番外編	おめでどうの準備	748
第八十六話	鬼ごっこの終焉とうさぎ革命	755
第八十七話	ワイルドギース・チノ	758
番外編	おめでどうの日	761
第八十八話	特製コーヒーとパン	769
第八十九話	いかがわしい店	772
第九十話	街にココアが大量発生?	776
第九十一話	思春期の悩み	780
第九十二話	気まづい空気と事件前夜	784
第九十三話	事情聴取と事件後の処理	788

第百九十四話	クリスマス前夜	792
第百九十五話	カオス・クリスマス	797
第百九十六話	懐かしの制服	802
第百九十七話	お手製の目覚まし時計	805
第百九十八話	初詣は着物とともに	808
第百九十九話	おみくじ	812
第二百話	ラビットハウス・和菓子騒動	816
第二百一話	リゼと密会	827
第二百二話	振り回され隊・有識者会議	830
第二百三話	相談の答え合わせ	833
第二百四話	ティツピーが追い出された話	836
第二百五話	屋台巡りと命令探し	839
第二百六話	チノの命令とイメチェン	843
第二百七話	ロゼの一日店員	847
第二百八話	ココアとゲームセンター	852
第二百九話	迷子の2人	856
第二百十話	チマメ隊のPV作り	859
第二百十一話	ときめきポポロン	862
第二百十二話	キッチン封鎖事件	865
第二百十三話	バレンタイン	868
第二百十四話	受験の幕開け	873
第二百十五話	受験と不安はセットでやってくる	876
第二百十六話	不安は眠りと共に消えていく	879
第二百十七話	合格発表	883
第二百十八話	資金問題	886

第二百十九話 出稼ぎと行き先 980

第二百二十話 行き先の発表と資金問題の解決 894

第二百二十一話 卒業式 897

第二百二十二話 旅行の準備 901

第二百二十三話 日常はわくわくとともに 905

第二百二十四話 旅行前の身嗜み 909

第二百二十五話 髪のお手入れは慎重に 913

第二百二十六話 甘兎庵・忍者フェア 917

第二百二十七話 出発前夜(お知らせ有) 921

第2章 百の橋と輝きの都編

第二百二十八話 ラビットハウス・パニック 924

第二百二十九話 ステーション・パニック 928

第二百三十話 トレイン・パニック 932

第二百三十一話 百の橋とトラム 935

第二百三十二話 商店街と廃墟 939

第二百三十三話 ホラー・ホテル 943

第二百三十四話 ホラー・ルーム 946

第二百三十五話 停電事件 949

第二百三十六話 早とちりはもうしない 952

第二百三十七話 早起きは三文の徳 955

第二百三十八話 二度寝したら自爆した話 959

第二百三十九話 朝食会議 963

第二百四十話 サイクリングはりぜを乗せて 967

第二百四十一話 濃縮された1日 971

第二百四十二話 喫茶店巡りに出発! 974

第二百四十三話 喫茶店巡りは忙しい | 978

第二百四十四話 ラビットハウス in ロイヤルキャッツ

981

第二百四十五話 お風呂トラブル | 985

第二百四十六話 チェス勝負 | 990

第1章 木組みの家と石畳の街編

第一話 終わりの始まりと始まりの始まり

——母親が病気で死んでから2年。今度は父親が殺された。

親戚もいない、完全に詰んだ高校生の僕はこれからどうなるのだろうか。

そんなことを考えていると、電話がかかってきた。

「もしもし」

「ああ、繋がった。児童相談所の者ですが——」

「養子縁組？」

「そう、君は高校1年生になったばかり。一人暮らししろと突き放すのも厳しいものだ。それに、君にはもう一人家族がいるだろう」

僕には9歳の妹がいる。

「里親がいた方が、将来的にも——」

「冗談じゃない」

すぐに電話を切った。

何が里親だ。血も繋がっていれば知り合いでもない。

見ず知らずの人に「買われる」なんてごめんだ。

それに——、いい人に当たればいいが、悪い人に当たってしまった
暁には何をされるかわからない。

「逃げるしか……それしか方法がない」

逃げることを決意した俺——七瀬悠^{ななせゆう}は、さっそく準備に取りかか
た。

最初にお金。銀行の預金——と、言いたいところだが、せいぜい数
十万程度しか見つからなかった。

「——これで暮らすのは無理があるか。まあいい、なんとかしてみせ
よう」

とにかく、この腐った街から出て行きたい。それしか考えていな
かった。

また、電話がかかってきた。

「はい」

「警察です。このたびはお悔やみ申し上げます……」

「ああ、そういうの結構です」

正直、かなり腹を立てている。何がお悔やみだ。未だに殺人犯を見つけていないくせに。

「――。実は、容疑者の足取りが途絶えておりまして。未だどこに潜んでいるのかわかっていません。我々は搜索規模を拡大することにしました。それに、あなたがた兄妹の安全も確保しておきたい。つきましては、警察署の方に……」

「なるほど。わかりました。準備していきます」

当然、嘘である。安全確保とかいって、事情聴取するに決まっているだろう。それに、マスコミが家にやってくる可能性も大きい。

「何してるの？」

妹――里恵りえがこちらにやってきた。

「今すぐ家を出る準備をしなさい。あんまり荷物は持っていけないから、必要なものだけにしてくれ」

「どうして、家を出るの？」

「このままここにいと、ろくでもないことになる。それに、殺人犯もまだ見つかっていない」

「……………」

「残りたければ残りなさい。でも、俺を信じるといふなら……」

「わかったよ。よくわからないけど、ここにいたら面倒なことになるんでしょ？」

「ああ……。ありがとう」

最後に、携帯を初期化して電源を切り、バッテリーを抜いて部屋の奥に隠した。

帰宅ラッシュが終わったのを見計らって僕は電車に乗った。

「行く宛てはあるの？」

「ない。とにかく、電車を乗り継いで遠くに行くんだ」

夜中に幼い女の子を連れられた高校生が電車に乗っていたら不審から

れるかもしれない。

職質でもされたら元も子もない。

だから、なるべく兄妹感を出すように伝えてある。

——まあ、実際兄妹だしね？

ガラガラの車内に、酔っ払ったおじさまたちが乗ってくる時間帯になった。

終電が近い。ここらで降りる必要がありそうだ。

住んでいる——否、住んでいた場所からかなり遠い場所までやってきた。1日くらいはここで過ごしても大丈夫だろう。

改札を通過して、駅前のホテルに泊まることにした。年齢を偽装して、なんとか泊まることができた。携帯もパソコンもない退屈な世界。だが、疲れが大きいのか、そんなことを気にする間もなくすぐに寝てしまった。

翌朝、適当に朝食をとったあと、すぐに電車に飛び乗り、また田舎の方へと向かった。

「えっ、もう電車ないんですか？」

「はい……。ここから先に向かうのでしたら、向かい側の駅からディーゼル機関車に乗車いただくしか……」

「まじですか……。まあ、いいか」

改札を出ると、莫大な金額がICカードの残高から引かれていた。

それから、また1日がたった。2人分の交通費に、出てくる際に買ったリュックサックや食料費、そしてホテルや旅館代……もう残金は残りわずかになっていた。

「おなかすいたよ。今日はこの辺で何か食べよう？」

「ああ……」

ディーゼル機関車ではるばるとやってきた場所は、日本とは思えな

いほどフランス風の街で、疲れや最近の不幸で笑顔が消えていた里恵も笑みを浮かべるほどきれいな場所だった。

「ん……？ラビットハウス？うさぎカフェか何かか？」

「入ってみよ！」

「あ、ああ……」

扉をあけると、そこにはどうにも落ち着かない店員、コミュ障っぽい店員、そしてやたら元気な店員が迎えてくれた。

第二話 落ち着きのない喫茶店

「いらつしやいませ……」

「ん……う？うさぎがないぞ」

「うちはそういう店じゃないので」

いつも誤解されるんだよね。とでも言いたそうな顔で冷たく対応された。

「ご注文は」

「一番安いので」

「この辺で全然見ないお客さんだね！どこからきたの？」

「コミュ障っぽい店員が去り、入れ替わりでやかましい店員がやってきた。」

「……。ちよつと遠くから」

「ごつちのお嬢ちゃんは？」

「妹の里恵です！」

「かわいい！この子も私の妹にしちゃおうかな！」

「ココアさん。それくらいにしてください。気にしなくて結構ですの
で……」

目の前にコーヒーカップが2つ置かれた。

「しかし、すごい荷物だな！軍事演習でもやるのか!？」

「どうしてリゼちゃんはその発想になるの!？」

「——何かあったんですか？」

「え、えつと……山登りに……」

「なるほど！山で猛獣狩りするんだな！」

「えつー!?!この辺の山に猛獣いるの!?!」

「いまいち、この喫茶店のテンションについていけない2人であった
……。」

近くにそこそこ安い宿屋があると聞き、しばらくの間この街に滞在

することになった。

なにより、里恵も気に入っている。

だが、そんな楽しい日々が続くとは限らない。もう、財布には小さい小銭しか残っていないのだ。

それに、この街に頼れる知り合いなど、あの落ち着きのない喫茶店の店員しかいない。

「あつ！あの時のお客さん！山は登れた？」

「ココアさん……。あまりはしゃがないでください」

「あの……。ここでバイトつてできますかね」

「えっ……？」

お金が底をついてしまったら、もうどうしようもない。

せめて、ここでバイトできるなら……。

「あつ……。でも履歴書とかないんですけど……」

「履歴書がない？」

「はい……。あと、住所もないです。親も……」

「まさか、ここに家出してきたつてことか!?——いや、家がないなら家出つていうのか……。うーん」

「リゼさん！紛らわしい話しないでください！えつと……。その件については私がマスターの父に伝えておきます」

里恵とあの店員らが遊んでいる間、この喫茶店のマスターと急遽面接をすることになった。

「私は、香風タカヒロ。チノの父親だ」

おそらく、チノというのはあのコミュ障っぽい店員のことだろう。

そして、ここにやってきた経緯などを一気に説明した。

「君は……。チノに似ているところがある。昔に母を、一昨年に祖父を亡くして、今は父親である私しか……」

「そうでしたか……」

「だが、バイトとして当店に迎えることは難しい。履歴書もなければ、保護者の承諾書もないわけだし、身分証明書保険証1枚だけだし」

「ですよ。タカヒロさん、俺はこれからどうすればいいのでしょうか」
タカヒロさんは目をつぶった。

長い沈黙の時間。都会の車などの汚い騒音などが一切耳に入って来ないせいか、耳鳴りがする。

「そうだな……。しばらくの間、うちに泊まるといいよ。『お手伝い』として、うちで軽く働いてもらう、ということにしておけば、いいんじゃないかな?」

「ありがとうございます!」

こうして、しばらくの間寝泊まりする場所が決定した。

「へえー!じゃあ今日から里恵ちゃんは私の妹だ!チノちゃんと一緒にふもふ〜♪」

「ココアさん苦しいです」

あのやかましい店員、人に抱きつく癖があるのか。いかんいかん、期待するなよ俺。

「自己紹介が遅れました。私はチノです。ここのマスターの娘です」

「私ココアだよ!私もここで住み込みで働いてるの!」

「私はリゼだ!私だけ住み込みで働いてないからちよつと寂し……。いいや!なんでもないぞ!ビシバシおまえを鍛えるからな!」

お互いに自己紹介を済ませ、荷物を空き部屋に置いた。

「しかし、よくOKしてくれたな!」

「ええ、まあ……。妹はともかく、俺男だし、こんな女性ばかりの家に泊まらせてもらえるとは……」

「チノに手を出したらワシが許さんぞ!」

「うわ!なんだこの毛玉!しゃべったぞ!」

「私の腹話術です」

「いやいや、さすがに」

「腹話術です」

「このうさぎさん、何か秘密が」

「腹話術ですー!」

「ひえっ………ていうかうさぎだったのかよー!」

妹にすら容赦ないチノだった。

これ以上踏み込むなということだろう。

「じゃあ、また明日!」

リゼが店を出て行った。

彼女だけこの店で住み込みで働いていないのか。

そういえばさつきもそんなことを言っていたような気がする。

「そういうえば、悠くんはな、何歳なの……?」

若干震えた声でココアが聞いてきた。

「15ですよ。高校1年生」

「えーっ!!じゃあ悠くんは弟だあ〜!」

「ココアさんはおいくつで?」

「私は君の1つ上だよ!」

「なんだ、てつきり年下かと……」

「ぶぷっ」

隣でチノが吹き出した。

「あーっ!チノちゃん今笑ったでしょーもー!」

「チノさんは?」

「私は中3なので1つ下ですよ」

それから、夜ご飯を作ることになったのだが、チノの頭に小麦粉をかぶせたり、ケチャップで死んだりとかオスな時間が続いたのであった……。

第三話 お姉ちゃんが不在（前編）

「ココアさん、また勉強会に行くんですか？」

「うん！ 千夜ちゃんの家にいるから、何かあったら来てね！」

「何もないと思うので、多分行きませんがわかりました」

「最近チノちゃんが冷たいよお！」

どうやら、ココアが友達の家へ勉強合宿に行くみたいだ。

「友達と勉強会って、はかどらなさそうだな」

「あれ、気のせいかな悠くんも冷たいような……」

朝の9時頃、ココアは出かけていった。

今日は土曜日、三連休の真っ只中。

「三連休だけど……相変わらず人来ないな」

「暇です……」

リゼも何か用事があるみたいで、今日は休みのようだ。

ちなみに里恵は、ここ最近の疲れからかぐつすり眠っていた。

そのとき、店に客が入ってきた――。

「いらっしやいませ。あ、青山さん」

「どうもー。新人さんですか？」

「ええ、まあ」

彼女は席につくと、ブルーマウンテンを注文し、原稿用紙を机に広げた。

「青山さんって？」

「小説家の青山ブルーマウンテンさんです。うちの常連さんで、よく

「ここで小説を書いているんですよ」
「そうか」

そういうえば、なんかの映画の原作を書いていた人だ。
友達が映画に行こうと誘ってくれていたが、用事で行けなかった。

「ココアさんがいないとラビットハウスってこんなに静かになるのか」

「ええまあ、主に騒がし……いえ、賑やかなのはココアさんなので」

「今一瞬騒がしいって……」

「そんなことより、コーヒー豆持ってきてください」

「了解」

チノはココアのことを嫌いなのだろうか。

それとも、「照れ隠し」ってやつなのか。

どちらにせよ、ああいう場を盛り上げてくれる人がいると何かと助かる。

「コーヒー豆。この袋であつたのか？」

「はい。これです。ありがとうございます」

そんなこんなで、もう夕方になってきた。

ラビットハウスの店内が黄金色に輝いている。

客もおらず、チノと二人きりでぼーっと過ごしていた。

「ん、おはよう」

そのとき、里恵が降りてきた。

「ああ、おはよう。つてもう夕方だけだな」

「昨日、ココアちゃんとあれこれ話したら夜更かししちゃって」

里恵は当分ココアの部屋で寝ることになっている。
否、ココアが半ば強引に引き込んだ、と言った方が正確だろうか。

「それで、私は何すればいい?」

「私これから買い出しに行くので、よければ一緒に来てもらえませんか」

「わかった!」

「ということで悠さん、買い出しに行ってくるので店番お願いします。といってもお客さんは来ないと思います」

「了解」

この店、経営は大丈夫なのかと内心不安だ。

「きれいなだね!」

「そうでしょか」

市場で買い物をしているチノに、里恵が話しかけた。

「おっ、チノと里恵じゃないか」

「あっ、リゼさん」

同じく市場で買い物をしていたリゼに出会った。

「リゼちゃんは何を買いにきたの?」

「ああ、実はさつき部活の助っ人に駆り出されてな。小腹が空いたから何か食べようと思って」

「部活の助っ人?」

「そうだ。演劇部で役者が一人足りないらしくてな」
「へえ〜!」

「ただいまです」

「おかえり。遅かったな」

「途中でリゼさんと話してたら遅くなってしまいました。今、ご飯の支度します」

「なんか夫婦の会話みたい……」

チノと俺の動きが固まったのは言うまでもない。

第四話 お姉ちゃんが不在（後編）

「悠さんって文系の教科得意ですか？」

夕食の片付けが終わり、一段落した頃チノが悠に問いかけた。

「ああ、理系も文系もまあまああって言ったところか」

「文系だとココアさんが頼りないので、教えていただけますか」

「いいよ」

どうやらココアは文系が絶望的という。

勉強全般が出来なさそうな雰囲気をしているが、どうやら理系は得意らしい。

そんな話をしながら、チノの高校入試の対策は進んでいく――。

「――それで、徳川慶喜は朝廷に政権を返した。これが大政奉還ってやつだ」

「すごいです、みるみる問題が進んでいきます！」

里恵はチノの部屋にあつたパズルに夢中だ。これ以上ないくらい集中している。

「あの……確か悠さんって高校生でしたよね。学校はどうするんですか？」

「俺もそのことは困っていてな。まあ自分で勉強して高卒資格とればいい話なんだけど……。お金もないし」

「いいんですか、高校生活って貴重ですよね」

「まあ、そうだけど、俺はラビットハウスで働いてるほうが楽しいさ。それに――」

この街はとてもきれいで温かい街だ。

もともと住んでいた薄汚くて冷たい都会とは違い、何もかもが生き

生きとしている。

——すべてが輝いているのだ。

「——？」

「いや、なんでもない。とにかく俺のことより問題集進めていこうぜ」

「——はい。あつ、明日は休日ですし、街の案内もかねてココアさんが割ったカップを買いに行きたいと思います」

「何してるんだあの人は……」

ココアらしいといえば人間がいいかもしれないが、ラビットハウスは客も少ない喫茶店、カップの補充にお金を使っていたら破綻するのではないだろうか。

そして翌朝。シンプルな朝食を取り終えて、早々に出かける支度を済ませる。

「この場所、とても眺めがいいんですよ」

最初に連れてこられた場所は、丘の上にある見晴台だった。

この辺にカップを売っている場所があるらしい。

「空気が澄んでて気持ちいい！」

「あ、あの……悠さんはここの坂で自転車の練習しようとか言い出さないんですね。ちよつと安心しました」

「この坂で何があつたんだ!？」

どうせまたココアが無理難題を押しつけてチノを振り回したのだろう。

そんなことを思っていると、目的地である店の前に着いた。

「ふああ……このForme……」

「おい、なんかやべえ奴がいるぞ……」

店に入るとカップをなでながらにやけている明らかに「アレ」な人がいた。

「あ、シャロさん」

「なんだ、知り合いだったのか」

ココアの知り合いはともかく、チノの知り合いでアレな人がいるとは、ちよつと驚きだった。

「チノちゃん……？その人はまさか——」

「うちの新人さんです。ココアさんから聞きませんでしたか？」

「あ、ああ、そういえばココアがそんなこと言ってたわね」

「七瀬悠です。あと、妹の里恵です」

「私は桐間紗路です。フルール・ド・ラパンで働いています」

お互い軽く自己紹介をして、この店の話題へ——。

「またココアが割ったのね……」

「はあ……これで何個目でしょうか」

何やら深刻な話をしているようだが、俺と妹はマイカップをどれにするかで必死だ。

「あつ、ティップピーをこれに入れてみたらどうだろう？」

妹が持ってきたのは、大きめのカップ。——カップというよりどんぶりに見える。

「なんだかココアさんみたいです」

チノが微笑んだ。気のせいか、店内がまぶしくなったような気がする

る。

「悠さん、このあとちよつと寄っていきたい場所が……。できればシャロさんも来てほしいです」

「なんだろうと思いつつ、承諾した。シャロも一緒に行くことになった。」

「文房具屋なんですけど、学校の友達と見つけた穴場なんです。流行りのものとか置いてあるんですよ」

「えー！ そうなの!? 私も行きたい!」

里恵がさつそく食いつく。正直このテンションについていけない。

「なんか、今日のチノちゃんいつもより子供っぽい……」

シャロが隣でぼそつとつぶやいた。

「確かに。チノさんって結構大人びてるというか、あんまりそういうの興味なさそうだと……」

そして、話題の文房具屋に到着。

チノと里恵はシャロに流行の品の説明を受けていたが――。

「なんだこれは――なんの暗号なんだ」

「何に使うんだよそれ!？」

「て、天ぷら?」

このように、何一つこの暗号を理解することはできなかった。

「使い勝手悪そうだな……。もつと機能性で選べばいいのに」

「悠さんはリゼさんと相性よさそうですね」
「え!？」

なぜか真つ先に反応したのはシャロだった。

「そ、そんな……リゼ先輩……」

「なんだ、リゼさんと知り合いの方だったんですね」

「ああ……リゼ先輩……」

「ダメだこりゃ」

それから、会計を済ませてラビットハウスへ帰ることに。

「こんな洒落たシャーペンなんて初めて買ったかも……」

「みなでおそろいだね!」

最後に、みなでおそろいのシャーペンを買ったのだが、正直これを学校で使ったら公開処刑されそうだ……。

つてもう学校はない、のか――。

「あ、ココアさん」

「あつ、みんな!これからみんなでスパゲッティ食べに行くんだけど、
どうかかな?」

ラビットハウスの前にココアがいた。

多分、誘うために戻ってきたのだろう。

「賛成く!」

「さすがは我が妹だねくもふもふ」

妹が食いつくと案の定ココアが抱きつく。

この人は定期的に抱きつかないと気が済まないのか。

——こうして、結局ココアと合流してスパゲッティを食べに行くことになった。

第五話 奇妙な甘味処

ラビットハウスに、今日買ったものを置いてすぐ、ココアに案内された甘味処へ——の前に、リゼを誘いに彼女の家へ向かった。

「みんなで食事？すぐ行くよ！家で一番強力な武器を用意しておく！」

「決まりだな……ん？武器……？」

あっさり承諾してくれたが、何か勘違いしているような……。

「甘味処……あまうさ……？」

一見、和風な外見だが……。

「なんだこれ……。それで、スパゲッティの店ってここなのかよ」

「あら、まあ……。ココアちゃんが言ってた悠くんと里恵ちゃんね。

私はこの甘兔庵の看板娘の宇治松千夜です。サービスするわよ」

「ああ、よろしく」

「よろしくです！」

「しかし、甘味処でスパゲッティって……」

「千夜ちゃんは甘兔庵でターキーも出してるから、これくらい普通だよ」

ココアが説明するが、その理屈がまったくわからない。

チノが言うには、この二人はマイペースお騒がせコンビだそうで、振り回されないように気をつけたほうがいいと……。

そして、甘兔庵のメニューを見て絶句した。

「なにこれ……。『煌く三宝珠』『雪原の赤宝石』……。なんのことが全然わかんないぞ」

「あらいけない、初心者の方には指南書をお配りしなきゃね」

「はじめっからわかりやすい名前にしてほしいところだな……」

リゼもこちらに到着した。何やらすごい武器を持ってこようと思っていたらしいが、父親に危なすぎると取り上げられたらしい。

果たしてどんな武器だったのだろうか。知る由もない。多分知らないほうがいいかもしれない。

「はい、夕焼けの糸。お待ちどおさま」

「ナポリタンか……」

スパゲッティに糸なんて表現を使うから、どんなものなのかと内心不安で仕方なかったが、どうやら杞憂だったみたいだ。

「あ、そうだ。ココアさん。今度数学教えてほしいのですが」

「私のことはお姉ちゃんって呼んで！」

「——ココアさん」

「お姉ちゃん！」

永遠ループしそうな予感がする。

隣でチノがあきれたような顔をしているのが見える。

「——じゃあ、ココア」

「なかなか頑固だなあ」

知らない人をお姉ちゃんと呼べというの莫名其妙な話だ。

確かココアは俺と同じ居候だと言っていた。

まさかチノと出会ったときもこんな感じだったのでは……。

「この際、私のことも呼び捨てで呼んでほしいです」とチノ。

「私のことは教官と呼べ！言葉の後にはサーをつけるんだぞ！」とリゼ。

「私も気軽に下の名前で呼んでほしいわ」と千夜。

そんなたわいもない話をしていると、甘兎庵にシャロが入ってきた。

「な、リゼ先輩！」

「シャロじゃないか！お前もスパゲッティ食べに来たのか？」

「へっ……？」

こうして、なんやかんや全員集まった。

「シャロちゃん、なんで風呂桶とタオル？」

「え、えつとそれは……」

「それはうちのお風呂を——」

「こ、これから銭湯に行こうと思ってて!!」

千夜の言葉を無理矢理遮ったが、今のですべて察してしまった。

——間違いなく千夜の家のお風呂を借りに来ている。でも、今時お風呂がない家なんてあるのだろうか。

それともまさか——。

「そういえば、悠くんは彼女さんっているの？」

ココアの発言で口の中にあったものが一気に喉を通る。

激しい咳のあと、気がつけば全員の視線がこちらを向いていた。

「ごほん——それは……そのですね」

「お兄ちゃんはチノちゃんみたいなのが好きって前に言ってたよ！」

落ち着くために飲んだはずの水が胃に向かうことはなく、肺に向かった。

また激しく咳き込んだあと、チノのほうを見るとそこだけ気温が上がっていた。

「お、おい里恵！俺がロリコンみたいな言い方するんじゃないよ！確かにとおとなしい人がタイプだけど！」

「えく？だってこの前も夫婦みたいな会話してたじゃん」

「してないわ！」

このあと、散々な目にあっただのは言うまでもない。

第六話 優しさ

ラビットハウスに戻ってきたが……気まずい……。
気のせいかな酸素が薄くなっているような気がする。

草木も眠る丑三つ時——。

ものすごい雷雨だった。さきほど甘兎庵から帰ってきたときは晴れていたのに。

雷の音や光がやかましいせいか寝られない。

「あの……悠さん。起きてますか」

チノの声がした。こんな夜遅くにどうしたのだろうか。

まさか——さつきロリだのなんだの煽ったからその仕返しに——
!?

「あ、ああ……」

短く返事をする、チノが部屋の中へ入ってきた。

「夜遅くにすみません。外がうるさいせいか眠れなくて」

「俺もそんな感じだ」

窓の外を見ると、時折まぶしく輝きながら、風や落雷の振動で窓がガタガタと揺れる。

「っていうか、眠れないならココアの部屋に行ってくれ……またロリコンだと勘違いされそうだ」

「その……ロリコン、が何の意味かはわかりませんが、ココアさんならもう寝てました」

「そうか……」

いかん、かなり気まずい……。このままだと窒息死してしまいそう
だ。

「——よかつたら私に、家出した理由を話してもらえませんか。あま
りここにいと、父や母が心配しますよ。ここはかなり田舎ですか
ら、探すのも大変でしょうし」

「——」

「あ、ココアさんたちに話すつもりはありません。ですから——」

「——」。さつきチノさ、親が心配するって言ってたけど」

「はい」

窓に向かって息を吐いて大きく深呼吸する。

「——俺と里恵に親はいない」

「——え」

さすがに死因が殺害なんて言ったら明日から里恵や俺の扱いはど
うなるかわからない。だからそこだけは伏せておいたが、すべての事
を話した。

「だから、なんでもやり放題。ってところさ」

「私も母親がいません。祖父もテイ……いえ、他界してしまいました。
だからこそ、悠さんの気持ちはわかります。でも、どうしてすべてを
捨ててここまでやってきたんですか。どうしてそこまでする必要が
あったんですか」

「——」

一番聞かれたくない質問を投げかけられた。

これだけは正直に答えるわけにはいかない。この場所を守るため

にも。

「――失礼しました。無神経なことと言ってしまいましたよね。忘れてください」

「できれば、これ以上詮索しなくてももらいたい。チノやこのみんなを巻き込みたくはないんだ」

「――わかりました。ですが、一人で抱え込まないようにしてください。何かあったらいつでも相談にのりますから」

「――ああ、ありがとう」

その優しさが何よりもうれしかった。

だが、生まれてきて家族以外の人を信用してきたことはない。

『信用』とはなんなのか。それすらわからなくなっていた。

何をどうすれば、チノを信用することができるのか。

何をどうすれば、この場所で楽しく生きていけるのだろうか。

今まで、友人関係を保つための「表向きの信用」しかしたことがない俺に、本当の信用とはなにか、どうしたらそれが得られるのか、などわからない。

それに、こんな年下の子に泣いて喚くなんて、到底できないというプライドがチノに頼ることを拒否する。

――そう思っている、なぜか心に響く。

「ちよっと、お手洗いに」

「はい。暗いので足下気をつけてくださいね」

理由もわからず、涙が溢れてきた。

「どころで……ロリコンってどういう意味なんでしょうか」

第七話 チノのイタズラ

翌朝――。

今日は祝日とはいえ、ラビットハウスの営業日。
俺とチノとココアは早く起きて店の支度を始めるのだが――。
店の厨房にはリゼしかいなかった。

「あれ、ココアとチノは？」

「チノならさつきココアを起こしに行ったぞ！」

寝坊とは、確かにココアらしいが、チノは毎日こんな生活しているのか……。

「おはようございます。悠さん、早速ですけどココアさんを起こしに行ってください」

「え？でもさつき起こしに行ってくれたんじゃ……」

「声かけてもなかなか起きなくて。私じゃどうも手に負えません」

「やれやれ、起こすのも大変だな」

「お姉ちゃんを名乗るくらいならもうちよつとしっかりしてほしいです」

チノが言ったこと台詞をそのままココアに言ってみるとどうなるのだろう。

――そんな度胸はないけど。

「おい、ココア。チノがうんざりしてたぞ。起きろ」

そう言っただアを開けると――。

「ん？――えっ」

「うわっ！」

今のドアの閉めるスピードはおそらくギネス更新ものだろう。
この状況だと、普通は寝ているココアを想定しているだろう。だ
が、ココアはすでに起きており、着替え中だったのだ。

「ちよ！なんで起きて——！」

勢いよく閉めたドアに向かって叫ぶ。

「悠くん!？」

「寝てたんじゃないのかよ！」

「さつきチノちゃんが起こしに来てくれたよ!？」

「まさか——くそ！チノにはめられた！」

「な、なあチノ——なんか上の階が騒がしくないか？」

「昨日、私のことをロリなどと言ったお返しです！」

そのとき、厨房でこんな会話が行われていたことをココアや悠が知
ることはおそらくないだろう——。

「お兄ちゃん、ココアちゃんの着替え覗いたの？」

ものすごく直球な質問が心に刺さる。

「あ、ああ。覗いたことに間違いはないが、あれは事故だ。覗きたくて
覗いたわけじゃない」

「お兄ちゃん最低……」

「おいチノ！いくらなんでもひどいぞこれは！」

「何のことでしょう……」

「あーもう！リゼ、お前はわかってくれるよな……」

「軍法会議に掛けられるようなことをしたお前が悪い」

集中砲火を喰らい、無事、撃沈しました……。

「ちよつとやり過ぎたでしょうか」

「ああ……明らかに一線を越えていたぞ」

——と、向こうからチノとリゼの会話が聞こえるが、それをかき消すようにココアが

「き、気にしてないからー！」

と気を遣ってくれるが、チノのいたずらは今後警戒しなければいけない。

——意外にココアのスタイルよくてちよつと驚きだった。

「しまった。小麦粉を買いに行くのを忘れてた。今手が離せないから、悠とココア行ってくれるか」

「リゼは俺をどうする気だ——」

「ご、ごめん！別にそういうつもりで言ったわけじゃ」

お昼過ぎ、お客が昼食を求めてやってくる時間帯だ。

その頃、小麦粉の在庫がなくなり、急遽買い出しへ——。

運が悪いことに、手が空いているのは居眠りしてるココアと俺だけだ。

「おい、ココア起きろ。買い出しに行くぞ」

もう完全に諦めた俺は、素直にリゼの指示に従うようにした。

「あ、チノ。里恵のご飯だが、昼は少し少なめにしてくれるか。うちあ

「まりお昼ご飯は食べないんだ。——親の都合もあって」

「わかりました。——あの、悠さん。朝はちよつとやり過ぎてしまいました。すいません」

「どちらかというと俺よりココアに謝ったほうがいいかも……」

「ココアさんには後で謝っておきます」

こうして、ココアと買い出しに行くことになった。

第八話 ココアと買い物

休日の昼下がりに、市場は買い物客で賑わっていた。リゼに頼まれた買い物をして、ココアと二人で街を歩いていた。先導するように前を歩いていたココアがこちらへ振り向き、

「この街には慣れた？」

と聞いてきた。

「ああ、チノに案内してもらったしな」

「えーっ!?!いつの間に!」

「それに、ここは車も減多に走らないし、のびのびと歩けるよ」

「前はどんなところに住んでいたの？」

チノと違ってぐいぐい来る……。正直あまり答えたくはないが。ここは大雑把な回答をして適当に流すか。

「関東のほうだよ」

「へえ。そういえば、私のお兄ちゃんたちは東京にいるんだよ!」

「お兄ちゃんいたのか」

「うん。お姉ちゃんが1人、お兄ちゃんが2人」

「なるほど、だからココアは姉っぽくないのか。末っ子だから」

「悠くんが私の弟だよ!」

「まだその設定続いていたのか」

末っ子だから弟や妹を持つことに憧れを抱いているのだろう。

ココアはいわゆる「シスターコンプレックス」だ。

見知らぬ人にすら弟や妹にしてしまう。

正直、ココアの将来が心配でならない。

「ココアはシスコンだな。まあ気持ちはわかる。妹ってのはかわいいからな」

「やっぱりロリコン!」

「——いや、別に恋愛的な意味で言ったわけじゃないんだけど」

こんなたわいもない話をしながら街を歩いていると、すっかり出かけた目的を忘れてしまう。

ラビットハウスでは、チノとリゼが二人の帰りを待っていた——。

「なあ、ココアと悠、遅くないか?」

「はい——。道にでも迷ったのでしょうか」

「ココアのやつ、まさか目的を忘れて——」

「いえ、悠さんもついでなので大丈夫かと」

「この公園には野良うさぎがたくさんいるんだよ」

もはや完全に目的を忘れて散歩しているココアと悠。
公園で雑談していると、シャロがチラシ配りをやっていた。

「あ! シャロちゃん!」

「ココア!? それに悠!」

「な、なんだその卑猥な格好……。そういう趣味だったのかよ」

「ち、違うわよ!——こ、これはフルールの制服で」

「シャロちゃんうさ耳似合ってるよ」

『「体も心も癒やします」——フルールってそんな店だったのか」

「健全なハーブティー専門の喫茶店です!!」

いじりモードに突入すると切りがないココアと悠だった。

「ところで——。なんで二人とも制服なの？」

「——あ」

シャロのツツコミでようやく目的を思い出した。

「しまった！早く小麦粉買って帰らないと！」

「あー！帰りにチノちゃんにお土産買わないと！」

急いでシャロの元を離れ、再び市場に戻る二人の背中に、シャロの困惑の声があたる。

「何かあったのでしょうか……」

「まさか、誘拐!？」

「そんな……この街で誘拐なんて」

そんな重い会話の中、ココアと悠が息を切らしながら店内に入ってきた。

「何やってたんですか！」

このあと、みっちり説教されたのは言うまでもなかった。

第九話 出撃！路地裏探検隊！

「本当にいいのか？」

「悠くんいつも朝からバイトしてるでしょ？今日ぐらいはゆっくりしてきてー！」

平日は午前中から午後にかけてずっとラビットハウスでバイトしているので、正直このココアの気遣いはうれしいのだが――。

「まあ、どうせお客さんも来てくれませんので」

「この店本当に大丈夫なのかよ」

チノも完全に諦めているようで、あっさりココアの案に賛成。

「でも今日はリゼもいないんだろ？」

「リゼちゃんの代わりは里恵ちゃんにやってもらおうよ」

リゼも今日は休みのようだ。

「すまん！部活の助っ人がキャンセルされて、今日は出られそう――
―ってあれ？」

と、結局全員揃ってしまったのだが、

「たまには二人で遊んできたら？」

「ココア……まさか私たちがいない間何をする気だ！」

「わ、私なにかされるんでしょうか……」

「何もしないよ！」

そして、今に至る。

「なんか、ハブられた気分だ」

「確かに」

店の外に追い出されたりゼと悠は、適当に街を散策する。

「考えてみれば、こうして悠と二人で出かけるのは初めてかも」

「ああ、そうだな」

今までココアと買い出しを忘れて遊んだり、チノと街の案内がてら文房具屋なんかで買い物したことはあったが、こうしてリゼと二人で出かけるというのは初めてだ。

「ん？あんなところに道なんてあったっけ」

ラビットハウスからかなり離れた場所まで来た。

当然、悠は初めての場所。リゼもあまり来たことがないのか、道があやふやになっていた。

「リゼってこの街出身、だよな」

「ああ、そうだけど、こんな道初めて通るかも」

人氣がなく、家だけが並んでいる。

空には太陽に雲がかぶり、薄暗くなってきた。

「なんか、不気味だな。戻ろうぜ」

「なんかこういうところ、わくわくするな！」

「いい年して探検ごっこかよ……」

リゼは完全に探検モードだ。

こうなると止めるのはかなり難しい。

しばらく進んでいくと、家はまばらになり、道も荒くなってきた。

「おっ、あんなところに建物があるぞ！」

「かなり古いな」

古びた洋館が建っていた。——これは間違いなく「出る」

「行ってみるか」

心なしかいつもよりリゼが生き生きとしているような気がする。

そして、ポケットから二つ拳銃を取り出すと、片方を渡してきた。

「撃つときは、脇を締めて両手で狙えよ」

「なんで拳銃なんか持ち歩いてるんだよ!？」

古い洋館よりもリゼが物騒なものを持つていることの方が怖い。

洋館の中はほこりっぽいがかかなり広く、家具も置いてある。

だが、ドアの鍵も開いていて、門には表札もない。

空き家なのは間違いないようだ。

ところどころ天井が崩れていたり、ドアが壊れていたり、ホラー要素は抜群だ。

リゼは若干ビビりながらも満喫している様子だった。

「かなり広い建物だな。夜になったら出そうだな」

「そ、そうだな……」

夕方になってきて、徐々に部屋が暗くなっていく。

リゼもきつきのような威勢はなくなっていた。

「なんだよ、ビビってんのか？」

「け、決してビビってなんかないぞ！大丈夫だ」

「そうか？じやあ俺はあつちを探索してくるから、リゼは向こうの部屋を見てきてくれよ」

「えっ……頼むから一人にしないでくれえ！」

普段とは違ったりリゼの一面がなかなか面白く、それからも何度かからかいながら洋館の中を探検していた。

気がつけば、とつくに日は沈み、携帯の明かりと銃についていたフラッシュライトを頼りにして歩いていると、そろそろリゼが限界を感じたのか、

「か、帰ろうー！な？」

とかなり震えた声で提案してきた。

「ああ……」

リゼの携帯を覗くと、もう夜の七時になっていた。早く帰らないと晩ご飯に間に合わない。

「っていうか、壁紙結構かわいいのにしてるじゃん」

「見るなあああ！」

洋館は地下もあり、なかなか探検しがいがあった。

——もちろん、宝物なんかは置いてなかったが。

こうして、リゼと悠の探検ごっこは終了する……。

第十話 出撃！洋館探検隊！

「まずいぞ、携帯の充電が少なくなってきた」

「大丈夫だろ。この通りをまっすぐ行けば一階なんだから」

と、先ほどからフラグが乱立している。

現在地は、洋館の地下。運悪く、ここには窓はない。

さすがに不安になってきたので、リゼにチノへメールするように提案した。

「チノから返事来たぞ。親父にもメールしておこう」

またリゼの携帯を覗くと、チノから返信があったが、内容がホラーそのものだった。

『洋館？何のことですか？この街に大きな古い洋館ってもうなかったよ
うな気がします……。とにかく早く帰ってきてくださいね。』

「おい、これって」

「い、いや、チノが知らないだけかもしれないぞ！」

ともかく、明かりのつく部屋に移動して、出口を探す。

そのとき、携帯の着信音が鳴り響いた。

もはやその音で失神しかける。

「もしもし、ああ、親父か」

『リゼ！どこにいるんだ？俺心配で今にも部下をやっちまいそうだし！』

親子揃って物騒だ……。

「殺したらだめだろ！——街から少し離れたところに古びた洋館があるだろ？そこにいる！」

『洋館……？ああ、お前が小さい時に探検したあの洋館なら去年解体されたはずだぞ！』

「えっ……？」

去年解体されたはずの洋館があるわけがないだろう。

どうやら、リゼは以前に父親とこういうホラースポットで遊んだことがあるらしい。

「多分その洋館じゃな——」

——通話が切れて、部屋の電気が消えた。

「悠くん、遅いね」

「はい……。ココアさんの時みたいに調子に乗って遊んでいるのかもしれないですね」

「あれ!?まだ怒ってる!？」

「まさかお兄ちゃん、リゼちゃんに何か——」

ラビットハウスでは、ココアとチノと里恵が悠の帰りを心配していた。

「電話にも出ません。何かあったのでしょうか……」

部屋のドアが開き、外からタカヒロとリゼの父親が入ってきた。

「大変だ！リゼと電話してたんだが、突然切れて音信不通になったぞ！」

「えっ……」

「古びた洋館にいるらしいんだが、その洋館がどこにあるのかまったくわからなくてな、できれば三人にも手伝ってほしい」

こうして、行方不明になった二人の捜索が始まった。

探しに行く際、タカヒロから絶対三人で行動して離れないように、危ないと感じたらすぐに帰ってくるように、と厳しく注意された。

ちなみに、リゼの父親の部下も総動員で捜索に当たっている。

「悠さん……リゼさん……いったい何が」

「ヴェアアア大切な弟と妹が行方不明だよおおお」

「お兄ちゃん、何してるんだろう」

三人の心配の声だけがむなしく街中に響いた。

「携帯の充電がなくなった……」

「そうみたいだな……。ちよつと暑苦しいから離れてもらっていいか？」

充電がなくなり、さらに部屋の電気も落ちるというダブルコンボ技でリゼは完全に怯えているが、こちらとしてはしがみつかれているので、暑くてしょうがない。

さらに、時折聞こえてくる「ボタン！」という音。

予想通り、「出た」みたいだ。

「あう……早く誰か来てくれえ」

「ここで一晩過ごしたら相当メンタル鍛えられそうだな」

「なんでお前はそんなに平気なんだよ……」

確かに今の状況はかなり怖い。だが、美少女と地下の部屋に閉じ込められるという全男子が一度は憧れるシチュエーションで、もはや恐怖が吹っ飛んでいる。

男子というのは単純な生き物だからな。

「なあ、もし誰も来なかったら」

「やめろおおお！」

もはやこの様である。

地下には部屋が四つあり、階段から一番奥の部屋だけが電気の付く部屋だった。

のだが、その部屋も電気がつかなくなり、地下は真っ暗だ。

ただ、このリゼの拳銃に装着されているフラッシュライトの明かりだけが二人の拠り所だった。

第十一話 出撃！洋館調査隊！

「はあ……腹が減った。チノの料理食べたい」

「なんだ、やっぱりロリコンじゃないか」

「断じてロリコンじゃないが、チノの作る料理は一品だぞ」

今は何時なのかすらわからない。最後に時間を確認したときは七時を回っていた。

さすがのリゼも慣れてきたのか、落ち着いた様子だった。

「よりによつてここは地下だから……。それに床も穴空いてるところもあるし、下手にうろつかない方がいいか」

「頼むから私だけ置いていくのだけはやめてくれよ」

「——リゼってさ、普段あんなに男勝りなのにこんな時だけ乙女だよな」

「なっ……」

暗闇でもわかる、今こいつ赤くなったな。

「今晚はここで泊まりかな。明るくなったら手探りで地下から出て、ここから脱出するか」

「は、はあ!?!お、お前と二人でお泊まり……」

「なんだよ、嫌なら向こう側の部屋で寝るぞ」

「うっ……嫌じゃないが、親父に見つかつたらタダじゃ済まないかも」

「そもそも、ここを探検しようって言ったのお前だろ……」

そんな会話をしていると、洋館の床が横にずれていくように揺れた。

「な、なんだ？地震か？」

「さあ……」

しばらく揺れが続くと、近くにあった古い本棚が倒れてくるのが見えた。

「危ない！」

咄嗟にリゼを突き飛ばすが、今度はこちらが下敷きになってしまった。

幸い、木製の本棚で木が腐って柔らかくなっており、大して怪我はなかったが、背中に強い痛みが走った。

「ごめん！大丈夫か？」

リゼが慌てて本棚をどかす。

「ああ、多分骨折まではしてない。——にしても、すごい力だな」

「あんまり重くなかったからな。それに、訓練してるし」

「さすがだな」

リゼの父親は軍人らしい。その影響でリゼも小さい時から訓練はしていたようだ。

「その——ありがとな。ちよつとかつこよかったぞ」

「なんだよ、急にかしこまって」

このとき、お互い顔が真っ赤だったことを二人は知らない。

「あっ！チノちゃん！洋館ってあれじゃない？」

「ココアさん、それは羊羹です。真面目に探してください」

一方、チノたちの搜索は難航しているようだ。だが、その足取りは着実に二人が閉じ込められている洋館へと進んでいた。

「あの建物つてまさか」

里恵が指さした先には、古びた洋館が建っていた。

「さっきの揺れで出口が塞がってなきやいいが……」

ある意味、これが一番怖い。

せつかく出口が見つけれられても出られなかったら――。

地下の天井も古く、今にも崩れ落ちそうだ。

一刻も早く脱出する必要があるかもしれない。

「なありぜ、早くここから出た方がいいんじゃないか？――さっきの揺れも大きかったし、このままだと生き埋めになる可能性も」

「――」

「おい、リゼ？」

どうやら寝てしまったようだ。

この状況で寝られることに関心したが、緊張で疲れが出たのだから。

悠もリゼの隣に横になった。

「間違いなくここだね！さすが我が妹！」

「父たちに報告しておきましょう」

「よーし、突入！」

「あつ、ココアさん！勝手に――」

リゼと悠が待つ洋館へ、ココアとチノと里恵が足を踏み入れた。

「な、なんか……かなりアレな雰囲気だね。チノちゃんこういうの大丈夫?」

「いきなりお化けが出たらだめかもしれない」

「里恵ちゃんは?」

「私はこういうの全然大丈夫です!」

「そ、そうなんだ……お姉ちゃんちよつと怖いよ」

洋館の一階を探索していると、地下へ続く階段を見つけた。

「ここ塞がつてるし、地下にはいないよね……」

「さっきの揺れで崩れただけかもしれないよ」

「え?」

「床に溜まつてるほこりを見てください。リゼさんと悠さんの足跡があります」

「おー、チノちゃん……名探偵だ」

「でもこれ、どうやってどかす?」

やはりここは別の道を探すしかないか。

チノがそんなことを考えていると、玄関から黒い影が動くのが見えた。

「ひっ……」

「どうしたのチノちゃん!」

「ああ、ココアさん後ろに」

「ヴェアアア」

ココアのものすごい声に驚き、チノが脱落した。

ココアはチノを抱きかかえてその場を逃れた。

第十二話 帰還！探検隊！

地下室では、リゼと悠が眠っていた。

そして、また洋館の地面が横にずれていくような揺れがおきた。

「またかよ……」

やはり、人間緊張状態になると眠いという感覚はなくなり、目がいとも以上に冴える。

リゼも揺れに気づいたのか、ガバツと起き上がった。

「あつ、リゼー！」

本棚——ではなく、今度は大きな古時計が倒れてくる。

またリゼに飛びかかろうとしたが、間に合わず二人とも時計の下敷きになる。

「さっきのは大丈夫だったが——今回ののはめちやくちや痛え……」

背中に何か刺さっている状態だろう。

後ろを向けないので、何が起きているのかはわからないが、血が出ているような気がする。

「あ……ああう」

「どうしたリゼー！けがでも——あつ」

中途半端に飛びかかったので、時計、悠、リゼ、床という状態になってしまった。

——つまり、今リゼにのしかかっている状態なのだ。

なんとも幸いなことに——否、不幸なことに手が胸に当たっている。

「うわああああああ!!!」

リゼの悲鳴が洋館内に響き渡った。

「ねえ、なんか今リゼちゃんの声しなかった？」

「やっぱり地下だよ！行こう！」

チノを背負ったココアを里恵が地下まで案内する。

やっぱり、地下への出入り口はあの場所しかないのか。

「ちよつと、チノちゃんをお願い」

チノを里恵に預け、ココアはなんとか瓦礫をどかさそうとする。

「大丈夫？」

「お姉ちゃんに任せなさい！」

里恵が心配の声をかけるとココアはいつものように腕に片手を乗せ、決めポーズをとる。

しばらく瓦礫と戦うこと数分、チノが目を覚ませた。

「あつ、チノちゃん！大丈夫？」

「大丈夫です……。さっきのは何だったんでしょうか」

「私たちがここに戻ってきたときにはもういなくなってたよ」

「そうでしたか……。みんなで瓦礫を押ししてみましよう！」

「せーのっー！」

そして、やっとりゼや悠と合流した。

「あーっ！いた！」

「あらまっ」

「あっ……その、なんかごめんなさい……。き、気にしないでござゆっくり……」

「なんでドアを閉めるんだよ！」

三人それぞれ合流した感想を述べた後、時計をどかしてくれた。感想、というよりチノはなぜか謝罪。

——まあ、無理もない。この状況を見れば誰もが誤解するだろう。

発見したときには、二人ともほこりまみれで、特に悠は背中から血が垂れていた。

帰りは、リゼの父親が運転する車で、それぞれの家へ——。

「にしても、うちのリゼが男子とあのような場所へ——」

「お前が小さい頃にリゼくんを探検ごっこに連れ回すからだろう」

「あのガキ、回復したら拷問してやる」

車でリゼの父親とタカヒロの恐ろしい会話を当事者の二人は知るよしもなかった。

「——だが、傷を見る限り、リゼをかばってくれたみたいだな。——」

——それに免じて減刑してやってもいいが」

当事者含め、ココアたちもすっかり夢の中。

リゼの父親の言葉だけがむなしく車内に響いた。

それから翌日。

「悠さん起きてください。朝ですよ」

「——ん？」

目を開けると目の前にチノの顔が大きく映る。

「ちよ、近い」

「あつ！ごめんなさい。つい」

「ついって何だよ……痛え」

昨日の傷がヒリヒリと痛む。

チノの話によると、古時計が落ちた際の破片がいくつか背中に刺さっていたようだ。

「リゼさんが、『昨日は取り乱してすまなかった、助けてくれてありがとう』と言っていましたよ」

「チノって腹話術うまいのにもまねは下手くそだな」

「よ、余計なお世話です！さあ、朝ごはん食べますよ！起きれますか？」

こうして、いつも通りの生活に戻ってきたのだが、リゼと顔をあわせるたびに頬が熱くなるという後遺症が残った。

第十三話 チノが風邪をひいたようです（前編）

「——なあ、なんかチノの様子がおかしくないか？」

「そうかな？チノちゃん、お茶目さんだから——」

朝ごはんの支度をするチノだが、塩と砂糖どころか、塩とコシヨウを間違えたり、フライパンの蓋を鍋の蓋にしていたり、奇妙な行動をおこしている。

「やっぱりおかしいって！——見ろ、しゃもじが逆だぞ」

チノがしゃもじの持ち手の部分でご飯をよそうという斬新な使用方法をしている。

明らかに様子がおかしい。

「な、なあチノ？しゃもじが——」

「——はっ！失礼しました！私としたことが」

「何かあったのか？」

「い、いえ——。洋館に入って抜け出せなくなっちゃったお茶目さんを助けた疲れが出てしまったのかもしれない」

「申し訳ございませんでした……」

何やら、チノの顔が若干赤い——。照れているからとか、怒っているからとかではなく——もしかして

「チノちゃん、もしかして熱でもあるんじゃない？」

ココアが自分の額をチノの額に当てて体温を測る。

——ココアさん、明日からお姉ちゃんって呼ぶので場所変わってほしいんですけど……。

いかん、またこんなことを言ったら今度こそロリコン認定されるだ

ろう。

「——37度2分。やっぱり熱あるな」

「大丈夫です。微熱ですし」

「病人はちゃんと言うこと聞かないとダメ！」

「——」

さすがココア、学校を休むことを渋るチノを一言で黙らせる。

「じゃあ、チノちゃんのことお願い！」

「ああ、いつてらっしゃい」

ココアを見送った後、ラビットハウスの開店準備を始めつつ、チノの様子を見る。

「大丈夫か？俺が店にいる間は里恵、頼んだぞ」

「ええ……お兄ちゃんはチノちゃんのこと看病したいんじゃないの？」

「なんで俺が看病したがつてる前提の話なんだよ」

「悠さん、そんなに私の看病が嫌なんですか……」

「決してそういうわけじゃないぞ！——ただほら、朝の準備をタカヒロさん一人に任せるのは——」

「仕事とチノちゃんどっちが大事なの？」

里恵が迫ってくる。なんて恐ろしい子。

結局、朝の準備は里恵がタカヒロさんのお手伝いをするということ
で話は終わった。

「——ってことだけどき、チノ的には男の俺なんかより里恵の方がい

「いんじゃないのか？」

「別に私は気にしませんよ」

あれ、もしかして脈あり？

「それより、何か冷たいものがほしいです。下の冷蔵庫にアイスがあるの、とってきてもらってもよろしいですか？」

「ああ……」

脈ありというより、あまり異性として見られていないような気がする——。

などと下らんことを考えながら、チノに頼まれたアイスを冷蔵庫から取り出す。

「あつ、お兄ちゃん。チノちゃんどんな感じ？」

「特になんともないぞ。つて、さつき別れたばかりじゃないか」

厨房に里恵がいた。最近はどうもチノから簡単な料理を教えるもなかったのか、ますます女子力が上がってきている。

「戻ったぞ。つて、何してんだよ」

「何って——課題ですよ」

「いやいや、ベッドで寝てろよ」

「寝てても暇なだけです。それにまだ微熱ですし」

なかなか強情だ。

それに、ティップピーが頭の上に乗ったおかげか、チノの体力が少し回復しているような気がする。

「——なら、大丈夫か。このアイス、俺が食うからな」

「えっ……」

「課題やるくらい元気があるなら大丈夫だよな？俺ちよつと読みたい本があるんだ。本屋に行ってくるぞ」

「ちよつと、待ってください！おとなしく寝てますから！」

案外、チノはこういう手にあつさり乗ってしまう。

そこがかわいい。とてもかわいい。

「チノっていつも頭にティップー乗せてるよな。重くないのかよ」「いいえ、もう慣れてしまったので」

ハイパーカップを黙々と口へ運ぶチノは、たとえベッドの上だろうがティップーを頭に乗せている。

「そういえば、ティップーってたまにしゃべるよな」

「私の腹話術です」

「俺も腹話術やろうかな」

『お前がワシのまねごとなど、20年早いわ！』

「おお、しゃべったしゃべった」

半笑いでティップーを煽ってやると、ティップーがこちらにのしかかってくる。

それを躲し、今度は自分の頭に乗せてみる。

「——結構難しいな。しかもなんか、頭の上からコーヒーの匂いが漂ってくる」

「もう、ティップー返してください！」

「へいへい」

ティップーをチノに手渡すと、チノはティップーをもふもふし始めた。

「なんか、チノもココアに似てるところがあるよな」

「ぜ、全然似てません！もう寝ます！」

「あっ……照れた」

このあと、ぬいぐるみやらクッションだかを投げつけられた。

「ふう、やっと寝たか」

チノが眠りについた頃、悠はやることがないので、とりあえず里恵の手伝いでもしようかと厨房に降りたが、厨房に里恵がいなかった。どうやらお使いに出かけたらしい。

「あの、タカヒロさん」

「なんだい？」

「ティツピーってたまにしゃべりますよね」

「————気にするな……」

「答えるまでの謎の間がすごい気になるんですけど」

タカヒロと悠が厨房でそんな話をしていると、里恵が帰ってきた。それと入れ替わりで、タカヒロは店の方へ戻った。

「それでそれで、何か進展はあった？」

「何を期待しているのか知らんが、特にないぞ」

また冷やかしくくる。そもそもチノの看病しろと言ったのお前だろう。

「嘘だあゝ。頭に毛がついてたり、服にほこりがついてたりしてるもん」

「あの毛玉……あとでハゲウサギにしてやろうか」

「ティツピーを頭に乗せたの？」

「ああ、それからチノにいろいろ投げられた」

「喧嘩したのー!？」

なんか話が面倒な方向に向かっていってしまったので、話題を変える。

「何買ってきたんだ？」

あつという間に午後になり、昼食の支度をすることにした。

「おかゆでも作ってやるか」

作ったおかゆを持って行くと、チノはすでに起きていた。

「起きたのか。ほれ、おかゆを作ってやったぞ。食欲あるか？」

「少しなら食べられるかと」

「そうか。まあご自由にどうぞ」

「ありがとうございます。いただきます」

チノがおかゆを食べていると、チノの携帯に着信があった。

「すみませんスマホの画面見ると目が回るので代わりに出てください

」

「いいのか?——じゃあ」

スマホ操作するの久しぶりだな——。ココアからか。

「もしもし」

『えーっ!?!なんで悠くん!?!』

「そんなに驚くなよ。チノがスマホ操作すると死ぬから代わりに用件聞けって」

「死にはしません！」

隣でチノがツツコミを入れると、それがココアに聞こえたのか、急に怒りだした。

『むう……悠くん、さてはチノちゃんのお兄ちゃんの座を奪う気だね！』

「何を言ってるんだ、俺の妹は里恵だけだぜ」

「シスコン……」

「チノさん、食事中はお静かに」

『ぷぷっ』

隣でヤジを飛ばしてくるチノを沈めると、ココアは笑い出した。まったく、怒ったり笑ったり忙しい奴だ。

『ともかく、悪化してなさそうによかったよ』

「そっちは昼休みか」

『そうだよ！今夜ちゃんとお昼〜』

「お気楽な奴だな。それでも姉か。ダメな姉だな」

『な……何をー！早退して早く帰るから、お姉ちゃんを見捨てないでー！』

「いや、授業は受けろ」

ココアの反応があまりに面白いので、散々いじっていると、もう昼休みが終わったのか、いったん電話を切ることになった。

「結局用件なんだったんだろう」

「ココアさんはいつもそんな感じなので気にしなくて大丈夫です」

いつもこんな電話をしているのか。だが、おそらくココアはチノが無事かどうか確認したかったのだろう。

「さて、片付けて俺もお昼食べようかな」

そしてまた厨房へ降りていった。

第十四話　チノが風邪をひいたようです（後編）

昼食をとり終わった後、チノの部屋に戻ると、呼吸が荒くなっていた。

「熱上がったのか？」

恐る恐る額に手を当ててみると、40度あるんじゃないかというほど熱かった。

これはまずいことになった。

タオルを替えようと思っていたら、ティッピーが叫びだした。

『悠！タオルではダメじゃ！下で冷えピタを冷蔵庫に入れておいたからそれを使うのじゃ！』

「お前ずいぶん器用だな!？」

この際、腹話術だのなんだのツツコんでいる暇はない。慌てて冷蔵庫の中にぶち込んであった冷えピタを取り出して貼った。

「まったく、器用なうさぎだな、まったく」

『ふふん。当然じゃ』

「——タカヒロさんやココアが前に言っていたんだが、チノの祖父って前に亡くなられたんだってな」

ティッピーがわずかに反応した。——やはりか。

「怪奇現象なんて信じない主義だったんだが——お前、チノの祖父か？」

『——』

ティツピーは無言になった。

「都合の悪いときだけうさぎかよ、別に告げ口とかしないから……。やっぱりチノからおじいさんの声が出るなんておかしいと思った」

『なんだ、バレとったのか』

「逆になんで騙されると思ってたんだよ」

『——そうじゃ、わしがチノの祖父、この店のマスターじゃ』

チノが目を覚ますと、悠とティツピーが普通に会話していた。

「——あ、あの」

「おお、起きたか。起きて早々悪いが熱を測ってもらおうぞ。さつきものすごく苦しそうにしてたからな」

『チノや、すまないのう……』

心なしか、ティツピーがしゅんと縮んだ。

「——私の腹話術……」

「いや、もう手遅れだから」

「はあ……バレてしまいましたか。ココアさんは案外納得していたのでいけるかと思ったんですが」

「俺とあの天然おばかを一緒にしないでくれるか？」

何か人の気配を感じたので後ろを向くと、帰宅したココアが立っていた。

まさかさっきの会話を聞かれたのではないかと青ざめるチノだったが、

「お姉ちゃんにそんなひどいこと言う子はお仕置きだよ！」

「えっ？ちよ、やめ——」

体中をくすぐってくるココアを必死に押さえていると、チノが

「ココアさん、いつから——」

「さつき、チノちゃん部の部屋入ろうとしたら悠くんが『天然おぼか』つてというのが聞こえて——」

それを聞いて安心したのか、チノが大きく息を吐く。

——いや、少しは俺の心配もしてほしいんだけど。

「というか、悠くんの私たちへの第一印象って何？」

ココアからのお仕置きが一段落したあと、そう質問してきた。それにチノが「私も気になります」と便乗。

「うーん、ココアは最初『やかましい店員』って思ってたな。チノは『コミュ障っぽい店員』」

「いやあ、それほどでも」

「褒められてませんよココアさん！」

しまった、つい本音が——。

このあと、また大騒ぎになったのは言うまでもない。

「チノが風邪だつてな」

「お見舞いに来たわよ」

リゼがバイトでラビットハウスを訪れると、千夜もやってきた。どうやらシャロはバイトでこれないらしい。

「今日は里恵ちゃんがお店に？」

「ああ、俺はチノの面倒見ろつてさ」

「あらあら、粋な計らいね」

「どこがだよ……」

リゼは何やらりんごでうさぎを作っていた。

「おー！なんだこれめっちゃ繊細！」

見せられたりんごはりんごではなく、もはやうさぎそのものになっていた。

「刃物の扱いは慣れてるからな！」

「しかし、爪楊枝が銃って少し無理があるな」

「う、うるさい！——ほら、持って行くぞ」

「さあ！ニンニクを首に！」

「いや待て、何の儀式を始める気だ」

千夜がよく風邪に効くものを持ってきたというので少し期待していたが、なんだこれは。

「さすが千夜ちゃんだね！これでバッチリだよ！」

「ココアはあれだな、詐欺とかにまんまとだまされるタイプだな」

この悠の発言にチノとリゼが「うんうん」と頷くがココアは不服そうだ。

「失礼な！私はパンを焼きながら町の国際バリスタ弁護士になるんだから！」

と自慢げに語るが――。

「町の国際……？」

チノと悠のハモリで千夜とりゼが微笑んだ。

その後は、ココアやりゼ、里恵と交代交代でチノの面倒を見ることにした。

そして、ココアと里恵がチノの面倒を見に行った。

店内にはりゼと悠の二人しかいない。——この前の一件のせいで
気まずい……。

「な、なあ……。この前はすまなかった」

「え？」

沈黙を破ったのはりゼだった。

「ほら、私を庇ってけがしたんだろう？」

「ああ、別にたいしたけがじゃないから」

「——そう言ってもらえると気が楽だよ。もう少し私が訓練していれば」

「すぐその発想になるんだな」

正直、背中への傷は激しく動くときたまに開くほどのものだったが、あまりりゼを責めても仕方ない。

「——やっぱり私、男っぽいのかな」

「——は？」

話の意外な展開に思わず驚きの声が漏れる。

「あの部屋に閉じ込められてたときもさ、そんなこと話してただろ？」

「ああ、そういえばそうだったかもな。って気にしてたのかよ」

「悠はどう思う？男子的にやっぱり男っぽい女子なんて」

「――」

これは間違えるわけにはいかない質問だな。あまり下手なことをいうと軍法会議ものだろう。

「うーん。ギャップ萌え的な意味で言えばアリかもしれないな。口調や発想はともかく、リゼは料理もできるし、裁縫もできるだろう？」

「なななな、なぜそれを!?!」

リゼが驚きの目で見てくる。

「今朝、チノにぬいぐるみを投げられたんだ。そのときに、眼帯のついたうさぎのぬいぐるみを見てみたんだ。――そしたら、縫い目が市販のものより粗くて、タグもついていなかった。ああ、これはリゼのお手製かと一瞬でわかったよ」

「い、いや……ココアやチノが作ったっていう考えはないのかよ!?!」

「そもそもココアに裁縫なんてできそうにないし、チノが作るなら眼帯なんてつけないさ」

それに――と悠はさらに付け足す。

「どうせお前のことだから、チノに拳銃やらナイフやらを向けて怯えさせただろう。仲良くしたいのに警戒されて、なかなか仲良くなれない。だからお前はぬいぐるみを作ってチノと打ち解けられるようにきつかけを作った――」

「すごいな、そこまでお見通しなのか」

どうやら大正解だったようだ。

「人に銃を向ける癖は直しておいた方がいい」

「うつ……善処するよ……」

そして、ココアと里恵が戻ってきて、ラテアートの練習したり、ココアと日なたぼっこしてリゼに怒られたり、チノはいないが、いつも通りの日常だった。

第十五話 図書館で勉強

「じゃあ、行ってくる」

「はい、気をつけて」

午後、ラビットハウスをココアとチノに任せ、悠は図書館へと向かった。

ここ最近、悠は定期的に図書館へ通っている。読みたい本の貸し借りも含め、主に勉強のためだ。

ラビットハウスで勉強しても良いのだが、主にココアがやかましいせいで何かと集中できない。

チノに図書館の場所を教えてもらってから、定期的に通うことにした。

「つて、シャロもいるのか」

「悠じゃない。あなたも勉強しに？」

「ああ、満席みたいだし、前いいか？」

「別に良いわよ」

今日は珍しく人が多い。とてもいい天気なのに……。

黙々とシャロと勉強をする。

が、沈黙を破ったのはシャロだった。

「勉強は得意なの？」

「まあ、普通だな」

「そう」

こんな短い会話を何度か続けていると、あっという間に日が沈む頃になった。

「じゃあ、私帰るわね」

「ああ、なんなら暗いし、送っていいこうか？」
「べ、別にいらないわよ！」

そうか、こいつの家は、きつとデカイ家に違いない、送り迎えなんてボディガードか何かがするだろう。

「そうか。じゃあまたな」
「ええ」

さて、そろそろ帰ろうかと席を立ち上がって、窓を見ると、小雨ではあったが雨が降っていた。

「マジか……。傘持ってきてないぞ」

さっきまでものすごい晴れていたのに……。
外へ出ると、傘を持っていたチノがいた。

「あつ、チノ」

「悠さん。まだ図書館に居たんですね。よかった。傘を——」
「おいまて……」

傘を届けに、ということとは、普通なら自分用の傘と相手用の傘を2つ持って出かけるものだが、なぜチノは1つしか持ってきていないのか。

「あ、里恵さんから、これで大丈夫だから早く行ってきてって」
「あの野郎……」

たまには気の利くこともするじゃないか——おっとつい本音が。

「いや、いいや。俺はそこら辺の店で傘買って帰るから、チノはそのまま

ま帰ってくれ」

「しかし……これ以上傘が増えると困ります。ココアさんがいつも買ってくるので」

「そういえば、店の傘立てぎっしり詰まってたな。何してるんだよココアのやつ……」

「まったくです」

「チノは俺と相合い傘になるけどいいのか?」

すると少しチノの顔が赤くなって

「べ、別に私はかまいませんよ!」

「ほう」

お互いなぜか意地を張って、結局相合い傘になった。

「悠さん、そんなに端っこいつてたらぬれますよ」

「ぐ……」

いかん、立場が逆になろうとしている。いや、もう手遅れか。

こんなところリゼにでも見つかったらどんな目に遭うかわからん。

「あら、悠。さっきぶりね——ってな!!?」

「あらあら」

千夜とシャロが歩いていった。何事も無かったかのようにすれ違おうとしたが、不幸にもシャロと目が合ってしまった。

「あらまあ、2人とも……ラブラブね」

「悠、あんたやつぱり」

「おい、何度も言うがそういう趣味はないぞ。だいたい1つしか歳違わないからな?」

「千夜さんたちは何をしてるんです?」

「チノも何か言ってやれよ!なんでスルーするの!?!」

「2人とも遅いねー」

窓の外を見ながらココアが言う。

「まあ、今頃お兄ちゃんはめっちゃ楽しんでるでしょうね〜」

「お、おい、チノに何を」

「そういえば、チノちゃん傘2つ持って行ってたっけ?」

店のドアが開き、チノと悠が帰ってきた。

「おかえりなさいーい!あれっ……傘が1つ??」

ココアが余計な一言を発したために店内は騒然となった。

「てことは相合い傘!?悠……もう言い逃れはできないぞ」

「むう、もう悠くんがお兄ちゃんでもいいよ!」

「お兄ちゃん、さすがにそれは」

「お前が仕込んだんだろうがー!」

「なんで皆さん怒ったり泣いたりしてるんですか?」

当事者もチノだけが会話について行くことができなかった。

第十六話 悪夢 1

ガシャンと店内に鋭い音が響いた。

「大丈夫か？」

「ヴェアアアアまたカップ割っちゃったよおお!!」

「いつものことだろ」

「いつものことだから困ってるの！次割ったらチノちゃんが容赦しないって！」

ココアが耳元で悲鳴をあげる。

チノとりゼはコーヒー豆の仕入れで出掛けている。

ラビットハウス内にはココアと悠だけ。上で里恵が勉強している。

「容赦ないチノってどんな感じなんだろう？」

「絶対嫌われる！お姉ちゃん失格だああああ」

「出て行く前に片付けろ！」

ココアが泣きながら店を飛び出していった。

幸いお客はいないので、特に一人で片付けても支障はないが。

「あれ、ココアちゃんは？」

「わからん、どっか行った」

「お兄ちゃん……今度は何したの」

「何もしてねえよ！むしろされた方だよ！」

と言い返すと、里恵は意味ありげに笑って、

「そっか、チノちゃん意外には興味ないもんね！」

と言った。

「――俺かココアに用があったんじゃないのか？」

「あ、話逸らした」

正直このネタには飽きた。別にチノは嫌いじゃない、どつちかかっていうとタイプだ。

でもココアも言うとおりチノは「妹」みたいな感じで恋愛感情はあまりわかない。

と、必死で自分に言い聞かせていると、里恵が急に真剣な顔になった。

「ねえ、ニユースみた？」

「いいや、最近はまったく見てない」

「そう……」

「――それがどうかしたのか？」

「ここからちよつとだけ離れたところで、殺人事件だつて」

「――！」

この場所は、不思議と嫌なことを忘れられる。

――里恵と俺が来た理由さえも。

まるで、始めから住んでいたかのような気分になっている。

だが、現実はそのような平和で生易しくない。

「――だから何だよ。違うやつかもしれないだろ」

「わかんない。でも、関係ないとも言えないじゃない？」

「もともと住んでた場所からかなり遠い。日本の中からここをピンポイントで当てられるとは思えないな」

「私もそう思う。ここからちよつと近かったから一応伝えておこうかなって思ったただけだよ」

「――なぜ今それを？」

「あのね、里恵は――このことをココアちゃんたちに相談するべきか

などと思う。ココアちゃんが嫌がるならここから出て行くべきだよ」
「ああ、確かに俺もそう思ったさ！でも逃げたところで、そこからどうするんだ？せつかくここまで積み上げてきたものを、また手放せって言うのかよ!!」

つい、声が大きくなってしまった。

里恵の気持ちもわかる。散々そのことで悩んできた。

チノに打ち明けたあの日、あの夜も、最初は言う絶好のタイミングかとも思った。

でも——あと一步、勇気が足りなかった。

「俺は——せつかく入学した名門校も捨てた、家族や友人との関係も捨てた、それは里恵、お前だって同じだ！なのに——！」

「悠さん……里恵さん……どうかしたんですか……?」

「チノ……リゼ……」

「ほら、コーヒー豆だ。仕入れて来たぞ。——あれ、ココアはどうした？」

急に、気分が悪くなってきた。何の罪もないはずだ、なのになぜここまで苦しい想いをしなくてはいけないのだ。

それに、何も知らずただ純粹に心配してくれるチノとリゼの顔を見ると、今まで忘れかけていた罪悪感、憎悪、自己嫌悪などの暗くて醜い感情が溢れ出して、このままここに居たら自分が何をやり始めるかわからない。

「悪い、チノ、リゼ。急に気分が悪くなってきた……今日のバイト代……はいらないから、あとは頼んだ……」

悠は恐ろしくなって店から飛び出した。

第十七話 悪夢 2

悠が飛び出したあとのラビットハウスは皆、啞然としていた。

「お兄ちゃん……」

「ちよ、里恵！どうしたんだ！」

どうしていいのかわからない、そのことすら伝えられない幼き子は、泣くしか方法がない。

泣いたっ、何も変わらない、そのことを知っていても、里恵は泣いてしまう。

「あれっ？みんな、どうしたの？」

何も知らないココアが戻ってきて困惑していた。

「あつ、ココアさん。どこに行ってたんですか！」

「チノちゃん……ごめんね、本当にわざとじゃなかったの。弁償するから許してっ……」

「何の話ですか？——それより大変なんです！」
「へっ？」

チノから先ほどの話を聞き、ココアはすぐに悠を探しに行った。

夕日の照らす丘は、絶景だった。

かなりの高さがある、飛び降りれば死ぬるのか。

そんなことを思ってしまった。

どうせ殺されるくらいだったら、自分で死んでしまえばいい。

でも、どうやって？

ここで死んだらラビットハウスのみんなや千夜、シャロまで悲しめ

るかもしれない。

では、ここを出てから……と言いたいが、突然消えるにしろ別れを告げてから消えるにしろ、悲しませるかもしれない。

——そもそも、最初から間違っていたのかもしれない。
こんなところに来る前にいなくなるべきだったのだ。

「あつ！いた！悠くん！みんな心配してたよ！どうして急に——」

「お前だつて急にどつか行つたじゃないか……なんで、追つてきた」

「だつて——悠くんは、私の大切な弟だもん」

「——は？俺はお前の弟じゃない」

「ラビットハウスにいる間はみんな私の妹か弟だよ！」

「弟だから探しにきたつてことか」

「そうだよ！さ、お姉ちゃんとラビットハウスに帰ろ！」

ココアが手を差し出してくる。

それを思い切り叩く。

なんで叩いたのかわからない。それも、なぜこんなにも本気で？

ココアを傷つけた？

俺は、俺の手がココアを傷つけた？

「痛っ……」

「——ラビットハウスから俺は出た。俺はお前の弟じゃない。お前が探しに来る必要もなくなった。じゃあな、暗いから気をつけて帰れよ」

「えっ……」

「なんだよ。早く帰れ」

「——悠くんを連れ戻すまで帰らない……よ……」

「さっさと帰れよ」

「いや！」

「またチノに嫌われるぞ。いつも店の物を壊して、チノの嫌がること

をして、みんなに迷惑を掛けて——俺に迷惑を掛けて、何がしたいの？」

「迷惑……？」

頭の中で、何かが壊れたような気がした。

口が一人での動き出す。なぜだ、なぜ俺はココアを突き放そうとする。

「ああ、そうだ。俺はお前に帰れって言ったんだ、なのに……」

「悠くんは、私が……私が迎えにきたのが迷惑……なの？」

ココアは今にも泣き出しそうだ。今すぐ傷つけるのをやめろ、と脳が口に命令する。

でも、口はそれを無視して、また喋りだす。

「ああ、そうだな。お前のそういうお節介なところ、嬉しいときもあつたが、鬱陶しいことの方が多いき！みんなうんざりしてるぜ？今だつてほら、こうして日が暮れてるのに俺を引き留めてる！」

「——でも、チノちゃんが……」

ココアが半分泣きながら腕を掴んでくる。

「離せ！お前はチノの奴隷か何かか！」

「いやだ！チノちゃんも、リゼちゃんも、里恵ちゃんも、みんな帰りを待ってるんだよ！」

暗くなつた丘で、ココアと悠は揉め合う。

だが、ココアのか弱い力では、到底かなうわけがなく——。

「離せって言うてんだろ！」

「きやつ……」

「もう構わないでくれるかな、お前のためにも、俺のためにも、みんなのためにも」

地面に倒れたココアにそう言い放って、悠は暗闇に消えた。

なぜ、ココアから離れる？なぜ、あそこまで傷つけた？今まで思ったこともない嘘までついて、心にもないことを言って、俺は何がしたい？

ココアをいじめて、楽しいのか？否、気分は最悪だ。

なら、なぜ？どうして？

俺は、自分の弱いところを否定するために、ココアを「利用」したのか？

そんな最低なクズ野郎には、当然罰があって当然、だよな。

近くにあった石で口や手を激しく傷つけた。

第十八話 悪夢3

目を開けると、朝になっていた。

どうやら、そのまま寝てしまったようだ。

服は泥と砂で汚れ、自分で傷つけた口や手からは血が出ていた。

このままどこへ行けばいいのだろうか。ずっとそんなことを思いながら山道を歩いていくと――。

「あれ？兄ちゃん、こんなところで何してんの？」

「よく見たらすごい汚れてるー！もしかしてサバイバーさん？」

「なんだこのガキ――」

小学生にしか見えない容姿の女の子が2人こちらへやってきた。

「林間学校だよ！前から超楽しみにしてたんだー！」

「林間学校？ああ、そういえばそんな行事もあったな」

「お兄さんは何してたの？」

「狩り？山で暮らすの大変じゃない？」

「どう見ても狩りをしてる服じゃないだろ――あの街から出ようと思ってる」

そう答えると、2人はしばらく顔をみ合わせてから「夜逃げ？」「もしかして指名手配中？」などと騒ぎ始めた。

「ちよつと違う。確かに俺はリゼに指名手配されてるかも知れんが」

「リゼ？リゼと知り合いなの？」

しまった。こいつらリゼの知り合いだったようだ。面倒なことになるようだ。適当にごまかしてさっさと逃げよう。

「あー、えつと……まあそうだ」

「――もしかしてラビットハウスで働いてる？」

「ああ。もうやめたが」

「だったらチノに伝えておいてくれない？林間学校、来ないと人生損するぜって」

「チノの同級生か!？」

「うん。チノちゃん、今日用事で来れなかったんだよ」

あいつ、予定があるなんて一言も――。

悠を探すために林間学校休んだのか？

どちらにせよ困ったことになった。目撃情報をつかんだら追ってくるに違いない。

「ああ、わかった。伝えとくよ。じゃあな」

「バイバーイ!」

なんとか、この場を切り抜けることができた。だが、油断はできない。

あいつらはチノたちの知り合いだ。悠をここで見かけたと連絡されればおしまい。

「待ってお兄さん!」

「なんだ?」

赤い髪の方の女の子が追いかけてきた。

「今朝、リゼさんから黒い服を着た高校生っぽい人を探してるって連絡あったんだけど」

「しまった!」

「なにになに?やっぱり指名手配犯?おとなしく捕まれ!」

「何すんだこのガキ!」

まるでリゼの分身のような動きで悠の身柄を取り押さえる。無理

やり突き放す方法もあるが、なんせ体力を消耗している上に怪我をしている。あつさりと捕まった。

数十分後、リゼがこちらに飛んできた。

「無事だったのか！どうしたんだその怪我！」

「くそ……お前がいなければ」

「ふん。残念だったな。さあ、一緒に来てもらおう。無事でよかった。お前のことだから——」

「なんだ？」

「なんでもない！ほら行くぞ！」

結局、ラビットハウスに連行され、チノたちに囲まれた。

「何してたんですか！」

チノの目が涙ぐんでいる。

「お前、だからって林間学校サボるなよ。友達？が心配してたぞ」

「心配でそれどころじゃなかったです。本当にしようがない悠さんですぬ」

「ところでお兄ちゃん、ココアちゃん知らない？」

「——いいや、見なかったが」

「すれ違ったのかな。今朝早くからお兄ちゃん探しに行ったよ」

「は？」

「昨日の夜、ひどく落ち込んでるようでしたが、何かあったんでしょうか？」

『あいつ、あれだけ言われてまだ——ドMなのか？』

と思っただが、内心少し嬉しかった。

だが、どう謝ればいいのかわからない。

「え？——俺、探しに行ってくる！」

しかし、気がかりなことがある。ココアは昨日の一件を誰にも言っていないのか？

まさか、あの後山の中に――。

しばらく街中を走っていると、広場に設置された椅子に座っているココアを発見。

「おい、ココア」

「あれ――なんでここに」

「自分で言うもの変だが、もつとしっかり探せよ。うさぎ追つてたらキリがないぞ」

「――」

「その、昨日は――」

「ごめんね。迷惑だったんだよね。それなのに無理やり――」

「違う。俺の方が100%悪かった。本当にごめん。心にもないことを言つて」

「え?」

「正直、お前が来てくれて嬉しかった。だが、俺はこの街を出たい。それがみんなのためだと思ってる」

「――どうしてそんなこと言うの?」

「言わなきゃダメか?」

そう返すと、ココアは少し考えてから

「言いたくないならいいけど――私は気になるよ」

「まあ、いつか言わなきゃいけない時がくるって言うのはわかってたんだけどな」

深くため息をついて、ラビットハウスでしっかり説明することを伝えた。

そして――

「ああ、それともう一つ。昨日のことみんなには黙ってたのか？」
「——うん。だって言ったら、悠くんが責められちゃうでしょ？」
「お前、結構優しいんだな。昨日は本当にごめん」
「許す！だって悠くんは私の弟なんだから」
「へいへい、お姉ちゃん設定は続行ね」

そうして、ラビットハウスに戻った。

第十九話 悪夢を見終わった後は

ラビットハウスに戻った後、悠と里恵はここへやって来た経緯と、家族のことを話した。

「チノ、ごめんな。あの夜、お前に全て話そうと思っていたんだが、あと一歩勇気が足りなかった」

「——いえ」

みんなは「なぜ隠していたんだ」とは言わなかった。

ただ、黙って考えていた。どうすれば良いのかを。

長い沈黙を破ったのはリゼだった。

「うちの父親は軍人だった。もしかしたら何か知っているかもしれないし、何かあった時も対応してくれると思ってる」

「——」

「だけど、なんでもっと早く教えてくれなかったんだ？何かあったらどうするんだ」

「本当に申し訳ない。返す言葉もないよ。ただ——この場所がいつの間にか好きになって、それを言ったらまたリセットされるんじゃないかと思うと——」

「そんなわけではないです！」

声をあげたのはチノだった。

「あの日の夜、私にそのこと話してくれましたよね。それで、私が拒絶しましたか？」

「——」

「確かに、その——家族の詳しい話はなかったですけど」

「あれは確かに本当の話だが、肝心なことは何も言っていない。だから、拒絶しなかったんだろ」

「今もしていませんよ」

「——えっ」

あつさりとしたチノの答えに啞然としていると、リゼが口を開いた。

「ああ、そうだ。別に出て行けとか思ってもない。お前とは洋館で死闘を繰り広げた戦友だ。今更見捨てられるか」

「別に死闘は繰り広げてないけどな。——はあ、本当にせこいよな、俺」

「本当にせこいです。——今更なんでそんなこと言うんですか」

「だよな——。あ、でもせこいのは俺で、里恵はせこくない。里恵は前から話した方がいいと俺に言っていた。でも俺は、怖くてそれを拒否した」

「この街、本当に綺麗だよな」

いきなりココアがズレたことを言い始めた。

「なんだいきなり」と周囲が困惑すると、ココアはこう続けた。

「私もこの街が好きだよ。だから怖い人が来るのは嫌」

「——」

「でも、だからって悠くんや里恵ちゃんを追い出していい理由にはならないと思う」

「——ココア」

「珍しくまともなことを言いますね、ココアさん。——私もそう思っています」

「ああ、そうだぞ。何が来ようが私が守ってやる！悠が、洋館で私を守ってくれたようにな」

「捨て身はやめてくれ」

あの時、悠は自らが盾になってリゼを守った。

リゼは、そうなってほしくない。

「わかってるさ」

その返事を聞いて、ホッとした。

あれから数日が経ち、いつものようにガラガラの店でコーヒーを入れたり、ラテアートの練習したり、在庫を確認したり、日向ぼっこしたりしていた。

だが、店の中はいつも騒がしい。主に原因はココアだが。

「私、コーヒー豆の在庫見てくる！」

「了解〜」

リゼは豆の在庫を確認しに倉庫へ向かった。チノはカウンター席で寝てるココアの隣で課題。

その最終問題まで行ったとき、ココアがガバツと起き上がった。

「チノちゃん！おじいちゃんがティツピーになれるように魔法かけたよ!!」

「——えーっ!!?」

当事者のティツピーと、ティツピーの正体を知っているチノと悠は驚きを隠せない。

するとすぐにココアはまたうつ伏せになり、夢の世界に戻っていた。

「な、なんだ寝言か」

「し、心臓が止まりそうでした……」

「そういうえば昔、わしがウサギになれるようにおまじないをしてくれた子がおったのう」

ティツピー——否、チノの祖父が喋る。

「ココアみたいなやつはどこにでもいるんだな……」

チノと悠が呆れていると、ラビットハウスに郵便が届いた。

第二十話 ココアの様子がおかしい

「大変です！悠さん！起きてくださいー！」

「なんだ？火事か？強盗か？」

朝、チノがものすごい勢いで悠を起こしに来た。

「違います！ココアさんが——」

「倒れたのか!？」

「いえ、様子がおかしいんです！」

急いで支度して下の階に降りると、ココアがいた。

「おはよう、悠くん。朝食が冷めちゃうよ」

「——ココア……だよな？」

「チノちゃん、朝食が済んだら課題の解き方教えてあげる」

「いえ、もう終わりましたが」

確かにココアだが、何かがおかしい。よく見ると分け目がいつもと逆だ。

あれから数時間が経ち、店は開店準備を始めた。リゼもやってきて、異変に気がつく。

里恵もココアの様子がおかしいと慌てている。

「なあ、ココアのやつ何か悪いものでも食べたのか」

リゼが小声でチノと悠に聞いてきた。

「わかりません。起きたらこうなっていたんです」

「ああ、そうだ。原因がわからない——」

店が開店してしばらくすると、ココアが倒れているところをリゼが発見した。

「ココア？しっかりしろ！」

「あ、明後日——」

「なんだ？明後日がどうした？」

悠が聞くと、震えた声でココアは、

「お姉ちゃん、来るんだよ——」

と言つて意識を失った。

しばらくココアの頭を冷やしていると、ココアは目を覚ましたようだ。

「で、どういうことだ？」

悠が聞くと、ココアが答えた。

「実は、昨日お姉ちゃんから手紙があつて、明後日にここに来るんだよ」

「まじか！——それで？」

「お姉ちゃんぽいところ、見せなきゃと思つて——」
「なるほど」

なんともココアらしい。リゼが呆れた様子で、

「つまり、頑張つてるところを見せたかったのか」

と言つた。

「ココアさんのお姉さんつて厳しいんですか？」

チノが不安そうにココアに言うと、ココアは笑顔で

「安心して！すごく優しいよ！お兄ちゃんが2人いるんだけど、しつ
けて従える姿がかっこいいんだ〜！」

と言つたが、リゼの「しつつけて調教師か!？」と言う余計な一言で
チノが怯えてしまった。

「調教……私これ以上何かされるんですか……」

「完全に怯えたぞ。どうするんだ」

すると、何を血迷ったのかりゼが

「よし！協力するぞ！いいとこ見せよう！」

とココアに言った。いや、怯えているチノをなんとかしろよ。

ココアは嬉しそうに、

「ありがとう！リゼちゃんも私の妹って紹介するからね！」

と言っていたが、「普通に友達でいい！」とリゼに却下された。

あれからしばらくして、千夜とシャロが遊びにやってきた。

ココアが事情を話すと、「お姉ちゃん修行」をする流れに。

「とりあえず、さつきから怯えてるチノをなんとかしろ」

悠が言うと、シャロがチノの元へ行き

「大丈夫、私がついてるから」

となだめた。ココアもそれを真似してみたものの、なぜか逆に不安を煽ってしまう。

ここで、千夜がみんなに

「それじゃあ、リゼちゃんたちが少しドジな姿を見せたら反対にココアちゃんがしつかり見えるんじゃないかしら」

と意見を言うが——不安でしかない。

「わ、わかった。やってみる」

「それじゃ、始めましょ！」

とりあえず、千夜とシャロがお客さんという前提で茶番を始めることに。

「注文をお願いしたいんだけど」

と千夜が言うと、

「えっと……私コーヒーの区別がつかなくて」

とチノが言う。

「ココアー！助けてくれー！」

「私、数学苦手ですから、間違えてコーヒー缶1トンも注文してしまいました」

「ココア……パンって火炎放射器でも焼けるかな？」

「こんな2人みてられない！」

あまりのアホさにココアと悠が叫ぶ。

第二十一話 お姉ちゃん襲来!

ついに、ココアの姉がやってくる日になってしまった。

ココアは「迎えに行かずにもいつも通り店で働くように」と姉に言われ、店で待つことに。

だが――。

「おい、しつかりしろ」

緊張でフリーズしている。心なしか目が死んでいるようにも見える。

「ココアさんのお姉さん。どんな人なんでしょうね」

「ココアの姉か。楽しみじやのう」

「ティツピーが孫を待つおじいちゃんみたいな顔してるぞ!」

実際はチノの祖父だと言うことをココアもリゼも知らない様子だ。

あれから1時間ほどだろうか。いまだに姉が来る様子はない。

「お姉さん、遅いですね」

チノが言うと、ココアが「私探してくる!」と職務放棄して出て行った。

「ココアが迷いそうだな」

と悠が言うと、早速ココアからメールが届いた。

「なんだ、もう合流したのか?」

とリゼが携帯を除くと、

『かわいいうさぎ見つけた!』

と言うメッセージと一緒に背中がハートの模様になっているうさぎの写真が添えられていた。

「あいつ、探す気あるのか……」

「でも、かわいいです」

あれからまた時間が経ち、リゼと里恵は買い出しへ出かけて行った。

「帰ってこない……」

「だな……」

そのとき、店のドアが開いた。

麦わら帽子にサングラスとマスク。完全に「あっちの人」がやってきた。

「——いい、いらっしやいませ。お好きな席へどうぞ」

チノが震えた声で言う。悠が注文を聞きに向かう。

「ご注文は——」

「じゃあ、オリジナルブレンドとココア特製厚切りトーストを」

「かしこまりました——」

チノのいるカウンターに戻ると、ティッピーがあのお客様の方を向いていた。

「ブレンドとトーストだ。——あの風貌、運び屋か」

「悠さんもリゼさんみたいなこと言いますね」

「芸能人とか、花粉症とかあるじゃろ」

チノがコーヒーとトーストを用意して、悠がそれを運んで行った。

しばらくして、「ガタン！」と音を立てて先ほどの客が勢いよく立ち上がった。

「このパン！もちもちが足りない！」

「お客様ー!?!」

チノと悠がそう言うのと、客は持ってきたキャリーバッグを開けた。中には白い粉が詰まった袋。

「みろ！やつぱり運び屋じゃないか！」

「私が、教えてあげる——本物パンの味を。この小麦粉で！」

「誰だお前！怪しいやつめ！」

「私は——そう、私です！」

客はサングラスとマスクを外し、堂々と名乗るが——

「本当に誰ー!?!」

チノと悠が叫んだ。

「妹がお世話になっていきます。姉のモカです」

「お姉さんでしたか」

チノがホツとした様子で言った。

ココアが姉を迎えに飛び出したことと、リゼと里恵が買い出しに出かけたことを伝えると、

「そっか。店で待っててって手紙に書いたのに。相変わらずそそっかしいな」

とモカが言った。これにはチノと悠が「うんうん」とうなづく。

「あなた悠くんでしょ？　そしてチノちゃんとティッピーね。話は聞いているよ」

「そうですか」

「こーんな分厚い手紙にたくさん写真を送ってもらったの」

とモカが送られてきた写真を自慢げに取り出す。が――

「あいつろくなの送ってないな」

中身は面白写真ばかり。

「みんなかわいい――えへへ」

「どこがだよ。って言うか俺男だし！」

悠がつっこむと、モカはチノ――否、ティッピーを撫で始めた。

「チノちゃん、中学生でお仕事なんて偉いね」

「マスターの孫として当然です！」

そして今度はこちらにやってきた。

「悠くんもかわいいね」

「男なんですけど」

男相手だろうが、平気でなでなでしてくる。なんて姉だ。けしからん。

「私から見たらかわいいの！あつ、真っ赤になるのもかわいい」

「悠さんがされるがままに――」

さすがに耐えきれなくなつて逃げ出すと、

「まるで怯えるうさぎみたいですよ」

とチノが言った。モカは目を輝かせて

「うさぎならこっちにもいるようだね」

と言った。チノがティツピーを差し出して

「あ、もふもふしますか？」

と言うが、モカはチノごともふもふし始めた。

「なんてこった——俺も来世はココアの姉になろう」

と柱の陰に隠れてつぶやくと、

「隠れてないで、おいで——」

「近寄るなあ！」

こっちまで徹底的にもふもふされてしまった。

第二十二話 お姉ちゃんのお姉ちゃん

「まさか、俺がもふもふされるとは」

「モカさんは男の人相手でも躊躇わないんですね」

「そこだけ聞いたらただのビッチじゃねえか！」

モカは満足げにしている。

「ココアが帰ってくるまでお店のお手伝いするよ！」

「いえ、お客さんにそんなこと」

「お姉ちゃんに任せなさい」

いつものココアと同じセリフだが、風格が違う。気のせいかな神々しい光を放っている。

「こ、これが頼れる姉オーラ！」

「いつものココアさんが茶番のようです」

この会話を聞かれてたら、ココアは拗ねて引きこもりになるだろうな。

その後、リゼと里恵が買い出しから戻り、4人でパンを焼くことに。オーブンからいい香りがやってくる。

「小麦粉って、本当に小麦粉だったのか」

「小麦粉を常備している人なんて滅多にいませんよ」

チノと悠がオーブンの中を覗きながら言った。

しばらくしてパンが完成し、みんなで食べることに。

完成したパンが美味しすぎて言葉を失った。

完全にココアの上位互換じゃないか。

そしてココアが帰ってきた。

こいつもなにやら怪しい格好をしているが――

「おかえりココア」

「お姉さんが待ってますよ。あ、メールのうさぎ可愛かったです」

チノとりゼは完全にスルー。

「げっ、もうバレてる……」

「ココア——その変装、ダサイ！」

「ブーメラン……」

「私もここじゃ、しつかり者の姉として通ってるんだから！」

「しつかり者……?」

チノと悠は首をかしげる。

「お姉ちゃんに任せなさいって!」

やはり、モカの「お姉ちゃんに任せなさい」とは大きな違い。なぜここまで変わってしまったのか。

「褒められたがってます」

「飼い主に尻尾振る犬みたいだ」

チノとりゼからは辛辣な声上がる。例えがもはや人間じゃなくて犬なところがじわじわくる。

「私から一つご報告があります!——実は、このラビットハウスに数日間泊まらせていただくことになってるんです!」

モカからも「すごいでしょ!びっくりしたでしょ!」というオーラを感じる。

やはり姉妹だ。

「あらかじめマスターに許可はいただいています!」

「わし、聞いてない!」

ティツピーがツツコミを入れる。

その後、千夜とシャロが店に遊びにきた。

「2人のことも、手紙にたくさん書いてあったよ!」

「それってどんな——?」

千夜が目を輝かせていう。一方シャロは

「変なこと書いてあったんじゃない——」

と心配する。だが、ココアの手紙だ。変なことが書いてあるに決まってる。

「2人とももふもふするととても気持ちいいんだって!」

「嬉しいー！」

「もふ……っ。」

反応が二極化してて面白いコンビだ。

ココアがカウンターからラテアートを持ってくる、モカは驚きを隠せない様子で

「すごい……お姉ちゃんサプライズ負けしちゃった……」

と言った。

「ラテアートの練習しているか、日向ぼっこしているかのどっちかだもんなー」

と悠が付け加えると、ココアが「でへへ」とごまかすが、

「ココア！でへへじゃないでしょう！」

とモカがつっこんだ。

里恵も含め5人で夜更かしをすることに。

「あ、私コーヒー入れてきますー！」

「手伝うよ」

チノと悠が退室し、1回のダイニングへ。

「ココアが犬にしか見えなくなってきたぞ」

「ぶぷっ——確かに」

チノがコーヒーを淹れている間、そんな会話をしていると、何か嫌な予感がした。

「——ねえ、ところでココア、悠くんとはどんな関係なの？」

「ヴェツ!?——普通にと、友達だよ？」

「ほほう？ 油断しているとチノちゃんに取られちゃうよ？」

モカがニヤついた顔でココアにそういうと、里恵が

「あー、確かに。お兄ちゃんロリコンだから」

「悠くんは私の弟だもん！」

「弟なのか友達なのかはつきりしろ」

「うわっ！悠くん!?!」

ココアが後ろを振り向くと、チノと悠がコーヒーカップを持って立っていた。

「普通に聞こえてたぞ。——俺はロリコンじゃない」

「私、そんなに子供っぽいですか——」

その晩、散々好きなタイプを聞かれたのは言うまでもない。

第二十三話 街案内

翌日、街の案内をかねてモカと散歩することに。

「なんで俺なんだ？」

「ココアさんをお願いすると収集つかなくなりそうですので」

「いや、俺もこの街よくわからないんだけど」

「では、リゼさんと行ってもらいましょうか」

「あれ？俺は固定なの？」

半ば強引に案内を任せられたもの——。

「あ、あの、街の案内だよな？——エスコートしてくれるわりにはちよつと距離が」

「もふもふ対策だ」

「どういうことだ？」

悠はモカを警戒して大きく距離を開けている。事情を知らないリゼはモカの隣だ。

「リゼ、長生きしたいなら離れた方がいいぞ」

「モカさん——悠に何か——」

「昨日、ちよつともふもふしたらこうなっちゃって。リゼちゃんは大丈夫だよな？」

そう言つてモカがリゼに抱きついた。

「うわああああ!!!やめろおお!!!」

「はあはあ……助けてくれ!」

そう叫びながら甘兎庵に駆け込むと、いつも通り店で働いている千夜とシャロがいた。

「リゼ先輩!それに悠!?!——どうしたんですか?」

「命までもふられる!」

モカの恐ろしさを知つたりゼと悠はシャロにしがみつく。

「逃げると追い詰めなくなっちゃうぞ」

とモカが一行を脅すと、千夜が満面の笑みで

「その気持ちわかります！」

と同意した。この2人——くつつけたらやばい。

「千夜ちゃん！その制服いけてる！」

「シャロちゃんの働いている喫茶店もミニスカで可愛いんですよ」

と千夜が言うのと、モカが悠の方を向いて

「ねえ悠くん、私もまだまだミニスカで働けるかな？」

と聞いてきた。これは回答を間違えるわけにはいかない。

「あ、ああ——まあいけなくはないかな？」

そのあと、甘兔庵で一息ついた後、街の各所を案内してラビットハウスに戻った。

その翌日——。

なにやら下の階が騒がしい。

厨房に入ると、ココアとモカがものすごい勢いでパンを量産していた。

「な、なんだ？なにがあつた」

「そ、その——私好みのパンをどっちがたくさん作れるかって言う競争になっちゃって」

「だからこんなに量産してるのか!？」

案の定、ラビットハウスの住人だけでは食べきれず、みんなでピクニックへ。

ちようど、天気も爽やかでいい感じだ。湖の近くでピクニックシートをひいてゆつくり団欒——している暇はなかった。

「それじゃあ、パンの大食い大会始めるよ——！」

「雰囲気台無しだ！」

「この中にマスタード入りスコーンがありま——す！」

モカがそう言った瞬間、口の中にもものすごい衝撃が走った。

「くそっ……盛られた！」

「奇遇です！私もロシアンルーレットぼた餅持ってきたんです！」

「最悪の意気投合だ！」

ちなみにロシアンルーレットぼた餅は里恵がハズレを引いてしまった。

パンを食べ終わった後、食後の運動ということでボートに乗ることに。

ペアはココアと悠、チノとモカ、リゼと千夜、シヤロと里恵。

「最初に向こう岸の木にタッチした方が勝ち！」

勝った人は負けた人になんでも命令できる。——なんでも、そう、なんでもだ。

ティツピーがカウントダウンしてスタート！

一瞬でチノ&モカチームに追い抜かれてしまった。

他のペアを見ると——リゼと千夜は何か話をしているみたいだ。特に千夜が何か浮かかない顔をしている。

シヤロと里恵は——シヤロが里恵にボートの漕ぎ方を教えているようだ。

「私、またお姉ちゃんに負けちゃうのかな」

「え？」

「私ね、お姉ちゃんに一度も勝てたことがないんだ」

「ココア——」

「悔しさのあまり家出を考えたこともあるんだよ」

「そんなに!?!」

「妹だから、勝てなくてもしょうがないのかな……」

その話を聞いて、悠は決心した。

「嬉しいことに——いや、誠に遺憾ながらこの中で男子は俺だけだ。

さあ、あとは俺に任せて——」

「ティツピー!?!」

「流されていく——時代の濁流に」

肝心なところをティツピーに持って行かれてしまった。おそらく、チノたちのボートから落ちちやっただろう。

「なんとか救出したが――。」

「だめ！悠くんの提案は嬉しいけど、これは私の問題だよ！」

「ココアがものすごい勢いでボートを漕ぎ始めた。」

「私はこの戦いでお姉ちゃんを超える！」

「すげえ！モーターボートみたいな速さだ！これならいけるぞココア！」

そしてついに――チノ&モカチームのボートを抜いた！

第二十四話 相談兼仲介役

だが——結局優勝したのはリゼ&千夜チームだった。

「千夜の火事場の馬鹿力すごかったよ！」

とりぜが褒める。千夜は息を切らして疲れた様子だ。

全てのエネルギーをこんなところで使ってしまったのか。

「そこまでして叶えたいお願いがあったのかな？」

とモカが千夜に尋ねると、千夜は

「私をもふもふしてください！」

とモカに頼んだ。——嘘だろ。勿体無い……。

ココアは「千夜ちゃんまで取られちゃったよ！」と泣いている。

帰り道。

「モカさんは弱点がなさすぎです」

「だな。このままだとココアは一生モカさんに勝てなさそうだ」

「そんなあく!!」

チノと悠の言葉にココアが悲鳴をあげる。

「そんな顔しないでよ。帰りにスーパー寄って行こう！ココアの好きな何でも作ってあげるよ」

「じゃあお姉ちゃん特製のハンバーグが食べたい！」

完全に妹キャラのままじゃないか——。しっかり者の姉という設定はもはやなくなっている。

否、別にもともとあったわけじゃないが。

モカが「お姉ちゃんに任せない」というと、ココアは何かショックを受けたような顔をして

「私先帰る！」

と走り去ってしまった。

その後も、

「一緒にお風呂はいらない？」

とモカが提案しても

「1人で入る！」

と断るココア。

「——じゃあ、悠くん一緒にお風呂はいる？」

「まて、俺を殺す気か」

ココアとチノが上の階で遊んでいる間、モカと悠はバーとなったラビットハウスの店内にいた。

「なんか——ココアが冷たいよお……」

「泣くな泣くな。そういう時期なんだろ」

「年頃の子は、いろいろありますから」

チノの父親——マスターと悠が慰める。

「しかし、ココアのやつ、どうしたんだ。直前まであんなに楽しそうにしてたじゃないか」

「わからない……私何か悪いことしたのかな」

「いや、それはないだろ。喧嘩って感じじゃなかったし」

その晩、ひたすらモカをなだめつつ原因を考えたものの、全くわからなかった。

翌朝。チノが友達を連れてきたが、モカはココアに部屋を追い出されてまた泣いている。

「姉離れが深刻——」

「モカさんも妹離れしようぜ」

「悠！お前がいうな！——ココアは忙しいみたいだし、また甘兎庵に行こう」

リゼが甘兎庵に行こうと提案した。

甘兎庵に到着し、事情を話す。

「ココアが冷たい？」

「そうなの……なんかよそよそしいというか」

千夜は仕事のため、シャロが相談に乗ってくれた。すると千夜が飲み物を持ってこちらへやってきた。

「お待たせしました！おもてなしのアイスココアです」

「空気を読め!!」

リゼ、シャロ、悠が一斉につっこんだ。

「冷え冷え——今のあの子にそっくり」

「効果は抜群だ！」

弱点はココアか——。

結局、夜になってしまい、チノとモカと里恵はお風呂へ。

「なあ、モカさんと何かあったのか？」

部屋で2人きりになったので、早速ココアに聞いてみる。

「ううん。別に何も無いよ。でも——いつまでも甘えん坊じゃお姉ちゃんになれないかなって」

「なるほどね。だからわざと強がってお風呂1人で入るなんて言ったのか」

悠はしばらく考えてから、こう付け足した。

「別に、無理しなくてもモカさんならわかるんじゃないか？」

「そうかな——」

「むしろ、お前の様子がおかしいって泣いてたぞ。無理しなくても、伝わるさ」

「うん——つて、なんか悠くん、お兄ちゃんって感じるね」

「俺も、年上なのに妹って感じる」

「むう……複雑……」

「そうだ、元気がないモカさんのために何かしようぜ」

「あ！それならいい案があるよー！」

「それは楽しそうだな。明日の朝、準備しよう」

第二十五話 サプライズパーティー

早朝。店の支度をしているチノたちに昨日の夜、ココアと立てた計画を話した。

「なるほど——ってココアさんが原因なのに……」

「面白そうだな！派手にやろう！」

「あ、友達も呼んでいいですか」

「もちろん！」

数時間後、モカが起床して降りてきた。

「よし、ココア、行つてこい」

ココアがホラーなうさぎの格好をしてモカを誘いに行つた。

「あ、この前のお兄さん。こんにちは」

「お、おう……」

お互い、軽く自己紹介を交わし、モカが店に入ってきた。

盛大にクラッカーを鳴らし、向かい入れる。

マヤは銃型のクラッカーを自慢、メグはかぶり物を自慢すると、モカは

「そうなんだ！2人ともいいセンスだ」

「やったー！モカねえって呼んでいい？」

「モカお姉ちゃん」

まずい、この2人もあつさりモカに攻略されたようだ。

「順調に甘え上手な妹に育っているね」

「急にあの2人の将来が心配になりました」

チノが言う通り。この2人の将来が心配だ。

そんなこんなで、サプライズパーティーは終了し、別れの時。

「姉妹って、あんな感じなのでしょうか」

「まあ、そうだろうな」

向こうで会話しているココアとモカを見て、チノが羨ましそうに見える。

「羨ましいのか？」

「ち、違います！」

「大丈夫！チノちゃんもすぐに妹の仲間入りだよ」

里恵が追い打ちをかけると、チノは「き、さあ！早く行かないと出発してしまいます！」と逃げた。

モカが帰って行った後、店内を片付けていると、モカが置いて行ったコーヒークップがあった。

ココアの数倍上手なラテアートを見て、
「ずつとうちで働いてもらいたかった……」

「即採用じゃ」

とチノとティッピーがいう。もしモカが店員として雇われたら、ココアの出る幕がなくなってしまう。

あれから数日が経った。

ココアとチノと悠は、夕ご飯の買い出しに出かけていた。

「晩御飯、何にしましょうか」

「確か、秋刀魚が安いとか言っていたな。それでいいんじゃないか？」

「カレーかな？」

バラバラの意見に呆れるチノ。

「カレーだったらそろそろ苦手な野菜を克服すべきです」

「なんだ、ココア。野菜が苦手なのか？」

「こ、この前トマトジュース飲めたよ！」

「私は昨日アスパラを一口食べました」

「チノ……偉いぞ。成長したな」

悠がチノの頭をなでなでしていると、ココアが

「あれ!?私の実績は無視!?!」

とつつこんだ。

「そういえば、チノちゃん。お姉ちゃんには敬語使わなくてもいいんだよ。」

「そう言われればそうだ。なんで敬語なんだ？」

「……ココアさんは誰に対してもタメ口ですね。——私は周りにいたのが年上の人ばかりだったので、癖になってしまいました」
そんな話をして歩いてみると、千夜とシャロを見つけた。

「そっか……じゃあ練習しよー！」

ココアがそう提案すると、

「千夜さ……ちゃん、シャロさ……ちゃん……こんにちは……」

「トイレでも我慢してるの？」

と千夜に言われてしまった。

「今日の夜、何にするんだ？」

悠が千夜たちに聞くと、今夜はカレーにするそうだ。

「じゃあ、みんなでカレーパーティーしない？」

とココアが言い出して、リゼや里恵も呼んで、シャロの家でカレーパーティーをすることになった。

第二十六話 尊い妹

リゼが「軍隊カレー」なるものを作っている。

「はちみつを少し入れて、最後にこれ！」

リゼが出してきたのは、明らかに高そうなチョコレート。

「親父の部下が持ってきたんだけど、甘いもの苦手だからって」

「カレーにチョコレートって……」

「味に深みが出るんだ」

「よし、あとはこれを煮込んで完成だな！」

もうすぐカレーが出来上がる。テーブルの上を片付けようと振り向くと――

「チノ？どうした？」

チノの顔が赤い。熱でもあるのか。

「――ブランデー入りだったのか。いや、それで酔うのか!？」

よく見るとココアも酔っている。

「まったく!だらしない子ね!それでも私の妹なの?」

「いや、お前も酔ってるだろ!」

「洋酒入りのお菓子で酔うなんて……」

シヤロがいうと、リゼは呆れた様子で「カフェインで酔うやつがいたよな……」とつぶやいた。

「そんなことではロザリオを渡せなくってよ!」

「高級な食べ物で性格がお嬢様に!」

「あれ?チノは?」

悠がりゼに尋ねると、

「ココアが怒鳴るから、怯えて逃げたぞ」

その時、事件は起こった。

ドアがゆっくりと開き、完全に酔っているチノが姿を現した。

この時点で悠へのダメージは計り知れない。

「ご、ごめんね……お姉ちゃん……。いい子になるからもう怒らない

で」

「ぐはっ！」

「悠！しっかりしろ！」

なんて破壊力だ。

「ココアちゃんの想いが伝わったのね！」

「長い道のりだったよ！」

千夜とココアが手をつないで喜んでいる。

「お姉ちゃん！」

真っ先にココアに飛びつくと思いきや、千夜に飛びついた。

「見境ない！」

「悠お兄ちゃん……お片づけのお手伝いするよ……」

「リゼ……どうやら俺はもうダメみたいだ……今までありがとう——

里恵、愛してるよ」

「そんな！悠！私を置いて逝くな！って、やっぱりシスコンじゃない

か！」

「お兄ちゃん！」

そんな茶番を繰り広げていると、背後に殺気を感じた。

「争いたくなかったけど、仕方がないね。悠くん、リゼちゃん——勝負だ

よ！」

「悪いが、今回は譲れそうにないな」

「ああ、チノは俺たちの妹だ」

もはや何を言っているのか自分でもわからない。それほどカオス

な状況になっている。

ココアと激しいバトルを繰り広げている隣では、シャロがチノに膝

枕をしていた。

「かわいそうに……酔いから覚めた時、羞恥心で死にたくなるのよ」

「ラビットハウスではいつもこんな感じだよ！」

「技決められて、取り押さえられてるのが？」

戦いがひと段落したあと、チノがココアに寄って来た。

「はいはいが尊すぎて死ぬ」

「心なしか、悠がものすごい生き生きしてる!」

「お姉ちゃん……今の方の私の方が好き?」

「ぐはっ!」

チノが何か発言するたびに悠がダメージを負う。

「さっきの私の言葉を気にして——ごめんね——!」

ココアがチノに勢いよく抱きつき、

「ごめんねチノちゃん!いつものチノちゃんが大好きだから!」

「なんて大胆な告白——ん?」

チノの方を見ると、正気に戻った顔をしている。

「あ、あの——別に酔ってないです」

「愛の力で戻った!」

「今までの全部演技ですから!」

「チノ——それはちよつと無理があるかも」

悠がいうと、チノは顔を真っ赤にして「演技ですから——!」と叫んだ。

その後、みんなでリゼの作った軍隊カレーを食べて解散した。

第二十七話 チノとデート!?

カレー騒動から数日経ったある日の朝。

「今日はココアさんは千夜さん、シヤロさんと勉強会を開くそうです」
朝ごはんを黙々と食べていると、チノがそう報告した。通りでココアがいないのか。

朝っぱらから千夜の家に向かったそうだ。

今日は祝日だ。それなのに千夜たちと勉強会とは——感心だ。

「——リゼさんは、部活の助っ人だそうです」

「そうか。あいつも大変だな」

「——?」

心なしか、今チノがわずかに頬を膨らませたような気がする。

「なんだよ?」

「はあ……本当にこのお兄ちゃんは鈍感」

唐突に里恵に説教され、ますます困惑する悠。

「——今日、一日暇なので一緒にお出かけしてあげてもいいですよ」

「なんで上から目線なんだ!?!」

チノがやたら上から目線で遊びに誘ってくる。

「いや、店はどうするんだ」

「今日はお休みです」

「里恵も出かけるのか?」

「後でココアちゃんが遊びこいって」

——あの姉バカ……たまにはいいことするじゃないか!

要するに、今日はチノと2人きりということだ。

「——チノ、お前インドア派だろ。いいのか?」

「実は、先日から作っていたボトルシップが完成してしまって。やる

「ことがないんです」

「なるほど——」

「ついでにコーヒーカップを買いに行きましょう」

「またココアが割ったのか？」

「いえ、私用です」

「いつてらっしゃーい」

半ば強引に、里恵に追い出された。送り出す時の、悪魔のような微笑みが少々怖い。

「と、追い出されたもの——何から片付けようか」

「そうですね——あ、そうだ、実はこの前、青山さんの小説が映画化されたそうです。見に行きませんか？」

「あ、ああ——」

ただの買い出しかと思いきや、普通に遊ぶ流れになってきた。

「あ、あの——これはいったい」

チノが小声で言う。

「俺が聞きたいよ」

青山ブルーマウンテンの新作が映画化と言うことで、早速見る予定だったのだが——

『バイト先の後輩に惚れた話』

なんで、ラブコメなんだ。しかも、明らかにモデルがチノと悠だ。

否、別にこじつけではない。設定から外見まで完全に一致している。

——今度会ったら徹底的に問い詰めてやる……！

映画が終わり、映画館から出てきたチノと悠だが——。

「いったいどんな羞恥プレイだよ！」

「でも、面白かったです」

「ま、まあそうだが——」

「ところで、あれの題材ってやっぱり私たちなんでしょうか」

「真顔で聞いてくるな！——あれのモデルが俺とチノってことは」

「——なっ！別に惚れてなんかないです！」

派手に突き飛ばされた。

次は、公園で一休み。

「うさぎですー！」

うさぎを見つけた途端、チノの目が輝く。

「ねえ見てマヤちゃん、チノちゃんと悠さんだよ」

「ほんとだ！何してるんだろ」

「——」

「デート？」

公園の茂みにマヤとメグが隠れている。

視線の先にはチノと悠がいた。

そんな視線に気付かず、悠はチノにアイスを渡す。

「2人で食べるのかな？」

「ラブラブすぎー！」

メグとマヤが勝手に盛り上がっているが、悠はうさぎをもふもふし、チノが隣でアイスを食べている。

「ねえメグ！今日一日あの2人を尾行してみない？」

マヤの提案にメグが同意し、チノと悠を尾行することに。

「そういえば、ココアはこの坂道で自転車の練習するのが夢とか言ってたな」

「そうですね」

「チノは自転車に乗れるのか？」

「——乗れません」

チノがそう言うと、悠が近くにあったレンタル自転車を指差し、こう提案した。

「ちよっと練習してみるか」

「ちよつとだけですよ……」

「よし、まずは両足で地面を蹴って前に進んでみる」

「は、はい！」

いきなり坂道はさすがに危ないので、人気のない広場で練習してみることに。

「倒れる前にもう片方の足をペダルに！」

「うわっ！」

ガシャンと派手な音を立ててチノが倒れる。

「お、おい、大丈夫か？」

「大丈夫です。今ので少しコツがわかりました。次は最初、少しだけ後ろ押さえしてもらっていいですか」

「あ、ああ——」

悠が後ろを押さえた状態でチノが自転車を漕ぐ。

「いい感じです。離してください」

「いいのか？いくぞ！」

「もう乗れます！自転車、マスターしました！」

そう自慢げに言いながら自転車を漕ぐ。が、すぐに倒れる。

「だめじゃねえか！」

チノの自転車特訓は続く。

第二十八話 デート大追跡!

「ちよつとだけ」と言いつつ、3時間は自転車の練習をしている。

3時間も経てば、ある程度乗れるようになっていた。

「よし、その木をぐるつと一周して帰ってこられたらクリアだ」

「はい!」

チノが自転車漕ぎ始めた。コースはしばらくまっすぐ進んだ後、広場にある木をぐるつと一周して戻ってくるというシンプルなもの。

そして——ついに完走した。

「ついにやりました!」

「よく頑張った!すげえよ!」

「お、チノがついに自転車に乗れるようになった!」

「特訓のおかげだね」

だが、2人はまだマヤとメグの尾行に気がついていない。

「悠さん、ありがとうございます。この後、甘兎庵で休憩しましょう。お礼に何か奢りますよ」

「いや、ココアに自慢するのは夜でもいいだろ」

チノは早くココアに自転車に乗れるようになったと自慢したいらしい。

「ち、違います!——な、なら、最近できたオシャレなレストランでお昼食べましょう」

「あつ、マヤちゃん!移動するよ!」

「ほんとだ!行くよメグ!」

チノと悠の後を追ってマヤとメグが向かう。

「マヤ?メグ?何してるんだ?」

「うわ!——もうびっくりさせないでよりぜー!」

リゼが帰り道でマヤとメグに遭遇。

「見て、チノと悠がデートしてる」

「なにーっ!?!」

リゼが驚きのあまり叫ぶと、マヤとメグは慌てて口到人差し指を当てる。

「よし、徹底的に尾行しよう!」

「おっ、さすがリゼ!」

しかし、リゼが参加したことにより、この話は瞬く間に拡散された。

「ヴェアアアア!!」

「どうしたの、ココアちゃん」

千夜の家にはココアの奇声が響き渡る。

「マヤちゃんからこんなメールが!」

「あらまあ!」

「チノちゃんと悠が!?!」

「デート!!?!」

「ほほえまー」

今度はココアとシャロの叫びが響き渡った。

数分前。

「この話、ココアに言ったら大問題になりそうだ」

「写真付きでメールで送っとく?」

「盗撮はダメだろ!」

マヤがテラス席で仲良くお昼ご飯を食べているチノと悠の写真を撮り、ココアに送信。

「こうしちゃいられない!今すぐマヤちゃんのところに向かうよ!」

「勉強は!?!」

ココア一行が勉強そっちのけでチノと悠がいるレストランへ向かう。

「な、なんか、視線感じないか？」

悠が違和感に気がつく。それもそのはず、リゼ、マヤ、メグの3人がチノと悠のことをじつと見ている。

「それでしようか」

「ああ……もしかしたら尾行されてるんじゃないか？」

悠がチノに近寄り、ヒソヒソ話を始める。

「そんなわけ——ココアさんたちは今千夜さんの家にいるでしょうし」

「リゼは？ある意味、リゼにバレるのが一番やばい」

もうバレて大ごとになるうとしていているが、悠はまだ気づかない。

「リゼさんは——部活の助っ人と言っていましたから、おそらく学校かと」

「ならいいんだが——そういえば、里恵も千夜の家か」

「はい」

「あーっ！チノと悠が急接近！」

「ヒソヒソ話してるみたいだねー」

「まさか、バレたのか？」

「口説いてるんじゃない？」

リゼたちは様々な憶測を立てる。

そこへ、ココアが到着。包囲網が完成した。

「ヴェアアアアア！本当にデートしてる!!」

「静かにしろ！」

「でも見て、チノちゃんも悠も深刻な話をしてるみたいよ」

シャロが指差して言う。

「はっ！まさか誰がお姉ちゃんに相応しいのか、選別しているのかもしれないわ」

「そんなあ！」

千夜が言うとうと、ココアがまた叫び声をあげる。

「いや、チノたちに限ってそれはないだろ」

そんな話をしていると、またチノと悠が移動し始めた。

「今度はどこに行くつもりなんだ！」

「チノちゃん楽しそう——」

シャロがそう呟くと、ココアは慌てて「チノちゃんは私の妹だよ！」と抗議する。

「ふむふむ……お兄ちゃんはチノちゃんとコーヒーカープのお店へ向かってるようね」

リゼたちとは別に、里恵もチノと悠を追跡していた。

第二十九話 デート包囲網!

チノとコーヒーカップの店に来た。

「店で使うんじゃないかって、チノが使うのか?」

「はい、今使っているものが古くなってしまったので」

「そうかく……いっぱいあってどれにしたらいいかわからんな」

チノと悠が店内をうろうろしていると、勢いよくシャロが入ってきた。

「なんて美しい Forme……」

「おい、なんかやべえやついるぞ……ってシャロか」

「しまった!」

数分前。

「おつ、コーヒーカップの店に入っていったぞ」

「ココア、またカップ割ったの?」

「割ってないよ!」

リゼたちを中心とした追跡チームもコーヒーカップの店の近くまで到着。

時刻はすでに15時をまわっている。

「カップを選んでるね」

メグがそう言うと、シャロが覚醒して飛び出した。

「おい! シャロ! バレるぞ!」

そして今のような状況に。

「シャロもカップを見に来たのか?」

「そ、そうなのよ……2人は?」

「俺たちもカップを買いに来たんだ」

「——あれ? シャロさん、ここコーヒーカップ専門店ですよ」

「み、見るだけだから!」

チノが問うと明らかに動揺してシャロがそう答えた。

「さつきから尾行してるのってシャロなのか？」

悠が小声で尋ねると、チノは納得した様子で

「まさか——」

と言った。そしてシャロの方へ向かい、

「しかし、ココアさんや千夜さんと勉強会をすると言う話でしたが」

「あ、あれね！——ココアが強制的に終わらせちゃったのよ」

あながち嘘ではない。

「そうでしたか。仕方ないココアさんですね」

チノはあっさりシャロの話を信じてしまったが、何か様子がおかしい。

「2人は今日何してたの？」

「えっ——」

弱点を突く質問だ。だが、悠は強気でいう。

「尾行してたなら、わかるんじゃないか？」

「——バレてたのね」

あっさり罪を認めた。

「しかし驚きね。2人はそういう関係だったの？」

「それはない（です）」

チノと悠がハモると、シャロはクスツと笑って

「バレると思ってたけど、あまりに綺麗なカップだったので……っ

い」

「そうか。今ココアはどうしてるんだ？」

悠はあくまでシャロだけが尾行していると思っている。

「そ、それは——」

「まずい、シャロが捕まった！」

「ここにサツが来るのも時間の問題だ！どうする姉貴！」

リゼとマヤはノリノリだが、状況は決してよくない。シャロがリゼたちを売れば尾行がバレてしまい、敗北だ。

「シヤロちゃんのことよ。きつと私たちのことは黙っててくれるはず！」

千夜が言う。

「こうなったら特攻だよ！リゼちゃん！特攻のやり方教えて！」

「特攻!!？」

ココアの発言に、今度はリゼが覚醒した。

「戦死することが前提だから、オススメはできない！」

「あ、シヤロさんたちが出てきたよ！」

メグがそう言うのと、一同は物陰から顔を出して様子を伺う。

「尾行は私の負けね。2人とも末永くお幸せに」

「断じてそういう関係じゃないが、お前も気をつけて帰れよ」

シヤロはリゼたちを売らず、チノたちと別れた。

「犯人はシヤロさんでしたか」

「だな。シヤロが尾行するなんて、ちよつと意外だ。リゼに影響されたか」

「まあ、お目当てのコーヒーカップが買えたので良かったです」

「しかし、シヤロはコーヒーカップにも詳しいんだな」

そんな会話をしながら歩いていると、時間はもう16時半になっていた。

「どうする？帰る？それともどこか寄ってく？」

「あ、最後に一箇所だけ——」

第二十九話 ゲームセンター

最後にチノと一緒に向かったのは、ゲームセンターだった。

「この街にもあるんだな」

「街の中ではここだけですが、ありますよ」

だが、そこまで人気はないようだ。ガランとしている。

「悠さん、UFOキャッチャー得意ですか」

「まあまあつてところだな」

一応、ここに来る前は友達とゲームセンターで遊んだこともある。

「実は——あのうさぎのぬいぐるみ、UFOキャッチャーでしか手に入らないんです」

「ほう……それで俺にとってこいと」

「そうです。お願いします」

「UFOキャッチャーを始めたね」

「あの可愛いぬいぐるみをとってあげて、好感度を上げる作戦だわ」

「そんなあ！私もUFOキャッチャー特訓する!!」

また千夜の一言でココアが叫び声をあげる。が、ゲームセンターのうるさい音でかき消される。

「悠のやつ、まあまあ上手いな……特殊訓練を受けた兵士の風格だ」

リゼたちは尾行を続けていた。が、お昼をまともに食べていないため、空腹が襲う。

「リゼ〜！腹減ったよ〜！何か買ってー！」

マヤが駄駄を捏ねる。

「わかったわかった」

「私もお供するわ」

リゼと千夜が近くのスーパーへ買い出しに向かった。

「すごいです！まだ2回しかやってないのに取れました！」

「それほどでもないぞ。そのぬいぐるみだけで良かったのか？せつかくだからもつと遊んでいこうぜ」

先ほどとは立場が逆転し、今度は悠がチノを誘う側になった。久しぶりにゲームセンターで遊ぶと楽しい。

「いいですよ、勝負です！」

その後、レースゲームでチノと対戦したり、メダルゲームで遊んだり――

「あ、プリクラです。悠さん撮ったことありますか？」

「いつもここに来るときは男友達とだったしなあ……ない！」

「私もないです」

「撮ってみるか？――俺もよくわからないんだけど」

「あーっ!!」

ココアが叫ぶ。

「ふ、2人でプリクラに入っていくよ！」

「やっぱりあの2人付き合ってるの!？」

メグが言う。

「私ともまだ撮ったことないのに！先を越された！」

「良かったら、チノちゃんたちが帰った後みんな撮りましょ」

「す、すごいです！現代の技術の勝利です」

「別にチノは盛らなくても――」

「どういう意味ですか？」

チノから圧力を感じる。別に悪い意味で言ったわけじゃないのだが。

「そ、そのままでも――か、可愛いと思いますが……」

「な――私を口説こうとしてるんですか？」

チノが真っ赤になっていう。

「お前が理由を聞いてきたんだろ！」

「お待たせーって、どうしたんだ」

リゼと千夜が帰ってくると、ココアがひどく落ち込んでいた。

「ココアが、チノの初めてを取られたって」

「!？」

「まあ、大人の階段を登ったのね」

マヤの悪意のある言い方により、リゼと千夜は誤解してしまった。

「し、しかし——ゲーセンでそれはまずいだろ」

「もう認めるしかないよ……チノちゃんは私より悠くんがいいんだ……」

「あきらめないでココアちゃん！私たちがついてるわ！」

「そうだ！このお弁当でも食べて元気出せ！」

千夜とリゼがココアを励ます。

「よし、先にラビットハウスに帰って悠を囲むぞ！」

ゲームセンターから出てくる頃には、時間は18時になっていた。

「ちよつと、遊びすぎたな」

「いつか逆転してみせます……！——ティッピーがいれば2倍の力が出せましたが」

「何か足りないと思ったらティッピーがいないのか！」

チノは完全にゲームセンターにハマったようだ。

なんだかんだ、今日一日とっても楽しかったような気がする。

そんなことを思いながら、ラビットハウスへ向かった。

第三十話 軍法会議!?

「今日は、ありがとうございました」

「いいや、別に。俺も結構楽しかったし」

ラビットハウスに帰る前に、夕食の買い物をした。

「ココアさん、多分もうラビットハウスに戻ってますよね」

「ああ、そして俺たちがいないことに気づいて発狂してるだろうな」

「ざまあみろ」と言わんばかりに悠がにやける。

「でしたら、今日の夜は——鍋にでもしますか?」

「そうだな」

そのとき、スーパーの自動ドアが開いた。

「あ、やっぱりここにいた!お兄ちゃん、大変だよ!」

「なんだなんだ」

里恵がこちらに駆け寄ってきた。不吉な予感がする。

「ラビットハウスに帰ったら、みんなが揃ってて、お兄ちゃんに徹底的に事情聴取するって!」

「なんだと!?!」

「そんなに騒ぐことですか……」

チノが呆れる。全く同意見だ。

「どうするチノ……帰ったら俺は処刑され、お前もタダじや済まないかもしれない」

「そ、それは困ります!」

「そりやそうだよ……周りから見たらお兄ちゃんたち、デートしてるようにしか見えないもん」

「デート!?!」

チノと悠がハモった。

「ま、まあそうだな。俺も途中から『あれ?これデートじゃね?』って思ってたし」

「わ、私はそんな気は——」

「今日はお楽しみでしたね〜」

里恵がニヤついた顔で言う。こいつさては尾行してたな。

「だが、どこから情報が漏れたんだ、シヤロか？」

「みんな、尾行してたみたいだよ」

「この街はストーカーとパパラッチしかいねーのか!!」

悠の叫びが店内に響き渡った。

「ふう——チノ、覚悟はできたか。扉、開けるぞ」

「は、はい……」

「どうなっても知らないよ……」

悠がゆっくりと扉を開けると、やはりみんなが揃っていた。

「た、ただいまです……」

チノが恐る恐る言うのと、みんなこちらに振り向いた。

「や、やあ皆さん。お揃いで」

「やあじゃない! どういうことか説明してもらおう」

「やっぱりそうなるのか!」

「つまり、今日一日暇だったから2人で遊びに行っていたと」

「はい……すいません……」

なんで謝ってるのか自分でもわからない。

「私たちもプリクラで対抗だよ!」

ココアがみんなで撮ったプリクラを自慢げに見せる。

「お前も撮ってたのか!？」

「ココアさん聞いてください。悠さんと練習して自転車に乗れるようになりました」

「ヴェアアアア!! 私の勝ち目ないよー!!!」

「そうだ、お前が出る幕はないぞココア」

「お兄ちゃんぶってんじやないよ！今からどつちがチノちゃんの兄妹に相応しいか勝負だよ！」

ココアが戦いを挑んでくる。が、リゼがそれを止めた。

「それは後にしてくれ。——その、悠。言いづらいんだが」「なんだ？」

「そういうことは、公共の場でやっちゃいけないんだぞ」

「なんの話だ!？」

「しらばつくれるな！ココアが、チノの初めてを奪われたと泣いていたぞ！」

リゼが悠を指差して強い口調で言う。

「はあ!!？」

「——初めて？」

チノは首をかしげるが、

「チノちゃんは知らなくていいのよ……」

千夜がチノの耳を塞ぎ、ココアがチノの目を覆いつつ、リゼに言った。

「私そんなこと言ったっけ!？」

「——マヤが言っていた。それでお前が落ち込んでいたんだろう？」

「ち、ちが……私はチノちゃんとのプリクラを先越されて……」

「いや、確かにチノと遊びに行ったが決して手を出したわけではない！」

悠が反撃する。

「な、な、な……勘違いしてたのは私だけか!!？」

「リゼ、そういう年頃なのはわかるが、俺を巻き込むな。男子は常にそういうことを考えているわけではない！」

悠がリゼにトドメを刺した。

「はうう………すまない——」

心なしか、リゼが先ほどより小さくなっているように感じる。

「初めてって、どういう意味なんでしょう………」

「チノが帰ってきたああ……」
「ティツピーうるさいです」

そうして、チノとの楽しいデートは幕を閉じた。

第三十一話 因縁

チノとのデートから数日。
チノと甘兎庵に来ていた。

「おいしい」

「良かった。新作『エメラルドの涙』好評ね」

千夜は微笑んで言う。

「また変な名前つけやがって——」

「あの、私たち、それぞれの後継ぎになるんですよ。ラビットハウスと甘兎庵はライバルで深い因縁があったみたいですが」

「そうなのか!？」

悠が驚いて千夜の方を見ると、千夜はきよとんとした顔をしていました。

「深い、因縁……?？」

「あれ——?？」

「チノ、そんなに凹むなよ……」

「因縁を持っていると思っていたのは、おじいちゃんだけみたいですね……」

チノがそう言うと、リゼとココアが

「向こうからはガン無視ってことか!？」

「おじいちゃん——かわいそう!」

と言うと、ティツピー——否、チノの祖父は「憐れむな!」と泣きながら言う。

早速、ココアとリゼは因縁があったのかどうか調べるためにフルールへ向かった。

「ティツピー……泣くなよ」

「お前に慰められる日が来るとはのう……」

「でも、なんで因縁が?」

里恵が尋ねると、チノが答えた。

「昔、甘兎庵とのコラボメニューがあったそうですが、おそらくそれ関係で揉めたのでしよう。私も詳しくは知らないんですが」

「そうなのか……」

「あれ？ティツピー？」

気がつくど、チノの頭からティツピーがいなくなっていた。

そして、ココアとりぜが帰ってきた。

「おかえりなさい。ティツピー見ませんでしたか？」

チノが尋ねると、

「ティツピー？見なかったけど……」

「まさか——おじいさんの因縁を晴らそうと特攻を」

「そうかも——」

悠がボソツと呟くと、チノが慌てて「ありえません！うさぎですからー！」とごまかす。

「戦が始まる……いざ!!」

「本当にやろうとしてた!？」

ティツピーがハチマキと「珈琲旋風」と書かれた旗を掲げている。

それに乗乗してココアもハチマキを装着。

「私も手伝うよ！ティツピー！」

「やめてください！仕事してください！」

「お前サボりたいだけだろ!？」

乗乗しようとするココアをチノと悠が止める。

そしてティツピーが店を飛び出した。慌てて追うと、やはり甘兎庵にいた。

「ババアを出せ！ババア!!」

ティツピーが甘兎庵の店内で叫ぶ。すると千夜が奥から木刀を持って現れた。

「よくわからないけど、相手になるわ!」

心なしか、ティツピーから赤い炎、千夜から緑色の炎が出ているように見える。

「ティツピーそこまでです」

チノがティツピーを捕まえ、事態は無事収拾した。

「お騒がせしました。お仕事中的なのに」

「あら、もうおしまい？」

千夜が微笑む。

それから、昔行われてたラビットハウスと甘兎庵のコラボメニューについて知った。

「ラビットハウスでは、特製のおんこが美味しいと評判になり、甘兎庵ではコーヒーあんみつのコーヒーが美味しいと評判になり——」

「なるほど、それで……コーヒーが注目されなくて拗ねたのか。大人気ないなあ」

悠が呆れる。

「自分のコーヒーに相当自信を持っていましたからね。——辛かったんでしょうね」

チノがティツピーの方を見ながら言う。

その後、ラビットハウスに戻る。

「千夜ちゃん、甘兎庵を大きくするのが夢なんだって？」

里恵が言うと、ココアが「女社長だつて——！かっこいいなあ——！」と言うと、チノが何目覚めたのか

「わ、私、街中の喫茶店を全てフランチサイズ化します！」

と宣言した。

ココアが店からメニュー表を持ってきて、

「じゃあまずはメニュー名を改めなきゃね！えーつと、漆黒の——」

「ダークネス」

「暗黒卿——黒炭の如き——」

「一番暗きとき——ダーケストアワー——」

ココアとチノがメニュー名を書き換えようとする。

「「やめろー!!!」」

リゼとティツピーと悠が叫んだ。

第三十二話 職業体験

ある日。チノが衝撃発言を行い、店内は騒然とした。

「明日から3日間、甘兔庵で働きます」

「——えっ?なんて?」

悠が思わず聞き返すと、

「ですから、明日から3日間、甘兔庵で働きます!!」

「二「えーっ!!!」」

一気に店内がざわつく。

「チノ……千夜に何を吹き込まれたんだ!」

「洗脳か!あの和菓子馬鹿——よくもチノに……」

リゼと悠がチノを揺さぶって正気を疑う。ココアとティツピーはフリーズしている。

「大げさです。3日間、職業体験に向かうだけですよ」

「なんだ——」

そうして、3日間チノがいないラビットハウスになってしまった。

「今頃チノは甘兔庵で働いているのか」

「どうするココア、千夜に影響されて——『今日から抹茶派です。コーヒー派に宣戦布告です。』なんて言いだしたら」

「ヴェアアアア!!チノちゃんとられるー!!!」

ココアとティツピーは倒れた。

「ただの中学の職業体験だろ。3日間だけだし」

とリゼが言う。

チノの代わりにラビットハウスにやってきたのは——。

「マヤはこんな代わり映えない職場で良かったのか?」

リゼが聞くと、マヤは嬉しそうに

「ここ慣れてるから楽なんだ〜!」

と言う。

「甘い!大切な授業の一環だろ!厳しくいくぞ!」

トリゼが説教するが、すぐにマヤは表情を変えて

「あのね……本当はここで働いてるチノが羨ましくて。私が代わりにしたかったの……」

と上目遣いで言ってくる。もちろんデタラメだろうが、ココアには効果抜群だ。

すぐに、

「厳しくしちやダメー!」

とマヤをかばう。

「はあ……」

「どうしたの?」

悠が窓の外をぼーっと眺めながらため息をつくとき、マヤが聞いてくる。

「チノがいないとやる気でない」

「そんなに!?!」

「デレデレじゃないか!真面目に働かないと承知しないぞ」

リゼが悠に言うが――

「客いないんだからいいだろ――」

そう、ラビットハウスは相変わらず客がいない。

「でも気持ちわかるなあ!チノちゃん、今頃千夜ちゃんと楽しそうにやってるのかな」

ココアがフォローに入る。

マヤの頭に乗っていたティッピーがこちらにやってきた。

そして小声で悠に言う。

「これ小僧。ちよつとチノに電話してくれないか?」

「過保護なじいさんだな――わかったよ」

ティッピーと廊下に出て、電話のダイヤルを押す。もちろんチノの番号だ。

「チノか。敵地の様子はどうじゃ？」

ティツピーが深刻な顔で言う。すると、困惑したチノの声が聞こえた。

『どう、と言われても——何を報告すればいいんですか？』

今度は、年離れた女性の声。——千夜のおばあちゃん！

『あんたよく見ると仏頂面がああのおじいそつくりだねえ』

『ババアの声！大きなお世話じゃ！』

ティツピーが言うが、おそろく向こうには聞こえていない。

「ちよ、ティツピー変われ。——おいチノ？もしも？大丈夫か！」

電話の向こうからはチノがテンパっている声がする。

しばらくしてチノの声がうっすらと聞こえた。

『美味しい——なんて優しいおばあちゃん！』

『ダメだチノが洗脳されてる！』

悠がティツピーにそう言うと、ティツピーはこの世の終わりを見たような顔で

「ダメじゃチノ！食ったら虫歯になるぞ！チノ！聞いているのか！チノ！」

と叫ぶ。が、応答はなく、そのまま電話は切れた。

第三十三話 3日だけ……

「大変だ！チノが……チノがあああ!!!」
「悠くん!?何事!?!」

ついにチノと音信不通になり、ティツピーと悠が慌ててラビットハウスの店内に戻る。

その日の夕方、リゼとマヤを見送った後にココアに一通のメールが届いた。

「見て、チノちゃんからメールだよ!」

「良かった、まだ意識はあるみたいだぞ、ティツピー」

悠がそう言うのと、ティツピーはホツとした顔をするが、その表情も続かなかった。

「今夜は」というタイトル。嫌な予感がする。

『夕飯にお呼ばれしたので帰りは遅くなります。千夜さん曰く、甘兎庵看板姉妹爆☆誕です』

そして、チノと千夜が楽しそうにピースしている写真が添えられていた。

「ヴェアアアア!!!チノちゃんつたら——悠くん!写真撮るよ!」

「は、はい!」

ものすごい勢いで言われ、思わず敬語になってしまった。

結局、ココアと悠と里恵で写真を撮り、『ラビットハウス新3姉弟で対抗だよ!』という謎の対抗メールを送信した。

「みなさん、深刻な問題が発生しました」

「どうしたの?悠くん」

「お兄ちゃん?」

その晩、ココアたちは重大な問題に直面していた。

「今日の夕飯、どうするんだ」

「——あっ」

悠の問いに、ココアと里恵は顔を見合わせる。

今日はチノがいない。それはつまり、ラビットハウスに料理ができる人がいないということの意味している。

「仕方ないなあ！お姉ちゃんに任せなさい！」

「お前は絶対に料理するなよ」

「だ、大丈夫だもん！」

「うそだあ、この前ハンバーグ真っ黒にしてチノに叱られただろ」

「うう……」

悠の一言でココアは撃沈。里恵はタカヒロさんのおかげである程度料理ができるようになっていた。

「里恵、できるか？」

「まあ、簡単なやつなら——」

今晚の料理係は里恵に決定した。

「ただいまです」

チノが帰ってきた。ものすごい勢いでココアとティツピーと悠が飛びかかる。

「そ、そんなにくつつかないでください！」

「チノ——抹茶派にならないでくれ！」

「チノが帰ってきたああ……」

「チノちゃん！私たちいつまでもラビットハウスの姉妹だよね！」

それぞれがチノに問うと、チノは呆れた様子で

「大きいです。——美味しかったですけど」

「まったく、本当にしようがないみなさんです」と、チノは微笑んだ。

「ブルーマウンテンのおかわりいただけますか？」

青ブルマこと青山ブルーマウンテンが店に顔を出している。

「チノ、おかわり頼む」

「はい」

相変わらずラビットハウスは客がない。今いるのは青山ブルーマウンテン1人だ。

「ねえ、青山さん！本名はなんていうの？ブルーマウンテンじゃないんでしょ？」

ココアが満面の笑みで尋ねると、青山ブルーマウンテンは「秘密です。みなさんにとって私は青山ブルーマウンテン——」

その時、店の扉が大きな音を立てて開いた。

「見つけましたよ！青山先生！」

「誰!？」

「私の担当です」

青山ブルーマウンテンがテーブルの下に隠れる。

「連絡が取れないと思ったらやっぱりラビットハウス！ふらふらしてるの高校の時から本当変わらない！」

「あーあー」

青山ブルーマウンテンが耳を抑えながら聞こえないふりをする。

するとこの担当編集はさらに怒る。

「こらー聞こえないふりするな！無駄な抵抗はやめなさい！」

そしてこう続けた。

「早く原稿書きなさい！青山先生——いや、翠さん！」

「翠ちゃん——」

「翠さんでしたか」

「あっさりバレたな」

すると、担当編集が青山ブルーマウンテンの腕を掴み、

「ほらー行きますよ！締め切りはもう1週間も過ぎているんです！」

終始、青山ブルーマウンテンは「あーあー」と聞こえないふりをしていた。

第三十四話 休日の過ごし方

そしてその翌日、ラビットハウスに休日が訪れた。

「とっておきのジグゾーパズル——！お休みの今日にふさわしい相手です！」

「8000ピースっていくらなんでも——」

チノが目を輝かせて持っているのは、先日購入したという8000ピースのジグゾーパズル。

悠も手伝うという約束だが——これは今日のうちに終わりそうない気がしない。

すると部屋の扉が開き、ココアが現れた。

「チーノーちゃん！あーそーぼー！」

「やっぱりきたか」

「あれ？なんで悠くんが？」

「チノとジグゾーパズルする約束なんぞな」

「そんなあ！せっかく晴れたんだから外で遊ぼうよ！」

ココアがそういうと、チノはティツピーをココアの頭の上に乗せ、部屋から追い出した。

「わしを身代わりには!？」

というティツピーの叫びをスルーし、チノがジグゾーパズルを始める。

「———そういえば、いよいよ明日ですね」
「だな」

黙々と作業しながら、チノと悠はいう。

「里恵さん、明日は行けないんですね」

「ああ——この前仲良くなったマヤとメグとお泊まり会とは……」

里恵は昨日から、マヤやメグとお泊まり会に出かけた。

「いつの間に仲良くなったんでしよう——」

チノが若干悔しそうにいう。

「どうする？友達がみんなお前を無視して里恵と遊ぶようになったら」

「それは困ります！——あの2人に限ってそんなこと」

「冗談だ。あいつらは、そんな性格には見えない」

最近、やたらチノが感情表現豊かになり、いじりがあるようになってきた。

これもココアの影響か。

——いつの間にか夕方になっていた。

「まだ半分の半分しかできてません！」

「難易度高過ぎないか？」

そんな会話をしていると、ココアが帰ってきたみたいだ。

「チーノーちゃん、悠くん！コーヒー淹れよう！！」

「パターン変えてきた！」

ココアの提案にチノと悠がハモる。

「ココアさん、明日の支度はできたんですか？」

チノが尋ねると、ココアはすでにいなくなっていた。

翌日。今日からリゼの誘いで、みんなでキャンプをする予定だ。
ラビットハウスから出ると、みんな揃っていた。

「この集まりは何かな——」

「ココア!？」

ココアが寝起きの状態できた。

「今日から泊りがけでキャンプに行くんだろ。早く着替えてこいよ」

悠がそういうと、ココアは目を輝かせて

「そうなの!?! やっと私の気持ちがみんなに通じたんだ〜！」

というが——。

「なんのこと？」

「今日と明日、みんなでキャンプに行こうってリゼちゃんが誘ってくれたでしょ?。」

シャロと千夜が言う。

ココアが目をきよとんとさせている。それを見てシャロが「招待状が来たでしょ？」と言うが――。

「招待状――？」

ココアはさらに困惑した様子。

みんながりぜから送られた招待状を見せると、ココアは震えた声でこういった。

「招待状なんて来てない――。私が誘っても誰も……なのにりぜちゃん的一声でこんな――」

「昨日何があつた!？」

悠がココアにそう言うと、ココアは顔を真っ赤にさせて

「もー！なんなのみんなー！もー！もー！」

「ココアちゃんが牛見たいに!！」

そして、「引きこもっちゃうから!！」と部屋に閉じこもった。迎えに来たりぜに事情を話すと、りぜも困惑していた。

「手紙、届いてます。ココアさんの制服のポケットに入れっぱなしに――」

チノが言うと、みんな「やっぱりか」といった様子。

「でも、どうしてあんなに怒ったのかしら」

「昨日ココアが誘いに来ていたような――」

千夜とシャロがいう。昨日、チノと悠に部屋を追い出されたココアは、どうやら千夜やシャロに遊ぼうと誘っていたみたいだ。

チノが青ざめた顔で言う。

「私も昨日、ジグゾーパズルに夢中で構ってあげられませんでした――」

「妹に構ってあげられなかったって後悔させる姉がどこにいるんだ?」

チノの発言に悠が呆れたように言う。

とりあえず、引きこもってしまったココアをなだめるため、策を考
えた。

第三十五話 山へ出発!

部屋に引きこもったココア。

千夜やシャロは「ココアちゃんココアちゃん、どうか気を沈めて出てきてください」などと祈りを捧げる。

「ココア、天照大御神説が浮上したな」

この状況、完全に某有名神話そっくりだ。

するとリゼが、ココアにこう申し出た。

「し、仕方ない——。じゃ、じゃあ私を好きだけでもふもふしていいから……」

すると部屋の扉がわずかに開き、ココアの暗い声が聞こえた。

「よし、1人ずつ入っておいで——」

「全員かよ!」

むしろこれは好都合だ。ココアにもふもふしてもらえるチャンス!

「じゃあ俺から」

「さて、お前はダメだ」

「なんでだよ!?!」

悠が部屋に入ろうとすると、リゼに止められた。

シャロが涙目でこう説得する。

「本当に出てきてよココア!ココアがいないと落ち着かないわ!」

リゼが続ける。

「私だって!ココアがいなければこんな計画思いつかなかったぞ!」

すると千夜がここぞとばかりに

「でも私が一番ココアちゃんだーいすき」

と便乗した。ココアは暗い声で「私もみんながだーいすき」と言うが——部屋から出てくる様子はない。

チノが、ココアの部屋の前へ向かった。

「さてチノ!早まるな!」

「コ、ココアさん——あーそーぼー……」

「なんて攻撃力だ！」

さすがのココアも耐えきれなくなったのか、部屋の扉が大きく開いた。

そして、すっかり準備万端といった様子で「いいよー！」とココアが出てきた。

「——やれやれです」

「これが日本神話か——」

悠がつぶやくと、ココアが「日本神話？」と首をかしげる。

「みんなに本気で怒るわけないよ！」

「やれやれ。ココアは本当にしようがないココアだな」

「悠、チノちゃんの口癖がうつつてるわよ」

「なんだと!?!」

シヤロに指摘され、頬を赤らめる。

チノは、キャンプに持って行こうとしていた「クロスワード」の本をココアに没収され、不満げな顔をしていた。

「おい、ティツピーは連れていかないのか?」

「ティツピーはお留守番です」

「そうか」

ティツピーのやつ、今頃チノがいないって泣いてるだろうな——。

ココアがチノの頭に麦わら帽子を乗せた。

「ティツピーがいるみたいですよ」

「ティツピーって帽子並みの重量だったのか!?!」

悠がツツコミを入れると、チノはココアに「ありがとうございます」と言おうとするが——

「クロスワード解けたよー!」

と遮られてしまった。

チノが心配そうに外を眺めると、ココアは「あー!また解けた!」と

自慢する。

途中、橋の真ん中で一時休憩をすることに。

「すごいです！まさに自然の驚異です！」

チノが興奮した様子で写真を撮る。

「自然の驚異って——」

「大自然だー！この雰囲気、実家を思い出すなー！」

「えっ!?実家こんな山奥にあるのか!?!」

今日の悠はツツコミが絶えない。

「実家、素敵などころにあるんですね」

チノがそう言うと、ココアは満面の笑みで

「うん！いつか連れて行ってあげる！お母さんもお姉ちゃんも大喜びだよ！」

と言うと、チノが顔を赤くした。

しばらくしてコテージに到着したものの、大問題が発覚した。

第三十六話 サバイバルキャンプ

「うわあああ!!!」

コーテジにリゼの悲鳴が響きわたった。

「どうした!」

「いきなりとんだハプニングだ!クーラーボックスが空だ!」

リゼが「食料」と貼り紙が貼ってあるクーラーボックスを見せる。

中身は何も入っていない。

それを見たチノは意識を失いかけながら「そ、そんな……」と怯えていた。

リゼが慌てて「大丈夫だ!」と励ます。

「食料は我々で調達しよう!」

「急にサバイバルに!」

まずは、コーテジにサバイバルに必要な道具があるかどうか探す。

——なぜ、チェンソーがあるんだ。

なかなか物騒なものまで置いてあるようだ。

釣竿、 TENT、 バーベキューセット、 保存食——まあ1泊2日には十分だろう。

道具を見つけると、班決めが行われた。

「リゼ、 千夜、 シャロが山菜採り、 ココア、 チノ、 俺が釣りか」

悠はココアとチノを連れて釣りに行くことになった。

「よし!チノちゃんにかっこいいところ見せるよ!」

「お前ら、 釣りやったことあるのか?」

悠は一度だけある。木組みの街に来る前の話だが。

ココアは「なんとかなるよ!」と言い、チノは「先が思いやられま
す」と言った。

どうやら2人とも初めての釣りらしい。

ココアは順調に釣っているようだが、チノは一向に釣れない。

「私だけ釣れない……」

「私にいい案があるよ！」

自分だけ釣れないと落ち込むチノに、ココアが提案した。

どうせろくな案じゃないだろう、と思いながら見ていたが――。

「こうするの！チノちゃんに私のパワーを分けてあげる！」

ココアがチノに抱きつき、一緒に釣竿を持つ。

「――俺もチノにパワーを分けてあげたい」

「魚になってチノの竿にかかりたい」

悠のこの問題発言に、つつこむ人がいない。そういえばリゼは山菜採りの方に向かったのか。

「チノちゃんもふもふ」

ココアは満喫しているが、チノは嬉しそうではなかった。

しばらくして、「ココアのパワー」によって魚が釣れたが、チノは「納得いきませんね」と落胆。

しばらくして、ココアは釣り場を変えたと行ってしまった。

「あんまり遠くまで行くなよ！」

「大丈夫だよー！」

山の中で1人で行動するなんて――大丈夫なのかと心配する悠だが、チノがいないことに気がついた。

「あれ？チノ!？」

やはり、いない。まさか――と辺りを見渡すと、中洲にチノがいた。

こちらに手を振っている。

「チノも釣り場変えたのか!？」

と叫ぶと、チノはさらにジャンプしてこちらに来るように伝える。

「俺も来いって!?!よしきた！」

「まさか、戻れなくて困ってたとは――」

「あ、ありがとうございます――」

「なんで泳げないのに川に入ったんだ!?!」

悠が少し強い口調で言う。

「ココアさんの帽子が飛んで行ってしまっただけ——でもやりました！」
チノが自慢げに折っていた帽子を開く。中には魚がいた。

「どうですか？ココアさんと釣った魚より大きいんですよ」

その時、ココアが帰ってきた。

「どうしたの2人とも!?水遊びするなら誘ってよ！」

「水遊びじゃねえ！こっちは危うく水難事故に遭うところだったぞ
！」

ココアに事情を話すと、ココアはチノにチョップした。

「帽子よりもチノちゃんが大事！無茶なことしちやダメ」

「おお——ココアがお姉ちゃんしてる……」

思わず感心してしまう。が、すぐにココアはいつもの調子に戻り、
「でも一番ダメなのは、一瞬でもチノちゃんから目を離してしまっただ
私！」

と自分にチョップしまくる。悠もそれに便乗して「俺も同罪だああ
！」と自分にチョップする。

チノは少し頬を赤らめて

「私赤ちゃんじゃないんですから、そこまでじゃないですからー！」
と2人を止める。

その後、よくわからない流れで水遊びをしていると、リゼたちが迎
えにきた。

「3人ともびしょ濡れじゃないか！」

「す、すまん。つい——」

「でも魚は獲れたようね……」

その後、コテージの近くまで戻り、魚や山菜を調理してお昼ご飯。

「保存食があったし、今日の夜は大丈夫そうだな……」

とりぜが言う。

第三十七話 ゾンビとマイムマイム

「しまった！窓が割れてる時はヤバイって聞いたことがあるぞ！」
気がついたら、コテージがゾンビに囲まれていた。

「ここは私が！悠くん、チノちゃんを頼んだよ！」

「ココア！後ろ！」

「あっ……」

ココアがゾンビに噛まれた。

「つてことがあつてな、今リゼたちがゾンビに応戦しているが、ここに
来るのも時間の問題だ」

「そ、そんな！早く逃げないと——あれ？身動きが取れない——」

チノが目を覚ました。

「寝袋？私たち木陰で昼寝してたんじゃ——」

「お、起きたか」

悠が言うと、チノは冷や汗を流しながら

「あ、あのゾンビが——」

「ゾンビ？——みんなが外で待つてるぞ！」

チノがテントの外に出ると、みんながバーベキューをしていた。

「みんなが、ゾンビに——」

「何言ってるのチノちゃん、私たちが——」

ココアが振り向くと血がついた——否、ケチャップがついた顔で
「ゾンビになるわけないよ」

と言ったが、チノは恐ろしさのあまり失神した。

みんなは慌ててチノに駆け寄り、

「やりすぎた!?チノちゃん！ケチャップだから！前もやったでしょ！
ケチャップー!!」

ココアが叫んだ。

「どうしてコテージを使わないんですか」

「電気がつかない上にベッドの数が足りなくて」

「テントと寝袋があったし、もうこつちでいいやつてね」

チノの質問に千夜とシャロが答える。

「みんな、ごめんな。ハプニングだらけで——誰の仕業が心当たりはあるけど……もつとのんびりした休日を想像してただろ？」

リゼがそう言うのと、みんなは口を揃えていった。

「もつとハードなの想像してたから大丈夫！」

リゼのことだから「ワニを捕獲したぞ！」などといったハードなサバイバルを計画していたのかと思っていた。

「そろそろ寝ましようか」

千夜が言うのと、チノが慌てて「待ってください」と言おうとしたが、

「マシユマロ、まだこんなに残ってるぞ！」

「その通り！」

ココアがコーヒーメーカーを取り出した。

「寝かさないつもりだな！」

と悠が言うと、ココアは「最初に寝た人は罰ゲームだよ」と宣言した。——フラグでしかない。

「罰ゲーム!?!楽しそー！」

「お、おい、シャロ？」

シャロは完全にコーヒー酔いしている。

「火を囲んで踊るわよ！ほらみんな、マイムマイムするわよー！」

「キャラが完全に崩壊してるぞ！」

火を囲んで輪を作った。

「マイムマイムって、どんな感じだっけ？」

「適当に回ればいいんじゃない？」

悠がそう答えると、シャロが「レッツゴー！」と合図を出す。一斉に回り始めたが、徐々に回転スピードは上がっていき——。

「どう？チノちゃん！楽しい？」

ココアが尋ねる。

「すごく馬鹿みたいです!」

「それがいいんだよ!」

チノの目が渦巻きになっている。——しかし、もっと重体の人がいた。

「千夜がやばい!」

悠が叫ぶと、千夜は

「大丈夫……みんなのためにも、死んでもこの手は——」

「すでに死にそうです!」

そしてついに千夜の足は地面から浮いた。

「じゃあ、一斉に手を離すぞ!セーの!」

リゼが掛け声をかけ、一斉に手が離れる。

千夜は遠くへ吹き飛ばされたものの倒れてはいない。

チノはふらついて、シャロは木に激突している。

「だ、大丈夫か——」

「な、なんとか——」

悠がチノに言うと、チノはフラフラしながらそう答えた。

第三十九話 願い事

突然、ココアが箱を持ってきた。

「じゃーん！今日の夜はこれで班分けするよー！」
「くじ引きか!？」

実は、テントはあったものの、2人サイズだったのだ。
つまり、2人ずつに分けなくてはいけない。

ココアはそれをくじ引きで決めようと提案してきた。

「ココア——自分に都合がいいようにズルするなよ」
「平等だよ！——この中には、青・赤・黄の三色に塗った紙が2枚ずつ入ってるの！同じ色を引いた人とペアだよ！」

「なるほど——って、悠はどうなるんだ!？」
「——考えてなかった」

リゼが言うと、ココアは事態の深刻さに気づいた。

そう、要するに2人ずつ分かれると言うことは、この中の誰かが男と1つのテントで夜を明かすことになる。

「考えとけよ……テントは3つしかないし、俺はコテージのベッドで寝ればいいのか?」

コテージは電気はつかないが、ベッドはある。別にそこで1人で寝ても構わない。

「1人で寝るの、怖くないの?」

「怖いわけあるか。チノじゃあるまいし——」

ココアの心配に悠がそう答え、チノの方を見る。

「べ、別に怖くないですー!」

「まあいいよ!とりあえずくじ引こー!」

「良くないだろ!」

強引に物事を進めるココアにリゼがツツコミを入れる。

まずはリゼから——黄色。

次にチノ——青色。

そして悠。

「青来い！青！」

「くらー！」

リゼに軽く叩かれる。いつも悠の問題発言にツツコミを入れるのはリゼだ。

——結果は赤色。

「なん……だと……」

悠の次はシャロ——黄色！

「やったわー!!リゼ先輩と同じ!!」

シャロのテンションがクライマックスに到達する。

シャロの次は千夜——青色。

「と、いうことはココアは自動的に赤になるのか」

「最悪だああああ!!」

リゼがそういうと、悠が悲鳴をあげる。今晚ココアに何されるか——考えただけで恐ろしい。

「ココア、何かされたら言いなさいよ」

シャロがココアに言う。

「いや、なんで一緒に寝る前提なんだ？俺はコテージで——」

「悠くんは女の子に1人で山の夜を過ごさせて言うのね——」

千夜が煽る。

「あーもう！わかったよー！」

半分ヤケクソでココアと一夜を過ごすことになった。

「な、なんかごめんね——？」

「いや、気にするな。そもそも俺が男1人で女の子とキャンプに来る時点で間違ってたんだ」

そういえば、こうなることは想定していなかった。幸い——否、誠に遺憾ながら。

「お姉ちゃんは気にしないから、安心してね！」

「いや、俺が気にする」

テントの中の空気が重い。

何か会話しなくては――。

「な、なあココア。来世、千夜になったらチノと一緒に寝られると思う？」

「悠くんが千夜ちゃんに？それはそれで面白そうだね！」

「そっち!？」

テントから顔を出すと、チノと千夜が外にいた。

「どうかしたのか？」

「いいえ――眠れなくて」

「そうか」

そのとき、夜空に流れ星が。

「――願い事……またみんなで、みんなで遊べますように」

チノが立ち上がって流れ星に願う。

意外な一面だ。思わずにやけてしまう。

「あ、あの……流れ星に願い事を言えたら叶うって本で読んだことが

――私だけ？」

「いや、そうじゃない」

恥ずかしそうに震えるチノに、悠が言う。

「また、来れたらいいな――」

もう一度、流れ星が流れた。今度はココアもそれを見たようで

「お姉ちゃんを超えられますように！」

「甘兎庵世界進出！」

騒がしさに、リゼも気がついたようでテントから顔を出した。

「シャロは？」

「な、何もないぞ……」

「何があったんだな」

悠が鋭くそう言うと、リゼは動揺を隠しきれない様子だった。

「私も願いたい事をしよう——今回ハプニングを仕掛けた犯人にちよつと罰が当たりますように」

「根に持つてる?」

「ココアがそう言うと、リゼは「当然!」と答えた。

「でも——コテージを使っていたら、こんな夜空は見られませんでした」

チノがそう言うと、リゼは頷いて

「それもそうか——」

と言った。

第四十話 山の夜は2人きりで

「やめろ！抱きつくなああ!!」

ココアとのテント生活。——さっそく、テント内に悠の悲鳴が響く。

「悠くんもふもふ——」

「マジでこうなるとは思わなかったぞー!」

ココア眠りについて数分。悠はチノのクロスワードを解いていた。

しかし、すぐにココアが悠をもふもふし始める。

「離せ！暑い！ていうか男に気安く抱きつくな!」

「ん……」

ココアがやつと目を覚ましたようだ。

「どうしたの？悠くん……」

「どうしたの？じゃないだろ！抱きつくな!」

「ごめんごめん、もふもふ成分が足りなくて」

「ちよつと何言ってるのかわかんない」

もふもふ成分とはいったい——そうツツコむ余裕はなかった。

「ココアはあれだな、無意識に男を勘違いさせる系女子だな」

「勘違い——?」

悠の発言に首をかしげるココア。

「こういう風に抱きつかれたりすると——とにかく、いろいろ大変なんだよ」

例えばこれがチノだったら間違いなく壊れているだろう。

——また問題発言をしてしまったが、脳内なのでツツコミを入れる人はいない。

「——あつ、ごめん!でも、悠くんなら別にいいよ……」

「——は?」

やつとわかったか——と思いきや衝撃の発言。

思わず顔が熱くなる。

「なんなら、今からしてもいいよー！」

「——」
悠は展開の早さに啞然として言葉が発せない。

「いいのか……？」

「お姉ちゃんに遠慮しなくていいんだよ？」

「じゃあ——いや、ダメだダメだ！そういうことは本当に好きな人とやらなくちゃな」

「どういうこと？私はいつもやってるよ？」

「うそだろお前——」

何か、話が噛み合っていないような気がする。

「ち、違うの！私は悠くんにもふもふされてもいいって話を——」

「ちよつと期待しちやっただろ！そういうのはやめてくれ！」

ようやくココアが自分が何を言っているのか気がついた。

「ごめんね！——つて、ちよつと期待してたんだ」

この時、お互い顔が真っ赤だったことを当事者以外は知らない。

「ていうか、もふもふはしていいの？」

「いいよ？」

「——遠慮しとく」

「なんで!？」

このタイミングでココアをもふもふしたら何か崩れそうな予感がする。

翌朝。

「ココアさん、無事でしたか」

チノが安否確認に来る。

「す、少しは俺の心配もしてくれ——」

「どうしたんですか悠さん！服がぐちゃぐちゃです！」

「何!? やっぱりココアに手を出したのか! 悠!」

騒ぎを聞きつけてリゼがやってくる。

「いや、むしろ俺が手を出された側だぞリゼ——」

あのあと、しばらくはお互い恥ずかしくなって意識していたが、いつの間にかまたココアは悠をもふもふし始めた。

悠も疲れて無抵抗のまま寝てしまい、今にあたる。

「ゆ、悠くん——その、昨日はごめんね……」

「き、気にすんな——俺も疲れて抵抗しなかったのが悪かった」

「何があった!?!」

おそらく、またリゼの誤解を招いたが、正直それを訂正する体力が残っていない。

「チノって、ココアと寝たことあるのか? よく耐えられたな——俺はあと少しで死ぬところだったぞ」

「しっかりとしてください悠さん——」

チノに腕を掴まれ、立ち上がる。

なんだかんだカオスなキャンプだったが——楽しかったので良いでしょう。

一行は、ティッピーや里恵が待つラビットハウスへ出発した。

第四十一話 チノは写真家

「キャンプに行った時の写真をお見せしまーす！」

ココアが自慢げに写真を見せる。

キャンプの翌日。いつも通りラビットハウスで働く。

「こんなに撮ってたのか……」

リゼが驚愕する。

「すごく綺麗に撮れてる〜！」

「撮るの上手ね」

千夜とシャロが褒めると、ココアは誇らしげに

「でしょ〜！さすが私の妹！」

「お前が撮ったんじゃないのかよ」

撮った写真を漁ると、ココアの写真が一枚出てきた。

——雰囲気が大人っぽい。

「この素敵なお嬢さんは誰かな——？」

ココアが首を傾げている。どうやら本当に自分の写真だと認識していないようだ。

「何言ってるんだ、お前だぞ」

「これが私!?!Me!?!」

「なぜ英語——」

リゼたちがこの写真を褒めると、チノは嬉しそうに「奇跡の一枚です」と言った。

「ちよつとみんなー!?!」

ココアは納得していないようだが。

「テーマは自然体です」

そう言いながら、チノはカメラを向ける。どうやらキャンプの時に来ハマったようだ。

「チノちゃん！ポーズ入れたほうがたのしいよ!!」

ココアが千夜とシャロを巻き込んでいうが、チノは頬を膨らませ

る。

チノは、千夜とシャロに「おしゃべりしているところを撮らせてください」と申し出る。

——チノが撮る写真にはココアが見切れている。チノはそれが気に入らなかつたのか、

「どうして邪魔するんですか！」

「仕事してただけなのに怒られた!？」

その後、みんなで遠近法を利用したトリック写真を撮って遊んでいると、突然シャロが叫んだ。

「あー!もうバイトの時間!」

「大丈夫ですか、シャロさん」

「——最近、時間を忘れちゃうのよ」

シャロがそう言うと、ココアは目をキラキラさせ、悠はジト目で言う。

「それはどういうことかな——?」

「——告白?」

「し、知らないわよ!」

シャロが店を飛び出した。

「ココアさんが逃がしました——もう少しだったのに……」

チノがボソツと呟いたのを、ココアとリゼと悠は聞き漏らさなかつた。

「そういえば、なんで自然体にこだわるんだ?」

悠が尋ねると、ココアとリゼはチノにじわりじわりと忍び寄り、追いつめる。

チノが不意打ちでシャッターを切った。

「変な顔撮られたああ!消してくれ!」

リゼがそういうと、チノは「いきなりキメ顔できるなんて——」とココアに呆れる。

「さあ、そろそろ店の掃除するぞ」

悠がそういうと、ココアは腕の上に伸ばしながら

「楽しかったキャンプも終わって、私も1人の労働者に戻っていくよ」

「お前寝てるだけだろ」

「お前が労働を語るか」

悠とティツピーがつつこむ。

「どうしたんだ？」

チノの部屋に呼ばれた。

「どうして、ココアさんが関わると面白写真になってしまっうんでしょ
うか——」

「あいつが面白いやつだからじゃね？」

悠が適当に答えると、チノは少し怒った顔をして「真面目な話をし
てるんです！」とモカからの手紙を見せた。

「でもこの写真——面白いです。ぶぶっ」

チノは肩を震わせながら笑った。

第四十二話 ココアの相談

その晩、今度はココアに呼び出された。

「なんだ？」

「チノちゃん、私のせいで面白写真ばかりになって——怒ってたよね」

先ほどの会話を聞かれてた。

「チノちゃんの理想はこのお姉さんだよね！」

「それもココアだろ!？」

と悠がツツコミを入れると、ココアは「だって——」と続けた。

「確かにその写真のココアはしっかりして見えるが——」

「私、まだまだだなあ……。全然チノちゃんに相応しいお姉ちゃんになれてないよね」

ココアがひどく落ち込んだ様子でいう。

「もつとこの写真みたいに大人っぽかったらなあ……。今の私じゃ、自慢にもならないよね」

ココアは「なーんてね！」と明るくいうが、扉の方から大きなチノの声が聞こえた。

「わ、私はココアさんがこの街に来てよかったと思ってますが！」

「お前も盗み聞きか!？」

思わず悠がツツコミを入れるが、チノは構わずココアにぬいぐるみを投げる。確かあれは、リゼのお手製のぬいぐるみだ。

なんだかんだ持ち歩くほど気に入ってんじゃないか……。

「ココアさんのばか——！」

チノが叫ぶ。

「や、やったな——！」

ココアは近くにあったクツションをチノに投げ返す。

「なんでいつも勝手に決めつけて——！」

チノも負けまいと反撃しようとするが、ココアが泣いていたのに気がつく。

「すみません。そ、そんなに痛かったですか？」

ココアは顔を上げ、「違うよ！」と否定する。

「だって、泣いてるじゃないですか」

ココアは「それはね——」とうつぶいた。

「内緒だよー」

ココアがクツションを投げるが、チノではなく悠に当たった。

「ちよ、まてー！俺関係ないだろー！」

悠が応戦すると、全面戦争になった。

「よっー！」

悠がバータイムとなったラビットハウスに顔を出すと、案の定ティツピーが冷や汗を流していた。

「小僧……さつきはどうしたんじゃ？店が潰れるかと思ったわい……」

「すまんすまん、ココアたちと大乱闘を繰り広げてた」

悠が軽く謝罪する。そしてタカヒロさんと悠が続ける。

「そのうち店が潰れるかもな」

「物理的にも経済的にもな」

店内には誰もいない。

「それは困る！お前ら、もっと頑張ってこの店を繁盛させい！」

「喋るウサギがいる喫茶店として売り出しましよ。流行りますよ」

悠がタカヒロに提案すると、タカヒロは「そうだな」と笑いながら
「いが、当のティツピーは

「お前らにわしの気持ちかわかるかー!!」

と拒否した。

翌朝。ココアの機嫌が悪かった。

「なんだ、チノと喧嘩でもしたのか？」

ココアは黙ってチノ宛に届いたモカの手紙を見せた。

悠は全てを察した。

「なるほどな。内緒でチノに手紙を送ってきたから嫉妬したんだな」

「1ヶ月、お姉ちゃんとは文通しない！」

ココアがきつぱりという。

「今頃モカさん泣いてるだろうな……」

悠の言う通り、モカが実家で大泣きしていたのは言うまでもない。

第四十三話 マヤのホラー映画

ある日の休日。またチノと悠の部屋でジグゾーパズルで遊んでいた。

「ほぼ完成までできたな！しかし、疲れたわ——」

「そうですね……」

気がつけば、いつもならとつくに布団に入っている時間になっていた。

ココアと里恵は途中まで手伝ってくれていたが、すでに夢の中。

「コーヒー、淹れますか？」

「ああ、手伝うよ」

チノとダイニングに向かう。

「ココアはいまだにコーヒーの違いを当てられないのか？」

「はい——。全く、困ったものです」

チノが呆れた様子でいう。悠もそれには「うんうん」と頷く。

「町の国際バリスタ弁護士で小説も書くパン職人への道はまだまだだな」

「夢が多すぎます」

悠がそういうと、チノはクスツと笑ってそう言った。

「そういえば、この前マヤさんに映画を借りたんです。よかつたら見ませんか？」

「ああ、俺の部屋はココアと里恵が寝てるから、チノの部屋でみよう」

「はい——」

チノは少し嬉しそうな顔で、コーヒーを部屋まで運んだ。

「3本あるんですが、どれにしましょうか」

チノがマヤから借りてきたという映画を並べる。

特撮、アクション、ホラー——マヤの性格がよくわかる。

「よし、ホラーだな」

「そんな！寝られなくなります！」

「ふーん……チノってホラー映画見たら寝られないんだ……」

悠がジト目で煽ると、チノはすぐに「し、仕方ありませんね——」と意地を張る。

「今日のところはその挑発に乗って、ホラー映画見てあげます！」

ホラー映画を再生。

序盤はどちらかというところ「意味がわかると怖い話」に似ているような雰囲気、細かいところを見なければ怖くない話だった。

が、中盤から徐々にホラー要素が強くなっていき、チノの顔も徐々に怯えていく。

「怖いのか？」

「だ、大丈夫です！」

「手、震えてるぞ」

悠は意地を張るチノをさらに煽る。

「怖いなら特別に手を握ってあげてもいいですよ！」

「そりゃこつちのセリフだ！——ああ、じゃあ遠慮なく！」

「っ、冷たい……」

そういえば、さつきコーヒーを入れているときにこぼしてしまい、手を洗っていた。

これを逆手にさらにビビらせる。

「そりゃあな、だって俺——ゾンビだもの」

「——」

「チノ？おい、冗談だぞ！しっかりしろ」

さすがにやりすぎた。

「まったく、本当にしようがない悠さんですね」

「ごめんって」

少し怒っているようだが、チノは手を握ったままだ。

「ほら、もう少して終わるぞ」

「た、たいしたことない映画ですね」

「強がるなよ、肩震えてるぞ」

先ほどよりエスカレートしている。

「さ、最近、肩が凝ってしまつて」

「——いや、その言い訳はちよつと無理があるかと」

「で、ですよね……」

ついに観念したようだ。

「やつと終わりました……」

拷問から解放されたような顔でチノが言う。

「ああ、だな。もう一回見るか？」

「からかわないでください。もう寝ますよー！」

「そうだな。おやすみ」

悠が部屋から出て行くこうとすると、チノが裾を引っ張る。

「な、なんだよ。ちよつとだけキyunとしちやっただろ！」

「そ、その——今夜だけ……」

チノがとても小さな声で言う。

「なんだ？ すまん、聞こえなかつたぞ」

別におちよくっているのではなく、本当に聞こえなかつた。

「ですから！ 今夜だけ一緒に寝てほしい——寝てもいいですよつて言つたんです！」

「——はあ!!? いや言い直しても意味ないからな!？」

悠が驚きのあまり大声を出してしまう。

「静かにしてください。皆さんが起きたらどうするんですか」

「あ、ああ……。俺が総理大臣だったらマヤは国民栄誉賞だな……」

悠は感動のあまり涙を流すと、チノは

「悠さんも怖いんですか？」

と言う。

「いや、感動の涙だ。まさかチノからそんな提案を——」

「ち、違います！ 調子に乗らないでください、今日だけですよー！」

「まあいい、俺は床で寝るから、あんまり気にすんなよ。俺は超気にしてるけど」

悠がそう言うと、チノは悪いから、悠の方がベッドで寝るべきだと言った。

悠はチノがベッドで寝るべきだ、と説得するが、それでは埒が明かないのでじゃんけんで決めることに。

「な、なあ——一緒に寝るといふ選択肢は」

「な、な……そんな！」

「冗談だ、ほらじゃんけんするぞ」

「冗談だ」と言いつつ内心かなりショックを受けている。

じゃんけんの結果、悠が勝ったので悠がベッドで寝ることになった。

第四十四話 ラビットハウスで事案発生!?

珍しく早起きしたココアは、チノの部屋に向かった。

「よーし！お姉ちゃんとしてチノちゃんを起こすよ！」

チノの部屋の扉を開けた。

「チーノーちゃん！朝だよー！——ヴェアアアアアア!!」

朝のラビットハウスにココアの奇声が響いた。

「なに!?!どうしたのココアちゃん！」

ココアの奇声を聞きつけ、里恵が駆けつけた。

「こ、これは——！」

駆けつけてきた里恵は驚愕する。

なんと、チノと悠が同じベッドで、しかもチノが悠の腕に抱きつく形で寝ていたのだ。

「ココアさん……?どうしたんですか、朝から——」

チノが目を覚ます。

「チ、チノちゃん……ごめん！お姉ちゃんは気にしないから、ごゆつくり——」

「えっ!?!」

チノが困惑すると、里恵がこう続ける。

「チノちゃん、お兄ちゃんは結構アレですけど、きっと幸せにしてくださいませよ」

「へっ!?!」

部屋の扉がゆっくりと閉められた。

チノは困惑したまま、隣を見るとぐっすりと眠っている悠の姿が。

——チノは、ようやく事態の重さに気がつく。

「悠?どうしたんだ、なんかみんなの様子がおかしいぞ」

事情を知らないリゼが効いてくる。

「はは……何もないよ。至って平和だ」

悠は笑ってごまかす。

ココアとチノと悠は、気まづくて黙っている。

「知ってるか悠、ココアが静かな時は何か異変が起きた時だ。さあ、言ってみろ」

「いや、実は昨日チノと——」

悠が話そうとすると、チノが慌てて補足する。

「ち、違うんですリゼさん！ただその……成り行き上そうなたてしまったというか」

「な!？」

チノの誤解を招く発言にリゼが顔を赤くする。——こいついつも勘違いしやがって……。

「その、ココアさんと里恵さんに見られてしまった」

「な、なるほど——で、でも仕方ないよな！お互いそういう年頃なんだから」

「お前もほとんど歳変わらないだろ……」

悠の冷静なツツコミに、リゼが「う、うるさい！上司に口を聞く時は言葉の最後にサーをつける！」と怒鳴った。

「私が誘ったんです！ですから私が責任を取ります!!」

チノの叫びに、リゼは今にも火が出そうなほど顔を赤らめている。

「そ、そうか——いや、悠も少しは……って倒れてる！しっかりしろ！」

「す、すまん——つい妄想してしまっ——」

ラビットハウス内は大パニックだ。

「なんだ、夜遅くまでホラー映画を見て、それで——」

「にしても悠くん、チノちゃんをいじめちゃダメだよ！」

「最近、チノが感情表現豊かになっていじりがいが出てきたんだよ」「男子が女子にいたずらするのって、やっぱり好きだから？」

ココアがタダでさえガソリンを撒いたような状態に爆弾を投下する。

ラビットハウス内が騒然とする。と言っても相変わらず客はいないが。

当事者のチノは、知らん顔してコーヒーを入れているが顔が赤い。さつきからすごい量産している――。

「チノちゃんのこと、好きなのかな〜?」

ココアが悪魔に見える。

「――好きだよ」

そう真顔で言うのと、向こうの方でカップが割れる音がした。

「チノは理想のタイプだ!」

さらにそう付け加えると、今度は向こうの方から「やめなさい!こちらチノ!」とティツピーの叫び声が。

チラツと見てみると、チノがティツピーを押しつぶそうとしている。

「「わ、わかりやすい――」」

ココアとリゼと悠はハモった。

「ほら、いじりがあるだろ?」

悠がそう言うのと、向こうからティツピーが飛んできた。

第四十五話 もふもふな大喧嘩

「でもなんでこうなったんだ？悠がベッドで、チノが床で寝てたんだろう？」

「それが——」

そのあとのことを思い出すと、ニヤニヤしてしまう。

「にやけるな、真面目にやれ！」

リゼに怒鳴られ、悠は軽く謝ってから続ける。

「俺もよく覚えてないんだけど、あのあと雨風強くなって、雷も鳴り始めてたんだ。そしたらチノが——」

「ちよつと待つてください。私は別に悠さんが寝てるから少しくらい大丈夫だと思つてベッドになんか入つていません」

チノが慌ててこちらにやってきて、そう告げた。

「いや、普通に潜り込んできただろ!？」

そう、昨夜は——。

「じゃ、おやすみ」

「はい、おやすみなさい」

お互い、布団をかぶつてこう言った。この時はまだ一緒ではない。しばらくして、雨風がラビットハウスを襲う。その途中から雷まで鳴るようになった。

「——悠さん、起きてますか？」

「——」

悠は、わずかに雨風や雷の音が耳に入っているがほとんど寝ている状態。

「——なんで先に寝てしまうんですか」

チノが頬を膨らませて言う。

そして雷がいつそう激しくなった。

「ひっ——」

チノが怯えた目で悠を見ると、悠はすでにぐっすりと眠っていた。

「す、少しぐらいなら大丈夫でしょうか——」

チノが悠の布団をめくる。

——雷が止んだら布団を出よう、雷が止んだら布団を出よう、そうすればバレない！

そう思っていたチノだったが、そのまま眠りについてしまった。

「でも、昨日だけですからね。もう一緒に寝てあげませんよ」

「へえ……」

チノがそう言うと、悠はジト目で意味深に煽る。

「な、なんですか」

「昨日はあれだけ俺と一緒に寝たがっていたのに？」

「そんなはずないじゃないですか！」

無論、これはからかうための嘘ではなく本当のことである。

「——なんかあったかい何か……ってチノ!？」

夜中、悠が目を覚ますとチノが横にいた。片腕を抱きしめている。

「な、なぜここに——まさか——夜這い？」

やはり、問題発言してもつつこむ人がいないから少し味気ない。

「俺はベッドに連れ込んだ記憶がないんだが……無意識のうちになんてことを」

まだ事情を知らない悠は、なぜか自分に非があるような気がして自分を責め始める。

チノの方を見ると、とても嬉しそうに眠っている。

「——明日も明後日も、ずっと一緒に寝てあげてもいいですよ……」
「はっ。」

チノがボソツと言った。

「お、おいチノ？」

「——」

寝言だったようだ。なんて夢を見てるんだ……。

「——チノって、本当にもふもふするんだな、ココア」

少しだけ寝ているチノにもふもふして、ココアがなぜチノをもふもふしたがるのか理解した。

「別に1日くらい一緒に寝てもいいよな——」

そう呟いて、悠は目を閉じた。

「昨日、チノが自ら『一緒に寝てもいいですよ』って言ったじゃないか！」

悠が若干嬉しさを隠せない様子でそういうと、チノは恥ずかしさが限界点を超えて、部屋に閉じこもった。

「ゆ、悠さんなんて——大嫌いです!!」

そういつてチノは部屋の扉を閉めた。

第四十六話 大喧嘩はお嬢様の力で

「お、おいリゼ——いまチノが」

「た、たしかにお前のごこと大嫌いって言ったが、本心じゃないだろ——
—多分」

「大丈夫！お姉ちゃんに任せなさい！——チノちゃん、一緒にパン焼
こう？」

リゼが悠を慰め、ココアがチノを部屋から出そうとするが——。

「嫌です！ココアさんも嫌いです！」

「そんなあ！なんで私も!?!」

ココアが涙目になる。

「泣くな！俺が弟になってやるから」

慌てて悠がココアをなだめる。

「ほんと!?!いいの?」

ココアの顔が一気に明るくなる。

すると部屋の方からチノの声が聞こえた。

「ココアさんは年下なら誰でもいいんですね」

「ヤキモチ妬くならでてこいよ」

リゼが冷静にそう言うと、チノは黙った。

「な、なあチノ——謝るから出てきてくれよ……」

悠が扉をノックしながらそういうと、チノは

「許しません！」

と言った。

「リゼ！もういつそのこと俺を殺ってくれ！」

「できるか！」

悠がリゼにしがみついて泣きわめく。

「ならナイフだ！ナイフを出せ！ここで切腹する！」

「やめろ！お前は武士か何かか!?!」

リゼが悠を突き放して、こう続ける。

「ちよつとした喧嘩だろ。そう深刻になるな。落ち着いたら出てくる！」

リゼはそう言って、ココアと悠を店に戻した。

「み、店の空気が重い——」

今度はリゼが呟いた。

無理もない、チノに大嫌いと言われた悠は店の隅っこで小さくなっている。

「ココアも嫌いと言われてしまい、落ち込んでいる。なんとか明るくしなくては——」

リゼはスマートフォンを取り出して、シャロに電話した。

「す、すまない。急に呼び出して」

「い、いえ！今日はちょうどバイト休みでしたので！——どうかしたんですか？」

「実は——」

リゼはシャロに事情を話すと、シャロは「それなら任せてください！」とチノの部屋の前に向かった。

「チノちゃん、よかったら私と遊ばない？」

「——シャロさん？いいですよ」

シャロは、チノの部屋の潜入に成功した。

「シャロ、まるで潜入に特化した特殊部隊のようだ……」

リゼのつぶやきは誰にも届かない。

「心にもないことを言ってしまった……」

「誰にでもそう言う時はあるものよ」

「ですが、あそこまで言ってしまった以上、どう謝ればいいのか——」
「そうね——」

シャロは深く考え込んでから、チノにアドバイスを話した。

「チノが、俺のこと大嫌いだって——もう一生口聞いてもらえない!」
「チノちゃんが、私のこと嫌いって——もう一緒にパン焼いてくれない!」

「病むな!いまシャロが対応中だ!お前らは仕事しろ!」

リゼがそう怒鳴ると、悠はココアの元にコーヒーカップを持ってきた。

「ほら、とりあえずコーヒーでも飲もうぜ……」

「うん、そうだね……」

カップには空気しか入っていない。

「これは、相当重症だな——」

リゼは、やれやれと呆れた。

第四十七話 お姉ちゃんって呼んで！

シャロは、素直に謝るのが一番いいとチノにアドバイスした。
「ですが——」

だがチノは納得いかない様子。

「でも、このままじゃダメですよね」

「そうよ。2人とも落ち込んでるし、特に悠なんて悪かったって反省してるわ」

「やってみます！」

チノが部屋を出た。

「あ、あの……」

「チノちゃん！」

「チノ——」

店内にチノが顔を出すと、ココアと悠が反応する。

「先ほどは、言い過ぎました——」

「俺の方こそ……」

「ココアさんも、すいませんでした」

「お姉ちゃんって呼んでくれたら、許す！」

すぐにココアは調子にのる。

「——呼びません」

「——あれ？」

「やれやれ……」

悠は呆れる。ココアが捨て犬のような目でこちらをみてる。

「本当に年下なら誰でもいいのか、ココア——」

「違うよ！結局2人はどんな関係だったのかなーって」

「ココアお姉ちゃんって呼んで欲しかったんじゃないのか？」

悠がそう言くと、ココアは目を輝かせて「呼んでくれるの!?!」と寄ってくる。

「——呼ばないけど」

悠が一旦上げてから落とすスタイルだ。

「なんだ、前から2人とっても仲良くしてたから、てっきり付き合ってるのかと」

「ココア、冗談がきついぞ。チノはタイプだが恋愛対象には——多分ならない」

「そんなに子供っぽいですか?」

「もはやチノが理想のタイプであることを否定するどころか真顔で公表してしまう。」

チノは、落ち込んだ様子で言う。

「どうしたら、大人になれるでしょうか」

「んー……」

悠が考え込むと、ココアが「大丈夫!」とチノに言った。——嫌な予感がする。

「大人の階段を登ればいいんだよー!」

「大人の階段?」

「昨日の一件があつたせいとか、意味深に聞こえてしまう——」

「というか、どこでそんな単語覚えてきたんだ。とっててしまう。そもそも答えになってないし。」

翌日。

「チノ、セロリもだめなのか?」

「うう……」

「チノちゃん、セロリも食べなきゃだめだよ?」

「そう言うココアさんだってトマトジュース一口も飲んでませんよね」

朝食をまともに食べているのは悠と里恵だけだ。ココアとチノは何かしら残そうとする。

「はあ……」

ティップピーも思わずため息。

「そういえば、チノってティツピー頭に乗せてるけど、身長伸びるのか？」

「えっ——」

開店準備中、悠がチノにそう言うと、チノは「まさか、ティツピーが原因なのでは」とティツピーに痛い視線をぶつける。

「やっぱり、好き嫌いしてたらだめなんでしょうか」

「まあ、栄養は偏るな」

悠がそう答えると、チノはセロリを持ってくる。

「そのまま食べるのか!?!」

思わずリゼがツツコミを入れる。

「やっぱり、これぐらいししないと——」

「よーし！私もトマトジュース飲むよ！」

チノがセロリを食べようとすると、それに負けまいとココアもトマトジュースを持ってくる。

「うっ——」

「見事に撃沈したな……」

ココアとチノがカウンター席に倒れた。

第四十八話 ファツションショー

「チノは大きくなりたいたのか」

「はい。どうしたらいいんでしょうか」

「たくさん寝てみたらどうだろう」——そう言おうとしたが、リゼが「最近寝不足で……」とよくあくびをしているのを思い出した。

「ジャンプしたら身長が伸びるって聞いたな」

悠がそう言うと、チノは「ジャンプ……」と呟いた。

続いてリゼが「声を大きく出したらデカく見えるんじゃないか？」と提案する。

「ほら、行くぞー！——いらっしやいませ!!」

リゼが客のいない店内で叫ぶ。

「い、いらっしや……」

「声が小さい！——いらっしやいませ!!」

「い、いら……」

「いらっしやいませ!!」

だんだん店内がうるさくなってきた。

「す、すごい、チノがイライラしてるぞ」

「珍しい！」

大声を出す練習をしているリゼとチノを見て、悠とココアが言う。

「っしやあせえー!!」

「巻き舌すんな！居酒屋か！」

悠がつっこむ。気がつくのと、店に入ろうとしていた客がドン引きしていた。

「い、いらっしやいませ……」

リゼが恥ずかしそうに言った。

「んー、あとはつま先歩きかな？」

悠がチノにそう言うと、チノは早速つま先で歩くようになった。

「景色が高くて新鮮じやのう」

ティツピーがそう呟いた。

「チノって、結局ココアの学校に行くのか？それともリゼの学校に行くのか？」

また客がいなくなり、暇になった悠はチノに話を振る。

「わかりませんが、普通ならココアさんの学校に行くと思います」

「だよな」

「チノちゃんにはセーラー服がお似合いだよ！」

ココアがそう勧めると、リゼが「いや、ブレザーも案外似合うかもしれないぞ」と対抗。

「じゃあ、試着してみましょー！」

里恵が突然そう言った。普段は家事を担当しているため、ラビットハウスにしているのは珍しい。

里恵がラビットハウスに来ているときは、だいたい悪巧みをするときだ。

里恵の提案により、ココアが

「よし！私の制服、貸してあげるよ！」

とピンク色のセーラー服を差し出した。

「そんな、いいです」

チノは遠慮するが、里恵やココアが半ば強引に着替えさせた。

「なんとということでしょう——!!」

悠がそう言うと、ココアの制服を着たチノが現れた。

悠が驚きのあまりジーツと見つめると、

「別に普通です！」

とチノが恥ずかしそうに言った。

「じゃーん！制服交換会だよ！私はチノちゃんの制服着てみましたー！」

ココアがそう言って店の奥から出てくる。——いや、仕事で

すけど。

「そのまま中学校行ってもバレなさそうだな」

「ほんと？じゃあ明日中学校に行くよ！」

「いや、自分の高校通えよ」

悠がおだてると、ココアは調子に乗って中学校に行こうとするが、リゼに止められる。

「どう？お兄ちゃん、チノちゃんかわいいでしょ？」

里恵がそう言うと、悠はもう一度チノを見ると、

「へ、変ですか——？」

「い、いや——何か見てはいけないものを見た気がするう!!」

悠があまりの尊さに店を飛び出す。

「おい！まだ営業中だぞー！」

「やっぱり、変ですよね」

チノが少し落ち込んだ様子でいうと、リゼは

「いや、そういう意味じゃないと思うぞ」

といい、「ブレザー、着てみるか？」と自分の制服を差し出す。

「先ほどは取り乱しました——」

悠が戻ってくる、今度はブカブカのブレザーを着たチノがいた。

「な！」

「変だったら言ってください」

「いや、変じゃないぞ。セーラー服も目が焼けるくらい良かった」

「そ、そうでしたか——」

「ブレザーも、これはリゼのやつか？ブカブカだけどよく似合ってるよ」

「——」

チノは頬を赤くした。

第四十九話 雨宿りはラビットハウスで

「チノちゃんにコーヒー入れてもらってから、すっかりハマっちゃった！なんでかな？」

ある日の朝。ココアはチノとコーヒーを飲みながらそう言った。

「でもココアさんは味の違いがわからないじゃないですか。ただのカフェイン中毒ですよ」

「——中毒扱いされちゃった」

チノが照れ隠しをすると、ココアは苦笑いしてそう言った。

「さあ、開店準備するぞー！」

リゼの呼びかけに、ココアとチノが立ち上がる。

——今日も1日、ラビットハウスでの仕事が始まる。

「す、すごい雨だ」

ラビットハウスでの仕事が終わり、リゼが帰宅しようとする時、警報——否、特別警報クラスの大雨が降っていた。

「大丈夫ですか、リゼさん」

チノが心配そうに尋ねると、リゼはスマートフォンを取り出した。

「大丈夫だ、迎えを呼ぶさ」

「えー！せつかくだからお泊まり会しようよー！」

リゼが電話をかけようとする時、ココアが慌てて引き止める。どうやらリゼに泊まってほしいようだ。

「い、いいの？」

心なしか、少し嬉しそうだ。

「私は構いませんが——」

「ああ、俺も別に……」

チノと悠が承諾すると、ココアは「やったー！」と喜んだ。

「チノの家に泊まるのは、久しぶりだな……」

「前にも泊まったことがあったのか」

「ああ、その時もこんな大雨で——千夜とシャロもいた」

「そうか」

そんな会話をしていると、早速ココアが「よし！まずはお風呂に入ろー！みんなで！」

「それがいい。俺は——部屋でテレビでも見て時間潰してる」

「え？悠くんは入らないの？」

「はあ？お前らが入った後入るぞ。それともなんだ？一緒に入っていいってことか？」

悠がそう言うと、リゼに「良いわけがないだろう！」と叩かれた。

「ああ、そっか！そうだよね！」

——最近、男として見られていないような気がする。

「今日の夜ご飯何にする？」

ココアがお風呂から出てきてそう言う。

なんか、すごく良い匂いがある。——変態的な意味ではなく。

「な、なんかココアの匂いがある……？」

「へっ!?わ、私の匂いって、なに……？」

ココアが顔を真っ赤にさせて言う。別にそういう意味で言ったわけじゃないんだが。

「違う、飲む方のココアだ！」

「入浴剤です。悠さん、意味深なこと言わないでください」

「そうだよお兄ちゃん。チノちゃんの次はココアちゃんを狙ってるの？」

各方面から非難の声が飛んでくる。

「違うわ！——なんだ、入浴剤か……余計なことしやがって」

「今日の夜ご飯、どうする？」

ココアがみんなに聞く。

「すいません、実は、なにもないんです。この後買いに行く予定だったんですが——急に雨が降ってきてしまっって」

チノが申し訳なさそうに言う。

「ええ〜！なにも食べられないの!?!」

ココアがそう言うと、チノは「大丈夫です」と言い、こう続けた。「こんな時のために——」

チノが棚から保存食を取り出す。するとリゼの危ないスイッチが入った。

「レーション!? チノ! お前軍関係者だったのか!？」

チノが取り出したのは、軍人に配給されるような食料だった。

「あと、カップ麺もありました」

「なんと言うことだ! こんなところでレーションが食べれるなんて!」

リゼが興奮を隠しきれない様子で言う。

「じゃあ、レーションはリゼが食べる。俺らは——まあカップ麺に、何か追加すれば良いか」

悠がそう言つて冷蔵庫を開けると、チノの言う通りなにも入っていなかった。

「ほ、本当に空だな」

「すいません……」

「気にするな」

「ふっふっふっ……じゃーん!」

ココアが突然、皆の注目を集める。

「食べれそうな葉っぱを見つけたよー! これを料理してサラダを作ろうよー!」

「——ココアさん、それ、雑草です」

チノが呆れた様子で答えた。

第五十話 みんなで夜ご飯

「レーションってやっぱり美味しいな！」

リゼが嬉しそうに言う。これが女子高校生がレーションを食べた時の感想とは思えない。

「最近のインスタント食品は発達しておるのう」

ティツピーが言う。口調が完全におじいちゃんだ。

「はい。そうですね。でもあまり食べると健康に悪そうです」

チノがティツピーにそう言うが、事情を知らない人から見たら一人芝居をしているようにしか見えない。

「チノの腹話術っておじいちゃんって感じるよなー！」

リゼがそう言うと、チノは少し慌てた様子で

「私のおじいちゃんがモデルです」

と伝える。——実際はモデルというより、本人なんだが。

「チノちゃん——おじいちゃんを亡くしたショックで……」

ココアが憐れむ。確かに、祖父を亡くしたチノが寂しさを紛らわせるためにやっていると考えると——。

「私をお姉ちゃんだと思ってなんでもいつてね」

ココアがいつものようにさういと、チノは「呼びませんし思いません」と否定する。

「ココアさんはココアさんです。——どちらかというと、リゼさんの方が姉っぽいです」

チノがリゼの方を見てさういと、ココアがすかさずリゼに宣戦布告して技を決められる。

「まあさうだな。リゼの方がお姉ちゃんっぽい。——俺的には『頼れる姉貴』って感じだ」

「そ、そうか？」

悠がそういうと、リゼが「照れるな」といいながらレーションを食べる。

「私はココアちゃんみたいなの明るいお姉ちゃんもいいなあ〜」

里恵がそういうと、ココアが涙を流しながら里恵に抱きつく。

「相変わらず情緒が安定しないやつだな……」

「笑ったり泣いたり忙しそうですね」

悠とチノがそう呟いた。

「この麺、意外と美味しいぞ！」

悠がそういうと、里恵が「一口ちょうだい」とねだる。

「いいぞ、ほら、あーん」

「あーん——あ、確かに美味しい」

その様子をチノにじーつと見られていた。

「なんだよ、お前も欲しいのか？」

「い、いえ、そういうわけでは」

チノが目をそらしてそういうが、悠は

「ほら、チノも食べろよ。はい、あーん」

「え、えつと……悠さんは恥ずかしくないんですか」

「いや、別に。慣れてるし」

そう、悠は定期的に里恵にやっているため、あまり恥ずかしさは感じない。

「わ、わかりました——いいですよ。あーん……なかなか美味しいです」

「あ、チノのそれ！前から気になってたんだよ。俺にも一口くれよ」

「うー……一回だけですよ。——はい、あーん」

「あーん——んー、美味しい！」

その光景をココアとリゼが見て思う。

——「何を見せられているんだろう、私たち……」

「はっ！まさか、そうやってお兄ちゃんの座を取ろうとしてるね！悠くん！」

「——は？」

そんなつもりは満更なかったのだが……。

「よーし！私もチノちゃんに『あーん』ってするよ！——チノちゃん、これ食べる？」

「いえ、結構です」

「そんな!!」

あつさり断られたココアは見事に撃沈する。

「つたく、イチヤイチヤしやがって——いま猛烈に射撃場で暴れたい気分だ」

夕食後、悠の部屋にやってきたリゼはそう吐き捨てる。

「まあそう怒るな。明日の朝やってあげるから」

「ち、違う！やって欲しくて言ったんじゃないぞ！」

「はいはい明日ね」

「人の話を聞けー!!」

リゼの叫び声が響いた。

第五十一話 リゼの恋バナ

「悠って、チノと仲いいよな」

「そうか?——まあそうだな」

否定しようと思ったが、否定できないことに気がついた。

「私は、あまり周りと馴染めないことが多いから。そういうの羨ましいよ」

「そうなのか?まあ、お嬢様学校にミリタリー好きの女子なんてお前ぐらいだろうな」

悠が苦笑いしながらそういうと、リゼは深くため息をついて「そうなんだよ」と続けた。

「学校ではあまり友達と話せなくてさ——仲のいいクラスメイトを作るのって難しいな」

「それはわかる。——でもシャロとは仲良いじゃないか」

「シャロは学年も違うし、実は学校ではそこまで話をしないんだ」
「なるほどな」

考えてみれば、リゼに相談されるなんて久しぶりかもしれない。

「思えば、ココアがいなかったら私はボツチだったのかも」

「しかも最初はチノに怯えられてて仲良くなれなかったんだろ。最悪じゃねえか……」

「ああ……」

そして悠はこう続ける。

「でも、意外だな。お前みたいなモテるやつが孤立するなんて。お前のクラスメートの目は節穴なんじゃないか?」

「な、なに!?もしかして私を口説こうとしてるのか!？」

リゼが顔を真っ赤にした。

「口説くつもりはなかったんだが——」

「まあ、うちは女子校だしな。仕方ないさ」

「リゼは女子にモテて、男子からは友達と見られるタイプか——」
悠がそう呟くと、リゼはこちらの方を向いて

「や、やっぱりそう見えるのか？ 私は、恋愛対象にはならないのか」
「なんだよ、そういう目で見て欲しいのか？」

悠がそうリゼを煽ると、リゼは慌てて否定する。

「ち、違うぞ！——ただ、そもそもあまり男子と話したりしないし……」

「まあ女子校ならそれが当たり前なんじゃね？」

「悠は高校に通ってた時、女子と話するタイプだったのか？」

リゼにそう聞かれ、悠は以前のことを思い出す。

基本的に男友達としか遊ばないタイプだった。

「言われてみれば、ここに来る前は男友達ばかりだった——」

「そうか。——私もいつか、誰かに恋してみたいな」

「え？なんて？」

最後の方が聞こえなかったため、聞き返すとリゼが「なんでもない！——とごまかす。」

「逆に聞くけど、リゼは俺のこと、恋愛対象に入るのか？」

悠がそう聞くと、リゼが少し考えて

「そうだな……。基本的には入らないかな？」

「なんだよ基本的につて」

悠が笑うと、リゼもつられて笑う。

「ただ、洋館を探検したときはちよつとドキドキしちゃったけどな！」
「——は!？」

突然のリゼの言葉に悠の顔が熱くなる。リゼも無意識だったのか、しばらくしてから顔を赤くした。

「ち、違う！怖くてドキドキしたって意味だ！」

「へえ、怖かったんだ」

「う、うるさい！」

そういつてリゼがクッションを投げてきた。

「徹底抗戦してやるぜ！」

悠もそういつてクッションを投げ返した。

第五十二話 ババ抜きでチノが壊れた話

その晩、ココアの提案でババ抜きをやることになった。

「負けた人は罰ゲームで早口言葉言ってもらおうよ！」

「こういうのって、だいたいいい出した方が負けるよな」

悠がそうフラグを立てると、ココアが「ふふーん」と続ける。

「私の技術をなめてもらっては困るよ！ババ抜きには自信があるんだ！——お姉ちゃんには勝てなかったけど」

「モカさん相変わらず弱点がないな……」

現時点でジョーカーは悠のところにあつた。

が、すぐにチノに持つて行かれた。

「なっ！」

チノがわかりやすい反応をする。これは——勝てる！

結局残つたのは悠とチノ。

「なんで俺なんだよ！くそ、勝てると思つてたのに」

「私も危なかったな！もう少しで悠くんに負けるところだったよ」

「むう……私絶対に負けません！」

「チノもなかなか負けず嫌いだな……」

「チノちゃん頑張つて！」

一番最初が上がつたのはリゼだった。次に里恵、最後にココア。

あと少しというところでココアに先を越されてしまった。

手札は、こちらが1枚、チノが2枚。つまり、ジョーカーはチノが持っている。

だが、チノには負ける気がしない。なぜなら——。

悠が、トランプを引こうと左のカードに手を差し伸べた。

——チノがピクツと反応する。

今度は右のカードに手を差し伸べると、チノはホツとした顔をする。

——左のカードか。これを引けば勝てる。

だが、なんだかズルをしているような気分だ。ここは教えてあげべきか。

「な、なあチノ……お前が持つてるジョーカーってこちらから見て右のカードだよな？」

「な！——なんで……」

チノがびっくりした様子でそういう。

「顔に出すぎだ。明らかに左のカードを取ろうとすると動揺するし、さすがにわかるぞ」

「そんな……」

チノががつくりと落ち込む。

「でも、どうして教えてくれたんですか、これをとれば勝てるのに——」

「まあそうだけど、それで勝っても嬉しくねえよ」

「——悠さんはお人好しですね」

チノが少しだけニッコリと笑った。

悠は、「だからこうしよう」とチノにカードを床に伏せてシャッフルするよう伝える。

「これでどっちがジョーカーか、俺にもチノにもわからない」

「なるほど——」

「おお！悠、お前がフェアな戦いを申し出るとは」

リゼが驚きの声を上げる。

「超失礼なやつだな、まあリゼが相手だったら問題無用で当たりを引いてるぜ」

「チノちゃんの評価を狙いにいったね、お兄ちゃん」

悠の言葉に、里恵が苦笑いする。

結局悠が引いたのは当たりのカード。つまり、チノが負けた。

「むう——なんだかとても悔しいです」

「よし！早口言葉はチノで決定だな。何を言ってもらおうか」

リゼがそういうと、ココアが「隣の客はよく柿食う客だ」と定番の早口言葉を指定する。

「い、いきます——隣の客はよく客食う客だ……あれ？——隣の柿はよく客食う柿だ……なんででしょう、言えませんか」

「あれ、もしかしてチノってサイコパス？」

「客食う柿って——」

チノの早口言葉に思わず悠とリゼがツツコミを入れてしまう。

「もう一度言います！——隣の客はときかききゆうきやくきや」

「もはや何を言ってるのかわからん」

悠が冷静なツツコミを入れる隣で、ココアが目をキラキラさせていう。

「かつ……かわいい！チノちゃんかわいい！」

「早口言葉の感想としてはどうなんだ」

チノに抱きつくココアに、リゼがそうつつこむ。

「あの、言えてませんでしたか？」

「ああ——結構ホラーな感じになつてたぞ。——でもまあ、ココアの言う通り言えてなくてかわいいとは思ったが」

「は、恥ずかしいこと言わないでください！ほら、もう寝ますよー！」

チノがそう言つて部屋の電気を消した。

第五十三話 ココアとデート!?

今日は休日だ。チノは朝からボトルシップを作ると部屋に閉じこもった。

すると、やはりココアが悠の部屋にやってくる。

「悠くんーあーそーぼー!」

このセリフは赤紙と同じ。この声がかかってきたら逃げることはできない。

逃げるとココアが「追いかけてこだね!負けないよ!」と追跡してくるし、隠れると「かくれんぼだね!」と探してくる。

つまり、行動を起こしたら負けなのだ。

「」

「悠くん?遊ぼうよ!」

「」

仏にでもなったかのような顔でベッドに横たわると、ココアがその上に乗ってきた。

「どうしたの?遊びたくないの?」

「」

「私のこと、嫌いになった?」

「なんでそうなるんだよ!」

思わず声が出てしまった。そして悠はこの状況へつつこむ。

「なんでお前が上に重なってんだよ!早く降りろ!」

床ドン——ならぬベッドンの状態になっていた。

「ごめんごめん。どこか出かけようよ！いい天気だよ！」
「はいはいわかった、遊び相手すりゃいいんだろ！」

悠は諦めた様子でココアの後について部屋を出て行った。

「さあ、どこ行く!?!」

「決めてなかったのか。そうだな……」

悠が考え込むと、ココアはすぐに「うさぎだー！」と野良うさぎを追
追いだめた。

「さて、おいココアア！」

悠がココアを追うが、ココアはものすごい勢いで野良うさぎを追
う。

結局、自然公園のところまで来てしまった。

「はあはあ……ココア、ちよつと待て……」

「ん〜もふもふ具合がたまらないね〜」

ココアは満足げに野良うさぎを確保してもふもふする。

——なんでこれほど走ってバテないんだこいつは。

「悠くん?どうしたの、息が上がってるよ」

「どうもこうも、お前がものすごい勢いでうさぎを追うから——」

「悠くんももふもふして欲しいの?お姉ちゃんに任せなさい!」

「そういうことじゃない!——ちよ、くるなあ!」

ココアがじわりじわりと歩み寄ってくる。そして悠に抱きついて

「ん〜、悠くんもチノちゃんほどじゃないけどもふもふするね〜」

「抱きつくな！暑い！恥ずかしい！」
「そ、そうだよね、ごめん」

公園にいる人たちからの視線を感じる。

「青春ね……」

「朝からごちそうさま」

「若いつていいわね……」

といろんなところから聞こえてくる。

「はあ、ココアと遊ぶとろくなことにならんわ」

「えへへ、つい——」

「えへへじゃねえよ！ああもう疲れた」

ココアを追うのに全ての体力を使い果たした悠はベンチに座る。

「あ！みて！ジェラート売ってるよ！」

またココアが走り出す。

「勘弁してくれ！ココア！」

そう叫んで悠もなんとかココアについていく。

「あれ？シャロちゃん！ここでもバイトしてたの？」

「ココア？それに悠！どうしたの2人で」

「えへへ、いま悠くんとデートしてるんだ」

「デートというより拷問だけだな」

「そ、そう……」

シャロはそう言って、悠の耳元に近寄る。

「このほか！ココアとデートなんて、チノちゃんに見つかったらどうするの？」

「チノ、嫉妬してくれんのか？それは嬉しいな——」

「シヨックで寝込んだじゃったらどうするのよ……」

「いや、チノに限ってそれは——あるかも」

「チノちゃんがどうしたの？」

シャロとヒソヒソ話をしていると、ココアが間に入ってくる。

「な、なんでもないわよ！ジェラート買いに来たんでしょ！どれがいい？」

「えーつとねー！あ、これがいい！」

このまま1日ココアのデートしてしまったら、体は疲れ果て、さらにチノに嫌われ精神的にも終わる。

いったいどうなってしまふのやら……。ココアとのデートはまだまだ続く。

第五十四話 マメ隊に会って、リゼに会って

ジェラートを食べた後、またココアは野良うさぎをもふもふする。

「この街ってうさぎがたくさんいていいよね！」

「そうだな」

ココアは楽しそうに言うが、悠はすでに体力を消耗している。
お昼時までまだ時間がある。いったいどうすれば――。

「そういえば、ココアって末っ子なのか」

「違うよ」

「えっ？ いや、モカさんと、兄が2人いるんだろ？」

悠が驚いて言うと、ココアは満面の笑みを浮かべて

「今は悠くんたちが弟になったから、私はもう末っ子じゃないんだ〜
！」

「お、おう、そういえばココアはお姉ちゃんだったな」

「あれ？ 忘れられてた!？」

「俺より年上なのに妹感しかشかないからなく……」

「そんなあ！」

悠がそう言うと、ココアがガクツと落ち込む。

「そんなにお姉ちゃんになりたいのか」

「うん！」

「じゃあ今日1日お前をお姉ちゃんって――」

「呼んでくれるの!!? やったあ!!」

「呼ばないけど、遊んでやるよ」

「呼んでよー！」

やはり、ココアをからかうのが一番面白い。そう思った悠だった。

「あれって、ココアと悠じゃね？」

勉強道具を抱えたマヤとメグに見つかった。

「おい！ココア！悠！何してんだー？」

「マヤとメグか。なぜここに」

「2人ともこんにちは〜！これから図書館で勉強しようと思つて！」

メグが悠にそう言うのと、「そつちはなにしてるの？」と逆に聞かれてしまった。

「今日は悠さんとデートして——」

「デート!?悠、チノは!?」

「チノちゃんにはもう飽きたの?」

「あのさ、なんで俺とチノがそういう関係ってことが常識みたいになつてんの!?!」

マヤとメグの発言に、思わず悠がそう叫ぶ。

「なるほど、チノが正室でココアが側室ってことか〜」

「悪意しかない言い方はよせ。ただ遊んでるだけだ。主にココアが」
「正室——?」

ココアはマヤの発言の意味がわかっていない様子。

その後、マヤとメグと別れ、ココアと街中を散歩することに。

「あーリゼちゃんー！」

市場でリゼと出会った。

「ココアと悠じゃないか。買い物か？こんな人多いのによく見つけたな」

リゼが感心してそういうと、ココアは

「リゼちゃんは硝煙の危険な香りがするからすぐわかったよ！」

とボケるが、リゼはそれを真に受けたらしく、服の匂いを確認する。

「ココアの冗談だから気にするなよ」

悠がそういうと、リゼは

「なんだ……今朝あんなことがあったからつい」

と意味ありげに言った。——いったい何があったんだ。

「何かあったの？戦争？いいよ！付き合うよ！」

「違う違う、射撃の練習はしたが戦争はしていない！」
「射撃の練習してたのか……」

もはやリゼを「普通の女の子」としてみるのは難しい。

「2人の方こそどうしたんだ？こんなところで」

「なんででしょうか！」

ココアがリゼにクイズを出す。

リゼは「そうだな」と少し悩むと、こう答えた。

「お使いで買い物に来たんだろ！」

「ぶー！違うよ、今日は悠くんとデートする日なの！」

「デート!?!」

リゼが明らかに動揺する。

「悠、言いたくはないが——浮気は良くないな」

「違うって……。あーもう！1回お前らを全員集めて1人ずつ丁寧に説明する必要があるな！」

悠がそう叫んだ。

第五十五話 甘兎庵で遭遇!

時計の短い針が上を向く時間になってきた。

「ねえ、甘兎庵でお昼食べようよ」

「ああ、そうだな——。千夜とお前を会わせるのは少し嫌だけど」

「おやおや? お姉ちゃんにヤキモチ!」

「そういう意味じゃない。お前ら2人を会わせるとろくなことにならないって意味だ」

とは言ったものの、結局甘兎庵に行くことに。

「ココアちゃんに悠くん、いらっしやい!」

千夜が出迎えてくれた。相変わらずの和服姿——ではない。

「あれ? 千夜ちゃん! その制服いいね!」

「そう? ありがとう。実は今日からレトロモダン月間なの」

「そうなんだ〜! ラビットハウスも期間限定で制服変えたいね! 悠くん」

「なんで俺に振るんだよ——帰ったらチノに言っておくか」

千夜に席に案内された。が——。

「あれ!? チノちゃん!? なんでここに?」

「い、いえ、千夜さんが制服を変えたっていうので——気になってしまった」

チノと遭遇してしまった。シャロの一言が脳裏に浮かぶ。

「そっか。ねえ、ラビットハウスも期間限定で何かやってみない?」

「そうですね……」

——「チノに助けてもらおう。ココアとのデート（強制）に疲れてしまった。チノに便乗して帰ろう」

そう思っていたが、チノの一言でデート続行が確定した。

「ところで、お2人は何をしていたんです?」

「悠くんとデートしてたの!」

「デート……ですか。すみません、お邪魔してしまいました。私はこれで帰りますね」

「違どうぞチノ、ココアの冗談だ」

慌ててチノを引き止めるが、チノは

「いえ、気にしないでください。ちょうど食べ終わったところですから。——2人で楽しく過ごしてくださいね」

「チノちゃんは自ら手を引くタイプね——はい、ちょうどいただきました。ありがとうございます!」

千夜がそう言つてチノから代金を受け取る。チノが店から出て行つてしまった。

「待ってくれ!チノー!!」

悠がそう叫ぶが、返事はない。

「おもてなしのアイスカップチーノです。最近暑いでしょ?試しに作つてみたの」

「はは、今のあいつにそっくりだ——」

この光景、何処かで見たとあるような……と思いつつ口に入れ

る。

「千夜ちゃん！これとっても美味しいよ！」

「そう？ありがとう！本格的に商品化しちゃう？」

千夜はそう言うのと、こちらに注文を尋ねてから店の奥へ向かった。

「はあ……」

「そんなに落ち込まないで」

ココアが励ますが、そもそもの原因はココアだ。

「元はと言えばお前が——いや、もう手遅れだな」

「チノちゃん、急に暗い顔してどうしたんだろうね」

「お前も千夜に負けないくらい鬼畜なやつだな——」

悠は呆れた様子でそう吐き捨てた。

「ごちそうさまでしたー！」

「ごちそうさまでした。やっぱり美味しいな」

「そうだね！」

「はあ——どれだけ美味しくても食べ物で傷口は塞がらないぜ」

「まだ気にしてる!?!」

不意に涙が出てくる。ココアはすぐにティッシュを取り出して

「泣かないで！お姉ちゃんがよしよししてあげるよ」

「原因のやつに慰めてもらうとは——皮肉なもんだな」

ココアが無自覚でやっているのがさらに怖い。

そう思った悠だった。

第五十六話 ココアと本探し

「よし、チノちゃんの機嫌をなおすために、チノちゃんが大好きな本を調達するよ!」

甘兎庵を後にし、しばらく街を歩いているとココアが突然宣言する。

「チノが好きな本?」

「そうなの。前に図書館で探したんだけど、結局見つからなくて」

「そうか——またうさぎを追って走り回るよりは全然マシだな」

悠が賛成し、ココアと図書館へ向かうことに。

「それで、なんてタイトルの本だ?」

「それがね、タイトルがわからないの。——こんな話なんだけど」

ココアが本の内容を説明してくれるが、どこかで聞いたことがある内容だ。

「あー、昔里恵に読んだことがあるかも。タイトルは——なんだっけな……」

よほど印象がないタイトルなのだろう。全く思い出せない。

まあ、探せばそのうち出てくるだろう。

「まあ、ジャンルはだいたいわかったから、早速探してみようぜ」
「おっけー、私は向こうから探すよ!」

ココアが走り出した。大丈夫かなあと心配しながら悠も探しに向かう。

いつの間にか、もう日が暮れ始めた。

「見つからない——」

おそらく図書館内を3周はした。

一向に見つからない。図書館に設置されている端末だと、貸出中にはなっていないため、どこかにあるはずだ。

「こうなったら——見つかるまで徹底的に探してやる……!」

悠が燃える。

そういえば、ココアはどこなのだろうか。と辺りを見回すと、椅子に座って本を読んでいるココアを見つけた。

「おい、ココア!見つかったのか!」

「えっ——えっと……」

ココアが慌てて本を隠す。

「サボってたわけじゃないよ!」

「ふーん……サボってたのか。お前はチノのために本を探したいとは思わないんだな」

「思うよ!でも、昔読んでた本があつて——つい」

ココアにそういうと、ココアは「今度は真面目に探すよ!」と飛び出していった。

「あ、探す前にチノに遅くなるってメールしといてくれよ!」

悠がそう伝えるが、届いただろうか。心配だ。

日が沈んだ。本は見つからない。

「遅いですね——どうしたんでしょう」

「どうせココアと悠のことじゃ、まだ遊んどるんじゃないやろう」

チノがスマートフォンの時計を確認しながらそう呟くと、ティツピーが呆れた声で言う。

「むう——あれ？」

「どうしたチノ」

「——私、なんでこんなにモヤモヤしているんでしょうか……」

「——」

「はあ……はあ……なぜ見つからないんだ」

「悠くん——チノちゃんのためにそんなに——」

「やっぱりタイトルがわからないとダメなんじゃないか……？」

「そんなことないよ！ 私たちラビット姉弟にできないことなんてないよー！ 私もつと奥の方探してくるー！ うおー！」

「図書館で騒ぐな！ 俺も奥の方を探す！ もうそこしかないからな！」

ココアの後をついていく。

「意外と本数無いな。これならすぐに絞り込めそうだ」

「そうだね。よーし！ ラストスパート！」

ココアと片っ端から本を調べるが、結局でてこなかった。

「やっぱり無いのか……仕方ない。もう日が暮れちゃったし帰ろうぜ」

「うう……」

ココアも悠もそう諦め、図書館を出ようとするど、出口付近のカウンターに本が乗っていた。

「一応これも見ておくか——」

「あれ？これって——」

ココアと悠が目を丸くする。

「こんなところにあっただ！」

「灯台下暗しってことだな……」

それから、2人で大笑いして叱られ、本を借りた。

第五十七話　チノのモヤモヤ

「た、ただいま——」

「あ、悠さん。ココアさん。おかえりなさい……」

チノはそれだけ言うと、さっさと部屋に戻ってしまった。

「や、やっぱり怒ってる——?」

「わからん。とりあえず本を献上するぞ」

ココアと悠は顔を見合わせ、チノの部屋に向かった。

「チノちゃんに重大発表があります!」

「じゅ、重大発表ってまさか——」

『実は! 私たち今日から——』

チノの脳内で自動で再生されるココアの音声。

チノはそんなはずないと信じて部屋のドアを開ける。

「な、なんででしょう……」

恐る恐る尋ねると、ココアが「じゃーん!」と本を見せる。

「これって!」

「ああ、チノが好きな本だって聞いて、探してきたんだ」

「それで帰りが遅かったんですか? ありがとうございます……」

チノは嬉しさと安堵で思わず俯く。

「探すの大変だったよー。でも結局入口の目の前にあって」

ココアが笑いながら言うと、チノはクスツと笑って

「灯台下暗し、ですね」

と言ったが、ココアはさらに笑う。

「チノちゃん、悠くんと同じこと言ってるよ!」

「えっ——」

「思いつきりセリフ被ってるぞ……」

今度は恥ずかしさのあまり俯いた。

「あの、ところで、何か進展はあったんですか?」

「なんの?」

「で、ですからその……悠さんと」

「進展?——本を見つけたこと!かな?」

ココアがそう答えると、チノはホツとした様子で「そうですか」と答えた。

「——なんで私はこんなに気にしてるんでしょうか……」

「え?何か言った?」

「何も言ってますん!」

「あら、チノちゃん。いらっしやい」

「千夜さん……」

翌日、チノは甘兎庵を訪れた。千夜のレトロモダン月間目当てではない。

「はい、どうぞ」

千夜がお茶を差し出すと、チノはあんこを抱きかかえたまま顔を上げる。

「ありがとうございます。すみません、お仕事中に」

「ううん、あんこに会うついででもチノちゃんが私に相談してくれて嬉しいわ」

「千夜さん——」

「それで、悠くんがどうしたの？」

千夜が首を傾げてそう聞くと、チノは

「最近、ココアさんやリゼさんとよく遊んで」

「シヤロちゃんに教えたらなんて言うかしら」——と千夜は思う。

「それに、モヤモヤするんです」

「嫉妬してるのね」

「嫉妬？誰にですか？」

自覚がないのか——と千夜は思う。

「悠さんは女の人なら誰でもいいんです」

「誤解を招く発言だわ」

珍しく千夜がツツコミを入れる。

「リゼさんは、悠さんに友達関係のことを相談していますし、ココアさんも昨日1日中遊んで——楽しそうでした」

千夜がチノの肩に手を置いてこう言う。

「チノちゃん、寂しいならいつそのことうちの子になっちゃいましょう？」

「余計ややこしいことに——」

「あの——」

隣の客——青山ブルーマウンテンが声を上げる。

「青山さん！」

「モヤモヤしてしまう気持ち、わかります——。とても大切な人たちに囲まれているんですね」

「私は、どうしたらいいのかわからないんです——。こんな気持ち初めてで」

「初めて、ですか——。だったら、いいことなのかもしれません」

青山ブルーマウンテンの言葉に、チノが「いいこと？」と聞き返す。

「きつと、心が教えてくれているのだと思います。あなたは、あなたが思っている以上にその人のことが好きなんだって——」

そうチノに告げると、青山ブルーマウンテンは「すみません、差し出ましいいことを——」と続けて、店を後にした。

第五十八話 ラビットハウスで事故発生!?

「――暇ですね」

「ああ。この店本当に大丈夫なのか？」

チノと悠が誰もいない店内でボソツと呟く。

リゼは在庫の確認に、ココアは厨房でパンを焼いている。里恵は相変わらず家の掃除や洗濯を担当している。

チノと悠は、ラビットハウスのホールで待機。

「本当にやることないな……ティッピー、本当に経営大丈夫なのか？」

「お前もつと頑張つて繁盛させい！」

悠が諦め半分でティッピーにそう聞くと、ティッピーはそう怒鳴る。

「はあ……昨日は青山さんの言葉気にしすぎてよく眠れませんでした」

「あの人に何か吹き込まれたのか？」

「な、なんでもありません！」

チノが慌ててそう答える。もちろん、悠は昨日の一件を知らない。青山ブルーマウンテンの言葉を悠に伝えることができない。

「あ、そうだ、棚の上にあるカップとお皿を点検しなくては」

チノが思い出したというようにそう呟く。

棚に手を伸ばすが、届かない。ジャンプしながら取ろうとするが――届かない。

「あと少し身長があれば届くんです！」

「少しどころか全然足りてないぞ。無理するな。どれだ？取ってやるよ」

「むう……あの左にあるものです！」

その時、チノがバランスを崩して柵にぶつかると、置いてあるものが一気に倒れる。

「チノ！危ない！」

悠がチノを抱きかかえて避けるが、割れ物の破片が刺さる。

チノが「はっ」と目を開けると、悠が上にかぶさって身代わりになっていた。

「お、おいチノ、大丈夫か？」

「は、はい、大丈夫です——ごめんなさい、私の不注意のせいで」

「気にするな。チノが怪我しなくてよかった」

「いえ、手の甲を切ってしまいました」

「いや怪我してるんかーい!!——ドラマなんかだと『あなたのおかげで怪我しませんでした』って惚れるところだろー！」

「ほ、惚れてません！早くどいてください！恥ずかしいです！」

割れ物が割れる鋭い音と、悠の叫び声でココアとリゼが駆けつける。

「チノちゃん!?悠くん!?どうしたの!!」

「なんだ、襲撃か！」

「いえ、柵の物が落ちてきただけです——ですが、私のせいで悠さんが……」

「大丈夫だ、気にするな。どっちかって言うとチノの綺麗な肌に傷がつくほうが心にくるぞ」

その後、リゼに担がれて部屋に移動させられた。

「まさか、お前におんぶしてもらう日が来るとは」

「ああ、私も驚きだ」

「男を軽々おんぶできるとか——お前結構たくましいな」

「訓練してるからな！負傷兵の運搬と応急手当は基本的なことだぞ」

「これが女子高生のセリフとは思えないな……」

部屋に運ばれた後、リゼは店の方に戻っていった。ココアと後片付けをしてくれるそうだ。

チノと2人きりになった。

「あの、1人でお洋服脱げますか」

チノが顔を覗き込んでくる。近い、近すぎる。

「俺は赤ちゃんじゃないからな！——でもちよつと腕を動かすと痛い
な」

「し、仕方ありませんね……」

チノが少し恥ずかしそうにそう言うと、上着とワイシャツを脱がす。

「結構血が出てますね——ごめんなさい」

「だから気にするなつて。血が出るのは、古傷が開いたからだ！」

「ですが……。あの、お詫びになんでもしますから」

「え——？」

なんでもっ？なんでもってつまり「なんでも」ということか？

「な、なんですか——私にできることならします！」

「そ、それは色々期待しちゃうな——。あ、また俺と一緒に寝てくれよ」

「なっ……そ、それはお断りします！」

チノが思わず悠に包帯を投げつけた。

第五十九話 暴れると出血してしまいます！

チノに包帯を投げつけられ、思わずピクツと傷口が反応してしま
う。

「はっ！ご、ごめんなさい！つい——」

「いや、俺も調子に乗りすぎた——ってチノ！何してるんだ！」

「い、いえ、足からも血が出ていたので——」

チノがズボンを下ろそうとしてみると、悠が暴れ出す。

「やめろ！それは本当にやばい！逆に心臓が活発化して血が止まらな
くなるー！」

「私も恥ずかしいんですから、暴れないでくださいー！」

「不可抗力だ！暴れでもしないと理性を保てない！」

「暴れる時点で理性保ててません！暴れたらさらに出血してしま
いますー！」

「下は自分でやるから！お前はあっち向いてろ！」

「し、仕方ない悠さんですね！わかりましたから！」

危なかった、危うく本能を抑える砦があっさりと突破されそうだっ
た。

「チノも、手の甲は大丈夫なのか？」

「大丈夫です。明日には治つてると思います」

「もう少し早く動けていたら——くそ……今度リゼの訓練を受けよ
う」

悠がそう悔やむと、チノは「大げさすぎます」と呆れる。

「子供じゃないんですから——このくらいの傷、大丈夫です」

リゼはチノと悠に『今日はもう2人で休め!』と言ってくれたが、申し訳なくて落ち着かない。

そわそわしていると、チノが照れた様子でいう。

「そ、その——2人で寝るとい件ですが」

「いや、あれは冗談だから気にするなよ————といかけたが、チノが続ける。

「た、たまになら一緒に寝ても、いいですよ」

「え?——えー!?!いいのか!?!」

驚きのあまり開いた口が塞がらない。

「調子に乗らないでください!——『たまに』ですから!」

「わかったわかった——」

「——チノって本当にもふもふするんだな」

「いきなり何を言い出すんですか!」

悠が唐突に軽口を叩くとチノの顔が一気に赤くなる。

「さつき、最初は下心もなく純粹に『チノが危ない!』って思ってたかばったんだけど——」

「いつもは下心があるみたいない方やめてください——違いますよね?」

「え?あ、ああ、もちろんだ!男はいつも下心を持っているわけではない!」

悠がそう誤魔化すと、チノは少しクスツと笑う。

「かばった後、刺さって痛いって感情より『あ、すごいもふもふする』って思ったんだよ」

「ココアさんみたいなこと言わないでください」

チノがそういうと、部屋の扉が開いた。

「チノちゃん？呼んだ？」

「地獄耳か!？」

悠がそういう相手は——もちろんココアだ。後ろにリゼもいる。

「お仕事終わったから見に来てみたんだけど——」

「ココアさん、リゼさん、今日はありがとうございました」

「お姉ちゃんなんだから当然だよ！」

ココアがいつもの調子でそう言う。

リゼは心配そうな様子で怪我の方はどうかと尋ねる。

「男は意外と丈夫だからな。これくらいの怪我は——」

悠がそう強がりをおうとするが、ココアにチョップされる。

「な、何すんだよ!？」

「悠くんも無茶なことしちやダメ!？」

「——お前にだけは言われたくないぞ」

「でも——悠くんもチノちゃんも、怪我しちや嫌」

そう言うココアは、いつになく真剣な表情だ。

「わかったよココア」

「よろしい！——じゃ、私は里恵ちゃんと夜ご飯作るね！」

「さて、お前は料理するな！」

「大丈夫！お姉ちゃんに任せなさい！」

ココアはいつもの調子に戻り、部屋から出て行った。

第六十話 リゼのお説教

ココアが出て行った後、チノも不安に思ったのか

「ちよつと私もみてきます！」

と下の階へ向かった。

リゼと2人きりだ。

「私のときみたいに、チノを助けてくれたのか——」

「あ、ああ。なんだよいきなり」

「さつきココアも言っていたが、本当に無茶はやめてくれよ」

「仕方ないだろ。ああでもないしとチノがもつとひどい怪我してたんだから」

悠がそう言うと、リゼはにっこりと笑みを浮かべて言う。

「お前は本当優しいな」

「なんだ、俺を口説こうとしてるのか？」

「あの時のお返しか!?——でも、お前の優しさは自棄を含んでいる」

「——」

リゼが真剣な表情と口調で言う。

「チノが大切なのはわかる。それは私も同じだ。——だが、お前にもお前を——自分を大切にする権利がある」

「——」

「身代わりになって、自分を殺すようなことはやめないか。助けてもらったことがある私が言うのもなんだが」

「——」

リゼにそう説教され、悠は啞然とする。

「リゼ——ありがとな。よくわかった」

「それならよし、私はそろそろ帰るよ。お大事にな」

「ああ。また明日——」

リゼは部屋を後にした。

その晩、悠の部屋の扉が鳴った。

「あの、悠さん」

チノが扉から顔を覗かせて言った。

「なんだ？早速一緒に寝にきたのか？」

悠がそういうと、チノは持っていた枕を背中に隠して「ち、違います」と否定する。

「まだちゃんとお礼を言えてませんでした。——助けられてありがとうございました。悠さん」

「ああ。今度からは気をつけろよ」

「はい」

「な、なんですか。何も持ってませんよ」

悠がチノの方をじっと見ると、チノは少し焦る。

「ほんとかく？両手を上げて万歳してみろよ」

悠がそう追い詰めると、チノは観念したようにため息をつく。

「はあ……。ココアさんと違って悠さんは誤魔化せませんね」

「俺とココアを一緒にするなよ、根本的などころから違うだろ——」

悠が呆れると、チノは背中に隠していた枕を正面に持ってきて、

「そ、その——お礼ということまで今日は一緒に寝てあげます」

「今日のチノは素直だな」

悠がニヤついた顔でいうと、チノは恥ずかしそうに枕で顔を隠した。

「その、実はもう一つお話があった」

「ん？」

チノと悠が枕を並べて横になると、チノが布団に入って小声でいう。

「最近、悠さんといると——いえ、やっぱりいいです」

「なんだよ、よく聞こえなかったぞ？」

「聞こえなくていいんです！忘れてください」

「気になって眠れないぞ」

「た、たいしたことではないのかもしれない……気にしないでください」

「そ、そうか？」

翌朝、いつものように起床して準備して、ココアを起こす。

「おい、ココア、いい加減起きろ！今日もチノがうんざりしてたぞ」

「あと20分……」

「開店しちゃうぞ、早く起きろ」

「パンができたらラツパで知らせてね」

「——チノがココアが起きないなら解雇するって言ってたぞ」

「それは困るよ!!」

ココアが飛び起きた。

「起きてたならさっさと支度しろよ。下で待ってるから二度寝するなよ」

「わかったよ」

今日も1日、ラビットハウスでの生活が始まる——。

第六十一話 悠と里恵のルーティーン（前編）

「もう朝か——」

悠は閉じかかる瞼を強引に持ち上げ、ベッドから起き上がる。まずは朝の支度。着替え、歯磨き、洗顔、その他諸々。その後、ダイニングに向かう。

「おはよう」

「おはようございます、悠さん」

毎回、1番乗りはチノだ。朝食の準備をしている。悠がダイニングに入ってしばらくした後、里恵が起きる。

「2人とも早いねー」

「そうでしょか」

チノが朝食の準備を終え、ため息をつく。

「ココアさんは、本当にねぼすけですね。起こしてきます」「お前も毎朝大変だな——」

お姉ちゃんを自称する割にはいつも立場が逆転しているような気がする。

数分してチノが強引にココアを連れてくる。

「チノちゃん……」

「なんですか？ココアさん」

「パンが焼けたらラッパで知らせてくれるんじゃないの〜？」

「まだ寝ぼけてます」

「こいついつも何時に寝てるんだ!？」

あまりの寝起きの悪さに、逆にしっかり睡眠をとっているのかと心配してしまう。

「いってらっしゃい。気をつけて」

「いってきます」

「また後でねー!」

チノとココアを見送った後、悠は店先の掃除、里恵は朝食の後片付け。

「この街はいつも平和だな——」

そう呟きながら店先を掃除していると、チノの父親——タカヒロがやってくる。

「おはよう、悠くん。いつもありがとうね」

「タカヒロさん——とティップー。おはようございます」

「ココアくとチノはもう学校へ？」

「はい」

「そうか——」

タカヒロは少し困った様子でそう呟く。

「どうかしたんですか?」

「実は、ココアくんが体操服を忘れてしまったようですね……」

悠は「全くココアのやつは……」と呆れる。

「ちようど、この後高校の近くに用があるので、ついでに届けてきますよ」

「ああ、ありがとう」

「というわけだから、ちょっと高校まで行ってくる」
「はーい」

里恵にそう告げると、悠はココアの通う高校へ向かう。

「確かここだよな」

悠がそう呟くと、昇降口の方からココアの奇声が聞こえてくる。

「体育があるのすっかり忘れてたよー!!」

「まあ！それなら私のを使って！」

「そしたら千夜ちゃんが怒られるよ！」

相変わらずの2人だ。

「こうなると思ってたぜ。ほれ、これだろ」

「悠くん!?!なんでここに！」

「いや、お前が体操服忘れたって聞いたから——それに」

「この近くに用事がある」と言おうとしたが、すぐにココアに抱きつかれて遮られる。

「ありがとー！命の恩人だよ！」

「抱きつくな！俺はもう帰るからな！」

「まあ、せっかくだから悠くんも体育やっていけばいいのに……」

「いいわけないだろ」

千夜のボケ(?)につっこむと、悠は高校を後にした。

さて、このココアの高校の近くにある店——ここではストラップが売っている。

「この中にあるうさぎのストラップ、この前チノが欲しいと言っていた。プレゼントすればきっと喜ぶに違いない」

そう確信して店内に入ると、うさぎのストラップを購入した。

「ただいま」

「おかえり」

悠と里恵の会話はいつも短くてシンプルだ。

「ココアちゃん、どうだった?」

「ああ、ココアのやつ、相変わらずだったよ」

簡単に報告すると、悠は着替えてホールに向かう。

ココアたちが学校に行っている間はタカヒロさんと交代で店番をするのが日課だ。

「といっても、この時間帯はお客少ないしな……」

お昼時は数組のお客がやってくるが、それ以外はほとんどいない。

お客がいないときはティツピーと下らん話でもして時間を潰す。

「そういえば——なんでうさぎになったんだ?」

「それが、わしにもわからんのじゃ。気がついたらこうなっていてのう……」

「でもチノ以外には秘密を明かさないうまく俺にはあつさりバレだけど」

悠がそういうと、ティツピーは難しい顔(?)をしていう。

「喋るうさぎって注目されると、いろいろ不都合なんじゃ。チノと一緒にいられなくなってしまう」

「そうか、それもそうだな。研究施設に入れられて解剖とかされそうだし」

「なぬ!?それは絶対嫌じゃ!わたしは意地でもここでコーヒーを入れるぞ!」

「暴れるな!確かに器用だけどティップーの体じゃさすがにきついでろ!」

——そんな話をしていると、ココアとチノが帰ってきた。

第六十二話 悠と里恵のルーティーン（後編）

「おかえり」

「ただいまです」

「ただいま〜！」

チノとココアが帰ってきて、すぐにラビットハウスの制服に着替える。

しばらくして、リゼもラビットハウスにやってくる。

こうしてバイトメンバーが揃う。

仕事が始まり、それぞれ仕事を分担。悠は基本的に倉庫からコーヒー豆の袋を持ってきたり、在庫を管理したりと力仕事がメイン。

リゼが「手伝うよ」と倉庫に入ってくる。

「お前、本当に女子なのかと疑っちゃうくらい力あるよな」

「そうか？ココアもチノも訓練すればすぐにこうなるぞ！」

「コーヒー豆の袋を軽々と運ぶイケメンなチノも見たいけどな」

時々悠が発する問題発言や軽口にツツコミを入れるのもリゼの担当だ。

「うわ、これいつのやつだよ、袋がホコリまみれだ」

「結構前のやつだな、それも移動させておこう」

「ああ、お前はやらなくていい。汚れるだろ」

「気にするな！いちいち戦場で汚れることを気にしていたらやられるぞ！」

「お前女子なんだから少しくらいは気にしろよ」

悠がそういうと、リゼは少し照れる。

「わ、私を女の子扱いしてくれるのか！」

「は？そんなの当たり前だろ。なんだよ、かしこまって」

「い、いや、あまり慣れてなくてさ……」

リゼが少し顔を赤らめて「な、なんかここ暑いな！」と手で顔を仰ぐ。

「そうか？ほら、さっさと終わらせるぞ」

ラビットハウスでの仕事が終わると、今度は夕食の準備。

最近では里恵も料理の腕が着々と上がっており、ココアやチノの手伝いをするようにまで成長した。

「さすが我が妹だな」

「なんだかそのセリフ、ココアさんみたいですね」

「あいつと違って俺は『自称』じゃないからな」

チノの一言に悠がそう反応する。確かにココアと同じことを言っているが、ココアはあくまで『自称』姉だ。

夕食を食べ終わった後は、お風呂に入る。

「見て見て！」

ココアが後ろから悠の肩を叩く。

「なんだ？」

「じゃーん！今日はティツピー型パーカーだよ！」

「そんなものが!？」

悠が驚く。ココアが着ているパーカーは、フードの部分がティツ

ピーを模した形と模様になっている。

「ココアさん！自慢したいのはわかりますが、服を着てください！」

チノがココアの後を追って部屋にやってくる。

「チノ！このパーカーってどこで売ってたんだ!？」

「ココアさんがパーカー1枚ということよりもそつちに反応するんですね」

チノにそう言われ、悠の体に電流が走る。

「おい！ココア！ちゃんと服を着ろ！その状態で男の前に姿を現すな！」

「ごめんごめん！いま着替えるよ！」

ココアが部屋から出て行く。

「あのパーカー、実は以前母が作っていたものです」

「そうなのか？」

「はい、お店で売っているパーカーにティツピー風にアレンジしたフードをくつつけるんです」

「なるほどな——」

「ほしいんですか？」

「悠くんも着てみる？」

突然ココアが後ろにいたため、「着替えるのはや！」と悠が驚くと、ココアはパーカーを悠に着せる。

「あ、もふもふだ」

「悠さん——可愛いです」

「な、なんか複雑な気分だな――」

チノにそう褒められ、悠が苦笑いする。

この服、何かいい匂いがすると匂いを嗅ぐと、里恵に叩かれた。

「お兄ちゃん、今匂い嗅いで変なこと考えたでしょ！」

「――は？」

「通報します」

少し強い口調の里恵とジト目で言うチノに、悠は少し理由を考えてから慌てて釈明する。

「――いや、そういう意味じゃなかったんだ！許して！」

「変なこと？」

当のココアは気がついていないようだった。

第六十三話 制服が暑すぎる！

「あつつい——」

「なんとかしたいほどの暑さです」

悠とチノがカウンターにぐったりと倒れ込む。

無理もない、今日はここ数日で最も暑くなると言われている。

さすがのココアとりぜもしんどそうにしている。

そんな暑い日なので、ラビットハウスでは「冷やし中華」ならぬ「冷やしコーヒー」を始めました。

「今日、お客さんに2回も『その服暑くない？』って聞かれたぞ」

「私4回！」

「何を張りあってるんだ」

悠がそういうと、ココアが「だつて〜」と言う。

ティッピーの方を見ると、溶けた飴玉のような状態で

「23回——」

と死にかけの声で言った。

ココアが「ティッピーの優勝！」と観念する。

「せめて、上着とりボンをとってみる。俺も上着と蝶ネクタイとる」

悠がそう提案すると、一同が頷く。

店のドアが開く。

「冷やしコーヒーとアイスコーヒーって何が違うんだ!？」

マヤとメグがやってきたが、2人は店内を見渡すとすぐに扉を閉め

る。

「あれ？ココアたちいなかったねー」

「ピンク・水色・紫・黒じゃなかったよー？」

店の外でそう言うマヤとメグに、チノが「色で判別されてます！」と
つつこむ。

「なければ自分で作ればいいんだよ！」

ココアが再び上着とリボン・蝶ネクタイをつけた一同にそう提案す
る。

「チノちゃんのお母さんのデザインに近いものを！」

「私たちが……」

「今こそ、4人の力をあわせるとき！」

不安がるチノにそうココアが激励すると、リゼは「そ、そうか！」と
便乗する。

「うっ——」

ココアの低い声が漏れる。

「ココアさんが夏バテです」

「早くも燃え尽きたな」

悠はココアの背後から冷たいジュースを首元に当てる。
ココアは「ピヤッ！」と声をあげ、足をピンと伸ばす。

「最初はどこにいきましょう?」

チノが悠にそう聞くと、悠はしばらく考えてから

「まずはだが、半袖シャツと薄手のスカートとズボンは既製品でいいか」

「ベストは作り直すので生地が必要ですね」

ココアが悠から受け取ったジュースをリゼの首元に当てると、リゼは

「お前絶対元気だろー!」

と叫んだ。

だが、生地探しは全くうまくいかない。なぜなら――。

「ピンクの生地だけありません」

「これじゃあココアのが作れないぞ」

チノと悠が困った声を上げる。

そのうち、ココアとリゼは近くにいるうさぎをもふもふし始めた。

「あの、いつまでももふもふしてるんですか」

チノがそう注意すると、ココアもリゼも「休憩も必要」とももふもふをやめない。

うさぎが懐かないチノが嫉妬の目線をこちらに向けてくる。

「じゃ、じゃあ俺をもふもふするか?」

悠がそう言うと、チノは黙って何処かへ向かった。——やばい、怒らせた。

街に設置されているスピーカーから声が聞こえてきた。

『えー、迷子のお知らせをいたします。ココアちゃん、リゼちゃん、チノお姉さんがお待ちです』

「スケールがでかい！」

思わずスピーカーに向かってツツコミを入れる悠だった。

やがて、チノも暑さのせいか、疲れてベンチにぐったりと座る。

「昨日、頑張って徹夜してデザイン考えたのに——」

チノがそう呟くと、悠は「一回見せてみる」とデザインの書かれたスケッチブックを受け取る。

「こ、これは——」

「どうした」

悠の驚きの声にリゼもスケッチブックに顔を覗かせる。

「す、すまんチノ、絵の解説に時間が必要だ」

「あ、ああ、でも心配するな！ 私たちがなんとか——」

悠とりぜがチノの独創的な絵をみてそう言うと、チノは頬を膨らませた。

そして、すぐにガクツと落ち込む。

「入荷を待っていたら秋になってしまいます——」

「焦らなくても大丈夫だ！ 今日はまだ暑いから帰ろう！」

悠が落ち込むチノを励ますと、リゼはあたりを見回しながら「あれ？ココアは？」と呟く。

「ココアなら、あつちでうさぎをもふもふしてる」

「あいつ、暑くないのか——？」

悠が指差した先にはうさぎをもふもふするココアの姿が。思わずリゼも暑くないのかと困惑する。

第六十四話 夏服を作ろう！

「どうしたんだココア、急に倉庫を漁り始めて」

結局ピンクの生地を見つけることはできず、そのままビットハウスへ帰ってきた。

帰ってきて早々、ココアは何かを思いついたように店の倉庫を漁る。

倉庫の番人（自称）である悠は、ココアの奇行に首を傾げていた。

「チノちゃんのお母さんって服を作るのが好きだったの、だから余った生地がどこかにあるかもしれないよ！」

「なるほど——」

ココアが倉庫の端から端まで調べると、ついに「理想のピンク」を発見！

「あったー!!」

そう喜ぶココアに悠が「おめでとー」と適当に受け流すと、ココアは

「お母さんありがとう!!」

と言いながら泣き始めた。だが——

「ココア、裏をしろ！うさぎ柄になってるぞ！」

「む、無地の方を使えばなんとかなるよ！」

「じゃあ早速採寸だ！」

リゼが「待ってました」と言わんばかりにメジャーを取り出してそう宣言する。

ココアはそれに「イエッサー！」と返事。チノも敬礼する。まず、チノ、ココアと採寸し、悠の番がきた。

「よし、次はお前を採寸するぞ！」

リゼが悠の体に手を回す。——ふと、手が悠の腹に触れる。

「お、お前！意外とガツチリしてるな——」

「触るな！痴漢！セクハラ上司！」

「誰がセクハラ上司だ！今のは不可抗力だろ！」

そうふざけつつ悠の採寸も終わった。

その晩から、リゼはラビットハウスに泊まってチノと服を作り始めた。

「ココアはやらないのか——」

悠がそう呟くと、ココアは「私も手伝いたいんだけど——」と残念そうに言う。

「チノに却下されたか」

「私だってお洋服くらい作れるよ！」

ココアが「お姉ちゃんも手伝うよ！」とチノたちの元へ向かうと、リゼがココアを押しさえる。

「今チノがミシンを使ってる！危ないだろ！——悠は裁縫できるのか

？」

「俺は無理だ。まず玉結びと玉止めができない」

「基本中の基本じゃないか——」

リゼが呆れた声で言う。

その翌日には夏服が完成していた。

「じゃーん！どうかな？」

「いいです、似合ってます」

「ああ、悪くないな！」

新しい夏服を自慢するココアにチノとリゼがそう言うのと、ココアは

「私が初めてここの制服を着た時と同じ反応!？」

とつつこむ。——何気に初めて言われた感想とか、覚えてるタイプなのか。

「ここのデザイン、おかしくないでしょうか」

チノが心配そうに言うが、ココアもリゼも悠も、チノの頭を撫でながら

「10年着たいくらいいいよ！」

「その頃には、またデザインしてもらおうかな」

「大丈夫だチノ！まるで天使のような可愛さだぞ！」

「悠……お前それ服の感想じゃなくてチノに対する感想だろ！」

と褒めると、チノは顔を赤くした。

「ちなみに裏返すところなります!」

ココアがベストを裏返すと、うさぎ柄になった。

その光景を入店してきた青山ブルーマウンテンが「あらまあ、すてきです!」と褒める。

第六十五話 倉庫の掃除は肩車で

「えーと、コーヒー豆の袋はあと——」

今日も悠は倉庫の番人（自称）として倉庫の中身を整理している。そしていつも、倉庫から出てきたときに悠の制服にはホコリが大量に付着している。

「もう、いつそのこと制服の色灰色にするか？」

「するな！こんなもん、少し拭けばいい話だろう」

リゼが悠の制服の色を灰色にしようとする提案してくるが、悠はそれを却下。

近くにあるタオルなどで制服を拭いている。

「しかし、そろそろ倉庫を整理しなくてははいけませんね」

「ああ、謎のダンボールとかも開けて整理しないとな」

「では明日やりますか」

チノの言葉に悠はうんと頷いた。

翌日、ココアが倉庫の床や棚を掃除、悠とチノとリゼは棚にあるものを一度下ろして整理することに。

「いやあくすごい量だ」

悠が汗をタオルで拭きながらそう言うと、チノも「そうですね」と汗を拭く。

「悠くん、その格好じゃ動きづらいんじゃない？」

「え？ああ、まあそうだな」

ココアが何やら袋を持ってこちらに駆け寄ってくる。

「じゃーん！私のジャージ！貸してあげるよー！」

「いらん！着られるか!!」

「そうです！悠さんにココアさんの学校のジャージは似合いません！」

「——なんでお前が怒ってるんだ？」

なぜかチノがココアに対抗する。

「大丈夫だよ！洗濯すれば汗の匂いもなくなるよ？」

「そういう問題じゃない」

「話しないで、そっちの棚の荷物下ろせー」

ありがたいタイミングでリゼが注意してくれた。このままだとココアのジャージを着せられる羽目になりそうだった。

「あの、リゼさん。身長が届かないので肩車してもらっていいですか」「すまんチノ！いま手が離せない！」

リゼはダンボールの中身をものすごいスピードで整理している。今のリゼを止めることは誰にもできない。

「そうですか——あ、悠さん、今大丈夫ですか？」

今度はチノが悠の元へやってくる。どうやら、届かないところの荷物を下ろしたいようだ。

「ああ、大丈夫だ。肩車か？」

「はい、お願いします」

「あー！悠くん！チノちゃんを肩車してお兄ちゃんポイントを稼ぐつもりだね！」

「なんだそのポイント——」

案の定ココアが間に入ってくる。

「私だってチノちゃんを肩車できるよ！」

「ココアさんはおんぶも危なっかしくて頼めません」

「そんな……私の力では悠くんには敵わないの……」

ココアが崩れ落ちると、悠は不敵な笑みを浮かべて言う。

「ああ、そうさ。ココア、お前の力では俺には敵わない。おとなしく雑巾掛けをしろ」

「うわーん！リゼちゃん！悠くんがいじめるー！」

「あ、待てリゼ！さすがにお前には勝てないぞ」

「なぜ戦う前から決めつけるんだ!？」

「よいしょっと——取れました！」

「そうか？下ろすぞ」

「はい」

チノが柵の上にあるダンボールを持って着地する。

「これ、この中に昔お母さんと遊んだおもちゃがいっぱい入ってるんです」

チノがダンボールから取り出したのは、うさぎのおもちゃ。

チノが嬉しそうに

「ここを押すと、首を振るんです」

と言う。そしてボタンを押した。

「ぎゃー!!」

思わず悠と、近くで見えていたリゼが悲鳴をあげる。

顔の怖いうさぎのおもちやが、古くなって関節が甘くなった首をギリギリと動かす様はホラーそのものだ。

「かんわいいー!」

「これ、昔大好きだったんです」

かわいいと目をキラキラさせて言うココアにドヤ顔でチノがそう言うが――

「こ、こういうのは教育上よくないな……」

「チノ、サイコパス説がまた浮上してしまったぞ」

リゼと悠は震えた声でそう呟いた。

第六十六話 友は世代を超えて

チノが昔遊んでいたおもちゃを掘り出し、再びココアと遊んでい
る。

その横で、悠は古いアルバムを発見。

——卒業アルバムだ。

「チノのお母さんの高校の卒業アルバム——」

人様のアルバムを勝手に見るなんていけないことだが、チノの母親
——どんな人かとても気になる。

「きつとチノみたいにお淑やかな人なんだろうな——」

そんな思いでアルバムを開けると——悠は目を見開いた。

「うそ……」

そう呟くが、先ほどからおもちゃで遊んでいるココアとチノはもち
ろん、ダンボールの中身をもものすごい勢いで整理しているリゼにも届
かない。

「ココアとチノ——?」

アルバムに仲良く写るのは、どう見てもココアとチノ。

チノのと同じバツテン印の髪留めや髪——これがチノの母なのか。

そしてその隣に写る女性も、ココアと雰囲気が全く同じ。——こっ
ちはココアの母?

どちらもこの街にある高校の制服ではない。

仮にこの——ココアと雰囲気が同じ女性をココアの母だとして、そ

の隣にいるのはチノの母。

この街にある高校の制服ではないものを着ていることから考える
と――。

「パラレルワールドか!!?――それとも時間がループしてるのか!?”

「悠、どうしたんだ! オカルト誌でも見つけたのか!?”

悠がそう混乱した声を上げると、リゼが奥の方からツツコミを入れてくる。

これらのことをまとめて考察すると、この時は「チノの母親」が「ココアの母親」の地元ホームステイしていた、もしくは近くで暮らしていたことになる――。

そういえば、チノの父親とリゼの父親も知り合いだった。

「こんな奇跡ってあるんだな――」

そう呟いて、アルバムをゆっくりと閉じた。

「さて、倉庫の整理も終わりだ! これでやっとホコリから解放される
!」

悠が腕を上にあげながら言うと、チノが「お疲れ様でした」とコー
ヒーを手渡す。

「――」

チノの方を見ると、やはり先ほどの女性と似ている。
じっと見つめる悠に、チノは少し顔を赤くして困惑する。

「な、なんでしょうか――。何かついていきますか?」

「いや、そういうわけじゃない。気にするな」
「——?」

はてなマークを浮かべるチノ。
ココアがこちらにやってくる。

「ところで悠くん、さっき何を見てたの?」

「なんでもないぞ——」

「お姉ちゃんに内緒事!?悠くんもついに反抗期に——」
「別に反抗してないだろ!」

誤魔化すとココアが「悠くんが反抗期だよ!」と泣きわめく。

「やっぱり、血の繋がりをを感じるな」

窓の外を眺めてそう呟くと、後ろでチノとココアがヒソヒソ話を始めていたのが聞こえた。

「今日の悠さん、何か変ですよ、ココアさん」

「倉庫の掃除で疲れたんじや——」

「はっ!まさか、私が肩車をお願いしたせいで……重かったんですね……」

「そんなことはないぞ!むしろ軽すぎてびっくりした!」

自分を責めるチノに思わず悠が席を立ち上がって言う。

「地獄耳ですか!」

チノが恥ずかしそうにそうつつこんだ。

しかし、気がかりなことがある。

ココアはココアの母親の高校時代と全く同じ雰囲気であったが、チノはどこか違う。

否、違うというより正反対。チノの母親はココアの母親とはしゃいでいる写真が多い。

「はしゃぐ性格」が遺伝しなかったただけか？

それを検証するには——方法は一つしかない。

「リゼ、カレーの時の高そうなチョコレートをもう一度くれ！」

悠がりゼにそう頼むと、リゼは

「またカレーを作るのか？いいぞ！親父に頼んでみる！」

「チノを酔わせない！」

言ってから気がついたが、圧倒的に言葉が足りなかった。

案の定、リゼにお盆で殴られた。

第六十七話 雨の日は温水プールで

「雨だな」

「雨です」

「せっかくの休みなのに〜!」

今日はみんなでバイトが休みの日。

「こんな日は部屋でボトルシップの制作を——」

チノがそう言いかけると、ココアは「あ!リゼちゃんからメールだ!」と携帯を覗く。

「リゼちゃんが『今日みんなで温水プールに行かないか』だって!」

「ココアは結構モノマネうまい!」

「お姉ちゃんだから当たり前だよ!」

悠がココアがやるリゼのモノマネが再現度高いとを褒めると、ココアは謎の返事をする。

「久しぶりにみんなで行きますか」

「え、俺も?」

「え?悠くん来ないの?」

「1人だけ置いていくのはかわいそうです」

「こんな日が来るとは——!里恵も誘ってくる!」

「す、すごい生き生きしています!」

悠が嬉しきの有頂天になり、廊下をスキップしながら里恵の下まで行くと、里恵はドン引きした様子で

「ど、どうしたの……」

「チノと温水プールに行ける!!」

「へ、へえ……よかったね」

完全に里恵に会いに来た目的を忘れていた。結局里恵はココアが誘ってくれた。

「本当にしようがない悠さんですね」

「すまん……喜びのあまり目的を忘れてた」

チノが呆れた様子でそういうと、近くにいた野良うさぎの元へ。

「磁石みたいに吸い寄せられていったな!」

と悠がつつこむと、リゼも

「ああ、確実にココアに似てきてるな」

と便乗した。それを聞いたチノは正気に戻ったかのような表情でこちらに帰ってくる。

「そういうえば、ティツピーお前はメスだけどオスなのか」

「そうじゃ。忘れとったんかい」

無慈悲にもチノにティツピーを押し付けられて男性の更衣室に連行——否、案内された。

「体はメスだが心はおじいさんか——」

「ところで小僧、その桶を取ってくれないか? わしは水に濡れるのが嫌なんじゃ」

「ん? よく聞こえなかったな? 水が好きなんだって?」

「これ小僧ー!!」

悠が軽く水道の水をティッピーにかけてやると、ガラガラの更衣室にティッピーの声が響いた。

「ティッピーがびしょびしょですよ！」

「チノ……わしはどうやらここまでのようじゃ……」

「そんな、おじいちゃん……」

「少し水に濡れただけだろ。大袈裟だな」

茶番を繰り広げるチノとティッピーに悠が無慈悲に言う。

「しかし、千夜とシャロがくるなんて意外だな。バイトだと思ってたぞ」

「雨で休みになっただけだし」

「それはそれ、これはこれだから」

「どれですか！」

最近チノのツツコミ力が向上しているように思う。

「」

「なんだよりゼ、変態だな、そんなに俺の体が気になるのか？」

先ほどから悠の体をじっと見てくるリゼにそう軽口を叩くと、リゼは顔を赤くして

「変な言い方するな！」

「リゼ先輩……」

というが、さすがのシャロも引く。リゼは全力で否定すると、こう続ける。

「い、いや——華奢な感じだったから意外だと思って」

「一応これでも運動神経はいいんだぜ。お前ほどじゃないが」

そこまで「筋肉ムキムキ」というほどではないが、平均くらいはあ
ると思う。

「ところでリゼ——チノとチェスしたいんだが、眩しくてチノを直視
できないんだ、どうすればいい?」

「一度ぶん殴ってやろうか? きつと治るさ」

「おい、目が笑ってないぞ」

「準備できましたよ——つて、どうかしたんですか?」

チノが困惑の声を上げる。

第六十八話 泳ぎの練習

チノにチェスで負けた。

「お前……強すぎだろ」

「おじいちゃんから教えてもらったんです」

「まじか、ティツピー、チェス得意だったのか」

「気づくのが遅いのう。わしとチノがいれば天下だって夢じゃないわい」

「なんか千夜みたいなこといい始めた!」

自慢げなチノとティツピーにそうつつこむと、チノが

「あの、悠さんは泳げますか?」

「ああ、一応な」

「泳ぎ方、教えてくれませんか?この前キャンプの時溺れそうだったので——」

「よしきた!」

大きめのプールへ向かうと、リゼとシャロが泳ぎの練習をしていた。

「シャロも泳げなかったのか?」

悠がそう聞くと、シャロは首を横に振り、

「いいえ、リゼ先輩に教えてたのよ」

「うそだろ!」

驚きのあまりリゼの方を見ると、「あまり泳ぐのは得意じゃないんだ」とリゼが言う。

「驚きだな……。チノも泳げるようになりたいらしい」

悠がそう言うと、ココアは目を輝かせて

「そうなの!? よーし! お姉ちゃんが教えてあげる!」

「お前はそこで倒れてる千夜をなんとかしろ」

悠が指差した方には千夜が倒れていた。

どうやら、ココアに泳ぎの練習をさせられたらしく、体力を使い果たしてあぁなってしまったらしい。

「まずは——ビート板かな?」

悠がチノにそう言うと、リゼは意外そうに言う。

「まずは手を引っ張るやつだろ!」

「お前小学生か!」

「そうですよりゼ先輩!」

「リゼさん……。私は子供じゃないです」

各方面からボロクソに言われ、リゼは顔を真っ赤にして走り去っていった。

シャロも「待ってください! リゼ先輩!」と追いかけた。

「ココアも千夜のところだし、結局2人で練習することになりそうだな」

「よろしくお願いします」

それから数時間、チノと泳ぎの練習を重ね、ようやくビート板で泳

げるように。

「おー、いいぞチノ！」

「自転車の時といい、今日のことといい——本当にありがとうございます」

「まあな、俺はココアと違って優秀だから——」

にやけた顔でそう言うと、ココアの方を向く。

ココアは「なにをー！」とこちらに挑戦状を叩きつける。

「ここから向こうまで、どっちが早く泳げるか勝負だよ！」

「臨むところだ！俺が勝ったらチノはもうぞ」

「私の妹は譲らないよ！」

ココアと悠が燃える。チノと桶で水面に浮かんでいるティツピーが顔を赤くして言う。

「私を巡って2人が——！」

「わしのために争わないでくれー！」

「よーい！どん！」

チノの合図でココアと悠がものすごいスピードで泳いでいく。

「す、すごい——でもココアさんの泳ぎ方おかしい！」

思わずチノがツツコミを入れる。

結局、勝負は悠の勝ち。

「ココア、なんだあの変な泳ぎ方は」

「クロールだよ!？」

「あれのどこがクロールだよ、泳いでる犬みたいだったぞ……」

「じゃあ今日から私は悠くんのペットだね! わんわん!」

「やかましい、いらんわ」

「反応が冷たい!」

そのやりとりを見てチノが微笑む。

時計を見ると、もう夕方になっていた。

「そろそろ帰るか」

「そうですね」

悠とチノがそういうと、奥からリゼとシャロがやってきた。
息が上がっている。

「どうした」

「リゼ先輩が……深いプールで泳ごうって……」

「これが思ったより難易度高かった——」

「無理すんなよ——」

一方千夜もほとんど回復したようで、帰るころには元気になっていた。
た。

「チノー、助けておくれー」

「ティツピー!？」

今度はティツピーの悲鳴が聞こえる。

「ティツピーって水に濡れるとこんな風になるの?」

ココアと悠が勝負している間、里恵はティッピーと遊んでいたはずだが——一体なにが。

「あの小娘——わしの桶をビート板がわりに使いよつて——」

「浸水してこうなつたんですね」

「結局水に濡れたな」

最後にしわくちやのティッピーとみんなで記念写真を撮つてラビットハウスに帰つた。

帰る頃には、雨も止んで曇り空からわずかに夕日が姿を現していた。

第六十九話 ココアとチノが入れ替わった（前編）

ラビットハウスの朝。いつものようにチノはベッドから身を起し、ココアを起こしに向かう。

だが、この日は何か体の調子がおかしい。

「——あれ？……ここってココアさんの部屋？なんで私が——」

念の為チノは自分の部屋に向かうと、寝ていたのはココア——ではなく、チノだった。

「ココアさん——え……うわあああ!!!」

チノの悲鳴がラビットハウスに響き渡った。

「どうしたチノ！——ってココアか、今日は早起きできたのか、偉いぞ！」

悠が褒めると、外見がココアになってしまったチノが

「違います、悠さん。私です」

「え？またまた！お前にチノの真似なんて100年早いぞ！」

悠が笑うと、外見がチノになってしまったココアが起きる。

「おはよう悠くん——朝から元気だね」

「うわああ!!見た目もチノで声もチノなのにココア!？」

「どうなってしまったんでしょうか——」

ココアの見たと声をしているが、中身はチノのようだ。

そして、チノの見た目と声をしているが、中身はココアのようにだ。

「ココアが朝ごはんを作ってる——なんか新鮮」

「私がチノちゃんの体に！いつでももふもふできる！」

ココアは満喫しているようだ。

里恵も起床して異変に気がつく。

「あれ？なんかいつもと立場が逆——」

「大変だぞ里恵、ココアとチノが入れ替わった!!」

「えーっ!?!」

やがてリゼも店にやってきた。今日も休日なので学校はない。

朝からシフトが入っている。

「おはよう！今日はよく晴れたなー！」

リゼが店に入ってきてさういいうと、何かを察知したようにこちらへやってきた。

「なぜ、ココアがコーヒーを入れてチノが日向ぼっこしてるんだ？真似っこしてるのか？」

「日向ぼっこしてるチノ——かわいい」

悠がデレデレしながらさういいうと、リゼはお盆で軽く悠の頭を叩いてからもう一度聞く。

「真面目に答えろ。なにかあったのか？」

「実は——」

今朝の話をリゼにすると、リゼはしばらく考えてから目を輝かせた。

「面白いことになったな！」

「いやいや、笑ってる場合じゃないぞ。2人がこのままだったらどうすれば」

「こういうのって、お互いの頭をぶつかけたり、もう一回寝たりすると治るんだよな」

「そういうもんなのか？」

「だけど、しばらくこのままにしてみよう」

「それは俺も賛成だ。外見はチノなのに中身はココアって、何か楽しいことが起こりそうだけ」

リゼと悠は悪い笑みを浮かべる。

早速悠はココア——外見がチノになったココアの元へ。

「なあココア！今日1日お姉ちゃんって呼ぶからさ——」

「いいの〜!!？」

「チノの体でキラキラした目線を送るな！」とつつこみかけたが、これからもっと重要なことを言いたいので、この言葉を飲み込む。

「ココア——。その状態で俺に嘘でもいいから告白してくれ！」

悠が真顔でそう告げると、ココア——外見がココアになってしまったチノが慌ててこちらにやってくる。

「ココアさん！そんなことしたらここでココアさんの服を脱ぎます！」

「えー!!？それはまずいよチノちゃん！」

「俺はどっちでもいいぞ。ココア、選べ」

悠はココアがどちらの選択肢を選んでも勝ちだ。
リゼは呆れとドン引きと軽蔑の目線を送ってくるが、止めないあたりりりゼもチノが告白するところが気になるようだ。

「う、うう………」

ココアはしばらく悩むと、悠にこういった。

第七十話 ココアとチノが入れ替わった（後編）

ココアが悠の耳元で「あとでね、チノちゃんが見てない時に」という。

悠が小さく頷くと、チノの外見をしているココアは、ココアの外見をしているチノにいう。

「それは困るよ！」

「私の体で余計なことしないでくださいね」

「ココアが敬語で喋ってるのすごい違和感——」

リゼがそう言うと、悠がうんうんと同意する。

「同感だ。せつかくだからなりきってみたら？」

悠が提案するとココアはチノのモノマネを始める。

「ココアさんは私の憧れのお姉ちゃんです……！」

「私そんなこと言いません！」

「ほら、チノもやってみろよ」

リゼがそう促すと、チノは「嫌です」と却下。

ラビットハウスでの仕事が終わり、チノと里恵は夕食の準備に向かった。

ココア（外見はチノ）と悠の2人きりになった。

「ねえ悠くん、せつかくだから録画しておいてよ」

ココアにカメラを渡される。——なんて素晴らしい発想だ。

「よし、行くよ！チノちゃんになりきるからね！」

「お、おう……」

思わず息を飲んでしまう。

「——あれ、そういえばチノちゃんって悠くんのこと『悠さん』って呼ぶんだっけ？」

悠は思わずひっくり返る。

「ああ、そういえばそうだな。だがいずれは『お兄ちゃん』って呼んでほしいもんだ」

「じゃあ『お兄ちゃん』で行く？」

「いや、別に変えなくていい！」

悠がそういうと、ココアは「ごほん……では」と仕切り直す。

「悠さん……実は私、悠さんがここに来てからずっとモヤモヤしてたんです。その理由がわかりました」

ココアの本気の演技に思わず唾然とする。茶番のような演技を見せられるのかと構えていた悠にとって意外な展開だ。

「私——悠さんのことが、す、好きなんです！付き合ってもらえませんか？」

「ど、どうかな？」

悠は口を開けたまま床に倒れる。なんという破壊力だ。

「ちよつと!?!悠くん!しっかり!」

「さつき録画したやつをリゼに送ろう。なんだかんだあいつも興味ありそうだったしな」

「それがいいよ!」

「ところでココア、なかなかのリアルさだったが、どこで覚えたんだ?まさか——実体験?」

悠がそうココアに聞くと、ココアは慌てて否定する。

「違う違う!私たまに恋愛小説読むんだよ。その小説のセリフだよ!」

「そ、そうなのか——思ってたよりリアルだったからビビったぞ……」
「ふふっ、真っ赤になって倒れこむ悠くんの写真もゲットしたし、大収穫だよ」

ココアのその発言を聞いた途端、悠はすぐにココアの持つカメラに飛びかかる。

「今すぐそれを消せー!!」

「チノちゃんのデータも消えちゃうよ!!」

ココアが全力で抵抗する。が、すぐに悠に抱きつく。

「ん〜!チノちゃんのもふもふ具合と悠くんのもふもふ具合が合わさって——天国だよ〜」

「ココア!チノの体で俺に抱きつくなああああ!!!」

「なんだか、上の階が騒がしいですね。不安です——。私の体に何を

されてるんでしょか」

チノが心配そうにそう呟いた。

翌朝。結局リゼの言う通り体は元に戻っていた。

「はあ、なんだったのでしょうか」

「原因はわからんが、俺はめちやくちや得をした」

「何をしたんですか!？」

「それは——内緒だな!」

「ますます不安です!」

チノと悠の会話で、今日もラビットハウスでの1日が始まる。

第七十一話 ココアの計画

「夏のイベントといえば肝試しだよね」

「な、なんですかココアさん、いきなり——」

ココアの唐突なつぶやきにチノが明らかに動揺する。

「ああ、そうだな。まだ気が早いような気がするけど、やってみるか？」

「悠さんまで——変なこと言わないでください。仕事してください」

悠がココアの発言に同意すると、チノは慌てて仕事をするように指示する。——面白い。

「悠くん！一緒に肝試ししよ！」

「ああ、そうだな。チノは苦手だからお留守番かな？」

「苦手じゃありません！私も行きます！」

チノが強がる様子を見てリゼがため息をつく。

「お前ら——本当にブレないな……」

半ば強制的に肝試しに参加することになったチノは部屋で後悔する。

「勢いで言ってしまったとはいえ——あんなことを言ってしまうなんて」

そう呟くと、里恵が部屋に入ってきて言った。

「それなら、お兄ちゃんと一緒に肝試しに行ってみてはどうでしょう！」
「悠さんと、ですか？——嫌な予感しかしません！絶対何か企みそうです」

チノがそう反発すると、里恵は「まあまあ」となだめてからこう続ける。

「お兄ちゃん、ホラー系には強いし大丈夫。むしろ、ココアちゃんの方が何か企んでるような——」

「ココアさんが？」

「うん、さつき部屋で楽しそうに何かを計画してたみたい」

「ココアさん——！徹底的に追い詰めます！」

チノがものすごい勢いでココアの部屋に——の前に、一度悠の部屋に寄る。

「うおっ！チノ！どうした!？」

いきなりドアをボタンと開けるチノに悠は驚く。

「緊急事態発生です！」

「——えっ?」

チノを追いかけてきた里恵とも合流し、ココアの様子がおかしいことを聞かされる。

「ココアが？なんであいつが——」

「わかりませんが、何か余計なことを考えているはずですよ」

「ココアちゃん、さつきすごい楽しそうだった」

そう報告を受け、悠は「よし、突撃しよう」と宣言して部屋を出る。
チノも後についてきた。

「行くぞ、突撃用意！」

「はい！」

悠がドアをバタンと開くと、ココアが驚きの声を上げる。

「悠くん!?それにチノちゃん!ど、どうしたのいきなり!」

「家宅搜索する!(します)」「

「えーっ!」

「な、何も無いよ!」

「うそです。絶対何か隠してます」

「お姉ちゃんを信じてよ!」

「リゼならまだ信じるかもしれないが、ココアだもんな」

「今すごいひどいこと言われた!」

チノと悠がココアの机やベッドの上を搜索する。怪しいものはない。
いと。

あるとすれば、机の下、影になっている部分に置かれた紙。

「これはなんだ!」

「そ、それはなんでもないよ!」

「おい、暴れるな!チノ、ココアは押さえるからその紙を!」

「はい!」

ココアが必死に抵抗するが、悠の力には勝てない。

「まで!」

今度はココアの部屋にリゼがやってきた。

「何をしている!？」

「リゼーなせここにー！」

「い、いや——忘れ物を取りに来たら、2階からものすごい音がしたから——」

「大変だよりぜちゃん!家宅捜索だって!」

ココアがそういうと、リゼは「家宅捜索!？」と驚きの声を上げる。

「まあそう慌てるなよ、ココアにもプライバシーはあるんだからさ」

リゼが強引に家宅捜索をするチノと悠にいう。

「いや、我ら振り回され隊が掴んだ情報によると、ココアは肝試しで何かを企んでいる!」

「なに!？」

「違うよりぜちゃん!」

「悠!いつの間に諜報スキルを身につけたんだ!？」

「そつちなのー!？」

思わずココアがリゼにツツコミを入れる。

「さてココア、命が惜しいなら答えてもらおう」

悠とチノが枕やクッションやぬいぐるみを持ってココアに近づく。

「リ、リゼちゃんになら、話す——」

「どれはどういうことだ?——まあいい、席を外すぞチノ!」

「むう——」

チノと悠は不服そうに部屋を出た。

「なんでリゼなんだ？」

「わかりません。でも、リゼさんを味方にされたら勝ち目ありませんよ」

「振り回され隊の隊長が俺たちを見捨てて寝返るとは——」

少しでも話を盗み聞きしようと耳を近づけるが、なにも聞こえない。

「いったい、ココアはなにを企んでいるんだ——」。

第七十二話 みんなで肝試し

リゼが部屋から出てきた。

「なんだったんだ？」

「リゼさんは私たちを裏切りませんよね？」

悠とチノがそう言っけてリゼを追い詰める。

リゼは少し焦った顔で

「肝試しのことじゃなかったぞ」

とだけ言った。

「じゃあなんだ？」

「リゼさん！」

さらに悠とチノがリゼを追い詰めると、リゼはすぐに方向転換して走る。

「おい待て！この裏切り者！」

「リゼさん！私は味方だと思ってました！」

「お前らー！ココアが珍しくお前らに気を使っているというのに！」

「ますます意味がわかりません！なにを吹き込まれたんですかー！！」

チノの叫びはもうリゼに届かない。

「はあ……。とりあえず、しばらくココアさんの動向に気をつけて生活しましょう」

「ああ、とてつもなく嫌な予感がする」

結局肝試しの日までなにも起きなかった。

そして肝試しの日、リゼとノリノリな千夜と怯えているシャロも参加することに。

「よし！ペアはキャンプの時と同じように、くじ引きで決めるよ！」

「――」

「そ、そんなに警戒しないでよ！」

チノと悠は完全にココアを警戒している。

「じゃあ、まずは悠くんから！」

「え、俺から!?!」

驚きつつくじ引きを引く――青色。

「次にリゼちゃん！」

リゼがくじ引きを引く――赤色。

「千夜ちゃん！」

千夜が楽しそうにくじを引く――黄色。

「シャロちゃん！」

シャロが震えた手でくじを引く――赤色。

「最後に、チノちゃん！」

チノは不安そうにくじを引く――青色。

「よし、決まりだね！私は赤だから、千夜ちゃんと一緒にだね！」

「嬉しいわココアちゃん！」

「リゼ先輩と一緒に……！」

シャロが目を輝かせる。

悠はチノの方を見ると、チノはなぜかホツとしたような顔。

「なんだ？そんなに嬉しかったのか？照れるな——」

「ち、違います！里恵さんに、悠さんはお化けに強いと聞いたので」

「いや、俺実はこういうのは——」

「不安を煽らないでください」

「冗談冗談。ビックリ系もゾクゾク系も大丈夫だ！」

「よし！出発する順番はじゃんけんで決めるよ！勝った人から何番に行くか決めてね！」

ココアがそういうと、拳を前に突き出す。

青チームの代表はチノ、そして赤チームの代表はリゼ。

「行くよー！じゃんけんポン！」

チノの一人負け。ココアとリゼはあいこだ。

「そんな——私、もうダメかもしれない」

「じゃんけんで負けただけだぞ?!」

「もう一回行くよ！じゃんけんポン！」

ココアの勝ち。こいつ本当に運がいい。

「じゃあ私3番がいい！」

「それなら、私は2番を希望する」

「私たちが最初ー!?」

チノの恐怖が最高潮に到達する。

最初が一番怖い。

「コースは、この先にあるうさぎのモニュメントを一周してここに戻ってきてね！」

「うさぎのモニュメント——！」

「チノも怖がったり期待したり忙しいな……ココアみたいだ」

目を輝かせるチノにリゼがそうつつこむと、チノは「気のせいです」と切り捨てる。

「仕方ありません！私たちから行きましょう」

「ああ——」

もちろん付近は真つ暗だ。わずかに月明かりと街の光が遠くから差し込むくらい。

「——」

「どうする？…このまま家に帰ってココアにドッキリ仕掛ける？」

怯えるチノに悠がそういうと、チノは

「ドッキリ、ですか？」

「ああ、『肝試しに行ったきり帰ってこない！』って騒ぎ始めるぜ」

「おおごとになりそうなのでパスです。——うわっ！」

チノが段差に躓く。転びかけたが、悠がチノの腕を掴んでそれを防

ぐ。

「大丈夫か？まあ暗いし仕方ないよな」

「あ、ありがとうございます——」

この時チノの顔が真っ赤だったことを2人は知らない。

第七十三話 お化けと狙撃手

しばらく夜道を進むと、街の灯りが消えてさらに暗くなる。

「うう……悠さんは本当に大丈夫なんですか？」

「ん？ああ、なんともないぞ。——怖いのか？」

「暗いから転びそうです。——お化けが怖いんじゃないやありません」

チノの言葉に、悠は少しにやけた顔で言う。

「怖いなら、しがみついてくれてもいいんだぞ」

「か、からかわないでください！子供じゃないんですから——」

「ふーん……」

「——手だけ繋いであげます。転ぶと危ないので」

「素直じゃないなくチノは」

「余計なお世話です！」

「おお、2人、手を繋いだな」

「私の計画は完璧だね！——羨ましいな」

「嫉妬するのか、計画が順調にいつてることを喜ぶのか、どっちかにしろ」

ココアとリゼ——それどころか千夜とシャロまで悠とチノの後をつけていた。

そう、この肝試しはココアの「完璧な計画」によって行われている。

「名づけて、『吊り橋効果でチノちゃんと悠くんの仲を進展させてあげようプロジェクト！』」

「名前が長い！」

シャロがそうツツコミを入れると、リゼは少し意外な顔をしてココアに言う。

「しかし、お前がそんな計画を立てるとはな。いいのか？悠にチノを持っていかれるぞ」

「妹の恋を応援するのも姉の仕事だよ」

「あれ？悠も弟っていう設定じゃなかったのか？」

リゼがそう言うのと、千夜は微笑みながら、

「あら、禁断の恋かしら」

といった。

「さ、作戦第二段階だよ！」

ココアがそう言うのと、千夜は「これでいい？」とココアに確認する。

千夜は幽霊の格好している。

「完璧だよ千夜ちゃん！」

「何も無理に驚かさなくてもいいんじゃないか？」

リゼがそう言うが、ココアは千夜にチノたちを驚かせるように伝える。

千夜はお化け役にノリノリだ。

「暗いだけで何もないな」

「そうですね——」

悠がそうフラグを立てると、すぐにそのフラグは回収された。

千夜は茂みから姿を現し、「うらめしやく」と言う。

「」

「うわああっ！」

悠は無反応だが、チノがテンプレ通り驚く。

「——だれ？」

悠がそういうと、白い物体——幽霊は自ら「幽霊よ」と言う。

「幽霊は自分から『自分は幽霊だよ』なんて言わないだろ。その声は千夜だな」

「——バレちゃった？」

「当たり前だ」

悠がそう言うと、千夜は被っていた白い布を外す。

チノの方を見ると、チノは完全に怯えてしまった。

「おいチノ、しがみついてくれるのは嬉しいが、正体は千夜だぞ？」

悠がそう言うと、チノは少しだけ顔を覗かせてホッとす。

「千夜さん——驚かさないでください」

「ごめんなさい、チノちゃん、あまりにも怖がるからつい——」

「まあ、確かにいいリアクションだったな」

「むう——」

そのまま千夜を追い返し、うさぎのモニUMENTがある場所まで歩く。

うさぎのモニUMENTの裏には、リゼが水鉄砲を構えて待ってい

た。

「私の射撃スキルで2人をあつと言わせてやる——！」

リゼがそう思いながら水鉄砲に水を補充すると、早速チノと悠が現れた。

「よし——」

リゼは水鉄砲を構える——まずはチノ。

「おっと！」

悠がチノの手を引く。チノの目の前を水が流れた。

「しまった、暗殺者だ！この辺にスナイパーがいる！」

「スナイパー！私、狙われてるんですか!？」

悠がそういうと、チノは思わず叫ぶ。

「なに!?!悠のやつSPだったのか!?!——私としたことが、もう一回だ」

そう思いつつ、リゼはもう一度水鉄砲を構える。今度のターゲットは悠。

引き金を引いて水を出す、また避けられる。

「撃ち方が甘いな、今度も千夜が襲いに来たのか？それともココアかシャロ？」

悠がそう煽ると、リゼがモニュメントから姿を表す。

「お前！特殊訓練を受けた兵士だったのか!?それとも大統領のSPか!?」
「リゼ!?お前も幽霊役か!?チノに水鉄砲を当てようとした罪は重いぞ」

悠はりゼが持つてきていた水の入ったペットボトルを没収すると、キャップを開けてリゼを脅す。

「さあ、これを頭からかぶるんだ」
「やめろお！近寄るなあ！——うわああああ!!!!」

リゼの悲鳴が森の中に響いた。

第七十四話 もふもふなお化け

「ねえ？なんか今、リゼ先輩の悲鳴聞こえなかった？」

シャロがそういうと、ココアが震え出す。

「まさか——リゼちゃん、お化けに捕まったのかな？」

「リゼ先輩に限ってそんなこと——」

「だって、千夜ちゃんも帰ってこないよ!？」

チノと悠を驚かせた後は、ココアとシャロが待機しているこの場所に集合するという話だったのだが——先に驚かせに行った千夜も、後から水鉄砲とペットボトルを持っていったリゼも帰ってくる気配がない。

「千夜ちゃん、電話にも出ない……」

ココアが不安そうにいうと、シャロが立ち上がる。

「私が探してくるわ!」

「待ってシャロちゃん!私を置いていかないで!」

シャロと後にココアも続いた。

「結局、千夜とリゼと遭遇しただけだったな」

モニュメントを一周して、帰路につくチノと悠。

リゼは背中にペットボトルの水を入れられ、悲鳴をあげながら逃げていった。

「そうですね。ですが油断はできません。まだココアさんとシャロさんがいます」

「ココアならまだわかるが、シャロも驚かせにくるのか……」

悠がそういうと、チノは「シャロさんに限ってそれはないと思いますが」という。

「あ、うさぎです」

またもやチノが磁石のようにうさぎの元へ向かう。

「この辺にも野良うさぎがいるのか」

悠がそういうと、遠くから足音が聞こえた。

「ひっ……」

チノが悠の腕を力強く抱きしめる。

「またスナイパーか、お化けか——」

近づいてくる物体はチノや悠たちを見ると悲鳴をあげて、Uターンして逃げていく。

「な、何かあったのでしょうか」

チノが震えた声で言う。

「なんとなくだけど、シャロじゃないか？多分うさぎを見て逃げたんだよ」

「うさぎ、こんなに可愛いのに——シャロさんには効果抜群ですね」

悠の推理にチノが少し笑う。
しばらくしてから、白い布を被った影が現れた。
白い影はチノに抱きつくくと、

「食っちゃまうぞ〜！」

と掠れた顔で言う。

「わ、私美味しくないです、食べないでください……」

チノが今にも失神しそうな声で言うが、白い影は抱きついたまま。
チノと悠を繋いでいた手が解ける。

「チノから離れろー！」

白い布をめくると、ココアが現れた。

「ココア！」

「作戦成功だね！」

「いや、失敗だろ」

「ところで、千夜ちゃんとりゼちゃんとシャロちゃん見なかった？」

「どんだけ行方不明者出てるんだ!？」

「なるほど、俺とチノを驚かせて吊り橋効果を狙ったんだけど、味方が
全員いなくなつたと」

「そうなの……」

「全く、しょうがないココアさんですね」

ココアが全てを白状した。

どうやらテレビで肝試しで吊り橋効果をうまく利用してカップル誕生という番組を見て影響されたらしい。

「とりあえず、その待機場所まで向かいますよう。もしかしたらすれ違ってるのかもしれませんが」

チノがそういうと、3人で元の場所へ戻る。

途中で、茂みから白い影が現れた。

「まだ続いているのか!？」

悠がそういうが、ココアは「もう終わってるよ!」と否定する。

「と、いうことは——」

白い影が完全に姿を現わす。白い影はうつすらと「ココアちゃん……」といった。

「ぎゃああああ!!」

ココアとチノは悲鳴をあげる。千夜の時より悲鳴が大きい。

よく見ると、白い影は千夜だった。白い布に泥がついているため、怖さがMAXに到達している。

「どうしたんだ千夜!」

「そ、それが……あのあと迷っちゃって、しかも段差で転んで——」
「な、なるほど……」

あのあと、千夜は遭難して不運にも段差につまづいて転んで泥を被っちゃったらしい。

リゼとシャロは、待機場所に戻っていた。2人は手を繋いで端っこに座っている。

「あら〜！」

千夜が微笑みながらそういうと、リゼもシャロもこちらに気がついたようでホッとした顔を浮かべる。

「驚かせたあと、ここに戻ったらココアもシャロも千夜もいなくなつてて焦ったぞ」

リゼがそういうと、ココアは「なんだ、すれ違っただけか」とホッとする。

「やれやれ、今回もココアのせいでカオスな行事になったな……」

悠が呆れた声で言うと、ココアはこちらの方を向いて

「それで、何かあった？」

「何か、とは……？」

チノが困惑した声で言う。おそらくココアはこの肝試しで関係が進展したのかと聞きたいようだ。

「あら、2人とも肝試し終わったのにまだ手を繋いで——微笑ましいわね〜」

千夜がそう言うと、チノと悠は慌てて手を離す。——そういえば手を繋いでいることを忘れてた。

「とりあえず、ココアとは絶交だな」

「そうですね、私たちを驚かせようとした罰です」

「そんなく!!私は2人のために思ってやったのにく!!」

「余計なお世話だ（です）」

こうして、ココアたちとの肝試しが幕を閉じた。

第七十五話 雨の日は添い寝が一番

「今日も雨だな——」

「もう梅雨の時期ですね」

今日は1日中雨やら風やら雷やらがラビットハウスを襲う。
窓の外が光り、ものすごい音になる。

「チノちゃん、もしかして怖い?」

「いえ、別に怖くないです」

「怖いならお姉ちゃんにしがみついてもいいんだよ?」

「ですから、怖くなんてないです」

今日もチノの部屋で遊んでいる。里恵は先に寝てしまったようだが。

「そんなこと言って、実はココアが怖がってるんじゃないか?」

悠がそう言ってココアの方を見ると、ココアは

「違うよ、悠くんは私をなんだと思ってるの?お姉ちゃんが雷を怖がるわけないよ」

「そうなのか?——まあそうだよな」

「うんうん!だから悠くんも怖かったらお姉ちゃんにしがみついてもいいんだよ?」

「いいのか?今いいって言ったな?」

「悠さん、何を企んでるんですか」

ココアの方へ行こうと立ち上がろうとした時、チノに裾を引っ張られる。

「さあ、そろそろ寝ますよ」

「はい——って、チノちゃん！私と一緒に寝てくれないの？」

「なんで一緒に寝ると思ったんですか？」

「雷が怖いなら添い寝してあげようと思って——」

「ココアさんが私をもふもふしたいだけじゃないですか」

確かに、ココアと一緒に寝ると必ずもふもふされて暑い思いをする
ことになる。

「そっか……チノちゃんもそういうお年頃なんだね……。わかった、
お姉ちゃんは1人で寝るよ」

そう言つてココアは部屋から出た。悠もそれに続こうと部屋を出
ようとしたが、チノに止められる。

「なんだ？何か用か？」

「あ、あの——今夜、一緒に寝ませんか？」

「おい、そのセリフをココアが聞いたらグレルぞ……」

ココアの誘いを断つてから悠を誘うチノに困惑する。

「雷が怖いならココアと寝ろよ……」

「その——ココアさんの寝相が悪くて、ベッドから落とされそうに
なったり大変なんです」

なるほど——と一瞬納得してしまつたが、雷が怖いという部分は否
定しないのか。

「まあ俺はいいけど」

「決まりですね」

ココアに勝ったという気分だ。——だが、世間体のことを考えると、あまり一緒に寝ているとそういう関係だと思われてしまうかもしれないのだが、チノはいいのだろうか。

そう思っただけでチノの方を見るとまんざらでもない様子だ。——もしかして脈ありなのか。

「雷、結構鳴ってますね」

「ああ、雨風も梅雨というより台風シーズンって感じだな」

悠がそう言っただけでチノの方を向くと、チノはこちらの顔を手で抑えて

「こっち向かないでください！——顔が近いです」

「何照れてんだよ」

「はいはいわかったわかった」という風に悠は反対側を向く。

「ってというか、一緒に寝てるこの状況は恥ずかしくないんだな」

「——恥ずかしいです」

「じゃあなんで俺を誘ったんだよ」

悠は笑ってそういうと、チノは「そういう気分なんです！」と少し強い声で言う。

そしてそのまま悠は、もう一度チノの方を向くところからかう。

「俺と『ちゅー』する？」

「い、いきなり何を言い出すんですか！」

「冗談だよ、おやすみ」

悠がもう一度反対方向へ向きを変えると、チノは

「もう——眠る直前までからかわないでください。本当にしようがない悠さんです」

と言った。

「——寝ましたか？」

チノがそう呟く。悠から返事はない。

「——今日だけ、特別です」

チノは悠の右の頬に唇をつけた。

「なあ、チノ。昨日の夜俺に何かしたか？」

「な、何もしてませんが——」

翌朝、起きてからすぐに悠は右の頬を押さえながら言う。

チノは明らかに動揺する。

「そうか？なんか——違和感がするとか、右頬が疼くとか」

「私はアレルギー物質ですか！」

チノがそうツツコミを入れると、悠はニヤリと笑って

「へえ、やっぱり昨日俺に何かしたんだ」

「——さては起きてましたね？」

チノは顔を真っ赤にして改めて

「何もしてません！気のせいです！」

とごまかした。

第七十六話 夏休みに突入!

「ただいまです」

「おかえり〜」

チノが帰ってきた。まだ午前中だが、今日は終業式だったらしい。中学は高校と違って少し終わるのが早いのか。

しばらくしてココアも帰ってきて、リゼもバイトに来了。

「チノちゃん、向こうで何を話してるんだろう?」

チノが珍しくお客と話をしているようだ。ココアもそんなチノを気にかける。

話を終えて、チノがこちらに戻ってきた。

「チノちゃん、何を話してたの?」

「コーヒー占いです。飲み終わった後に残ったコーヒーの模様で運勢を占うんです」

チノがそう説明すると、なぜかココアは「お天気占い」で対抗する。悠が「すごいな」と褒めると、チノは

「まだまだです。おじいちゃんのコーヒー占いは当たりすぎて怖いと有名でした。私はカプチーノしか当たらないんですが」

「十分すごいよ〜!リゼちゃんも何かできるの?」

ココアがリゼの方を振り向いていうと、リゼは人差し指を頭に当てながらいう。

「私は運勢とかよくわからないが——運試しといたらこれだよな!」

「ロシアンルーレット!?!」

「なんか危険な匂いがするよ!」

リゼの発言に悠とココアがつっこむ。

「私もやってみたーい!」

ココアがそういうと、早速みんなでコーヒー占いをすることになる。

「チノちゃんは、頭からうさぎが降ってくる模様が見えるよ!」

「本当だったら素敵です」

「リゼちゃんは、コインがたくさん見える——金運アップかも!」

「欲しかったものが買えるかな?」

「悠くんは、セクシーな格好でみんなの視線釘付けだよ!」

「どういうこと!?!」

ココアの滅茶苦茶な占いを見て、ティツピーがチノの頭の上で跳ねる。

「ティツピーも占いたいのか?」

悠がそういうと、ココアは「私とどっちが当たるか勝負だよ」と戦いを挑む。

そして飲み終わったカップを見てティツピーが占いを始める。

「ココアの明日の運勢は——いつもよりスパイシーな1日、外出しないのが吉じゃ」

「だって!」

「いや、お前の運勢だろ」

「リゼの将来は器量のある良き嫁になるじやろう」

「わ、私がか!?まさか〜!」

ティツピーの占いにリゼが頬を赤く染めていう。
そしてティツピーが続ける。

「昨日は夕食だけでは足りず、キッチンに侵入。実は甘えたがり、褒めると調子に乗る、適当に流すのが無難——」

「この毛玉!ただの性格診断じゃないか〜!!」

リゼがティツピーに強いチョップを与える。

ココアと悠は「当たってるんだ……」と呟く。

「悠の明日の運勢は——特に夜、恋愛運が高い。好きな人と外出すると吉じゃ」

「お、おう……」

ティツピーの意味深な占い結果に少し困惑する悠。

翌日、ココアが学校から帰ってきて一同に「結果はどうだった?」と聞きに来た。

「いや、特に何もなかったぞ」

リゼがそういうと、ココアは「占いはティツピーの勝ちだね」と負けを認める。

「私あんこが落ちてきたり、スカートめくれちゃったり、シャロちゃんにお金投げられたり、色々あって大変だったよ〜」

ココアの発言に、チノと悠は顔を合わせる。

「どうしたの？2人とも」

「今後占いは自分のためにもやめたほうがいいぞ」

悠がそういうと、ココアは「なんで!？」と驚く。

第七十七話 ココアと旅立ち

「私、みんなこと絶対忘れないよ〜!!」

「里恵、元気だな……」

ココアと悠は駅のホームで泣く。

「私だって！ココアちゃんのことも悠くんのことも忘れない！」

千夜がココアと悠の手を交互に握りながらいう。

「今日は泣かないって決めてたのに——ほら、シヤロちゃんも！」

「む、向こうに行っても連絡くらい寄越しなさいよ」

「ありがとう!!!」

「なんて良い奴らなんだ——」

ココアも悠も、送り出しにきた千夜とシヤロも泣く。

駅のホームにマヤとメグもやってきた。

「なにになに？転校するの!?!」

マヤがそう聞くと、リゼは呆れたような目で

「いや、1週間ココアの実家に向かうだけだ」

と言った。ココアも悠も駅にやってきたチノに抱きつく。

「チノちゃん！突然こんなことになってごめんね！」

「チノ！お前に出会えて本当に良かった——」

「あら、プロポーズかしら？」

悠の発言に千夜が微笑みながらいう。こいつもココアのように泣いたり笑ったり忙しいやつだ。

困惑するチノにココアがぬいぐるみを渡す。確かこれはリゼのお手製のやつ——。

「この子を私だと思ってね！」

「——これ私のじゃないですか」

悠はチノにオルゴールを渡す。

「これ、前に買ったんだ。寂しくなったら聞くんだぞ！」

「——子供じゃないです」

そう言いつつしっかり受け取ってくれるチノ。

ココアはみんなの方を向いている。

「リゼちゃん！チノちゃんをよろしくね！」

「ああ、里恵のことも頼むぞ」

「はいはい」

リゼが苦笑いしながらそう答えるが、ココアは続ける。

「きつとー人じゃ寝られないと思うから！——好き嫌いしないようにちゃんと注意してあげてね！」

ココアがそういうと、チノは怒って「早く乗ってください！」とココアに怒鳴る。

——列車の発車ベルが鳴る。

「じゃあね！みんな！向こうに着いたらまた連絡するね！」

「ああ、行ってらっしゃい！」

ココアと悠は窓から手を振ると、ホームにいるみんなも手を振る。

「で、なんで俺までココアの実家に行かなきゃいけないの?」

「店の模様替えに男手もあると助かるって手紙に書いてあったの」

悠の疑問にココアがそう答える。悠は少し納得のいかない様子で

「それならリゼを連れていけよ。俺より力あるだろ」

というと、ココアは少し目に涙をためて

「そんなに私と一緒にいるのが嫌なの——?」

と聞いてくる。

「いや、そういうわけじゃない——ただ、俺としてはチノと一緒に夏の行事を楽しみたいところなんだが」

「相変わらず悠くんはチノちゃんラブだね!」

ココアがそうからかうが、悠はもう面倒なのでスルーする。

しばらくして悠が列車の窓を開けると、ココアは「気持ちいい風!」と喜ぶ。

すると隣の席から聞き慣れた声が。

「青山さん!」

「本当どこにでもいるなこの人——」

ココアと悠が青山ブルーマウンテンの方を見ると、青山は

「ココアさんに悠さん——一緒に旅行しているんですか？」

「実家に帰るところなの！」

「俺は強制的にココアの家連れて行かれてるところです」

「青山さんは？」

「私は、自分探しの旅です」

その青山の発言にココアが座席から身を乗り出して「かつこいい！」という。

「街では花火大会の準備が始まる頃ですが——そういう時期に敢えてバカンスというのも悪くないですね」

「花火大会？」とココアが聞き返すと、青山は「去年は雨で中止だったので」という。

すると列車と列車をつなぐ扉が開き、担当編集さんが姿を現す。

「自分を探す前に、小説のネタを探してください！」

「あら……」

青山は額に冷や汗を流す。

「青山さん——あんたまだ原稿書いてなかったのか」

悠がそう言うと、青山は担当編集に腕を掴まれて連行された。

第七十八話　ココアの実家に到着

ココアの実家がある街の駅に到着し、バスに乗り換えて実家の近くまで向かう。

この街——木組みの街とは違ってヨーロッパ感は少ないが、街並みはとても綺麗だ。

「ちなみにココア、このバス何分ぐらいで到着するんだ？」

「うーんと、30分くらいかな？そこからさらに歩いて15分くらい」「どんだけ田舎なんだ!？」

都会生活に慣れてしまっている悠からしたら最寄りのバス停まで15分という事実には驚きを隠せない。

ココアのいうとおり、30分ほど経ったら最寄りのバス停に到着した。

——バス停の付近には何も無い。

ココアと悠がバスから降りる。

バス停の目の前街を一望できる。街の風景を見てココアは懐かしそうに

「うわ〜！全然変わってないな〜！」

という。悠も「この街も綺麗だな〜」と思わず呟く。

しばらく森の中を進む。——そろそろ疲れてきた。

「はあ、疲れた。疲れたけど、森の中も綺麗だな」

「でしよ〜！」

悠がそう褒めるとココアが自慢げに胸を張る。そして「もう少しだよ！」と励ます。

しばらく歩いて、ついに到着した。

「やつとついたあ〜！」

「やれやれ、本当に山奥にあるんだな——」

看板もすっかり立っている。いい雰囲気のところだ。

「ココア!？」

「もー、急に帰ってくるなんて！」

「どうしよう、こんなことになったら——」

ココアがデレデレとした様子でいう。

「連絡してなかったのか!？」

悠が驚くと、ココアは「サプライズだよ〜」と言って店の扉を開く。

「ただいま〜!!」

ココアが元気よくさういふと、モカが姿を現す——が、様子がおかしい。

「いらっしやいませ〜！」

「ラビットハウスへようこそ！」

ココアの母も現れた。そしてそのまま外のテラス席に着席させられる。

「さあお客様、こちらへどうぞ〜！」

「ウエルカムドリンクのカフェラテです」

疲れのせいか、「ココアの実家もラビットハウスだったのか」と思いつつ出されたカフェラテを口に入れる。

が、コーヒードでエネルギーがチャージされると、ココアも悠も状況がおかしいことに気がつく。

「おいしー！——って、2人とも何してるの!?!」

ココアがそういうと、モカもココアの母親も「大成功」とハイタッチ。

「サプライズ！お母さん、ココアも悠くんもびっくりしてるよ〜」

「もしかしてこのためにわざわざ衣装を!?!」

悠がそういうと、モカは頭の上に乗せた毛玉——ティツピーのつもりなのか、それをなでなでしながら「うん」と答える。

「ココアがあんまり帰ってこないから、よっぽどラビットハウスが気に入ってるのかなって——」

ココアの母親が寂しそうにそういうと、モカは

「それならいつそ、実家がラビットハウスになっちゃえばココアも帰ってくるかなって」

「——なんていい家族なんだ……」

悠がしみじみしながらココアの方を見ると、ココアは「お母さん……」と涙目でいう。

「おかえり、ココア。いらっしやい、悠くん」

そういうと、ココアは「お母さん！ただいまー！」と抱きつく。

「おやおや、ラビットハウスのお姉ちゃんはどこ行っちゃったのかな？」

モカがそういうと、ココアは「今だけいいの〜」と甘える。

「俺が弟っていう設定がやつとなくなった!?!」

と悠がせいぜいすると、モカは「それじゃあ、悠くんは私がもらうわ」とココアにいうが、ココアは慌てて

「待って待って！悠くんは私の弟だよ！」

という。

「いや、ココアの弟だしたらモカさんの弟でもあるだろ」

悠が冷静にツツコミを入れる。

第七十九話 ココアシツクとチノシツク

「ここがココアの部屋——」

「何も変わってない！」

「当たり前でしょ、まだ2年しか経ってないんだから」

モカにココアの部屋へと案内してもらい、モカは「お店の方見てくるね！」と部屋を出る。

「なんか……チノに会いたくなってきた」

「はやー！」

まだ到着して1時間ほどしか経っていないが、悠が寂しげに呟く。

「そうだ！チノちゃんに電話しようよ！」

ココアがそう言って携帯を取り出す。番号はもちろんチノの携帯。

「——」

「どうした？」

「あー！圏外になってるー!!」

「うそー!?!」

思わず悠が叫ぶ。電波すら入らない田舎だったとは——。

悠が倒れそうになると、ココアが支えて「大丈夫！」という。

「家の電話でかければいいんだよ！」

「そうか——」

そう言ってココアがチノの家——ラビットハウスへ電話をかけるが——

「あれ？お話中みたい——あとでかけよう！」

「それなら仕方ないな——ところで、明日は何をする？」

「お店のお手伝い！」

ココアがそういうと、モカが部屋に戻ってきて

「帰ってきたばかりなんだから、ゆっくりすればいいのに」

とココアに言う。

「うーん……じゃあ寝坊して、悠くと街でデートしちやおっかな？」

「それがいいわ——って、デートオ!!？」

「またデートさせられるのー!？」

モカと悠の叫び声が響く。

「電話……こなかった——」

チノが1人寂しく部屋でそう呟くと、里恵がやってきて言う。

「何かあったのかな、お兄ちゃんのことだから『チノちゃんの声が聞きたーい!』とか言っつてすぐ電話してきそうだけど」

「えっ——」

チノがわずかに顔を赤くする。

翌朝まで結局連絡はなく——。

「ココアがいないと静かだな！」

「そうだね。チノちゃんも悠さんがいなくて寂しそうだし」

ラビットハウスにチマメ隊が揃っていた。マヤとメグはチノが入れたアイスコーヒーを飲んでいる。

だが、マヤはそれを飲むと――。

「あれ？アイスコーヒーを注文したのに、これアイスココアじゃーん！」

「飲むまで気が付かないなんてうっかりさーん！」

「チノー！これアイスココア――全部アイスココア!!？」

マヤが笑ってミスを指摘しようとしてチノの方を見ると、チノがオルゴールを鳴らしながらアイスコーヒーを大量生産している。

「いっぱいお話したいことがあるから、コーヒーでも飲んでゆっくり話そうよ」

ココアがそう言って、悠にコーヒーを淹れようと誘う。

「ああ、コーヒーは俺が淹れておくから、ゆっくり話してろ」

「いいの？ありがと！私ホットココアがいい！」

「はいはい、わかったよ」

ココアは満面の笑みでそう言ってからテーブルにつく。

「それでね、チノちゃんが――」

「――」

悠はココアの話を入れたっつコーヒーを注ぐ。

「はい、できたぞ」

「ありがとー!」

「悠くんも将来はチノちゃんみたいにバリスタさんになるのかな?」

モカがそう言つてカップを口に運ぶ。それに続いてココアもカップを口に運ぶ。

「これ全部カップチーノ!!?」

「――」

「悠くん……チノちゃんに会いたすぎてコーヒーの種類間違えてるよ!」

「――え? あ、すまん」

「悠くん――チノちゃん病ね」

「やっぱりそうか――一刻も早くチノに電話しなくては」

「あれ!?悠くんがすごいやる気に!」

悠はすぐにダイニングを飛び出し、固定電話からラビットハウスへ電話をかける。

第八十話　チノと長電話？

「うおー!!」

「すごい勢い!」

「愛の力ね——」

悠がダイニングをものすごい勢いで飛び出し、固定電話からラビツトハウスへ電話をかける。

が、この時チノはラビツトハウスの掃除に夢中で電話に気が付かなかった。

「——出ない」

「なんで!?!」

これにはココアも驚く。

「うう……チノー!!」

「よしよし、お姉ちゃんが慰めてあげるね」

ココアがなでなでしてくるが、その手を払いのける。

「こうなったら歩いてでもラビツトハウスへ——」

「ここに来た目的まだ果たせてないのに!?!」

ココアが帰ろうとする悠にツツコミを入れる。

そう、わざわざ悠までここへやってきた理由は、お店の改装のためだ。

「と、とりあえず気分転換に街に出かけようよ! そうしたら携帯も使えるし——」

「ああ、せめてメールだけでも——」

ココアと悠は街へ向かい、すぐに電話をかける。
電話をかけると一瞬で繋がる。

「チノ……」

『悠さん!どうしたんですか、声が死んでます!』

「大丈夫だ、今治った——って、オルゴールの音?」

『え?』

「ははーん、さては寂しくてオルゴール鳴らしてるのか?」

『き、気のせいです!』

「連絡遅くなつてすまん。ココアの家が山奥過ぎて電波が入らないみたいで」

悠がそういうと、ココアが悠の持っている携帯をとって

「今ね、街で悠くんとデートしてるの!そつちはどう?」

『デート!?!——忙しいですよ。とつても』

若干チノが不機嫌な声になっているのが聞こえる。

「あ、それって観光客がいっぱいくる時期だから?花火大会があるつて聞いたよー」

「今年はみんなで見るとか?」

『みんなの都合が合うかどうかともわからないので、特には——』
「えー!?!」

ココアと悠がハモる。ココアは「だめ!」と言つてから

「みんなで思い出作らなきゃ!チノちゃんが誘わないなら私が誘つちやうよー!」

「そつちにいないココアが誘つてどうする」

『ごつちにいないココアさんが誘ってどうするんですか』

電話越しでも見事にハモるチノと悠にココアは大笑いする。

「2人、離れてても息はピッタリだね！」

とココアが言うと、チノが慌てて「だ、だいたい——」と話を続ける。

「当日までに帰ってこれるんですか？」

「うーん、お店の手伝いもあるし、模様替えもしなきゃだし——状況次第かな？」

ココアはそう言うと、

「でね！チノちゃんに話したいことがいっぱいあるんだ！悠くんが——」

「おい、チノにその話を——」

『長くなりそうなのでストップです』

「チノにそんな恥ずかしい話をするな」と言おうとしたが、チノに遮られる。

ココアは「そっか！」と納得して

「会ったとき話すことがなくなっちゃうもんね！」

とチノに言う。そして「大事なことで以外連絡禁止！」とまで言った。

「チノちゃんもお土産話用意しておくこと！」

『え!?!そんなこと言われても……もう切りますよ?』

明らかに動揺するチノの声。そしてココアもオルゴールの音が聞こえたのか

「あー！悠くんのオルゴール使ってるんだく！あのぬいぐるみを私だと思っで一緒寝て——」

『寂しくないです!!』

「——切られちゃった」

「なんてことを——！あと3時間はチノの声を聞こうと思っただのに——！」

「そんなに長く話したら電池なくなっちゃおうよ！」

「——切ってしまいました」

チノがそう後悔する。そしてオルゴールを鳴らしたままぬいぐるみを持ってベッドにダイブした。

第八十一話 お店のお手伝い

チノと電話してから翌日。

珍しくココアが早起きしたようで、早朝だが店の方に姿を出す。

「お、おはよー……」

そういつて扉から少しだけ顔を出すココアに、モカもココアの母親も「おはよう」と挨拶する。

「もう起きたのか？」

「3人よりも早く起きたつもりだったのに」

悠がそう言うと、ココアは悔しそうにエプロンの紐を結ぶ。

「じゃあ、早速3人で手伝ってもらおうかしら？」

ココアの母親がそういうと、ココアもモカも悠も敬礼して「さー！いえっさー！」と言う。

「やー……？」

リゼの洗脳を——否、リゼの影響を受けていないココアの母親は案の定困惑する。

しばらくして開店準備が整うと、ココアは「他に手伝うことある？」と聞く。

ココアの母親はパンの入った袋を持ってきて

「じゃあ、街まで配達を頼んでいい？」

と次の仕事を振る。——ここで悠の出番だ。

「モカさんモカさん！」

「なあに悠くん？」

ココアに聞かれないうように小声で

「バイク、ありますか？」

と聞くと、モカは大声で

「あれ!?悠くん免許持ってるの?」

「そりやそうだろ。自転車すら乗れないココアと一緒にすんな」

「なんか私バカにされてる!」

奥の方からココアの声が聞こえてくる。

モカも免許を取ったようで、店の奥からバイクを出してきた。

「これに側車をつけて3人乗りね!今日は悠くんに運転してもらおっかな」

「やっとなの出番か——そういえばココアは知ってるのか?」

悠がそう聞くと、モカは「サプライズ!」と答えた。

何も知らないココアは店から呑気に出てくる。

「ゆっくりお話ししながらお散歩!」

「さあ、これに乗って!」

モカと悠の息ぴったりりのセリフにココアは思わず驚きの声を上げる。

「2人はいつも私の想像の上をいくよ!」

「2人ともいつの間免許取ったの〜?」

ココアがびつくりしたような顔で言う。

確かに、あの街では悠は運転する機会なんてなかった。

「よし!街に入るぜ〜!」

「おー!!」

「いやー、にしてもこの街も綺麗だ。毎朝こうやってドライブしたいな」

悠がそう言うと、モカは

「あら、このままここに住んでくれてもいいのに」

と言うと、ココアは「そんなあ!悠くんは私の妹だよ!」とモカの提案に反抗する。

「ところで悠くん、チノちゃんを後ろに乗せてデートしないの?」

「2人——いつの間に関係に?!」

ココアの意味深な発言に今度はモカが驚く。

「断じてそう言う関係じゃないが——よし!帰ったら誘ってみるか!」

悠がそう言ってバイクの速度を上げると、モカが「いえーい!」とはしゃぐ。

目的地に到着し、モカが家のブザーを鳴らす。
すると家から年老いた女性が出てきた。

「いつもありがとうね——あら、新人さん？」

「いえ、数日間だけの手伝いみたいなもんです」

「あらまあ……」

「はい、これいつものね！」

そう言つてモカが袋を差し出すと、女性はココアを見つけたよう

「ココアちゃん？帰つてたのね」

「うえっ……」

「あらどうしたの？」

道端で倒れているココアを心配する。

「そ、それが——はしゃいでウイリーまでしちゃつて」

「私も悠くんは無茶言つてアクロバティックな運転をさせてしまつて」

悠とモカがそっぽ向きながら説明する。

配達が終わつた後は、街で朝食を摂ることに。

「ココア、もう大丈夫か？」

「んー！この空気吸つたら回復したよー！」

悠が心配そうに尋ねると、ココアは背伸びをして言う。

「爽やかな朝はここで飯が一番だね！」

「はっ！いま街にいますと言うことは——チノに電話ができる!!」
「あ！そっか！」

ココアはポケットから携帯を取り出すとメールの確認をする。
そしてチノの携帯の番号を入力して悠に手渡す。

「まあ、悠くん。チノちゃん大好きなのね」

モカのその発言も無視して電話がかかると待つ。——出た。

『もしもし——』

「チノか？」

『悠さん！おはようございます。どうかしたんですか？』

「いや、街に来たから電話しようと思って。ちゃんと生きてるよな？」

「——安否確認？」

ココアとモカが首をかしげるが、悠は続ける。

『問題ないです。それより聞いてください、私、みんなを花火誘えました』

チノがそういうと、悠は目に涙をためて

「そうか——偉い偉い……成長したな……」

と携帯を撫でる。

「携帯撫でてどうするの」

これにはモカも苦笑いする。

「ココア！チノが——チノが花火大会にみんなを誘えたって！」
「そうなの!?すごい!!」

ココアも携帯を撫でると、チノが少し恥ずかしそうに

『2人とも大きすぎます』

と言った。

第八十二話 ココアの夢は魔法使い？

チノと電話した後、朝食を食べながらモカがふと言った。

「ねえ、ココアが一番最初になりたいものって知ってる？」

「え？なにそれ！きになる！」

モカの発言に悠が食いつくと、ココアは覚えていないという様子で「んー？」という。

モカは「魔法使い！」と答える。

「お姉ちゃん！うさぎさんになーれ！」

ココアがそういうと、モカは自分の立っていた場所に「モカ」と書かれた看板を持たせたうさぎのぬいぐるみを置き、物陰に隠れる。するとココアは焦って「お姉ちゃん!？」と問いかけるが、返事はない。

そして泣きながら「戻って！戻ってー！」と魔法をかける様子を見て、モカは

「サプラーイズ！」

と物陰でつぶやいた。

モカと悠は面白おかしい話に目に涙を浮かべながらクスクスと笑いを抑える。

「あの時のココアを思い出すだけで――」

「想像したら笑いが止まらなく――」

そうモカと悠が言うと、ココアは頬を膨らませて

「2人とも、嫌い！」

と言った。

それから、店に戻った後もココアの機嫌は直らず。

「そう気を落とすなよ、ただの照れ隠しだろ」

そう言うが、悠の脳裏にはチノに「大嫌いです！」と言われたあの日の出来事が蘇る。

「——いや、その気持ちわかるぞモカさん！」

「あの目は本気だった——」

モカがそう言うと、ココアの母親は「そうかしら?。」とココアの方を見る。

ココアの母親はいつもココアやモカがやっている「お姉ちゃんに任せなさい!。」とポーズをとると、

「お母さんに任せなさい!。——元氣の出るご飯を作る?お風呂沸かしておく?それとも——」

とどこまでかは「いいお母さんだ——」と思える発言だが、この後とんでもないことをドヤ顔で言い出す。

「私が代わりに妹になる?。」

「ちよつとそれは無理があるよ!。」

モカがツツコミを入れる。

——とその時、店を大きな揺れが襲う。

「なんだ？地震か!？」

「始まる——!朝フエアーストコンタクトごはんの時間が!」

「——は?」

悠が困惑した様子でいると、ココアの母親が「お客さんの足音よ」と補足してくれる。

「ココア、手紙にも書いたでしょう?ココアがいない間、ちよっとお客さんが増えたの」

「ちよっと増えたどころじゃないよね!」

ココアがツツコミを入れる。——激しく同意だ。

「それでは——開店前にお母さんから一言!」

モカがそう言うのと、母親はしばらく間を置いてから自分の手首を触る。

「さつき、手首を捻っちゃったの——病院行ってくるわ」

それだけ言って店を後にした。

「「えーっ!!」」

店に虚しく残された3人は顔を青ざめる。

「こうなったら、私たち3人で乗り切るしかないね!」

モカがそう言うと、ココアは「うん！」と返事をする。もはや喧嘩している場合ではない。

「ラビットハウスで身につけた接客術を披露するチャンスだよ！ね、悠くん！」

「ああ、そうだな！」

「期待してるよ!!」

とは言ったものの、正直ココアと悠では全くさばき切れないほど店は混雑する。

ココアと悠はものすごいスピードで手を動かしながら悲鳴をあげる。

「あれ!?!私の接客術はー!?!」

「順番待ちのお客までいるぞー!」

モカが巧みにお客をさばいていく。店内にも店外にも列ができている。

モカはココアと悠の袋を取り上げると、

「もつと早くー！袋詰めは3秒を目標に！」

「フオローまで完璧!!」

思わずココアと悠がハモる。

「ありがとうございますー!」

モカがそう言うと、最後の客は店の扉を閉める。

「ふう……ようやくひと段落したね！」

「っ、疲れた……」

「ラビットハウス1ヶ月分くらい働いた気がする……」

悠とココアはそう言って倒れこむ。

第八十三話 店の模様替え

今日はこれで店じまい。

この後、いよいよ模様替えスタートだ。

「さて、この棚をそっちに持っていけばいいんだな？」

「そうそう！あ、足気をつけて！」

「痛つたい!!もつと早く言ってくれ！」

「ごめんごめん！」

悠とモカは2人がかりで棚を動かす。ココアは主に店の掃除と棚の雑巾がけだ。

「2人とも大丈夫？やっぱり私も手伝おうか？」

「ううん、悠くんと私だけで大丈夫だよ！ココアはそっちのテーブルを拭いて！」

「そう？わかったよ」

モカも意外と力がある。重い棚も2人で持ち上げれば動かせるほどだ。

「これでよし！やれやれ、今日は疲れる日だな」

「お疲れ様〜！やっぱり男の子がいると頼もしいね！」

「お兄ちゃんたち、なかなか帰ってこれないもんね〜」

ココアも任務完了したようで、こちらにやってくる。

「あ、それココア、もしかしてデジカメ？」

「ん？——うん！そうだよ！」

ココアが持っていたデジカメを悠に見せると、

「あ！そうだ！せっかくだから3人で記念撮影しようよ！」

「そうね！お店も綺麗に新しくなったし！」

「ああ——」

ココアとモカと悠の3人で記念写真をパシヤリと撮影した後、悠はあることに気がつく。

「あれ？これ昔の写真もある——」

「そうだよー！あ、見て！これチノちゃんが——」

「チノ……!!」

「何かスイッチ入った!?!」

「みんな可愛い——えへへ」

悠とモカが写真を見てデレはじめると、ココアの母親が帰ってきた。

「あら？お店の様様替えまでもうしてくれたの!?!」

「サプライズ！」

「モカさんいつもサプライズしてますね……」

「手首の方は大丈夫ですか？」

悠がそう言うと、ココアも「そうだよ、心配したんだから」と言うが、ココアの母親は

「うん！みんなが手伝ってくれたおかげで助かっちゃった！」

そう言ってココアの持ってきた写真を眺める。

「夏の思い出、たくさん作ってるのね——」

「うん！明日は花火大会があるんだって！チノちゃんにいっぱい写真撮ってもらうんだ！」

ココアがそう言うと、ココアの母親は少し首を傾げて

「2人は行かなくていいの？」

「だって、お母さんお店大変そうだし」

「まだ手首も治ってないんでしょう？」

ココアと悠がそう言うと、ココアの母親は諦めた様子で

「お母さんね——この手の怪我、嘘なの」

「えーっ!?!」

ココアと悠が叫ぶ。その様子を見てココアの母親は笑って

「みんなで仲良くしているところが見たくて——ごめんね」

と謝る。ココアは思わず席から立ち上がって「もう！」と言う。

「でも、2人の思い出の写真もたくさん見たいな——2人はどうしたい？」

「——」

「やつほーチノ！一緒にお風呂はいろー！」

「豆風呂だよ」

「えーっ!?!」

その頃ラビットハウスには、みんなが揃っていた。

「今日はお泊まりだからね！チノのお父さんには予約済みだよ！」
「明日は花火大会だもん。今年はみんなで行けそうで嬉しいな」

マヤとメグはそう言うが、チノはどこか浮かない顔をしている。
だがそれを2人はスルーして

「まさかチノから誘われるなんてねー！」

「昔は興味なさそうにしてたのにー！」

「――昔は関係ないです」

「あー！照れてるー！」

「シャボン玉攻撃〜！」

顔を赤くするチノにシャボン玉を吹きかけるマヤにチノが

「明日が花火大会だからと言って浮かれすぎです！2人とも！」

と怒る。

第八十四話 花火大会は全員で

「——もふもふ……」

「ココア——起きてちょうだい……」

「——もふもふ……」

翌朝、今日は花火大会の日だ。ココアの母親がココアを起ここしに行ってくれたが——。

「ココアを起ここしに行ったのになんでもふもふされてるんですか!？」

「ついうっかり——」

悠がそう怒鳴ると、2人はベッドから身を起こす。

「ココア!もう支度しないと今日中に帰れないぞ!」

悠がココアを揺さぶるが、ココアは寝ぼけた様子で

「おはよう——チノちゃん……」

「俺はチノじゃねえ!心はすっかり向こうだ!!」

ココアの母親が慌てて支度をする、ココアは

「私のコスチューム忘れないでね——」

とまだ寝ぼけている。いったいどんな夢を見たのやら。

「ココアと悠くん、トランクは送っておくでいいんだよね?」

「はい」

ココアはまだ朝食を食べている。おそらく半分寝ているのだろう。

一口が遅い。

「最後まで慌ただしかったわね——」

ココアの母親がそう言うと、モカも悠も「うんうん」とうなずく。

「今度はモカさんが運転してくれるのか」

「お姉ちゃんに任せなさい！」

——不安だ。

ココアが「行ってきます！」と母親に告げてから、出発した。

帰りの列車の中で、また青山ブルーマウンテンと遭遇した。

「あら、お帰りですか？」

「うん！チノちゃんたちと花火大会に行くんだ〜！」

ココアがそう言うと、青山ブルーマウンテンは「それはいいですね」
とうなずく。

そして、ココアと悠に浴衣と地図を差し出す。

「よかったらこれを——」

「ずいぶんと用意がいいいな!？」

夕日は沈み、辺りは暗くなった。

ココアと悠は青山ブルーマウンテンからの地図を元に「穴場スポット」へ向かっていたのだが——

「やっぱり道に迷うよな」

案内をココアに任せたら、案の定道に迷った。

「大丈夫！お姉ちゃんに任せなさい！」

——不安だ。

その時、打ち上げ花火が放たれた。

「信号弾!?!」

ココアと悠がそう言つて茂みの中を進むと——チノの声が聞こえた。

「一番はしゃいでいるのはシャロさんでしたね——」

そして、花火大会まであと1分となった。

「——みんなで一緒に見たかったな……」

チノがそう呟くと、その背後で悠が肩をトントンと叩く。
チノがこちらへ振り向いた瞬間、ほっぺたに指を当てる。

「みんな〜!!」

ココアがそう叫んだ瞬間、大きな花火が夜空を照らし出す。

「えっ——悠さん、なんで——」

「ただいまー!!!」

「たーまやー!!」

ココアが叫ぶが、花火の大きな音と一同の声に消される。

「私を見てー!!」

ココアが慌ててそう叫ぶと、チノが驚いた顔でこちらを眺めてくる。

「サプライズだよ、チノ」

「全く、ココアさんに影響されすぎです」

「でも、どうしてこの場所が？」

「青山さんに会ったんだよ。浴衣もあの人が用意してた」

悠がそう説明すると、チノは「用意がいいですね……」と返す。

「暗くて迷っちゃったんだけど、誰かが信号弾を上げてくれたおかげで辿り着いたよー！」

ココアがそう言うと、シャロは少し焦った顔で「そ、そう……それはよかったわね」と言う。

——さてはカフェインでハイになってたな。

そしてマヤとメグはココアと悠の頭に「私たちからもサプライズだよー！」とお面をつける。

「屋台で取った景品だよー」

驚くココアと悠にメグがそういうと、ココアは「かわいいー！」と早速気に入った様子。

そしてココアがリゼに言う。

「そうだリゼちゃん、帰ってきたからには、お姉ちゃんの座は返してもらうよ」

「初めから預かってないぞ！」

そんなやりとりを小耳に挟んでおきつつ、悠はチノに抱きつく。

「はあくやつと会えた……。チノも俺がいなくて寂しかったんだろ？」

悠がそういうと、チノは「離してください！」と悠を突き放す。

「別に寂しくなんてなかったです」

「あら、その割にはずっとオルゴール鳴らしてたわよね」

千夜がニコニコしながらそう言うと、チノは「音色が気に入っただけですよ！」とごまかした。

第八十五話 夏祭りで……（前編）

「さ、みんな揃ったし屋台で何かやるよ〜！」

「あ、俺かき氷食べたい」

ココアと悠が屋台が並んでいる場所へ向かう。花火はあと1時間ほどは行われるらしい。

「ま、待ってください！走ると転びますよ〜！」

ココアと悠が走っていくと、チノも慌てて追いかける。

「あの3人——楽しそうだな」

「そうね」

「今日はココアも悠もはしやぎすぎね——帰ってくるなら連絡くらいしなさいよ」

「シャロちゃんが言うの？」

取り残されたリゼ、千夜、シャロとマメ隊はこれからどうするのか話し合う。

「私たちも回るか」

「そうしましょ！まだまだ夜は長いわ！」

リゼがそう言ってココアたちを追うと、全員それについてくる。

「あ、みてみて悠くん！射的だよ〜」

「よし、リゼ！俺とチノを賭けて勝負だ！」

「私を賭けないでください！」

「ふっ、私に勝負を仕掛けるとは——悪いがチノはもらうぞ」

悠がりゼと勝負するが、なぜか賭けるのはチノ。
当のチノは困惑しつつ、

「一番奥にあるあのうさぎのぬいぐるみが欲しいです」

と店の奥に2つ置いてあるぬいぐるみを指差して言うと、リゼは
ルールを説明する。

「あのぬいぐるみを少ない弾数で取った方が勝ちだ！」

「よし！まずは俺からいくぜ！——俺は右のやつを取る」

「わかった、なら私は左のやつを取る！」

結果は、引き分け。両者ともに1発で命中させた。

「なかなかやるなりゼ……」

「お前の方こそ——やはりこの街へ来る前はSPだったのか!？」

「2人とも盛り上がりすぎ〜！」

白熱した戦いを繰り広げるリゼと悠にマヤが言う。

「私もチノちゃんにかっこいいところ見せるよー！」

今度はココアがそう言って金魚すくいを始める。——が、全く取れない。

「これが、かっこいいところ……」

チノがそう呟くと、ココアは「こ、これは練習だよ！」とごまかす。
一方リゼと悠はまたバトルをしていた。

「よし！輪投げで1等当てたぞ！」

「くっ……私としたことが手先が狂ってしまった！」

その光景を見て、チマメ隊は

「悠さんもリゼさんも子供っぽいです」

「私たちより満喫してんじゃん！」

「2人とも楽しそう〜」

とそれぞれに感想を述べる。

輪投げでここまで激しい戦いを繰り広げているのはおそらくリゼと悠だけだ。

「——意外と難易度高かったな」

「ああ……。まさかこの私が悠に負けるなんて」

「残念だったな、俺は小学校の時に夏祭りで鍛えてたんだ」

輪投げを終えたりゼと悠は取った景品を全てチノに渡す。

「こ、こんなに持てません！」

「す、すまんチノ……つい盛り上がっちゃって」

「リゼは負けず嫌いだからなく」

両手に大量の景品を抱えるチノが悲鳴をあげると、リゼが「やりすぎた」と謝罪する。

「あれ？」

「ん？どうした？」

いつの間にか、ココアと悠だけになっていた。

「チノちゃんたちは？」

「さあ……そういえばさつきから見かけないな」

悠は重大なことに気がつく。

「——しまった！俺とされたことが！」

「どうしたの悠くん！」

「夏祭りで『人混みで迷子になったら大変だから、手繋ごう？』って言う定番のイベントを逃した！」

「もしかして迷子になっちゃったのかな!？」

時すでに遅し、チノたちはどこかへ行ってしまった。

第八十六話 夏祭りで……（後編）

「悠さん！ココアさん！——どこへ行ってしまったのでしょうか」
「ココアはともかく、悠も迷子とはな……」

リゼが呆れた様子で言う。ベンチに座ってたこ焼きを食べているのだが、ココアと悠の姿が見えない。

「とりあえずメールしましょうか」

チノが「どこにいるんですか？」とメールすると、すぐにココアから返信が来る。

『こちらバーカリー保登姉弟！どうやら遭難したようだ！信号弾求む！』

「ココアさんがリゼさんに影響されてます！」

「——えっ？」

ココアからの返信を見たチノがリゼにそう言うと、案の定リゼは困惑する。

「むう……悠さんをラビットハウスからココアさんのパン屋さんに取られてしまいました」

「そういう問題じゃない！」

頬を膨らませるチノにリゼがツツコミを入れる。

結局、しばらくして合流することができたが、めちやくちやチノに叱られた。

「なら、もう迷子にならないように手を繋ぎましょう?」

千夜がそう提案すると、悠は心の中で「よく言った!!」と絶賛する。

「——なんかおかしくないか?」

手を繋ぐ、というよりも肩に手を置いて「列車ごっこ」になっている。

「もう、仕方がないので悠さんとココアさんは私が監視します」

チノはそう言つてココアと悠の手を握る。

「ほほえま〜!ラビットハウスさんの絆は固いわね!」

千夜はそういうが、リゼがその中に自分が含まれていないことに落ち込む。

「私だけ置いていかれた気分だ……」

リゼがそう呟くと、またコーヒーを飲んでハイテンションになったシャロがリゼと千夜の手を握る。

「私たちも手を繋いで踊るわよ!」

「シャロ……」

「まあ、シャロちゃんったら積極的ね!」

さらにその光景を見たマヤとメグも手を繋ぐ。

「あ、かき氷だ。やっぱ夏祭りといったらこれだな」

「私全部のシロップを混ぜてみたーい！」

「お前は小学生か」

「そんなこと言わずに！悠くんにもかけちゃうよー！」

「やめろー!!」

「なんかすごく仲良くなってるー!?!」

かき氷のシロップで遊ぼうとするココアを悠が止める様子を見てチノが言う。

悠が持つてきたかき氷をチノの首元に当てるとチノは「ひゃう!?!」と声を上げる。

「な、何するんです——」

「お前の分だぞチノ！ココアの魔の手からは守ったから安心しろよな」

悠が笑ってそう言うと、チノは「あ、ありがとうございます」と少しだけ顔を赤くしてかき氷を口に入れる。

「ココアさんの実家、どうでしたか？」

かき氷を食べながらチノが聞いてきた。ココアは向こうでマヤとメグと遊んでいる。

「とつてもいい雰囲気だった——街もこことは一味違う感じで新鮮だったぞ」

「そうでしたか——。私、悠さんが帰ってきてくれて嬉しいです」

「チノ——」

「みんなで花火を見られて良かったです——悠さん！そんなにいっぱい食べたら——」

チノが無自覚で発した言葉に恥ずかしさを隠しきれず、悠はかき氷

を大量に口に含む。

「頭があ!!」

「大丈夫ですか」

キーンと脳に響き、頭を押さえるとチノが頭をなでなでしてくる。

「な、なんかチノも俺がいない間に変わったな——」

「そうでしょうか?」

「ああ——」

やたら積極的なチノに感動する悠であった。

第八十七話 ホームシックなココア（前編）

ココアの実家から帰ってきて数日後。

ココアと悠のトランクと一緒にダンボール箱も送られてきた。

「なんだろうー」

ココアがダンボールを開けると、中から大量のジャムが出てきた。

「実家のお手製ジャムだー！お姉ちゃんが作った手作りスコーンによくつけて食べたな〜」

ココアがしんみりした様子でそう言うと、リゼは不安そうに

「早速ホームシックか……」

そしてチノは気を使って

「今日はもう休んで、どこかへ出かけてください」

とココアに言うが、ココアは「なんで!？」と驚く。

「ココア、ついに解雇されるのか……恐ろしい世の中だ」

悠が真剣な顔でそう言うと、ココアは「そんなあ!!」と泣き叫ぶ。
そしてチノとリゼが続ける。

「ですがココアさんだけだと心配なので悠さんも一緒に行ってください
い」

「ああ、そうだな。ついでにこの毛玉も連れて行け！」

「わーい！やったー！一緒にお出かけしようね！悠くん！ティツピー

！」

「——えっ」

悠とティツピーはなぜか巻き込まれたことに困惑する。

「夕焼けが綺麗だね！」

「あ、ああ……」

ココアはティツピーを抱えて小高い丘から夕日を眺める。

「私、お姉ちゃんとしてチノちゃんや悠くんのお手本になれるかな？」

「——それは……うん……」

悠が言葉を濁すと、ココアが「あれ!? すごい微妙そう!？」とシヨツクを受ける。

「リゼちゃんとは仲良くなれたけど、変な子って思われてないかな?」

「リゼの方が思ってたそうだけだな」

「そうかな? 私は銃を持っているところ以外は普通だと思うよ」

「ああ、俺もだ。銃とナイフがなければ普通の女子高生だな」

リゼの話で盛り上がるココアと悠だが、ココアはティツピーをしばらく眺めて言う。

「そうだ! 今からティツピーを可愛く変身させちゃうよ!」

「なぬ!？」

ティツピーが冷や汗を流すが、ココアはそれに構わずアクセサリ―シヨツプへ。

「お客さん！今日もキマってるね〜！」

と言いながらあれこれアクセサリをティツピーにつけ始める。悠もそれに便乗しティツピーにアクセサリをつけたり、小物を頭に置いたり遊び始める。

ティツピーは「やれやれ」と呆れた顔。——まるではしゃぐ孫に付き合うおじいちゃんのような風格だ。

「お、これとかティツピーに似合うんじゃないか？」

「こつちの方がいいよー！」

「あ、やっぱこれだろ！」

「こつちかな？」

「ええい！アクセサリ多すぎて体が重いわ！」

延々とアクセサリをティツピーにつけるココアと悠にティツピーがそう怒鳴る。

「ふう〜！ちよつと疲れたから休憩〜」

公園で一休み。ココアが悠の膝にティツピーを置いてから寝始める。

「お、重い……小僧、早く小娘を起こせえ！」

ティツピーが悠にそう怒鳴るが、悠もココアにつられて寝てしま

う。

「すっかり熟睡しちゃったよー」

「俺まで寝てしまうとは——そういえば腹減ったな」

「そうだね〜。甘兎庵で新作の試食しない？千夜ちゃんに誘われてる

「んだ〜」

「いいね、そうしよう」

ココアと悠は瀕死のティツピーをさらに連れ回し、甘兎庵へ向かう。

「ん〜、これも美味しい〜!」

「ああ、千夜は才能あるよ……」

「ぬおおおお!!!」

美味しそうに千夜が作った新作を試食しているココアと悠だが、その隣ではティツピーがあんこに追われている。

甘兎庵から出てきた頃には、ティツピーはボロボロになっていた。

「こ、これが若さか——」

「なんだよティツピー、そんなに疲れたのか?」

ココアの後ろをティツピーを持った悠が歩く。

「わ、わしも一応歳じゃからな……」

「そんなんじやチノに追い越されちやうぞ」

「わしはチノをこんなにはしやぐ孫に育てた覚えはないぞ!?!」

ティツピーは二度とココアと出掛けないと心の誓うのであった。

第八十八話 ホームシックなココア（後編）

ラビットハウスへの帰り道。悠が「ココア」と呼ぶとココアはこちらを向く。

「どうしたの？まだお姉ちゃんと遊びたいのかな？」

「いや、俺は大丈夫だが、ティツピーがもう瀕死だ」

「勘弁しておくれ……」

思わずティツピーがココアを目の前に喋ると、ココアは

「悠くんも腹話術が使えるの!？」

と変なところに驚く。いい加減中身がチノの祖父だということに気がつけよ。

「それよりココア——その、あんまり気を落とすなよ」

「——いきなりどうしたの？」

「たまには実家にいる時みたいに過ごしたらどうだ？」

「——?」

ココアが不思議そうな顔でこちらを見てくるが、ラビットハウスの外回りを掃除していたリゼもココアに言う。

「ココア——気遣ってやれなくてすまない。たまには実家にいる気持ちで——私を姉と置いていいんだぞ」

「2人とも今日はどうしたの!？」

なぜかココアを心配するリゼと悠に困惑の声を上げる。

ラビットハウスに帰ると、チノがテーブルにスコーンを置いてい

た。

添えられていた手紙には「実家のより美味しくないと思いますが」とチマメ隊からのメッセージが書かれた。

「どうやら、実家の味を再現してココア慰めようとしたらしい。しかしココアはいつもの調子で

「お姉ちゃんの前よりはるかに美味しいに決まってるよ！」

と叫ぶ。

「モカさんの作るスコーンはそんなにまずいのか？」

「そうなの……パンは上手なのにスコーンの味がひどくて。いつもジャムで味をごまかしてたんだ」

「トラウマが蘇って落ち込んだのか!？」

悠がそう言うと、ココアはカレンダーを取り出して

「今日を『妹がお姉ちゃんのために』記念日にしよう！」

と宣言すると、チノが「やめてください」と部屋に突入してくる。

そしてココアはチノが作ったスコーンを食べながら昔話を始める。

「前に一回、この街に来たことあるんだよ。小さい頃だったからよく覚えてないんだけど、すごい楽しかったの」

「前に一回来てたのか——」

「それで、こここの高校にしよう！って思って受験したんだよ」

ココアがそう言うが、チノと悠の視線はスコーンに釘付けだった。
なぜなら——

「ところでココアさん、ジャムかけすぎじゃないですか？」
「ま、まずくないよ!？」

ココアが慌ててそう言うと、チノは

「マヤさんのを先に食べたんですね」

と言う。——マヤ、いったい何を作り出したんだ。

と、結局ココアがホームシックになっていたわけではなく、安心する一同だった。

「モカさん、スコーン作りが苦手だったんですか——それでジャムを」

悠から話を聞いたチノは納得する。

「それと——どうしてティツピーがデコレーションされてるんですか!？」

チノがティツピーを指差して悠に聞く。ティツピーには大量のりボンがつけられており、心なしか毛並みも少し悪くなっているような気がする。

「あ、ああ……ココアといはしゃいじやって——連れ回してしまっ
た」

「おじいちゃん——」

「やれやれ、2人には参ったのう」

チノが心配そうに見つめてくると、ティツピーが苦笑いする。

「もう——本当にしようがないお2人です」

チノが呆れた様子でそう言った。

第八十九話 振り回され隊隊員会議

「集まってもらったのは他でもない。——ココアと千夜についてだ」

たまにフルール・ド・ラパンの店内は、「振り回され隊」が集合する場所になる。

今日も隊長のリゼに一同が呼び出された。

「それで、今日はどうしたんですか？先輩」

「ああ——実はココアと千夜が昨日恐ろしい会話をしていたんだ」

「恐ろしい会話？」

悠がリゼに聞くと、リゼは昨日の話を始めた。

「ねえココアちゃん？チノちゃんって酔ったら可愛いわよね」

「そうだね〜普段のチノちゃんとのギャップがたまらないよ〜！」

千夜とココアが2人で遊んでいるところを偶然リゼが目撃した。

「なんの会話しているんだ」と尾行すると——。

「そうだわ、今度の休み、みんなでお泊まり会しましょう？」

「賛成〜！——でも急にどうして？」

「実はね、うちに洋酒入りのお菓子がお得様から届いたの」

「何ですと〜！」

ココアが驚く。リゼは物陰に隠れながら震える。——まさか。

「これでみんなを酔わせてみましょう？」

「面白そう！悠くんが酔ってるところも見たいな〜」

「あ、悪魔のようだ……」

リゼのつぶやきは誰にも届かない。ココアと千夜は浮かれた様子でリゼの視界から消えた。

「なんと言うことだ……」

その話を聞いた悠も震える。

「なんでそんないいことをもつと早く教えてくれなかったんだ!？」
「そっちですか!」

悠がおかしなところに反応するため、思わずチノがツツコミを入れる。
「……」

リゼは「ごほん」と一度咳払いをしてから場を仕切り直す。

「——それでだな、このままだと我々の身が危ない」

「そうね——私も昔コーヒで酔わされていろんなことされてきたし……」

「なにをされたんだ!？」

シャロの発言に今度は悠がツツコミを入れる。

「私は洋酒入りのお菓子で酔うことはないが、みんなはどうだ?」

リゼが一人一人に聞いていく。

「私は別に酔いませんよ」

「チノ、この前酔ってただろ」

「あれは演技です」

悠の追求をチノはかわす。あれが演技って——それはそれですごくいい。

「俺も多分酔わないと思う」

「私はカフェインが入ってたらダメ」

やはり、酔うのはチノとシャロか。

「チノとシャロが危ないな。どうするリゼ」

「ココアと千夜の動きを止めなくてはいけないな」

「どうやってですか？」

「甘兎庵に突撃するか？」

悠の好戦的な提案に、リゼは「できれば、平和的に解決したいが」と前置きするが

「チノ、今週末にお泊まり会をするって話聞いたか？」

「そういえば——今朝聞いたような気がします」

「そうか。おそらくだが、千夜はその日にブツを持ってくるはずだ。そこを襲撃する」

「なるほど……」

悠が納得すると、シャロもそれに続いて「そうですね、それがいいと思います」と同意。

「襲撃するのは私がやろう」

リゼが銃を構えてそう言うが、シャロは

「そんな！危険すぎます！」

「大丈夫だ。私は訓練しているし、万が一食べさせられても被害はな

い」

「リゼさん——」

「俺も参加しようか？」

悠も酔わない方だ。悠も襲撃に参加した方が戦力的にはいいだろう。

だが、リゼは首を横に振って

「心配するな。相手はココアと千夜だ、私1人でなんとかなる」

とリゼはいう。そしてこう続けた。

「万が一を想定して悠、お前は防御に回ってくれ」

「なるほど、チノとシャロと里恵は俺が守れと」

「そうだ、頼んだぞ——元SPの実力を見せてくれ」

「別にSPじゃないが、任せろ！」

手をがつつりと繋いで絆を確かめる（？）2人にチノとシャロは

「熱いです」

「リゼ先輩——悠と手を繋いでる……」

と冷たい視線を送るのだった。

第九十話 お泊り会の開会式は激闘から

そして、お泊まり会当日がやってきた。

振り回され隊は常に厳戒態勢だ。

会場のラビットハウスにシャロが千夜より先に到着。

「よし、覚悟はいいかお前ら！」

「イエッサー!!」

「い、イエッサー……」

リゼの掛け声に悠とシャロと、そして弱々しくチノが敬礼した。

「もうすぐ千夜がやってくる！部屋に入ったらすぐに奇襲攻撃だ」

「ココアはどこに？」

悠がラビットハウスのホールをキョロキョロと見回してそう言う
と、チノが

「大丈夫です、ティッピーと千夜さんを迎えに行くように言いました」

「またティッピーが身代わりにされたのか……」

なかなか祖父使いが荒い。思わずティッピー——否、チノの祖父に
同情する。

「よし、総員配置へ！」

リゼの掛け声一同が動く。

しばらくしてココアと千夜がやってきた。

「ただいま〜！」

「お邪魔しまーす」

ココアと千夜の声が聞こえた瞬間、振り回され隊の表情が硬くなる。

「行くぞ——ブツの場所が判明するまでは待機だ」

「ああ——」

「はい！」

「準備万端です」

それぞれがそう答えると、チノの部屋の扉が開く。

「あ、もうみんな揃ってる！」

「あら、シャロちゃん。先に来てたのね」

「え、ええそうよ！」

シャロはいつ始まるのかとドキドキしながら千夜の言葉に答える。

「さて、そんなみんなにプレゼントがありまーす！」

ココアがそういうと、千夜はカバンを開ける。

——カバンの中！

場所が判明した瞬間、リゼが合図をかける。

「じゃーん！この前のリゼちゃんが持ってきてくれたチョコレートに似た、『高そうな』チョコレートよ」

「すごいよ千夜ちゃん！私食べてみたいーい！」

「早速みんなで食べま——あらやだ、蚊が入ってきたわ」

リゼがチョコレート箱を取ろうと飛びかかるが、千夜は「偶然」それをかわす。

「くそ！なんとしてでもそれをもらおう……！」

「リゼちゃん、そんなに食べたかったの？仕方ないな」

「まあ、リゼちゃんったら、食いしん坊さんね」

「違う！その逆だ！」

リゼがココアと千夜に飛びかかると2人もリゼに応戦する。

「お、おいリゼ！俺も参戦するか!？」

「まて！ダメだ！ここは私に任せていけ！早く！」

「隊長——」

「リゼさん——」

「先輩——」

自分の身を捨てて隊員を避難させようとするリゼに一同は感動する。

「ん〜！リゼちゃんもふもふ〜！」

「私ももふもふ〜！」

「やめろおお！あ、暑い……!!！」

「以上、現場からお伝えしました」

悠がそう言つてチノの部屋の扉を閉めた。

「だ、大丈夫でしょうか」

「リゼ——あいつはいいやつだった」

「せんぱああああい!!!」

チノはリゼを心配し、悠はすでにリゼを諦め、シャロは部屋に向かって叫ぶ。

しばらくして、部屋が静かになった。

「リゼさん——そんな……」

チノがガクツと床に崩れ落ちる。

「大丈夫だ、逆にココアと千夜がやられたって可能性も——」

悠がそう励まして扉を開けると、リゼが床に倒れていた。

「「やられてるー!?!」」

チノと悠が叫ぶと、シャロは勝ち誇った顔をしているココアと千夜に怒鳴る。

「こ、こちら！リゼ先輩に何を——」

「シャロちゃんもリゼちゃんもふもふするっ！」

「し、しないわよ！」

笑顔でもふもふを勧めてくるココアにシャロが叫ぶ。

「リゼ、しっかりしろ——」

悠が揺さぶると、リゼは意識を取り戻した。

「だから言ったろ、俺も参戦するって」

「すまない……。最初から素直に頼めばよかったな」

「ふうー、もふもふしたら疲れちゃったよ」

ココアがそう言って千夜からチョコレートを受け取った。
そして——。

「チノちゃんも悠くんも、みんな食べようよー」

「遠慮します」

「そんなこと言わないで、はい、あーん」

「子供じゃないで——んぐつ!?!」

ココアの持つチョコレートがチノの口の中に入った。

第九十一話 お泊まり会は洋酒入り菓子とコーヒ
で

「おいチノ！」

「チノちゃん！」

悠とシャロがすかさずチノの元へ駆け寄る。

「美味しいです」

「な、なんともないのか？」

「ですから、あれは演技です！」

「そ、そうか……？」

悠とシャロが安心して息を吐くと、チノの顔がわずかに赤くなる。

「な、なんだかふわふわしてきました——」

「やばい！」

「チノちゃん!? そ、そうだ、このハーブティーでも飲んで気を確か
に！」

シャロがハーブティーをカップに入れてチノに渡す。

チノはフラフラした手つきでカップを手に取り、ハーブティーを口
に運ぶ。

「ありがとう……シャロお姉ちゃん……」

「おお！チノちゃんが！」

ココアが感激の声をあげて自分も口にチョコレートを入れる。

「あ、ココアも食べちゃった!？」

「——ん？うん、食べたけどどうかした？」

「どうしたもこうしたもない！お前も前に酔っただろ！」

悠がそう叫ぶとチノがこちらへ寄ってくる。——近い。近すぎる。

「悠お兄ちゃん……あーんして？」

「ん？あーん」

悠がニヤニヤしながら口を開けると、チノの手からチョコレートが口に運ばれる。

「おいしく！」

「お、おい悠！」

体力が復活してきたリゼが悠に怒鳴る。

「すまんすまん、あまりにも可愛かったからつい——まあ俺は酔わないから」

「ならいいけどな……」

「リゼちゃんもいかが？」

千夜がニヤついた顔でリゼを誘う。

「まあ、私も酔わないから——」

そう言っつてリゼもチョコレートに口を運ぶ。

そして事件が起こる。

「いえーい！お泊まり会サイコー!!」

「お、おい、シャロのこのテンションって——」

「あれ？シャロお姉ちゃん、間違えて私のコーヒー飲んじやっただの

……?」

どうやらチノのコーヒーを飲んでしまったようだ。

ココアもチノもシャロも酔っている。現時点で生き残ってるのは悠、リゼ、千夜だ。

もうすぐ里恵がここへやってくる。——なんとかしなくては。

「ち、チノさん……?ちよつと距離が近いような——」

「んっ……眠くなってきました……」

悠の話を聞いていないようだ、チノは悠の膝に頭を置くと、目を閉じる。

「おい!ってココアも擦り寄るな!」

「チノちゃんだけずるーい!私も寝る〜!」

ココアが悠を押し倒して腕に頭を置く。

悠が「リゼエ!!」とリゼに助けを求めると、リゼは

「嬉しそうだな」

「この顔のどろろがそう見えるんだ!?!いいから早くきてくれ!」

「はいはい——ってシャロ!?!」

リゼもシャロに捕まってしまった。

シャロは「リゼしえんぱあい〜」と抱きつくつと、顔を埋めて泣き始める。

「今月もギリギリで——やってられないれしゅよ!!」

「よ、よしよし——」

「まあ、シャロちゃんたら——私も……リゼちゃん!」

「まで!お前までくるなああ!!」

「な、何してるの、お兄ちゃん——」
「里恵か。俺はどうやらこの日のために生まれてきたのかもしれない」

チノの部屋にやってきた里恵が困惑した声をあげると、悠は真顔でそう答える。

「着々とハーレムを築き上げてるね」
「どこでそんな言葉覚えたんだ!？」

悠が叫ぶと、チノがそれを聞いて起きる。

「あ、す、すまん。起こしちやったか」

一度寝たら酔いは覚めるのかと思いきや、チノはまだ酔っているように

「どうかしたの、悠お兄ちゃん——」

「な、なんでもないぞ！チョコレート食べるか？」

「うん……食べさせて……」

「悠!？」

先ほどまで食べさせまいと奮闘していた悠があっさりとしノにチョコレートを食べさせると、リゼが怒鳴る。

「リゼお姉ちゃん……どうして怒ってるの？——私が悪い子だから？」

「ち、ちが——そんなことは!」

「もういい子になるから怒らないで——」

チノが上目遣いでリゼにそういうと、リゼは少しだけ顔を赤くして「あ、ああ」という。

「リゼ——落ちたな」

「う、うるさい！お前の方こそデレデレしてるじゃないか！」

リゼがそう叫ぶと、今度はシャロが起きる。千夜はシャロにつられて寝たままだ。

このお泊まり会、いったいどうなるんだ。

「理性が——」

「悠、チノに手を出すなよ？」

「それはチノ次第だな」

「おい!？」

もはや否定しないどころか真顔で「チノ次第」という悠にリゼがまた怒鳴った。

第九十二話 告白ブーム到来？

「リゼしえんぱーい！」

「シャロ！落ち着け！早まるなあ!!」

「あらあら、シャロちゃんったら積極的ね……」

リゼに抱きつくシャロに千夜がニコニコしている。

「千夜！シャロをなんとかしてくれ！」

リゼが悲鳴をあげるが、千夜は「いいのよ、2人が幸せなら」とボケる。

「しえんぱい〜いつになったら私と付き合ってくれるんですかあ〜！」

「っ、付き合う!?!」

「シャロが完全にぶっ壊れてる!〜いや、心で思ってることがそのまま出ただけか？」

悠がそういうと、千夜がこちらを向いて

「そうよ、シャロちゃん、リゼちゃん大好き人間だから」

「そ、そんな——」

リゼは顔を真っ赤にする。そしてシャロはリゼの顔に近づき、

「しえんぱい、私のこと好きですか?」

「あ、ああ——だけど——んっ!?!」

リゼが何かを言いかけたが、シャロがリゼにキスをしたため遮られる。

「——キスした!?!」

「まあまあ——微笑ましいわね〜」

それを見てココアがチノにいう。

「チノちゃん、私のこと好き〜?」

「ココアお姉ちゃん——大好き……」

「私たちもキスしよ?」

「キ、キス——!!?!」

今度はチノが顔を真っ赤にする。その会話を聞いた悠はリゼのポケットから銃を奪い、ココアに銃口を向ける。

「ココア——お前とは争いたくないが、仕方ない。この場でお前には消えてもらおう」

「悠!?!落ち着け!?!ていうかそれ私の銃——!!」

「なら、悠くんも一緒にキスしよ!?!それで解決だよ〜」

「なんだと!?!」

思わぬ展開に悠が驚く。——チョコレートの力ってすごい。

「それは魅力的な提案だな——前向きに検討しよう」

「悠——」

「お兄ちゃん——」

まんまとココアの提案をのんでしまう悠にリゼと里恵がドン引き。

「——いや待て、チノが嫌ならやめるぞ?」

「一応お前にも常識があるのか——」

「リゼ——いくら俺でも無理やりそういうことはしないぞ——」

リゼの超失礼な発言に悠が落胆する。

「私は——いいよ……悠お兄ちゃんとなら」

「酔ってない方のチノに意見を伺いたいのだが——」

正直言つてこの状態のチノには何を言っても快く承諾してくれるだろう。

一方ココアは酔いが覚めたようでごちらに向かつて

「チノちゃんのお姉ちゃんは私だよ!」

となぜか宣戦布告してくる。

「俺はチノの『お兄ちゃん』枠が欲しいんじゃない」

悠はそう宣言する。もちろんココアに戦闘の意思がないことを伝えたくもりだったのだが——

「あら、悠くんは『彼氏』枠が欲しいのかしら?」

千夜がそういうと場の空気が一気に変わる。

「え?なんだ悠、やっぱりチノのことが好きだったのか」

「お姉ちゃんがその恋応援してあげるよ!」

「お兄ちゃん——いきなりみんなの前で告白しないでよ」

「一齐にコメントするな!そういうつもりで言ったわけじゃ——」

悠がそういうと、チノは今にも泣きそうな顔で

「悠お兄ちゃん、私のこと嫌いなのか?」

「ココアみたいなこと言うな！——だ、大好きだぞ、安心しろ！」

「お、告白したぞ千夜」

「ええ——青春ね」

「悠くん——！」

チノに「嫌いななの？」と泣きそうな顔で言われ、ついパニックになって「大好きだ」と言ってしまった。

当然、各方面から茶化す声が聞こえる。

「私も悠お兄ちゃんのこと好き——」

「え、ほんとに？嬉しいなあ」

「お兄ちゃん、過去最高にやけてる——」

「私も好き」と言われて思わず頬が緩んでしまう。——不可抗力だ、仕方がない。

そしてシャロが酔いから覚めたようで、チノの頭を撫でながらいう。

「酔いから覚めた後、羞恥心で死にたくなるわよ……」

「おお、シャロが戻った……」

リゼが「ふうー」と一息ついて安心する。

「わ、私もしかして、変なこと言っていましたか？」

「——い、いや、大丈夫だ。何もなかったぞ」

リゼがそうごまかすが、悠が面白半分で爆弾発言をする。

「——いや、『リゼしえんぱい』いつ付き合ってくれるんですかー！』みたいなこと言ってたぞ」

「おい悠！」

「わ、私が——そんなことを——」

シヤロが肩を震わせて悠に本当なのかと確認する。

悠が「うん」と首を縦に振ると、シヤロは

「わ、私ったらなんてことを!!ごめんなさあぁあ!!」

と発狂しながら部屋を出て行った。

第九十三話 お泊まり会の定番！王様ゲーム

「ちよっとシャロを迎えに行ってくるー！」

悠がそういつて部屋から出ようとする、チノに止められる。

「どこ行っちゃうの？」

「お前の大好きなシャロお姉ちゃんがご乱心だ」

悠がそう言う、リゼが立ち上がって「悠はいいよ」と言う。

「悠はチノと遊んでろ。シャロは私が追う」

「あ、ああ——」

リゼはそう言う、チノの部屋を出ていった。

「——さてチノ、何して遊ぶ？ジグゾーパズルする？」

悠がそう言う、ココアが「はーい！」と手を上げる。

「私、王様ゲームやってみたーい！」

「——嘘でしょ？」

「いいわね、楽しそうー！」

ココアの提案に悠が耳を疑う。千夜はココアの提案を快く承諾してしまう。

部屋にはココア、チノ、千夜、悠、里恵の5人。人数的には十分だが——。

「うーん——俺も前から興味あったし、一回だけだぞ」

「やったー！じゃあ、番号と王様はトランプで決めよ！」

ココアがそういつて部屋の引き出しからトランプを取り出し、中から1〜4のカードとキングのカードをだす。

「さあ、準備完了だよ！みんなカードを引いて〜！」

ココアがカードを差し出すと、悠が一番左のカードを引く。——3番。

「王様は？」

里恵が聞くと、千夜が「やったわ〜！」と喜ぶ。——初っ端から嫌な予感がする。

「そうね、1番と5番がキス！」

「出だしからハードな命令きた！」

悠がそうつつこんで辺りを見回すと、ココアが手を挙げた。

「私1番〜！」

「私、5番！」

ココアが1番で里恵が5番。

「ココア、俺の妹にまで手を出そうとしているのか」

「私はみんなのお姉ちゃんだよ〜」

悠が不服そうな顔をするが、ココアと里恵はそれをスルーしてキスした。

「盛り上がってきたわね」

「盛り上がるの早すぎだろ」

千夜のボケにつっこむと、ココアが少し頬を赤くした状態でトランプを差し出す。

「さ、さあ次行くよ!」

今度は一番右のカードを引く——1番。

「王様だーれだ!」

「私!」

今度は里恵が王様。

「うーん——それじゃあ1番と3番が次の命令まで手を繋ぐ!」

「嘘だろ!?!——俺1番、3番は?」

「私だよっ!」

「ココア、お前よく当たるな!」

どうせならチノと——と思ったが、ココアに当たった。

次の王様が命令を出すまでココアと手を繋ぐ。

そして王様ゲームは続いて行く。

「王様の私と2番の人は甘兎庵のメニューを考える」

「また当たった〜!」

ありえないほどココアが当たる。一方チノは全く当たらない。隣にいるチノの顔を見ると、少しつまらなさそうにしている。そして、またカードを引く。——王様きた。

「俺が王様だな。何を命令しよつかなく!」

「悠くんが王様？お姉ちゃんにもふもふしてほしい？」
「名指しはルール違反だろ——3番が5番に壁ドン」

悠がそう言うのと、3番を引いていた里恵と5番を引いていたチノが当たる。

「くそ！王様と5番にするべきだったか！」

「お兄ちゃん相変わらずだね。チノちゃんは私がもらうよ」

「やっとう当たった……！」

そして次の番が来た。

「私が王様……」

今度はチノが王様に。

「2番と私が今日一緒に寝る……」

「よっしやああああ!!!」

悠が叫ぶ。——カードにはしっかりと2と書かれている。

「まあまあ、悠くん良かったわね」

「私もチノちゃんと一緒に寝たい!!」

ココアが無理矢理入ってこようとしますが、悠がそれを押しのける。

「いや、ダメだ」

「冷たい！」

そして部屋の扉が開く。

「いえーい！頼もー！」

「お、おい、シヤロ？」

シヤロがカフェインで酔っている。

「恥ずかしさに耐えられないからってコーヒーを——」

「なんてことを……」

リゼの説明に悠が顔を手で覆う。

「さ、シヤロちゃんたちも帰ってきたことだし、夕食にしましょ！」

「千夜、責任とってシヤロをなんとかしろよ」

悠がそう言うと、千夜は「わかったわ」と素直に承諾する。

「私が責任をとって今日一日ずっとシヤロちゃんにコーヒーを飲ませるわ！」

「悪化させんな!!」

悠は一瞬「意外と素直だな」と感心してしまった自分を恨んだ。

第九十四話 真夜中の内緒話

夕食を取り終わった後、またチノの部屋で遊ぶことに。

「なあ、チノはいつになったら戻るんだ？」

リゼがそう聞くと、ココアがチョコをチノの口に入れる。

「大丈夫！私が定期的に燃料補充してるから！」

「戻らない原因お前かよ！」

チョコの残量的に今日の夜で無くなるだろう。

「さて、今度は何しましょうか」

千夜がそう言うと、ココアがDVDを持ってくる。

「みんなでホラー映画鑑賞だよ〜！」

「さすがココアちゃん！さあ、みんなで見ましょう！」

ココアと千夜のコンビは最悪だ。だが誰も反論しないので映画が始まってしまう。

「どうするリゼ」

「まあいいんじゃないか？」

「いや！絶対取り憑かれるわ……」

シャロがリゼにしがみつきながら震える。

チノも先ほどから悠の背中に隠れている。

「やれやれ、チノはどっちかと言うとココアの妹じゃなくてシャロの

妹みたいだな」

悠がそう言うと、ココアはこちらを向いて「そんな！チノちゃんは私の妹だよ！」と反論する。

部屋が暗いのでチノの表情がよくわからないが、おそらく怯えている。

「はあ……結局俺らは振り回される運命なんだな……」

悠がため息をついてそう言うと、リゼも「そうだな」とため息をつく。

映画が終わった。

ココアは爆睡、チノは相変わらず酔ったまま、リゼはわずかに震え、千夜は楽しそうに笑っている。

シャロと里恵は完全に怯えている。——悠は正直早く寝たいという気持ちだ。

「あらあら——今日は早めに寝ましようか」

あくびをする悠を見て千夜が言う。悠は「よしきた」と乗り気だ。

「やっとチノと寝られるな」

「おい、どういうことだ？」

「王様ゲームでチノに命令されたんだよ」

「なんだと……」

リゼが驚きを隠せない様子。無理もない、酔った状態のチノは普段とのギャップが激しく、甘えん坊な性格になっている。

布団を敷いた後、すぐに布団に潜り込むとチノも潜り込んでくる。

「お、おいチノ、自分の布団で寝ろよ」

「嫌……一緒に布団で寝る……」

「キャラが180度変わってるじゃないか!」

チノの発言に思わずリゼがそう叫ぶ。全く同感だ。

「明日の朝酔いから覚めたときどうなるのかしらね……」

シャロがそういうと、一同は「うんうん」とうなずく。

「私も一緒に寝る〜!」

ココアも無理やり布団の中に潜り込んでくるが、悠はそれを押しつけようとする。

「お前はくるなあ!」

「ひどいよ悠くん……でも仕方ないよね、反抗期だもん」

「反抗期じゃなくても断るだろ……さすがに3人は入らないし」

悠がそう言うと、千夜がこちらにやってくる。

「大丈夫よ悠くん、たとえ3人でも愛があれば!」

「愛がないから言ってるんだよ!」

「そんな!悠くん、お姉ちゃんに愛はないの!?!」

「ああ、チノと里恵以外愛はない」

真顔でそう答える悠に里恵がドン引きしてリゼが言う。

「シスコン……」

「うるさい、別にいいだろシスコンでも」

悠はそう開き直ると布団に潜った。

そして一同が寝静まった。が、悠は眠れない。

「あ、暑い——」

なにせ悠の布団はココアとチノが無理やり入り込んでいる人口密集地と化している。暑すぎて眠れない。

逆にこの状態で眠れるココアとチノを尊敬してしまう。

「私の所持金52円!!——はっ！なんて夢なの……」

「——シャロ？」

突然財布の残高を叫んで起き上がるシャロに悠が困惑する。

「ゆ、悠！起きてたのね——今のこと、みんなには内緒よ？」

「あ、ああ……夢の中でも節約してるのか……」

「そ、そうよ！悪い!？」

「静かに！」

結局シャロと悠は眠れず、会話することに。

そういえば、シャロと2人で話すのは結構珍しいかも——。

「そうだ、リゼとは何か進展はあったのか？」

悠がそう聞くとシャロは明らかに動揺して

「な、何も無いわよ……」

「まあリゼは『酔った勢いで言ったことだろ』って思ってるだろうしな。あいつもなかなか鈍いよな」

「あんたが言うの!？」

そしてしばらく沈黙の時間が流れるが、沈黙を破ったのはシャロだった。

「そういうあんたこそ、チノちゃんにはデレデレじゃない」

「まあそうだな。否定はしない」

「——チノちゃんのこと、好きなの？」

「その質問聞き飽きたぜ」

悠はため息をついて考える。

正直、これは「異性として」好きなのか「友達として」あるいは「妹として」好きなのかわからない。

「俺は、恋愛とかわからないしな。これが恋愛感情なのか——」

悠がそう答えるとシャロは「そう——」と反応する。

「シャロは、リゼのこと好きなんだろう」

「急に何言い出すのよ!——ま、まあ好きだけど」

「それは恋愛感情なのか？」

「さあ、どうかしらね——」

シャロが意味深にそう呟いた。

第九十五話 真夜中の恋愛相談室

悠とシャロの会話は続く。

「悠はチノちゃんのどういうところが好きなの？」

「存在そのもの」

「——あんた本当ブレないわね……」

シャロの呆れた声の他に、布団の中からも声が聞こえる。

「チノ？」

「悠さん……悠さんはお母さんやおじいちゃんみたいに急にいなくなりませんよね……」

「——は？」

「どうしたの悠」

どうやらシャロには聞こえていないようだ。

チノは起きていたのか？と一瞬焦るが、どうやら寝言のようだ。

「ずっと一緒にいてくださいね……」

「なんだ？プロポーズか？俺もずっとチノのそばにいるよ」

チノから反応はない。

「悠、あんたチノちゃんに何てこと言うの」

がその代わりシャロがから冷たい視線と声が届く。

「待て待て、寝言とはいえチノが言い出したから答えたただけだぞ」

「チノちゃん、どんな夢を見てるのかしら」

「わからん、俺と結婚する夢でも見てるんじゃないか？」

「さっきの寝言の内容、プロポーズだったの!？」

悠が適当にそう答えると、シャロはそれを真に受ける。

「あんたのそう言うところ、嫌いじゃないわ。でもほどほどにしないよ」

シャロからそう注意され、悠は「へいへい……」と答える。

「悠、きつとあんたはチノちゃんのが好きなのよ」

「何だいきなり、それは結構前から自覚してるぞ？」

「そうじゃないわ。恋愛的にって意味よ」

「なわけ——」

シャロに言われて動揺する。

「でも、今本気でプロポーズされても『はい』とは答えられないな——」

「どうして?」

「俺はこの先どうなるかわからないし、俺自身も恋愛なんてわからない
いし」

「——」

「そういえばリゼ、今年受験なんだろう?お前の方こそ俺を心配してな
いで早く言ったほうがいいぞ」

悠がそういうと、今度はシャロが動揺する。

「な——どういう意味よ!」

「リゼが大学に進学して彼氏作っちゃうかもよ」

からかうような口調でそう言うと、シャロは「そんな!」と落ち込む。

「とられないようにちゃんと捕まえておけよ……」

「あ、あんたの方こそ！チノちゃんが高校に進学して彼氏作ったらどうするのよー！」

「それは困る！」

悠がそういうと、しばらくしてじわじわと笑いがこみ上げ、シャロと2人で大笑いした。

いつの間にか太陽が昇り、部屋が明るくなっていった。そして声が聞こえる。

「はいー二股お兄ちゃん、朝だよ」

「里恵！お兄ちゃんになんてあだ名をつけるんだ!？」

思わずガバツと起き上がって抗議する。

「朝起きてみたら、仲良くチノちゃんと抱き合って寝てるし、後ろからココアちゃんもお兄ちゃんのこと抱き枕みたいにしてたし——昨晚はお楽しみでしたね」

「ああ、まあ確かに楽しみだったが——いやいや！違うぞ、そういう意味じゃない！」

確かに昨晚はシャロと話して楽しかったが——。

「ん……悠さん……?」

「お、おうチノ……」

「私、何かしてましたか？何で悠さんの布団に——」

チノは完全に酔いから覚めたようだが、記憶はないみたいだ。

そこで悠がここぞとばかりにチノをからかう。

「ああ、しまくりだったぞ——あんな積極的なチノが見られるとは——」

「なっ……」

チノの顔が真っ赤になる。そしてそれが最高点に到達してチノが枕を悠に投げる。

「悠さんのバカ！私がそんなこと……」

「ふーん……」

悠が意味ありげにそう言って枕を投げ返し、チノとバトルになると、ココア以外のみんなが「何事だ」と目を覚ました。

第九十六話 バレーボールは命がけで

朝食を済ませた後、みんなでバレーボールをすることになった。どうやら1年前にも河原でバレーボールをやったことがあるらしい。

今日は比較的涼しい日、運動にはもってこいの天気だが、里恵は暑いのは苦手だとラビットハウスに残った。

先にココアと千夜が河原に遊びに行き、他の人は飲み物を買ってから行く、という話だったが――。

いざ、河原に到着してみるとココアと千夜が横たわって意識を失っていた。

「確か、前もこんな感じでしたよね――今度はどう見ますか」

チノがそういうと、リゼは2人の周りを木の枝で線を引く。

「熱中症か――あるいは今度こそ叩きのめしあったのかもしれない」

リゼがそういうと、ガバツとココアが起き上がって「どうしたらそう見えるの!？」と叫ぶ。

「なんだ、意識あるじゃないか」

「――千夜ちゃん、和菓子作りと追い詰められた時だけ力を発揮するから……」

ココアがそういうと、リゼは「また千夜にボールをヘッドショットされたのか」と呆れる。

そして、またくじ引きをしてチームを分けることに。

結果は悠、チノ、リゼとココア、千夜、シャロに分かれた。――勝敗は目に見える。

「戦力差がすごい！」

ココアがそう言って自動販売機からある飲み物を買ってくる。

「待ってココア！まだ使わうって言ってないわ！」

「シャロちゃん——今こそこれを使うべきだよ……！」

ココアが栓を開け、シャロに渡すと、シャロは「しょうがないわね」と飲み物を口に入れる。

「バレーボール大好きく!!」

「コーヒーでドーピング!?!」

案の定中身はコーヒーだったようだ。

そして試合が始まり、相手チームはほとんどシャロとココアが活躍、こちらのチームはリゼだけが活躍するという事態に。

「悠さん、バレーボールは得意なんですか？」

「授業でやったが、可もなく、不可もなく、って感じだな。でも暑いから動きたくない」

「そうですね、私もこの暑さで動いたら倒れてしまいます」

「おい！試合中におしゃべりするな！」

試合中にも関わらず、コート隅っこで会話するチノと悠にリゼが怒鳴る。

向こう側のコートを見ると、千夜がコートの端に座って「ふれーふれー」とココアとシャロを応援している。

「うおー！チノちゃんにかっこいいところ見せるよー！」

「リゼしえんぱいに情けないところ見せられない！」

ココアとシャロはそう言って必死にボールを防ぐ。

——こちらにボールがやってきた。悠がボールを返す。

「なんだ悠、お前できるじゃないか」

「暑いからやりたくないんだよ。お前と違って人間なんだよこつちは」

「——私をなんだと思ってる？」

リゼはそう言いつつもココアやシャロからのボールを返す。

結果はこちらの圧勝。

「戦力差ありすぎだよ〜！」

「いや、戦ってたのほとんど私だけだったぞ」

苦情を言うココアにリゼがそう返す。確かに悠もチノもまともに戦っていない。

リゼが超人すぎる。

2試合目、今度はチノ、千夜、悠とリゼ、シャロ、ココアに分かれた。

向こうにはドーピングしたやつと超人がいる。どうする——。

仕方なく、今度ははっきり試合に参加することに。

「よしーいくぞー！」

リゼからボールが飛んでくる。悠がそれを返す。

——またリゼからボールが飛んでくる。悠がそれを返す。

——またリゼからボールが飛んでくる。

「おい、これただのパス練習じゃないか!？」

悠がそう言うと、リゼもそれに頷く。

「ほら、チノと千夜もやってみろよ」

「わ、私にできるでしょうか……」

「ここで負けたら武士の恥ぜよ！息絶えるわけにはいかんきん！」

消極的なチノと、燃え上がる千夜も戦いに参加する。

「とりあえず、トスで返してみろ」

悠がそう言うと、千夜は「任せて！」とトスでボールを返す。

「私も——！」

チノも飛んできたボールを返す。

「2人とも上手」

悠がそう言うが、相手コートが静かなことに気がつく。

「はあはあ……っ、疲れた……」

2試合連続で体力を使い果たしたりゼ、ココアと、カフェインが切れて力を失ったシャロがコートに倒れた。

第九十七話　ココアが開く試食会は不人気

あれからお泊まり会は終わり、ラビットハウスで午後からココアがパンの試食会を開く。

「じゃーん！新しい菓子パンできたよー！」

悠は「おー！」と歓声をあげるが、チノとりぜは何やら深刻な顔。

「今日はちよつと」

「私もパスです」

「えー!?なんでー!?いつもは試食してくれたのに……」

ココアがそういうと、チノもりぜも今日は食べたい気分じゃないと拒否する。

「私のパンにはもう飽きたのね！」

ココアがそう落ち込むが、悠は慌てて「待て待て！」と慰める。

「俺が試食してやる……！」

「ありがとー！さすがはベーカリー保登姉弟だね……」

ダイニングで2人寂しく新作を試食することに。

「2人とも、どうしちゃったんだろう……?」

「んー、なんでだろうな。今回もなかなか美味しいのに」

「きつと他のパンに浮気してるんだよ……」

「マンネリ化した彼女か！」

ココアの発言に思わず悠がツツコミを入れる。

「もしかしてダイエットしてるんじゃない」

ココアがそう言い出すと、悠が驚く。

「チノは太るの気にしてなさそうだけだな——リゼか!？」

「チノちゃんは——もしかして虫歯かな?」

「あり得るな、甘いものは歯に染みるし、歯医者が怖くて我慢してるんじゃない——」

悠がそう言うと、ココアが納得する。

「そうだよね……チノちゃん、我慢する子だもんね」

そしてココアは椅子から立ち上がり、厨房へ向かう。

しばらくしてココアがホールに出てきた。

「今度は甘くなくて低カロリーなパンだよ!美味しそうでしょ!」

そう言つてココアはみんなにパンを配る。悠以外は誰も口にしない。

「ほらほら、出来立てのパンだよ!お腹空くでしょ?」

「さっきのよりは甘くないけど、これも美味しいな」

ココアと悠がそう煽ると、2人は険しい顔つきになって震え出す。

「2人とも正直になってよ!その顔やめてよー!!」

ココアが険しい顔してまで我慢するチノとリゼに叫ぶ。

「チノちゃん！口開けて！」

「な、なんですかいきなり——」

ついに強行手段に出たココアにチノが困惑する。

「虫歯検査だよ」

「み、見てもわかりませんよ……？」

少しビビるチノだが、そう言つて口を大きく開ける。ココアがそれを覗き込んでから言つた。

「チノちゃんの歯、ちょこんとしてて可愛い！」

「虫歯は!？」

的外れなココアの感想にチノがつっこむ。

そしてココアはケーキをチノに渡して、持ったまま口を開けてとう。

チノは不思議そうな顔をするが、ココアの指示通りに動く。

「どうですか？」

「うん、そのままそのまま」

「——」

しばらくするとチノのお腹が鳴る。

「こうすると虫歯がケーキの方に移るって聞いたよー！」

「ココアは迷信を簡単に信じるのか」

「いつそココアさんに移りたいです」

悠とチノから冷たい声がココアに向けられる。その光景を横目でチラチラとリゼが見てきた。

「リゼ、ケーキ食べたくなってきたか？」

悠がそう聞くと、リゼはプイツと視線を逸らして「別に——」とごまかす。

そしてココアはチノに注意する。

「チノちゃん！歯医者にはちゃんと行かなきゃダメだよ！ティツピーみたいに歯がなくなっちゃうよ！」

——確かにティツピーはチノの祖父だが、歯はあるだろう。と思っただが、チノが

「ティツピーはお年寄りですが歯はまだあります」

と代わりにツツコミを入れる。

「リゼもだぞ、自分が十分痩せてることに気がつけよ」

悠がそういうと、リゼはきよんとした顔をする。そしてまたココアが言う。

「ティツピーを見すぎて自分も太ってるって勘違いしちゃったの!？」

「——ティツピーは太ってません。毛がもふもふしてるだけです」

またチノがツツコミを入れる。このままでは埒が明かないと思い、シャロに電話すると、しばらくしてシャロがやってきた。

「先輩！これ、バイト中に作った低カロリーお菓子です！無茶なダイエットはやめてちゃんと食べてください！」

シヤロがそう言ってお菓子の入った袋をリゼに渡すが、リゼがまた険しい顔になる。

「貧乳ほっちゃりは帰りますー!!!」

シヤロは恐怖のあまり泣きだして走り去ろうとするが、チノがそれを止める。

「待ってください！シヤロさんは太ってないです！——私の方が……」

リゼも慌てて「わかったから！」と説得する。

「食べる！食べるぞ！だから泣くな！」

「リゼちゃん、男前〜！」

ココアがそう言ってケーキを差し出すと、リゼはそれを食べる。

——そして頬を抑えて地面に崩れ落ちた。

第九十八話 チノとりゼの悩み事

「じゃあ、リゼが虫歯でチノが体型を気にしてるのか？」

悠がそう尋ねると、チノとりゼが頷く。

「先輩、治療が遅れると大変なことになりますよ？」

シャロがそう警告するとリゼは

「わかってる！行くことは毎日考えているが——銃撃戦の音は良くても歯医者あの音だけはダメなんだ!!」

と叫ぶ。

「普通逆だろ。銃撃戦は大丈夫なのに歯医者ダメって女の子は多分世界でお前だけだぜ」

悠がそう軽口を叩くと、シャロが突然強気になって

「後輩として、何としても先輩を歯医者に連れて行きます！」

とりゼに宣戦布告すると、リゼは降伏したかのように床に崩れ落ちた。

「それで、チノはなんで体型を気にしてるんだ？全然太ってないぞ」

「そうだよチノちゃん！なんで相談してくれなかったの？」

悠とココアがそういうと、チノは少し頬を膨らませて

「だって——悠さんに相談するのはなんだか恥ずかしいし、ココアさ

んに相談するとバカにするじゃないですか」

と言った。確かにココアならチノにはダイエットはまだ早いと言
い出しそうだ。

「よく、私のことをふわふわふかふかかって言ってるじゃないですか」
「——それを太ってる勘違いしたのか？」

悠はそう言ってココアの方を向くと、ココアは慌てて「そういう意
味じゃ！」と否定する。

「私のせいだああああ!!!」

やっと自分に責任があると自覚したココアに悠は「やれやれ」と呆
れる。

その晩、ココアの部屋で適当に喋ることになった。

たわいもない話をしていて、チノが

「ところで——悠さん、ココアさん」

と2人の名前を呼ぶ。

「どうした？」

「お2人ともいつもパンの試食をしていますが、体重測ったことあり
ますか？」

「——俺は特に太らないかな」

「私も太りにくい体質みたい」

チノの質問に悠とココアがそう答えると、チノは少し頬を膨らませ

てこう続ける。

「——甘いものばかり食べていたら虫歯になりますよ?」

「俺、虫歯になったことない」

「私、虫歯になりにくい体質みたい」

チノの質問に悠とココアがそう答えると、チノはついに嫉妬心が爆発してクツシヨンを構える。

「チノ!早まるな!」

「チノちゃん落ち着いて!!」

このあと、激しい戦いが30分ほど行われた。

「ここ最近のチノ、結構アクティブになったよな?ココア——」

「そうだね悠くん、私が来た時のチノちゃんは絶対クツシヨン投げてこなかったもん」

クツシヨンやら枕やらぬいぐるみやらを投げて戦いを仕掛けるようになったチノに、悠とココアがしみじみと答える。

「き、気のせいです!私も枕投げくらいしますよ……」

「そうか?——でも昔のお前ならティツピーまでは投げないよな?」

悠の視線の先にはベッドに横たわるティツピーの姿が。もはや完全になぬいぐるみのような扱いになっている。

「チ、チノや——」

「ティツピー!!」

ぬいぐるみと間違えて投げてしまったことに気づいたチノが慌ててティツピーを拾いに行く。

中に入っているチノのおじいさん、今ので寿命縮んだだろうな。——つてもう亡くなってるけど。

「やれやれ、わしがもう少し若ければいいんじゃないやがのう」

ココアの部屋を後にし、自室で寝る前の支度をしているとティツピーが部屋に入ってくる。

「なんだ？今日はバーに行かなくていいのか？」

「客がいなくて暇じゃ」

「いつものことだろ」

「な、何を言うんじゃないこの小僧！パーティムはそれなりに繁盛してるぞ？・たまたまじゃ！」

悠の適当な返事にティツピーが怒鳴る。

「若ければいいって——『死んでるけど生きてる』ようなもんだろ」
「まあ、そうなんじゃがな。あの子には色々苦勞をかけた——幼いのに母親を亡くしてわしがずっと面倒を見てきたからのう」

ティツピーが昔の話を始める。

「わしは、疲れるが今の状況が嬉しいんじゃないや。チノが元気になって——ココアとお前には感謝しかない」

「なんだよ、改まって。うさぎのくせに感謝してんじゃないやねえよ」

不意に涙が出そうになったのでティツピーと反対の方を向く。

「これからも、チノのことを頼んだぞ」

「——おい、まさか」

遺言のようなティツピーのセリフに悠が思わずティツピーの方を向く。

「何を驚いているんじや。わしはまだ天国に『門前払い』されておる。しばらくはここに残る」

「なんだ、驚かせるなよ——帰るときはちゃんと行ってから帰れよ、突然いなくなったら、またチノが落ち込むぞ」

「しばらくは大丈夫じゃ。心配ご無用」

「そうか？ならいいんだが」

ティツピーと悠のこの会話を、ココアたちは知る由もない。

第九十九話 ドライブはココアとティツピーとともに

「じゃーん！みてみて!!」

ある日の朝、ココアが突然ラビットハウスの前にみんなを呼び集める。

「憧れの自転車を買ったよー!」

「お前自転車乗れないだろ?」

自転車を自慢するココアに悠がそういうと、ココアはウズウズした様子で

「逸る気持ちを抑えきれなくて——悠くん！自転車の乗り方、私にも教えて!」

「まあ、いいけど——」

自転車の乗り方を教えて欲しいと言うココアに悠が頷くと、早速自転車の練習が——の前に

「そうだ！名前をつけようよ！ピンク色だからかわいい名前がいいな〜!」

ココアはそう言ってしばらく考え込むと、ティツピーを指差して言った。

「ティラノピンク！略してティツピーだよ!」

「そのウサギと名前被ってるじゃん!」

強引に名前を「ティツピー」にするココアに悠はつつこむ。
そして河原に移動した。

「でも、なんで俺に？チノも乗れるようになったんだからチノに教えてもらえよ」

悠がそう言うと、ココアは少し顔を赤くして

「転んでる姿をチノちゃんにみられたくないの——お姉ちゃんとして！」

悠が意地悪に「俺も弟っていう設定だろ」というと、ココアは続ける。

「それに、悠くんならバイクにも乗れるでしょ？ドリフトも教えて欲しいな」

「自転車のドリフトの仕方とか知らないぞ!」

無茶を言うココアに思わず悠が叫ぶ。

そして自転車の練習が始まった。

「さあ、まずは足を地面につけた状態で蹴って前に進んでみる」

「えー……後ろ押さえてよ」

「——仕方ねえなくほら、行くぞ！」

悠がココアを驚かせてやろうとものすごいスピードで自転車を押すと、ココアは笑って言う。

「漕ぐよりスピードが出てるよ悠くん!!」

「ココア！離すぞ！」

「うん!!」

悠がココアの自転車から手を離すと、しばらく不安定ながらも自転車は進む。

その近くをシャロが通りかかる。ふらふらと自転車を進めるココアはシャロに気を取られてバランスを崩して倒れる。

「だ、大丈夫？」

「——後ろ乗ってく？」

「今転んだわよね!？」

シャロがバイトに遅れそうで急いでいるため、ココアが自転車に乗せてシャロをフルールまで運ぶことになったが——ココアが道を間違えて結局甘兎庵の方まで戻ってしまった。

「家に帰ってどうするのよ!」

「まあシャロちゃん、お帰りなさい」

「ほんわかしてる場合じゃないわよ!もう走っていくから——!!」

にこやかに「お帰りなさい」と言う千夜にシャロが怒鳴り、走り去って行ってしまった。

「可愛い自転車ね」

「でしょ——いま悠くんの特訓してもらってるんだ」

ココアが自慢げに言うと、千夜は「懐かしいわ。昔シャロちゃんの練習に付き合ってたっけ」と昔を振り返る。

「よくうさぎが横切るから、無意識にバニーホップを習得していたわ」

と千夜が衝撃の告白をする。

「バニーホップとか俺でもできないぞ!？」

そんな会話をして、もう一度自転車の練習に戻る。

自転車の練習を始めてしばらくが経ったが、ココアはだいぶ乗れるようになった。

「こんな短期間で乗れるようになるとは、なかなかやるじゃないか」

悠が関心してそう褒めると、ココアは「えへへ」と頬を赤くする。

「風が気持ちよくてどこまでも行ける気がするよ!」

チノがこちらにやってきた。

「ココアさん、乗れるようになったんですか!？」

「うん!もうバッチリだよ!チノちゃん、やっぱり私がいなくて寂しかった?」

「ココアが怪我してないのか心配になったんだろ」

様子を見にきたチノにココアと悠がそう言うと、チノは少し悔しそうな表情で

「そんな——ココアさん、私より短期間で……」

チノはおそらく自分より短期間で自転車に乗れるようになったココアに嫉妬しているのだろうが、ココアはそれに気がつかない。

「最後に、この坂道を滑走しようと思うんだ!」

ココアが練習の最後にと坂道のある場所までやってくる。

「ティツピーも一緒に風を感じよう！」

とティツピーを自転車の前についているカゴに入れる。

チノが近くにウサギの親子がいると言い出すと、ココアがそちらに気を取られて自転車から手を離してしまう。

自転車はものすごいスピードで坂道を下っていく。このままではティツピーが危ない。

「ティツピー!!」

ココアと悠がそう叫んでティツピーを追う。

「ココア、お前そんなに足速かったのか！」

ティツピーの危機にもものすごい勢いで走り出すココアは、自転車に飛び乗り華麗にドリフトを決めた。

「おー！」

その光景を見たチノと悠は思わず驚きの声をあげた。
そしてラビットハウスに帰ることに。

「いつか、みんなでサイクリングしたいね〜！」

「——そうですね」

ココアの願望にチノがイメージを膨らませながらそう答える。

第百話 ドライブは夕日と好きな人を乗せて

「悠くん、チノちゃんとドライブに行かないの？」

「なんだいきなり」

ラビットハウスでのバイトの時間。突然ココアが悠にそう提案してきた。

もちろん、チノには聞こえないように。

リゼはココアと突然な発言に「ドライブ？」と首を傾げる。

「そうなの、悠くん、実はバイク運転できるんだよ」

「なんだと!?!お前にそんなスキルが——」

「リゼも取ろうと思えば取れるだろ」

悠が言うと、リゼは「うーん」と少し考えると

「親父がなんて言うか——」

と言う。確かに、あの過保護な父親のことだ、バイクなんて危ないからと却下しそうだ。

「それはそうと、チノを連れてドライブに行くのか？」

「そうだよ！悠くん、前に言ってたでしょ？」

そういえば、ココアの実家に行った際にそんな話をした。よく覚えていたものだ。

「ああ、そうだったな」

「ついでに、丘の上にあるお店で夜ご飯食べてきてよ！そのスパゲティが美味しいんだ。それに——夕方に行くと夕日が沈む絶景が見られるの！」

ココアがそう言うと、リゼは「ロマンチックだなく」と反応する。

「ね？私が応援してあげるからドーンと気持ちをぶつけておいで！」
「——は？」

話の展開の早さに思わず間抜けな声を発してしまった。

ココアはリゼの手を握り、

「リゼちゃんも協力してくれるよね？」

と言うと、リゼは「あ、ああ、もちろん！」と答える。

「どういう展開だよ!？」

「だから、ドライブを楽しんだ後にロマンチックなお店で告白するんだよー！」

「な、なるほど——じゃなくて！なんで告白する前提で話が進んでるんだ？」

悠がそう言うと、リゼは「しないのか!？」と逆に驚く。

「しねえよ！なんでそういう話にしたがるんだ!？」

「大丈夫だよ、お姉ちゃんを信じて！」

「そうだぞ！勇気を出して言ってみろ！」

「リゼはともかくココアは信用ならん」

悠が冷たくそう言い放すと、ココアは「そんな！」と崩れ落ちる。

「みなさん、どうかしたんですか？」

騒ぎを聞いてチノがこちらにやってくるが、ココアとリゼは慌てて

「なんでもない！」とごまかす。

チノは「そうですか？」と言って戻っていくとココアとリゼは胸をなでおろす。

「とにかく！すぐにバイクをレンタルしてきて！」

「ああ、チノには私から言っておくさ」

「もう、煮るなり焼くなりどうにでもしてくれ——」

悠は諦めた様子でバイクをレンタルするために店を出た。もちろん、チノには内緒だ。

しばらくして、悠がバイクを持ってラビットハウスに戻ってくる。

「あ、悠さん。おかえりなさい」

「た、ただいま——」

ホールに入るとチノが出迎えてくれた。ラビットハウスの制服から私服になっている。どうやら仕事が終わったようだ。

「すまない、突然抜け出して」

「いいんです。それよりどうかしたんですか？」

奥の方で見守るココアとリゼの方を見ると、2人は「さあ、行け！——」
とこちらに合図してくる。

ココアは紙とペンを持ってきて、紙に『頑張つて！応援してるよ！』と書き、リゼもそれに続いて『健闘を祈る！』と書く。

それを見た悠は一度ため息をついてからチノに言う。

「ちよつと出かけないか？」

「えっ？私は構いませんが——ココアさんとリゼさんは？」

「へっ!?わ、私は里恵ちゃんと遊ぶ用事が！だから2人で！ね？リゼ

「ちゃん！」

「あ、ああ！私もこれから射撃の訓練があるんだ！」

突然話を振られたココアとリゼは激しく動揺して手を横に振る。

「そうですか」

「準備できたら店の外に来てくれ」

「はい。また後で」

チノが準備しに部屋に戻っていくと、ココアとリゼがやってくる。

「まずは第一段階クリアだね！」

「いい戦果を期待しているぞ」

「こいつら、わざわざプレツシャーを与えてきやがった……」

悠がそう吐き捨てると、ココアは2階に上がり、リゼは帰宅していった。そしてチノが店から出てくる。

「——あ、あの、これはいったい……」

「サプラーイズだ、ドライブしようぜ」

「はあ……全くしようなない悠さんです」

チノは驚きながらも少し笑ってバイクの後ろに乗る。

「バイクに乗れるなんて、意外です」

「だろ？惚れた？」

「別に惚れてません！」

チノと悠が乗ったバイクは黄金色の街を進む。

「悠くん、うまくやってるかな？」

「お兄ちゃんのことだから心配だな」

ラビットハウスでは、ココアと里恵が出かけていった2人を心配する。

別に事故の心配をしているわけではない。チノと悠の結末を心配している。

「悠くんって、過去に彼女さんとかいたの？」

「さあ——多分ないと思う。まさかとは思うけどチノちゃんは……」

「んー、チノちゃんもいないと思う。居たらお姉ちゃんシヨックだよ」

ココアがそういつて膝に置いてあるティツピーを見ると、ティツピーが今にも泣きそうな顔をしている。

「あれ!? ティツピー、もしかしてチノちゃんがいなくて寂しいの!？」

「あー! 今にも泣きそう!」

ココアと里恵は慌ててティツピーを慰め始めた。

「風が心地いいです」

「だな。このままココアの実家まで行くか？」

悠の提案にチノは「えーっ!？」と驚く。

「そ、そんないきなり——心の準備が」

「冗談だ。今日は2人でアクロバティックな運転を極めるぞー!」

「あ、安全運転してください!!」

ウイリーをしてはしゃぐ悠にチノが震えながら怒鳴る。

「あ、シャロさんです」

チノがバイト帰りのシャロに気がつくと、シャロはこちらに振り向く。

「あら、チノちゃんに悠——つて、どうしたのそのバイク!？」

「借りたんだ、今日はこれでチノを連れ回そうと思って」

「2人でお出かけです」

悠とチノがそういうと、シャロは微笑ましそうに口に手を添えて

「まあ——それはいいわね」

という。千夜も甘兎庵から出てきて2人の姿に驚く。

「あら、今夜は仲良くデートかしら?」

「デート——!？」

チノがわずかに動揺する。

「私もリゼ先輩の運転するバイクの後ろに乗りたいたい——」

「リゼは免許持ってないっていつてたが——まあ、今度取得を勧めてみるよ」

シャロの願望に悠はそういつて2人と別れた。そしてココアが自転車を暴走させたあの坂に到着。

店はこの丘のてっぺんにあるそうだ。

「悠さん、ココアさんの自転車練習にも付き合っただんですね」

「ああ。あいつ、なかなかバランス感覚良かったぞ。短期間で乗れるようになった」

」

黙り込むチノに悠が「どうした？」と聞くとチノは

「里恵さんから聞いていましたが、本当に鈍感なんですね」

「なんだよ、いきなり——」

と冷たい声が聞こえた。

そして、店に到着。

「ココアから聞いたんだ、この店のスパゲティが美味しいらしい」

「それは楽しみです——あ、ココアさんたちに連絡しなきゃ」

チノはそういつて携帯を取り出し、ココアに連絡するがすぐに「心配しないで！2人でゆっくりしてきてね！」と電話を切られる。

「——何か企んでいますか？」

「何も企んでないぞ!？」

ココアの言動に違和感を感じたのか、チノが疑いの目を向けてくる。

そして2人で夕食を——と言いたいところだが、先ほどのココアとリゼの発言が気になってスパゲティの味がしない。

」

「——どうかしましたか？」

チノの方を見つつぼーっとする悠にチノが気がつく。

「い、いや——チノは俺のことどう思ってるのかなって思って」

脳中では美味しいのかどうか聞こうと思ったが、心の声が先に出てしまった。

チノは「な、なんですか」とフォークを皿の上に落とす。

「悠さんのこと、好きですよ」

チノはしばらく考えてから確かにそういった。照れている様子はない。

「——は？真顔で前触れもなく告白すんなよ！」

逆にこつちが恥ずかしくなってきた。チノは無意識でそういったのか、しばらくしてから自分が何を言い出したのか自覚する。

「そ、そういう意味では——」

「だ、だよな……」

なぜか落ち込む。自分が落ち込んだ理由がわからないが、悠は言う。

「俺もチノのこと、好きだけどな」

「か、からかわないでください！」

チノはお手洗いにいくと慌てて席を離れる。

「なんであんなことを言ってしまったのでしょうか——」

「——覚悟を決めるしかないですね」

チノはお手洗いの通路で呟いた。顔が赤い。

「もう……ココアとりゼのせいだからな」

悠は夕日が照らすテーブルで呟いた。こちらも顔が赤い。しばらくしてチノが戻ってきた。

「そ、その——先ほどの発言ですが」

「き、気にするな！上司として好きと言うか、妹として好きと言うか！その、小動物として好き！みたいな——」

悠は慌ててごまかす。なぜ慌ててごまかしているのか自分でもわからない。何を言っているのかもわからない。

「小動物——？」

チノは悠の発言に困惑しつつ続ける。

「私は——悠さんのこと、好きです」

「お、おう……俺も好きだぞ——」

「そういう意味ではありません」

「——は？」

今日はやたら間拔けな声が出る。ココアなら今日を「間拔けな声記念日」にするだろう。

「1人の異性として、という意味です。言わせないでください」

チノの顔が赤いが、おそらく自分はそれ以上に赤い。おそらく夕日より赤くて熱い。

「——そ、それはつまり告白ってことだよな？」

「本当に鈍いんですね」

チノは恥ずかしさが限界点を超えて、もはや悠の鈍感さにクスクスと笑ってしまふ。

「笑うなよ——俺も、チノのこと好きだよ。そういう意味でね」

悠がそういうと、チノは俯く。

「でも、俺は恋愛感情とかわからない人間だからな。さっきみたいに変なこと言い出すかもしれないし」

「——でも、そういうところ、面白いです」

チノはまた顔を上げて笑った。

「からかうな。——付き合うとかそういうの、うまくできないかもしれないけど」

「私は気にしませんよ——鈍い人の相手をするのは慣れてますので」

「——え!?!」

チノはココアのことを言ったつもりだったが、悠は前に彼氏がいたのかと驚く。

チノはそれに気がついたのか、

「違います。ココアさんのことですよ。ココアさんも悠さんも鈍すぎます」

「そ、そんなに俺って鈍いのか?」

そしてまたしばらくバイクに乗って街をまわる2人だったが、途中でゴツイ装備と銃を構えたりゼを見つける。

「なんだ!?!戦争か!?!」

「悠にチノ!なんだ、まだドライブしてたのか?」

悠が驚いてバイクを停めると、リゼがこちらに気がつく。

「リゼさん、これから戦争に行くんですか？」

「違う！親父とサバイバル訓練をしてるだけだ！」

「お前の親父さん、大事な娘を兵士にしようとしてるのか!？」

相変わらず恐ろしい家族だ。リゼは持っている銃を下ろすと、悠の方を見る。

「――」

「――なんだよ」

じっと見つめてくるリゼに悠は少し動揺しながらいう。

するとリゼは悠の耳元までやってきて小声で

「で、結果は？」

「な、なんの話だ？」

悠がとぼけると、リゼはおろした銃を再び構えてから「で、結果は？」ともう一度聞いてきた。

チノが怯えて震えている。

「わかった！話すから銃をおろせ！」

「素直でよろしい」

「――俺からその話をしようと思ったんだが、チノから話を振ってきてビビった」

その報告を聞いたリゼは「なに!？」と驚いて「それで？」と説明を促す。

「なんかよくわからない話になったんだが——」

悠がそう言いかけるが、リゼの近くにペイント弾が着弾する。

「しまった！襲撃だ！悠、話の続きは店で頼むー！」

リゼはそれだけ言うときっさきと走り去ってしまった。
しばらくしてリゼの父親が舌打ちしながら出てくる。

「くそ——俺としたことが照準がずれた。おい、リゼはどっちへ？」

「あ、あっちの方に走って行きました……」

チノと悠は啞然としてそれ以上何も会話できなかった。

「た、ただいま……」

「ただいまです」

ラビットハウスに帰ると、ものすごい勢いでココアが降りてくる。

「悠くん！」

「な、なんだ？」

ココアが迫ってきて思わず構えてしまう悠だったが、

「——スパゲティどうだった!？」

「そっちな！」

「とっっても美味しかったです」

てつきりリゼのような質問が来るかと思っていたが、料理の質問が来て一気に力が抜ける。

だが、その日の夜にココアが部屋にやってきた。

「なんかすごい疲れたわ……」

悠がそう言ってベッドに倒れ込むと、ココアもベッドに座る。

「チノちゃんとはどうなったの?」

「お前らその話題大好きだな——」

ため息をついて今日1日のことを全て話した。

「相思相愛だね」

「そう——なのか?」

「そうだよ。でも悠くん、付き合うならちゃんと『付き合ってください』って言わなきゃダメなんだよ?」

ココアがそう言ってくるが、悠は

「俺もそう思ったけど、恋愛とかわからないし、中途半端に申し込むのも思ってる」

「そっか……まあ、2人はもう付き合ってるも同然だしね」

「そうなのか!？」

自分のことなのに、なぜか他人事のように反応してしまう悠を見てココアが笑った。

「そうだよ、私から見るとラブラブだよ」

「——」

ココアの発言に悠は顔を枕に埋めた。

第一百一話 新学期早々トラブル発生!

長い長い夏休みも今日で終わり、明日から新学期に突入する。

「チノ、宿題終わったか?」

「終わってます。ココアさんみたいにサボっていませんので」
「助けて〜!」

ココアがすっかり宿題をやるのを忘れたようで、大慌てで問題を解き始める。

その光景を呆れた様子でチノと悠が見る。

「計画的にやらないからそうなるんだぞ」

「お説教は後で!手伝ってよ〜!」

「と、言っても私高校の宿題なんてわかりませんよ」

ココアがチノにすがりつくが、チノはあっさり却下する。
そしてココアは悠に視線を移す。

「――」

「いや、そんな捨て犬みたいな目をされても」

じっと見つめてくるココアに悠は「はあく」と息を吐いて

「わかったよ、少しだけだぞ」

「わーい!ありがとー!」

ココアの宿題を手伝う羽目になってしまった。

「悠さんにココアさん、コーヒー淹れてきました」

チノがそう言ってココアの部屋に入る。そして消耗しきった2人を見て驚く。

「ど、どうしたんですか？しつかりしてください！」

「お、終わらない——」

悠がかろうじてチノの質問に答える。ココアは完全にダウンしてしまった。

そう、先ほどからずっと宿題を進めているのだが、一向に終わらないのだ。

「ココア、どんだけ溜めてたんだ……」

悠が聞くが、ココアからの返事はない。しばらくして、またココアの部屋の扉が開く。

「ココアちゃん！宿題終わった!?!」

千夜とシャロだ。千夜も宿題が終わっていないみたいだが、まさかシャロも終わっていないのか——？

「見ての通りだ、俺もさつきから手伝ってるんだが、もう体力の限界だ」

「終わってるところでいいから、教えて欲しいんだけど……」

千夜がそういうと、ココアがバタツと起き上がる。

「わーい！宿題終わったあー！」

どうやら夢の中で宿題を進めていたようだ。ココアはすぐに現実に戻ってくる。

「あれ？頑張つてやったのに終わってない!？」

「寝ぼけてます」

「まあ、ココアちゃんらしいわね」

「しようがないわね、私も教えてあげるからさっさと終わらせましょ」

結局、みんなで宿題を進めることに。チノも予習するといつて参加した。

「ココア、頑張れ、これが終わったらお前の大好きな数学だ！」

「うう……文系は本当に無理……」

「ココアちゃん、しつかり！」

大嫌いな国語の宿題も終盤戦だが、ココアはもう死にかけだ。そんなココアを悠と千夜が励ます。

——だがシャロはというと。

「ココア！ここも間違ってる！」

「シャロちゃんがリゼちゃん以上に鬼教官だよー!!」

「こっちも違う！もうこの範囲全部やり直し!!」

容赦ないシャロの発言にココアが悲鳴をあげる。

「お、終わったあ——今度こそ終わった——」

「ああ、お疲れ」

全ての宿題を終わらせ、ベッドに倒れこむココア。

千夜の方も終わったようで、一息ついている。そして——

「やっと終わったわね——。特製のお茶を持ってきたの。みんなで飲みましょ?。」

千夜がお茶を一同に差し出す。——嫌な予感がする。そう思いながらも口に入れる。

「この中に一つだけ青汁が入ってまーす！」

千夜がそういうと、一同が一齐にお茶を吹き出す。が、ハズレを引いたのは千夜だった。

「うっ！」

「自滅した!!」

そして翌朝。

「行ってきました」

「ああ、気をつけて」

「またねー！」

ココアとチノを見送るが、しばらくしてココアだけが戻ってくる。

「ヴェアアアア!!宿題持って行くの忘れちゃったああ!!このままじゃ遅刻しちゃうよく!!」

「自業自得だろ。早く持っていけよ」

「うわーん!悠くん!私のティップピーで学校まで送ってくれる?」

「仕方ないやつめ——って、『私のティップピー』ってすごいワードだな!」

やれやれと、ココアがこの前購入した自転車に乗って、ココアを後ろに乗せると、悠はココアの高校へと向かった。

第二百二話 チマメ隊、解散の危機!?

「た、ただいまです——」

「誰——!!?」

ラビットハウスにチノが帰ってきた。が、チノの変わり果てた姿に悠はチノであると認識できない。

「——チノか?」

「は、はい」

「——夢か?」

「現実です」

「——タイムスリップか、パラレルワールドか、あるいは暑さで頭がおかしくなったのか」

悠はあくまで冷静に考える。

と、いうのもチノが今身につけているのは中学校の制服ではなく、リゼの高校の制服なのだ。

そしてココアもラビットハウスに帰ってきて目をこする。

「——誰?」

「なんで悠さんと同じ反応するんですか」

悠と同じ反応を見せるココアにチノが困惑する。

「悠くん、私、チノちゃんがリゼちゃんの学校の制服を着てるように見えるよ?」

「ああ、俺もだ……」

「私たち、どうなっちゃったんだろう!?!」

「とりあえず落ち着いて、まずは頭を冷やそう」

「動揺しすぎです」

動揺して震えるココアと悠にチノが呆れている。

「実は今日、リゼさんの学校に見学で行ったんですが——」

チノは事情を説明する。どうやら、学校見学でリゼの高校へ行ったが、リゼやシャロに「潜入している」と勘違いされ、被服部から制服を借りたようだ。

「返そうと思ったんですが、リゼさんが脱出しろってうるさかったので——」

「そのまま帰ってきたのか!？」

悠が驚くと、チノは「後日返却しますから——」と付け足す。

「リゼのやつ、学校見学があるって知らなかったのか」

「チノちゃん——その制服超似合ってるよ!!」

「ああ、本当によく似合ってるよ」

ココアと悠がそう褒めると、チノは顔を赤くして「そうですか?」と俯く。

「本当に、俺頭おかしくなっちゃったのかと思ったわ」

「だね。私も熱中症かと——」

事情を知ってホツとする間も無く、マヤとメグもやってきた。

「みんなこの制服着てる!？」

マヤとメグもリゼの高校の制服を着ていて、ココアと悠がハモる。

「ごきげんよう。遊びに来ましたわ」
「マヤのキャラが変わってるー!」

悠の叫びが店内に響いた。

「なんだ、学校見学なら早く言え!」

リゼがバイトにやってきて、ようやく事情を知る。

「面白いからつい——」

マヤが笑いながらそういうと、リゼは「やれやれ」と胸をなでおろす。

「私、リゼさんと同じ学校にするー!」

メグの発言に、悠は「そうか」と納得する。

「私も、特待生としてリゼの学校に潜入するよー!」
「なんだと!!?」

マヤの衝撃発言に今度はリゼと悠がハモる。

「お前、大丈夫なのか——?」

「成績なら大丈夫だよー!」

「うそだろ——」

悠が動揺すると、マヤは笑って「悠ってば超失礼く!」という。

「マヤちゃん、好奇心だけは強くて——」

「それに、学費免除になれば親を楽にできるかな〜って」

「マヤ——」

リゼと悠は思わずジーンときてしまう。マヤは「そうだ!」とチノの方を向いて

「チノも一緒の高校になれば、3人ずっと一緒だよ!」

と提案するが、チノはしばらく考えて「——いえ」と断り、

「私は、行く高校はもう決めてあります」

と宣言すると、ココアと悠が持っていた皿を落とす。

「え?チノ、なんて?」

「チノちゃん——!?!」

激しく動揺するココアと悠にチノはもう一度「ですから——」と説明する。

「ココアさんと同じ学校にします!」

「そんなにココアと一緒にがいいのか!」

「そんなにココアが好きか—!!」

チノの発言にマヤとメグがつっこむと、チノは慌てて

「学力と学費の問題です!」

と否定する。

「だ、だが、チノが1人って——」

悠が震えながら学校で孤立するチノを想像するが、チノは

「そ、それより早く割れたお皿片付けてください！」

とごまかして

「もう——マヤさんは私たちに内緒が多いです」

そういうと、メグもそれに便乗して

「前もリゼさんに相談しに飛び出したよね」

というが、マヤは知らんぷり。そんなマヤにチノとメグはさらに

「でも本当は繊細な気遣い屋さんなのはお見通しです」

「私たち想いの寂しがり屋さんなのも知ってるんだから」

というと、マヤは頬を赤くすると、「あ、本当に照れてる」 「貴重です」と煽る。

マヤはついにリゼに飛びついて叫ぶ。

「あの2人を黙らせてよー!!」

「その気持ちわかるぞ……」

リゼがマヤを慰めた。

「そ、そんなにこの制服がいいんですか？」

「ああ、一生見てられる」

チノの部屋。チノが制服を着替えようとするが、悠が今日1日はその格好で、と止める。

そしてココアがカメラを持ってきてチノを撮る。

「と、撮らないでください!」

「チノちゃん、すごく可愛いよ」

「ああ、すごく似合ってる。ココア、あと100枚」

「任せて!!」

ココアがシャッターを連打すると、チノは顔を赤くして

「本当にしようがないお2人です」

と呟いた。

第百三話 出撃！深夜探検隊！

「暑すぎて眠れない——」

悠はベッドから起き上がる。エアコンをつければすぐに涼しくなることはわかっているが、電気代が惜しい。

「眠くならないし、少し散歩するか」

外に出ると、少しだけ空気が冷えていた。と言っても涼しくはないが、家にいるよりはマシだろう。

しばらく静まり返った街を散歩して、公園にたどり着く。

「——」

そして悠は見てしまった。草木も眠る丑三つ時に公園を徘徊するリゼの姿を。

「——悠!?!」

背後から近づく人の気配を感じたのか、リゼがこちらに気がつく。

「な、何してるんだ!?!」

「それはこっちのセリフだ」

「わ、私は——」

「ああ、すまん、裏の仕事を盗ったか。見なかったことにするよ、また明日な」

悠がそう言って立ち去ろうとすると、リゼは慌てて「待て!」と悠の腕を握る。

「お前は私をなんだと思ってるんだ!?!別に裏の仕事なんかしてないぞ!?!」
「だったらなんでこんな時間に――。夜中に女の子一人で歩くの危なくないか?」

悠がそういうと、リゼは少しだけ照れた様子で「お、女の子って――」とつぶやく。

「わ、私はいざとなったら反撃できるから大丈夫だ」
「相変わらずたくましいな」

リゼと悠は近くにあるベンチに腰を下ろす。

「眠れなくて、散歩してたんだ――」

「お前もか、俺もだ」

「――なあ、少しだけ探検するか?」

「懲りねえやつだなくまた洋館行くか?」

悠がそう茶化すと、リゼは「その話を掘り返すな!」と顔を手で覆う。

結局、夜の街を2人で探検することに。

「お、甘兎庵だ」

「千夜もシャロももう寝てるだろうな」

「深夜徘徊してるのは俺とお前ぐらいだろうな」

「――そういえばチノはどうしたんだ?」

甘兎庵を横目に見ながら歩く。

「チノは寝てるんじゃないのか?」

「一緒に寝てなかったのか。お前のことだから一緒に寝てるのかと」

「お前は俺をなんだと思ってるんだ？」

「さっきのリゼの言葉をそのまま返すと、リゼはそれに気がついて「さっきの仕返しか！」とつつこむ。

「チノには涼しくて快適な部屋で寝て欲しいからな」

「空調つけないで寝てたのか？」

「あいにく、俺は節約主義なんぞな」

雑談しながら散歩するのはとても気持ちがいい。

その後もチノの進路先について、ラビットハウスについて、リゼとチノの出会いなど、話が弾む。

「そりゃ、いきなり新人バイトが来て、しかもその新人に銃向けられたら怯えるだろ」

「私としたことが——」

「だけど、ぬいぐるみをプレゼントするとか、お前も案外可愛いところあるな」

「う、うるさい!!——そういうお前の方こそ、プレゼントにオルゴールとか……」

「なんだよ、オルゴールいいだろ。俺ああいうの結構好きなんだ」

悠がそういうと、リゼは意外そうな表情をする。

「男子でもオルゴール聞いたりするの？」

「俺はたまに聞いてた。死んだ母親がよく買ってきてくれた」

「そうか——」

かれこれ1時間は街を歩いている。話が止まらない。

「で、結局お前とチノはどんな関係になったんだ!？」

「どんな関係？って——上司と部下？」

適当にごまかすと、リゼは悠の肩を揺さぶる。

「付き合ったのか付き合っていないのかはつきりしろ！」

「なんだかんだ、ココアよりその話に興味持ってるな——付き合ってるといえば付き合ってる、付き合っていないといえば付き合っていない」

「なんだよそれ——」

リゼは少しだけ不満そうだ。悠は「今は、曖昧でいいんだ」と満月につぶやく。

「家まで送ってやるよ」

「いいよ、私のことは気にするな」

「遠慮すんなよ、さつきも言っただろ、夜中に女の子一人で歩くのは危ないって」

「私を女の子扱いしてくれるのか——」

「銃を持つてるところ以外は普通だろ？」

悠がそういうと、リゼは少し顔を赤らめて「本当、そういうところだぞ——」とつぶやくが、悠には届かない。

第百四話 コーヒーの匂い

「あの、悠さん」

「ん？なんだ？」

朝、学校へ行く支度をする時間だ。チノが中学校の制服に着替えて下の階に降りてくる。

そして悠の元へ。

「私ってやっぱりコーヒーの匂い、しますか？」

「なんだよいきなり——」

「実は昨日、ココアさんにコーヒーの匂いがするって言われたんです」

「ココアめ、また余計なことを——」

「それと、ココアさんにコーヒー豆を被せられたことも原因してるかと」

悠はココアに呆れながらも、チノに顔を近づけてクンクンと匂いを確かめる。

どちらかというと、シャンプーの匂いと服からは柔軟剤の匂いがする。

「んー俺の鼻が慣れてるからかな。特にコーヒーの匂いはしないぞ？」

「お兄ちゃん？」

振り向くと里恵が立っていた。

「うわっ！いつから居たんだ!？」

「お兄ちゃんがチノちゃんの匂いを嗅いでるところからだよ。朝から何してるの……」

「あってるけど違う!」

「そうです、悠さんに私からコーヒーの匂いがするかどうか確かめてもらっていたんです！」

慌ててチノと悠が誤解を解く。すると里恵は「コーヒーの匂い？」とチノの近くに寄って匂いを確かめる。

「な？別にコーヒーの匂いしないよな」

「うん、大丈夫だよ」

「そうですか」

チノは少しホツとした顔をする。ココアも下の階へ降りてきて合流。

「ココア——」

「なあにー？」

相変わらず能天気なやつだ。悠が名前を呼ぶとニコニコと笑みを浮かべる。

「お前、昨日チノに『コーヒーの匂いがする』って言っただろう、気にしてたぞ」

「そうなの!?そんな意味で言ったわけじゃ——」

「やれやれ……」

そうしていつもの1日が始まる。

「ただいま〜！」

「おかえり。今日はココアの方が早いのか」

「短縮授業だったからね！早めに仕事手伝うよ！」

ココアがそう言って更衣室に走っていく。
しばらくして、ラビットハウスの制服に着替えたココアがホールに
出てくる。

「なんか、ココアと2人で店番って久しぶりだな」

「だね〜」

「またやらかさないようにしっかりと監視するからな」

「あれ？私の信用ゼロ!?!」

ココアと雑談をしつつチノの帰りを待つ。

「ティツピーも相変わらずもふもふだね〜」

ココアがティツピーを抱きながら撫でるとティツピーが少し顔を
赤くする。

体はメスだけど、中身は男性だからな——。

「変態め……」

「えっ!?!もふもふしてただけだよ?」

「いや、ココアじゃなくてティツピーに言ったんだよ」

「——」

ティツピーは黙ったままだ。まあ、あんまり喋るとバレてしまうか
ら仕方ないのかもしれないが。

「そういう悠くんも、今朝チノちゃんの匂い確かめてたでしょ?」

「その話が拡散されてる!?!」

「悠くん、匂いフェチ?なんだねー」

「なんてひどい誤解だ……」

もはやココアの誤解を解く気すら失せる。

「ただいまです」

「おかえりー」

「チノちゃん！おかえりなさいーい！」

「ココアさん——暑苦しいです」

「チノちゃんもふもふく」

ココアがチノに抱きつく。チノは引き剥がそうとするが、まんざらでもない様子だ。

「おいココア、チノが困ってるだろ」

「悠くんもチノちゃんもふもふしたくなくなった？」

「いや、チノをもふもふできるのはココアの特権だからな——」

悠は虚しくつぶやいた。

第百五話 恋愛すごろくゲーム（前編）

ココアがすごろくゲームを買ってきた。
どうやら、新しく発売された人気のすごろくゲームらしい。

「みんなでやろうよ」

「余計なところで金使いやがって——」

ココアの誘いでみんながラビットハウスに集まる。

正直嫌な予感しかしないのだが。

ココアが買ってきたすごろくゲームを見ると、案の定普通のすごろくゲームではないことが判明する。

「おいココア！これ恋愛すごろくゲームじゃないか！」

「えーっ!!？」

「今知ったのか……」

ココアの反応を見て悠が「やれやれ」と呆れる。

「ま、まあ、気にしない気にしない！」

そう言って強引にゲームを開始させるココア。

「まあ、楽しそうなゲームね」

「でしょー！」

「——」

千夜以外は気が進まない様子だ。

ルールは簡単。サイコロを振って出た目の数だけ駒を進めるとい
う至って普通のすごろくゲームなのだが、マス目には指令が書かれて
いる。

指令が書かれているマスに止まった場合は、書かれている指令に従わなくてはいけない。従わなかった場合は罰則としてサイコロを振って、番号ごとに決められている罰ゲームを受ける必要がある。

また、指令の中には「カードを1枚引く」と言うものがある。その場合はカードを1枚引いてそれに書かれている指令に従う。

悠の左隣にココアが座って、参加を渋るチノを誘う。

チノは嫌そうな顔をしつつも悠の右隣に座る。

サイコロはココア、悠、チノ、リゼ、シャロ、千夜、里恵という順番だ。

先頭のココアは「よし行くよー!」とサイコロを投げる。――3だ。

「あつ! 早速指令が書いてるよ! 『次の番まで左隣の人と恋人繋ぎ』うそ!」

「1発目からなんて指令だ……」

これが「右隣」でなかったことに安心する悠。

ココアは左隣に座っている里恵と恋人繋ぎをする。

そして悠にサイコロが渡された。――4だ。

「よし! ココアを追い抜いたぞ。指令はないみたいだ」

悠はサイコロをチノに渡す。チノがサイコロを投げた。――2だ。

『「右隣の人の好きなところを1ついう」ですか」

今度は「左隣」であって欲しかったと心の中で呟く。

チノはリゼの方を見てしばらく考えると、

「力持ちなところ、でしうか」

そう言ってリゼにサイコロを渡す。リゼは「そ、そうか。ありがとう

う」と言つてサイコロを投げる。——4だ。

「俺と同じか」

「指令がなくてよかつた——」

リゼは安堵しつつサイコロをシャロに渡す。シャロは心の中で「指令くるな」と願いながらサイコロを投げる。——6だ。

「おー、一気に進んだね！」

「日頃の行いのせいかしら」

シャロはドヤ顔で駒を進めるが、あいにく指令が書いてあるのを見て「なっ！」とがっかりする。

『次の番まで左隣の人の膝に乗る』左隣——リゼ先輩!？」

「あらあら、日頃の行いね」

千夜が楽しそうにいうと、シャロは「い、いいんですか先輩——」とリゼの方を見る。

リゼは少し恥ずかしがりながらも

「し、仕方ない。従わないと罰ゲームだからな」

「そ、そうですね。お、お邪魔します——」

シャロはリゼの膝の上に乗る。そして千夜にサイコロを渡すと千夜はすぐにサイコロを投げる。——5だ。

「指令なしか、残念……」

「普通喜ぶだろ」

千夜は里恵にサイコロを渡すと、里恵も指令くるなと思いつつながらサ

イコロを投げる。——4だ。

「よかった、私も指令なし！お兄ちゃんとりぜちゃんと同じところだね」

里恵はそう言ってサイコロをココアに渡すと、恋人繋ぎを解く。

「逆転して見せるよー！」

ココアがそう言ってサイコロを投げる——6だ。

ココアは「ほら！逆転だよー！」と自慢げに駒を進めるが、指令が書いてある。

『カードを1枚引く』かあゝ」

カードを引くと、「メンバーの中で1人指名して3秒間ハグ」と書いてある。

「チノちゃん！」

「なんで私!?!」

ココアは考える暇もなくチノを指名して3秒間ハグする。

「んゝチノちゃんもふもふゝ」

「なぜか負けた気がします」

ココアが満足げに悠にサイコロを渡すと、悠はそれを投げる。——5だ。

「俺もカードを引くのか」

ココアと同じところに止まった。カードを1枚引くと「右隣の人に頬にキスしてもらう」と書いてある。

「右隣——チノか！」

「また私ですか！」

「いいだろ、別に初めてするわけでもないし」

悠の爆弾発言に一同が「えー!？」と驚く。チノも例外ではない。

「あ、あれはたまたまです！事故です！」

「まあなんでもいい、罰ゲームか俺の頬にキスするか選べよ」

悠が悪魔の微笑みを浮かべながらチノに問い詰めると、チノは黙って悠の右頬にキスした。

その光景を千夜が写真に収める。

「おい！——まあいいや」

お互いに恥ずかしい。悠はサイコロをチノに渡す。チノがサイコロを投げる。——3だ。

「指令なしですが、もう私は懲り懲りです……!」

チノは少し不満げにリゼにサイコロを渡すと、リゼはサイコロを投げる。——3だ。

「えっと——『右隣の人をちゃん付けで呼ぶ』だから、シャロ——ちゃん？だ……」

「はわわわわ!!」

「何気に一番運がいいのはシャロちゃんね」

顔を真っ赤にするシャロに千夜が微笑む。そして千夜もサイコロを投げる。――4だ。

指令は「カードを1枚引く」で、千夜の引いたカードに書いてある指令は

「あら『メンバーの中で1人を指名して壁ドン』――誰にしましょうか？」

千夜が辺りを見渡すと、みんな視線をそらすのが、ココアだけは視線を逸らさない。千夜と目があった。

「ココアちゃん！」

「やったあ〜！」

千夜がココアに壁ドン。その光景をシャロが写真に収める。

こうしてしばらくすごろくゲームは進んでいく。

第百六話 恋愛すごろくゲーム（後編）

しばらくすごろくゲームが進み、ゲームも終盤。指令の内容は徐々に過激なものになっていき、ついに事件が起こる。

ココアがサイコロを投げた。そして駒を進める。マス目に指令が書かれている。

「指令だね！『右隣の人に顔をスリスリ』だって悠くん！」

「なんてこった——」

ココアが悠に顔をスリスリさせると、悠は「やめろおお！」と引き剥がす。

そして悠がサイコロを投げる。駒を進めていくと「カードを1枚引く」と指令が書いてある。

悠はカードを引こうとするが、ココアがそれを止める。

「お姉ちゃんが引いてあげる〜！」

「ああ、その方がいいかも——プレッシャーがすごくて俺には引けない」

ココアがカードを1枚引いて内容を読む。

「えーっと——ヴェアアアア!!」

「どうした!」

「あ、あのね、悠くん……『右隣の人の胸を揉む』って書いてあるよー!!」

「なん……だと……」

右隣の方を見ると、驚きのあまり開いた口が閉じないチノの姿が。

「——ダメだダメだ！それはまずい！なあチノ？」

「え——わ、私はいいですが、その——触っても何の面白みもありませんよ……」

チノが自分の胸を押さえながら悲しそうにつぶやく。

「そ、そんなことないわチノちゃん！その成長は個人差が大きいし、そのうちチノちゃんも——」

シャロが慌ててチノを慰める。心なしが目が渦巻いているような気がする。

「そうだぞチノ！俺は大ききで判断しない男だからな——つて、そうじゃなくて！チノには綺麗な心のままでいてほしい!!」

悠はそう叫んで罰ゲームのためにもう一度サイコロを振る。

「悠……お前からそんな言葉が出てくるとは……」

そして悠の罰ゲームは次の人の番が終わるまで逆立ち。

「チ、チノ！早くサイコロを——」

「は、はい！」

そして、また悠の番で事件が起こる。

「今度の指令は『メンバーの中で2人指名して告白させる』か。どうしようかな」

悠がにやけた顔でリゼとシャロの顔を見ると、2人は「私たちを指名するつもりか!!」と叫ぶ。

「この2人のための指令だわ！」

「だよな、千夜ならそういうと思ったぜ。よし、リゼがシャロに告白つてことで」

「うそだああああ!!!」

リゼが頭を抱えて悲鳴をあげる。顔が破裂しそうなほど赤い。

「だ、大丈夫です先輩！この指令をパスして2人で罰ゲームを受けましょう！」

「だが——どんな罰ゲームがあるかわからない……シャロが嫌じゃないなら私は言うぞ……」

「嫌じゃありません！——もう、これなしじゃこのゲームやってられないわ！」

シャロがそう言ってカバンからコーヒーの缶を出して、栓を開けた。

「シャロ——その、わ、私は、お前のことが——その——」

「頑張つてリゼちゃん！」

ココアが楽しそうにリゼを励ます。

「お前のことが——好きだ！」

「私も大好きですしえんぱいく!!!」

「あら、両思い？」

「すぐろくでカップル成立だね〜！」

千夜とココアの発言にリゼが恥ずかしさのあまりクッションに顔を埋めた。

そして、ココアがあと3マスでクリアというところまできた。ちなみに2位はシャロで3位は悠だ。

ココアがサイコロを投げる。3以上が出ればクリアだ。

「あー!2が出ちゃったよ〜……」

「指令は『次の番まで右隣の人と抱き合う』か——って嘘だろ!？」

ココアの指令を読み上げる悠は、指令の内容に悲鳴をあげる。

「悠くんを徹底的にもふもふするよ〜!」

「ココア!やめろ!!」

「ん〜もふもふ〜!」

悠が暑さと恥ずかしさでダウンしたため、次はチノがサイコロを振ることに。

「指令は『左隣の人に膝枕』ですね」

「悠くん、大人気ね」

「ココアのせいで肝心な時に倒れてるけどな〜」

千夜とりぜの視線の先にはダウンした悠の姿が。ココアは勝ち誇った顔。

「仕方ないですね。寝てるのでバレないでしょう」

チノがそう言っただけで悠の頭を膝に乗せる。

結局、すごろくゲームは2位だったシャロが一気にゴールして勝利。

順位は1位シャロ、2位ココア、3位悠の逆転勝ち。

「惜しかったなあ〜！」

「次は負けないわよココアちゃん！」

「次があるのか!？」

千夜の次回予告にリゼがツツコミを入れる。次があつてたまるか。悠が目を覚ますと、チノの顔が見える。

「——ん、チノ？」

「——はっ！」

チノが驚いた様子で下を向く。顔が近い。

「ち、違うんです！これは指令で——でも、寝てるからさっさとおろすのもアレかと思って——」

「そうなのか!？なんだよ、起きて満喫すればよかつた！」

悠が後悔すると、チノの顔がより一層赤くなる。

「変なこと言わないでください！起きたんなら早くどいてください！」

「いや、このままもう一回寝る……」

「寝なくていいです！」

「相変わらずの2人ね」

「いいなく私もチノちゃんに膝枕して欲しかった……」

千夜とココアが、悠を起こそうとするチノと、膝枕を満喫する悠を見てつぶやいた。

第一百七話 制服と進路

夕食の後、悠は自分の部屋に戻ろうと廊下を歩いていると、ココアの部屋からチノの声が聞こえる。

ココアは里恵とお風呂に入っているため、チノと悠しかいないはずだが——ティツピーと会話しているのだろうか。

「ちよつと拝借——似合うかな……」

「カーディガン、何色にしよう……」

ココアの部屋の扉が開いており、影からそつと中を覗いて見ると、チノがココアの制服を着て鏡の前で何やらつぶやいている。

ティツピーはいない。おそらく下でタカヒロとバーにいるのだろう。

「ココアさん……」

チノがボソボソとつぶやいているが、悠にはよく聞こえない。だが今の声は聞こえた。

「チ、チノ……う？」

悠が恐る恐るチノの名前を呼ぶと、チノはビクツと体を大きく震わせ、ゆっくりとこちらに顔を向ける。

「ち、違います。これはその、ちよつとした出来心というか、前からもう一度試着してみたかったというか……」

「ま、まあ趣味は人それぞれからな……」

悠が一步引いてその場から去ろうとすると、チノが悠の腕を掴んで壁に追い詰める。

「このことはココアさんには……」

「あ、ああもちろん！——しかし意外だな。チノにそんな趣味があったとは……」

「違います！そういう意味で着てたわけじゃありません！」

思わず大きな声を出すチノに悠は「静かに！」と口を押さえる。

「バレる前に着替えろ」

「そ、その前に……私のカーデイガンの色、何がいいと思いますか？」

「それで着てたのか？」

「はい、待ちきれなくて」

「そうだな——何色でも似合うと思うけど。いっそのことピンクにしてココアとお揃いにしたら？」

悠がそういうと、チノは「そんなの、絶対みんなにからかわれます」と拒否する。

「それもそうか。でもその制服、ブレザーよりすごくいいよ」

「そうですね。それなら良かったです」

「ああ、とりあえず写真撮っていい？」

「撮影禁止です」

「えくいいじゃん。抱きしめたくなくなるくらい可愛いよ」

「か、からかわないでください。本当にしようがない悠さんです」

翌日。リゼと届いた荷物を倉庫に移動させながら話をする。

「やれやれ、チノもようやく来年から中学生か」

「ああ、そうだな——ん？いや、高校生だろ」

リゼのボケにツツコミを入れ忘れそうになった。と思ったらリゼはどうやら本気で間違えたらしく、顔を赤くして

「ま、まあ大して変わらん」

とごまかす。

「いや、大違いだろ。チノが聞いたら怒るぞ」

「うっ——」

「なあ、リゼは進路どうするんだ」

「私は——とりあえず大学行くさ。将来何したいか、なんとなくわかってきたし」

「そうか——軍学校って大変らしいな。頑張れよ」

「私は軍人になるつもりはないぞ!？」

「え？違うの？」

「違うぞ！」

リゼの叫び声が倉庫に響く。

第一百八話 夏風邪は治りにくい（前編）

見事に夏風邪になった。朝、熱を測ると38度まで体温が上がっていた。

夏風邪は微熱が出る特徴があると聞いたが、普通に熱を出した。ココアが悠の部屋にやってくる。ラビットハウスの制服を着ているということは、もう仕事が始まっているということか。

「悠くん、大丈夫？」

「ココアか、バイトはどうした」

「チノちゃんとリゼちゃんが店番してるよ！私は悠くんの様子見てこいって」
「そうか」

悠がココアの方を向くと、ココアは少し笑って

「あ、もしかして私じゃなくてチノちゃんが良かったー？」

「いや、ココアでいい。チノに風邪うつしたくない」

「そっかー！——って、私の心配はしてくれないの!？」

まんまと悠の軽口に乗るココアを見て悠は少し笑う。

「冗談だ、お前もうつるから早く仕事戻れ」

「大丈夫だよ、お姉ちゃんに遠慮しないで」

「悠くん？——寝ちやった？」

気がついたら部屋にリゼがいた。

「お、起きたか」

「リゼ——俺いつの間にか寝てたみたいだな」

「ああ。ちょうどおかゆを持ってきたんだ。食べられるか？」

「まあ食べられると思う。ありがとう」

リゼからおかゆを渡されるが、起きてからすぐで寝ぼけているのか、わからないが手がうまく動かない。

「ごぼすぞ。食べられないなら無理に食べるなよ」

「いや、食べられるんだけど、手に力が入らなくて——」

「仕方ないやつめ、ちよっと渡してみろ」

リゼにおかゆを渡すと、リゼはスプーンですくってこちらに渡してくる。

「ほら、あーんしろ」

「あ、あーん……」

風邪をひいて弱っているせいか、この状況がとても恥ずかしい。

「——リゼは恥ずかしくないのか」

「恥ずかしいけど、誰も見てないし——」

「リゼさん……」

リゼの真後ろにチノが立っていた。リゼは背後から突然声がして驚く。

「チ、チノ！いきなり声を掛けるな！」

「普通に見られてたけど恥ずかしくないのか？」

「お前！チノが後ろにいるのをわかっててわざと聞いてきたな！」

「リゼさん、荷物が届いたので倉庫に入れてもらっていいですか？私やココアさんの力では——」

「あ、ああ！了解した！」

リゼはチノに敬礼しておかゆとスプーンを手渡す。

「すまん、後は頼んだぞチノ」

「はい——悠さん、大丈夫ですか？少し苦しそうです」

「気にするな……」

先ほどから熱に加えて咳も出る。喉が痛い。

「あまり無理しないでください。悪化してしまいますよ」

「ああ、悪いがそうさせてもらおうよ……。さつきからチノが2人いるように見えるんだ」

「私は1人しかいません。しっかりしてください」

おかゆを食べるのをやめて、もう一度寝ることにした。

「悠くん！仕事終わったから来たよー！」

「ココア……相変わらず元気だな」

「ココアさん、少し静かにしてください」

「ごめんごめん！お姉ちゃんに何かしてほしいことある？」

ココアは悠の顔を覗き込むと、悠は今にも死にそうな声でココアにいう。

「ココア……チノを頼む……」

「遺言!？」

「子供じゃないです」

第百九話 夏風邪は治りにくい（後編）

熱を測ると、先ほどより熱が上がっていた。夏風邪とはいうものの、高熱が続く。

「悠さん——すみませんが、夕食の準備がありますので」

「私も、宿題やらないといけないから、里恵ちゃんに来てもらうね」

そういつてココアとチノが部屋から出て行こうとするが、悠がチノの腕を掴んで止める。

高熱で頭がやられているのか、自分が何しているのかわからない。

「悠さん——？」

「悠くん？どうしたの？何かしてほしいこと、あった？」

「——寝るまで手、握って……」

悠の発言にココアとチノは少し顔を赤くする。

「——私、今キュンと来ちゃった……」

「本当にしようがない悠さんですね。少しだけですよ」

「——手、ちっちゃい」

「余計なお世話です」

「——ん、何か手に冷たいものが……」

悠が目を覚ますと、隣でチノが悠の手を握ったまま寝ている。背中には毛布が被せられている。

「——チノ？」

「あ——おはようございます悠さん……」

「あ、ああ、おはよう——つて、夜だけだな。それよりなんで手を繋いでるんだ?」

「悠さんが言ったんじゃないですか」

「——え?」

「記憶がないんですか?しよがない悠さんです」

チノがクスツと笑うが、悠は「いつ言ったっけ——」と困惑する。

「つられて私まで眠ってしまいました……」

「なんかよくわからないけど、ごめん……」

「いいんです。それより、そろそろ何か食べませんか?」

「そうだな」

悠がそういうと、チノは「取ってきます」と手を離して下の階へ降りていった。

そしてチノと入れ替わりでココアがやってくる。

「あ、起きたんだね!」

「ああ、なんかチノに申し訳ないことをしてしまった」

「風邪ひいてるときはみんな甘えん坊さんになっちゃうから、仕方ないよね」

「——え!?俺、何を言ってたんだ?」

悠が驚いてココアに聞くと、ココアはふふつとにやけて「内緒だよ」とごまかす。

チノが部屋に帰ってきた。手にはお盆の中にはおかゆとりんご。

「どうぞ——」

「——食べさせてくれんの?」

チノがスプーンの中におかゆを入れてこちらに差し出してくる。

悠が聞くと、チノは少しだけ恥ずかしそうにして

「さつき、リゼさんに食べさせてもらってたじゃないですか」

「——え、なに、嫉妬した？」

「違います。こぼしたら洗濯するのが大変なので食べさせてあげようと思っただけです」

「私もチノちゃんにあーんってしてもらいたい！」

「ココアさんは元気じゃないですか」

「どっちが姉でどっちが妹なのかわかんねえな……」

相変わらずなココアとチノに悠は苦笑いして口を開ける。

「体が暑い——」

「そうですか？エアコン、ついているようですが」

「きつと熱のせいだよ」

先ほどからやけに暑い。と悠が訴えるとチノはココアと床に座ってから

「では、私が怪談話をしてあげましょう」

「おー……」

チノの提案にココアと悠がハモる。怪談話で涼しくさせようとするチノが愛おしい。

「実は、このラビットハウスにも怪談があるんです」

「そうなのか!？」

悠は驚くが、ココアは驚かない。むしろニコニコしている。

「このお店は——夜になると……。目撃情報がたくさんあるんです。

父も私も見ています」

「うそだろ……」

またココアの方を見ると、ココアは怖がる様子もなくニコニコしている。

——こいつが一番反応すると思ったのに。意外だ。

正直怪談の内容も気になるが、一生懸命こちらをビビらせようとしているチノに思わず頬が緩んでしまう。

「暗闇に光る目。小さくてもふもふな——」

「さて、チノ。その話、オチがわかった」

「そ、そんな……」

「暗闇に光る目」「小さくてもふもふ」この2つのキーワードで十分予想がつく。——ティツピーでしかない。

「で、では、この話はどうぞでしょう——」

チノが慌てて別の話を始める。

「私の実体験なんです——私が寝ていると、枕元から『お姉ちゃんと呼びなさい』と何度も声が——」

「その話のオチもわかったぞ。何してんだよココア……」

「えへへ、お姉ちゃんって呼びたくなる呪文を唱えてたんだよ」

「むう……やっぱり私、怪談に向いていないんでしょうか」

チノが頬を膨らませて落ち込むと、ココアは慌てて「そんなことないよー!」と否定する。

「チノちゃんの話ならみんなをニコニコさせられるよ!」

「それは怪談としてどうかと……」

か。いつの間にか、暑さを忘れていたのはチノの怪談話のおかげだろう

第一百十話 怪盗ラパン参上!

あれから数日が経ち、すっかり夏風邪から回復した。

「迷惑かけたな、今日からいつも通りバイトに出るぜ」

「そうか、治って何よりだ」

「えー? 風邪で弱ってる悠くん、ちよつと可愛かったんだけどな」

「——ココアってSなのか!？」

「S——って何ですか?」

チノがこちらに聞いてくるが、リゼは「知らない方がいいぞ」とチノの頭を撫でる。

「俺、そんなに恥ずかしい発言してたか?」

「んー母性本能をくすぐられたというか」

「はあ……?」

困惑する悠に、リゼが「何の話だ!？」と食いつくが、悠がそれを阻止する。

「よくわからないけど、追求させないぞ! 勝負だ!」

「なに!? 私に挑戦するとは、すっかり体調が回復したようだな」

「お2人とも、お客さんがいないからといって遊ばないでください」

ほうきを持って対戦しようとする悠とリゼをチノが止める。

その晩、チノの部屋に集まって、最近ブームとなっている「怪盗ラパン」なる番組を見ることに。

『私に盗めないものはないのよ! ごきげんよう、皆さん!』
「今週も面白いね」

本編が終わってEDが流れ始めるとココアが拍手して感激する。

「怪盗ラパンって誰かに似てるような気がしないか？」

「言われてみれば……誰でしょうか……」

悠とチノが「うーん」と考えていると、ココアが「はっ！」と立ち上がる。

「宿題忘れた！おのれラパン——！私の時間まで盗まれた！」

「自業自得だろ」

「自業自得です」

ココアの発言に悠とチノがハモる。

そしてその翌日。ラビットハウスに千夜も遊びに来ていた。

「私に盗めないものはないのよー！」

「ココアちゃん、似てる〜！」

店内でココアと千夜がモノマネをして遊んでいた。

子連れのお客さんの受けもいい。

「確かに、内容は子供向けだけど考えさせられるストーリーだよね〜」

「みんな見てるのか——。流行っているのかな？」

リゼが怪盗ラパンの話をする一同を見てつぶやく。

ココアは子連れのお客さんのテーブルまで向かい、怪盗ラパンのモノマネを続ける。

「狙った獲物は逃さない！」

「ラパンだー!!」

ココアは子供受けがいいようだ。チノは

「ココアさん、仕事中に遊ぶのは……」

とココアを止めるが、ココアはチノの頭を撫でて

「チノちゃんもあとで遊んであげるから安心してー!」

「そういう意味じゃありません!」

「なあ、みんな。怪盗ラパンって誰かに似てると思わないか?」

ココアとチノの騒ぎを無視して、悠が一同に聞く。

「私もそれ思ったの。でも今朝シャロちゃんを見たら気づいちちゃった——」

「言われてみれば——!!」

「そう、怪盗ラパンの正体はシャロちゃんよ!!」

千夜がそう叫ぶと、チノは

「シャロさんは何かを盗むようなことはしませんよ」

と否定するが、ココアは窓の外を指差して叫ぶ。

「あー!!怪盗ラパンがいるー!!」

「そんなわけ——」

悠が半笑いでココアの指差す窓を見てみると——。

「二本当にいたー!!!」

チノと悠が思わず叫び声をあげた。

ココアは店の扉を開けて怪盗ラパンの元に駆けつける。

「って、シャロちゃん？ラパンごっこしてるの？」

「バレてる!?!——何でこんな時だけ勘がいいのよ!変装のつもりだったのに!」

シャロがつけていたラパンのメガネを外してココアに怒鳴ると、悠も外へやってくる。

「どうしたんだシャロ。何か入りにくい事情でもあったのか？」

「それは——その——」

「待ってシャロちゃん!そのメガネどこで手に入れたの!?!」

「私の話は!?!」

シャロの話を遮ってメガネのことを質問するココアにシャロがツツコミを入れる。

第百十一話 怪盗ラパンの悩み事

「実はね、フルールが怪盗ラパンとコラボ中で子供の来客が増えたんだけど——」

シャロがココアと悠に悩み事を話す。どうもシャロは子供受けがイマイチで、別キャラに人気を奪われてしまい落ち込んでいるようだ。

「それで、子供受けがいいココアを偵察しよう」と

「普通にしてるだけなんだけどな——……」

「心の中に土足で入り込んで馴染めるその才能が羨ましい……」

ココアの言葉にシャロがそうつぶやくと、ココアはシャロの手を握っている。

「私はお話をするのが好きなだけだよ——！」

「それも立派な才能だろ」

「人の心を盗む怪盗ココアだわ！」

「——2人とも、私をこんなに褒めるなんて——何か企んでるの？」

ココアを褒めるシャロと悠にココアが震える。——素直に感心しているのだが。

するとココアは、バイト終わりにみんなを集めて「怪盗ラパン」の鑑賞会をやることに。

「とりあえず録画したのを見ようよ——！」

「私、初めてみるんだけど大丈夫かな」

不安がるリゼに悠は「心配するな」となだめる。シャロも最近少し見始めたぐらいだという。

ココアが録画したものを再生し始める。

『——あれは、冬の夜だった。雪が積もる丑三つ時に……』

「怪盗ラパンってホラー番組だったのか!？」

「ココアさん、違うの再生してます。それは私が怪談話を鍛えるために録画したやつです」

明らかに違う番組なのだが、ココアはチノに指摘されて初めて「あれ?」と気がつくのと、やっと「怪盗ラパン」を再生した。

「警部の顔芸面白すぎ」

悠が大笑いして腹を抱えると、ココアも「いつ見ても最高だよね」と笑いながら同意する。

「面白いわね」

「千夜もハマってるのか……」

「この話は何度見ても感動します」

何やら隣から泣き声が聞こえるのでそちらを向くと、シャロが泣いている。リゼも心なしか涙をこらえているように見える。

「警部にこんな過去が……」

「泣いてない!泣いてないぞ!」

「私も奥さんと息子さんを大事にします……!!」

「スタッフロールも見よう」

「めっちゃハマってる上に感情移入してる!?!」

盛り上がるリゼとシャロに悠がツツコミを入れる。スタッフロールの最後、原作の作者名が表示された。——「青山ブルーマウンテン」

「この人どこにでもいるな！」

悠のツツコミは絶えない。シャロはノートに怪盗ラパンの特徴を書きながら言う。

「こうしてみると、ラパンのことがよくわかるわね。考えてみると決めポーズがあまり似てなかったかも……」

ラパンについて一生懸命に調べるシャロに、チノは「そこまで頑張らなくても……」と心配するが、シャロは「ううん！」と否定する。

「絶対、みんなを喜ばせてみせるわ！」

「シャロ……」

「こうなったシャロちゃんは止められないわね。昔からずっと頑張り屋さんだもの」

繰り返しラパンの決めポーズシーンを見て勉強するシャロに悠と千夜が言う。

「わかったわ！決めポーズのとき、肘の角度は60度！手の位置はこうね！」

「細かすぎる!!」

『盗めないものはないのよ』の前にワントンポ置くとそれっぽいな

「リゼ（ちゃん）まで?!」

真剣なシャロとリゼにココアと悠がハモる。

「この2人についていけないから、私たちはトランプでもしましょうか」

千夜がそう言って柵からトランプを出してくる。適当にババ抜きを始めるが——千夜が手を滑らせてトランプを落とす。

シャロはそれを拾って

『ロイヤルフラッシュアタック』の技を決めるとき！手首はこうスナツプを効かせる！』

と叫び、千夜が落としたカードを投げるとティツピーに激突。

「ティツピーー！」

攻撃を食らったティツピーを見てチノも叫ぶ。

第一百十二話 怪盗ラパンとシャロ

「怪盗ラパン！」

「参上！」

シャロとココアがトランプを構えて決めポーズを取るが――。

「ココアさんが盆踊りをしてるようには見えません」

「盆踊りじゃないよー!!」

チノの反応はイマイチだ。チノにそう言われて、悠もココアの怪盗ラパンの決めポーズが盆踊りにしか見えなくなってきた。

ココアへの反応とは対照的に、シャロへの反応は――。

「シャロさんのラパン、すごくかっこいいです」

「ああ、きつと子供たちにもシャロの気持ち伝わるさ」

チノと悠がそう言うと、シャロはジーンときて

「うん！私頑張るわ！」

とチノと悠に抱きつくとき、ココアは「2人のハートが盗まれた！」と青ざめる。

気がつけば、もう夜遅くになっていた。今日はそのままお泊まり会に。

それからもひたすらシャロとリゼは怪盗ラパンを見続け、それ以外はトランプで遊ぶことに。

だが、シャロは続きを見始める前にココアを呼び出す。

「ちよっと、ココア」

「なあにシヤロちゃん」

「これを——」

シヤロが取り出したのはラパンのメガネ。ココアが欲しがっていったやつだ。

ココアは差し出されたメガネを受け取ると、

「もらっちゃっていいのー!?!」

と大喜び。シヤロは「お店にいくつもあるから——」とはしゃぐココアをなだめる。

「今日は……ありがとう」

感謝するシヤロにココアは「何か見返りがあるんじゃないか」と疑うと、シヤロは

「どうして言葉を素直に受け取らないのー!?!」

と叫ぶ。そして部屋に戻り、ココアが

「よし、朝まで全部見るよー!」

と宣言するが、数時間後にはもう寝ていた。

気がつけば、リゼとシヤロ以外全員夢の中。

「——あ、いつの間にか寝てた……」

悠が目を覚まし、体にかけてあった毛布をどかす。

「あの子には言えない秘密があるー」

「心をく盗む怪盗く」

「テーマソングを熱唱してる!?!」

怪盗ラパンのテーマソングを暗記して熱唱するリゼとシャロに悠が驚く。

後日、ココアと悠でシャロの働くフルールへ向かうことに。

「こっそり覗くよ……」

ココアが小声で悠の方を向くと、悠は「ああ……」と頷いて店の窓から顔を出す。

店の中には、怪盗ラパンの格好をしたシャロが、子供たちに囲まれていた。

「うん、大丈夫みたいだね!」

「いや、攻撃されてるぞ?!」

変装したシャロに子供たちが飛びかかるが、シャロは笑顔を絶やさない。

するとココアはラパンのメガネをかけて店内に突撃する。

「本物のラパンは私だよ!みんな!そこにいるのは偽物だよ!」

店内に入ったココアがそう宣言すると、子供たちはすぐに「ほんとはー!?!」とココアの方へ寄ってくる。

「シャロ——どんまい……」

今度は、あつという間にココアに人気を奪われたシャロを悠が慰めると、シャロは顔を赤くして

「営業妨害だわ!!」

と店内ではしゃぐココアを注意した。

「やれやれ、ココアは相変わらず子供受けがいいな」

「そうね、私には勝ち目ゼロだわ。はいこれ」

「ありがとう」

店内の子供たちと遊ぶココアを置いて、悠が席に座ると、シャロがハーブティーを持ってくる。

「——でも、シャロの方がラパンに似てるぞ」

「そ、そうかしら……」

「ああ、初めラパンを見たとき、誰かに似てるって思ったんだ——やっぱりシャロに似てる」

「私は物を盗ったりしないから!」

心なしか少し嬉しそうに、悠にツツコミを入れるシャロだった。

第一百十三話 千夜に緊急事態発生！

「今日も静かだな」

「はい、ココアさんがいないので余計に静かです」

「リゼは部活の助っ人か」

「はい、遅れると連絡がありました」

静まり返ったラビットハウスに、チノと悠が虚しくカウンターに立つ。

「ココアはどうしたんだ？遅刻か？」

「多分そうでしょう。しょうがないココアさんです」

と、噂をすればココアがラビットハウスに慌てて駆け込んでくる。

「悠くん！大変だよー！！千夜ちゃんか——千夜ちゃんがー！！」

「どうした！熱中症で倒れたか!？」

「とにかく来て！緊急事態なの！」

「あ、ああ！チノ、すまんがしばらく店番頼む！」

「は、はい！」

ココアに腕を引つ張られたまま悠は走る。

しばらく走った先は河原だ。ここでバレーボールやココアの自転車の練習をした記憶が蘇る——。

「千夜！」

橋の上から河原を見てみると、千夜がタイヤを体に巻きつけたまま倒れている。

「千夜！おい！しっかりしろ！」

「ゆ、悠くん……私、もうだめ……」

「千夜！甘兎庵を世界進出させるんじゃないのか！」

「そうだよ千夜ちゃん！私を一人置いていかないでー!!」

瀕死の千夜に対して、必死に呼びかける悠とココア。

そしてココアが冷たい飲み物を持ってきて、千夜を落ち着かせる。

「ココア、何か心当たりあるか？」

「実はね——」

飲み物を飲んで体を冷却させる千夜の背中を支えながら、ココアが話し始める。

ココアの話によると、今日学校で体育があつて、楽しく千夜と活動していたのだが、先生から突如「マラソン大会がありまーす！」と知らせを受けて、千夜が倒れてしまったようだ。

「マラソン大会か——あれは辛いよな」

「えーそうかな？この街を走り回るなんて気持ちいいだろうな」

マラソン大会があると聞いて盛り上がるココアを他所に、千夜から相談を受ける。

「私はココアちゃんと一緒にゴールしたいの。でもココアちゃんについていける体力がなくて——」

「そうだったのか、それで特訓を——」

「大丈夫！私が千夜ちゃんに合わせるよ！」

ココアが千夜の手を握ってそういうと、千夜はパツと顔が明るくなり、

「ありがとうっ……ココアちゃん——。じゃあ、一緒に当日休みま

しようか！」

「合わせるのそこ!?!」

千夜の発言にココアと悠がハモる。

そして、とりあえず今日は暑いからとココアは千夜を家まで送ることに。悠はラビットハウスへ帰ってきた。

ラビットハウスに入ると、部活の助っ人を終えたりゼも到着していた。

「千夜さん、どうでしたか？」

「ああ、マラソン大会の特訓でちよつとトラブルに遭つてな——」

チノが心配そうに尋ねてくるが、リゼは「マラソン大会か」と目をキラキラさせる。

「なあ悠、明日から私と早朝ランニングしないか!?!」

「いきなりだな——いいぞ！俺も体力落ちてきそうで怖いし」

「決まりだな！ちゃんと朝寝坊しないで来いよー」

「寝坊するわけないだろ。ココアじゃあるまいし」

こうして、リゼと悠はしばらく早朝ランニングすることになった。

第百十四話 早朝ランニングニ犬の散歩

「おはよう。早いな」

「おはよう。私も今来たところだ、気にするな」

早朝——いつもの公園には同じ早朝ランニング目的でやってきた人以外いない。

噴水のそばにあるベンチに座って悠を待つリゼに声を掛けると、早速始めることに。

「よーし！行くぞー！」

「リゼの目が輝いてる……」

張り切ってスタートを切るノリノリなリゼに悠が驚く。
先ほど起きたばかりの悠は、まだ寝起きのテンションだ。

「どこまで行く？」

「そうだな、河原を通過して丘の方まで行けるといいが、大丈夫か？」

「大丈夫だ、教官！どこまでもお供します！」

「教官——よし！私についてこい！」

「いえっさー!!」

悠もだんだんリゼのテンションについていけるようになる。

公園の中には同じ早朝ランニング目的の人が多く、その中でも一番熱いのはリゼと悠だろう。

リゼは悠に「教官」と呼ばれ、心なしか少し嬉しそう。

丘までの中間地点である河原に、リゼと悠の姿が見える。

夏とはいえ、もう秋に近づいているせいか朝は涼しい。

川の音を小耳に挟みつつ、橋を通過——しようとしたとき、河原に人影を発見。

人影は手に重り、胴体にタイヤを巻きつけている。——そしてしばらくよろよろと歩いた後、倒れる。

「おい悠！今河原で訓練してた兵士が倒れたぞ！」

「すごい装備だな……軽く休憩がてら助けに行くか」

リゼと悠が橋から河原に降りると、倒れていたのは訓練中の兵士——ではなく、千夜だ。

「おい千夜！しっかりしろ！2日連続で同じ場所に倒れるな！」

「ゆ、悠くんっ……」

「千夜！お前がいなくなったら甘兎庵はどうなるんだ！」

「私……ラビットハウスさんと仲良くできて楽しかったわ……」

「千夜ー!!？」

そう告げてバタリと意識を失う千夜にリゼと悠が叫ぶ。

「——昨日の特訓の続き？」

「そうなの……体力つけないと——」

「山岳地帯で訓練でもするの!?」

千夜はマラソン大会のために特訓していたのだろうが、あまりの重裝備にリゼが勘違いする。

その後、もう一度悠がリゼに事情を説明すると、リゼは「なんだ……」と一息ついてから、千夜の胴体に巻きつけられたタイヤを外す。

「ココアちゃんと一緒にゴールしたくて……」

「でもこれはやりすぎだ！」

「リゼちゃんたちは毎朝走ってるの？」

「いや、最近甘いものを食べ過ぎて体重が——」

「なるほど、それで俺を誘ってサボりにくい状況を作ったのか……」

悠が呆れた様子でそういうと、リゼは「う、うるさい！」と顔を赤くする。

千夜はそんな2人にクスツと笑ってリゼの耳に顔を近づける。

「私も毎日和菓子を試食して運動してないけど——」

おそらくリゼに自分の体重を話したのだろう。悠には聞こえないが別に興味はない。

千夜の体重を聞いてリゼが険しい顔になる。そして千夜の肩がっしりと掴んで

「甘兎庵で働いた方が走るより効果あるのか!？」

「うちは大歓迎だけど、それは違う気がするわ!」

「現実残酷だな……」

そしてリゼは千夜を早朝ランニングに誘う。

「よかったら千夜も私たちと一緒に走らないか？」

「ああ、一緒にやろうぜ」

「で、でも私すごく遅いし……」

千夜がそう遠慮するが、悠はあることを思いつく。千夜がタイヤと体を結ぶために使っていた縄を持ってリゼの腰に巻きつける。

「な、なんでウエスト測って——!？」

「違うよ。こうやって縄で3人結ぶんだ」

「な、なるほど——?」

そしてリゼ、悠、千夜の順に縄を結ぶ。こうすれば1人だけ取り残されることはないだろう。

悠の目的がわかったのが、千夜は一気に顔が明るくなり、前にいる2人に

「さあ！2人とも！GO！」

「犬の散歩か!？」

千夜の飼い主感に思わずリゼがツツコミを入れる。――自分で提案してやっておきながらいうのもアレだが、確かに犬の散歩に見える。

そして、メンバーに千夜が加わった。

第百十五話 早朝ランニング≡戦場

リゼ、悠、千夜と並んで朝の街を走る。
しばらくの間は縄がたるんでいる。

「早朝の街っていつもと違って見えるよなー」

「ああ、そうだなー！」

「どのお店もまだ開店してないものね」

悠の発言に、リゼと千夜が元気に答える。

しばらくして、縄のたるみは徐々になくなって、縄がピンと張るようになる。

「空気が涼しくて気持ちいいな！」

「静かなところも新鮮だ」

「――」

リゼの発言に悠が元気よく答えるが、千夜からの返事はない。
千夜は2人についていくので必死だ。

「あ、そうだ。このあと、みんなで朝ごはん食べようぜ」

「それいいな、開いてる店あるといいが……」

悠の提案にリゼが答える。やはり千夜からの反応はない。
縄が切れたような気がする。

気のせいかと後ろを向いてみると――。

「千夜!!?」

「どうした!」

「大変だ、千夜がいない!」

リゼも異変に気がついたようで、足を止める。
近くを走っている人に「うちの千夜知りませんか!？」とリゼが呼びかける。

「犬か!」

思わず悠がツツコミを入れる。千夜は近くの建物の陰に倒れていた。

「おい、しっかりしろ!怪我してるじゃないか。衛生兵ー!!」

「千夜、ここにいたのか!転んで怪我してる!応急手当を!」

悠の叫びにリゼがこちらへ戻ってきて治療を始める。

どうやら千夜は必死についていこうとして足元の段差に気がつかなかったようで、膝を軽く擦りむいていた。

治療が済んだあと、早朝ランニングが再開する。だが、千夜の体力は限界を迎えており、悠も限界が近づいている。

「はあ……はあ……」

「大丈夫か、もうすぐでゴールだぞ、頑張り!」

「教官……もうだめだ……」

「私も……」

リゼが必死に2人を励ますが、今にも倒れそうだ。おそらく、何かに足を引つ掛けたら、一瞬でも気が緩んでしまったら倒れてしまう。

「ああ、チノとラビットハウスの幻覚が見えてきたぞ。これが走馬灯ってやつか……」

「私も、和菓子と甘兎庵が見えるわ……おばあちゃん……」

そして、2人は見事に倒れた。

「次々とやられていく……まるで戦場のようだ……」

その日の夕方、学校で千夜から話を聞いたのだろう。

ココアも千夜に対抗すると、リゼたちのパーティーに参加させてと申し込む。

「私がいいが——」

「ちゃんと起きれるのか？朝早いぞ？」

リゼと悠がそういうと、ココアは少し怒った様子で

「私を誰だと思ってるの！大丈夫に決まってるよー！」

と宣言した。

翌朝、ココアが来ることはなかった。

「部屋でぐっすりだった」

「やっぱりな……だろうと思った」

悠がリゼにそう報告すると、リゼはため息をつく。

千夜は「遅れてごめんなさーい！」とわずかに遅刻してきたが、しっかり早起きしている。

そんな千夜の頭と悠の頭をリゼが撫でて「2人は偉いぞ！」と褒める。

今日も走る。昨日よりは千夜の体力が持つようになってたような気がする。

だが、それもすぐに限界がやってくる。

「も、もうだめ……」

「そうだ、疲れを忘れるためにしりとりでもしないか？」

悠がそう提案すると、リゼは「あ……アップルパイ！」としりとりを始める。

「い、磯辺焼き……」

と千夜。

「き、キャンディー！」

と悠。

「い、いちご大福！」

とりゼ。

「く……黒豆寒天!!!」

と千夜が続けると、一気に覚醒する。

「白玉！あんみつ！抹茶パフェ！甘味はぜひ甘兔庵へー!!」

「宣伝カーみたいだ!!」

千夜の宣言と悠のツツコミが朝の街に響き渡る。

第一百十六話 早朝ランニングニラジオ体操

その日の帰り、リゼからスタンプカードが渡された。

「ほら、毎日参加したらこれにスタンプを押ししてやるぞ」

「まあ、いいわね〜コンプリート目指すわよ!」

「――」

リゼから渡されたスタンプカードをじっと眺める悠に、リゼは「どうした?」と首をかしげる。

「小学校の夏休みにやるラジオ体操のスタンプカードを思い出して――」

「ああ、それを参考に作って――いや、なんでもない!」

「こんなので喜ぶの小学生までだぞ……」

もはや「教官」というより「先生」に近いリゼの言動に悠が呆れる。全く、千夜はなぜ小学生扱いされてるのに気がつかないのか。

「と、とりあえず、今日分だ!」

そういつてリゼは悠のスタンプカードの左上にスタンプを押す。

――うさぎのスタンプだ。

「かわいい〜!」

「そ、そうか?」

千夜は喜ぶが、悠はジト目でリゼを見る。リゼはその視線に気がつくど、慌てて話題を変える。

「このあとみんな時間あるか?」

「俺は大丈夫だけど」

「私も平気よ」

「そうか。なら一緒に朝ごはん食べないか？」

そうして、3人で朝ごはんを食べることに。

「ファーストフード……店のチョイスがリゼらしい」

「たまにはいいだろう！」

テーブル席でリゼを前にファーストフードを食べる。隣で千夜が飲み物を口にする。

「おっと、ココアからメールだ」

そう言ってリゼがスマートフォンを取り出すと、ココアのメールを読む。

「どれどれ……」

「ココアちゃん、なんて？」

千夜がそう聞くと、リゼは呆れた様子でスマートフォンの画面をこちらに見せる。

「ひどいよー！」という件名のメール。

『も〜！みんな私を置いて走りに行っちゃったの？私のこと忘れたの〜？』

と書かれている。悠もリゼに続いて「やれやれ」と呆れる。

時間はもう8時を回っている。今日は休日だから学校はないが、おそらくチノに起こされてやっと気が付いたようだ。

そしてもう一件メールが届く。今度は件名なしだ。

『よーし！私もチノちゃん連れて走りに行くよー！』

ココアからまたメールが来たと思いきや、次はチノからメールが届く。ココアにも同時送信しているようだ。

『ココアさん、勝手に私を巻き込まないでください。リゼさん、気にしなくていいので』

「やれやれ、しょうがないやつめ……」

「——考えてみると、この3人で会うのって結構レアだよな。いつもは振り回され隊と振り回し隊に分かれてるし」

「振り回され隊——？」

悠の発言に「振り回され隊」の存在を知らない千夜が首をかしげることが、リゼは「確かにそうだな」と同意する。

「でも今は私たちが千夜を振り回してるな」

「物理的に、な」

首を傾けたままの千夜を置いてリゼと悠がクスクスと笑う。

「悠さん。おかえりなさい」

「ああ、ただいま。ココアは？」

「さっき出て行きました。すれ違いませんでしたか？」

「ココアのやつ、本当にランニングに行ったのか——」

「全く、本当にしょうがないココアさんです」

チノは呆れた様子でそういうと、悠の頭に視線を向ける。

「——ところで、どうしてツインテールなんですか？」
「わからん、千夜に『走るときはツインテールにしましよ』って言われてこうなった」

悠の答えにチノが「髪が短いので、ちよんまげに見えます」と笑った。

第百十七話 マラソン大会はツインテールで

「お待たせー！」

マラソン大会の前日。千夜が髪をツインテールにしてやってきた。

「本当に走るときはツインテールにするつもりなのか!？」

「走るときの願掛けよ。名教官みたいに走れるようにね！」

「ああ、俺はチノにちよんまげみたいだってバカにされたけどな」

律儀にルール(?)を守ってきた千夜と悠にリゼが驚く。

そして千夜は率先して走り出した。

「さあ！今日も地獄の果てまで進軍だー！」

「まて！まさかそれも私のつもりか!？」

そして、終点の丘の上までたどり着く。千夜も悠も、格段に体力が上がったからか、もうバテない。

丘の上の景色は格別だ。朝日が昇るのをそつと見守る。

「ここからの眺め、本当にいいよな」

リゼがそういうと、千夜も悠もそれに頷く。リゼは続ける。

「——マラソン大会終わっても続けるか?」

リゼの提案に千夜は「ううん」と首を横に振る。

「私は目標がないと頑張れないから——」

「俺もいいや。これからは定期的に走るさ」

2人の答えにリゼはショックを受けたのか、慌てて引き止めようとさらに提案する。

「スタンプカード、あと3回くればコンプリートするんだけど——2人はトライアスロンとか興味ないか？」

「トライアスロン——？」

「引き止めたいのはわかったが、それは身の危険を感じるぞ！」

トライアスロンの意味がわからず困惑する千夜の隣で、悠の顔から血の気が引く。

「じゃあ、本番頑張れよ！」

「ええ！——リゼちゃんも悠くんも、ありがとね」

「気にするな！私も少しは体重が……な、なんでもない！」

リゼが慌てて言葉を濁す。千夜はポケットから「甘兔庵 和菓子食べ放題券」を2枚取り出してから、リゼと悠に手渡す。

「おっ、サンキュー！」

素直に感謝する悠の隣で、リゼは

「私がランニング始めた理由言ったよな!？」

と叫ぶ。

そして、マラソン大会当日。みんなで観戦することに。

「千夜、大丈夫かしら」

心配するシャロに悠は「大丈夫だ」と励ます。

「リゼと俺と、毎日一緒に走ったし、体力的には大丈夫だろう」
「えっ!?なんで——なんで私はそこにいないの……?」

シヤロは初耳だと驚くと、リゼは

「言えば誘ったのに!」

とスタンプカードを取り出してから、シヤロと悠の手を握って

「よし!3人で明日から特訓だ!目指せトライアスロン!」

「はい!!」

「さて、最後なんて言った!」

目を輝かせるリゼと、「トライアスロン」というワードに気がつかないシヤロに悠がツツコミを入れる。

しばらくして、千夜が見えてきた。——ココアが見えない。

「あれ?ココアは?」

「千夜さんの後ろです!千夜さんの髪を手綱のように掴んでいます!」

キヨロキヨロとココアを探す悠に、チノが驚いた声で叫ぶ。

——千夜、目標通りココアを見捨てずに頑張っているのか。
リゼと悠は懸命に走る千夜に敬礼する。

「2人ともー!ツインテール役に立ってるわー!!」

「嬉しくないぞ!」

「ココア!少しはお姉ちゃんらしいところ見せてくれよー!」

「ゆ、悠くん……!お姉ちゃんに任せな……うげっ!」

ココアが派手に転ぶと、千夜が手を差し伸べる。素晴らしい友情だ。

こうして、無事(?)にマラソン大会が幕を閉じた。

第一百十八話 リゼ宅にて

リゼの誘いで、ココア、チノ、悠、里恵の4人はリゼの家に来た。
きた。

「リゼちゃんからお泊まり会開いてくれるなんて意外だね〜！」

「ああ、そうだな。何かあるんじゃないのか？」

突然リゼの家へ招待されたココアと悠は、リゼに疑いの目を向ける。

大きい門が見えてくる。さすが本物のお嬢様だ。

「メイドさんにお出迎えされたらどうしましょう」

「でかい家だね〜」

チノと悠が目キラキラさせるが、ココアと里恵は血の気が引いた顔。

「どうした？」

「見て、あれ……」

里恵が指差す先には、黒い服にサングラスを身につけた、明らかにあつち側の人。

チノと悠も顔から血が引いていく。

「おい、異常はないか」

「異常なし」

黒服の声がする。

ココアはチノに持っていた差し入れの袋を預けると、黒服の方へ走っていく。

「私が囿になるから、その隙に行って！その袋、絶対にリゼちゃんに届けるんだよー！」

「命より大事なものなんですかー！」

走っていくココアにチノが叫ぶ。中身はただのメロンパン。わざわざ囿になってまで配達するほどのものでは――。

結局、あの黒服はただの門番だった。対応がとても紳士的。

玄関でリゼが出迎えてくれるが、ココアは泣き出す。

「うわーん！人を見かけで判断しちゃったよー！接客業失格だー!!」

「ココア、なんで泣いてるんだ!？」

「こんにちは、リゼさん」

「ここで働いてるのはメイドじゃなくて、ああいう系の人が――」

それぞれ感想を述べる。玄関がとても広い。まるでお城のような広さ。

「わざわざ来てくれてありがとう」

「いえ……リゼさんからの誘い、ちょっとビックリしました」

「いつかみんなとここで泊まり会してみたかったんだ――私だけラビットハウスに住んでないし……」

最後の方が小声になって聞こえなかった悠は「なんて？」と聞き返すが、リゼは「なんでもない！」とごまかす。

そしてリゼの部屋へ到着。――ここも広い。

「広い部屋だな……」

「そうか？」

「はい。すごく立派なおうちです。父がリゼさんのお父さんによろしくと言っていました」

「ああ、伝えておくよ」

「せっかく来たんだし、遊ばないか？」

「いいね、何する？」

悠が聞くと、リゼは「とりあえず隣の部屋に来てくれ」とみんなを集める。

隣の部屋に入ると、応接間のような部屋だが、ここで何をするといいのだ。

リゼは部屋の隅に置いてある戦車の模型の砲塔を旋回させると、それに合わせて部屋に飾ってある額縁が回転して――。

「ここは私のコレクションルームだ！」

「「「おお……」」」

姿を現した数々の銃に一同が驚く。

「この中から好きな銃を選んでくれ。使い方は私が教える」

「お、おい。まさか遊ぶって――」

「悠さん、私生き残れる気がしないです」

チノが突然始まったサバイバルゲームに震える。

「もっと平和なゲームして遊ぼうよ！」

「そ、そうか？」

「そうだぞ。俺ら銃撃戦しに来たわけじゃないぞ!」

ココアと悠が慌ててリゼを止める。リゼは少しガツカリした表情を浮かべるが、すぐに別のゲームを提案する。

「そうだな——それじゃあ、下の訓練場で匍匐前進の訓練でも——」
「とりあえず訓練から離れろ」

結局、テレビゲームすることに。

「なんだ——みんなとサバイバルゲームしたかったのに……」
「なんてやつだ——チノが怪我でもしたらどうするんだ」
「そうだよリゼちゃん！撃たれて倒れるチノちゃんなんてみたくないよ——！」

悠とココアの発言に、チノは「私がやられる前提!？」とツツコミを入れる。

しばらくして、悠がベッドの上に置いてあるぬいぐるみに気がつく。

「あれって——」

「ああ、『ワイルドギース』だよ」

「ネーミングセンスはさておき、なんで眼帯——あれ、どこかで見たりうな……」

「チノにあげたぬいぐるみがあっただろ？あれの片割れさ」

リゼの説明に悠が「なるほど——」と納得する。ということはあるもリゼのお手製か。

「いいなく私もリゼちゃんお手製のぬいぐるみ欲しいなく」

「なに!？」

「だってすごく可愛いよ〜?」

「そ、そうか?」

ココアが寝めると、リゼの顔が一気に明るくなる。

里恵もそれに便乗して「眼帯がいい味出してる」とリゼにいう。

「みんなでお揃い、ですね」

「そ、そんなに褒めても作ってやらないぞー!!」

「裁縫セット出しながら言っても説得力ないぞー!」

前にティツピーが言っていた「褒めると調子にのる」とはまさにこのことか。

リゼはなんだかんだ言って裁縫セットを取り出して縫い始めた。

第百十九話 リゼⅡ（ミリタリー＋ホームエコノミクス）÷2

「まずはココアのから作るぞ！」

「あ、私がデザインしてみてもいいですか」

「チノが？いいぞ！」

「チノちゃんが私のを？どんな風になるのかな？」

そしてチノに、内緒にしたいのでココアは席を外すようにと言われる。

「心配なので悠さんもココアさんについて行ってください」

「俺も!？」

結局、巻き添えを食らって悠もココアと席を外すことに。

「あ、みてみて、メイド服だよ」

「本当だ。本物を見るのは初めてだ」

「——ねえ、着てみてもいいかな？」

ココアがそう申し出ると、近くにいた使用人が「その部屋の服は自由にしてください」と頷く。

「やった〜！ほら、行くよ悠くん！」

「——え？」

普通ここは「着替えてくるから待ってね」というところじゃないのか、と困惑する悠を無視して、ココアは悠の腕を掴むと空き部屋に連行する。

「さあ、着替えるよ」

「さて！なんで俺も!？」

「似合うから大丈夫だよ」

「嫌味か!？」

半ば強引にメイド服を着せられた。

「はあ、なんでこんな事に」

「か、可愛い……」

「も、もういいだろ！早くお前も着ろよ！あと、写真撮るな」

カメラのシャッターボタンを押すココアに悠がしがみついてカメラを奪い取ろうとするが、ココアにかわされる。

そして今度はココアがメイド服に。

「うん、やっぱりどう考えても俺よりココアが着るべきだな」

「えくそうかな？」

「男がメイド服着てもしょうがないだろ」

「私は気にしないよ？」

「俺が気にするから言っただよ」

ココアはメイド服を着た状態でリゼにあって驚かせようとする。

「とりあえず悠くんもカチューシャだけして！」

「なんでだよ。仕方ねえな……」

そしてリゼの部屋に行くと、ぬいぐるみが完成していた。早い。

「わく！すごい！私のぬいぐるみ!？」

「ああ、そうだぞ——って、なんでメイド服!？」

案の定メイドと化したココアに驚くりぜにココアは「ふふーん」と得意げな顔。

「それにしてもこのマジシャンうさぎ可愛い〜!」

「マジシャンじゃなくて、魔法使いです!」

次は悠のぬいぐるみを作ることに。今度はココアがデザインしてくれた。

「よーし!私も手伝うよりゼちゃん!」

「ココア、俺ともう一回外に出ようか」

「あれ!?信用されてない!?!」

ココアが関わると嫌な予感がするので、ココアを外に連れ出そうとする。

「ダメだよ!今度はチノちゃんと悠くんが席を外して!」

「また俺!?!」

「なんで私まで——」

しづしづそう言ってチノと悠は外に出る。

「そのカチューシャ、どうしたんですか?」

「ココアにつけろって言われて——どう考えても変だよな」

「そんなことないですよ。似合ってます」

「皮肉なのかお世辞なのか——」

「本心です」

真顔でそう答えるチノに悠は「うそだろ!?!」と少々複雑な表情。

「——チノも着てみるか?確か後3着あったような気がするが」

悠がそう提案すると、今度はチノが複雑な表情になって胸を押さえる。

「私みたいなものには似合いませんよ」

「大丈夫だつて」

今度は悠が半ば強引にチノにメイド服を着させる。

しばらくして部屋から出てきたチノに、悠は唾然とする。

「恐ろしい——」

「そんなにおかしいですか？」

「そういう意味じゃなくて——いけない、鼻血が」

「大丈夫ですか!？」

あまりの破壊力に思わず鼻血が出てしまう。

「すごい似合ってる。もうラビットハウスの制服、それでいいんじゃないか？」

「別のお店になってしまいますよ」

「ココアが見たらなんていうかな〜」

そう言つてリゼの部屋の扉を開けると、ココアがこちらに気がついて鼻を押さえる。

「チノちゃん——」

「また鼻血!？」

悠と同じ反応を見せるココアにチノがツツコミを入れる。

一通り鼻血が治ると、ココアは悠のぬいぐるみを見せる。

「じゃーん！完成したよ〜！」

「か、可愛い——」

「ほんと？どれくらい？」

「チノの次くらい——」

悠がそう答えると、リゼは「ああ、確かにメイド服着てるチノ、可愛いな」と写真を撮る。

「あ、リゼ、その写真いくら？」

「お金を出してまで欲しいのか!？」

悠のぬいぐるみは、白が基調で頭にはベレー帽子、そして綺麗な青のネクタイ。

「最後は里恵ちゃんのだよ！」

「それなら俺がデザインしよう」

今度は悠がデザインする事になった。

「さあ、里恵とチノ、外に出ろ」

そう言って2人を追い出すと、悠はデザインを考え始める。

第二百一十話 お揃いのうさぎ

しばらくして、里恵のウサギも完成した。

チノと里恵も部屋に戻ってきて、それに気がつく。

「って、里恵までメイド服とは——」

「一つ余っていたので」

「どう？ 似合う？」

「ああ、ここが天国かと思った」

悠とリゼを除いて全員がメイド服を着ている。

その光景を見たりゼは少し落ち込む。

「また私だけ取り残される——」

「リゼも着てみたいのか？」

「だって私だけこのカチューシャもつけてないし……」

「よーし！ リゼちゃんもメイドにするよー！」

その様子を見たココアがリゼの手を掴んでそういうと、リゼは心なしか嬉しそうに「なに!？」と驚く。そのままココアに連行された。

そしてメイド服に着替えたりゼを見て悠が一言。

「どっちかかっていうと、リゼは主人だろ」

「いや、これでいい」

ツツコミを入れる悠にリゼは首を横に振る。どうやらメイド服が気に入ったらしい。

「ついでに王冠も見つけたよ！」

「まさか——」

ココアが王冠とくじ引きを持ってくる。また王様ゲームをやるつもりか。

ココアに言われるまま、くじ引きを引くとチノが王様になった。

「当たってしまいました」

「チノちゃんが王様だよー!」

チノの頭——否、ティツピーの頭に王冠を乗せるココア。チノはバランスを崩す事なくティツピーと王冠を頭に乗せる。——すごいバランス力。

「チノの頭がだんだん重くなっていく——」

「さあ、なーんでも命令していいんだよ!抱きしめて欲しい?もふもふしてほしい?」

ココアがチノにさういふと、チノはジト目でココアをみる。

「じゃあココアさん、もっと真面目に仕事してください。コーヒーの味を覚えてください。セロリを食べてください。寝坊しないでください」

「なんて無慈悲な命令!」

いつもと何も変わらない光景だが、ココアは無慈悲な命令だと泣く。

だが、チノの「セロリを食べてください」の言葉に悠がツツコミを入れる。

「セロリって——チノ、自分が嫌いなものを代わりに食べてもらおう気か!」

「王様の命令は絶対です」

「——身長伸びなくなるぞ。頭にうさぎと王冠も乗ってるし」

悠がそういうと、チノは「はっ！」と気づいて王冠とティツピーを頭から下ろす。

「やっぱり、伸びない原因って——」

チノがティツピーを見つめてそういうと、ティツピーは慌てて「誤解じゃチノ！」と否定する。

そしてもう一度くじを引くと、悠が王様になった。

「そうだな。とりあえず腹が減ったから何か食べたい！」

悠がそういうと、リゼはスカートの裾を掴んで

「かしこまりました。それではお菓子をぐ用意します」

というが、悠の後ろを見て顔を赤くする。悠が後ろを向くと、扉の陰にリゼの父親がいる。心なしか照れてるようにも見える。

「うう……親父に見られた……」

みんなで夕食を作るといふ話だったが、ココアとチノと里恵がキッチンで料理している。リゼと悠は暇だ。

「結局、あの3人に任せつきりだな……」

「だな。俺らの出番なさそうだし、なにかして遊ぶか？」

悠がそういうと、リゼは「いや」と否定してキッチンで様子を見た
いと言出す。

悠も「じゃあそうするか」とキッチンに入るが——。

「——いらつしやいませ……」

「——チノ？」

「はっ！ つい喫茶店のつもりで——」

「中学生が職業病!?!」

何やら、チノの身長が高い。と思ったら、チノはキッチンの床に台を置いて、その上に乗っていた。

「——ぷっ」

その光景を見て悠が吹き出すと、チノは少し顔を赤くして

「な、なんですか？」

「いや、キッチンに届かないからって台の上に乗ってるのが面白くて」「べ、別に届かないわけではありません！」

チノが台から降りる。確かに届かないわけではないが、リゼの家のキッチンはラビットハウスのキッチンより高い。

チノの身長ではギリギリ鍋を上から見られるかどうか。

「これは鍋を上からかき混ぜるために使ってるんです」

「はいはい、わかったわかった——」

必死に弁解するチノをなだめて、悠はココアの元へ。

「ココアはパンを焼いてるのか？」

「そうなの。私も野菜切るの手伝うって言ったんだけど——」
「断られたのか……」

実際、ココアはパンしかまともに作れない。チノの判断は正しいと

言える。

そして、夕食。今夜のメニューはビーフシチューだ。

第二百二十一話 サバイバルゲーム in リゼ宅

「んー……」

悠がココアがデザインしてリゼが製作してくれたぬいぐるみをじつと見つめると、リゼは不思議そうに「どうかしたか?」と聞いてくる。

「いや……どこかで見たようなデザインだなーと思って」

「そうか?」

悠がそういうと、リゼもぬいぐるみをじつと見る。確かにどこかで見たデザイン。

身近に似たようなものがあるような気がして、辺りをキョロキョロ見回す。

「どこかで見たことあるんだよな、このデザイン。どこだろう?」

「言われてみれば私もあるぞ。近くにこれと似たようなものが――」

するとココアがこちらにやってくる。

悠のぬいぐるみは、白を基調としたデザインに、青いネクタイ、そしてベレー帽を被っているものだ。

これをデザインしたココアなら何か知っているかもしれない。

「なあココア、このぬいぐるみ、何かを参考にして作ったとか、そういうのがあるか?」

「悠くん、思い出せないの?」

「はあ?」

ココアが意外そうに聞き返してくるので、悠は困惑する。リゼも考え込む。

「これ、チノちゃんの夏の制服を参考に作ったんだよ！悠くんならわかると思ったのに」

「そうなのか!？」

「言われてみれば——」

その会話を聞いてチノもこちらへやってくる。

「これ、私がモデルなんですか!？」

「なんでこれを俺に——」

「だって悠くん、チノちゃんのこと好きでしょ？」

「ココアもたまには仕事するんだな」

「いつも仕事してるよ!？」

軽口を叩く悠だが、心なしか少し嬉しそうに見える。

リゼも納得した様子で、「確かに中学校の制服だ……」と頷く。

「今すぐ作り直してください！恥ずかしすぎます!！」

チノが悠が持っているぬいぐるみを取り上げようとするが、身長が足りない。

「ありがとうココア、これをチノだと思って毎晩一緒に寝るよ」

「えへへよくできてるでしょー？」

「もう……すぐ調子に乗ってそういうこと言うんですから……」

チノが顔を赤くする。

「さて、夜も遅いし、そろそろ寝るか?。」

リゼの発言に悠が「ああ」と同意するが、ココアは不満そうだ。

「えー、せっかくなんだから夜更かししようよー!」

「それなら、やっぱりサバイバルゲームを——」

「すぐそっちに持って行こうとするんですね」

部屋の奥から銃を出してそう言うリゼにチノが呆れる。

「おい、さつきも言っただろ、チノが怪我したらどうするんだ」

「そうだよリゼちゃん!銃は危ないよ!」

「どうして私がやられる前提なんですか」

悠とココアにリゼは「考えがある」とさらに風船を出してくる。

「これを頭につける」

リゼによると、この風船以外の部分は射撃禁止で、風船を割られたら負け。

相手チームの風船を全て割ったら勝ち。制限時間は1時間だ。

制限時間内にどちらかのチームが全滅していない場合、生き残った人数が多い方が勝ち。

里恵は眠いとさつきと寝てしまったため、自動的に2対2のゲームになる。

「くじ引きする?」

「俺とリゼが一緒のチームになったら勝ち目なくなるけどいいの?」

「確かに——悠は特殊部隊にいた強者だし、私は日頃から訓練してるし、別れた方がいいのかもしれないな」

「いつから元特殊部隊っていう設定が追加されたのか!?!俺は一般人だ

！」

結局、チームはチノと悠、ココアとリゼという組み合わせになった。舞台はリゼの家の端から端まで、と言いたいが、夜遅いのでリゼの部屋があるこの棟だけ。

準備時間は5分間。この時間内にスタート位置まで移動し、物資を調達する。

初期装備はハンドガンのみ、リゼの部屋の隣にある例の部屋で武器を入手可能。

ただし、リゼの部屋は里恵が寝ているため入室禁止だ。

「どうしましょう。私戦える気がしません」

「俺もだ。ココアならともかく、リゼがやってきたら——」

制限時間内に相手チームを全員倒せない場合は生き残った人数によって勝敗が決まる。

ということは、1人でも欠けると不利になる。

「まともに戦っても勝てない。だからどこかに隠れてタイミングを見よう。ココアかりゼが近くに来るまで隠れるんだ」

「ですが、それでは勝てませんよ」

「大丈夫だ、その場にいらなくても風船に攻撃できる方法がある」

悠がそう言うと、チノにある秘策を伝えた。

第二百二十二話 対お姉ちゃん遊撃部隊

「まずは武器の安定した供給が必要だ。私の部屋の隣にあるあの部屋を占領しよう」

「いえっさー!」

「もしかしたら、悠たちも同じことを考えているかもしれない。気を抜くなよ」

ココアとリゼは、棟の西側でゲームスタートを待つ。

作戦は、まず手持ちの武器を強化すること。つまり、武器がある例の部屋を占領し、立て籠もる。

もし悠とチノが来なかった場合は――。

「いくつかあの2人が行きそうな場所を知っている。武器を手に入れたらそこを攻めよう」

「さすがリゼちゃん!」

「こういうのは親父とよくやってるから得意なんだよ」

リゼが得意げな顔でココアにいう。

そして、ゲームが開始された。

「チノ、入れるか?」

「大丈夫です」

棟の東側、チノと悠は小さな物置部屋に姿を隠す。

この部屋は物が多い上に、入り口が狭い。ココアはともかく、リゼが攻め入るのは難しい。

チノは余裕で通れたが、悠は少々きつい。

「武器もハンドガンだけだし、ここを攻められたらやばいかも」
「アレを仕掛けたので大丈夫かと」
「それもそうだな」

実は、この部屋に入る前に絶対に通らなくてはいけない通路がある。

その通路は、先ほど悠とチノが仕掛けた「地雷」が多数用意されている。

そもそもこの部屋に到達する前に風船が割れるだろう。

「まさかここまで狭いとは——」

「そうでしょうか」

「はあ……チノは小柄でいいよな」

「嫌味ですか？」

「違う違う。チノは大きくなりたいていうけど、小さい方が得する時もあるんだぞ」

「——」

チノは少し不満そうだが、悠はそれを無視して扉の方に銃を構える。万が一ここに侵入してきた時にすぐに撃てるように。

「チ、チノ……」

「どうかしましたか？」

「その……吐息が首筋に当たってくすぐったい……」

「なっ——」

チノは顔を赤くした。

「誰もいなかったな」

「今日も平和だねー！」

「しっ！大きな声を出すな。気を抜いたらやられるぞ」

「あつ、そっか。静かにしないとね」

ココアとリゼは武器がある部屋に侵入。誰もいないことを確認するとマシンガンを手取る。

「ココアはこれを。初心者でも撃ちやすいタイプのやつだ」

「わーい！ありがとー！これで100人きても大丈夫だね！」

「だから大声を出すな！」

すぐに大声を出してしまうココアにリゼが慌てる。

「ショットガンは風船以外にも当たる可能性があるから危険だな……」

リゼも武器を手取る。そしてソファアの影へ移動。

「終了20分前までここで待機しよう」

「いえっさー」

「来ないな。やっぱり上で武器を調達してるのか？」

「その可能性もありますね」

「多分この調子だと、俺らが武器の調達に行くのを待っている可能性がある。あえてそこを奇襲するという手もあるが」

「ここで待ちましょう」

「了解」

チノと悠は慎重だ。向こうから攻撃してこない限り、こちらは行動しない方針は変更しない。

しばらくして、足音が聞こえる。ココアかりゼのどちらかだろう。あまりにも動かないため、様子を見にやってきたか。

「チノ、リゼがくる」

「どうしてわかるんですか？」

「仕掛けた罠が反応していない。多分リゼのことだから一つ一つ破壊して防いでいるだろう」

「そんな……リゼさんに勝てる気がしないです」

「チノは物陰に隠れて隙を狙え。俺が引きつける」

数分後、糸を切ったのだろうか、ハサミを持ったリゼが部屋に突入する。

第二百二十三話 姉妹、いざ決戦!

扉が開いて影が見えた瞬間、影に向かって引き金を引く。

「くそーやっぱりここにいたか!」

リゼもそれに負けまいと持っているマシンガンを連射してくる。

マシンガン相手にハンドガンでは圧倒的に不利。だが悠にはまだ秘策がある。

悠の隣にあるこの紐を引けば、積んであるダンボールが一気に崩れる。バランスを崩した瞬間にトドメを刺す。

「いけっ!」

悠は紐を思い切り引っ張ると、積んである空のダンボールがリゼの頭上に落ちてくる。

「ここに罠が!」

リゼは慌ててダンボールを避ける。その時に悠が隠れている物陰にリゼが体をぶつけると、物が倒れて悠とリゼが下敷きに。

「ゆ、悠さん!リゼさん!」

「チノ!早くリゼにトドメを!」

「え?あ、はい!」

チノがリゼを撃つが、リゼも悠を撃つ。——リゼと悠はやられた。

リゼが脱落したが、悠が重いダンボールの下敷きになって動けない。実質相打ちと言ったところか。

「チノ——」

「悠さん、大丈夫ですか」

「俺のことは気にするな、早く行け。この騒ぎを聞いてココアも来るはずだ」

「私……不安です……」

「大丈夫だ、ティツピーもいるだろ。最悪身代わりにして逃げろ」

「小僧！わしを身代わりに使うつもりか！」

「くっ……ココア……後は任せた……」

チノは2人を置いて部屋を出て行った。

「ところでリゼ、この状況、洋館の時を思い出すな」

「ああ、あの時も下敷きになったっけ……」

リゼと悠を下敷きにしていた物をどかし、しみじみと過去を振り返る2人だった。

「ココアさん……」

チノは誰もいない廊下を歩きながら呟く。

悠がやられてしまった今、チノ1人でなんとかココアを倒さなければならぬ。

「おじいちゃん、どうすれば——」

「ふむ……そうじゃな、ココアはまだあの部屋にいるかもしれない。そこを奇襲するのはどうじゃろう。リゼから奪った銃を使うんじゃ」

「こんな重いもの、うまく使えるかどうか——」

チノはよろよろと武器のある例の部屋までやってくる。
すると、案の定ココアがいた。

「ココアさん……」

「チノちゃん!？」

「さらばです」

「負けないよー!」

チノはココアの風船をめがけて発砲するが、ココアもチノの風船をめがけて発砲する。

しばらく激しい銃撃戦に。ただ、銃の性能だけで言えば初心者用を持っているココアよりは有利だが、うまく扱えないため、結局は互角の勝負。

「しまった!弾切れだよー!」

「私の勝ちです。ココアさん!」

「こうなったら、チノちゃんをもふもふして風船を割っちゃうよー!」
「なっ、接近戦!？」

ココアがチノに抱きつく。チノは腕をロックされて銃を撃つことができない。

様子を見に來たりぜと悠が驚く。

「ココア!？」

「なんで接近戦になってるんだ……チノ!頑張れ!」

「ココアさん……やめてください……」

「チノちゃんもふもふくー!」

チノが抵抗すると、ココアがそれをかわそうとするが、風船を地面につけてしまう。——割れた。

その反動でチノの風船も割れた。

「私の勝ち——?」

「うう……私、お姉ちゃんどころかチノちゃんにも勝てないの……？」

こうして、サバイバルゲームはチノと悠チームの勝ちで幕を閉じた。

第二百二十四話 古物市の商品

悠は買い物済ませ、ラビットハウスへ向かう。その途中で、学校帰りのココアと遭遇した。

「あつ、悠くん！」

「ココアか、学校帰り？」

「うん！」

ココアが今日、学校であつた出来事を悠に喋る。悠はそれを聞きつつ歩く。

この角を曲がれば、ラビットハウスだ。——と、角を曲がろうとするが、目の前をチノが横切る。

チノは、スキップしながらラビットハウスの方向へ進む。危なかつた。もう少しでぶつかるところだった。

チノはスキップに夢中でこちらに気がつかない。

「何か楽しいことがあつたのかな？ほほえま〜！」

「チノがスキップしながら帰るのって珍しいな——」

チノは足を止める。しばらくして、今度は赤い石畳のところをジャンプしながらラビットハウスの方向へ進む。

チノの隣でうさぎも一緒に跳ねる。チノはそれに気を取られて、目の前にある街灯に気がつかず、そのまま激突。

「お、おい、大丈夫か？」

「チノちゃん!？」

「うう……痛いです」

チノに駆け寄るココアと悠に、チノは顔を赤くする。

「ジャンプすると背が伸びるって話、信じてたのか」

「スキップじゃ効果が薄いと思って……」

どうやら、身長を伸ばそうとしていたようだ。

「だからと言って前を見ずに歩くのは危ないぞ」

「気をつけます」

悠が若干赤くなつたチノのおでこをなでなでしながらそう注意すると、ココアは

「悠くんがお兄ちゃんみたい……」

「俺、お前より年下なんだけど」

「私もやってみたーい！チノちゃん！前を見て歩かなきゃダメだよ！」

悠の真似をしてココアもチノのおでこをなでなでしてそういうが、チノはココアの手を払いのける。

「ココアさん、痛いです。それに同じこと2回も言わなくていいです」
チノの冷たい声にココアが「冷たい！」と涙目になる。全く、どっちが姉でどっちが妹なのか。

「この前のお泊まり会、楽しかったね〜！」

「ああ、そうだな。メイドごっことか、リゼもノリノリだったし」

「私は別にノリノリだったわけじゃないぞ!?!」
ラビットハウスの日常。

それは客がいない店内でココアたちとおしゃべりして、日向ぼっこして、たまにチノの宿題を手伝う。

——ようするに、暇なのだ。

「本当に客がいないな。困ったもんだ」

「そうですね」

とチノはいうものの、誰も改善しようとしな。初代マスターであるティツピーも無言。

「そろそろ、古物市ですし、その時にお店の宣伝もしましょうか」

チノがそう提案すると、早速ココアがポスターを作り始める。——嫌な予感しかしないのだが、とりあえず完成するまで放置。

もうすぐ、この木組みと石畳の街では「古物市」が開催されるようだ。そこにラビットハウスも参加する。

この店の倉庫には、古いものがたくさん保管されており、この際いらないものを売却しようとしてリゼの提案だ。

「具体的には、何を出品するんだ?」

「私は手作りのぬいぐるみだ!」

悠の質問に、リゼはこの前のお泊まり会で調子に乗って量産してし

まったくうさぎのぬいぐるみを出す。

チノも倉庫からダンボールを持ってくると、

「私は、お母さんの雑貨を整理します」

「いいのか？」

「いいんです。倉庫もいっぱいですし、ここで眠っているより大切にしてくれる人に出会う方がいい気がして——」

チノはそう言って、前に倉庫を整理した時に分けた母親の雑貨を取り出す。中には、例のおもちやも含まれているわけで——。

「これ、本当にお気に入りで、今でも出そうか迷ってます」

チノがうさぎのおもちやについているボタンを押す。やはり、顔の怖いうさぎのおもちやが、首をギリギリと動かす様はいつ見ても怖い。

「これ、売れるのか!？」

リゼがごもつともなツツコミを入れる。

古物市、いったいどんなものが出品されているのか。悠は少し楽しみだった。

第二百二十五話 雑貨店ラビットハウス・開店!

古物市に参加したラビットハウス一行。

早速、持ってきた荷物を広げる。

「小隊整列完了だ!」

「雑貨並べ終わりました!」

リゼとチノが報告すると、ココアは張り切った様子で

「コーヒーを捨てた『雑貨店ラビットハウス』開店だよ!」

「捨てとらん!!」

開店を宣言するが、ティッピーが「コーヒーは捨ててない」とツツコミを入れる。

しばらくして、人が集まってきた。

他のお店は活気で溢れているが――。

「緊張してきました。これ需要あるでしょうか……」

「古物や手作りのうさぎ……持ってきてても無駄だったかな……」

「こっちは全く活気がないぞ!」

緊張で震えるチノと、暗い顔をするリゼに悠が呆れる。

だが、そんな「雑貨店ラビットハウス」にもお客がやってきた。

「あの人、これいくらでしょう?」

「手作りなの? 器用だね」

お客さんがやってきた途端、チノとリゼの顔が明るくなる。

その様子をココアは「うん! いい笑顔!」と写真に収める。

「こっちはなんとかなってるし、見て回ったらどうだ?」

「そうですね。――心配なので悠さんもココアさんについて行ってください」

「また俺!」

なぜいつもココアの見張り役が自分なのか、と嘆く悠を無視して、ココアは

「よーし! 探検に出発だよー!」

と悠の腕を引っ張る。

「感性に突き刺さるものばかり……!」

「ああ、これは1日周ってても飽きないな」

初めはやる気のない悠だったが、しばらく街をまわっていると次第に楽しくなってくる。

向こう側から千夜が大量の荷物を抱えてやってくる。

「千夜ちゃん!」

「千夜!どうしたんだその荷物は!」

「2人とも……これはね……」

千夜が言いかけたが、また向こう側からハイテンションなシャロが走ってくる。

——だいたい察しがついた。

「千夜あ〜!また掘り出し物よー!」

太陽にも負けないほど明るいシャロの笑顔を見てココアが

「今日1番の笑顔を見たよ!」

と驚く。

どうやら、千夜はシャロの荷物持ちをやらされてるようだ。

「今日は素敵な陶器と出会う日!だらしない姿で臨めないわ!」

「お、おう……」

シャロのテンションについていけない悠。

その隣で、大量の荷物を抱えた千夜が「ちよつと休んでいいかしら

……」とふらつく。

——1つ、抱えていた袋が落ちそうになる。

「ロイヤルラビットのティーカップー!!!」

シャロがものすごい勢いでキャッチ。

いつもの10倍は俊敏に動くシャロにココアが「シャロちゃんが必死!」とまた驚く。

その後、千夜やシャロと別れ、またココアと街を散策すると、たく

さんのお客が集まっているお店を見つける。

「あのお店、すごい人気だね〜」

「叩き売りか、あれも一種のテクニックだな」

「かつこいいい！私にもできるかな？」

「一度、様子を見に戻ってみるか？」

悠がココアにそう提案すると、ココアは「うん！」と返事した。

「おーい！チノ！景気はどうだ？」

ココアと悠は手を振りながら「雑貨店ラビットハウス」に戻るが――

「どんよりしてるー!!?」

「――母の雑貨だけ売れなくて……」

チノとりゼはものすごい暗い顔をしている。特にチノ。

どうやら、チノの母親の雑貨が売れないらしい。

思わず悠は「やっぱりな――」という言葉が口から出そうになるが、思い切り飲み込む。

「ガラクタにしか見えないのでしようか……」

「そ、そんなことないぞ！アピール力が足りないだけだ！」

例のうさぎのおもちやを眺めながら落ち込むチノを慌てて慰める。

「ほら……表情がいいでしょう？職人のこだわりを感じるよー！」

「100?もう一声欲しいねお客さん!――200?よし売った！」

「2体セットじゃないと必殺技ができないよー！」

先ほど見た人気店のやり方を真似するココアと悠に、チノとりゼは

「2人が輝いて見えます……」

「本当に喫茶店の店員か……?」

と開いた口が塞がらない。

「よし！私も負けずに呼び込みだー！」

ココアと悠の様子を見て、リゼはやる気になったらしく、お客を呼び込みに出かける。

「わ、私は何をすれば——」

チノがそう困惑する暇もなく、リゼがすぐに戻ってくる。

——小さい子供を連れていたがいったいどうしたのだろうか。

第二百二十六話 雑貨店ラビットハウス・閉店!

「おい大変だ!お母さんとはぐれたらしい!」

リゼが呼び込みに出かけていったと思いきや、すぐに戻ってきて報告する。

「迷子連れてきたのか!」

悠が驚きの声を上げる間も無く、連れてきた迷子の子供は今にも泣き出しそうだ。

その様子を見て慌てたチノは店から例のおもちゃを持ってくる。

「な、泣かないで……あつ、これ見てください!」

「余計に泣きそうだが——」

悠が不安そうに見守っていると、迷子の子供は泣き止んだ。それどころか少し気に入ったようで、あとで合流した母親に買ってもらった。

「気に入ってくれました……」

「よかったな!チノ!」

その後、古物市を終えて片付けをする一行。

「結構売れました」

「ああ、そうだな。——あ、今日の売り上げをまとめておくか」

「はい、お願いします」

——何気にパソコンを操作するのは久しぶりだ。

というか、ここ数ヶ月電子機器に触れる機会が少なかった。

使い方、大丈夫だろうか。

ラビットハウスに戻る途中で千夜とシャロと合流した。

ココアがラビットハウスに戻ったら買ったものを見せっこしよう
と提案し、そのままみんなで遊ぶことに。

「みんな、今日はお疲れ様——お店番してた2人にお土産だよ——!」

ココアはそういつて袋からドアノブを取り出す。

最初は嬉しそうに「あ、ありがと……」と言っていたリゼの顔が一

気に曇る。

「綺麗だったからいっぱい買ってきたよー！」

なんとも言えない微妙な顔をするチノとリゼにシャロが「あるある」とうなずく。

「冷静になると悟るのよね。不要なものが増えていく理由を——」

千夜が先ほどとは違う格好でこちらにやってきた。

「じゃーん！リゼちゃんのお下がりを買ったの〜！」

にこやかにリゼの古着を自慢する千夜に、シャロがものすごい表情を浮かべて「はあ!？」と驚く。

「シャロも買おうとしてくれたのか？」

「い、いえ……まずサイズが合いませんし、服に困っているわけでも——」

心なしか悔しそうなシャロに、リゼは気を使って「欲しいなら用意するぞ?」と提案するが、シャロは服には困ってないと拒否する。

「なんせ今着てるのとか、千夜のお下がりですから!!」

「そうなのか!?気がつかなかった——」

「新しいのよ。サイズ小さめで合わなかったの」

シャロの発言に悠が驚くと、千夜が補足する。

そして千夜は袋からもう一つ、リゼの古着を取り出してシャロに渡す。

「シャロちゃん、着てみる?」

「い、いいの——?」

だがシャロは、リゼの古着を着るとすぐにバタリと倒れる。

「先輩の匂い……」

「シャロー!?!」

そのやりとりを横で見ていたココアとチノ。

「お下がりかく昔お姉ちゃんのお下がりもらったな〜」

ココアが懐かしそうに昔を振り返る。

兄や姉のお下がりには兄弟あるあるだ。

「私のお下がりにはチノちゃんに……！」

ココアが服をチノに渡そうとするが、チノは「似合いませんよ」と受取拒否。

「ピンクばかりですし——」

「そんなこと言わないで着てみてよ！」

「そうだ！一回着てみる！」

「なんで悠さんまでノリノリなんですか！」

渋々言いながらココアのお下がりを着るチノに、ココアと悠は

「チノちゃん——よく似合ってるよ！」

「なんて破壊力……」

と大歓喜。チノは「これがお下がり——」とまんざらでもない様子。

「えへへ〜！チノちゃんのお下がりもちよーだい？」

「それじゃあただの交換です」

「やっぱりココアは妹ポジションだな——。あ、そうだ、チノ。今日の売り上げのまとめだ」

悠はそう言って先ほど完成した売上表をチノに渡すと、チノは「助かります」と受け取って内容を見る。

——そして、深刻な顔。

「ラビットハウスより売上がいいなんて……」

「す、すまん。どう計算してもラビットハウスより売上がいいんだ……」

「喫茶店を盛り上げないといけないのに……道は険しいです」

不安で震えるチノに、シャロと千夜が

「気負いすぎよ」

「だいじょーぶー！」

と励ます。そしてココアがマジシャンの格好をして出てくる。

「これで喫茶店を盛り上げるよー！」

「それ売り残ってたんですか!？」

ココアが持つてきたのは、チノの母親が持っていたという手品グッズ。
ズ。

「違う違う。気に入ったから私が買ったんだよー！」

ココアがそう説明するが、チノと悠は「えっ……」と驚く。

「今日は物にもドラマがあることを学んだよ！この手品道具の歴史は私が新しく作りたいの！」

そう言って盛り上がるココアは、さらに「ラビットハウスに魔法使いがいるって有名になっちゃうかもー！」とヒートアップ。

そんなココアだが、チノはあまり嬉しくなさそうだ。

「無茶です。騒がしいのはおじいちゃんが嫌がりますし」

確かにティツピーを見ると、微妙な表情を浮かべているが、しばらくすると諦めた様子で

「もうやりたいようにするがいい……」

と言い放つと、ココアは「ティツピー公認だよー！」と盛り上がる。

第二百二十七話 ココアのマジックショー

ティツピー公認の魔法使い(?)となったココアは、早速みんなにマジックを披露する。

「それでは、ココアマジックショーの始まりだよー!」

一同はそんなココアに「おー……」と拍手をするが――。

「この帽子から花が――ヴオッ!」

帽子から花を出そうとしたココアだが、出てきた花が顔面に直撃。

「この杖が伸びて――ガハッ!」

杖を伸ばそうとしたが、逆方向に伸びてしまい、鳩尾に直撃。

「せ、説明書……読んだのに……」

千夜はパチパチと拍手するが、チノ、リゼ、悠は「先が長そうだ……」とココアの悲劇に目を瞑る。

「ココア、大丈夫か?」

「うう……お腹が……」

「無理しすぎです」

腹を抱えてうずくまるココアに、悠とチノが心配する。

「ちよつと俺もやってみるか」

ココアから一式を拝借して帽子から花を出そうとするが、確かに顔面に直撃する。

「痛え……。今度は杖だ!向きに気をつければ大丈夫だろう」

そう言つて杖を伸ばそうとするが、今度はティツピーに直撃して、ティツピーが吹き飛ぶ。

「ティツピー!!」

吹き飛ばされたティツピーにチノと悠が駆け寄る。

「私、将来は魔法を使ってパンを焼きながら小説も書く町の国際バリ

スタ弁護士になるよ！」

「次第に肩書きが長くなっていく……」

「ココアさんは夢が多すぎます」

事あるごとに夢が増えていくココアに悠とチノが呆れる。

「チノの将来の夢ってなんだ？——やっぱりバリスタ？」

「はい。お店を継いで繁盛させたいと思ってます」

「そうか——」

翌日、ココアが「日向ぼっこ」を初めて店内が静かになると、チノと悠が将来の夢について話していると、次第に話題がチノの祖父について変わっていく。

「おじいちゃんは——私の憧れです。コーヒーを淹れる姿とか、炒ったコーヒー豆の匂いがするところとか、よく覚えてます」

——確かにティッピーはコーヒーの匂いがするな。

生前のチノの祖父に会ったことがない悠は、完全にイメージがティッピーだ。

「1つの仕事をどこまでも頑張り続ける姿って、見ていてとってもかっこいいです」

「——なんだよ、俺もバリスタになろう」

「単純なやつめ……」

「男ってほしいそうだぞ。『かっこいい』とか『すごい』って言われるとやる気になるもんさ」

隣でヤジを飛ばすリゼに悠はそういうと、リゼは「そんなもんなのか……？」と納得したようになしてないような、微妙な表情を浮かべる。

「お前もそうだろ。この前、ぬいぐるみを作った時だって、『かわいい』とか『眼帯がいい味出してる』とか言われてやる気になっただろ」

「一応言っておくと私は男じゃないぞ?!——まあ、考えてみればそう

かもな」

「ティツピー曰く、リゼは『褒めると調子にのる』っていう——」
「その話をするなーっ!!」

ティツピーと悠がりゼのチョップを食らってダウンした。

第二百二十八話 夢の中の記憶

「よし！シストの地図を元に、宝を探すぞー！」

——木組みと石畳の街。石畳に紫色の髪と瞳をした少女が宣言する。

「甘兎庵の割引券もバッチリよー！」

——今度は黒色の髪に緑色の瞳をした少女が続けてそういう。

「怖いよー！宝なんていいからお家に帰ろうよー！」

「大丈夫よ、きっとその『肩たたき券』、誰かの役に立つわ！」

黄色の髪と透き通った青色の瞳をした少女が、これから始まるであろう大冒険に震える。

「よし！出発だ！」

3人の少女は「裏道」と壁に開いた小さな穴を通って、広場に入る。神聖な雰囲気漂う広場だ。奥の壁にくぼみが開いており、その中に宝箱がある。

「わーい！宝箱だー！」

少女たちは宝箱を開けて、持ってきた宝物——勲章と甘兎庵の割引券、そして肩たたき券を入れて、交換する。

『——悠！』

「さあ、あとは帰るだけよ、……ちゃん！」

『悠!!』

リゼに揺さぶられ、悠がぼたりと起き上がる。

「うわっ！なんだ、リゼか」

「私だけ置いて日向ぼっこしないでくれよ……」

「あれ——」

辺りを見渡すと、あの広場ではなくいつものラビットハウス。

ココアとチノが居眠りしている。どうやらそれにつられて悠も居眠りしてしまったようだ。

「――」

ぼーっとリゼの顔を見る悠に、リゼは少し顔を赤くして悠にきく。

「な、なんだ？顔に何かついてるなら言えよ！」

「――」

「――悠？」

「――あ、ぼーっとしてた。なんでもないぞ」

「どうした、体調悪いのか？それとも寝起きだからか？」

リゼが心配して顔を覗かせる。

「いや、大丈夫だ。ただ、ちよつと変な夢を見て――」

「変な夢？」

悠は先ほど見た夢の内容を話す。

「シストって、なんだ？」

「お前、なんでこの街で親しまれてるゲームを知ってるんだ？」

「夢の中で、小さい女の子が言ってたんだ。その女の子がリゼにそっくりで――」

「私がシストで遊んでる夢を？」

詳しいことはわからないが、もしかしたら幼い頃のリゼなのかもしれない。

そう言えば、隣にいた2人の女の子――千夜とシャロに似ている。

「シストって、そんなに面白いのか？」

「ああ、昔はよくやっていたさ。宝物に勲章を――」

「やっぱり、あれはお前か!？」

「夢の中の私も勲章を宝物に!？」

話を聞く限りだと、「シスト」というゲームはこの街のどこかに隠さ

れている地図を元に宝探しをするというゲームらしい。

自分の宝物と、宝箱にある宝物を交換する。

リゼは「自分の宝物」として勲章を持っていた。

「小さい時のリゼかあ——」

「やめろ！重ねるなあ！」

リゼの顔を眺めながら、先ほど夢の中に登場した幼い頃のリゼを比べる悠に、リゼが顔を隠して叫ぶ。

その騒ぎを聞いてココアとチノも起きる。

「あれ、私寝てました——？」

「やれやれ。まあ、暇だししようがないよな」

目をこするチノに、リゼが呆れたように言う。

「俺も、シストやってみたい——」

「シストですか？」

「今度みんなで行くか」

「チノちゃん、なんで私と朝まで踊ってくれないのー？」

「ココアさん、どんな夢を見てたんですか！」

寝ぼけた様子でチノにそう言うココアに、チノがツツコミを入れる。

翌日が休日なので、ラビットハウス1行でシストで遊ぶことに。

「そう言えば、この前お店に飾ってあった額縁からシストの地図が出ていたんです」

チノがそう言っつて、黄ばんだ古い紙切れを出す。

「よし、今日はこれを攻略するぞー！」

「お、おー……」

盛り上がるリゼに、チノと悠がついていけない。

「あれ？そう言えばココアと里恵はどうした」

「まだ寝ています」

「やれやれ……」

こうして、宝探しが始まった。

第二百二十九話 振り回され隊・宝探し任務開始!

シストに出かける途中、シャロと遭遇した。

「どうやら、予定していたバイトがなくなって暇してたらしい。

「ついに解雇されたか……!」

「違うわよ!店長の都合でお店がお休みになったの!」

「これからチノと悠とシストをやるんだ、シャロもどうだ?」

リゼが誘うと、シャロは目をキラキラにして「はい!ぜひ!」と乗った。

「結局、メンバーは振り回され隊になるんだな」

「ああ、そうだな」

「なんだかんだで一緒にいることが多いこのメンバー。」

「あ、そうだ、シストなら宝物がいるわよね。取ってこなくちゃ——」

「シャロの家の近所だったため、取りに行くことに。」

「あら、シャロちゃん」

「千夜じゃない」

「甘兎庵の店先で掃き掃除をしていた千夜と会った。」

「へえ、みんなでシスト?いいわね」

「千夜もどうだ?」

「私は甘兎庵で仕事しなくちゃ」

「そうか——」

リゼが誘うが、千夜は仕事があるからと断る。

「シャロが家からフルールの割引券を持ってくる。」

「これ、本当は店員に配られるやつなんだけど、まあいいわ」

「あれ?肩たたき券じゃないのか?」

「悠が意外そうにつぶやくと、シャロは顔を真っ赤にして

「なんであんたが知ってるの!?!そ、それは昔の話よ!」

と叫ぶ。やはりあれはシャロだった。

「さあ、地図に書いてある暗号を解読するぞ！」

気を取り直して、振り回され隊の隊長——リゼが指揮をとる。

地図には王冠とうさぎのシルエット、そしてお店の看板が書いてある。

「王冠——うさぎ——お店——あつ、わかりました！」

チノがしばらく考えて「有名な帽子屋さんの看板です！」と言うと、リゼもシャロも納得。

——悠はこの街に来てまだ数ヶ月。そんな話をされてもわからない。

「悠は知らないのか？ だったら宝探しのついでに案内してやるよ！」

「ああ、助かるよ」

しばらく歩くと、王冠をかぶったうさぎが書かれている看板が見える。

帽子屋の近くをウロウロしていると、植木の影に箱を見つけた。

「おい、これじゃないか？」

「悠さん、やりましたね」

「開けてみましょう！」

チノ、リゼ、シャロは悠が持っている箱に顔を覗かせる。

悠はゆっくりと箱を開け——。

「「何も無い!?」」

中身は空気のみ。虚しく箱の底が見える。

「——なんだ、側面に紙が付いてたぞ」

「やっぱりな」

「おかしいと思ったわ」

箱から発見した紙を広げると、——丁寧に地図が書かれている。

「どうやら、宝はこの場所にあるようね」

「そう見たいです。行きましょう！」

シャロとチノがそう言つて先導する。

「な、なんかチノが積極的だな」

「確かに。シャロも楽しそうだ」

前を歩く2人を見て、悠とリゼがそう言つたと、2人はそれに気が付いたのかこちらに振り向く。

「き、気のせいです!」

「そうよ!」

しばらく進んでいくと、壁にぶち当たるが、壁には小さな穴が空いている。

ここから通るのは小さい子供でもないと難しい。

——そういうえばこの場所、夢にも出てきたような気がする。

「これ、子供じゃないと無理だな——」

リゼが残念そうにつぶやく。ミッション失敗と思つたが、ふとチノとシャロが眼に映る。

「な、なんですか」

「何よ、悠。何か策があるの?」

チノとシャロをじつと見る悠に2人が反応する。

悠は2人に穴を潜つてみるように指示する。

「む、無理ですよ……」

「そうよ!小学生ならともかく、私たちは——」

「いいから、やるだけやってみろ」

無理だと嘆く2人に悠は半ば強引に2人を穴につっこむ。

「——通れてしまいました」

「うそ……なんでえ!」

壁の向こう側からチノとシャロが驚く声が聞こえる。

それを聞いてリゼもあとに続こうとする。

「私もやるだけやってみるか」

「やめろ、お前は絶対に無理だ」

断言する悠に、チノが壁の向こう側から不思議そうにきく。

「どうしてわかるんですか？」

「それは、お前ら2人はひんに——な、なんか命の危険を感じたぞ！」

本能的に何かを感じた悠は言葉を止めるが、隣のリゼは察しがついたように胸を押さえる。

「この変態めー!!」

「まて！俺は冷静に状況を分析しただけだ！」

何が起きているのか見ることはできないが、リゼと悠が何やら騒いでいる。

騒いでいる理由を2人は知る由もない。

こうして、宝探しはチノとシヤロの2人に任された。

第三百三十話 思い出は宝箱の中に

「結局、私たち2人だけになっちゃったわね」

「そうですね。悠さんとリゼさんが待ってますから、早く宝物を交換しましょう」

壁の穴をくぐり抜けることができたチノとシャロは、宝箱を探して広場を歩く。

「神聖な場所ですね」

「ここでお昼寝とかしたくなっちゃう……。それになんだか懐かしい感じがするわ」

広場の奥にたどり着くと、壁のくぼみに宝箱が設置してある。チノとシャロは宝箱を開ける。

「甘兎庵の割引券!」

「肩たたき券まであるわ——って、あれ、これって……」

「——チノ、宝物はあったか?」

「悠さん!」

突然背後から現れる悠にチノが驚く。

「な、なんでここに——」

「壁を乗り越えてきた」

「先輩は!」

「置いてきた」

淡々と答える悠にチノとシャロの口が塞がらない。

「おっ、あつたあつた。この肩たたき券! シャロ、これ今使える?」

「どうして私が作ったやつだっつてわかるのー!!」

「タイムトラベラーですか」

あたかもここに入っているのを知っていたかのように、昔シャロが入れた肩たたき券を取り出して使おうとする悠に、シャロが驚きを隠せない。

「実は——」

そんな2人に悠がこの間見た夢の話をする。

「な、なんて正確な夢なの……」

「おいシャロ、これ、『大事に使ってください』が『だいじにつかってください』になってるぞ〜!」

悠が半笑いで肩たたき券に書いてある字をシャロに見せる。

「う、うるさいわね!昔作ったものなんだから、それくらいの間違いあつて当然よ!」

「シャロさん……かわいいです」

「チノちゃん……恥ずかしいこと言わないでよ……」

悠とチノの言葉にシャロが顔を赤くする。

「おーい、リゼ!大丈夫かー!」

「くっ……後少しのところで——」

「隊長ー!もしかして壁越えできないんですかー?」

「覚えてろ!次来るときまでには——!!」

壁の向こう側から悠がリゼを煽る。

「悠さん、この壁を乗り越えられたんですか」

「そのの木を使ってなんとかな。だけど肩にダメージが——」

「し、仕方ないわね。少しだけやってあげるわよ!」

「悠——本当にお前、何者なんだ」

「振り回され隊の隊員?——普段はラビットハウスの店員?」

「うそだ、絶対に軍の関係者か、あるいは——」

「軍の関係者はお前だろ」

帰りも壁を上から乗り越えてくる悠に、リゼが信じられないという目を向ける。

「はあ、私だけクリアできず、か……」

「せ、先輩！落ち込まないでください！次はきつと大丈夫です！」
落ち込むリゼと、それを慰めるシャロについていくチノと悠。

「チノ、何と交換したんだ？」

「甘兎庵の割引券です。今度使います。——悠さんは？」

「俺は、リゼの勲章だ」

「なぜ私のだと決めつけ——あつ、それは——」

「また正解〜！」

これも、夢で出てきたリゼが持っていた勲章だ。

おそらく、あの場所は昔、リゼたちが宝物を入れた場所なのだろう。
数十年後に、そのままの状態で巡り会えるとは——なんとも言えない感情が込み上げてくる。

「この甘兎庵の割引券は千夜か」

「そうね。千夜はよくシストの宝物に割引券を使ってたわ」

「千夜さんらしいです」

そんな会話をしながら、ラビットハウスに帰還する振り回され隊。
途中で、ココアに遭遇。

「みんなあ〜!!なんで私を置いていくのー!!」

「お前が爆睡してたからだよ」

「起こしても起きなかったじゃないですか」

「——あれ?もしかして2人とも起こしに来てくれたの?」

「本当にしようがないココアだな」

「本当にしようがないココアさんです」

目を点にするココアに悠とチノが見事にハモる。

第三百三十一話 ココアとリゼは1日カップル？

「届かない……悠さん、あの上のカップを取ってもらっていいですか？」

「なんだ、もう素直に俺を頼ってくれるのか？」

「——早く取ってください」

「へいへい……」

悠の軽口に少し顔を赤くするチノだが、すぐに真顔に戻る。

その光景を見たココアは、何を思ったのか、リゼに

「ねえ、リゼちゃん！私と『カップルごっこ』してみない？」

と提案する。

リゼは照れるというより、困惑した様子で「カップルごっこ？」と聞き返す。

「そうだよー！悠さんとチノちゃんみたいにカップルっぽいことするの！」

ココアの発言を聞いて、リゼだけでなくチノと悠も困惑する。

「私たち、何かしましたっけ」

「俺が棚の上のカップを取ったことが、カップルっぽいこと？」

ココアはこの行動のどこをみてそう思ったのか、全く想像できない。

「私は構わないが——どっちが彼氏役なんだ？」

「それはリゼちゃんかな？」

「わ、私がココアの彼氏——」

少し顔を赤くするリゼに、悠はジト目でいう。

「まんざらでもなさそうだな」

「そ、そんなこと——！」

「嬉しそうです」

「この顔のどこがそう見える!?!」

「やっぱり、彼氏役は嫌だった？」

「そういう訳じゃないぞ！」

——この会話を録音してシャロに聞かせてやりたい。

こうして、ココアとリゼは明日の1日だけ「カップルごっこ」をする事になった。

「具体的には、何をやるんだ?」

「カップルっぽいことをやるんだよ!」

「カップルっぽいことってなんだよ……」

答えになっていないココアの発言に、リゼが眉をひそめる。

「ごもつともだ。悠にもココアのいう「カップルっぽいこと」が何なのかわからない。

「うーんと、例えば、手を繋いだり、ハグしたり、キスしたりするんだよ」

「私にココアとキスしろと!」

「チノ、デジカメあるか?」

「持ってきます」

「さて!まだすると決めた訳じゃ——つていうか撮ろうとするな!」

ココアとリゼのキスシーンをカメラに収めようとするチノと悠をリゼが止める。

「とりあえず、明日デートしよ!」

「ああ、いいぞ」

「悠ちゃんとチノちゃんもだよ」

「——はい?」

突然巻き込まれたチノと悠が困惑する。

「私、一度ダブルデートしてみたかったんだ」

「はあ……まあ明日は休日ですし——」

相変わらず、ココアに振り回されっぱなしだ。

しかし、この状況をシャロに見せてしまうと——彼女の今後に関わる。

「とりあえず、俺たちの役目はシャロを遠ざけることだな」

「そうですね。シャロさんがみたらきつと寝込んでしまいます」

向こうで盛り上がるココアとりゼを見ながら、チノと悠は小声で作戦会議。

そして、問題の翌日になった。

幸いなことに、千夜から得た情報によるとシヤロはフルールでバイトがあるようだ。

つまりフルールに近づかなければ大丈夫ということだ。

しかし、休日なのに朝からフルールでバイトとは——シヤロも大変だ。

「よーし！出発だよー！」

「——なあココア、これって結局ラビットハウス組で遊んでるだけじゃないか？」

「全然違うよー！私はりゼちゃんと、悠くんはチノちゃんとイチヤイチャしながら遊ぶんだよ！」

「「イチヤイチャ!?!」」

ココアの発言に皆が驚く。——全く、恋愛小説でも読んだのか。

まずは、自然公園で散歩。

早朝ランニングで千夜の特訓をした記憶が蘇る。

「ん〜もふもふ〜」

「ああ、この辺うさぎが多くてもふもふし放題だな！」

「むう……」

公園にいるうさぎをもふもふするココアとりゼに、チノが少し不満そう。

「チノの周りだけ集まらない——」

ココアもりゼも悠も、うさぎたちに囲まれているが、チノはティツピー以外のうさぎが寄ってこない。

ティツピーも中身は人間だしな——。

「いいんですよ。私にはティップーがいますから」

「お、落ち込むなよ！そうだ、このおとなしいうさぎは——あつ」
比較的おとなしいうさぎをチノの近くに運ぶが、パツと逃げてしま
う。

「——」

「ココアお姉ちゃんー？」

「リゼちゃん!!悠くんが！悠くんが私のことをお姉ちゃんって!!」

「落ち着け」

「お前の妹がどんよりしてるぞ。お姉ちゃん、なんとかしてこい」

悠がココアにそう指示すると、ココアはチノの元に行つて

「チノちゃん！私かもふもふしてあげるー！」

「そういう問題では——」

「ココアとチノが『カップルごっこ』してるじゃないか……」

「なんだ、ココアにヤキモチかよ」

「お前はチノにヤキモチ妬かないのか」

「はあ？別に？チノが嬉しいなら俺はいい」

「待つてください、私は別に嬉しくなんか——ココアさん、いい加減離
れてください」

そういう悠に、リゼは驚いた表情。

「意外だな……。私は多分、すぐヤキモチ妬くタイプなんだろうな」

「ヤキモチ妬くんだったら、お前もココアをもふもふすればいいん
じゃないか？」

「その発想はなかったぞ！」

また驚くりゼ。だが悠はそれを無視してココアを呼ぶ。

「おーい、リゼの彼女さーん！彼氏が嫉妬してますよー！」

「リゼちゃんももふもふして欲しいの？今日は忙しいなあ〜！」

「やめろ！来るなああ!!」

朝から多忙なココアだが、嬉しそうだ。

「全く、しょうがないココアさんです」

「ふふーん、私がお姉ちゃんで、あとはみーんな弟か妹だよ！」

なぜか自慢げにそういうココアに、リゼは「カレカノ設定はどうした！」とツツコミを入れる。

番外編 七夕祭り in 木組みの街

——今日は七夕だ。

ラビットハウスもココアの提案で七夕仕様に改装され、店の入り口には笹が置かれ、お客が書いていった願い事が展示されている。

「私たちも何かお願いしよ〜!」

ココアがそういつて皆に短冊を配る。

願い事、と言われても、何を書けばいいのか。今の環境が十分すぎてこれ以上は望めない。

——このまま何事もなく平和に暮らせるように、とでも書いておくか。

チノが短冊を笹につけようとするが、身長が足りない。

「——届いてないぞ?代わりにつけてやろうか?」

悠が提案するが、チノは

「ひ、一人でできます!」

と意地を張る。悠は「そうかよ」と言っつて一生懸命に短冊をつけようと背を伸ばすチノを見る。

「やれやれ……チノは本当素直じゃないな〜」

「う、うるさいです!きつと高い方が効果が——」

「チノ、そんなに叶えたい願い事があるのか!」

高い位置にこだわるチノに、リゼがそう言う。

その後、結局背伸びは諦めて椅子を台にして、笹のてっぺんに短冊をつけた。

今日もバイトが終わり、ココアたちが着替えるために更衣室へ向かう。

取り残された悠とティツピー。

「ティツピーも願い事書くか?」

悠がティツピーに短冊を渡すと、ティツピーは「そうじゃな……」としばらく考えてから

『孫たちが健康に過ごせるように』とでも願っておくか」
ティップーの願い事を悠が代わりに短冊に書いて、笹につける。

「あ、あの——悠さん。実は今夜——」

「悠くん！今夜七夕祭りがあるんだってー！一緒に行くーっ!!」

チノが何か言いかけたがココアに遮られたため、チノは頬を膨らませ、不満げな表情をしている。

「お、おう——ところで、チノ、何か言いかけてなかったか？」

「気にしないでください。さ、早くココアさんと七夕祭りに行ってください」

「あれ!?チノちゃん、ご機嫌斜め……?」

明らかに拗ねているチノの声に、さすがのココアも異変に気がつく。

——おそらくだが、チノも悠を七夕祭りに誘いたかったのだろうが、ココアに先を越されてしまい、拗ねているのだろう。

「お、おい、チノは行かないのか？」

浴衣を着て準備万端なココアとは対照的に、チノは自室に閉じこもったままだ。

「——2人で楽しんできてください。私は里恵さんとお留守番してますから」

扉越しに拗ねたチノの声が聞こえる。

「なんだ、チノが行かないなら俺も行かないぞ。ココア、リゼでも誘って『カップルごっこ』でもしてろ」

悠がそう言うと、ココアは「えーっ」と不満げな顔。

あれから5分ほどチノを説得して部屋から出させる。

ココアはリゼや千夜、シヤロに電話して、待ち合わせすることになった。

「やっぱり、変ですか？」

浴衣姿になったチノを見て悠がフリーズする。

「い、いや、そう言う訳じゃなくて、とってもお似合いなのでつい——」
「ほ、褒めても何もしてあげませんよ」
チノが頬を赤くしてうつむく。

「リゼちゃんーん！」

「コ、ココア……！」

リゼも浴衣を着ている——と思いきや、私服だった。
リゼはココアを見ると少し顔を赤くする。

「あれ？リゼちゃん、なんでいつもの格好なのー？」

「だ、だって——浴衣とか恥ずかしいし……！」

「ダメだよーリゼちゃんも浴衣に着替えて！」

「甘兎庵で浴衣の着付け、やってるわよ」

浴衣を着るのを渋るリゼを、ココアと千夜が強引に引き込む。

「さっ！カップルごっこ in 七夕祭りするよー！」

「カップルごっこ……？」

千夜が目を丸くする。シャロは「なっ！」と驚く。

「そう！カップルっぽいこととして遊ぶんだよー！」

「まあ、楽しそう……！」

毎度のことだが、千夜とココアの息はぴったりだ。

「とりあえず、悠くんとチノちゃんは固定ね」

「な、なんで……！」

チノと悠がココアに困惑する。

「リゼちゃんは、また私とする？」

「えっ？あ、ああ……！」

心なしか、少し嬉しそうなりゼ。——シャロが気の毒で見えられない。
「覚えてなさいよココア！」

「あれ!? 私いつの間にか宣戦布告してた!？」

「それじゃあ、シャロちゃんは私とカップル〜！」

千夜がシャロと腕を組むが、シャロは「は、離しなさい！」と顔を赤くする。

「さて、どこまわろうか？」

「人混みは苦手です」

相変わらぬチノと悠に千夜とシャロが苦笑い。

「チノちゃんと悠くんは、時間かかりそうね」

「超奥手と超鈍感なもの、しょうがないわね」

「あー！あのぬいぐるみ欲しいー！リゼちゃん、射的得意でしょ〜とつてー？」

「し、仕方ないやつめ……！任せろ！」

上目遣いでねだってくるココアに、リゼが頬を赤くして銃を構える。

「リゼ先輩……楽しそう……」

その光景を見てシャロが嫉妬するが、そんな暇もなく、すぐに千夜が

「私たちも負けてられないわ！」

と輪投げを始める。

「このかき氷、美味しい……」

「ま、まさかコーヒー味があるとは……」

人混みを避け、少し離れたところにあるベンチに腰をかけるチノと悠。

「俺たちも何かするか？」

「輪投げも射的も自信ないです」

「それなら、金魚すくいとかは？」

「人生で一回も取れたことありません」

なぜか自慢げにそう言うチノに、悠は笑って「それなら、コツを教えてやるよー」と金魚すくいの店にチノを連れて行く。

「そう、まずはポイを水で濡らして——移動するときには紙を上に向けてる」

「む、難しいです——」

「すくうときは——」

「リゼちゃん、飲み物交換しよー」

「そ、それはつまり間接キス——い、いや、なんでもない！」

無邪気に飲み物を差し出してくるココアに、リゼは一瞬恥ずかしさのあまり顔から火が出そうになるが、ココアの飲み物を口に入れる。ココアもリゼの飲み物を口に入れる。

「——ココアは恥ずかしくないのか？」

「何が？」

「——なんでもない」

「気になるよりリゼちゃん」

「Hey! みんなく!盛り上がってるうく!?」

「間違えてコーヒー味のかき氷あげちゃったわ……」

ハイテンションなシャロに、やってしまったという顔をする千夜。

「千夜あく!」

「まあシャロちゃんったら、甘えん坊さんね」

「うう……今月も厳しくて……もうやってられな……うう」

抱きついて泣き出すシャロを、千夜はよしよしと頭を撫でる。

「——あら?チノちゃん、その袋は——」

「私と悠さんの戦利品です」

チノが袋いっぱいに入った金魚を自慢げに見せる。

「金魚すくい……なんて楽しいゲームなんでしょう……!」

「チノ、すっかり金魚すくいにハマったな……」

目を輝かせるチノに、悠が苦笑いする。

「悠くん、チノちゃんと手は繋がらないの?」

チノが酔ったシャロの相手をしている間、千夜が悠に小声でいう。
「なんでまた——」

「こんなに混んでるのよ。『迷子になるといけないから、手をつなごう！』って理由をつけて手を繋ぐいい機会なのに、もったいないわ」
そういう千夜に、悠は「——天才か？」と答えて、チノの方に向かう。

チノはすっかりシャロの相手に夢中だ。

「チノちゃんふわふわ〜！」

「や、やめてくださいシャロさん——着崩れしてしまいます！」

そんなチノに後ろから悠が耳に息を吹きかけると、チノが大きく体を震わせてこちらに気がつく。

「な、何するんですか！」

「なんとなく？」

「——もう、本当にしようがない悠さんですね」

「チノ、混んでるし、迷子になるといけないから手、繋ごうぜ」

「——そ、そんな……」

「なんだよ、嫌なのか？」

「嫌じゃ、ないですけど……恥ずかしくないんですか？」

「——別に？」

というのは嘘で、実はめちやくちや恥ずかしいが、あくまで悠は冷静を保つ。

——花火が大きく夜空に打ち上げられる。

「仕方ないですね、少しだけですよ」

チノが悠の手を握る。

「——手小さすぎだろ」

「余計なお世話です！」

「チノ、好きだよ」

「なんですかいきなり——」

不意打ちで告白してくる悠に、チノは俯いた。

「花火、綺麗だな」

「——そうですね」
花火を眺めながら、お互いの手の感触を感じる2人だった。

「リゼちゃん、好き……もふもふ〜」

「コ、ココア、人前で抱きつくくなー!!」

リゼの叫びは誰にも届かない。

——後日談——

「ココアとリゼは、結局何をしてたんだ?」

千夜とシャロには会ったが、祭り会場でココアとリゼには会っていない。

悠は不思議そうに尋ねると、リゼは

「な、何もしてないっ!」

と焦る。

「本当かよ、まさかココアを怪しいところに連れ込んでないだろうな?」

「お前は私をなんだと思ってるんだ!——か、間接キスはしたけど……」

言葉の最後をゴニョゴニョ喋るリゼに、悠は「え?なんて?」と聞き返す。

「なんでもない!!」

「ふーん、リゼにとつて間接キスぐらいなんでもないと——」

「お前!わざと聞こえないふりしたなー!!」

悠を追いかけるリゼと、リゼから逃げる悠。

ドタバタと荒れる店内。チノが見つけた短冊が床に落ちた。

『今年もみんなで楽しく暮らせますように —— チノ』

第三百三十二話 ココアの「カップルごっこ」

「リーゼちゃん！手繋ごー？」

「あ、ああ——」

前でココアとリゼが手を繋いで歩く。——確かにカップルっぽい。
「見えて微笑ましいです」

「だな」

「なんで2人は手を繋がないの？」

「微笑ましいって、保護者か！」

ココアとリゼはノリノリだが、その後ろを歩くチノと悠は全くノリノリじゃないことに、ココアとリゼがつつこむ。

「もー恥ずかしがり屋さんだなくはい、お姉ちゃんが手伝ってあげるー！」

ココアがチノと悠の手を結ばせる。

「余計なお世話だ（です）」

「息ぴったり！」

そういえば、朝ごはんを食べてなかったことに気がつく。

「急いでて、食べるの忘れちゃった……」

「ココアさんがギリギリまで寝てるからです」

「うっ……そうだ、甘兔庵で食べよう！」

チノの追求を逃れるために、慌てて話を進めるココアにリゼは呆れる。

「いらつしやいませ。あら、ラビットハウスさん勢揃いね」

「違うよー！今日は『ダブルデート』の日なの！」

「ダブルデート？」

「まずい、嫌な予感がする。」

「まあ、ココアちゃんとりゼちゃんもそういう関係だったの!？」

「今日1日だけ『カップルごっこ』してるんだ」
驚く千夜にリゼが補足する。

——今の千夜、絶対シャロに報告しようとした。

「とりあえず、メニュー見てもわからないから千夜のオススメで頼む」
「はーい！」

千夜が店の奥へ向かうと、リゼとチノがメニュー名につっこむ。

「わかりやすいメニュー名にしてくれよ。なんだこの『月明かりの湖畔』って——」

「これ、映画のセリフであつたような……」

「リゼは本当に鈍感だな……」

シャロに報告されたらまずい状況になると理解していないリゼに、思わず悠がつぶやく。

いい加減シャロに気持ちに気がつけ——と言いたい。ココアも同様だ。

悠のつぶやきにチノも呆れる。

「全くです。ここには鈍感な人しかいませんね」

「——俺も含まれるの!？」

「当たり前です。悠さんも鈍すぎます」

「どうしたら鋭くなるんだ」

「ナイフを研ぎたいのか？」

「違う、そうじゃない……」

リゼもなかなか重症だ。

甘兎庵で朝食を済ませ、次はみんなでゲームセンターへ。

「さあ、今日こそ決着をつけましょう」

「ふん。チノ、俺に勝てると思ってるのか」

「2人が熱い!!」

前にゲームセンターで遊んでから、チノと悠は度々この場所で白熱した戦いを繰り返している。

今日こそ決着をつけようと燃え上がるチノと悠に、ココアとリゼが

圧倒される。

「わ、私たちは何をしようか……」

チノと悠が戦いに残り残されたココアとリゼ。

「プリクラ撮ろうよ〜!」

「よしてきた」

ココアとリゼがプリクラを撮る。出てきた写真をココアが悠に見せびらかすが、悠は困惑する。

「な、なんだ、この『ラビットハウス・カップル姉妹爆誕☆』って……」

「えへへ〜いいでしょ〜!」

「カップルなのか姉妹なのかはつきりしろ!」

ツツコミどころ満載なプリクラ写真だ。

「チノと悠は撮らないのか?」

「どうして撮ると思ったんですか?」

「もー!本当に手が掛かるなあ〜」

ココアがそう言ってチノと悠を無理やりぶち込んで写真を撮る。

「私が『ラブラブカップル♡』って書いてあげる〜」

「なんてことを……」

「やれやれです」

「ココア……あんまり無理強いするなよ、2人には2人のペースがあるんだからさ……」

「そうだぞココア」

「そうですよ、ココアさん」

「自分で言うな!!」

「チノちゃん、私たちも撮ろうよ〜」

「しよがないココアさんですね。1枚だけですよ」

ココアとチノのやりとりを見て、リゼがこちらを見る。

「〜なんだよ」

「〜私たちも撮るか?」

「仕方ねえなく撮ってやるよ」
「なんで上から目線なんだ!？」

こうして、『ラビットハウス・仲良し姉妹☆』と『今日も絶賛振り回されてます』の2枚が追加された。

ゲーセンを後にして、しばらく街を散策していると、チノの携帯にシヤロからメールが。

『ちよー!リゼ先輩がココアと付き合ってたってどう言うこと!?!』
「バレました」

「だろうな。だって千夜だしな」

頭を抱える2人を置いて、ココアとリゼのイチャイチャは加速する。

「リゼちゃんもふもふ」

「いつまで抱きついてるんだ!くすぐりたい!」

「リゼちゃん、なでなでして〜!」

「しようがないやつめ……」

「ラブラブです」

「だな……もはや『ごっこ』じゃない……」

イチャイチャするココアとリゼとは対照的に、チノと悠は冷めている。

別に不仲なわけではないが、ココアのようにイチャイチャするような性格じゃない。

「ねえリゼちゃん、知ってた?チノちゃんの頬つぺたつてスベスベでモチモチで可愛いんだよ〜」

「な、何を言い出すんですか突然!」

「そうなのか!ココア!」

「悠が今日一番生き生きしてる!?!」

悠はチノの頬を引っ張る。

「にや、にやにをしゅるんでしゅか……」

「か、可愛い……っていうか意外と伸びるな……」

チノは悠の手をどかすと、まんざらでもない様子で

「やめてください。顔が伸びてしまいます」

と言った。

リゼも悠に見習ってココアの頬を引っ張るが――。

「ウーパールーパーにしか見えない」

リゼと悠が全く同じ感想をつぶやくと、チノが「ぷぷつ」と吹き出す。

「そろそろお昼だね！うーん、甘兔庵はさつき行ったし――今度はフルールに行こう！」

「ああ、それがいい。ついでにシヤロにも会いに行こう」

「この鈍感!!」

相当な鈍感か、あるいは鬼畜なのか、フルールへ行こうとするココアとリゼにチノと悠がつっこむ。

――この「ダブルデート」の結末はいったいどうなるのだろうか。

第百三十三話 カップルごっこは修羅場ごっこ？

「や、やめましょうよ、ココアさん！」

「えー？どうして？チノちゃん、ハーブティー嫌い？」

「そういうわけではありませんが——」

「なら行こうよー！」

「嫌ですー！」

なんとしてでもフルールにココアとリゼを連れて行きたくないチノは、慌てて引き止める。

その様子を見てリゼが「——イヤイヤ期ってやつか？」とつぶやく。

「子供じゃないです」

「チノも大変だな」

「悠さんも何か言ってくださいー！」

チノも悠も必死に食い止めようとしたが、結局ココアには敵わなかった。

「もう、どうなっても知りませんよ」

「チノ、もう諦めて一緒にケーキでも食べよう」

「そうしましょうか」

完全に諦めて自暴自棄になるチノと悠を無視して、ココアはリゼと

「リゼちゃんにケーキをあーんしてほしいな」

「なっ……よく恥ずかしがらずに言えるな……」

「えー？なんでー？」

「イチヤイチャをやめない。」

「——いらっしやいませ……」

「シャロがゾンビみたいになってるぞー！」

「シャロさん、しっかりしてくださいー！」

ホールで出迎えてくれたシャロの顔は青ざめており、心なしか髪の毛

毛もボサボサだ。

「いいのよチノちゃんに悠。私はリゼ先輩が幸せならそれで——ううっ……」

ついに泣き出すシャロを慌ててなだめるチノと悠。

「シャロちゃん？どうしたの？お腹でも痛いのか？」

「お前のせいだろー!」

「腹痛の原因、私ー!」

「腹痛から離れろ」

とりあえず、席に着く一同。

「ご注文……をお伺いします……」

「えーっと、私力モミールとロールケーキがいい!」

「なら私は——」

さつさと注文を済ませるココアとリゼ。チノと悠はシャロが心配すぎてそれどころではない。

リゼもようやく異変に気がついたのか、シャロにきく。

「シャロ、何かあったのか?——その、元気ないように見えるが」

「いいえ。なんでもありませんよ、それより注文は以上でよろしいですか?」

「あ、ああ——」

「シャロさん……」

最後に見せた満面の笑みが切ない——。

チノはシャロの元へ行つて事情を説明する。

「実は、今日1日だけココアさんとリゼさんは『カップルごっこ』してるんです」

「——カップルごっこ?」

「はい。なのでその——別にそういう関係じゃないということです」

「な、なんだ……千夜がココアとリゼ先輩が付き合ってたっていうから

「――」
一気に力が抜けるシャロ。
しばらくして注文の品を持ってくる。

「お待ちせしました！」

「おいしそー！リゼちゃん、交換しよー！」

「いいぞ、ほら、あーん」

「――ちよつと買い出し行ってくるわー!!」

「シャロー!!？」

見ていられないと店を出て行くシャロに悠が叫ぶ。

「あーっ！私悠くんのケーキも食べたーい！」

「欲張りなやつだな〜」

「えへへ、あーん」

「――」

悠がココアの口にケーキを運ぶが、隣に座っているチノから無言の圧力を感じる。視線が痛い。

「な、なんだ？チノもほしいのか？」

「はあ……しょうがない悠さんです……」

「もしかして怒ってる!?!――ほら、2口分にしてやるから……!」

「そういう問題じゃありません!――いただきます」

「なんだかんだ言って食べるのか……」

チノと悠のやりとりにリゼがつっこむ。

「チノも俺にあーんしてよ」

「――一口だけですよ」

「ほほえま〜」

「ああ、なんかこつちまで照れるな……」

「野次馬がうるさい!」

「――」

チノが悠の口にケーキを運ぶ様子を見て、ココアとりゼがにやけ

る。

「なあ、今思ったんだけど、朝も昼も甘いもの食べて大丈夫かな——」
「——はっ!!」

悠の何気ない一言にチノとリゼが硬直する。

「運動しましょう」

「まずは歯磨きだ」

「大丈夫だよくたまにだし」

「ああ、それにチノはまだ体重気にしなくてもいいだろ」

「いや、ラビットハウスまで競争だ！」

リゼが走り出すと、「待って〜！」とココアも後を追う。

「食べた後走るとお腹が……」

「だよな。飲み物飲んだ後に走るの、無理だ」

チノと悠は歩くことに。

「チノは体重気にしてるのか？」

「はい。この前はココアさんの発言を誤解していましたが、やはり気が緩むと太ってしまうような気がして——」

「大丈夫だよ。前に肩車したときだって軽すぎてびっくりしたし」

「そうですか？それならいいんですが——身長を気にするべきでしょうか」

「ああ、どっちかかっていうとそうだな。でも今のままでもいいと思うぞ」

「私が納得しません」

そういつて、またスキップを始めるチノ。

「お、おい、またぶつかるぞ」

「大丈夫です。今度はしっかり前を見て——」

チノがそう言いかけたが、頭の上からティツピーが地面に落ちる。
「ティツピー!!?」

ラビットハウスに戻ると、案の定お腹を抱えたココアの姿が見える。

「うう……そういえばハーブティーたくさん飲んだあ……」

「す、すまない。私が余計なことをしたのために——」

「午後はラビットハウスでゆつくりしよう……」

「それが吉です」

こうして、ダブルデート午後の部(?)はラビットハウスで過ごすことになった。

第三百三十四話 危険な遊びが流行中!

「リゼちゃん?」

「なんだ?——ひゃうっ!!」

ココアがリゼを振り向かせて耳に息を吹きかける。

「な、何するんだいきなり!」

「驚いた?」

「驚くに決まってるだろ——私も仕返しだ!」

リゼもココアの耳に息を吹きかけると、ココアは変な声を出し始める。

「なんだ、この状況は」

「さあ……」

ココアとリゼが耳に息を吹きかけあっている状況に、チノと悠が困惑する。

1、2分だろうか。リゼが仕返しでココアの耳に息を吹きかけると、ココアは少しだけ顔を赤くしてリゼに「もっとやって〜!」とねだる。

「あうう……」

「ココア?どうしたんださつきから。妙に積極的——」

「へへっ……これ、もふもふと同じくらいハマリそう……」

にやけた顔で赤面するココアに、リゼも顔を赤くして

「と、とにかく!これはもうおしまいだ!」

「えくなんで〜?」

「——」

チノと悠は終始無言。——どう反応すればいいのかずっと考えている。

「結構いい感覚だよ、リゼちゃんも何回かやれば良さがわかるよ」

「な、私は別にいい!!——!?!」

なんだかんだ言っているが、リゼもまんざらでもない様子だ。

「この状況、どう見ます?」

「そうだな……2人の変なスイッチが入ったのは間違いないな」

冷静な2人に、ココアが息を吹きかけると、チノも悠も「ひやうっ!」と体を震わす。

「な、何するんですか」

「そうだ!おとなしくリゼとイチャイチャしてろ!」

「2人も一緒にやろうよ!これすごいいいよ!」

「危ない薬でも売ってるのか!」

まるで危ないお薬を売っているようなココアの口調に悠がツツコミを入れる。

「ココア……俺も仕返し!」

「ひやっ!」

悠も参戦するが、チノは耳を押さえたまま固まる。

「おじいちゃん——い、今のはいったい……」

「知らない方がよいぞ……早くあの小娘を止めなさい」

ティツピーはチノに忠告する。

「な、なんか変な気分になってくる……」

「ああ、そうだな。『リゼの弱点は耳』メモしておくか」

「や、やめろ!」

耳を押さえたまま、わずかに体をピクピクと震わせるリゼに悠がいう。

「チノちゃんも腹話術の練習してないで、一緒にやろ?」

「わ、私はいいです!」

「——ふっ!」

「ひやっ!!」

後ろから悠がチノの耳に息を吹きかけると、チノの体が震える。

「悠さんまで——やめてください」

「私もチノちゃんの耳に息を吹きかける〜！」

ココアも悠に便乗してチノの耳に息を吹きかける。

「ああ……」

チノも顔を赤くする。そしてリゼも便乗するが、

「な、なんか、犯罪な気がしてきた……」

「チノちゃん、かわいいっ！」

「し、しばらくこの遊び流行りそうだな……」

耳に息を吹きかけてチノの反応を見て遊ぶリゼとココアに、悠が咳く。

「な、なんか変な感じがします……」

「でしょー!？」

「なんでだろうな……」

なぜ耳に息をかけるとこうなるのか、人間は謎が深い。

「——ティツピー?」

「おじいちゃん、何か知ってるんですか?」

「——」

ティツピーは黙る。

「——あれ、いつの間にか寝てた……」

悠が起きると、肩にチノの頭が見える。

「——おい、チノ?」

「んっ……寝てしまいました……」

窓の外を見ると、もう夜になっていた。

結局、このまま泊まり会に。

「リゼちゃん、またカレー作ってー！」

「仕方ないな〜……」

「わーい！」

「リゼ、だんだんココアに甘くなってきた……」

「ラビットハウス、これからどうなるんでしょうか」

上目遣いで頼んでくるココアに、にやけながらカレーの支度をするリゼ。

ラビットハウスの今後が心配だ。——いつもなら、はしやぐココアにブレーキをかけているリゼだが、どうやらブレーキは壊れたようだ。

「しまった、チョコがない！」

「くそっ……なぜだ……」

「あれ!?悠くんがすごい悔しそう!!」

「うちには、そんな高いもの置いてないので——普通のやつならあります」

「ダメだ、あのチョコレートじゃないと……」

チノから渡された板チョコだが、これでは酔わせることはできない。

リゼは悠の思惑に気がついたのか、

「悠……さては別の目的があるな?」

と追求するが、悠は知らんぷりする。

第三百三十五話 カップルごっこの後遺症

「さあ、もう寝るぞ」

夕食後、怪盗ラパンを見ながら遊んで、時間はいつの間にか23時になっている。

「えー、もうちよつと遊ぼうよー」

案の定ココアが寝ようとするリゼを止める。

リゼは「——あとちよつとだけだぞ」とココアの頭を撫でる。

「鬼教官の面影はどこへ……」

「リゼさんにも困ったものです」

「早く寝ないと身長伸びないぞ」

悠がココアにそういうと、なぜかココアではなくチノが反応する。

「それは困ります」

「チノが夜更かしか、早くないか？」

リゼの言葉にチノが「子供じゃないので大丈夫です」と言い放つ。

「はあ……早く大人になりたいです」

「——大人になりたいって思っているうちは子供だな」

「悠からそんな名言が出るとは」

リゼが悠のセリフに驚く。

「どうしたら大人になれるんでしょう」

「——じゃあ、今度は『カップルごっこ』じゃなくて『大人ごっこ』する？」

満面の笑みでチノに提案するココアに、悠は「ココアの発想が子供……」と呆れる。

「わわわ!!」

「どうした!?!」

リゼがスマホの画面をぼーつと見ていると思いきや、突然大声を出

す。

「私はなんてことを——」

「どうしたんだ、ワンクリック詐欺にでもかかったか？」

頭を抱えるリゼに悠がそういう。ココアもチノもキョトンとした顔。

リゼは悠の耳元に顔を近づけると、ココアとチノに聞こえないように小声で言う。

「——実は、耳に息を吹きかけると起きるあの反応について調べたんだが」

「うん？」

リゼからスマホを渡されて、悠が画面を眺めると、目を大きく見開く。

「——へえ、なるほどね。いいこと知った」

にやける悠に、リゼは「相談する相手を間違えた！」と叫ぶ。

「チノ、ちよつとこつちきて」

「なんですか？」

「やめる悠！早まるな！」

チノの耳に息を吹きかけようとする悠をリゼが必死に止める。

「チノ、さつき大人になりたいって言ったな。俺と大人っぽいことするか？」

「大人っぽい——？」

「何をするつもりだ!!？」

「私は構いませんが、具体的には何をしますか？」

「チ、チノ！悪いことは言わないからやめておけ——」

「私も大人っぽいことする——！」

「ココアまで!？」

リゼのツツコミが絶えない。

この後めちやくちやリゼのチョップをくらった。

「お泊まり会、楽しかったね〜！」

翌日、ラビットハウスの開店準備をしながらココアがいう。

「ああ、そうだな。頭痛かったけどな」

悠が自分の頭を撫でながらいう。——リゼのチョップの後遺症がわずかに残っている。

——いま、ラビットハウスには深刻な問題が発生している。客が少ないのも十分大きな問題だが、それよりも大きな問題——。

テーブルの汚れを拭くというのが現在の私の仕事だ。

「ふう……よし、完璧だな……」

そう言って体を起こす。ふと、視線を感じたので横を見るとココアがいる。

「あつ……えへへ」

目があって照れくさそうにココアが笑う。かっかわいい……。。

——いかん、仕事しなくては。

その後もココアが抱きついて

「リゼちゃん！手伝うよ〜」

「大丈夫だ！もう終わったぞ！」

「リゼちゃんもふもふ〜」

「抱きつくなあ！」

ラビットハウスで起きている大きな問題。——そう、「カップルごっこ」以来、仕事に集中できないのだ。

「なあティッピー、この店、そのうちフルールよりいかがわしくなるん

「じゃないか？」

ココアとリゼがじゃれ合う姿を見て悠が言う。

「先が思いやられるのう……」

「リゼさん、すっかりココアさんにメロメロです」

ティツピーとチノの呆れた声が店内に響く。

第三百三十六話 魔法少女爆誕

ある日の夜。ココアたちと雑談しながら過ごす。

「それにしても眠れないな」

「さつきコーヒーの飲み比べしちゃったからかな？」

悠とココアがそういうと、チノがため息をつく。

「はあ……ですから、明日の朝にしておきましようと言ったのに……」
「眠かったら先に寝ていいぞ」

悠がそういうと、チノは「子供じゃないです」と意地を張るが、もう時間が遅いので自室で静かに過ごすことになった。

「——やっぱり眠れないな」

ココアたちがいなくなつて静かになった悠の部屋に、悠の声が響く。

部屋で暇していると、部屋の扉がコンコンとなった。

「——どうぞ?」

悠がそう返事をする、部屋の扉が開いてチノが現れた。

が、現れたチノの様子は少しおかしい。

「チノ?なんだ、その服は」

「チノではありません。木組みの街の平和を守る、魔法少女です」

「——お、おう?」

「なかなか眠れない人がいるというので、駆けつけてきました。さあ、夜は静かに寝るものです」

チノ——ではなく、魔法少女はそう言つて「おやすみなさい」と強引に悠を寝かせる。

「いや、この状況で眠れと言われても」

「——それもそうですね。では、少しだけ何かお話ししますか?」

「ああ。まずその服はどうしたんだ」

悠が早速質問すると、魔法少女は「これはココアさんが勝手に——」
と言いかけるが、

「ま、魔法の呪文で変身するんです」

「そうなのか？——でもその服、似合ってるよ」

「そ、そうでしょうか。ひらひらしててちよつと恥ずかしいです」

「チノは変身する魔法以外にも何か使えるのか？」

悠がそうたずねると、「チノではありません。魔法少女です」と再度
強調してから悠にいう。

「何かしてほしいことがあるんですか？」

「そうだな——せっかくだから、チノと仲良くなれる魔法でもかけて
もらおうかな」

悠はこれがチノの芝居だと初めから思っているが、意地悪にそう要
求する。

案の定チノが「えっ!？」と驚く光景を見て悠がクスクスと笑う。

「なんだよ？チノとは仲良くなれないっていうのか？」

「そ、そんなこと！——直接言ってくればいいのに……いえ、なんでも
ありません」

そう誤魔化してからチノは「それでは呪文を唱えます」と悠にいう。
「呪文？」

「はい。本当なら大きな声で言うんですが、夜も遅いので小さな声で
——『カフエラテ・カフエモカ・カプチーノ』」

チノはそう呪文を唱えて、「これでバツチリです」と自慢げに答える。

——自分で自分と仲良くなれる魔法をかけたわけだが、どんな気持ち
ちなのだろうか。

「ほ、ほら、もういい加減寝ますよ」

チノは若干恥ずかしそうに、悠を寝かせる。

翌朝。

ココアの粹な計らい（？）のおかげで昨日の夜は面白かった。

「ココア、起きろ」

「パンは上手に焼けた〜……?」

「またパンの夢かよ。ほら、早く起きろ」

ココアを起こすのには一苦労だ。

朝の支度と朝食を済ませ、ラビットハウスの開店準備を始める。

しばらくしてリゼもラビットハウスにやってきた。

「おはよう。あれ?チノは?」

「街の平和を守りに出かけていったぞ」

本当はただのお使いだが、リゼはそれを真に受けたのか

「なに!?チノのやつ、自警団にでも入ったのか!」

とツツコミを入れる。

「あつ、悠くん、魔法少女とあつたんだね!」

「ああ、昨日の夜突然——」

「頑張つて衣装作つた甲斐があつたよ」

「やっぱりお前の仕事だったのか」

案の定ココアが関係していたことに悠は呆れる。——たまには仕事するんだな。

「ただいまです」

「おかえり〜。パトロールは済んだのか?」

「パトロール?いえ、ただのお使いですよ」

「——街の平和を守りにいったと聞いたが」

「そ、それは私じゃなくて『魔法少女』では?」

「魔法少女——?」

話についていけないリゼだけが困惑する。

「それで、悠くん。魔法少女になにをお願いしたの?」

ココアが聞いてきた。

「ん〜？」

チノの方をチラツと見る。一瞬目があつたがすぐに逸らされる。心なしか少しチノの頬が赤い。

「――内緒」

悠はココアにそう告げた。

第三百三十七話 シャロ宅防衛隊（前編）

突然、ラビットハウスに1本の電話がかかってきた。

今日は、ココアは千夜と遊びに行き、リゼは部活の助っ人で、ラビットハウスにはチノと悠の2人しかいない。

悠が受話器を取る。

「はい、こちらラビットハウスです」

『——悠？大変なの、すぐに来て！』

電話の向こうからシャロの声がする。——いったい何があったのだろうか。

「どうしたんだ？」

『お願い……すぐに来て……説明は後です……』

今にも泣き出しそうなシャロの声に、悠は「わかった、待ってる」と受話器を置く。

「チノ、シャロからSOSだ。俺はシャロの家に行くけど、1人で大丈夫か？」

悠がそう聞くと、チノは

「いえ、ちょうど閉店の時間なので私も行きます。シャロさんに何があったのか心配です」

と答えた。悠は「よし」とうなづいて、店の扉にぶら下がっているプレートを「closed」に変える。

シャロの家の前に到着すると、シャロが外で泣いていた。

「おい、大丈夫か？何があった？」

「シャロさん！しっかりしてください！」

「うう……チノちゃん、悠くん……って、リゼ先輩は……？」

「あいにく、部活の助っ人に行ってて今日はいないんだ。俺とチノで我慢しろ」

涙を拭いながら駆けつけてきたチノと悠に事情を説明するシャロ。

どうやら、家の中に数匹「あの生物」が湧いたらしい。

「1匹だけならなんとか——でも、何匹かいるみたいなの……」

「そ、それって——ご、ゴキ……」

チノが震える。無理もない、あの生物は人類の天敵と言える生き物だ。

「要するに、退治してほしいと」

「そうなの……ココアにも千夜にもリゼ先輩にも電話したのに——みんな留守電で……」

——部活中のリゼはともかく、ココアと千夜はいったい何をしているんだ。

「まあいい、とりあえず中に入るぞ」

「無理！私、他の虫には慣れてるけど、あれだけはダメなのー!!」

「わ、私も——」

シャロとチノがそう言つて、自分たちは外で待つと主張する。

悠は「へいへい」とうなずいてシャロの家の中へ。

「——おじゃまします」

悠が部屋の中へ入ると、早速カサカサと音が聞こえる。

「やれやれ。夏はよく湧くんだよなくこの生き物」

「な、なんでそんなケロッツとしてられるんですか——!」

窓の外からチノが悠にいう。

悠はそれをスルーして、部屋の中を探索する。——というのも、今武器を持っていない。

奴が姿を現しても攻撃できないのだ。

まずは、部屋の中にある道具で武器を作らねば。

「お、こんなところに雑誌発見!」

悠がそういつて床に転がっている雑誌を手にとると、窓の外でシャロが発狂する。

「やめてー！それは私が全財産をはたいて買ったりゼ先輩が載ってる雑誌ー!!」

「うるさい奴だな、部屋が危険地帯になると、雑誌がお亡くなりになるの、どっちがいいか選べよ」

「うっ……地味に高いのよね、その雑誌……。諦めきれないわ」

「——じゃあティツピーで潰すか」

悠が冗談交じりにそういうと、ティツピーは青ざめた顔で

「のおおお!!」

と叫ぶ。チノも「そんなことしたらティツピーが——」と止める。

雑誌は使えないようだ。

しばらく辺りを見回すと、今度はハーブティーの本。

「これは？」

「そ、それも勘弁してほしいけど——まあそれなら諦められるわ」

シヤロが悔しそうな表情を浮かべる。

さて、ここからが腕の見せ所だ。と張り切るが、悠が部屋の中に入ってしばらくすると、音が聞こえなくなる。

「なんでだ、俺にビビってるのか？」

「——」

煽っても反応はない。当然といえば当然だが。

「悠さん、あつちですー！」

チノがキツチンの方を指差すと、悠はそれを見逃さない。

——まずは、1匹。

「シヤロ、死体はどうする？」

「ぎゃああああ!!」

悠が無邪気に潰れた死体が乗った本を窓から顔を覗かせてるチノとシヤロに見せる。

悪意はなかったのだが、2人を怯えさせてしまった。

「す、すまん。そういうつもりはなかったんだが——」

「ゆ、悠さんのせいで心臓が破れそうでした……」

「ほんと、あんたって人は——。死体はトイレにでも捨てておいてくれる？」

「了解」

さて、シヤロの話によるとあと2匹いるそうさ。

これは、長期戦になりそうさ。

第三百三十八話 シャロ宅防衛隊（後編）

「あー、こういう時こそ、魔法少女来てくれないかな〜」

悠がチノの方をチラッと見てそうつぶやくと、チノは慌てて

「あれを駆除する魔法なんてありません！」

と参戦を断る。恐怖のあまり動揺しているのか、もはや「魔法少女≠チノ」という設定を忘れている。

敵は残り2匹。悠は慎重に部屋の中を見渡す。——気配はあるが、姿は見えない。

しばらくして、1匹が姿を現した。

奴は武器を構えるこちらに気がつき、覚悟を決めたようだ。

ブーンと羽を伸ばし、空を飛ぶ。

「うわあああ!!!」

チノとシャロが悲鳴をあげる。飛んだことに驚いているのもあるが、一番恐怖を感じたポイントは、窓の方に向かってきたことだろう。

「チノちゃん!」

シャロがチノをかばうが、悠は容赦無く窓から身を乗り出してトドメを刺す。

「振り回され隊に宣戦布告したやつ運命だな」

——残り1匹というところで、心強い助っ人がやってきた。

「シャロ! すまない。部活中で電話に出ることができなかった。悠やチノも——何があったんだ?」

そう、我ら振り回され隊の隊長、リゼだ。

悠はリゼに事情を説明すると、リゼは顔から血の気が引いて震え上がる。

心なしか、チノやシャロより怯えているような——。

「な、な、な、な——」

「動揺しすぎだろ。さあ、隊長! シャロの家の平和を守るために戦うぞ」

「ミッションの難易度高すぎないか!?!」

リゼは地面に膝をつく。

「わ、私はG——というか虫全般無理だ……」

「い、意外です。先輩——」

震えるリゼにシャロが驚きの声を上げる——同意見だ。

「なあに、目撃情報によるとあと一匹だ。そんなにビビるなよ。ほら行くぞ」

「やめろおお!!」

リゼを家の中に引き込もうとする悠にリゼが悲鳴をあげる。

「まて！私は直接戦えないが、後方支援ぐらいはできる！」

「ほう？例えば？」

「た、例えば？えーつと——。そ、そうだ！奴が現れたらここから銃で狙撃する！」

「近接武器はないのか？あるなら貸してくれよ」

「Gが触れたものを携帯できるか！」

全く戦力にならないリゼに悠が思わずため息を吐く。——その瞬間、事件は起きた。

「「うわああああ!!」」

「自分から出てくるとは、降伏するってことか？」

悠はそう言って本をぶん投げる。だがあと少しというところで躲かれてしまった。

奴は、チノの方に足を進める。

「こ、来ないでください！わ、私、お金なんて持ってません！」

「強盗か!?!あるいはカツアゲか!?!」

なぜかお金を持っていないことをアピールするチノに悠がつつこむ。

チノはシャロにしがみつくが、Gの足は早まる。

悠はリゼからコンバットナイフを奪うと、Gに突き刺す。

「任務完了だ」

「なんてことをしてくれただんだ!!!?」

ナイフに突き刺さったGを、まるで「將軍の首を取った」と自慢する武士のように悠が見せびらかす悠に、リゼが叫ぶ。

「わ、私のナイフ——」

「文句言うな。仕方ないだろ。本を拾ってる暇はなかった。それとも、チノよりナイフのほうが大事だと言うのか?」

「も、もちろんチノの方が大切だ!——だ、だが、その——もういい、そのナイフは捨てておいてくれ——」

リゼが頭を抱える。

「あ、あの、助けてくれてありがとうございます……」

そういえば、何度か肝試しで水鉄砲を構えるリゼや、落ちてくる皿などからチノを助けている。

「気にすんなよ、俺はチノのSPだからな」

「悠!早く死体を処理してくれえええ!!」

リゼは自分の目の前に放置されているGの死体を早く片付けてくれと悲鳴をあげる。

「悠……ありがとう。あんたがいなかったら私——今頃命はなかったわ」

「——Gって毒持ってないよな?」

大げさなシャロの反応に、悠が苦笑いする。

「シャロは、うさぎとGがダメなのか」

「小さいとき、千夜に——」

「あの和菓子バカ……」

うさぎのトラウマも、確か甘兎庵で飼っているあんこが原因だったよな——。

「あの、これ。よかったらお礼に——」

シャロがコレクションのカップを取り出して悠に渡す。

「いいよ、お礼なんか。本を犠牲にしちやったしな」

「私の気が収まらないわ」

「それなら、今度フルールで何か奢ってくれよ」

「——わ、わかったわよ……」

シヤロの顔がわずかに赤くなった。

第三百三十九話 部屋から追い出された話

「いいですか、悠さん。夕方まで絶対に部屋に入らないでくださいね」
「悠くん！今から私たちはうさぎになるからね！扉を開けちゃダメだよ。」

「もしかしてココアは『鶴の恩返し』の鶴のことを言いたいのか？——
わかったよ、俺はリゼとでも遊ぶか」

悠は少し寂しげに階段を降りていく。

「悠、どうした。元気ないようだが」

「リゼ……チノとココアに追い出された……」

「追い出された!?——何をやらかしたんだ!」

「まて！俺は何もしてないぞ!」

リゼに疑われるが、実際悠は何もしていない。心当たりもない。

「怒ってる様子じゃなかったし……それはないだろ」

「そうなのか?——まあいい、ココアとチノは忙しそうだし、どこか出かけるか?」

リゼの提案に悠は「うん」とうなずいた。

「——甘兎庵か」

「ああ」

リゼと後ろをついて歩くと、甘兎庵にたどり着いた。リゼはここで何か食べようと悠を誘う。

「いいのか、また早朝ランニングする羽目になるかもしれないぞ」

悠がそう警告すると、リゼは「た、たまにだし、大丈夫だ……」と心配そうに言う。

「あら、いらつしやうい!」

千夜が出迎えてくれる。そのまま案内された席へ座ると、例のメニューを渡される。

「——見てもわからない」

「だな。呆れたもんだ」

悠とリゼがそう言っただけのため息を吐く。

結局、いつものように千夜おすすめのメニューを持ってきてもらうことに。

『『エメラルドの涙』お待たせ〜』

千夜がお盆を持ってこちらにやってくる。どうやら最近、アレンジして味が進化したらしい。

「この店、メニュー名以外は完璧だよな……。ラビットハウスもなんとか今の状況を改善しなくては」

悠が和菓子を食べながらリゼに言う。

「ああ、そうだな。私たちもフルールみたいにチラシ配りするべきなのか——」

「ココアがまた調子の乗って変なチラシを量産するからダメだ」

悠がココアをデイスると、リゼはクスツと笑った。

「——そういえば、なんで部屋を追い出されたんだろう」

悠は不思議に思う。なぜチノの部屋から追い出されたのか。

リゼも「うーん」としばらく考えて答える。

「ココアと遊びたくなった、とか？」

「ついに俺が仲間はずれに——」

「お、落ち込むな！私が代わりに遊んでやる！——さあ、サバイバルゲームか、トライアスロンか選べ！」

「どつちも嫌だ!!」

選択肢が命の危険を感じる。千夜もこの会話を聞いたらしく、悠を心配する。

「悠くん、ココアちゃんたちと何かあったの？」

「チノの部屋で遊ぼうと思ったたら、追い出されたんだ」

「まあ——どうしていきなり……」

千夜も意外そうな表情。しばらく考えてから悠の肩を掴む。

「なら、うちの子になっちゃいませよ！従業員は常時募集中よ」

「いきなり悠を引き抜くな。悠も急にラビットハウスを離れるのは嫌だろ?」

リゼがそう言うが、悠は

「はは……いつそのこと、そっちの方がいいのかもしれないな……」

と千夜の提案を受け入れようとする。

「お、おい!チノが悲しむぞ」

「え、俺がいなくなったら悲しんでくれるの?——ちよつとドツキリしてみようかな……」

「どうしてすぐそういう考えになるんだ!?——少なくとも私は寂しいけどな……」

「リゼ……」

リゼの発言を聞いて頬を赤くする悠に、リゼは

「聞こえてたのか!!」

と焦る。

甘兎庵を後にすると、リゼにチノからメールが来たようだ。

『悠さんを連れてきてください』

と書かれているようだ。

「なんなんだ……」

悠はリゼに「帰るぞ!」と言われて腕を引っ張られる。

第四百四十話 ポポロンパーカー

ラビットハウスに戻るが、ココアとチノはいない。

「誰もいない——?」

「ああ、なんでだよ?」

ラビットハウスに入ったりゼと悠は困惑する。

2階に上がって、チノの部屋に向かう。いるとしたらここだろうか。

「おいチノ!悠を連れてきたぞー!」

リゼが扉をノックすると、ココアが出てきた。

「ふふーん、悠くん、見て驚かないでよ〜」

ココアはそう言って悠を部屋の中に入れる。

「——!?!」

部屋の中の光景を見た悠は目を見開く。不意に頬が緩む。

「チノ……なんだそのパーカーは!?!」

チノのポポロンパーカーを見てリゼも驚く。

——悠は前に一度見たことがあったので、驚きはしないが、あまりの可愛さになにやける。

「——お揃いです」

「——え?」

チノがもう一つポポロンパーカーを取り出す。

「まさか——」

「悠くんの分、作っちゃいました〜!」

ココアが満面の笑みでパーカーを悠に着せる。

「いや、お前が着ろよ」

「えくだって悠くん、欲しがってたでしょ?」

「まあ、そうだけど——」

「もう一着作ったので、ぜひ……」

「チノ——そんなに俺とペアルックしたかったのか……」

悠が頬を赤らめてそういうと、チノがすぐに悠のパーカーを取り上

げる。

「——やっぱり返してください」

「まて！冗談だ！これは着ずに家宝として未代まで引き継ぐ！」

パーカーを巡ってドタバタと争うチノと悠をよそに、リゼは

「いいなあ……私も欲しい……」

「あれ？リゼちゃんも欲しいの？」

ココアがリゼに聞くと、リゼは「ま、まあな」と少し照れながらその答えると、ココアは早速

「よし！リゼちゃんの分も作るよー！」

「リゼさんもこれ、欲しいんですか？」

「あ、ああ……。だが少し可愛すぎるな。私はもう少しかっこいいパーカーが欲しい」

リゼがそうリクエストすると、ココアとチノが「うーん」と考える。

「このパーカーってティツピーがモデルだよな」

悠がチノに尋ねると、チノはコクリとうなづく。

「なら、リゼの分はワイルドギースをモデルにしたらどうだ？」

「それだよ悠くん！」

「ワイルドギースのパーカーか……」

「それで行きましょう」

みんなでリゼのパーカーを作ることに。

パーカーを作っている途中、悠はあることを思いつく。

「チノ、このパーカー、もう一つ作れるか？」

「どうしてです？」

「シャロの分だ」

「——なるほど。悠さんにしては粋な計らいです」

「褒められてるのか!？」

チノが悠の意図を読み取ったのか「これと同じものをもう一つ作りましょう」と提案する。

リゼとシャロがペアルック、これはネタになりそうだ。

「つて、なんで千夜みたいなことを考えてるんだ、俺は——」

出来上がったポポロンパーカーは、灰色をベースに、ワイルドギースの鋭い目やあのイカした前髪を見事に再現した。

「完成です——!」

「おー……」

リゼの分とシャロの分、2着完成したが、リゼはなんで2着なんだと困惑する。

「これは予備用か?にしてはサイズが小さいような——」

「違う。そもそもこっちはお前のやつじゃないぞ。誰のものかは後での——」

悠が「後でのお楽しみだ」と言おうとしたが、ココアがそれを遮る。

「これはシャロちゃんの分だよ!リゼちゃんと仲良くペアルックだね!」

「なんで言っちゃうんだバカー!」

「やれやれです」

「シャロとペアルック——シャロは嫌じゃないのかな?」

「な訳ないだろ。さあ、これを持ってシャロのところへ」

悠がそう言ってシャロの分をリゼに渡す。

「私が直接渡すのか!」

「そっちの方が喜ぶだろ」

「そ、そうなのか……?」

リゼは2着のパーカーを持ってラビットハウスを後にした。

「ココアは作らなくていいのか?」

「私はいいよ?」

「変なところで遠慮するんだな」

自分の分は作らなくていいというココアに悠が驚く。

「そうです。ココアさんはもつと他のところで遠慮すべきです」

「そういう問題じゃない!」

何やともあれ、チノとお揃いのパーカーを手に入れた悠は満足したのだった。

第四百四十一話 ココアとお留守番

「はあ……」

「え、えーつと——そうだ！私がチノちゃんになるから落ち込まないで！」

「いや、どうしたらそうなるんだ!？」

落ち込む悠を見て、慌てるココア。

と、いうのも、今ラビットハウスにはココアと悠の2人しかいない。

チノと里恵はマメ隊と2泊3日のお泊まり会に出かけた。

「私だって寂しいよ……チノちゃんと2日も会えないなんて——」

「まあ、そんな遠くに行つたわけじゃないし、会おうと思えば会えるけどな……」

一番被害を受けているのは、悠でもココアでもない、ティツピーだ。

「おい、そろそろ泣き止めよ」

「ううっ……」

「ティツピーも寂しいんだね。よしよし……」

先ほどから大泣きしているティツピーをココアが撫でる。

「ほら！私をチノちゃんだと思つて！もふもふしていいんだよ！」

「お前が俺をもふもふしたいだけだろ」

「えへへ、バレた?」

「全く……」

しばらくして、ラビットハウスに千夜とシャロが遊びに来た。

そして、落ち込むティツピーと悠を見て驚く。

「悠?——何かあったの?」

シャロが心配そうに聞いてくる。悠の代わりにココアが事情を説明すると、シャロは「なんだ……」と肩を下ろす。

「なんだじゃないだろ！生命の維持に関わる一大事だぞ」

「そんなに深刻なの!？」

「まあ、悠くんは遠距離が苦手なタイプね」

「千夜ちゃん、シャロちゃん。どうしたら元氣出してくれると思う?」

「ココアちゃんがチノちゃんの真似をすればいいんじゃないかしら」

先ほどのココアと全く同じ発想をする千夜に、悠が

「お前ら——2人揃って息ぴったりだな——」

というと、ココアと千夜は手を繋いで

「だって私たち親友だもんね!」

「ねー!」

とじゃれ合う。

「あつ、悠——」

何かを思い出したようにシャロが悠の名前を呼ぶ。

「なんだ?」

「その——あのパーカー、あんたが私の分を作ろうって提案してくれ
たんでしょ?お、お礼を言っておこうと思って——」

「粹な計らいだろ?」

「私、今ではあのパーカーがないと寝られなく——」

「そんなに!?!」

シャロもなかなか重症だ。

「悠くん!泣きたい時は私の胸で泣いてもいいんだよ!」

「ココア——」

「私の胸はパブリックスペースだから!」

「あらゆる誤解を生む表現だ!!」

得意げにそういうココアに悠がツツコミを入れる。

「悠、たった2日離れるだけじゃない。そんなに落ち込むことないわ」
「シャロ——お前は2日リゼの顔が見られなくても生活できるのか
?」

悠の発言に、シャロは「そ、それは——」と弱腰になる。

その日の晩、ココアと悠は早速夕食に困っていた。

「さて、料理人が2人もいない件についてどうしようか」

「お姉ちゃんが悠くんの大好きな料理を作ってあげるよー!」

ココアが腕をまくりながらそう宣言する。——その自信が怖い。

「じゃあ、チノの手料理を作ってもらおうかな?」

「チノちゃんの味を完全に再現してほしいってこと!」

鬼畜な悠のリクエストにココアがツツコミを入れる。

「冗談だ、お前が料理すると失敗しそうだから、俺が何か作るよ」

「私——お姉ちゃんなのに全然ダメだね……」

「——一緒に作るか?」

落ち込むココアに悠がそういうと、ココアはパツと顔を明るくして「うん!」と頷く。

結局、その日の晩に完成したのは、そこそこ綺麗に作れたオムレツと、もはや何の料理かわからない妙な形をしたオムレツだった。

「——悠くん、くすぐったいよ……」

「——ん?」

名前を呼ばれたような気がして目を覚ますと、朝になっていた。

目を開けると目の前にココアが見える。

「なんで俺の部屋で寝てるんだよ!ココア!!」

そう叫ぶと、ココアがゴニョゴニョと寝言をつぶやく。

「悠くん、お姉ちゃんって呼んで……」

——いったいどんな夢を見ているんだ。

悠がココアを放置したまま部屋を出て、朝の支度を済ませる。

歯磨きやら洗顔やらを済ませてもう一度部屋に戻ると、まだココアが寝ている。

「おいおい——」

「悠くん、耳に息はダメだよ……」

「まだ寝言言ってやがる——そうだ」

悠が何かを思いついたように、ココアの耳に口を近づけると、ふつと息を吹きかける。

「うわあああ!!!」

ココアがガバツと起き上がった。

「な、なんかすごいインパクトを感じたよ!?!」

「効率よくココアを起こせる方法を見つけたぞ。今度チノにも教えよう」

こうして、ココアと悠の2人きりの留守番が始まる。

第四百四十二話 ラビットハウスのトラブルメーカー

「大変だよ悠くん!!!」

「どうした!?!」

先ほど、ココアを起こしてから悠は朝食の準備を始めると、しばらくしてココアがダイニングに入ってくる。

「私の髪飾りがないよー!!」

「えーっ!?!」

朝から騒がしいやつだ。いつも頭につけている髪飾りがないと部屋中を探し回るココア。

「昨日、確かにポケットに入れたのに……」

「そのうち出てくるだろ」

「お姉ちゃんとお揃いの大事な髪飾りなの!お願い、探すの手伝ってー!」

「はいはい、わかったよ」

しばらくココアの部屋で髪飾りを探す。

どうやら、服のポケットに入れていたようだが、ポケットの中身は空だ。

「俺の部屋にあるかも——って、ココア?」

ココアが自分の頭を撫でながら恥ずかしそうに笑っている。

「どうした?見つけたか?」

「えへへっ、私の頭についてたよ」

「ココアー!!」

「お騒がせしましたああ!!!」

ココアと2人きりでラビットハウスを切り盛り——といっても、相変わらず客は少ないが。

ふと、悠がココアの作ったラビットハウスのポスターを見る。

「ん!?!」

「どうしたのー?」

このポスター、何か違和感がある。——注意深く見ると、ラビットハウスがラビットホースホースになっている。

「ココア——スペルミスで馬ホースになつてるぞー!」

「そんなあ!?!」

「確認しなかった俺がバカだった……」

頭を抱える悠に、ココアは激しく動揺したのか、震えた声で

「か、看板に馬をつけたら解決……」

「何も解決しねえよ」

「わー!! 私ポスター回収してくるー!!! ホースじゃなくてハウスだよー!!!」

ココアがものすごい勢いでラビットハウスを飛び出していった。

その日の夕方、ココアが突然カレーパンを食べたいと言い出したので材料を買い出しに出かけた。

「市販のじゃダメなのか?」

「こういうのは、自分で作るから美味しいんだよ」

「なんか心配だな——カレーの部分は俺が作るから、パンの方は頼むぞ」

「了解! きー!」

リゼの入れ知恵のせいか、ココアが敬礼する。

「あ、そうそう! この前、いい小麦粉を売ってるお店を見つけたんだぞ!」

「小麦粉ってどれも同じに見えるぞ!」

ココアの小麦粉へのこだわり(?)に悠が驚く。

ココアに連れられて、しばらく街を歩くが——。

「あれれ? おかしい……ここ、さつきも通ったような気がするよ?」

「——」
絶賛、迷走中。

「やれやれ、ココアはトラブルメーカーだな」

「トラブルメーカー？」

「ああ、今も絶賛ハプニング生産中だしな」

「トラブルメーカー！いい響きだね！将来は町の国際バリスタトラブルメーカー弁護士になろつかなく！」

「弁護士がトラブル起こしたらダメだろ！」

『トラブルメーカー』の意味がわかってないココアに悠がツツコミを入れる。

はつきりいって、『町の国際バリスタ弁護士』の部分ですでに数カ所ツツコミどころがある。

かろうじて材料を手に入れたココアと悠は、早速カレーパンの制作に入る。

「私たち、一緒にいるとなんでもできそうな気がするね〜！」

ココアが悠に言うが、小麦粉をこぼしている。気が付いていない様子だったので、悠がそれを指差しながらジト目で

「ああ、お前がハプニングを作らなければ、の話だけだな」

というと、ココアは「わー!!」と慌てて落とした小麦粉を集める。

「えへへ、私悠くんに迷惑かけてばっかりだね〜……ごめんね？」

「気にすんな。いつものことだろ」

「あれ!? 呆れられてる!？」

完成したカレーパンを食べながら、そんな会話をしているとココアの携帯に1件の着信が入る。——チノからだ。

「もしもしチノちゃん？」

『ココアさん、悠さんに迷惑かけてませんか？』

「チノちゃん！話がリアルタイムだね！」

『リアルタイム——？』

リアルタイムなチノのセリフに、ココアがツツコミを入れる。

「それより、どうかしたの？お姉ちゃんの声が聞きたくなったの？」
『ち、違います！ココアさんがやらかしてないか心配になっただけで
す！』

「大丈夫だぞ、チノ！ココアは俺が責任持って監視してるから」

心配そうなチノに、悠がそう言う。

『悠さん——！ココアさんのこと、お願いしますね』

「保護者か!？」

トラブルメーカーなココアだが、そんなココアに助けられることも
多い。

こうして、ココアと悠の留守番生活が終わる——。

第四百四十三話 鈍感な2人

翌日の夕方。そろそろチノたちが帰ってくる時間だ。

「悠くんー!」

「なんだ?」

ココアが悠の部屋に入る。手にはコーヒーカップ。

「コーヒー淹れたよ」

「——ココアにしては気が利くな」

悠がそうつぶやくと、ココアは嬉しそうに「えへへ」と頬を赤くする。——別に褒めてないのだが。

「チノちゃんたち、もうすぐ帰ってくるかな?」

「ああ——長い2日間だった」

「——えいっ!」

ココアが悠の耳に息を吹きかけてくる。

「この遊び——危険すぎるとリゼに止められたが、ココアはすっかりハマってるな」

悠が耳を押さえながら言うと、ココアは「もふもふと同じくらいいい感覚だよ」とにこやかに話す。

「仕返しだ!それっ!」

「ひゃうっ!——何をー!お姉ちゃんだって負けないよー!」

ドタバタとベッドの上で息を吹きかけ合う2人に、ティッピーが「やれやれ」とため息を吐く。

「ついでに悠くんもふもふ」

「もふもふはやめろー!!」

「えくなんでよく!お姉ちゃんに遠慮しないでいいんだよ?」

徐々にエスカレートしていくが、人の気配を感じて攻撃が止む。

ココアと悠が部屋の扉に視線を向けると、帰宅してきたチノと里恵の姿が見える。

「あつ！チノちゃんも里恵ちゃんもおかえりく！今なら悠くんもふもふし放題だよー！」

「勝手にし放題始めるな。——どうしたんだ、2人とも？」

硬直するチノと里恵に悠が困惑する。ココアはもはや困惑すらせず、悠とティツピーをもふもふし続ける。

「あ、あの——悠さんは恥ずかしくないんですか？」

「——何が？」

「これだからお兄ちゃんは……」

「はあ？」

さらに困惑する悠。しばらく考えて辺りを見渡すと、ベッドの上にココアがティツピーや悠と寝っころがってもふもふしている。

「——あつ」

そして、ココアが自分の上に覆い被さってもふもふしてくる光景に気がつく。

「離れる！」

「あれ!?急に反抗期!?!」

ココアを突き飛ばして起き上がると、一つ咳払いして

「お、おかえり2人とも——」

「私たちは気にしないので、そのまま続けてもらって大丈夫です」

「チノちゃん、この状況、少しは気にするべきじゃ——」

気を使って扉を閉めようとするチノに里恵がつっこむ。

「いいんです。あの2人には何を言っても無駄なので」

「——それもそうか」

「あれ?なんかバカにされてる!?!」

チノと里恵のセリフにココアと悠がハモる。

「チノちゃんももふもふして欲しかった？」

ココアがそう言ってチノに抱きつくが、チノはそれを押しつけようとする。

「そういう意味じゃ……ひやつ！」

チノが言いかけたが、ココアがチノの耳に息を吹きかける。

「な、何するんですか！」

「もふもふじやなくてこっちだった？」

「どっちも違います！」

「えくビクツと反応するチノちゃん、可愛いよ〜！ね、悠くん？」

「へっ!?——あ、ああ、そうだな……?」

垣間見えるココアのドSっぷりに悠が驚いていると、ココアが突然話題をこちらに振ってきて慌てて適当な返事をしてしまった。

「悠さんまで調子に乗らないでください。ほら、夕飯の支度しますよ」

「やれやれ、やっとココアの黒焦げオムライスから解放されるのか……」

「何があつたんですか!？」

悠が遠い目でそう言うと、チノがツツコミを入れる。

さらにその翌日、ラビットハウスでバイトをしていると、ふと気になったのでチノに聞く。

「——なあチノ、耳に息を吹きかけると、どうしてビクツとなるか知ってるか？」

「——知りません。どうしてですか？」

「——内緒だ」

「なんですか、気になるじゃないですか」

「そんなに気になるのか?なら教えるぜ。実は——」

「悠!——チノの心を汚すなよ」

「へいへい……」

あの現象について教えようとしたが、案の定リゼに止められた。

第百四十四話　チマメ隊とお茶会！（お知らせ有）

ある日。

学校帰りのチマメ隊と遭遇して、そのままお茶会に参加することになった。

「——なんで俺も?」

悠が困惑してそう言うのと、マヤは

「たまにはいいじゃん」

と笑う。そしてこうつけ加えた。

「チノとの進展も聞きたいし!」

「本人を目の前に話せるか!」

「進展と言われても……何を話せばいいんですか?」

マヤの要求を却下する悠と、どう答えればいいのか悩むチノ。ありがたいことに、話題は恋バナから変わっていく。

「私も大人っぽくなりたいたい」

「だね」

マヤとメグはそう言うが、大人っぽいとはなんなのか正直よくわからない。

悠が「大人っぽいことってなんだ?」と聞くと、マヤは

「例えば。後輩に『お茶して行こうぜ!』って誘うの!」

「ナチュラルに誘えるかな?」

「じゃあメグ、ちよつとやってみて」

とメグに無茶振りする。メグはしばらく考えた後――

「き、君可愛いね〜!い、一緒にお茶していかない?」

「怪しいナンパです!」

チノがつっこむと、マヤは「あははは」と大笑い。そして矛先は悠に向けられる。

「悠!ちよつとやってみてよ!」

「はあ!?!」

この店のテラス席からは大通りが見える。——そこには、リゼが歩く姿が。

「あつ、リゼさんだ。せつかくだから誘ってきてほしいな」
メグはリゼに気がついたのか、悠に要求する。

——仕方ない。と悠が立ち上がってリゼの元へ。

「おつ、悠じゃないか。どうしたんだ、こんなところで」

「え、えつと——。き、今日も可愛いね〜!俺とチマメ隊とお茶していかない〜?」

——しまった、さっきのメグに影響されて怪しいナンパをしまった。
リゼは顔を真っ赤にして

「なななな、なんだ!いきなり!」

「いや、チマメ隊に誘ってこいって言われてさ——とりあえずその銃をおろそうか」

銃を構えて悠と距離を取るリゼを、なんとか店に連れていくことができた。

「お手柄だね〜!」

「あはははつ、あの誘い方——あははは」

「マヤさん——ツボりすぎです」

先ほどから笑いが止まらないと腹を抱えるマヤにチノが呆れる。

「なんだ……ナンパの練習に私を使っただけか」

「いや、ナンパの練習じゃなくて、後輩にどうやってお茶に誘うか研究してたんだ。主にマヤとメグが」

リゼの誤解を悠がとくと、チノは

「ナチュラルの後輩を誘えるかどうか練習していたんです。——まだまだゴールは遠そうです」

「普通に『お茶して行かないか?』って言うのはダメなのか!」

「メグがテンパって『君可愛いね〜!一緒にお茶して行かない?』なん

て言うから、俺もつられて怪しいナンパをしてしまった」

「いきなり『今日も可愛いね〜!』って言われてビックリしたぞ……」

リゼがそう言っつて紅茶を飲む。

そして、マヤが手帳を出して悠に聞く。

「さて、悠——」

「なんだ?突然——」

「噂の人との関係について1時間ほど語ってもらおうか!」

「その話まだ続いたのか!?!」

突然先ほどの話題に戻った。リゼは「どういうことだ?」とマヤに尋ねる。

マヤは先ほどの話をリゼに伝えると、リゼは

「なるほど。確かに私もちよつと気にな——なんでもない!」

「ごまかしても遅いぞ。全く——」

「チノは控え目だし、悠は鈍感だから、進展に時間がかかりそうだな」

リゼがゴホンと咳払いして唐突にそう言った。

「あ、仲を深めるには『愛してるよゲーム』がいいってテレビで見たよ——!」

「『愛してるよゲーム?』」

メグの提案にチノと悠がハモる。

メグの話によると、『愛してるよゲーム』とは、お互いに「愛してるよ」と言い合つて照れたり笑ったりした方が負け、という至つてシンプルなゲーム。

「——じゃあちよつと、チノと悠やってみて」

「——は!?!」

「む、無理です!そんなゲーム……」
うつつらとこうなることはわかっていたが、実際になるのは色々危ない。

「そ、そんな恥ずかしいゲーム——!」

「なんでお前が動揺してんだ？」

なぜか動揺するリゼに悠がツツコミを入れる。

そして、マヤとメグが席をセツティングしてチノと悠を正面に座らせる。

「ほら、2人向き合って〜！」

「――」

「わ、私も一応見よう……」

「どっちが勝つのか楽しみだね〜」

なんだかんだ言って興味ありげなりゼと、純粹にどちらが勝つのか気になるメグ。

――勝負が始まった。

第四百四十五話 お茶会でハプニング!?

「——これ、どっちから始めるんだ？」

「わかんない」

「適当に始めればいいんじゃない？」

悠の質問に適当に答えるメグとマヤ。——この2人にも困ったもんだ。

ルール上は、一文の中に「愛してるよ」という単語が含まれていればOKとのこと。

まず、この勝負に負ける気しかない。チノが「愛してるよ」なんて言った暁には犠牲者多数の大惨事になるだろう。

つまり、さつさとチノを照れさせるか、笑わせてこの戦いを終わらせればいいのだ。

「チノ? ——そ、その、愛してるよ?」

「なんで疑問形なんだ、ちゃんとやれ」

「リゼ……後で覚えてろよ」

野次を飛ばしてくるリゼに悠が宣戦布告する。

チノは無表情を維持している。——やばい、強い。

——チノのターンだ。

「ゆ、悠さん——。いつもお店のお手伝いありがとうございます」

「——え? あ、はい! こちらこそ……?」

意識を失わないように身構えていたが、なぜか感謝の言葉を発するチノに思わず敬語になってしまう。

だが、気を緩めてしまったその瞬間。突然「愛してます」とチノがいう。

不意打ちの攻撃に悠が硬直する。

「——な、なんか、今日は暑いな!」

「り、リゼくアイス買って」

「チノちゃん——」

頬を染めるリゼ、マヤ、メグにチノもつられて頬を染める。

「うう……ダメです。自分で言うのと恥ずかしくなります……」

「悠？」

応答がない悠にリゼが「おい」と呼びかける。

「大丈夫か？」

リゼが背中をポンと押すとそのまま悠が倒れる。

「しまった！悠が壊れたぞー！」

リゼの叫び声がテラス席に響く。

お茶会終了後、ラビットハウスでのバイトが始まる。

「——」

チノと悠は、先ほどのことで気まずい。

ココアはそんな2人に気がつかず、呑気に日向ぼっこ。

「リゼ、きつきはよくも俺にあんな仕打ちを——」

「私をどうするつもりだ！」

店のほうきをリゼに向けて勝負を挑む悠にリゼが銃を向ける。

「私は銃を持っている。ほうきと銃、どっちが有利か。わかるよな？」

リゼが悠を牽制すると、ココアは「何事!？」と起き上がる。

「愛してるよゲーム？」

ココアに事情を話すと、ココアはすぐに目をキラキラにして

「私もやってみたーい！」

「じゃありぜとやってろ」

「なに!？」

悠の発言にリゼが驚く。ココアはリゼの元に行き、上目遣いで「いや?。」と聞く。

リゼは少し顔を赤くして

「い、嫌じゃないが——」

と承諾してしまった。

「リゼちゃん!」

「な、なんだ?」

「私、リゼちゃんのこと愛してるよ!」

「——うわあああああ!!!」

ココアの言葉に、リゼがものすごい勢いで店を飛び出した。

「職務放棄!」

出て行ったリゼにココアが驚いてそう言う。

「悠くん、私とも愛してるよゲームやる?」

「ココアが相手なら大丈夫だ——多分」

「——」

チノが物言いたげな視線をこちらに送ってくるが、ココアはそれに構わず始める。

「悠くん、愛してるよ!」

ココアの言葉に、思わず咳き込んでしまう。

「——俺も、愛してるよ」

「え、私の方が愛してるよ」

——やばい、これ永遠に続くやつだ。

ココアも悠も一步も譲らない。

このままでは終わらない……。必殺技を使うしかないようだ。

悠はココアの耳元で

「ココア、愛してるよ」

とつぶやくと、ココアは「ひゃっ!!」と跳ね上がる。

「み、耳元はダメだよ!」

「反則じゃないだろ。なあチノ?——チノ?」

チノの方を向くと、チノがボーツとこちらをみている。

「チノちゃん!お姉ちゃんが世界で一番チノちゃんを愛してるよ」

!!」

そう言って抱きつくココアに、チノは「突然やめてください」と払いのける。

しばらくしてリゼが戻ってきた。

「はあ……はあ……思わず飛び出してしまった……」

「な？このゲーム本当に危ないからもうやめようぜ」

悠の言葉にリゼが「ああ……」と頷く。

「開始数秒でやられるとはなく。俺はココアと5分は勝負できたぞ」

悠が自慢げにそう言うと、リゼは「なんだと!？」と驚く。

「お前——あんなにまっすぐ『愛してるよ!』って言われてよく平然としてられるな——」

「チノの『愛してるよ』を聞いた後だとなんてことないぞ」

そして悠は「あっ」と何かを思いついて——。

「リゼ、愛してるよ」

「突然ゲームを始めるな——!!」

「やっぱり、リゼって耐性ないんだな」

「うるさい——」

リゼが悠にCCCを決める。

「——恥ずかしかった……」

チノのつぶやきは誰にも届かない。

第四百四十六話 カラオケにて

どうやら、この木組みの家と石畳の街にも本格的な「カラオケ」がやってきたらしい。

「——カラオケってなんですか?」

チノの質問に悠が「カラオケ」について説明すると、チノは「そんなものがあるんですか」と驚く。

——本当にこの街、現代だよな?

「私は昔に——うわああああっ!!」

突然頭を抱えて地面に転がるリゼに悠が「どうした!?!」となだめる。

「む、昔のことを、思い出した……。あの頃はやんちゃだった……」

それだけ言つてリゼは気を失った。——何があつたんだ。

「私、やってみたーい!」

「じゃあ、今度の休みみんなで行くか。千夜とシャロも誘つて」

行つてみたいとはしゃぐココアに悠がそういうと、ココアは早速千夜とシャロにメールする。

そして、当日を迎えた。

朝、ラビットハウスに集合した一同は期待と不安で胸を膨らませている。

「演歌しか歌えないんだけど——大丈夫かしら」

「この前覚えた怪盗ラパンのテーマソングしか——」

「私、上手く歌える自信ないです……」

千夜、シャロ、チノは不安そうだ。

その一方、ココアは先ほどから「早く行こー!」と乗り気。

「——リゼ、大丈夫か?」

「大丈夫だ。もう同じ過ちは犯さないさ」

「——本当に何があつたんだよ」

覚悟を決めた表情をするリゼに悠が困惑する。

カラオケ店に到着。

「いえ〜い！みんな乗ってるー!?」

「アイドルの登場だよ〜!」

シャロのテンションがおかしい。さてはココア、シャロにカフェインを盛ったな。

「へーい！みんなー！今日は私と遊んでくれてありがとうー!!」

シャロはそう言うと、歌を歌い始める。——かなり上手だ。

だが、歌が終わると——。

「はあ……はあ……。私引退します!!探さないでくださあああい!!」

「カフェインが切れた!」

シャロはカフェインが切れて正気に戻ったのか、恥ずかしさのあまり部屋から飛び出す。

シャロが退場した後、今度はココアと千夜が出てくる。

「よーし！私たちも歌うよー!!」

「合点承知よー!」

カフェインを摂取してハイテンションになったシャロを除いて、何気に一番盛り上がっている2人だ。

「——チノは歌わないのか?」

「私はいいです」

「なんでよー！チノちゃんも歌おうよー!」

遠慮するチノをココアが引っ張る。

そしてココアと歌い始める。

「コーヒー淹れないとーうさぎに化けて出るよ、化けうさぎ〜」

「誰が化けうさぎじゃ!!」

思わず歌詞にツツコミを入れるティッピー。——実際化けうさぎだろう。とツツコミたくなるが、グツと堪える。ココアは

「腹話術を間に挟んでくるなんて、ノリノリだね〜！負けてられない

よ——」

とさらに盛り上がる。

「リゼ、昔カラオケにきたことあるんだよな？」

「あ、ああ——」

（半ば強引に）チノと踊りながらはしゃぐココアたちを置いて、悠はリゼに元へ向かう。

「誰と行ったんだ？——あのおっかない父親とか？」

「うっ……こういう時だけ鋭いんだな……」

リゼはジュースを一気飲みしてから長く息を吐くと、悠に過去のことを打ち明ける。

「——あの頃の私はやんちゃだった。恋愛ソングを歌うなんて!!!」

「別に普通のことじゃね?」

どんな深刻なトラウマかと思いきや、案外普通のことだったので落胆する。

「お、おかしいだろ——私が恋愛ソングなんて——」

「そうか? さつきも言ったけど、別に普通だろ」

「私はそういう柄じゃないからなく。ココアやシャロみたいだったら似合うかもしれないけど——」

「似合ってるかどうかは歌ってみないと審査できないよな?」

悠はニヤリと笑って、持っていたタブレットをリゼに見せる。

「勝手にセツトするなあ!!!」

リゼの叫びはココアたちの歌声に消されて誰にも届かない。

第四百四十七話 シャロと密会

基本的に、ココアやチノが学校に行っている間バイトをすることが多い悠は、午後が休みになっていることが多い。

今日も例外ではなく、午後は暇な悠はフルールに遊びに来ていた。

「あら悠。いらっしやい。一人でここに来るなんて珍しいわね」

「暇なんだよ。オススメのハーブティーとロールケーキを頼む」

悠が席について注文をすませると、シャロはわかったと店の奥へ向かう。

「——ここは相変わらず繁盛してるな。甘兎庵もまあまあ繁盛してるし、ラビットハウスだけ取り残された気分だ」

悠のつぶやきは誰にも届かない。

しばらくして、シャロがお盆を持ってこちらにやってきた。

「はい、どうぞ」

「ありがとう」

「じゃあ、私はこれでバイト終わりだから」

「なんだ、そうだったのか？ だったらちよつと付き合ってくれよ」

「仕方ないわね」

シャロはもう一度店の奥へ戻ると、今度はいつものいかがわしい制服ではなく、学校の制服に着替えてから出てきた。

「シャロは、最近どうなんだ？」

「何が？」

「リゼとの関係だよ」

「い、いきなりなんでリゼ先輩の話になるのよ！」

シャロは動揺しながらも、「そうね——」としばらく考えて言う。

「学校ではあまり話してないわ。学年も違うし」

「そうか。つまんねえな」

「つまんないって、あんたねえ……」

呆れる悠に、シヤロは「あんたの方こそどうなのよ！」と反論する。「どうって言われてもねえ——わざわざ発表するようなことはないぞ」

「ふっ、つまんないわね」

「さっきの仕返しか!？」

シヤロと悠が笑う。そしてそのまま会話は学校の話になり——。

「——今の学校、後悔してるのか？」

「——せめてリゼ先輩と同じ学年だったら……」

「確か、特待生で学費免除って言ってたな。——あの学校に進学した理由はそれか？」

「そうよ。初めは千夜たちと同じ学校に行くつもりだったんだけど……やっぱり学費免除は大きくて」

「周りはお嬢様だらけで気を使ったりすることも多いだろ？よくそんな環境でやってられるな」

「今はもう慣れたわよ。——でも、たまに『千夜たちと同じ学校だったら、どんな生活してたんだろう』って考えちゃうことはあるわね」

「シヤロ——」

切ないシヤロの一言に、悠が思わず黙り込んでしまう。

「私のことより、あんたはチノちゃんの進路を気にした方がいいわよ」
暗くなってしまった空気を明るくしようとシヤロが話題を変える。

「なに!?——なんでチノの進路先？」

悠が驚いて聞き返すと、シヤロは

『『高1クライシス』って知ってる？中学生から高校生になる時、精神的に病みやすいの』

「シヤロはやけコーヒー巡りでもして乗り越えたのか？」

「なんでわかったの!？」

悠の発言に今度はシヤロが驚く。——大正解だったようだ。

「——チマメ隊が解散してチノが孤立したら——想像するだけで病みそうだ」

「なんであんたが病むのよ！」

「いや、ココアと千夜もいるし、ワンチャンなんとかなる」

「保護者か！」

高校でのチノを心配する悠にシャロのツツコミは絶えない。

「はあ……リゼは軍学校——じゃなくて大学に進学するし、色々変わっちゃうな」

「そうね——はあ、学校でリゼ先輩と会えないなんて……」

「大丈夫だ。学校以外でもこうして会えるだろ」

「悠——たまにはいいこと言うじゃない——」

「ん？褒められてる？」

シャロと別れた後、ラビットハウスに戻る。

「あつ、お帰りなさい……」

「ただいま。ココアはまた日向ぼっこか」

「困ったものです」

チノはやれやれと心地よさそうに眠るココアに呆れた。

第四百四十八話 ココアとチノと里恵と

今日は休日だ。

ココアの誘いで、街へ出かけることになった。

「この街、本当にきれいだよね」

「そうですね」

ココアとチノが前を歩く。その後ろを悠と里恵がついていく。

「あれって、リゼちゃんじゃない？」

ココアが指差す先には、服を選んでいるリゼの姿が見える。

「ああ、確かにリゼだな」

「お洋服を選んでは……」

「私たちはあまり着ない系統の服ですね」

里恵とチノもリゼに気がつく。

服を選ぶりゼの手元を見ると、ミリタリー系の服。

——チヨイスがいかにもリゼらしい。

「ぐぬぬ……」

リゼは何やら迷っているようだった。——何に迷ってるのかは知らないが、深刻な顔。

「なんかリゼちゃんが葛藤してるよ！」

「乙女心は複雑みたいです。そつとしておきましょう」

ココアとチノがスルーしてリゼの後ろを通ると、悠と里恵もそれに合わせてスルーする。

「悠さん、ちよつとお願いが……」

「なんだ？」

チノがこちらに振り向く。

「少し付き合ってもらえませんか」

チノに連れて行かれたのはゲームセンターだ。

前にここでチノと激しいバトルを繰り広げたことがある。

「UFOキャッチャーなんですけど、その……調子が悪くて。やり方を教えてもらってもいいですか」

「ああ、いいよ」

「悠くん、UFOキャッチャー得意なの？」

「まあ人並みにはできるぞ」

ココアが意外そうに尋ねると、「私もやるー！」と便乗した。

「チノちゃん！」

「はい……？」

先ほどから失敗を繰り返すチノに、ココアが後ろから抱きつく。
「私のパワーを分けてあげるー！」

——この状況、どこかで見たことがある。

——しばらくして、チノが欲しがっていたぬいぐるみが取れた。

「納得いきません」

「このシチュエーションどこかで……」

不満げなチノの顔に悠がつぶやく。

「里恵は何か欲しいものあるのか？」

「んー、あっ、お兄ちゃんとチノちゃんのラブラブなプリクラが欲しい」

「なんて恐ろしい妹だ……」

「なっ……それはご遠慮ください」

チノが慌てて里恵の要求を却下すると、里恵は「残念だなく」と大げさに落ち込む。

この後、ココアと里恵に半ば強引にプリクラを撮影させられた。

チノのお目当てだったぬいぐるみは取れたが、チノは少し不満そう
だ。

無理もない、自分の実力というよりは、「ココアのパワー」によって取れたものだ。操作もほとんどココアが行なった。

「——な、なあ、そんなに落ち込むなよ」

「ココアさんのせいです」

「ココアー!!」

「なんで私怒られてるの!?!」

ゲームセンターからの帰り道。そんな会話をしながら歩いていると、リゼとすれ違った。

「リゼさん?」

「はい!」

すれ違ったりリゼにチノが名前を呼ぶ。

——が、リゼの様子がおかしい。先ほどとは髪型も服装も異なる。いつものリゼとは違い、「お淑やかで優雅なお嬢様」感が溢れている。

——こんなこと本人の前で言ったらどうなるか考えただけで恐ろしいが。

「人違いでした。すいません」

「えっ?」

あまりの変化にチノもリゼがりゼだと判別できないようで、人違いだと謝る。

「さつきとは髪型も服装も違うもんね」

ココアがそういうと、リゼの顔が引き攣る。

——「見られてたのか」と焦ったか。

「でも、リゼって呼んだら反応しただろ」

悠がそういうと、リゼは持っていたカバンで顔を隠して、

「ま、間違えました——私、『ロゼ』という名前なので——」
とごまかす。

「驚きました……。ロゼさんにそっくりな人がうちの喫茶店で働いて

いるんです」

チノがそういうと、またリゼの顔がわずかに引き攣る。

「ほ、本当？それは是非、行ってみたいわ……」

『ラビットハウス』というお店です。お待ちしています」

「は、はい！いつか必ず——じゃ！」

リゼはそれだけいうと、去っていった。

「いつか必ずって……さっそく明日のバイトで店来るだろ……」

「え？悠くん、何か言った？」

「なんでもない！」

——ココアたちの鈍さに呆れる悠だった。

『カットモデルを頼まれたのはまだしも、買った服をすぐ着たくなるなんて……』

とか考えてそうな顔だった。

ティツピーの方を見ると、ティツピーもロゼの正体に気が付いたのか、呆れた顔をしている。

「私、人見知りするんですが、今の人とはすぐに話せました」

「チノちゃん、すごい！」

「チノちゃん！おめでとー！」

褒めるココアと里恵に、チノは

「——これって、もしかしてココアさんの影響!？」

と騒ぐが、悠とティツピーは

「「やれやれ……」」

と呆れるのだった。

第四百四十九話 ポツキーゲーム（前編）

ラビットハウスでの仕事は暇だ。

——客がいないのだ。客がいないとやることもない。

チノの課題を手伝ったり、ココアと日向ぼっこしたりと時間を潰すのが日課になっている。

——だが、この日はチノの課題もない。

「——」

チノ、リゼ、悠の3人はただ無言でカウンター席に座っている。

ココアはすでに夢の中だ。

「——暇だな」

「はい」

「そうだな……」

悠の発言にチノとリゼが反応する。2人とも眠そうだ。

「——あ、そうだ」

悠は何かを思い出したかのように、ダイニングの方へ向かう。

——しばらくして悠がホールに戻ってくると、手にはポツキーを持っていた。

「あつ、それは私が今日のおやつに買ったものです。食べないでください」

「いや、俺が食べるんじゃない。お前が食べるんだよ」

「——えっ？でもまだ仕事中ですよ」

悠はポツキーの袋を開けると、中から一本取り出す。

「はい、ちよつとこれ啜えてみて」

「——何を企んでるんですか？」

「悠——またチノによからぬことを……」

チノとリゼは警戒しているようだが、悠は「なに、ちよつとした暇

つぶしだよ」とチノの目の前でポツキーを振る。

「——しょうがない悠さんですね」

チノは悠が持っていたポツキーを口に啜える。

「このまま食べたらダメなんですか？」

「そのまま、しばらく待ってて」

「——」

チノはポツキーの先端を啜えたままはてなマークを浮かべる。

悠がチノの啜えたポツキーのもう片方から啜えようと、すぐに困惑した表情から驚きの表情に変わる。

「——な、何して……」

「ポツキーゲームしようぜ」

リゼは持っていたお盆で悠を頭を殴ると、息を荒くして

「お、お前というやつは——！」

「なんだよりリゼ、知ってたのか？」

「ま、まあ名前くらいは——」

「な、何するんですか」

チノがポツキーを折った。

「あー、折っちゃダメだよ」

悠はポツキーゲームの説明をすると、チノは顔を赤くして

「そんな——最後はどうなるんですか」

「やってみればわかるんじゃない？」

悠がにやけた顔でそういうと、リゼは悠の肩を掴み、

「悠！チノをどうするつもりだ！」

「なんだ？リゼもやりたくなつたのか？」

「そういう意味じゃない!!」

「ほら、リゼも一本啜えろよ」

「ぐっ……私が勝つたらチノに手を出さないと誓うか？」

「お前が俺に勝てると思ってるの？——俺が勝つたらチノはもらう

ぞ」

ポツキーを受け取ってやる気満々なリゼに悠が煽る。

——正直、負ける気がしない。

リゼは表向きは堂々としているが、内心は乙女だ。

ポツキーが残りわずかになった途端、決着はつくだろう。

リゼと悠がポツキーを啜える。

「——いざ、やるとなると緊張するな」

「ほら、始めるぞ」

緊張して防戦一方のリゼに、悠は攻撃を仕掛ける。

「悠さんは誰とでもそういうことができるんですね」

「誤解のある言い方だな、お前とポツキーゲームをやるために戦ってるんだぞ」

「わ、私、やるなんて一言も——」

終盤戦に突入した。リゼはあと少しでポツキーがなくなるというところで、重大なことに気がつく。

「こ、これ、最後は——うわあああ!!」

リゼが顔を真っ赤にしてポツキーを折る。悠の見込み通り、残りわずかというところでリゼがポツキーを折った。

リゼの叫び声を聞いてココアが起き上がる。

「何事!？」

「ココア! 助けてくれー!!」

「リゼちゃん!? よ、よくわからないけど、勝負だよ!」

「お前……なんの勝負かわかってないのに宣戦布告してもいいの? ありがとう?」

悠がポツキーをココアに差し出すと、ココアは「くれるの? ありがとう——」と言ってそのまま食べてしまう。

「ダメだこりゃ——」

「ココア、実は——」

悠が呆れると、リゼがポツキーゲームの説明をする。

ココアはリゼの説明を聞き終わっても、

「おもしろそー！勝負だよ悠くん！」

と再び戦いを挑む。

ココアと悠の戦いが始まった。

——正直、負ける気しかない。

なぜなら、リゼとは違ってココアはこういうことに無抵抗だからだ。

今でも満面の笑みを浮かべてポツキーを啜えている。

「——じゃ、じゃあ行くぞ……」

悠が反対側からポツキーを啜える。

ココアは終始「おいしいねー」と言いながらポツキーを食べる。

今度の悠は、先ほどのリゼと同じ立場だ。防戦一方で攻撃できない。

いや、攻撃する暇もなくココアがあと数センチというところに接近してくる。

「な、なあココア。恥ずかしくないのか？」

「ん？ 恥ずかしいけど、おいしいから——」

「うそだろお前——」

なんで恥ずかしさよりおいしさが勝つのか理解に苦しむ。

そのままゼロ距離射撃を食らった。

第百五十話 ポツキーゲーム（後編）

「悠さんは誰とでも気軽にキスできるんですね」

「ひでえ誤解だ！」

「悠、結婚する人としかそういうことはしちやいけないんだぞ」

「リゼ——」

「リゼさん——」

リゼの発言に、チノと悠がハモる。

——なんてピユアなんだ。

当のココアの方を見ると、何事もなかったかのようにポツキーを食べている。

——なんで気にしてないんだ。

「さて、敵が全滅したところで本題だ。ココア、ポツキーを」

悠がココアに手を差し伸べると、ココアは「はいどうぞ〜！」とポツキーを一本乗せる。

「さあチノ！俺と勝負だ！」

「——私はいいです」

「なんだよ、照れてんの？」

「——」

「チノは照れ屋だなあ……」

「——」

「ココア、チノが相手してくれないから、もう一回ポツキーゲームしようぜ」

遠慮するチノを散々煽ったが、沈黙を貫く。

悠はココアにもう一回やろうと戦いを挑む。

ココアは「よーし！負けないうー！」と言いかけたが、チノがそれを遮る。

「し、仕方ない悠さんですね。一回だけですよ……」

こうしてチノと悠の勝負が始まった。

「——近いです」

「——うん」

思わず悠も黙ってしまおう。

「悠の雰囲気はさつきと違うような——」

「悠くんの弱点はチノちゃんかあ〜……」

リゼとココアが野次を飛ばしてくるが、無視してゲームを始める。

「——」

「——」

2人とも、言葉を発せない。それほど緊張しているのである。

だが、あと少してポツキーがなくなる——というところでココアが

「2人同時にもふもふ〜!」

と間に入ってくる。

その瞬間、ポツキーの感触がなくなり、柔らかい感触が伝わってくる。

「おいココア、悠もチノも瀕死だぞ」

「えーっ!?!ごめん!もふもふしすぎた!?!」

「——違うと思う……」

ポツキーゲームの後遺症が残った。

チノの方を見ることができない。

「——空気が重いな」

リゼが思わずつぶやく。

確かにその通りだ。悠は場の空気を緩めようと、ココアにポツキーを渡す。

「次はココアVSチノだ」

悠の発言に、チノは「また私!?!」と巻き込まれたことに驚く。ココアはノリノリだ。

「よーし!チノちゃんだからって手加減はしないからねー!」

こうしてココアとチノの戦いが始まる。

「えへへ、行くよー」

「ココアさん、やめてください」

「デレデレな2人に、リゼは

「まんざらでもなさそうだな」

とつぶやく。

「ほらほら〜チノちゃん、ポツキー折らないとチューしちゃうよ〜?」

「ココアさんが折ればいいじゃないですか」

「私はチノちゃんとチューしたいから折らないよー」

「へ、変なこと言わないでください!」

チノがポツキーを折ってしまった。——ココアの勝ちだ。

「ココア——本当にお前強いな」

「私がラビットハウスの王者だよーっ」

「はあ……」

「なんだ、チノ。悔しそうだな。ココアと『チュー』したかったのか?」

ため息をつくチノに、悠がそう軽口を叩くと、チノはわずかに頬を染めて「ち、違います!」と否定した。

「さて、いい具合に時間も潰れたし、倉庫の点検でもするか」

「ああ、よろしく」

リゼに見送られ、倉庫の番人（自称）である悠は在庫の確認に倉庫へ入る。

第百五十一話 倉庫で……

暑い――。

当然といえば当然だが、倉庫には冷房がない。秋に差し掛かっているとはいえ、まだ昼間は気温が高い。倉庫はサウナのような状態になっていた。

「えーと、昨日入ったのがこれで――」

暑さに耐えつつ在庫を確認する。倉庫の扉を開いて、店の涼しい空気を取り入れていると、チノが顔を覗かせた。

「――あの、大丈夫ですか？」

「大丈夫だ。心配するな」

「――かなり暑いですね」

「扉をあけていれば涼しい風が入ってくるぞ」

「――あ、ちよつと待っててください」

チノはそう言つて顔を引つ込めた。

チノと入れ替わりでココアが顔を覗かせる。

「悠くん、元気かなく？お姉ちゃんが遊びに来たよ」

「お前はホールで働け」

「あれ!? 歓迎されてない!？」

冷たい悠の態度にココアが落胆するが、それでもめげずに絡んでくる。

「そんなツンツンしないですよ。一緒に遊ぼう」

「さつきポツキーゲームして遊んだら」

「えー……お客さん少なくて暇だよー……」

「――じゃあ少し手伝ってもらおうかな」

悠がそういうと、ココアは「お姉ちゃんに任せなさい」と袖をまくった。

「あつ、見てみてー!」

早速、ココアはダンボールに入っている雑貨に目を向ける。

「バレーボールだよー。懐かしいねー」

前に河原でバレーボールした記憶が蘇る。

「——ココアさん、何してるんですか」

扉の方からチノの声がした。手にはアイスココアを乗せたお盆を持っていて。

「チノちゃん！見てみて、バレーボール見つけた！」

「仕事してください」

チノの無慈悲な指示にココアが「チノちゃんも冷たい！」と目をぐへにさせてツツコミを入れる。

チノはココアをホールに追返し、悠にアイスココアを渡そうと倉庫に入る。

「暑いので、よかつたらどうぞ」

「ああ、ありがとう」

チノが、ココアが置き去りにしたバレーボールやダンボールに足を引っかけ転びそうになると、悠がそれを支える。

「あっ……」

チノが持っていたアイスココアが悠にかかる。

「す、すみません……」

「ココアめ……」

チノは慌ててハンカチを取り出して悠にかかったアイスココアを拭く。

悠はそれを払いのけると、チノに言う。

「着替えればいい話だろ。それに少しくらい濡れてても、部屋暑いし大丈夫だ——」

「ですが……」

「いいって！チノのハンカチまで汚れるぞ！」

「暑いとはいえ、濡れたままではダメですよ。着替えてください」

チノが迫ってくると、今度は悠がバレーボールに足を取られて壁に倒れる。

「ちよ、近いって!」

「はっ!し、失礼しました——」

迫ってくるチノに悠がそういうと、チノは後ろに下がる。

——またバレーボールに足を取られてこちらに倒れてくる。

「——大丈夫か?」

「あ、ありがとうございます——もう、しょうがないココアさんですね」

悠にのしかかるように倒れたチノは、そのまま悠の上着に手をかける。

「この上着はクリーニングに出しましょうか」

「顔が近い!死ぬー!!」

「暴れないでください。さっきもポツキーゲームで——な、なんでもありません!」

騒ぎを聞きつけて今度はリゼがやってくる。——嫌な予感。

倉庫でドタバタと何やら騒がしい。

「ちよつと、みてくる」

「行つてらっしやーい!」

リゼはココアにそう告げて、倉庫の中へ足を踏み入れると、チノが悠に這い寄り、上着に手をかけている。そして悠の口に手を当てている。

「静かにしてください——あつ」

チノがリゼの視線に気がつくのと、慌てて弁明する。

「ち、ちが——これはその——」

「き、気にするな。できれば仕事巾やない時にそういうことをしてほしいが——せめて扉ぐらいは閉めろよ」

リゼがそつと扉を閉めると、すぐにチノがまた扉を開ける。

「違います!悠さんの上着を汚してしまったので——」

「な、なんだ。私はてつきり——」

顔を赤らめるリゼに、上着を脱ぎつつ悠が煽る。

「何を想像してたんだ、変態め」

「うるさーい!! っていうか私は変態じゃないぞ!!」

リゼの怒鳴り声が倉庫に響いた。

第百五十二話 一人っ子なりゼ

「じゃあねチノちゃん——私、チノちゃんとの思い出、絶対に忘れな
い」

「ココアさん——」

「ごめんね、チノちゃん。私——」

「いいんです。気にしないでください」

「チノちゃん——」

「ココアさん——」

「なんなんだ、この茶番」

ココアがチノと手を繋いで別れを告げる。

そう、あれは昨日のことだった。

ホールではチノがコーヒーを淹れ、ココアが接客。

倉庫ではリゼと悠が在庫の確認や整理を行っている。いつもの光景だ。

「はあ……」

リゼのため息が倉庫に響く。

「どうした」

悠が事情を尋ねると、リゼは寂しそうな、細々とした声で言う。

「悠もココアも、いいよな……」

「はあ？どうしたんだよ、いきなり——」

「兄弟がいるっていいなと思ってき——」

「そういえばリゼは一人っ子か」

「ああ、だからその——寂しいなって」

「お前も寂しいって感情あったのか!?!」

悠が驚くと、リゼは頬を赤くして

「お、お前は私をなんだと思ってるんだ!」

とつつこむ。

「一人っ子って、どんな感じなんだろう」

悠がリゼを見てそう言うと、リゼは

「兄弟がいるって、どんな感じなんだろう」と返す。

「あ、そうだ!」

「ん?」

悠が何かを思いついたように椅子の代わりに使っている木箱から立ち上がると、ココアの方に向かう。

「ココア!リゼと『姉妹ごっこ』するんだ!」

「へえっ!?!」

ココアが驚きの声を上げる。

「ど、どうしたの?」

「リゼが『今日はココアと一晩過ごしたいな……』って悩んでるんだ」

「そ、それって——」

「人の悩みを捏造するなあ!」

倉庫の方からリゼの怒鳴り声が聞こえる。

「そっかくりゼちゃん、一人っ子だもんね!」

「ああ——」

リゼがココアに事情を説明すると、以前の「カップルごっこ」のように、今度は「姉妹ごっこ」をやることになった。

「カップルになったり、姉妹になったり、忙しいですね」

チノがごもつともなツツコミを入れる。

姉妹ごっこ——ペアは一人っ子のリゼと、兄妹がいるココア、そして兄がいる里恵。そして一人っ子のチノと妹がいる悠になった。

「私、ココア、里恵のチームとチノ、悠のチームか」

「そう!私がお姉ちゃんで、リゼちゃんと里恵ちゃんが妹だよ!」

「まで、私ココアより年上だぞ!?!」

「年齢的には、リゼがお姉ちゃんで、ココアと里恵が妹だろ……」

悠の発言にココア以外が頷く。

こうして、3日間に及ぶ「姉妹ごっこ」が始まり、今日からココアと里恵はリゼの家に泊まることになった。

「チノちゃん——私やっぱり——」

「ココアさん……」

「いいから早く行け。遅れるぞ」

しみじみと感傷に浸るココアを追い出す。

「お兄ちゃん——また3日後」

「里恵く!!元気でなく!寂しくなったらいつでも電話してくれよ!」

「こつちも重症です」

チノがやれやれと呆れる。

「さて、私たちは朝ごはんでも作りましょうか」

「そうだな」

ココアと里恵の出発を見送り、チノと悠はダイニングで向かった。

く姉妹ごっこ、初日の朝(リゼ宅)く

「リゼちゃん!来たよー!」

「ありがとう、私のために——」

「いいのいいの、私もリゼちゃんや里恵ちゃんともっと遊びたいし」

「そうそう!」

「2人とも——。よーし!まずは射撃場で射撃の訓練だ!」

「いえっさー!!」

「——あれ?姉妹ごっこって聞いてたんだけど……サバイバル合宿だったっけ……」

里恵の困惑した声は、ココアとリゼには届かない。

第百五十三話 姉妹ごっこ（一日目）

くラビットハウスく

「なあチノ、俺のこと『お兄ちゃん』って呼んでくれてもいいんだぞ」
「呼びません。ココアさんみたいなこと言わないでください」

「えー？前に酔ったときは呼んでくれたのに？」

「あ、あれは演技ですから！」

「そうか——残念だなく」

「——ほ、ほら、早くこのお皿持って行ってください！」

「へいへい」

くリゼ宅く

「リゼちゃん、お腹すいたから朝ごはんつくろー？」

「そういえばまだ食べてなかった。私としたことが——」

リゼが「よし、妹たちのために腕に縊をかけよう！」とキッチンの方へ向かう。

「ねえココアちゃん？」

「なあに？」

「リゼ『ちゃん』じゃなくて、リゼ『お姉ちゃん』って呼ぶべきかな？」

「そっか——そうだよね」

「ココアちゃんも、ココア『お姉ちゃん』って呼ばないとね」

里恵がそういうと、ココアは目を輝かせて「もう一回言っつー！」とねだる。

「さあ、できたぞー！」

「気合い入れすぎだよー!!」

リゼが大きなテーブルに豪華な和食を並べる。

「お嬢——これでは『姉妹』ではなく『お客様』では——」

思わず使用人もツツコミを入れる。確かに、これはおもてなし感がある。

「だ、だって——。こういうの初めてで——なに作ればいいのかかわからないし——」

「大丈夫だよ〜一緒に食べよ？リゼお姉ちゃん」

「そうそう、冷める前に食べよ！リゼお姉ちゃん」

「わ、私ちよつと忘れ物取りに行ってくるー!!!」

リゼが顔を真っ赤にして部屋を飛び出して行った。

〜ラビットハウス〜

「暇です」

「——だな」

朝食を食べ終わり、ラビットハウスを切り盛りするチノと悠。

「どうしたらもっとお客さん来てくれるんでしょう」

「そうだな——もう少し親しみやすい雰囲気を出してみるとかどうだ？」

「親しみやすい——ですか。では、ぬいぐるみを置いてみましょう」

チノがもふもふしたぬいぐるみを大量に持ってくる。

「もふもふです」

「もう店名を『ラビットハウス』から『もふもふ喫茶』に変えようぜ」

「もふもふ喫茶——！」

チノが目を輝かせるが、ティツピーは「ダメじゃ」と却下。

「だが、少しホコリが舞うな——」

「やっぱりぬいぐるみはやめましょう」

チノがぬいぐるみを抱きかかえる。

「はあ……俺がココアだったらもふもふくってできるんだけどな——」

ツツコミ役のリゼがいないためか、誰もこの問題発言に反応しない。

「悠さんも、もふもふしていいんですよ」

「えっ？」

「な、なんですか——私、何か変なこと言いました？」

「あ、ぬいぐるみ方か。ビックリした——」

悠がそういうと、チノは気がついたのか少し頬を赤くして——。

「な、何を期待してたんですか！」

「いや、ひよつとしたらチノごともふもふできるんじゃないかと思っ

て——」

「お触り禁止です」

「なんか、メイド喫茶みたいなルール追加されたな」

悠がそう呟くと、チノが少し笑った。

〜リゼ宅〜

「リゼお姉ちゃんはやめてくれ——」

「なんで〜？ 姉妹ごっこなの？」

「は、恥ずかしいんだよ！」

「え〜照れないでよリゼお姉ちゃ〜ん」

「やめろお!!!」

「——雨、降ってきたね」

「ああ、台風が近づいてきてるみたいだからなく」

窓の外を見ると、分厚い雲から雨が降ってきている。

風が吹いているが、まだ雨は強くない。

「リゼちゃん、何してるの？」

「課題だよ。この連休が明けたら提出なんだ」

「手伝ってあげる〜！」

「い、いって！ ココアたちはまだ習ってない範囲だぞ」

「数学なら大丈夫だよ〜」

くラビットハウス」

気がつけば夜になっていた。

「今日もお店のお手伝いありがとうございました」

「お兄ちゃんなんだから、そんな気を使わなくていいんだぞ」

「ですが——」

順調に距離を縮めているリゼたちとは違い、チノはまだ心を開いていない様子だ。

「——雨、強くなってきましたね」

「だな。さて、今日放送される予定のホラー映画でも見るか」

「待ってください、まさか私の部屋で見るともりじゃないですよ？」

「——俺の部屋にテレビないぞ？」

「むう……じゃあ今日は私が悠さんの部屋で寝ます！」

「怪談話が上手になりたいのにホラー映画見れないって——」

悠がそうやってチノを煽ると、チノは「た、確かに——それは致命的です」と納得する。

「じゃあ、見るぞ」

「——」

「——チノ？」

「別に怖くなんてないです。ちよつと眠くてうとうとうとしてただけです」

わずかに震えるチノ。時間を見るといつもなら寝る時間になっていた。

「——じゃあ後は録画して寝るか。おやすみ」

「あっ……」

チノが引き留めようとするが、悠は部屋から出て行った。

「雨風が強くなってきました——ティッピーもバーにいるし——」

チノは一人布団に潜りながらそう呟く。

「悠さん、起きてますか？」

チノが部屋の扉から顔を覗かせる。

「ああ、どうした。一人だと怖くて眠れないのか？」

「違います。悠さんが怖がっていたらどうしようかなと見にきてあげただけです」

「——心配しなくても俺は大丈夫だ」

「——怖いんだったら一緒に寝てあげてもいいですよ」

「チノは素直じゃないな。仕方ないから俺が怖くて眠れないってことにしてやるよ……」

「うるさいです。早く枕を端に寄せてください」

こうして、姉妹ごっこ1日目は幕を閉じる。

第百五十四話 姉妹ごっこ（2日目）

姉妹ごっこ2日目を迎えた朝。

リゼ宅では、里恵があることに気がつき、「はっ！」と青ざめる。「どうした？」

リゼがすかさず事情を聞く。

「まさか——お兄ちゃん、チノちゃんと2人きりだからといって調子に乗って何かやらかしてるかも——」

里恵がそういうと、リゼも「あー！」と気がつく。

「しまったー！すっかりそのことに気がつかなかったぞ！確かに悠のこどだからありえるかも——」

その会話をココアが聞き、「ヴェアアアア!!チノちゃん取られるー!!」と泣き喚く。

「すでに手遅れということもありそうだが、とりあえずラビットハウスに行つて様子を確かめよう」

リゼがそういうと、ココアが

「よーしーラビットハウスに潜入だよー！」

と敬礼する。

くラビットハウスく

リゼ宅の騒動を知らず、のんびり開店の支度を始めるチノと悠。

「昨日はよく眠れたか？」

「はい」

「なんだ、てつきり怖くてよく眠れなかったとか言い出すのかと思つてたぞ」

「子供じゃないです」

「でも俺の部屋にはきたけどな」

「——早く在庫確認してください」

「はいはい、わかったよ」

顔を赤くしてそっぽ向くチノに悠が苦笑いする。

やがて、ラビットハウスが開店する。

リゼ、ココア、里恵の3人が窓の外から中を確認する。

「どう？中の様子は」

里恵がそう尋ねると、

「——いつも通りって感じだな」

「そうだね……でもチノちゃん、悠くんと楽しそうに喋ってる……」

リゼとココアが報告した。

里恵は人影に気がついて、2人に「隠れて！」と指示する。

——千夜とシャロだ。

「こんにちは〜」

「バイトがなくなったから遊びに——ってあれ？リゼ先輩は？」

「ココアちゃんもいない!？」

ラビットハウスに入ってきた千夜とシャロは、チノと悠しかいないことに驚く。

「何を言っているんだ。ココアもリゼも、この店にはいないぞ」

悠がそうやってとぼけると——

「あら、パラレルワールドかしら？」

「どういうこと!？」

と2人が慌てる。

「悠さんの冗談ですよ。今、『姉妹ごっこ』をしているので、ココアさんもリゼさんもお休みです」

チノが事情を説明すると、2人は「姉妹ごっこ——？」とハモった。

「姉妹ごっこ」について詳しく説明すると、シャロが泣き出した。

「私——リゼ先輩の妹になりたかった——」

「な、泣くなー！とりあえずこのコーヒーでも飲め」

突然泣き出すシャロに動揺した悠がコーヒーを差し出す。

「悠さん、それは逆効果かと——」

「リゼ先輩を諦めきれないわー!!」

「悪化したな」

「悪化しました」

「あらあら——」

コーヒーを飲んでハイテンションになったシャロは、どうしてもリゼの妹になりたいと店を飛び出す。

——リゼを探しに行ったようだ。

「シャロ——」

「リゼ先輩!」

「すまん。シャロの気持ちに気がつけなかった——」

「リゼ先輩……!」

こうして、シャロも姉妹ごっこに参加することになった。

「あーっ!!」

ココアがラビットハウスの中を指差す。

「どうした!」

リゼが慌てて中を覗くと、千夜がチノや悠と手を繋いで

「私たちが組めば天下だって取れるわー!」

と、どうやら千夜はチノや悠と組んで姉妹ごっこに参加したようだ。

「千夜ちゃんが取られちゃった——」

「千夜——あんなに楽しそうに——」

ココアとシャロの嫉妬の目線には気がつかず、ラビットハウスにいる3人は「おー!」と謎の掛け声をかける。

「千夜がいるなら安心だな」

「それは、どうだろう……」

リゼが安堵するが、里恵は逆に不安になってきた。

それはシャロも同じようで、

「逆に心配ね……」

と呟く。

「ということは、千夜が一番上つてことになるのか」

「そうね。気軽に『千夜お姉ちゃん』って呼んでくれていいのよ」

「千夜お姉ちゃん……早速店を手伝ってくれよ」

悠がそういうと、千夜はいつものココアがやっているように

「お姉ちゃんに任せなさいー!」

とポーズを決める。ココアより姉オーラが出ている様子に、思わず

チノも悠もツツコミを入れてしまう。

「ダメです。本当に姉オーラが出てしまってます」

「ああ、美化されてるな」

「でも、普段やらないことまでしてくれて——ありがとうございませす」

ラビットハウスの手伝いをする千夜に、チノが言うと、千夜は少し

恥ずかしがった様子で

「いいのよ。ラビットハウスごっこは一人でよくやってるから——」

「えっ……」

千夜の一言にチノと悠が困惑した。

〜リゼ宅〜

一方、リゼの家に帰宅した一行は、リゼのことを「リゼ先輩」と呼ぶシャロにココアが違和感を覚えていた。

「シャロちゃん、姉妹ごっこやってる間は『リゼ先輩』じゃなくて『リゼお姉ちゃん』って呼んだらどうかかな?」

ココアの提案に、シャロが納得する。

「確かに——それもそうね——」

「リ、リゼお姉ちゃん——今日の夕飯の買い出しはどうしま——どうする?」

「シャロ!?カフェインでもとったのか!」

突然キャラが変わったシャロに、リゼが酔ったのかと心配する。

くらビットハウスく

店での仕事が終わわり、チノの部屋で遊ぶことになった。

「おばあちゃんに連絡してお泊まりOKだったわ」

「それは良かったです」

千夜も泊まることになった。

チノ、千夜、悠の組み合わせは初めてかもしれない。

「千夜はどうして、甘兎庵のメニューを変な——いや個性的な名前にしてるんだ?」

「今、変な名前って言おうとしましたよね?」

「うるさいぞ」

悠が尋ねると、チノが小声でツツコミを入れてくる。千夜はニツコリと微笑んで

「できた和菓子に名前をつけることが大好きなの」

「そうだったのか。——だけどその、お客さんは混乱しないのか?」

「一回普通にやってみてはどうでしょう」

悠とチノがそう言うと、千夜は「わかったわ」と一回普通のメニュー名で接客してみることに。

チノと悠がお客役だ。

「お待たせしました。こちら、新作の桜餅です。——ダメよ!私、負けちゃう!!」

「誰に!」

チノと悠がハモる。

「リゼ宅」

「リゼお姉ちゃん」

「な、なんだ？」

そろそろ「お姉ちゃん」と呼ばれるのに慣れてきたリゼ。

「チノちゃんたちに、楽しそうな写真送ろうよ！」

「具体的には何をするんだ？」

ココアの提案に、リゼが質問する。

「まずは前髪をぱっつんにしてみよう！」

「そこの!?!」

目を輝かせてそう言うココアにシャロがつっこむ。

「お、おかしくないかな……」

「大丈夫!とつても似合ってるよー!」

ココアがそういつて撮った写真を千夜の携帯へ送信した。

そして、数分後。

「千夜ちゃんから返信だ〜!」

「どれどれ」

一同がココアの携帯に顔を覗かせる。

『みんな、とっても似合ってるわ!こっちは悠くんを囲む会よ!』

千夜からのメールには、その一文と悠の肩に頭を乗せて眠るチノと千夜に抱きつかれて顔を赤くする悠の写真が添えられていた。

「ココ大丈夫じゃなかった!!」

思わず全員ハモってしまった。

第百五十五話 姉妹ごっこ(3日目)(重要なお知らせ
有)

翌朝。

リゼ宅では、それぞれ帰りの支度をしていた。

「その——ありがとう。私のために——」

「いいのいいの」

「またいつでも呼んでよ」

「ココアと里恵はそういつてラビットハウスへの帰路につく。

「また後で向かうよ!」

「は〜い!」

そして、シャロも出てくる。

「リゼお姉ちゃん——いえ、もうリゼ先輩って呼んだ方がいいですね」

「別に、どっちでもいいぞ」

真面目に名前を呼び分けるシャロにリゼが苦笑いする。

「お世話になりました。お泊まり、楽しかったです」

「ああ。またいつでも来い」

「それじゃあ、私バイトがありますから」

そういつて、シャロもリゼ宅を後にした。

〜ラビットハウス〜

「ゆ、悠さん——暑いです……」

「チノ——さすがに暑いぞ……」

「あらあら、寝言まで息ぴったりね。写真撮ってココアちゃんに見せてあげましょうか」

千夜がそういつて携帯を取り出すが、すぐにココアが部屋に入ってくる。

「ただいま〜!ってあれ!?!」

「あら、お帰りなさいココアちゃん!」

「ヴェアアアアア!!!」

「な、なんかこのシチュエーション、前にもみた気がする」

「毎日こうなの？羨ましいわね〜」

部屋に入ってきたココアと里恵がチノと悠をみて驚愕する。

「暑い暑いって言いながら、こんなに体を密着させて——ラブラブね」

「悠くんそこ変わってよー!!」

「なんだ、どうした……」

ココアの叫び声に悠が起き上がる。

「リゼがいたらどうなっていたことか」

今朝のことをココアに聞かされ、青ざめる悠。

「ココアさんもリゼさんも大げさです」

チノが呆れる。

「ところで、ココアちゃんたちは『姉妹ごっこ』どうだった？」

千夜が話題を変えると、ココアが「楽しかったよー」と写真を見せる。

「リゼ、まんざらでもなさそうだな」

「リゼさん、とつても嬉しそうです」

「まあ、リゼちゃん。みんなのお姉ちゃんね」

悠とチノと千夜がそう言うのと、後ろからリゼの声がした。

「私なんだったって？」

「うわああ!!」

「あら、噂をすれば——というやつね」

突然背後から声をかけられ、悠が飛び退く。

「ほら、開店の支度をするぞ」

「私も甘兎庵に戻らなくちゃ」

千夜がそういってラビットハウスから出る。

「じゃあなく千夜お姉ちゃん〜」

「また今度です。千夜お姉ちゃん」

「はい。お姉ちゃんがいなくてもいい子にしているのよ」

「ヴェアアアア!!千夜ちゃんに悠くとチノちゃんどられたー!!」

ココアの叫び声が朝のラビットハウスに響いた。

「ところで、悠。チノに手を出してないだろうな」

「なんの話だ?」

わずかに動揺する悠をリゼは見逃さなかった。

「とぼけるな。昨日千夜からメールが送られてきたぞ」

リゼはそういって、昨日千夜から送られてきたというメールを見せ
てきた。

メールには『悠くんを囲む会』と書いてある。

「え、えっと——千夜の冗談、だぞ?」

「千夜に抱きつかれて随分嬉しそうだな」

「この顔のどこがそう見える!——ん?今日はいつもと立場逆だな」

悠がそう言うと、リゼがクスクスと笑った。

第百五十六話 チノと深夜徘徊

「」
「」
夜遅く。人の気配を感じて目を薄っすら開けてみると、チノが悠の部屋にきていた。

——なんだ。まさか夜這い？

「——寝てますか？」

「あえて黙って寝たふりをしてみる。」

「寝てますよね？」

「——」
まさか、チノは悠の狸寝入りに気がついているのだろうか。

「どうしましょう……」

何やら困った様子だ。気になるが、ここはぐっと堪えて寝たふりを続ける。

「寝てるときの悠さん——ちよつと子供っぽくてかわいいです」

「チノ？」

「なっ！い、いつから起きてたんですか!？」

思わず反応してしまった。

「え、えつと……今起きたぞ？」

「今の、聞いていましたか？」

「な、なんのこと……？」

「さては聞いていましたね。忘れてください」

「それは無理かな……」

悠が苦笑いすると、チノはさらに顔を赤らめた。

「眠れないって？」

「はい……さつきココアさんとコーヒの違いを当てるゲームをしたからでしょうか」

どうやら、眠れないチノは悠が起きていないかと部屋にやってきた

ようだ。

「俺もチノが恥ずかしいこと言うから眠気吹っ飛んだな……」

「だから、さっきのは忘れてください！冗談ですから！」

悠は大きくあくびして、チノに提案する。

「よし、それなら深夜徘徊だ！」

「——深夜徘徊？」

深夜に男女2人きりで人気のなくなった街を散歩——。

そういえば、前にリゼと遭遇したことがあったな。

「この前も、暑くて眠れない時に散歩してたんだ」

「そうでしたか。ですが、こんな夜中に——誰かに見つかったら怒られないでしょうか」

「大丈夫だ。誰もいないし——」

公園に到着した。前回、リゼと遭遇した場所だ。

「あつ、ちよつとお手洗いに行つてきます」

公園にあつた公衆トイレを見てチノがそう言う。

悠は「わかった」とうなずくと、トイレの近くにあるベンチに腰をかける。

「——チノのやつ、大丈夫かな」

トイレに不審者がいたらどうしようかと心配していると——

「うわあああつ!!」

トイレからチノの悲鳴が聞こえる。

しばらくして、トイレから人影が素早く木陰に移動した。

悠は、女子トイレの前で「チノー！」と叫ぶ。——返答はない。

「あの木陰か——」

悠は気配を消して木陰に足を進める——が、突然視界が奪われた。

「だくれだつ」

お淑やかさの中に可愛さがある声だ。女性だろうか。どこことなく千夜っぽい。

「その声は——千夜か？こんな夜中に街を徘徊するようなキャラでもないか……」

声の主を考察するが、すぐに答えがわかった。

「私だ」

目に覆い被さっていた手のひらがなくなり、夜の公園が見える。

そしてこの声——リゼだ。

「リゼ、ふざけてる場合じゃないぞ、チノが——」

「ほほう。やはりか。真夜中に幼い子を連れて徘徊している男がいると言う通報は——」

「待ってください。子供じゃないです」

木陰からチノが顔を覗かせる。

数分前——。

チノが手を洗っていると、突然視界が奪われた。

「うわあああつ!!」

「静かにつ！私はだくれだつ」

「——千夜さん？」

「私だよ。チノ、こんな夜中に何してるんだ!」

「リゼさん——驚かせないでください。実は——」

チノが悠と深夜徘徊をしていることを告げると、リゼは

「あいつ……チノと深夜徘徊なんて——もし何かあったらどうするんだ」

「子供じゃないです」

「よし、ドツキリをかけよう!」

リゼがそう言うと、チノは首をかしげる。

「ドツキリですか？」

「ああ、さつき悲鳴あげただろ、それを利用して——」

「それで今にあたるわけか」

悠がやれやれと呆れていると、リゼが笑う。

「お前の動き、スパイみたいで格好良かったぞ。そんな訓練もしていたとは」

「——別に訓練はしてないけど、チノを木陰に攫った罪を償ってもらおう」

「えっ?ちよ、まて!早まるなあああ!!!」

「あつ、頭に毛虫く!」

「うわああああ!!!なんてことをー!!!」

近くの木にとまっていた毛虫をリゼの頭に乗せると、リゼは悲鳴をあげてジタバタと走り回る。

「ふっ、リゼにはこれぐらいやってやらなきやダメだな」

「やれやれです」

走り回るリゼと、「やってやったぜ」と勝ち誇る悠にチノが呆れた。

「で、リゼはなんで徘徊してるんだ?」

「その——実は家出したんだ。今夜はどこかでサバイバルしようかと思ってるさ」

リゼはそう言うのと、チノと一緒に木陰に隠したバッグを見せる。

「家出!!」

チノと悠がハモる。

「ああ——親父と喧嘩したんだ……」

リゼはそう前置きして、何があったのか語り始めた。

第百五十七話 深夜の進路相談会

「なに？進路の話で喧嘩？」

「ああ、そうなんだ——」

リゼは、そう行つて公園の自販機で売られているジュースを一本購入する。

「お前らも飲むか？」

「いや、俺はいい」

「私も大丈夫です」

「そうか」

リゼは買ったジュースを一気に飲み干す。

「親父のやつ——なにもあんな……」

「そ、そんなにひどいこと言われたのか？」

悔しそうなリゼの表情に、思わずチノと悠が困惑する。

「いったい、どんな道へ——」

チノが恐る恐る尋ねると、リゼは深く息を吐いてから——

「小学校の先生になるって言ったら、笑われたんだ。それで喧嘩して——」

「小学校の先生——小学校って、6歳の時に入学して初等教育を受けるあの小学校か？その先生になるって？」

「なぜ、念を押す!?!——そうだ！私は小学校の先生になる！」

「——」

チノと悠が顔を見合わせる。

——まだ幼い児童たちがリゼの周りを囲み、リゼのことを「リゼせんせー！」と呼ぶ、その光景を想像しているのだ。

「ぶっ」

チノと悠は吹き出る笑いを必死に堪える。

だが悠の方は抑え込むのに失敗したようだ。盛大に笑いが溢れ出る。

それを見てチノも「ぷぷぷつ」と小さく笑う。

「リゼが……ははははっ」

「おーまーえーらー!!!」

リゼが2人を追いかけて回す。

「ほらーっ！お前たちまで笑う！——やっぱり向いてないのかな」

「大丈夫だって、めっちゃ似合ってるぞ〜」

悠がニヤニヤした顔でそう言うと、リゼはまた顔を赤くして

「お前のそれは、本音なのか、あるいははからかっているのか——」

「で、今夜はサバイバルするのか？」

「ああ、とりあえず人目のつかないところで——」

「危なくないですか」

チノがそう言うと、リゼは

「大丈夫だ！親父の武器をパクってきたから！」

と、カバンから巨大な袋を取り出す。中身を聞くのも恐ろしい。

「わかったからその袋をしまえ！」

「リゼさんがよければ、今夜ラビットハウスに泊まってもらっても大丈夫ですよ」

「いいのか!?!」

「はい」

チノがそう言うと、リゼの顔が明るくなる。

「み、みんなで泊まり——」

「嬉しそうですね」

「別にそんなこと——!」

「はいはい、いつもの照れ隠しね」

「悠、この袋の中身が火をふく前に口を閉じておけよ」

「女子高生とは思えない脅迫文句だな——」

こうして、リゼの家出が幕を開ける。

「おーい、ココア！起きろー！」

下で朝食の準備をするチノと里恵を置いて、リゼと悠はココアを起す。

相変わらず、悠の呼びかけに応答はない。

「リゼ」

悠がリゼの方を向いて短く名前を呼ぶと、リゼはこちらの意図を察したように「ああ」とうなずく。

「早く起きなきゃCQCかけちゃうぞ、お姉ちゃん」

リゼが声を変えて言うと、ココアはピクツと反応して

「どんとこいつ……」

と呟く。するとリゼは、すぐにいつもの声に戻り、

「そうか。じゃあ遠慮なく」

と冷たい声で言うと、ココアが目を覚ます。

「なんでリゼちゃん!!？」

「——というわけで、昨日からうちに来てもらいました」

朝食を食べつつ、チノがココアと里恵に事情を説明する。

「そっかー！」

「家出に巻き込んですまない……」

「えっと……進路の話で喧嘩だっけ？」

「リゼのやつ、小学校の先生に——思い出しただけで——ぷぷつ」

悠がそうからかうと、リゼから「笑うなー！」と怒鳴り声が聞こえる。

「リゼちゃん、小学校の先生になるの!？」

ココアが驚きの声をあげ、里恵と顔を見合わせる。

——しばらくしてニッコリと笑みを浮かべる。

「お前たちまで——はうう……」

少し怒った様子で皿洗いを手伝うリゼに、ココアが

「大丈夫だよ！似合ってるよー！」

と慰める。

「やっぱりココアもそう思うよなー!」

「うんうん!」

後ろで謎の意気投合を見せるココアと悠に、リゼがため息。

「悠と同じで本音なのか、からかってるのか……」

「本音だよー!」

ココアが弁解する。

「——やっぱり、私が先生って怖いのかな」

「銃持ってなきや大丈夫だ」

「——鬼軍曹って呼ばれちゃうかも」

「それはそれで慕われてるのでは……?」

リゼの独り言に悠とチノがそう返す。

「よーし!ココア先生に任せなさい!私の指示通りにすれば鬼も立ち去るよー!」

「「ココア先生!」」

その場にいる全員が、ココアの唐突な発言に驚く。

「上等だ!かかってこい!」

「あれ!?先生にお願いする態度じゃない!?」

こうして、ココア先生の指導がはじまった

第百五十八話 先生になるための特殊訓練

ココア先生の授業は、ラビットハウスの開店と同時に始まった。「で、まずは何をやるんだ？」

悠がそう聞くと、ココアは窓際に立って

「まずはのんびり光合成だよ」

「なるほど、理科の実験も兼ねてるな」

「——ん？」

ココアの発言につっこむかと思いきや、ココアの指示を真面目に受け取るリゼ。

その後も——。

「そして、生徒の胃袋を掴む訓練！」

「まかない料理です」

「よかったです！」

ココアとチノがフォークを持ってリゼ特製ナポリタンの完成を待つ。

「——おかしい、これって先生になるための訓練だよな」

ラビットハウスのバイトが終わり、ココアの部屋で遊ぶことに。

「いつの間にか部屋がこんな散らかってるぞ」

悠がそういうと、ココアは「あっ！」と何か閃いたようにリゼに言う。

「小さい男の子ってよく散らかすよね」

「そうだな！掃除の訓練もしないとな！」

リゼがそう言って散らかったココアの部屋を片付け始める。

「お片づけが終わったらお昼寝〜！」

ココアは布団を敷くと、チノと中に入る。

「お昼寝〜」

リゼもそれに続いて布団に潜ろうとするが、悠が止める。

「待て待て！小学校の先生になるための訓練だよな!？」

悠がそう確認すると、リゼがようやく異変に気がつく。

勢いよくココアとチノから布団を引き剥がし、

「お前らー!!ただ怠けたいだけだろー!!」

と叫ぶ。

「ココアはただの甘えん坊な妹みただったしな……」

悠がやれやれと呆れた。

「はあ……ココア先生はダメダメでしたね。先生役は私がやります」

「おっ、やけにやる気だな」

ココアの代わりに出てきたのはチノだ。

「では、リゼさん、悠さん。私に宿題教えてください」

「それ生徒側のセリフー!!」

「お前も先生に向いてないな……」

先生役のはずが、逆に宿題を教えてくださいと要求するチノに、リゼと悠がツツコミを入れた。

「リゼはどうやって大学はいるんだ？推薦か？」

「ああ、一応そのつもりだ」

悠の質問にリゼが反応する。

その時、ラビットハウスに1本の電話が入る。

「もしもし」

『リゼは無事か!』

この声はリゼの父親だ。

「ええ、むしろ楽しんでますよ」

『なんだと!?!』

悠が電話している側では、ココアたちがリゼと楽しく会話していた。

「もうここから大学通っちゃいなよー!」

「そしたらリゼさん特製のナポリタン食べたい放題ですね」

「大学から帰ってきて、夜はバータイムでバイトしたりとか……」

「夢が広がるねえ〜!」

ワイワイと会話が盛り上がるにつれ、リゼの父親の声が細くなつていく。

『そんな……リゼ……』

「リゼ、どうやらラビットハウスに住むらしいですよ」

悠がそういうと、リゼの父親が慌てて

『おい!どうにかリゼを説得してくれ!』

と悲鳴をあげる。

「——善処します」

「リゼ、お前の父親が心配してたぞ」

「ふん、知ったことか」

意地を張るリゼ。これは長期化しそうだ。

「わーい!明日のテスト対策終わったよー!!」

チノの宿題を見るとい話だったが、いつの間にかココアのテスト勉強に付き合わされていた。

「褒めて褒めて〜!」

「小学生か!」

騒ぐココアに悠がツツコミを入れる。その様子を見てリゼは「ちよつと待ってる」とかばんの中からスタンプを取り出す。

そしてココアの額にスタンプを押す。

——このスタンプ、見覚えがある。

鏡を取り出して自分の額を見て、ココアが「かわいい〜!」とスタンプを絶賛。

「冗談のつもりだったんだが——そんなに気に入ったのか?」

心なしか嬉しそうなリゼだが、チノからは冷たい視線。

「小学生より子供っぽいです」

そう言って頬を膨らましながらか前髪を退けるチノ。
——心なしか羨ましがっているように見える。

その晩。

悠がお風呂から上がってココアの部屋に向かうと、ココアとチノがスタンプカードを見せてくる。

「じゃーん！見てみて！私とリゼちゃんの絆の証だよー！」

「重いな！——ん？これって——」

リゼのお手製スタンプカードだ。悠はこれを前に受け取ったことがある。

「リゼさんが来てくれた思い出です」

「さっきまで小学生より子供っぽいと言ってたのに、気に入ってんじゃん」

悠がそういうと、チノはわずかに顔を赤くして

「べ、別にそんなこと——」

とごまかす。

「ふふーん、悠くんは持ってないでしょ？」

「それ、前にもらったぞ」

悠がマラソンの時にもらったスタンプカードをココアたちに見せると——

「えーっ!!?悠くんも持ってたの!?!」

「しかも私たちよりスタンプの数が多いです！」
と驚愕した。

第百五十九話 志望理由

「でも、なんで小学校の先生なんだ？どっちかっていうと『先生』というより『教官』ってキャラだろ」

悠がリゼに理由を尋ねると、リゼは「ああ、それは——」と前置きしてから話し始めた。

「私が小学校の先生になろうと思ったのは、チマメ隊の相手をしたのがきっかけだった」

「なるほど〜！教官と先生ってちよつと似てるもんね〜！」

ココアが満面の笑みで納得する。

悠も納得しかけたが、チノの一言でようやく違和感に気がつく。

「——つまり、私たち小学生……!?!」

「——あつ、忘れてた！おい、リゼ！チノは来年から高校生だぞ！」

「忘れてたんですか！」

慌ててツツコミを入れる悠に、さらにツツコミを入れるチノ。

リゼは「す、すまん！そんなつもりは——」と容疑を否認した。

「やっと宿題終わった〜！」

ココアが両手を挙げて喜ぶ。

「溜めとくからこうなるんだぞ、ココア」

「もーお母さんみたいなこと言わないでよー」

「あれ……？このノートは——」

チノが机の下に落ちていたノートを拾う。

ココアと悠もそれに気がつき、顔を覗かせると、ノートには丁寧な字で何か書いてある。

『ココア——トマトNGだがケチャップはOK、人参とピーマンは微塵切りにすると気づかれない』

『チノ——セロリNG、人参とピーマンは微塵切りに一瞬むつととしたがOK』

『悠——納豆を出すと明らかに不快な顔をする。納豆以外はOK』

「なんだ、これは――」

ノートには、ココアたちの好きな食べ物や嫌いな食べ物に関する情報が綺麗にまとめられていた。

他にも、常連客の好みやまかないレシピまで書いてある。

「すごいです……私たちからお客さんの好みまで把握してくれてます……！」

「ちゃんと見てるんだね〜」

「リゼ……お姉ちゃん……」

感動のあまり涙が出てくる。まさかここまで真面目なやつだったとは。

ココアの宿題に付き合わされているとき、疲れが出たのか途中で眠ってしまったリゼ。

ココアが

「いつもありがとー、リゼせんせー」

とリゼの額にスタンプを押すと、リゼがガバツと起き上がった。

「あつ！『せんせー』で起きたー！」

『せんせー』というワードに敏感に反応するリゼを見てココアが大笑いすると、リゼは顔を真っ赤にして

「お前も似たようなもんだろ〜！」

とココアの肩を揺さぶる。

「リゼのやつ、ここにいた方がいい教師になりそうですよ」

『そんな！なんとか……頼む！俺の娘を返してー!!』

リゼの父親の叫びは悠以外の誰にも届かない。

「おい、一旦家に帰ってみたらどうだ？さっき電話したら、泣いて謝ってたぞ」

「なに!? 親父のやつ、泣いてまで——」

少し話を盛ったが、悲鳴はあげていた。

「やれやれじゃ……早めに娘離れしておかないと、後が大変じゃぞ」
ティツピーが呆れた様子でそういう。

「あれ? 確かチノの職場体験の時、随時甘兎庵の状況を報告させてた爺さんがいたような——」

ティツピーのブーメラン発言に、今度は悠が呆れる。

「わかったよ、一旦家に帰ってみるさ」

「ああ、そうしてくれ」

「またいつでも家出しに来てください。なんなら明日でもうちは歓迎です」

「うんうん! 私たちが家出を徹底サポートするよー!」

「家出を推奨された!」

やたらリゼの家出を歓迎するチノとココアにリゼがツツコミを入れる。

こうして、リゼの家出は一幕を閉じた。

第一百六十話 買い物と幽霊

「悠さん、いきなりですが、お使いをお願いします」

「本当にいきなりだな……。まあいいけど」

「すみません。お使いが終わったらそのまま上がっても構いませんか
ら」

「了解」

突然、チノに買い出しを頼まれた。どうやらココアの特製パンを作るのに必要な材料が切れたらしい。

だが、時間も遅い。もう日が暮れ始めている。

「じゃ、行ってくる」

「はい、お願いします」

「あ、待て悠！暗くて危ないだろう。これを持っていけ」

リゼに引き止められ、拳銃を渡される。

悠はそれをリゼに押し戻すと、

「いらねえよ！物騒だな！」

「おい、素手で戦うつもりか！」

「なんで襲われる前提なんだよ！」

全く、困ったものだ。この前は「小学校の先生になりたい」とか言っていたが、本当に大丈夫だろうか……。

「ついでにチノに土産を買っていかうかな——」

「あれ？悠じゃない。どうしたの？こんな時間に……」

「お前の方こそ、なんでいるんだ？」

スーパーでシャロと会った。どうやらシャロも買い物に来たらしい。
い。

カートに目を落とすと、「激安！」や「特売！」などと書かれた商品。

「お、お前も大変だな……」

「う、うるさいわね！ここのスーパー、この時間帯になると安くなるの

よ！この後は向こう側のスーパーでタイムセールね」

「めちやくちやりサーチしてる!?!」

徹底的に安い時間を調べているシャロに驚きを隠せない。

「悠は何を買いに来たの?」

「チノに頼まれてお使いだ。ココア特製パンの材料買いに」

「そう——暗いから帰るときは気をつけなさいよ」

「お前の方こそ暴漢に襲われ——いや、お前の場合は野良うさぎに警戒したほうがいいか」

悠がそういうと、シャロがため息とともに

「さつきもあんに噛まれて大変だったわ」

と吐き捨てた。

「じゃ、私は向こうのスーパーに行くわ。また今度ね」

「ああ、じゃあな」

シャロと別れ、ラビットハウスへ帰る。

途中、人気のない道で『それ』は起きた。

「うわっ……やば、拳銃持ってくるべきだったな……」

悠の視線の先には、白いフワフワとした何かがちらにやってくる。

「——幽霊に拳銃って効くのかな」

しょうもないことを考えていると、白い影は「ふふっ」と笑う。

「あら、本当に可愛らしい男の子ね」

「それ、普通女の子を褒める時のセリフだよな?」

幽霊(?)の発言に違和感を覚えながら、悠は聞く。

「何の用だ。金ならさつき使っちゃったぞ」

「お金なんていらぬわよく。ちよっとお話したいなって思っ」

「ナンパかよ。まあ少し話すくらいだったらいぞ」

どこことなくチノに似ている。——というか、この人、どこかで——。

「悠くん？そっか……あの話は悠くんのことだったんだね」
「どの話だ!？」

意味深な幽霊の発言に思わずツッコミを入れる。

「よーし、マジックショーの始まりよー!」

「いきなりどうした!」

まるでココアのようなテンションだ。

幽霊がはつきりと姿を見せる。

魔法使いの格好だ。

魔法使いは、右手から飴玉を大量に出す。

「おー!」

思わず歓声をあげてしまうほど見事なマジックだ。

今度は左手からも飴玉が出る。

しばらくして、流れ出る飴玉がピタツと止まる。

だが、この魔法使いについて、2点気になることがある。

悠は以前、この人に会ったことがあるかもしれないこと。

そしてもう一つは――。

「その頭に乗ってるのは、ティップピーか!?!——なんか若さを感じるな」
ティップピーのような何かの頭に乗っている。

悠が顔を近づけて確認しようとする、魔法使いは帽子から一つ飴玉を出す。

「まだ隠し持ってたのか!?!」

もうないと思わせてからフェイントをかけてくるとは——この人、
強い!

「その魔法、教えてくれよ!帰ってからチノをびっくりさせたい」

「ええ、もちろんいいわよ!」

魔法使いはそう言って踊り出す。

「なに!?発動する前に踊らないといけないのか!?!」

悠がそういうと、魔法使いは顔を赤くして手を横に振った。

「関係ないんかい!?!」

悠のツツコミは誰にも届かない。

第百六十一話 魔法の勉強会？

「悠さん、遅いですね」

「やっぱり襲われたんじゃないか!？」

「すぐその発想になるんですね」

ラビットハウスのホールでチノとリゼが話をしている。

ココアは夢の中だ。

「私はもうバイト上がるけど——大丈夫か？」

「大丈夫です。帰るときに悠さんを見たら早く帰るように言ってくてください」

「わかった！取っ捕まえてここまで連行してくればいいんだな！」

「言うだけでいいです！」

リゼがラビットハウスを後にした。

「さあ、ココアさん。バイトも終わりですよ。起きてください」

「チノちゃん……なんか、チノちゃんのお母さんが出てくる夢を見たよ……」

「どんな夢ですか！」

なぜか自分の母ではなく、チノの母の夢を見たというココアにチノがつっこむ。

「よし！習得したぞ！」

「完璧ね！」

冷静に考えてみると、暗くなって人気がない道路の真ん中で魔法使いの格好をした女性とスーパールの袋を持った少年がはしやぎ回るこの光景——不審者でしかない。

魔法の成功を喜ぶ悠に、魔法使いは「悠くん」と名前を呼ぶ。

「なんだ？」

「私はそろそろ行かなきゃいけないの」

「そうか。また今度会ったら魔法教えてくれよ」

「——魔法もいいけど、それより大切なことをアドバイスしてあげよう！」

先ほどとは少し違う雰囲気になった。

魔法使いは人差し指を立て、悠に言う。

「悠くんって好きな人、いるでしょ？」

「おい、なんでいきなり恋バナに話が飛んだんだ!?!——そりゃあ、まあ……」

「ふふっ、やっぱり。私が帰る前に、一つだけ。好きな人に想いを伝える方法を教えましょう！」

「想いを伝える——？」

「悠さん、遅いですね」

「そうだね——ってチノちゃん、それもう10回目だよ!?!」

一方ラビットハウスではチノとココアが先ほどから10回も同じ会話をしている。

「悠さんは電話持ってないですし——困ったものです」

「私、探してこようか？」

「ココアさんが迷いそうです」

「もう少しお姉ちゃんを頼ってよ——!」

全くココアを信用しないチノにココアが叫ぶ。

「なるほど——」

「魔法と恋のこと。帰ったらしっかりと復習しておくこと!」

「了解した!」

敬礼する悠に、魔法使いは「ふふっ」と笑って

「チノちゃんは奥手な上に強がりなところがあるから、悠くんがサポートしてあげてね」

「え?なんでわかったんだ!?!」

「魔法使いですもの」

まんまと相手を見抜かれ、また驚きを隠せない悠。

「悠くん——私はこれでいなくなるけど、チノちゃんのこと、よろしくね」

「おい、まさか、あんたは……」

「じゃーバイバイ！また機会があったら会おうね！」

魔法使いはそれだけ言って物陰に隠れると、そのまま跡形もなく消えた。

「ただいま」

「もう、何してたんですか」

「すまん……」

「罰として今日のデザート抜きです」

「そう怒るなよ！実は魔法を習ってきたんだ！みて驚くな？」

そう言つて悠は右手から飴玉を出す。先ほどの魔法使いに習った魔法だ。

「」

チノが口をポカーンと開けたまま黙り込む。

「そ、そんなに固まるほど驚いたか？練習した甲斐があるなー！」

チノが驚きで固まったのを見て、悠が喜ぶ。

しばらくして、チノが言った。

「——いえ、母がその手品、得意だったので……」

第百六十二話 ココアと悠と壁

ある日の夜。

いつものように、チノとココアの部屋で遊んでいた。

チノは途中でお手洗いのため退室し、ココアは小説を読み、悠はチノのジグソーパズルを黙々と進めていた。

数分間会話がなかったが、ココアが沈黙を破る。

ココアは読んでいた本を閉じると、悠に言う、

「ねえ悠くん！チノちゃんともっと仲良くなれる方法を教えてあげようか？」

「いやいいよ。どうせまたしようもないことを……」

「今回は名案なのー!!聞くだけ聞いてよー!」

悠の冷たい反応にココアが叫ぶ。

「はいはい。わかったよ。で、仲良くなれる方法だっけ?」

「そう!仲良くなれる方法——それはズバリ『壁ドン』だよ!」

「へー……」

「あれっ!?!反応薄い!」

無関心そうな悠にココアがまた叫ぶ。

「壁ドンだよ!壁ドン!チノちゃんにやったらきつと距離が縮まるよー!」

「物理的な距離しか縮まねえよ——。だいたい、壁ドンってどうやってやるんだ?」

「簡単だよ!——チノちゃんがいらない隙にちよつと練習してみる?」

「え?俺は別にいいけど……」

——悠さん、パズル進めてくれたかな……。

チノはそんなこと思いながらココアの部屋に戻る。

途中、廊下でココアと悠の声が聞こえた。

「ほらっ！こんな感じに！」

「ちよ！近いって！」

「お姉ちゃんに遠慮しなくていいんだよー！ほら、今度は私をチノちゃんだと思っちゃってやってみて？」

「ハードルが高すぎる!!」

——またココアさんが悠さんを振り回してる……。

チノは呆れて部屋の中に少しだけ顔を覗かせる。

部屋の中の光景を見た瞬間、チノの目が見開く。

ココアが悠を壁に追い詰めて顔を近づけているのだ。

あと数センチあれば——。

「そんな関係だったなんて……」

「どんな関係？」

後ろから里恵に声をかけられた。

「うわっ！里恵さん……驚かせないでください！」

「ごめんごめん。なんか騒がしいから起きたんだけど……どうかしたの？」

「大変です！こっち見てみてください！」

チノに言われるまま、里恵もココアの部屋に少しだけ顔を覗かせる。

「お兄ちゃん……はあ、呆れた」

「呆れました」

2人のため息が重なる。

チノは嚴重に自室の扉を閉めると、里恵に言う。

「悠さんは私みたいなのより、ココアさんみたいなのの方がいいんでしょうか」

「それは——どうだろう……」

「はあ……」

チノが落ち込んでいると、里恵は慌てて

「な、何かの間違いだよー！」

と励ます。

「そうでしょか」

「そうだよ！チノちゃんがいなくなると突然店番のやる気がなくなるくらい、チノちゃんのこと好きだよ！」

「それはそれで困ります！」

「どう？実践したくなってきたでしょー！」

「実践したいけど、多分ココアからチノに変わった瞬間でなくなる——」

「大丈夫だよ！お姉ちゃんがついてるよー！」

「とりあえず、俺の心臓が止まった時用にAEDを用意しておいてくれ」

「そこまで!?!」

「だけど——まあ……そのうち試してみるよ」

「うんうん！」

そして悠はあたりを見渡し、「ところで——」と続ける。

「チノのやつ、遅くないか？」

「そうだね……」

「ちよつと様子見に行くか」

悠がそう言うと、ココアもついていくと申し出た。

だが、お手洗いは無人だった。

「チノちゃんの部屋かな？」

ココアはそう言ってチノの部屋に向かう。

「チノちゃんーん？寝ちゃった？」

「コ、ココアさん！」

「起きてたみたい。よかつたね悠くん！早速試してみて」

「それは今度って言ったよな!?!」

突然実践しろと言い出すココアに悠がツツコミを入れる。

「悠さんまで——どうかしたんですか。早く寝てください」

「あれ、チノちゃん、ご機嫌斜め——？」

「ジグソーパズル、まだ終わってないぞ?」

「2人でやったらいいじゃないですか」

チノがわずかに頬を膨らませる。

「おい、ココアとやったら一生終わらなくなるぞ!」

「もうちよつと私を信用してよー!」

「とにかく、私はもう寝ます! 里恵さんも寝ますか?」

「うん、でもその前にこいつをしばいてからね」

「里恵! どこでそんな言葉覚えたんだ!」

悠を指さしてそういう里恵に悠がツツコミを入れる。

「しばくって、どういう意味?」

キョトンとしたココアの腕を掴み、悠は

「おい、逃げるぞー!」

と叫ぶ。

第百六十三話 ティツピーの占い

「危ない危ない。里恵に命を狩られるところだった——」

無事にココアの部屋まで逃げることに成功した悠は、部屋の外に里恵がいなかったことを確認すると、ほっと一息つく。

「それにしても、どうしてチノちゃん怒ってるんだらう?」

「さあな——。人間眠くなるとイライラするっていうし、それじゃないか?」

ココアがしばらく「うーん」と考える。

「きつとチノちゃんは、悠くんがいつまでも告白してくれないから怒ってるんだよー!」

「なんだと!」

——悠の案もココアの案も違うのだが、悠は真面目にココアの発言を受け止める。

「なんと——!こうなったら明日にでも実行しなくては!」

「そうだよ!急がないと拗れたままになっちゃうかも!」

「ああ、だが少しだけ待ってくれ。ティツピーに明日の運勢を占ってもらってからだ」

「そうだね、うん、それがいいよ!ティツピーの占いはよく当たるし!」

悠は大慌てでバーにいるであろうティツピーを迎えに行く。

「タカヒロさん!少しだけティツピー借りますね!」

「え?ああ、構わないよ」

そしてティツピーを悠の部屋に連れ込む。

「どうしたんじや?」

「コーヒー占いだ!明日の運勢を占ってくれ!」

「いきなりじやな——」

ティツピーは困惑しながらも、占いを始める。

「ふむ——悠の明日の運勢は——なんじゃこれは」

「どうした!?まさか最悪とか!？」

眉を顰めるティツピーに悠が震える。

「その逆じゃ!明日は恋愛運と対人運が最高潮の日になるだろう……」

「きたああ!!」

悠はティツピーをおいてココアの元へ向かう。

「なんじゃ、どうしたんじゃ!？」

ティツピーの困惑した声は誰にも届かない。

「どうしたの、悠くん!」

「ティツピーに占ってもらったんだけど、明日は恋愛運と対人運が最高だって!」

「そうなの!?すごい!!じゃあ明日で決まりだね!」

「ああ!これはきつといける!」

悠はその勢いでチノの部屋に向かう。

「チノー!俺、明日お前に告白するからー!!」

「悠くん!それ言っちゃダメー!!」

「えっ!?こ、告白って——」

「お兄ちゃん——なんか今日テンションがおかしいよ?」

困惑するチノと冷めた里恵の声を聞いて、盛大にやらかしたことに気がつく。

「だって——あまりに嬉しくてつい——」

「サプライズの意味なくなっちゃうよー。チノちゃんも困ってたし」

「ああ……最悪だ……全てが終わった……」

「もー、しょうがないな。お姉ちゃんがなんとかしてあげるから落ち込まないで」

「不安でしかない……」

やたら頼もしいココアの発言が逆に不安になってくる。

「とにかく、今日はもう遅いから寝よう！」

「何を企んでるんだ……」

ココアの言う通りに、悠は自室に戻ってベッドに入る。

「あーもう最悪だ。時間を戻す魔法をかけてくれ……」

あのとぎ出会った魔法使いにそう呟いて、瞼を閉じた。

第百六十四話 正夢にならないように

「——悠さん。私たちは付き合ってるんですよ」

「え？ああ、そう……だな？」

「なのにどうしてココアさんと仲良くするんですか」

「それは……ココアは普通に友達だし……」

「そんなこと言って、本当はココアさんのことが好きなんじゃないんですか」

「そんなことはないぞ」

「なら、証明してください」

「どうやって!？」

「態度で示せということですよ」

チノはそう言っただけで体を近づけてくる。

「お、おい！なんだいきなり!？」

悠がチノと距離を取ると、チノの目のハイライトが消える。

「——もし、ココアさんがいなくなったら私に興味持ってくださいますか?」

チノはそう言っただけで机の引き出しからナイフを取り出す。

「うわああああ!!」

悠が慌てて布団をめくって起き上がる。

「ど、どうしたんですか?」

「ゆ、夢か——」

「怖い夢でも見ましたか?」

「ああ……あと少して犠牲者が出るところだった——って、え?」

隣から聞こえてくる声は間違いなくチノだ。

悠は先ほどの夢が現実なのではないかと青ざめる。

「な、なんでここに——?」

「悠さんが連れ込んだんじゃないんですか」

「え？」

悠の間拔けな声にチノが「はあ……」とため息をつく。

「私にあれだけのことをしておいて、もう忘れたんですか？」

「どれだけのことだ!? 待て、まさか俺寝てる間にとんでもないことを——」

さらに悠の顔が青ざめる。

「ココアさんに呼び出されたんです。悠さんが私に用があるってココアさんに伝言したんじゃないんですか？」

「そ、そんなこと言ったっけ……」

思い返してみると、ココアが『お姉ちゃんがなんとかしてあげるから』とか言っていた。

それがこれなのだろうか。

「あ、ああ！ そういえばそんな気がするー」

「棒読みですよ」

「気のせいだ」

「そ、その……」

チノが何かモジモジした様子だ。

「わ、私に用って、その……さっきのことですか？」

——とくに用はないのだがココアと口裏を合わせなければ……。

「ち、違うぞー！ あれはその……冗談というかなんというか！」

「——冗談なんですか」

「え、えつと……半分冗談！」

「やれやれです。——期待して損しました」

チノが呆れる。

「え？ なんて？」

「なんでもありません！」

「ところで、『さっき』あれだけのこととしておいて』って言ってたけど、俺何かしたっけ？」

「私が部屋にきたとき——」

チノが先ほど何があつたのか話し始める。

「悠さん、わ、私に用って——」

チノが恐る恐る悠の部屋に入る。

「つてあれ、寝ちやっただんですか？」

「——」

悠から返事はない。

チノが様子を確認しにベッドに近づくと、悠に腕を掴まれてベッドに引き込まれた。

「待って……ココアよりもお前のことが好きだぞ……」

「な、何言って——」

「だからそれ片付けて!?!」

「どれですか。——はあ……呆れました。離してください。私もう帰りますよ」

「チノ……そんないきなりキスしてくるなよ……」

「どんな夢を見てるんですか!?!」

「そんないやらしい夢見たっけ!?!」

「違うんですか? ものすごい寝言たくさん言っていましたよ」

「——もうこれからはガムテープで口塞いでから寝るわ」

悠が枕に顔を埋める。

チノが隣で寝ていた理由がわかったところで、悠は先ほどの補足を
する。

「そ、それと——さっき言ってたことだけどさ」

「は、はい」

「明日お前にプロポーズするから、よろしく」

「改めて言わなくていいです!」

「えー? なんでー?」

「恥ずかしくないんですか?」

「さっきの夢みたいなことにならないように予防しておこうと思っ
て」

「本当にどんな夢を見たんですか……」

チノの呆れた声が部屋に響く。

第百六十五話 鈍い恋心

翌朝になった。

「行ってらっしゃいませ。お嬢様」

「ああ、また後で」

リゼは短くそういうと、ラビットハウスへ向かう。

休日である今日もラビットハウスでバイトがある。

だが、ラビットハウスに入ってみるといつもと雰囲気が違うことに気がついた。

「どうしたんだ？」

「な、なんでもありません……!」

チノが先ほどから落ち着かない様子だ。

ココアの姿は見えない。

「ココアはまた寝坊か？」

「そ、そうだと思います!」

「——何があったんだ、本当に……。起こすのが大変だったら、私が行くのか？」

「は、はい。お願いします。できれば上の階の様子をできるだけ細かく教えてください」

「この家でいったい何が起こってるんだ!？」

リゼは恐る恐る階段をのぼる。

「おーい、ココア。早く起きないと……ってあれ、いない……」

ココアの部屋に行ってみるも、部屋には誰もいない。

「悠?ココアを見かけなかったか？」

今度は悠の部屋へ向かう。——返事はない。

「入るぞ?」

リゼはそう断ってから扉を開ける。

「何事だ!？」

「あ、リゼちゃん！今朝起きたら悠くんが——」

悠は布団にうずくまり、出てくる気配がない。

「寝坊はココアじゃなくて悠の方だったか……」

「起きてる……」

布団の中から今にも死にそうなくらい枯れた悠の声。

「なんだ、リゼもいたのか……。こんなところに寄り道しやがって……学校遅れるぞ……」

「あれ？今日って確か休日だった——よな？」

悠の言葉に困惑するリゼ。

「悠くん、さつきからこんな様子で——」

「体調でも悪いのか？」

「めちやくちや元気さ……」

「声が死んでるぞ？」

「気のせいだ……」

「悠くん！ティツピーの言葉を信じて！チノちゃんが待ってるよ！」

「ティツピー……？チノ……？」

ますます困惑するリゼに、ココアが昨日の一件を話す。

「なるほどな……状況が読めた」

「いざ実行となると緊張して——」

「もうこうなったらコーヒー飲んで乗り切るしかないよ！」

「コーヒーで乗り切れるのはシャロだけだぞ!？」

「つつこむほど元気があるなら問題ないさ。さあ、私も応援してやるから行こう！」

布団の中からココアの発言にツツコミを入れる悠にリゼが苦笑いする。

「こうなったら特攻だ！」

「特攻!!？」

悠のヤケクソ発言にリゼのスイッチが入る。

「お、おはよう……」

「あ、悠さん——おはようございます」

「」

「Staff Only」と書かれた扉から少しだけ顔を覗かせる悠を、リゼが後ろから押す。

「何すんだよ」

「時間が経てば経つほど厳しくなるぞ」

「そ、それもそうか——」

悠は恐る恐るチノの方へ行く。

「チノ、昨日言ったことだけど」

「は、はい！」

チノが磨いていたカップを落としそうになるが、なんとか落下を防ぐ。

「——俺と付き合うことを前提に結婚してくれ」

「」

「ん？」

「——なんか違和感……?」

チノはフリーズし、リゼとココアは違和感を覚える。

しばらくしてココアが違和感の正体に気がつく。

悠も同様に、先ほどの発言におかしな点があったことに気がつく。

「——ん?——あつ、結婚を前提に付き合ってくれ」

「——ぷっ」

悠の言い直しに思わず吹き出すチノ。

「本当にしようがない悠さんです」

チノは真っ赤になった顔を見せないように、悠と反対の方向に振り返ると、そうつぶやいた。

第百六十六話 照れ隠しとゲームと対抗心

「そんなに私と結婚したかったんですか？」

「軽口の叩き方が悠に似てきた!？」

チノの軽口にリゼがツツコミを入れる。

悠はチノの言葉を聞くと、「うん」と真顔で答える。

「なっ……………」

「自爆した!」

悠の返事を聞いて再び顔を真っ赤にするチノ。

「さ、さあ! 今日でも開店準備始めますよ! 早く倉庫から荷物持ってきてください!」

「へいへい……………」

チノは顔を隠して悠に仕事を割り振る。

最初に、倉庫から物を厨房へ運ぶのがいつもの流れだ。

「私も手伝うよ」

リゼはそう言って倉庫に足を踏み入れる。

「チノって、照れ隠しするとき、仕事割り振る癖があるよな」

「確かに……………」

リゼの言う通りだ。考えてみれば先ほどもそうだった。

「さて、これから2人がどうなるか楽しみだな」

「リゼまでココアみたいなことを言うなよ?」

ニヤニヤとこちらを見てくるリゼに悠がため息をつく。

「リゼもココアに告白しないの?」

「な、なに!? な、な、なんだいきなり!!」

「動揺しすぎだ」

激しく動揺するリゼに、今度は悠がニヤニヤと笑いを浮かべる。

「なんで私がココアに——」

「本当は告白したいんじゃないのか? 『カップルごっこ』の時とか、ま

んざらでもなさそうだったし」

「ち、ちが——別に私はココアに——!」

「私がどうかしたの?」

「うわああああ!!!」

背後からココアに声をかけられ、リゼは木箱の陰に隠れる。

「なんでもないぞ。どうかしたのか?」

「チノちゃんが……」

ココアが悠をホールに連れて行くと、カウンターにチノがうつ伏せになっていた。

「どうした!?!」

「——ひまです」

店を見渡すと、客は誰一人としない。

「みんなでゲームして遊ぼう!」

「仕事は!?!」

目をキラキラにしてそう言うココアに、チノと悠がハモる。

「リゼちゃんもやるよね?」

「あ、ああ……」

「やれやれ、昔のリゼだったら『仕事サボるなよ』って注意してたのに、すっかりココアに甘々になったもんだ」

悠がそう言うと、チノが「うんうん」とうなずく。

「気のせいだ。死にたくなかったらそれ以上は言わないことだな」

「脅迫された!」

悠を脅迫するリゼにツツコミを入れる。

「で、ゲームって何をするんだ?」

「考えてなかった」

「おい」

ゲームをやるうと言い出してにおいて、考えてなかったとは——。本当にしようがないココアさんです」

しばらくして、ココアが「そうだ!」と席を立ち上がる。

「お互いのどこが好きなのか言い合うゲームやろう！」
「どんなゲームだ!?!」

明らかに今思いついたようなゲームだ。

ココアによると、くじ引きでペアを決めて、お互い相手の好きなどころを1箇所ずつ言っていくというゲームらしい。

「さあ、くじを引いてペアを決めるよ!」

ココアの手からくじを引くと赤いラインが入っていた。

「赤だ」

「私と同じだ!」

「うわっ……」

「引かないでよ!」

ココアと当たってしまった。

ということは、自動的にチノとリゼがペアということになる。

「じゃあ、私からいうね! 悠くんが好きなところは——年下なところ!」

「「まさかの年齢?!」」

ココアの発言に全員がハモる。

「ココアさんは年下なら誰でもいいんです」

「そうか……」

呆れるチノと少し落ち込んだ様子のリゼ。

「次は俺だな。ココアが好きなところ——騒がしい……いや賑やかなところだな!」

「一瞬悪口言いかけましたよね」

「気のせいだ」

横からチノがツツコミを入れてくるが、無視してゲームを続ける。

「次は私だな。チノの好きなところは、年下なのにしっかりしてるどころかな」

「リゼさん——。私はリゼさんのたくましいところが好きです」

「リゼ……覚えてろよ……」

「いつの間にか恨みを買ってしまった!」

チノに「好き」と言われたりゼに嫉妬したのか、悠がりゼに対抗心を燃やした

第一百六十七話 好きな理由

「よーし！じゃあ2回戦いくよー！」

ココアはそう言ってもう一度くじを引くように言う。

今度くじを引くと、赤いラインが入っていないものだった。

「また赤だく！」

「私もだ」

今度はココアとリゼ、チノと悠というペアになったようだ。

「やっときたか——！」

「すごい嬉しそう！」

嬉しそうな悠にココアがつつこむ。

「リゼちゃんの好きなところか」

「な、なんだ？」

「全部だよー！」

「ココア……」

ココアの発言に顔を真っ赤にするリゼ。

「そっとしておきましょう」

「だな」

デレデレする2人をおいてチノと悠がゲームを始める。

「チノの好きなところか——考えたこともなかった」

「えっ……」

悠の発言にチノが困惑する。

「考えようとするど頭がパンクしちゃう」

「なんですかそれ！」

「悠くん、チノちゃんの好きなところないの!?!」

ココアが意外そうにこちらを向いてくる。

「ありすぎて考えられないって意味だ！言わせんな！」

「デレデレじゃないか！」

「お前に言われたくないぞ、リゼ」

「うるさい！」

「じゃあ、チノちゃんは何？」

「ココアがチノに悠の好きなところを尋ねると、チノは

「そうですね……」

としばらく考えた後――。

「いつもヘラヘラしてるのに、ちゃっかりしてて――そういうところ、嫌いじゃないです」

「ん？ 『好き』とは言ってくれないんだ？」

にやけた顔でチノに問い詰める悠に、チノはバケツを悠に押し付けて

「うっ……い、いつまでもおしやべりしないで、早く倉庫の掃除してください！」

「倉庫の掃除、明日じゃなかったっけ!？」

悠はリゼの方を向いて、

「リゼ、お前の言う通りだな」

と言うと、リゼも「そうだろう?」とにやける。

「な、何のことですか……」

「チノは照れ隠しするとき、いつも俺に仕事割り振って誤魔化そうとする癖があるよね〜って話だ」

「た、たまたまです! 本当にしやうがない悠さんですね……!」

「で、結局リゼはココアのどこが好きなんだ?」

悠がリゼに尋ねると、リゼは

「えっ!？」

と顔を赤くする。

「リゼちゃん……まさか私のこと、嫌い……?」

「そ、そんなことないぞ! 大好きだ!」

「本音漏れたな」

「リゼちゃんつたらだいたく〜ん！私もリゼちゃんのこと大好きだよ〜」

大笑いする悠と、照れるココアにリゼがさらに顔を赤くして

「う、うわああああ!!チラシ配りしてくる〜!!!」

と店を飛び出す。

「リゼちゃん！それ新聞紙ー!!」

ココアも後を追いかけた。

「ココアがいないと静かだな」

「そうですね」

ココアとリゼがいなくなったラビットハウス。

——異様に静かだ。

「青春っていいですねえ……」

「いつからそこに!?!」

テーブル席から青山ブルーマウンテンの声がする。

「悠さん、チノさん。私の新作のためにこの後3時間ほど取材してもよろしいですか?」

「するかー!!」

「そうじゃー!そうじゃー!」

「はっ!今、確かにマスターの声が!」

チノの頭の上で跳ねるティツピーを見てチノが困惑する。

「ティツピー……どうしたんですか」

「青山さん、俺らよりいい題材ありますよ」

「あら、なんででしょう」

悠が提案すると、青山は目を輝かせる。

「孫離れできない某バリスタのおじいさんの話とかよくないですか?」

「あら〜!まるでマスターのような——」

「お前らにわしの気持ちかわかるかー!!」

ティツピーが意気投合する悠と青山にツツコミを入れる。

第百六十八話 反省と歌の特訓

「はあ……」

「どうしたの、悠くん」

告白騒動の翌日。リゼが買い出しに行っている間、ココアと悠は店番を任された。

悠がため息を吐くと、ココアが事情を尋ねてくる。

「——壁ドンするの忘れた」

「大丈夫！まだチャンスはあるよー」

「別に無理にしなくてもいいけど、なんか悔しい」

ふと、あの日、魔法使いが言っていた話を思い出す。

「——私が帰る前に、一つだけ。好きな人に想いを伝える方法を教えてくださいよう！」

「想いを伝える——？」

「そう！一番気持ち伝わる方法って、実は一つしかないの」

「それは——」

「直接言葉にすることだよ！」

「ハードルが高すぎる！」

「でも、直接『好き』って言ってもらえることは——相手にとっては、とっても嬉しいことなんだよ。余計なことは何も言わずに、ただ自分が今思っていることをそのまま、シンプルに伝えてみて」

「悠くん？」

「うわっ！」

意識を回想から現実に戻すと、目の前にココアの顔が大きく映る。

「近い」

「ごめんごめん、ぼんやりしてたけど、どうかした？」

「いいや、なんでもないよ」

「ココアは頭の上に「？」を浮かべるが、悠は話題を変える。

「今日も平和だなく」

「だね〜」

そんなことをつぶやきながら、のんびりとリゼの帰りを待つと、ラビットハウスの扉が大きな音を立てて開く。

「メディック！メディック!!」

「何事!?!」

マヤとメグがチノを抱えてラビットハウスに入ってくる。

「チノちゃん!?!と、とりあえず水をー!」

「どうした!?!ま、まさか——」

悠の顔が青ざめる。

チノはゆっくりと目を開くと——。

「音楽会のソロパートに……選ばれてしまいました……」

「えー!?!」

「音楽会って私たちも行っているのー!?!」

「大丈夫か!?!人前で歌えるのか!?!」

「おめでとー!!さすが私の妹ー!」

「自分で立候補したのか!?!チノも成長したなく!感無量!」

「落ち着いてください」

はしゃぐココアと悠にチノがなだめる。

「チノちゃん、アカペラのテストで選ばれたんだ〜!先生のお墨付きだよ〜!」

メグが説明するが、チノはガタガタと震えて——

「ですが……先生の前で歌うのと人前で歌うのは違います」

と答える。その様子を見てマヤが

「嫌なら断ることもできるんだよ?」

とフォローに入る。

チノはしばらく考えて――

「私、やってみます」

「チノー!!」

「チノちゃん!!」

「チノや……生きててよかったああ……」

「お前はもう死んでるだろ。騒ぐな、バレルだろ」

大泣きするティップピーに悠がツツコミを入れる。

「保護者の方が騒がしい!」

その後、買い出しから帰ってきたリゼに事情を説明すると、リゼも大騒ぎ。

「チノ――大丈夫なのか!？」

「大丈夫です」

「大丈夫じゃないのはお前の方だぞ、リゼ」

先ほどからチノ以上に震えているリゼに悠が言う。

「悠さん、リゼさん。特訓お願いできますか」

「よし、選べ!」

チノの発言を聞いて、リゼがノートに2種類の練習メニューを書く。

「よちよちうさぎコース」――ランニングと発声練習のみの簡単なコースだ。

「てくてくうさぎコース」――ランニングと発声練習に加え、うさぎ跳びや各種筋トレ、教官の家で潜入訓練が追加された厳しいコースだ。

「ん?教官の家で潜入訓練は関係ないか?」

悠がコース内容に指摘するが、チノは

「てくてくうさぎコースで」

と答えた。

「厳しめの選んだ!?!」

マヤとメグが驚く。

「ココアさん——すみませんが、しばらくの間お店をお願いします」

「そうだね——3人がお店を開けるのは寂しいけど、今チノちゃんは頑張り時だもんね——」

と答え、マヤとメグと

「喫茶店はコマメ隊に任せて!」

と決めポーズをとる。

「不安しかない……」

チノ、リゼ、悠の3人が口を揃えてそう言った。

第百六十九話 過酷な訓練

そして、音楽会に向けた特訓が始まった――。

「よし、まずはランニングからだ！」

リゼが笛を吹きながらチノと悠を誘導する。

「もつと足を上げて、手を振って！」

「――これ、歌と関係あるのか……？」

悠は一時期、リゼと千夜と3人でマラソンをやったことがあり、それなりに体力はついているが、チノはすでにヘトヘトだ。

リゼはそれに構わず次の訓練を指示する。

「ランニングが終わったらうさぎ跳びだ！」

「お、おい、あまり無理させるなよ」

「上官の命令は絶対だ！あまり時間がない。短期間で体力をつけないとやられるぞー！」

「今日に関しては俺も上官だ！」

「あ、あの喧嘩は……」

訓練内容でぶつかるリゼと悠にチノが困惑する。

その後もリゼの特訓は続き――。

「1日ごとに倍にする！」

チノに大量のタイヤを引っ張らせるリゼ。

「いいぞ！本物の鶴のようだ！」

川の上にある小さな切り株に片足立ちさせるリゼ。

「なんか意味あるんでしょか……これ……」

「同意見だ……」

軍隊でやらされるような訓練に、チノと悠が困惑する。

そして日が暮れ始めた頃――ようやく発声練習に入る。

「やっとなんかほくなってきたな」

「大切なのは腹式呼吸だ！腹から声を出せ！」

「いいぞ、昔より声が出せるようになってる！」

「昔もこれやってたのか!？」

リゼの褒め言葉に悠が驚く。

「もう今日はそのぐらいでいいだろ。ほら、水でも飲め」

「ああ、そうだな。まだ初日だし今日はここまでにしよう」

悠の提案にリゼが同意する。

悠はチノに水の入ったペットボトルを渡す。

「よーし！私は後片付けをしてくるから、それまで休憩！」

「は、はい……ありがとうございます……」

そういつてリゼは河原に戻った。

「チノは偉いな。リゼが無茶な訓練課してくるのに、真面目にやって」

「そ、そんなことないです」

「にしても本当に驚いたな〜」

「私も選ばれるとは思ってませんでした」

「そうじゃなくて——」

チノが「えっ?。」とこちらに振り向く。

「チノがソロパートを決心したことだよ」

「そ、それは……す、少しでもお店の宣伝になればいいと思っただけで——」

悠の言葉を聞いて、今度は反対方向に向きなおすチノに、悠はジト目で問い詰める。

「本当か? 本当にそれだけか?」

「す、全てはお店のためです。それだけです」

「なんでそっぽ向くんだよ〜もふもふ」

「み、道端でもふもふしないでください!」

「ん〜? 理由教えてくれたらやめてあげるけど?」

「尋問しても無駄です!」

その後、リゼと合流してラビットハウスへ帰宅。

そして、ラビットハウスの外に置かれた『歌姫爆誕』と書かれた看板を見てチノとリゼが叫ぶ。

「なんだこれー!?」

「おっ、飾り付けバッチリだな」

悠がそういつて店内に入ると、ココアたちが「おかえりー!」と迎える。

「飾り付けバッチリだよー!」

「い、今すぐ飾り付けやめてください!」

「え〜?タカヒロさんOKしてくれたよ〜?」

「お父さん!」

飾り付けを続けるココアを必死に止めるチノ。

そんな2人を置いて、マヤは悠に尋ねる。

「これどこに貼るのがいいかな?」

「そうだな〜それはドアのところかな?」

「了解〜!」

「だから貼らないでくださいー!!」

大声で叫ぶチノを見て、リゼが

「チノが声張れるようになったのって——ツツコミのおかげだろうな……」

とつぶやいた。

第七十話 特殊訓練の準備とチノの悩み

その翌日も、チノの歌の練習のためにリゼと悠は特訓に付き合っていた。

最初より声を張れるようになったり、体力がついてきたりしているが、まだ課題は山積みだ。

一番の問題は――。

チノが発声練習をしていると、その後ろを子供たちが笑いながら走っていく。

チノは子供たちの笑い声を聞くと、すぐに口を押さえて黙ってしまふのだ。

「恥ずかしがるなよ。戦場では何事にも動じないメンタルが必要だ」

「チノの場合、戦場じゃなくて会場だろ」

リゼは悠のツッコミを無視して続ける。

「技術的なことも大切だが――人前で歌う練習した方がいいな！」

リゼの発言にチノと悠がはてなマークを浮かべる。

「悠、突然で悪いが、後の特訓は2人でやってくれ。私は少し準備をしてくる」

「あ、ああ、了解した」

悠は戸惑いつつも、「人前で歌う練習」の準備にリゼを向かわせた。

「えーっと、次はランニングか」

「はい！」

「――気合を入れるのはいいが、無茶だけはしないでくれよ」

「わかっています。さ、早く河原の方に行きましょう」

チノはそういつてさっさと河原に降りて行く。

悠が笛を吹きつつチノを誘導するが、チノはわずかな段差につまづいてバランスを崩す。

「おっと」

悠が転びかけたチノを支える。

「す、すみません——」

「気にするな。俺もちょうどもふもふしたいと思ってたからな」
「フオローの仕方がおかしい!？」

チノが顔を赤くして悠にツツコミを入れた。

「そ、その……悠さんは音楽会とかやったことってありますか?」

「音楽会か……そういえば中学でやったな……」

「練習、どんな感じでしたか?」

「んー、俺はサボって女子に『ちよつと男子く!』って言われるポジ
ションだったな」

「ダメじゃないですか!」

「でも、3年生の時の音楽会、終わった後は感動したよ」

「———ですか」

俯くチノに悠が首を傾げる。

「どうかしたのか?」

「———実は、マヤさんやメグさんと学校で一緒に何かをするのって、こ
れが最後なんじゃないかなってちよつと前から考えてて……」

「———」

「高校に進学したら、もう3人で音楽会で歌ったり、創作ダンスしたり
することって、もうないんでしょうか」

「創作ダンス!？」

「———あれ?言ってますませんでしたっけ」

「わし、聞いてない!」

悠のティップピーの物真似にチノが「ふっ」と吹き出す。

「全然似てませんよ」

チノの辛辣な感想に悠は「ご、ごほん……」と咳払いして言う。

「別に学校の音楽会にこだわらなくても、3人で歌いたくなったら『チ
マメ・ライブ』でも開催したらどうだ?みんな喜ぶぞ。特にココアと
俺」

「チマメライブ……」

「それに、そんなどんよりした気分で作ってたら、リゼに怒られちゃうぞ。音楽会は楽しくやるのが一番だ」

「——悠さん」

「なんだ？」

「今日はちょっとだけしっかりしてます」

チノはそう言って少しだけ赤くなつた顔を隠すように反対方向を向く。

「ココアと違って俺はいつもしっかりしてるだろ！」

「さ、さあ、早く残りの特訓終わらせちゃいましょう！」

「いえっさー——ってそれ俺のセリフー！」

「またみんなでカラオケ行くのー!?!」

ラビットハウスでココアが驚きの声を上げる。

「ああ、だが今回の会場は——甘兎庵だ！」

「どうして……?」

「千夜の家にはカラオケがあるんだよ。さつき千夜と千夜のおばあさんに許可もらつたんだ。明日貸し切つてカラオケ大会だ！」

「わーい!!」

「あんまりはしゃぐなよー。あくまでチノが人前で歌えるようになるための練習だからなー」

「わかつてるよ〜」

ニコニコと笑うココアを見て、リゼが「大丈夫か……?」と心配するのだった。

第七百七十一話 甘兔庵カラオケ大会!

「第一回!甘兔庵カラオケ大会く!」

千夜がカラオケ大会の開会を宣言すると、ココアたちが拍手する。

「チノの歌の練習?」

「ああ、こうやって慣れさせておこうと思ってさ」

「なるほど……名案だ」

リゼと悠が会話していると、千夜がチノを連れてステージに上がる。

「じゃあ、今夜の歌姫をご紹介しまーす!大きな拍手でお迎えください!」

「あ、あの——みなさん、よろしくお願いします……」

緊張した様子でチノがステージに立つ。

「きよ、今日は足元の悪い中……」

「雨降ってたっけ?」

思わず隣に座っているシャロが困惑する。

「めちやくちや緊張してる!」

「わ、私のためにお集まりいただきあ、ありがとうございます!この晴れの日に——」

「入学式か!」

「雨なの?晴れなの?」

あまりに緊張するチノを見て、ココアがいう。

「チノちゃん、緊張ほぐれないね……。——そうだ!お手本を見せてあげよう!」

「——お手本?」

ココアが何かを思いついたように、シャロの腕を引っ張る。

——とてつもなく嫌な予感。

そしてシャロを店の奥に押し込むと、数分が経ってシャロが出てきた。

「みんなー！今日は来てくれてありがとうー!!」

「シャロさん!？」

「さてはカフェイン入れたな!？」

チノと悠の声をスルーしてココアはカラオケ大会の司会を始める。

「はいはい！カフェインアイドルコンサートが始まりだよー!」

「みんなー！盛り上がってるうー?」

「お、おう……」

「シャロさん……完全にきつってます」

悠とチノの困惑した声。リゼはシャロの変わりように言葉を失っている。

「いえーい!——んん？掛け声が聞こえないぞ?」

「私の歌！聞いてね!!」

シャロがノリノリに歌い始めた。

「はあ……はあ……」

シャロが歌い終わると、一斉に拍手が湧き起こる。

「すごいです。本当にアイドルみたいでした」

「ああ、そうだな」

「——はっ!」

シャロが意識を取り戻す。そして自分が何をしてきたのか自覚すると、顔を真っ赤にする。

「わ、私引退します！探さないでくださいー!!」

「カフェイン抜けてしまった!」

そう言って甘兎庵を勢いよく飛び出すシャロ。

「あ、シャロさん!」

「シャロちゃん!」

シャロが店を飛び出した後、千夜がゆっくりと立ち上がる。

「千夜、どうした?」

リゼが心配そうに尋ねると、千夜は——。

「あの程度でアイドルとは、笑わせるわね！」

「千夜に火がついた！」

そして店の奥から千夜のお婆さんを連れてくると、懐中電灯で千夜を照らす。

「懐中電灯だなんて……全く近頃の若いもんは！」

千夜のお婆さんがそう言つてリモコンのスイッチを押すと、天井の一部が抜けてミラーボールが出てくる。

「ミラーボール出てきた！」

リゼのツツコミは止まらない。

「強欲だねえ……。そんなにキラキラが欲しいなんて——」

シャロが歌っていたアイドル風の歌とは違い、今度は演歌だ。

「演歌かよ……」

「素材がいいんだから。もっと輝けばいいじゃないか」

千夜のお婆さんが千夜にいう。——何気に優しいお婆さんだ。

「ありがとう、お婆ちゃん！」

「花の命は短い、乙女の命は結構長い。遥かなる時を超え、千の夜を語り継ぐ。現代のシエヘラザード。甘兎庵の看板娘が歌います！」

「なんかナレーション入った!？」

千夜の後も、それぞれが自由気ままに歌い始め、踊り始め——「チノの歌の練習」という当初の目的を、誰一人思い出すことはなかった。

第一百七十二話 音楽会の前夜祭

「あ、あの——」

チノの困惑した声を聞いて、ハッと我に返る。

「す、すまん、チノの歌の練習なのにはしゃいでしまった」

リゼがそういうと、シャロが

「振り回されまくってますね」

と笑う。シャロの発言を聞いて、ココアと千夜が

「何に振り回されてるのかな？」

と尋ねる。

「お前たちにだよ。この振り回し隊！」

悠がそういうと、ココアと千夜が

「振り回し隊——？」

とハモる。

「そう——私たちは——振り回し隊！いえーい！」

ココアのテンションがいつも以上に高い。

その様子を見て、シャロがチノとリゼと悠の方の方を向く。

「3人とも！振り回され隊で応戦よ！」

シャロが振り回し隊にそう宣戦布告するが、ココアがチノの腕を握って引っ張る。

「チノちゃんはこっちに入隊ね！」

チノが向こう側にとられてしまう。慌てて悠がチノのもう片方を腕を掴む。

「チノは振り回さないだろ！」

その様子を見て、こちら側にはリゼが、向こう側には千夜が参戦する。

「えーチノちゃんはこっちだよー」

「いいや、こっち側だ！」

悠が強めに腕を引っ張ると、チノとチノの腕を掴んでいたココアと

千夜がこちら側に飛んでくる。

「——振り回され隊は私だけで十分です!!」

ついに堪忍袋の緒が切れたのか、チノがかつて無い大声で叫ぶ。

カラオケ大会の夜。

「今日の風呂当番はココアだぞ」

「お姉ちゃんがピカピカに磨いてあげよう!」

ココアは風呂掃除にお風呂場へ向かう。

チノは夕食の片付けのためダイニングにいるだろう。

悠はチノの手伝いをしようと、ダイニングへ向かう。

「おーい、チノ!俺も手伝うよ!」

「悠さん——ありがとうございます」

黙々と洗い物をする2人。するとお風呂場の方から変な歌が聞こえる。

「ぐくぐろくさまクロワッサン!頑張るあなたに、メロメロメロンパン!」

「変な歌(です)……」

チノと悠が見事にハモる。

ハモったことに気がついた悠は「ふっ」とにやけ、チノは「あっ……」とそっぽを向く。

「いよいよ明日か——」

「はい。——緊張して、ちゃんとできるか不安です」

「大丈夫だ。あれだけ練習したんだし、それに——」

「——それに?」

「俺はチノの歌、大好きだぞ」

「またそんなこと言って——さ、さあ、もう洗い物終わりです!私はお

風呂行つてきます!」

「はいはい、行つてらっしゃい!」

赤くなつた顔を隠すようにダイニングを出ていくチノを見届けた後、悠は部屋に戻る。

「——ん?ヘアピン?」

脱衣所にヘアピンが落ちているのを見た。

「これチノのやつだ——届けるか」

2階に上がると、ココアと遭遇した。

「悠くん!私が磨いたお風呂はどうだったかい?」

「——いつもと変わらん」

「そんな!——つてあれ、それチノちゃんなの?」

ココアは悠の持っているヘアピンに気がつく。

「ああ、脱衣所に落ちてたんだ。届けようかと思つて」

「私も行くよ!私もチノちゃんの部屋で遊ぼうと思つてたところなんだ」

「じゃあ一緒に行くか——」

チノの部屋の前に到着すると、ココアはノックもせずに入つていく。

「チノちゃん!」

「こ、ココアさん!それに悠さん!——いきなり入つてこないでください」

「あれ?チノちゃん何見てるの?」

ココアはチノの発言を無視して話を変える。

「——アルバム?」

悠が首を傾げると、チノは「そうです。昔の写真を見ていたんです」と肯定する。

「これチノちゃん？うわー、今と全然変わんない……」

ココアがそういうと、悠も「そうだな」と同意するが、チノは不服そうに言う。

「全然違います！何年経つてると思ってるんですか——」

「今と変わらず可愛いってことだよー！」

「何を言ってるんだココア？今の方がもっと可愛いぞ」

「そっか！そうだよね！」

「ふ、2人とも何言ってるんですか——！」

「あれ？これってタカヒロさんとリゼちゃんのお父さんと——この真ん中の人は？」

ココアが一枚の写真を指差す。悠はそれを見てハッと目を見開く。

——この人、あの日出会った魔法使いだ……。

「母です」

「やっぱり……そうだったんだ……」

「へえー！チノちゃんが歌上手なのはお母さん似なんだね！」

「上手かはわかりませんが——でも私——ここまでアクティブじゃないです」

チノが別の写真を見ていう。

魔法使いの格好に大量の羽を生やしたチノの母親の写真だ。

——アクティブすぎる。

「めっちゃはっちゃけてる!？」

思わず写真にツツコミを入れてしまう悠だった。

第七十三話 音楽会

ココアと悠は、チノと里恵が寝静まったのを確認してから、こっそりと裏口からラビットハウスを抜け出す。

「ふふっ、なんかいけないことしてるみたいだね——」

「へ、変なこと言うな！ほら、早く行かないと怒られるぞ！」

向かう先は——シャロの家だ。

「悪い、遅くなった」

「もうあまりにも遅いから先に始めちゃったわよ！」

軽く怒るシャロに、ココアが謝る。

「ごめんごめん、チノちゃん、緊張してるせいかなかなか寝てくれなかったんだよ」

「こんなんじゃ終わらないわよー！」

夜遅くにココアや悠、そして千夜がシャロの家に召集された理由——それは明日の音楽会に備えて応援グッズを作るためだ。

「じゃじゃーん！どうかな？」

ココアが完成したうちわを見せてくる。うちわには『チノちゃん！お姉ちゃんって呼んで♡』と書かれている。

「これでチノちゃんがお姉ちゃんって呼んでくれるかな？」

「なんのアップールだよ」

「こんなのはどうかしら〜？」

今度は千夜が悠に完成したうちわを見せてくる。うちわには『冷やし抹茶はじめました』と書かれている。

「それはお店で配ってくれ——」

「チノちゃんの応援グッズを作るんじやなかったの!？」

悠とシャロがツツコミを入れると、ココアは満面の笑みでいう。

「千夜ちゃんにしてはメニユー名が普通すぎるんだよ〜！」

「そういう問題じゃなーい!!」

シャロのツツコミは止まらない。

「——やっぱり電飾つけた方が目立つかな？」

「そんなものつけたら迷惑でしょ！」

「ごもつともだ。——これ、終わる気がしない。」

半分眠る悠の肩をシャロが激しく揺さぶり、ふざけるココアと千夜に

「口動かしてないで手を動かさないさい！」

と怒鳴る。

「はーい、お母さん！」

「誰がお母さんよ！」

「——あれ、なんでシャロがうちにいるんだ？」

「あんたも寝ぼけてないで早くうちわ作りなさい!!」

そして、音楽会当日——。

『次は、3年生による合唱「木もれび青春譜」です』

放送が聞こえる。——見ているこっちが緊張してきた。

「いよいよだな——」

「そうだね——」

ココアも緊張している様子だ。

3年生一同がステージに並ぶ。

チノは俯いたままだ。——やはり緊張しているのだろうか。

その時、ココアが小さな声で「チノちゃん！」と名前を呼ぶ。

——やっぱり緊張します。どのタイミングで歌い始めればいいのかわかりません。

チノがそう思っていると、客席の方から「チノちゃん！」とココアの声が聞こえる。

声のする方へ目を向けると、ココアたちが大量の応援グッズを身につけて応援に駆けつけている。

——来なくていいって言ったのに……。あんなうちわや衣装まで作って——全くもう……。

チノは大きく深呼吸すると、歌いはじめた。

「あれ、悠くん、もしかして泣いてる?」

「泣いてないっ!」

顔を覗き込んでくるココアを払い除ける。

ティツピーは先ほどから大泣きだ。

「チノー!チノー!」

「うるさいぞティツピー」

「た、ただいま——」

チノが恐る恐るラビットハウスの扉を開くと、すでに一同が集まっていた。

「!」「おかえりー!!」「!!」

「まだやってるー!!?」

いまだに応援グッズの衣装を着てうちわを持っている一同にチノがツツコミを入れる。

「チノちゃん——すごい良かったよ——」

ココアが泣きながらいう。

「とっても誇らしかったぞ!勲章ものだ!」

リゼが涙を堪えながらいう。

「飾り付けはやめてって——あれ、これは——」

店内に流れている自分の歌に気が付く。

「録音したんだ」

悠が説明すると、「録音?」と驚く。

「何回聞いても心にくるわ」

シャロがしみじみという。

「そうだ!レコード作ろう!お客さんにも配るよ!」

ココアがそう提案すると、チノが「レコード?」とまた驚く。

「それいいな！歌姫の喫茶店としてラビットハウスで売ろう！」

「甘兎庵でも流すわ。そうだ、グッズ展開してもいいかも！ね、シャロちゃん？」

「しようがないわね、妥協しないわよ！」

「ティツピーもそれがいいよね？」

ココアが頭の上に乗っているティツピーにそういうと、ティツピーは泣きながら「うん！うん！」とうなずく。

「楽しみだな！チノ！」

悠がそういうと、チノは

「本当に——しようがない皆さんです!!!」

と大声で叫んだ。

第七百七十四話 千夜のプレッシャー

「文化祭?」

「そうなの!千夜ちゃんと一緒に実行委員になったんだ〜!」

ココアが学校から帰ってくると、すでに店番をしているチノとりげ、そして悠にそう告げる。

「だから文化祭の準備でしばらくの間お店休んじゃうけど、大丈夫?」

ココアが心配そうに聞いてくる。

「問題ありません。頑張ってください」

チノがそういうと、今度はココアがリゼの方を向く。

「大丈夫だ、心配するな」

リゼがそういうと、ココアが悠の方を向く。

「別に忙しいわけでもないしな、準備頑張れよ」

「そっか……」

少し落ち込んだ様子のココア。——止めて欲しかったのだろうか。

「文化祭って、どんな感じなんですか?」

チノがココアに尋ねる。

「今年は地域と協力して、畑で採れた野菜や果物を提供してくれるから、それでお店とか開くんだよー!」

ココアがそう説明すると、チノは目を輝かせて

「収穫祭って感じですね!」

という。

「ラビットハウスも協力すれば宣伝になるんでしょうか」

チノがそう提案すると、ココアが「それだよ!」と便乗する。

「宣伝ってどういうふう?」

悠が尋ねると、ココアはしばらく考えた後、

「みんなでティッピー帽子かぶるとか?」

「なら、ティッピーを教室に連れていきましょー!」

「人気出そうだなー!」

リゼたちがティッピーの話で盛り上がるが――。

「コーヒーは!?!」

「なぜコーヒーの提供でなくわしの宣伝なんじゃ!?!」

悠とティツピーがツツコミを入れる。

「——ココアがないと静かだな」

「ああ、そうだな」

悠とリゼがいう。——この状況、今まで何回あっただろうか。

「今頃、甘兎庵で千夜さんと文化祭の準備をしているのでしょうか」

「意外だなく。千夜がクラスをまとめて行事をやるなんて——。カオスな行事にならなきゃいいが」

悠がそういうと、チノもリゼもうんうんとうなずく。

そのとき、ラビットハウスの扉が開く。

「いらっしやいませー——って、シャロ?どうしたんだ」

店に入ってきたのは、頬を膨らませたシャロだった。

「千夜に甘兎庵を追い出されちゃったのよ」

「なに!?!」

シャロの発言にリゼが驚く。

「文化祭の企画書、ちよつと見せてって言ったら——クラスのみんなとの秘密だからって……」

少し落ち込んでいるシャロに、チノが慌ててコーヒーを出す。

「と、とりあえずコーヒーでも……」

この状況でコーヒー出して大丈夫だろうか。

シャロが酔って眠ってしまった頃、ラビットハウスに一本の電話が入る。

「はい、こちらラビットハウスです」

悠が電話に出ると、電話の相手はココアだった。

『悠くん!大変だよ!すぐに甘兎庵に来て!』

「なんだなんだ!?!」

物凄い勢いでココアにそう言われ、悠が慌てて甘兎庵に向かう。

「どうした!」

「千夜ちゃんが……」

「私……みんなを仕切るなんて初めてで……無事成功できるのかしら……」

店のテーブルにうつ伏せになる千夜の背中をココアがさすつている。

「——こんなんじゃ将来甘兎庵社長としてやっていけないわー!!!」

「千夜ー!!?」

「千夜ちゃん!?」

突然ガバツと起き上がって叫ぶ千夜に悠とココアが驚く。

「こんなにプレッシャーかかるなんて思わなかったの……」

弱気で、今にも泣き出しそうな千夜に悠が動揺する。

「だ、大丈夫だ! いざとなったら俺がなんとかする……!!」

「悠くん男前だね〜!」

「悠くんっ……!」

この文化祭、どうなるのだろうか。

ココアと千夜に少々不安を覚えつつも、少し楽しみな悠だった。

第七百七十五話 クラスの弟

その翌日、悠はラビットハウスでのバイトが休みであるため、ココアたちに呼ばれて甘兎庵にやってきていた。

「どうやら、学校での準備時間の他に、こうして甘兎庵の一角を借りて準備を行なっているらしい。」

「かわいい〜！この子誰〜!？」

「まさかココアちゃんの彼氏？」

「――」

「違うよ〜！悠くんは私の弟だよ〜！」

――どっちも違うのだが、この際なんでもいいや。
とツツコミを入れる気力すら失せる。

早速、会議が始まった。

「おい、いいのか、シャロに聞いた話だとクラスメート以外には秘密なんだろ」

「へっ?」

「――えっ?」

ココアの間抜けな声に悠が困惑する。

「あれは違うのよ。シャロちゃんを驚かせたくて……」

「ちよっと落ち込んでたぞ」

千夜の言葉に悠が呆れる。

「千夜、この設計図の配置じゃ風水的に良くないわ」

「そうなの!？」

「修正は私たちでやっておくわ」

「いいわ、私が直しておくから」

クラスメートの提案を千夜が却下するが

「千夜はいろいろ抱え込みすぎ〜！」

「そうだよ千夜ちゃん。遠慮せず仕事を投げつけるのも社長だよ」

「みんな……！素晴らしい社員たちに恵まれて幸せ！」

「いつ社員になった!？」

いつの間にか社員になったクラスメートたちがツツコミを入れる。
どうやら、この様子だと大丈夫そうだ。

「なあ、ここにくるときにこんなチラシもらったんだが……」

悠が甘兎庵に行く途中で受け取ったチラシを千夜に見せると、クラスメートたちも寄ってくる。

「なにになに?」

チラシには『葡萄館』というぶどうを扱っている人気店が文化祭で他クラスと提携するという情報が書かれている。

「そんなーあそここのぶどうジュース狙ってたのに!」

知らせを受けたクラスメートたちが悔しそうに嘆く。

「このままだとしよばい店になっちゃう!」

「うーん……内装をゴージャスにして勝負するしかないわね」

クラスメートの発言に千夜がそう答える。

「ゴージャスさか……。お嬢様学校から備品借りられるなら有効活用したいところだな」

悠がそういうと、ココアは「それだ!」と的確。

「よし!クラス代表として委員長!行ってきたくれ!」

クラスメートの一人が学級委員をやっているという人に頼んでくるようにと指示するが、委員長は固まったまま動かない。

「——どうかした?」

悠が恐る恐る尋ねると、委員長は暗い口調でいう。

「——あそこ、第一志望だったんだよね……」

「ご、ごめん……」

「じゃあ私たちが!」

ココアと千夜が手を上げる。

「委員長の仇を取ってくるからー!!」

「うちの高校の実力見せてやれ!!」

「おー!!」

やたらと盛り上がるクラスに、悠は

「備品借りに行くだけだろ……」

と呆れる。

数時間後、ココアたちが帰ってきた。

「いろんな部活の勝負に勝って集めてきたよ!」

ココアが戦利品をみんなに見せる。

「じゃーん!まずは吹き矢部から勝ち取ったお面!」

能面のようなものを自慢げに見せるココアに、クラスメートは

「よくわかんないけどすごい!!」

と盛り上がる。

「校長先生にも勝ってオブジェ借りてきちやった!」

次は千夜がうきぎのオブジェクトを持ってくる。

「間違いなく人目引きそう!」

これにもクラスメートたちが盛り上がる。

「——どこに飾るんだよ、これ……」

「勝利万歳」と叫ぶクラスメートたちに、悠の冷静な声は届かない。

「店に銃の模型なんて飾っていいのか?」

悠の発言にココアは笑って

「リゼちゃんへのサプライズだよ」

という。

「前に言ってた別の高校の友達?どんな子なの?」

クラスメートの一人がココアに尋ねる。

「リゼちゃんは銃を携帯してて得意技はCQCだよ!」

「——ん?」

「シャロちゃんはカフェインで酔うと手がつけられなくなるの!」

「やばいのがくるぞ!丁寧なおもてなしをしなくては!!」

クラスメートたちが青ざめる。

「間違っではないが誤解を生んでしまった!!」

「よし、これで内装の大まかな部分は完成ね！」

「結構いい感じ〜!!」

「さすが我がクラスの弟〜!!」

クラスメートたちが悠の頭を撫でる。

「悠くんは私の弟だよ!!」

ココアが謎の意地を張るが、クラスメートたちは

「ココアにはもったいないよ〜!」

と笑った。

第七百七十六話 文化祭

「――」

「なんだよ」

ラビットハウスにて。チノがこちらを向いたまま頬を膨らませる。

「――」

「おいりぜ、チノに何があった」

悠が小声でりぜに尋ねる。

「チノは、悠がいなくて寂し――」

りぜが言いかけたが、チノが「りぜさん！」と会話を強制終了させる。

「ごめんごめん」

「チノ――」

「りぜさんの勝手な想像です」

「本当かよ。全く素直じゃないな」

「本当です。大きなお世話です」

「――まあそういうことにしておこう……」

とぼけるチノに悠がにやけるが、チノが悠の顔を見ると、目をそらして言う。

「――にやけてないで仕事してください」

「はいはい」

ココアが帰ってきた。千夜も一緒にいる。

「いやあくクラスの一体感が最高だね」

「悠くん考案の内装もバツチリ！勝利目前だわ！」

ココアと千夜がそういうと、ラビットハウスに遊びに来ていたシャロとりぜが

「ふくん……」

「ずいぶん楽しそうだな」

とわずかに頬を膨らませる。

「ん？どうしてほっぺ膨らませてるの？」

「えっ、そんな顔してたか!？」

ココアの言葉にリゼが驚く。

「悠さん。解説を」

チノに言われて悠はいう。

「簡単なことだ。ココアと千夜の学校生活の別の顔に寂しさやきもちを——」

「待って待って!!」

「それ以上いうなーっ!!!」

リゼとシャロが悠に叫ぶ。

「そんなみんなに文化祭の招待状だよー!」

「——楽しみにしてる」

リゼがわずかに赤くなった顔を招待状で隠しながらさういう。

「悠くんも手伝ってくれてありがとね」

「気にするな」

「私たちね、シャロちゃんたちに楽しんでもらいたいから頑張ってたのよ」

千夜がそう言ってシャロに招待状を渡す。

「あ、ありがと……」

シャロが照れ臭そうに招待状を受け取る。

「そしてチノちゃん!お姉ちゃんたちのピアホールに期待しててね!」

「!？」

ココアがそう言ってチノに招待状を渡す。

「メニューにビールなんてあったっけ……」

悠のつぶやきは誰にも届かない。

「あ、あの……」

「なんだ？」

文化祭の招待状を持ったチノがこちらにやってくる。

「その……よかつたら文化祭、一緒に——」

「悠くん！チノちゃん！お姉ちゃんが校内を案内してあげるー!!」
「むう……」

ココアがそういうと、チノは頬を膨らませる。

「チノ、何か言いかけてなかったか？」

「もういいですっ！」

「——？」

「チノちゃん？」

「ダメだ、この店鈍感なやつしかいない……」

はてなマークを浮かべる悠とココアにリゼが呆れる。

そして、文化祭当日がやってきた。

「ここがココアさんたちの学校——！」

チノが目を輝かせる。

「あつ、チノー！これ飲んでみるよ」

「なんですか？」

「泡のひげー！」

ビール風に作られたリングジュースをチノと悠が飲むと、口周りに泡がつく。

「こら未成年ー!!」

その様子を見てリゼが勘違いしてしまった。

「これ、リングジュースだぞ」

「ほ、本当か——？」

リゼにもジュースを渡すが、リゼは疑って飲もうとしない。

「あーっ！ティツピーがいるぞー！」

悠が指差しながら叫ぶと、チノがその方向を向く。

しばらくティツピーと目を合わせるチノ。

そしてしばらくしてから、ティツピーが掠れた低い声で

「ひげチノちゃんだー……」

とこちらに迫ってくる。

「うわああああ!!」

チノがこちらにしがみついてくる。

「ココア? 何してんだよお前……」

悠がティツピーの正体に気がつくど、チノも「えっ?」と埋めていた顔をあげる。

「ティツピー帽子作るって言ったでしょー!」

「ココアさん! それは帽子じゃないです!!」

チノが顔を真っ赤にして怒鳴った。

第百七十七話 振り回され隊 in 文化祭

「さあ、うちのクラスにご案内〜！」

ココアが一行をクラスに案内する。

あのあと、どうなったのだろうか――。

「確か、教室でビアホールだったわね」

シャロがココアに尋ねると、ココアは「うん！」と答える。

「それ、いろんな意味で大丈夫か……？」

悠が心配するが、ココアは「大丈夫大丈夫〜」とお気楽に答える。

「イメージとしては、ラビットハウスのバータイムみたいな感じだよー！」

「へー……」

リゼが興味深そうにつぶやく。

――そして、ココアが扉を開けた。

「5名様ご到着〜！」

「うちよりすごい！」

店の内装を見ると、チノとティツピーが驚く。

「いらつしやいませ〜。オーナーの千夜です」

「テーマはオクトーバーフェスト？」

シャロが千夜に尋ねると、千夜は「そうー！」と答える。

「さあ！なんちゃってビール祭りを楽しみましょう！」

千夜がそう言つてビール風のジュースを出す。

「なんと！早速常連になりたいって作家さんもいるよ！」

ココアが指差す先には、せかせかと筆を進める青山ブルーマウンテンの姿が。

そしてその隣には、場酔いする編集者の姿も見える。

「明日が締め切り〜!!青山先生ファイター!!」

「修羅場の応援じゃねえか！」

物凄い勢いで応援する編集者に思わずツツコミを入れてしまう。

「青山さんもそうですが、ココアさんも千夜さんも忙しそうですね」
「そうだな」

チノやリゼ、シャロとビール風のオレンジジュースを飲む。

「あーっ！悠くんだ！いらっしやい！来てくれたんだ〜！」

クラスメートの一人がこちらに気がつく。

「予定よりかなりゴージャスになったな」

「そうそう、あの後悠くんの意見をもとにさらにはっちやけてみましたー！」

「すごい仲良くなってる……」

チノとリゼのつぶやきは悠には届かない。

「さすが我がクラスの弟ー!!」

「悠くんは私の弟だよー!!」

案の定ココアが間に入ってきた。

「悠さんは女の人なら誰でもいいんですね」

「ものすごく誤解を招く発言だー！」

チノの発言にリゼがツツコミを入れる。

「よかった……。思ってたより普通の人たちだ。警戒態勢解除！」

委員長が呼びかけると、クラスメートたちが影から出てくるが、委員長の言葉にリゼが反応してしまう。

「敵の素性が曖昧なまま警戒を解くんじゃない!!」

「二いえっさー!!!」

「早くもクラスの軍曹に！」

リゼの怒鳴り声でクラスメートたちが慌てて警戒態勢を続行する光景を見て、チノがツツコミを入れる。

「おっ、衣装の体験ができるらしいな。着てみたらどうだ？」

「私はいいです」

「まあまあ、そう言わずに〜」

悠の提案を却下するチノの腕を掴んで強引に連れて行く。

「顔が『着たい』って言っているわ」

クラスメートの一人がそう言ってリゼとシャロの腕を掴んで連れて行く。

「千夜たち、素敵な友達を持って安心したわ」

「母親か」

シャロの言葉にツツコミを入れる悠。

しばらくの間、穏やかな時間が流れていたが、クラスメートたちの一言で崩壊する。

「よし！そのまま着ても違和感ないな！部活の出し物と時間被ってるの！後は頼んだよ！」

「身代わり!?」

それだけ言い残して、店を回していたクラスメートの大半が出て行ってしまふ。

「はっ!!」

千夜が何かに気がついたように、顔が青ざめる。

「——スケジュールをミスった……!!」

「う、うちのクラス流ジョークだよ……!す、すぐ戻ってくるから!」

震えた声でそういう千夜とココア。

「仕方ないわね。注文とってくるから、私はこれで」

シャロはそう言ってホールに戻る。

「想定内の事態だ。心配するな」

「ああ、俺も厨房手伝うよ」

「みんなありがとー!」

こうして、振り回され隊がビアホールに動員された。

第一百七十八話 文化祭は写真と思い出を残して終了する

「外回り誰が言ってる〜?」

クラスメートの一人が厨房に顔を覗かせる。

「忘れてた!」

ココアが大慌てで外回りに向かおうとするが、ティツピーの帽子がないことに気がつく。

「あれ?ティツピーの帽子は?」

「さあ……。なくしたのか?」

ココアが困惑した様子で悠に尋ねる。

「ううん、ここに置いておいたんだけど——」

「そういうえば、チノも見かけないな。まさか——ちよつと見に行こう」

悠がココアを連れて外に出ると、案の定チノがティツピーの帽子をかぶって宣伝している。

「ティツピーの上にティツピーが乗ってるよ!」

「めちやくちや人集まってるじゃないか!」

「そんなっ……!私時はみんな逃げて行ったのに……」

「そりや逃げるだろうな……」

「おーいチノー!」

「悠さん、それにココアさんも。大丈夫ですよ、宣伝は私がやります」

悠の呼びかけにチノが答える。

「でもそこまでしてくれなくても——」

後から追いかけてきた千夜がチノにいうが、チノは「いえ」と断る。

「皆さんがお店を盛り上げたい気持ち、すごくわかります。——だから、やらせてください。本物の喫茶店の孫娘として——」

そう言って、ラビットハウスの看板を首から下げ、店の看板を持って出発するチノ。心なしか、いつもより背中が大きく見える。

「チノがイケメンだ!」

悠のツツコミはチノには届かない。

「写真いいですか？」

見学に来た人からそう言われ、チノは

「はい。ラビットハウスもよろしくです」

と返す。

「いつもより積極的だな……。顔を隠すと恥ずかしくなくてやつか

」

悠がつぶやく。

「スタッフ交代！厨房と外回り交代するよー！」

もともと厨房を担当していたクラスメートが帰ってきた。

「気にするな。さて、俺はチノを連れて文化祭回るとするか——」

悠はビアホールを後にしてチノを探す。

「あ、いたいた！チノ、外回りは交代だったさ」

「そうですか。ちょうど私も暑くなってきたので助かりました」

チノがティツピーの帽子を脱ぐ。

その後、演劇で怪盗ラパンを鑑賞したり、喫茶店に行って新メニューを勉強したり、軽音楽部のバンドを見に行ったりと、文化祭を満喫した。

「気がついたらもうこんな時間か……。ココアたちを探るか」

「そうですね。きつとあちらも仕事が終わって回ってる頃でしょうか」

ココアたちを探していると、背後から銃を突きつけられる。

「動くな。絶対にこちらを見るなよ」

「——その声はリゼか」

「リゼさん、その服は」

「み、見るなど言っただろー！」

振り向くと、リゼがココアたちの学校の制服を着ている。

「どうしたんだ、それ」

「あの後、クラスの人が貸してくれたんだ」

「そうか」

「あれ、ココアさんは——」

チノが辺りを見渡すが、ココアたちの姿は見えない。

「はぐれたんだ」

「迷子ですか」

「迷子だな」

チノと悠の言葉にリゼが顔を赤くして

「私は別に迷ってない!!」

と叫んだ。

「あつ、私ちよつと飲み物買ってきます」

「ああ」

チノが飲み物を買っている間、リゼと2人でベンチに腰をかける。

「はあ……」

「どうした。疲れたのか？」

ため息を吐くりゼに悠がいう。

「いいや。実はさつき——シャロが『私たちが2人のクラスメート
だったら大変そうだわ』って言っていたんだ」

「——」

「私だけひとつ年上なのが——」

「なるほど……って、お前も1ヶ月遅く生まれたらココアたちと同級
生だろ。大して変わらん」

悠がそういうと、リゼが目を輝かせて「そうか——!」と納得する。

——ちよろい。

「悠さん、リゼさん。ココアさんたち見つけましたよ」

チノが飲み物を片手に戻ってくる。

ココアたちの方を見ると、シャロもこの学校の制服を着ているよう
だ。

「——そうだ!おい、リゼ、早くもどれよ」

「なんだいきなり、お前たちは――」

「いいからいいから！」

「――？」

強引にリゼをココアたちのいる場所に送り返す。チノは困惑したが、悠がカメラを取り出したのを見て察する。

そして撮れた写真を見てチノが微笑む。

「なかなかいいのが撮れましたね」

「そうだろ？」

撮れた写真を眺めながら、チノと悠もココアたちと合流した。

第七十九話 ココアの夢は路上ミュージシャン？

今日も今日とて、午後は暇な悠はフルールへ向かう。

「あら、悠じゃない」

「シャロ……」

今日はバイトではないのか、私服姿で座っているシャロを見かけた。

「どうしたの？」

「午後、シフト入れてないから暇なんだ」

「そう」

晴れた日の午後。オープンカフェで紅茶を楽しむにはベストなシチュエーションだ。

シャロとたわいもない話をしていると、路上からアコーデイオンの音色が聞こえてくる。

「——なんか、変な音が聞こえないか？」

「近づいてきてるわね」

路上から聞こえていたと思っていアコーデイオンの音色の正体はココアだった。

「パンが焼けたよ〜た〜べないなら食べちゃうよ〜」

変な歌を歌いながらココアがこちらにやってくる。

そして、座って紅茶を飲むシャロと悠の元へたどり着くと

「私の歌どお〜？」

と不協和音を奏でながら聞いてくる。

「耳から魂が出そう！」

シャロが辛辣な感想を吐き捨てるが、ココアの隣にいた千夜は「ブラボーだわココアちゃん！」

と涙を浮かべながら褒める。

「そんなに持ち上げたらココアが調子に乗るだろ」

「そのアコーデイオンどうしたの？」

シャロがココアに尋ねると、ココアはドヤ顔で「これはね〜」と説明を始める。

「さっきプロカントで手に入れたんだ〜！路上ミュージシャンになるうと思つて〜！」

「道のりは長いな……」

ココアは目を輝かせてそういうが、それとは対照的にシャロと悠は目から光を失う。

「ちよつと貸してみても、お手本見せるから〜！」

そう言つてシャロはココアからアコーディオンを借りる。

「シャロ、アコーディオンなんてできるのか？」

悠が心配そうにしていると、

「シャロちゃん、昔は鍵盤ハーモニカ上手かったのよ」

と千夜が説明する。が――。

「あ……あれ？うまく手が動かない……」

失敗するシャロにココアと千夜がクスクスと笑う。

「無理しちゃつて可愛い〜」

と茶化す千夜にシャロはアコーディオンを渡す。

「笑うなら千夜も弾いてみせてよ〜！」

「いいわよ。演歌で培つた音感を見せて――」

シャロからアコーディオンを受け取つた瞬間、千夜は地面に崩れ落ちる。

「お、重いつ……」

「自滅した！」

その翌日、悠が散歩を終えてラビットハウスへ帰ろうとすると、帰宅途中のチノに出会つた。

「あつ、悠さん、実は昨日、学校でいいこと思いついたんです」

「なんだ？」

「天気の良い日だけ、ラビットハウスでもオープンカフェやってみよ

うと思つて準備してみたんですが」

「そうだったのか!? 気がつかなかつた……」

「入口の隣に1席置いただけなので……」

散歩に出発した時にも気がつかなかつた——。

「そういえば、ココアがアコーデイオン買ったんだ。聞いたか?」

「はい。またお店で変なこと始めそうですね」

「——おつ、噂をすれば」

「——?」

ラビットハウスへ近くたびに大きくなっていくアコーデイオンの音色。

この不協和音は——ココアの演奏だ。

「うちの前で何してるんですか!」

ラビットハウスの前で妙な演奏を繰り返すココアにチノが怒鳴る。

ココアと一緒に鍵盤ハーモニカを演奏する千夜とシャロもいる。

「あつ、おかえりなさい! 誰が一番うまいか演奏合戦してたの!」

ココアが満面の笑みで言う。

「なるほどな——通りで人もうさぎも逃げていくわけだ」

悠の辛辣な一言にココアが「そんな〜!」と落ち込む。

「お前らうるさい!!」

ついにやかましい演奏に堪忍袋の緒が切れたのか、店の中からリゼが出てくる。

「リゼさん。ガツンときつく注意してください」

チノがそう言うも、リゼは

「私が指揮をする!」

と演奏合戦に参加してしまう。

「私たちがバンドを組んだらいけるよ〜! バンド名はずばり『ラビット
トレンジャー!』」

「——なぜ戦隊ものになった?」

「弱そうな名前だな」

リゼと悠は険しい顔をするが、チノは
「ラビットトレンジャー……！」
と満更でもない様子だった。

第一百八十話 演奏会 in ラビットハウス

「あつ、そういえば——」

ラビットハウスでのバイトが始まるが、相変わらず客はいない。そんな中、チノが何かを思い出したかのようにつぶやく。

「明日、リコーダーのテストがあるんです」

「そういえば、中学の時やらされたわ……」

チノの発言に悠が目を瞑る。——リコーダーのテストであまり良い思い出はない。

「ちよつと練習しても良いでしょうか」

「ああ、良いんじゃないか？客いないし」

悠がそう言うと、チノはリコーダーを吹き始める。

素朴だが、綺麗な音色だ。

外から不協和音が聞こえてくる中、このリコーダーの音だけが耳の癒しになる。

悠は外へ出てリゼたちの様子を見てみるが——。

「チノの方がうまい……」

とリゼが落ち込んでいた。

「リゼちゃんも演奏に加わるべきだよ！」

ココアが提案すると、リゼはそれを真に受けて

「そ、そうか！」

と乗っけてしまう。

「ここは打楽器か、弦楽器か——」

とリゼが迷うが、悠は倉庫から見つけたマラカスを渡す。

「楽器、それしかなかったぞ」

「なに!?——マラカスって……」

「えへへ、リゼちゃん、似合ってるよ」

ココアに笑顔でそう言われ、リゼは

「それなら私についてこい!!」

と調子に乗って大音量でマラカスを演奏する。——さらにうるさくなってしまう。

「マラカスがうるさくて集中できません」

店内からはチノの苦情の声。

しばらくして、店に青山ブルーマウンテンがやってきた。

「この素敵なセクションに呼び寄せられました」

「あ、青山さん。いらっしやい」

悠が迎える。

「ズレ方がなんとも心地よく——これが『ヘタ上手い』というものです
か」

「私も!？」

青山の言葉にチノが落ち込む。どうやら外のやかましいグループの仲間だと思われたらしい。

「もう——うるさくて仕事にならないので、止めてきてください」

チノにそう言われ、悠は店の外へ出る。

「くっ!次までにマラカス上手くなつてやる!」

と、リゼがものすごい勢いで迫ってくる。

「次があるのか……」

「仕事は!？」

落胆する悠と、ツツコミを入れるチノをスルーしてズンズンと厨房へ向かうリゼ。

「ほら、ココアも店に戻れ」

悠が呼びかけると、ココアは「は〜い」とアコーディオンを片付ける。
る。

「——思ったより弾けるんだな」

「そうでしょー!昔お姉ちゃんとよくやってたの——と、言ってもおもちゃだけだね」

そう言つてココアが写真を見せる。

写真には、おもちゃのギターを演奏するモカと、おもちゃのピアノを演奏するココア。

「そして私がこの街に来る直前に、本物になってたんだけど」
そう言ってもう一枚の写真を見せる。

写真には、本物のギターを演奏するモカと、おもちゃのピアノを演奏するココア。

「この差は一体どこで——」

ココアと話していると、チノが店から出てくる。

「いつまで話してるんですか」

「ごめんごめん」

「最後にもう一曲いくよー！ラビットハウスのテーマソング！」

ココアはそう言って演奏を始める。

「が……んばるあなたに……メロメロメロン……パン！」

途切れ途切れの歌声にチノがツツコミを入れる。

「ストップです。ココアさんは歌うか弾くか、どちらかに集中しないとズレるタイプですね」

「じゃあチノちゃん歌ってよー」

「歌う必要はないんじゃない」

ココアの提案を洩るチノ。

「まあまあ、一曲、ね？」

「——お風呂掃除3日分交代ですよ」

こうして、ココアとチノのセッションが始まる。

「——悪くないな」

「原稿が捗りそうです」

店番をしているリゼと青山がいう。

「ご苦労様クロワッサン♪可憐に華麗にカレ〜パン♪」
外から聞こえてくるチノの歌声。

「——なんで、パンの歌なんだ？」

リゼが不思議そうにつぶやく。

「すっかりココアに浸食されてるー!?!」

最後の演奏が終わり、ココアがようやく店に戻ってくる。

「私ね、チノちゃんのお母さんたちみたいになりたかったの」

「真似してたつもりだったんですか……」

「どうやら、以前チノに見せてもらった写真に影響されたらしい。」

「あと、演奏に合わせてマジックショーしちゃうの！」

「壮大な夢ですね」

「——客より店員の多い未来しか見えない」

悠がそのカオスな光景を想像してつぶやくと、

「鋭い指摘!!」

とココアとチノがツツコミを入れる。

第百八十一話 ハロウィンイベント

ラビットハウスが、ハロウィン期間に突入した。

「トリックオアトリート！」

「お菓子をよこせー！」

メグとマヤがやってくる。2人とも狼のコスプレだ。

「ヴァンパイアで対抗だよー！」

「店員もハロウィン仕様だぜ！」

ココアと悠が手を組んで相手をする。だが――。

「お菓子欲しかったらもふもふさせて〜」

「趣旨が変わってきた!?!」

そう言つてマヤとメグをもふもふし始めるココアに悠がツツコミを入れる。

「それはそうと、どうしたんだ、2人とも――」

リゼがコスプレをしたマヤとメグに尋ねる。

「知り合いの喫茶店を回ってるんだ〜」

「イベントを満喫しなきゃ」

「チノちゃんーん！」

リゼたちの隣では、何やらココアとチノが揉めている。

「チノちゃん、演技の迫力が足りないよ〜」

ココアがチノに抱きついて「血を吸うぞ〜」と脅すが、チノは

「店員はそんな必要ありません」

と全く乗り気ではない。

「でもチノ、昨日こっそり部屋で練習してただろ」

「なっ！」

悠の一言にチノが顔を赤くする。

それとは対照的に、リゼは顔を青くする。

「なぜ知っているんだ……」

「昨日、チノの部屋の前を通ったら、チノがヴァンパイアの仮装してて

――いたっ！」

悠が説明をしようとするが、チノに噛みつかれる。

「俺を噛んでどうする!?!」

同じヴァンパイアの仮装をしているのに――。

「共食いだ〜」

その様子を見てマヤが笑う。

ラビットハウスでのバイトが終了し、暇になった悠はフルールへ――
一行こうとしたが、今日は久しぶりに甘兎庵へ向かうことにした。

「ようこそ。魔女の館甘兎庵へ――」

千夜が魔女の仮装をしている。

「あれ、この店甘味処じゃなかったっけ――」

やたら気合の入った内装と千夜の言動に、悠も困惑してしまう。

「月光も届かぬ悪霊と兎どもの宴――メニュー名が余計わかりづらくなってる!?!」

メニューもハロウィン仕様になっているようだ。いつもの倍わかりづらい。

「うっ!左手がうずくつ――!」

「演技もやたら迫真的だな……」

騒ぐ千夜の方を見ると、どうやら本当に怪我をしているようだ。

「おい、本当に怪我してるじゃないか」

「さつき、かぼちやを彫ったときに切っちゃって――」

「いいのか、あんまり無理するなよ」

「大丈夫よ。この面白イベントを逃すわけにはいかないわ!」

そう言っただ店の奥へ入る千夜。そしてしばらくして大量のかぼちやを持って出てくる。

「おいおい、怪我に響くぞ」

「さすがの私もこれぐらい平気よ」

「いいからいいから」

そう言っただ千夜からかぼちやを受け取る。

「これ、どうするんだ?」

「お店に飾るの!」

「指示してくれ。俺が手伝う」

そして、ハロウインの夜がやってきた。

橋の真ん中に立っているチノを発見した。どうやらココアとはぐれたようだ。

怪盗ラパンの格好をしている。——夜なのに眩しい。

悠は後ろからチノに近づき、肩に手を置く。

「怪盗を見つけたぞ。逮捕する」

「悠さん!? 警官になってる!?!」

そして向こうから千夜が「お待ちせよ」と走ってくる。

シヤロも一緒のようだ。2人とも怪盗ラパンの格好をしている。

「なんでみんな怪盗側なんだ!?!」

「だって一回着てみたかったもの」

悠が驚きのあまり叫ぶと、千夜が答える。

だが、悠の不安は反対方向から走ってきたリゼを見て解消される。

「リゼ! お前は警官側だと信じてたよ!」

「怪盗ラパンだらけになってるー!?!」

「さ、全員揃ったところでココアを探しに行くぞ!」

悠がそういつて先導すると、後ろを怪盗ラパンたちがついてくる。

最後尾にはリゼ。

「なんか私たちが連行してるみたいだ!!」

リゼのツツコミを聞いて後ろを向くと、うつむきながら静かに一列で歩く怪盗ラパンたちが見える。

「お前ら! うつむいて一列で歩くなー!」

悠の叫び声で怪盗ラパンたちがクスツと笑った。

第百八十二話 魔法との再会

「ハロウィンって、死者の魂が戻ってくる日よね」

「仮装は紛れたゴーストに取り憑かれないよう仲間だと思わせるためにするらしいわよ」

千夜とシヤロの会話が耳に入る。

死者の魂か——ティツピーやチノの母親の登場など、香風家では割と身近な存在なのかもしれない。

「ココアさんが一番本来の趣旨に合った仮装なのかも……」

「そうかもな」

チノが千夜たちの会話を聞いてつぶやく。

確かに、本来のハロウィンイベントにあった仮装をしているのはココアだろう。

「どんな？」

「魔法使いらしい」

「へえ〜！」

千夜の問いに悠が答えると、千夜は興味ありげな反応。

——肝心のその魔法使いは行方不明なんだが。

「俺はあっちの方探してくるよ」

「わかりました。私はここにいますので、見つけたら集合してください」

分担してココアを探すことになった。

「やれやれ、手間のかかるお姉ちゃんだな」

——そこそこ時間が経った。だが一向に手掛かりはない。
「ちよつと休憩——」

悠が小高い丘のベンチに座ると、隣に魔法使いの仮装をした人が座る。

「やっぱりきたな」

「今日はハロウィンよ」

「ハロウィンじゃなくてもこの前現れただろ」

「この声——間違いなくあの日であった魔法使いだ。」

「順調みたいね」

「何が？」

「この前の話よく忘れたの？」

「ああ……」

「青春っていいなく！ねえ、私もまだ甘酸っぱい恋愛できると思う？」

「うーん……その話はまず生き返ってからだな」

悠がそういうと魔法使いは「ハードル高いなあ……」と笑う。

「なあ」

「なに？」

悠が真剣な口調で言うと、魔法使いも真剣な表情になる。

「——一回、チノに会ったらどうなんだ？」

「チノのやつ、時々少し寂しそうな顔でアルバムを見てるんだ」

「せっかくなんだ。一回ぐらいは——」

「悠くん」

悠が提案するが、魔法使い——チノの母親はそれを断る。

「そう言ってくれて、本当はすごく嬉しいの。でも——会うわけには
いかないのよ。私は本来、ここにいちやいけい存在だもの」

「それに私はすぐに帰らなきゃいけない。だから会っちゃうと余計に
別れが寂しくなるでしょ？」

「そうか……」

「あと、ここにはティッピーもいるでしょう？」

「ティッピーがああ言う状態なの、知ってるのか」

「もちろんよ。探したけど『門前払いされた』って言われていたもの。
だからきつとここにいて——チノちゃんのそばで見守っているん
だってわかったわ」

「そうか……」

「正直、ちよつと羨ましいいけどね。でも、それもいつか別れの時が来る。その時に、しっかりとお別れできるのか、ちよつと心配だけどね」

「ああ、ティツピーは少し孫離れした方が良さそうだがな」
『うえくん!!うあくん!!』

丘の下から泣き声が聞こえる。

見下ろすと、ココアが泣いているようだ。——何をしているんだ、みつともない……。

「やれやれ、本当に手のかかるやつだな」

「あら、ココアちゃん——どうしたのかしらね」

「ココアのこと知ってるのか」

「もちろん!——さ、ココアちゃんのところへ行つてあげて。私は——ちよつとだけ街を満喫してから帰るわ」

「ああ、わかった」

そうして、魔法使いと警官は別れた。

「おい、どうしたんだよ」

「悠くん!!うえくん!!」

「泣くな!泣くな!落ち着け」

ココアから事情を聞くと、どうやら迷子になった子供を励まそうと手品を披露したが失敗して、その挙げ句「手品になってないよ〜ヘタクソ!」と言われてしまったらしい。

「ほら、わかったから泣くな。みんなのところ、戻るぞ」

「は〜いつて悠くん、おまわりさんに転職したの〜?喫茶店飽きたの〜?」

「ハロウインの仮装だ!おかしいか?」

「えへへ、似合ってるよ〜」

そう言いながら去っていく2人を、チノの母親は微笑ましく眺めているのだった。

第百八十三話 ハロウインも終わり、塾の季節がやってくる。

「お、シャロか。ココアを連れてきたぞ——つてあれ、ラパンの仮装は？」

集合場所へ集まる前に、シャロと合流した。怪盗ラパンの格好をしていたはずだが、いつの間にか警官の仮装になっている。

「ココア！どこ行ってたのよ！——リゼ先輩と服を交換したのよ。ほら、匂いを嗅ぐとまだリゼ先輩の——」

「シャロ——さすがの俺でもそれは引くぞ……？」

シャロの問題発言に悠がジト目でツツコミを入れる。

「と、とにかく！ココアはみんなを心配させた罪で逮捕！」

「罰はみんなにジューズ奢りね〜」

後からやってきた千夜も便乗する。

「ごめんなさーい!!!」

ココアの叫び声が綺麗にライトアップされた夜の街に響いた。

「ハロウインもそろそろ終わりだな〜」

リゼがしみじみとつぶやく。

「ご先祖様は空に還るのね」

千夜の発言に、悠はあの魔法使いを頭に思い浮かべる。

隣ではチノが「はっ！」とティツピーの顔を見る。

「大丈夫じゃよ。わしはまだ天国に門前払いされたままじゃ」

ティツピーがそう言うと、チノはティツピーをぎゅっと抱きしめた。

「こんにちは〜！」

ラビットハウスでバイトしていると、メグが遊びにきた。

「メグーいらっしやい」

悠が出迎えると、メグはあたりをキョロキョロと見回す。

「あの、ここで塾を開くって聞いたんだけど」

「聞いてない!」

店番をしていたチノと悠がハモる。

「待ってたわ」

その時、店の奥から大人びたココアの声が聞こえてくる。——嫌な予感。

「理科教師のココアよ。秘密の実験、はじめましょ——まずはコーヒーどうぞ」

「बीカー!!」

そうやってメグにビーカーを差し出すココア。

「受験勉強を手伝ってもらおう予定だったの」

メグがコーヒーを飲みながらそう言うと、チノが「えっ……」と驚く。

「ココアさんの教え方、わかりにくいですよ」

チノのこの発言には頷ける。ココアの教え方——あれは悲惨だった。

「教師役ならリゼが適任だろ」

悠がそう言って倉庫からリゼを連れ出す。

「なに!?!受験勉強!?!」

倉庫から出てきたリゼが事情を知ると、わずかに頬を膨らませる。

「リゼちゃんったら〜生徒とられて拗ねないの!」

ココアがそう言って膨らんだ頬をツンツンと指で突くが、リゼは

「拗ねてない!」

とそっぽをむくが、ココアもそれに合わせて方向を変える。

「妬かないの!」

「妬いてない!」

そうやってココアの手首を掴むリゼ。

「手が本気!!」

ココアの手首からギリギリと音が鳴る。

そして1時間後。メグが持ってきたタイマーが鳴る。

「あっ!移動教室の時間だ〜!」

「——移動教室?」

首を傾げる悠に、メグがいう。

「そうなの。次は国語だから、甘兎庵に行かなきゃ」

「千夜が教えるのか」

「そう!チノちゃんも行く?」

「えっ、いいんですか……」

メグの誘いに困惑するチノだが、メグが「平気だよ」とうなずく。

そしてその晩、今度は悠の元へやってきた。

「なに!?俺も先生役だったのか!?!」

「悠さんは社会科の先生だよ」

「あっ、ご迷惑でしたら断ってくれて大丈夫ですから」

「いいや、迷惑なんてとんでもない。大歓迎だよ」

そうして悠が社会の授業を始めると、チノがとても真剣にやっっている。

「チノ、やけに気合入ってるな」

「はい。仕事も勉強もちやんと両立していきたくて」

「そうか」

「なんだかんだ、高校生組はみんな両立できてて——すごいです。だから私も頑張るんです」

「チノ——よし!一気に高3の内容まで進めるぞー!」

「受験勉強なのにそこまで!?!」

盛り上がる悠にメグがツツコミを入れる。

第百八十四話 青山さんの休日

「私図書館久しぶりだなー!」

「そうか?」

今日はココアと図書館で勉強するということになっている。

だが、図書館へ向かう途中青山ブルーマウンテンを見つけると、早速話が逸れていく。

「あれはもしや——青山さん!これからデートでもするの?」

やたらオシャレな格好をした青山に、ココアが目を輝かせる。

「相手はいません」

だが青山はそれを否定すると、事情を話し始める。

「今日はオフをいただいたのですが——いざ休日となるとなにをすればいいのか分からなくて……」

「じゃあ私たちと遊ぼうよー!青山さん、なにしたい?」

「図書館は……」

悠がツツコミを入れようとしたが、ココアは青山と遊びたいようだ。

青山は「うーん」としばらく考えた後——。

「では童心に返って——鬼ごっこ!」

「やれやれ。この様子だと勉強できなさそうだな」

「鬼役に電話してくる」と公衆電話の方へ駆けていく青山の背中を見て、悠は悟る。

こうして、鬼ごっこが始まった。

ココア・青山・悠の3人のほかに、鬼役としてチノ・リゼの2人、そして青山が呼んだ鬼役に編集者の人が参加している。

「よーし!悠とシャロはいないけど、新・振り回され隊!」

リゼの掛け声で「おー!」と鬼役たちに喝が入る。

「おーい!俺は!俺も振り回され隊のはず——ちよ、ココア!」

悠は、鬼役に加わろうとしたが、ココアに街の中心部を走る路面電車に乗せられてしまう。

リゼたちの後ろを通るが、編集者が

「なんだか学生時代を思い出します……」

としみじみしている間に通り過ぎてしまう。

「悠！なんということだ。我ら振り回され隊の隊員が捕まってしまったぞー！」

「ぐぬぬ……いつも肝心な時に間が悪くて——」

「なるほど、だからいつも逃げられてるのか……」

編集者の言葉にリゼが納得する。

「よーし！順調だね！」

「さすがココアさんです〜」

「やれやれ。随分遠くまできたな」

電車が終点のため、降りざるを得ない状況になった。

さて、ここからどうやって逃げるか。

「おそらくリゼたちに終点にいることはバレてると思う。早く離れたほうがいいぞ」

「そうだよね〜。どうしよう……」

駅から出て、しばらく街を散策すると、青山が「あつ」と川の方を指差す。

「この川、小舟で下ることができるようですね」

「よし、小舟に乗ろう！」

橋の上で「新・振り回され隊」が作戦会議を始める。

「ここで少し作戦を練りましょう」

編集者がそうつぶやいているのが聞こえる。

「あつ、悠さん！」

「チノー！」

チノがこちらに気がつくが、橋から川を見下ろした際にティッピーが落下してくる。

「うおっ！ティッピー、大丈夫か？」

「後ろー!!」

リゼの叫び声が聞こえるが、編集者が振り向いた時には小舟はなくなっていた。

「ティツピーー!」

チノの叫び声だけが虚しく残る。

「私の担当者——凜ちゃんはいつも間が悪いんです。だから私たちに気がつかなかったのでしょうか」

青山が小舟で話す。

「あの人、凜って名前だったのか」

何気に初耳かもしれない。

「私も凜ちゃんさんと仲良くなりたーい!そしてラビットハウスの常連さんに——!」

と、隣でココアが騒ぐが——。

「でも、捕まらないと話できないだろ」

悠が冷静な声でそういうと、青山が「では——」と口を開く。

「頃合いを見て捕まりましょう!」

「捕まるときは3人一緒だよー」

「小説なら裏切り者が出たら盛り上がりますね」

「青山さんたら〜今日は仕事の話はしないの〜」

「やれやれ……いつになったら終わるんだ、この茶番——」

逃げる側なのに振り回され隊な悠だった。

第百八十五話　メリーゴーランドニ対悠用の罟

そして、一行が乗っていた小舟は終着点へと近づく。

——悠は、とても肝心なことを忘れていた。

「しまった!」

「どうしたの?」

「リゼたちに船に乗ってることがバレてる!」

「そうだね」

能天気のココアは笑うが——笑っている場合ではない。

「つまり、終着点で待ち伏せされている可能性が高い、ということですね」

「そうだ!」

青山の発言で、ようやくココアが事態の重さに気がつく。

「そんなー!どうしょー!」

「リゼたちがいないことを願うしかないな……」

すでに詰みかけている。だが助かる方法もある。

——この3人のうち、誰かを罟にして逃げるという方法だ。

そうこうしているうちに、終着点へ到着する。

「あつ!チノちゃん!」

「おかえりです。ココアさん」

「ここが終着点か!」

ココアがいつもとは違う景色に目を輝かせる。

「お手をどうぞ」

「すまないねえ〜!よいしょ!」

ココアがチノの差し出す手を握って船から降りる。

「捕まえました」

「——へっ?」

「よくやったチノ!」

奥からリゼが出てくる。——しまった、ココアを罟にするしかない。

「逃げるぞ！青山さん！」

「はい！」

悠が青山の手を握って船から飛び降り、リゼたちがいる方向と逆の方向へ全力疾走。

「悠さん——絶対に捕まえて見せます！」

「チノが急にムキになった!？」

「そんなく!!捕まるときは3人でって言ったのにく!!」

あつさりと囃に仕立てられ上げたココアが叫ぶ。

「二手に分かれてるな」

「では私はこちらに。健闘を祈ります」

「ああ、生き残れよ」

もはや鬼ごっここというより——「生死をかけた何か」だ。当初の緩い空気ではなくなり、本気で逃げている。

「あつ！二手に分かれた！」

「よし！悠は任せろ！青山さんのほうに行ってくれ！」

リゼが凜を青山の方に向かわせ、自身は悠を追う。

「は、速いつ……くそ、逃げ足だけは速いようだな。だがここまでだ！あきらめて振り回され隊に戻ってくるんだ！」

リゼが悠を行き止まりまで追い詰める。

「甘いな。リゼ」

「なに!？」

塀を乗り越えた先には大通りがある。つまり、この塀だけ乗り越えることができたなら追跡を撒くことができる。

「塀を登るのは反則だろ！」

「知ったことか。あばよ！」

「くそー!!」

塀の向こうに姿を消す悠にリゼが叫ぶ。

その後、チノや凜と合流したりせは、青山の捜索を続ける。

「悠さんは逃げてしまいましたか」

「ああ——すまない。後少しというところで——」

「悠くんすごい！」

「あつ！あれは！」

凜の視線の先には、怪盗ラパンの格好をしたシャロだ。

どうやら、フルールが怪盗ラパンコラボを実施しているみたいだ。

「青山先生原作の怪盗ラパン〜!？」

凜が目を輝かせて「もつと近くに行つていいかな……」とシャロの方へ向かう。

「ただのファンです」

「担当さんが作家さんの一番のファンってやつだね！」

チノとココアがいう。

「あつ……」

シャロを覗き込んでいた青山と目が合う。

「つい癖でシャロさんを覗き込んでしまいました〜」

そう言つて逃げる青山を、凜は

「待てー!!青山セクハラマウンテン!!」

と全力で追う。

悠は近くにあつた遊園地に向かつていた。

「メリーゴーランドか——懐かしいな〜」

そんなことをつぶやきながら、入り口の方を見るとチノがいた。

「あ、チノ。どうしたんだ」

「メリーゴーランドに乗ってみようと思つて——」

「そうだよ！早く乗らないと回り始めちゃう〜!!」

後ろにココアもいた。——なにしてるんだこいつら……。

「あつ、せっかくだから悠、チノちゃんと乗つたら？」

なぜか怪盗ラパンの格好をしているシャロにそう言われ、

「えっ？あ、ああ、チノがいいなら」

「では、一緒に乗りましょうー！」

とチノとメリーゴーランドにのる。

「んくもふもふく」

「ココアさんみたいなことしないでください」

「デートしてるみたいだねく」

悠がそういうと、チノは「た、たまたまです」と誤魔化すが、しばらくして「あっ」と気がつく。

「どうした？」

「悠さん。捕まえました」

「——あっ」

——忘れてた。今、鬼ごっこをしているということ。

「まんまと引つかかりましたね。先輩」

「ああ。初めからこうしたほうがよかつたんだ」

シャロトリゼの会話は悠に届かない。

番外編 おめでどうの準備

あとわずかで一年が終わる時期。

外を歩くには分厚い服装が必要な時期。

クリスマスと忘年会の時期。

——12月というのは、一年の中でもなかなかカオスな時期であり、それは悠たちも例外ではない。

「ふーっ……」

長い深呼吸を終えると、横に座っているシャロが呆れる。

「大げさね。何も今から緊張しなくても」

「大げさだと？ 来週なんのイベントがあるかわかってるのか！ シャロ！」

「悠がいつもとは比べ物にならないくらい熱い!!」

シャロの肩を揺さぶる悠に、リゼがツツコミを入れる。

この店——フルールドラパンは、我ら『振り回され隊』の拠点の一つであり、毎回この場所に集結しては、ココアたち『振り回し隊』への対処法を会議する。

だが、今日に限って話は別だ。来週に迫ったこの一大イベントのために、振り回され隊も振り回し隊も、同じテーブルを囲む。

「——毎度のことだがチノがいないとイマイチ気分が盛り上がらない……」

悠がいうと、リゼが頭を抱える。

「お前というやつは——チノの誕生日会の計画を立ててるのに本人がいたら意味ないだろう！」

「そうだった」

今日に議題を忘れるほど、この会議は進行していない。——というもの。

「ココア、いい加減に起きろ」

「チノちゃん、お姉ちゃんのプレゼントも開けてみて……」

「夢の中で誕生日会開いてやがる」

「ココアがハーブティーの効能なのか知らないが、ダウンしてしまっただのだ。」

「それで、ケーキはどうする?」

「リゼちゃんの指示のもと、みんなで作りましたよ」

悠の質問に千夜が答える。リゼが心なしか嬉しそうだ。

「わ、私が上官ということだな。よし!厳しく行くぞ!」

「合点承知よ!」

リゼと千夜が謎の意気投合を見せる。

「それと、みんなプレゼントは何にするんだ?」

また悠が質問すると、リゼは驚いた顔をする。

「まだ決めてなかったのか。お前のことだからもう決めていたのかと」

「候補が多すぎて決められないんだよ」

「そうね——私はカップにしようかなって。この前の古物市で良質なコーヒーカーップを買っちゃったんだけど、私家だとあまり飲まないし」

「私はいつも甘兔庵のお得意様に渡してる和菓子の詰め合わせセットを渡そうかしら」

「シャロと千夜がいう。」

「リゼは?」

「私はこのハンドガンだ!昔からチノに合うと思っていてな。これなら比較的初心者にも扱いやすい!」

「させぬぞ!」

悠の頭に乗っていたティツピーが怒る。

「ティツピー!?!」

「——俺も最近腹話術習ってるんだ」

「適当な嘘でぐまかす。

「もつと安全なものにしてくれ」

「残念だ——」

「ココアの意見も聞きたいが——いつになったら起きるかな」

悠がココアの方を向くと、ココアが起き上がる。

「チノちゃんへのプレゼントは私でした〜!」

「——聞かなかったことにしようか」

「そうね」

盛大な寝言に悠とシヤロが目をそらす。

フルールからの帰り道。

「うーん……なにがいいかなあ」

「なんでもいいんだよ〜悠くんの気持ちがかもっていれば!」

「俺もココアみたいに『俺がプレゼントでした〜!』ってやろうかな」

「私そんなこと言ったっけ!」

ココアの驚いた声に「ふっ」と吹き出す。

「めちやくちや大きな声で言ってたぞ」

「よーし!じゃあラツピングリボン買いに行こう!」

唐突にココアが言い出す。

「もう買いに行くのか?」

「だって練習しなきゃでしょ?」

「——どゆこと?」

ココアの発言に困惑するが、次の言葉で解消される。

「悠くんを上手にラツピングしなきゃ!」

「あれは冗談だぞ?!実際に俺がプレゼントになってたら引くだろ!」

「きつと喜んでくれるよ〜!」

「逆にチノが喜んだら俺が引くわ!」

「はあ〜……」

「どうかしたんですか？」

ラビットハウスで大きなため息をつく悠に、チノが尋ねる。

「いいのが決まらなくて——」

「何の話です？」

「い、いや！なんでもない！」

「——？」

思わず喋りそうになった。慌ててごまかす。

「リゼ……何か……何か……」

「私に意見を求めるな!？」

倉庫でリゼと2人きりになったタイミングでプレゼントの話をする。

「そんなに迷っているのか」

「ああ。もういつそのこと、現金渡して『これで好きなもの買ってくれ』っていうか」

「おいおい……」

思考を停止させる悠にリゼがツツコミを入れる。

「さりげなく聞いてバレルのも恥ずいな……」

「チノのことだ。わかってても黙っててくれるだろ」

「それじゃあダメなんだよ。バレたら意味がない」

「悠が真剣に悩んでる……」

頭を抱える悠にリゼが驚く。

「——あっ」

「——ん？」

「いいこと、思いついた」

「何だ？」

リゼが尋ねる。

「——『誕生日、忘れてるドツキリ』しよう」

「いきなりどうした!？」

「思ったんだ。今の計画ではサプライズ要素が足りない。一度『私の

誕生日、忘れたんでしょうか……』って落としてからやったほうが面白いだろう?」

「——確かに」

悠の案にリゼが同意する。

「よし、この後緊急の作戦会議だ!」

——そしてこの後、会議で悠の案が採用された。

「プレゼント——」

「悠くん……」

「ココアは決めたのか?」

「私は手作りのぬいぐるみー!!」

ココアがそう言って引き出しからぬいぐるみを取り出す。

——しばらくして目が取れる。

「目ー!!?」

「そんなあくー!ちゃんと説明書通りやったのにくー!」

「ほら、さっさと直すぞー!裁縫道具とってくる!」

「ごめーん!!」

「手作りか……そういうえば選択肢になかったな」

「そうなの?」

ココアのぬいぐるみを直している途中、ふと気がつく。

「私も最初は何か買おうかなって思ったんだけど、手作りの方がお姉ちゃんを感じられるかなーって!」

「愛が重いな」

ココアの発言に悠がツツコミを入れる。

「チノが好きそうなのやつで手作りできるもの——ボトルシップ?」

「悠くん作れるのー!?」

「どうだろう。いつもチノが作ってるやつを手伝ってるだけだからな」

「ぬいぐるみ直してくれたお礼もしたいし、私も手伝うよ！」

「ちよつとの衝撃でバラバラになりそうだからやめてくれ」

「え〜浮かべても沈まないよー！」

「——だめだこりゃ」

ボトルシップが何かすらわかっていないココアの発言に悠が呆れる。

——まずは必要なものを買いに行かなくては。

「すまん、用事があるからバイト休ませてくれ」

「構いませんが、何かあるんですか？」

「ちよつと急ぎで買うものがあってな」

「そうですか」

リゼがこちらに視線を向けてくる。

——決まったのか、とでも聞きたいのだろうか。

悠はそれに頷くと、リゼが少し微笑んだ。

購入したものを部屋に搬入する際、ふとアルバムを抱えたチノを見かけた。

慌てて隠す。

「チノ。どうかしたのか？」

「昔のアルバム整理しようと思って」

「手伝おうか？」

「——お願いします」

チノの部屋に向かう。

「この本棚にまとめて入れたいんですが、時期ごとにまとめたくて。悠さん、すみませんが中の写真の日付を見て並べてくれませんか。私は本棚に入れていきます」

「ああ、わかった」

アルバムを見ていくと、チノが生まれた時のものからある。

だが、アルバムの中で最も新しいのは、小学校の時のものだろうか。

チノとタカヒロ、そしてティツピーとティツピーになる前の祖父が写っている。

その写真以降、アルバムは途切れている。

——プレゼント、2つ目が決定した瞬間だった。

第百八十六話 鬼ごっここの終焉とうさぎ革命

「残るは青山さんただ一人ですね」

悠を捕まえた後、チノがつぶやく。

「本当に逃げるの上手いな——」

感心するべきなのか、呆れるべきなのか困ったものだ。

一行は青山を捜索するが、見つからない。

「どこにいるんだろうね」

ココアがいう。

「案外、ラビットハウスでコーヒー飲んでたりして」

悠がそういうと、凜は「一応探しに行きますか!」とラビットハウスへ向かう。

そしてラビットハウスの扉をバタンと開けると、店中を探す。

「——さすがにいないか」

「そうじゃよ」

悠のつぶやきにティッピーが反応する。

だが、2階と屋上を探していたココアと凜の声がした。

慌てて向かうと、屋上にラビットハウスのバーテンダーの制服を着た青山が座ってコーヒーを飲んでいた。

「おや、バレてしまったようですね」

「何してんだ!?!」

「意外とバレないんじゃないかと思いましたが……」

「こらー! 鬼ごっこ中にラビットハウスでバイトするなー!」

凜のツツコミが響く。

こうして、やっこのことで全員捕まえることができた。

「こんなにはしゃいでる私をマスターが見たら、なんて言うかな……」

「学生の頃と変わらん」

「天のお声が!」

青山の独り言にティッピーがツツコミを入れると、青山が驚く。

その数日後、どうやらラビットハウスには新しい常連客が増えたようだ。

「凜ちゃんさんも、うちでコーヒー飲んで行つてよ〜」

ココアが誘うが、凜は

「あつ、私コーヒー苦手で飲めなくて……」

と誘いをバツサリ切り捨てた。

——常連客は増えたと言つていいのだろうか……？

「チラシ配り？またパン祭りやるのか」

「うんうん」

「また変な単語がないか、チラシを調べるぞ」

「今回は大丈夫だよ〜！」

容赦ないリゼの言葉にココアが喚く。

そして、公園でチラシ配りをやることになった。

「——つてあれ、チノは？」

チノがいないことに気がつく、公園を見渡すと草むらにシャロと2人でいた。

「チノ、どうしたんだ？お前がサボりとは珍し——シャロ!？」

2人がいる草むらに向かうと、うさぎに囲まれたシャロと、遠くからゆつくりとシャロに近くチノがいた。

「チ、チノちゃん……もう5分も経過してるんだけど……」

シャロが震えた声でいうが、チノは慎重だ。

「間合いを凶ってるんです。不用意に近づくとともふる前に逃げられま
す」

——そうか、チノのためにシャロが我慢して動かないのか。

そして、チノがシャロに飛びかかる。

シャロは離れたところまで飛ばされるが、うさぎはきよんとした

顔でチノの周りに座る。

「——うさぎが、逃げない？うさぎが逃げない!!」

うさぎが逃げなかったことに大喜びするチノ。

だがシャロの被害は甚大だ。

「シャロ、しつかりしろ」

「うっ……悠……私もう……」

「今うさぎを退かすから！意識を保て！」

「これは夢……!?!」

目を輝かせるチノとは対照的に、シャロの目からは光が失われる。

「悠さん！シャロさん！私、うさぎに懐かれたの初めてです！——わあっ!?!」

嬉しそうにこちらを向いたチノが、ようやくシャロの悲劇に気がつく。

「ちよつと待つてください」

チノもシャロに乗ったうさぎを退かす。

「2人とも……ありが……」

シャロが感謝の言葉を言いかけたが、次のチノの行動で悲鳴に変わる。

チノはシャロに乗ったうさぎを持ち上げると、抱きかかえたままシャロの隣で横になる。

「悠！早くなんとかして——!!!」

チノとシャロに一気にうさぎが集まると、シャロが盛大な悲鳴をあげた。

第百八十七話 ワイルドギース・チノ

「ところで、2人はどうしてここに？」

「ああ、チラシ配りにきたんだ。今度ラビットハウスでパン祭りをやることになってな。——シャロはこれそうか？」

悠が尋ねると、シャロはチラシを眺めながら「そうね……」と考える。

「メロンパン、おいしかったな……」

「あ、あの……私の新作コーヒー……」

チノが最近開発した新作のコーヒーを紹介しようとするが——

「パン祭りですか。私も前回惜しくも行けなかったですね」

と青山がシャロの太ももに話しかける。

「また目線が下に!？」

シャロが青山の視線をかわすと、青山はすぐに物陰に隠れる。

「どうした——あつ、凜さん」

向こうのほうから青山の担当である凜が駆け寄ってくる。

「凜さんもパン祭り、どうですか？」

悠がチラシを渡すと、凜がチラシを眺める。

「食べ放題ですか——時間が空けば行けなくはないですね」

「あ、あの……コーヒーも……」

チノが凜にコーヒーもと勧めるが、凜には聞こえなかったようだ。

「楽しみですね」

「これるのか？逃げ場として利用できなくなっちゃったが」

「あれ、チノちゃんは？」

今度はシャロがチノがいなくなったことに気がつく。

チノは道端で座り、ワイルドギースを頭に乗せて草をくわえている

——ワイルドギースが憑依したような状態になっている。

「ラビットハウスはパン屋じゃないんで——じゃないんだぜ……。み

んなはコーヒー嫌い……なんだぜ……」

「グレた!？」

「不良チノちゃん!？」

コーヒーが注目されなくて拗ねたらしい。

「おい、草を食べるな」

「そこなの!？」

悠のツツコミにシャロが驚く。

ふと、シャロが以前悠に言っていた言葉を思い出す。

『——高1クライシスって知ってる？中学生から高校生になる時、精神的に病みやすいの』

「チノ！高校生になるまでグレるの待てよ！」

「どういうことですか!？」

悠の唐突な発言にチノが思わずいつもの口調に戻る。

「あら、みんなどうしたの？」

千夜があんこを抱えてこちらに来る。

「千夜！ワイルドギースがチノに憑依したんだ」

「それならあんこもライド・オーン！」

「こら！チノちゃんて遊ばないの！」

ふざけてあんこをチノの頭に乗せる千夜にシャロがいう。

——あんこを乗せられたチノは、今度は一切動かなくなった。心なしか目があんこに似ている。

「今度はあんこみたいになったな……」

「すごいっ——！降霊術だわ！」

「あんこ生きてるでしょ！」

3人の言葉に、チノは「ふっ」と吹き出すと、

「すみません。ちよつといたずらしてしまいました」

「まあくやんちゃになったわね〜」

微笑みながらチノの頭を撫でる千夜とは対照的に、シャロとティツピーと悠は深刻な顔をする。

「——まずいな、ココアに似てきてる」

「末恐ろしいわ……」

小声で会話するシャロと悠にチノは首を傾げた。

「客、来るかな」

チラシ配りの帰り道、悠がボソツとつぶやく。

「ココアさんのパンも、リゼさんのパスタもおいしいので大丈夫です」

「そ、そこにチノのコーヒーも追加すれば最強だな！」

「——今更フオローしても遅いです」

「そう拗ねんなよ」

「拗ねてませ——ないんだぜ……」

その言葉で大笑いする2人だった。

番外編 おめでどうの日

「それで、プレゼントは決まったのか」

倉庫でのひととき。リゼが言う。

「ああ。だけど昼間ボトルシップ作っているとバレルから、作業は全部夜だ。それに昼間はバイトやケーキ作りなんかもあるからな」

「そうか……。だが忙しいなら無理に参加してくれなくてもいいぞ。誕生日当日に倒れたりしたら元も子もない」

「わかってるよ」

リゼの心配はありがたいが、ここは頑張り時だ。

「悠さん、今日の夜ですが——一緒に映画みませんか」

「すまん、ちよつと用事があるんだ」

「そうですか」

少し残念そうにしているが、仕方がない。

「代わりにお姉ちゃんが一緒に見てあげるー!」

「ココアさんはどうせすぐ寝るじゃないですか」

「起きてるよ」

「やれやれです」

半ば強引にチノの部屋に向かうココア。——ナイスフォローだ。

「がんばってね」

「ああ。ありがとう」

去り際、小さな声でそう言うココアが、珍しくもお姉ちゃんに見えた。

黙々と作業を続ける。

——始める前からわかっていたことだが、結構難しい。こんな作業を根気よく続けているチノに感心してしまう。

そして、『アルバム作り』も並行して行う。キャンプの時など、ココアやチノが撮りためた写真をアルバムに閉じていく。

——翌朝。

「おーい、大丈夫か」

いつも倉庫で座っている木箱に腰をかけたまま寝てしまったようだ。

リゼが起こしに来る。

「眠い」

「だろうな。起こすかどうか迷ったんだが——あまり倉庫に閉じこもっているとサボってると思われるぞ」

「そうだな。たまにはチノの可愛い顔でも拝見しにいくか……」

「本当、お前は相変わらずだな……」

悠の発言にリゼが苦笑いする。

その晩も、その次の晩も、ひたすら作業に取りかかった。

「いよいよ明日だな」

「そうね」

今日は甘兎庵でケーキの試作会だ。

「ココア……いちご盛りすぎじゃないか？」

「多いほうが美味しいよ〜！」

「お前が食べたいだけだろ」

もはやケーキのトッピングというより、いちごにケーキがトッピングされてると言ったほうがいくらかの量だ。

「生地をもっと改良しなきゃダメね」

「ああ。それといちごに偏りすぎだ」

「シヤロちゃんとリゼちゃんがいつもより鬼教官だよ〜！」

次々と改善点を挙げていくシヤロとリゼにココアが悲鳴を上げる。

「大丈夫、私とココアちゃんが組めば天下統一も夢じゃないわ！」

「千夜ちゃん……！」

ココアと千夜が手を結ぶ。

「——茶番はいいから早く手を動かせ」

「悠くんも鬼教官！」

その晩も、悠はプレゼントの製作を続ける。

「——さあ、クルーを乗せたら完成だ。」

アルバムの方は、明日にならないと完成しない。

アルバムの最終ページ。ここに明日の誕生日会の写真を入れるのだ。

そして当日。

「——」

——おかしい。少しくらいはそわそわするのではないかと期待していたが、いつもと変わらない表情だ。

「おはようございます」

「あ、ああ。おはよう」

——ここまで無表情だと逆にこちらがそわそわしてしまう。

「——どうかしたんですか？」

「いや、今日は寒いなーと思って」

「そうですね。風邪をひかないようにしないとです」

しばらくしてチノがハツと気が付く。——今日が自分の誕生日であることを思い出したか。

「ココアさんを起こしに行かないと」

「そっちかーい!!」

「どっちですか」

思わずツツコミを入れてしまった。だが気付いていない様子。

「なに？チノが自分の誕生日を忘れてる？」

「ああ、誕生日会を匂わせないようにしてるからかもしれないが、多分忘れてる」

リゼに相談すると、リゼも困惑する。

「自分の誕生日を忘れてるって——」

「チノちゃん……お姉ちゃんが一生忘れないように盛大に祝ってあげるからね……」

「なんで泣いてるんだ!？」

泣きながらそういうココアにツツコミを入れる。

「今日はお店が休みなので、何かして遊びましょう」

「なにをするんだ?」

「——なにをしましょう」

「考えてなかったのか」

——平常心を保たなくては。『なにもないただの休日』を演出しなくては。

「チノちゃん! あーソーぼー!!」

「——ココアさんはいつでも元気ですね。今日は寒いので家で遊びます」

「いつもだいたい家で遊んでるでしょー! たまには外で遊ぼうよ!」
「お断りします。そんなに外で遊びたいなら、ひとりで遊べばいいじゃないですか」

——これがアウトドア派とインドア派の違いか。これだけ断られてもまだ誘いに来るココアのメンタルが信じられない。

結局、なにもないまま夜になってしまった。

「チノちゃん! 目隠しして!」

「なんですか、いきなり。イタズラでもするつもりですか」

「違うよー! いいから目隠しして!」

「——」

半ば強制的に目隠しを被せるココア。

——ホールではリゼたちが誕生日会のセッティングを進めているはずだ。

「チノちゃんもふもふ」

「やっぱりイタズラするじゃないですか」

「ココア——そういう趣味だったのか」

「どうということ!?!」

「ほら、早くいくぞ」

「了解でありまーす!」

終始困惑するチノを置いて、ココアはチノの手を引っ張る。

そして、ホールに到着した。

「さあ、チノちゃん、目隠しを外して」

「もう……なんですか……。——なにしてるんですか」

目隠しを外したチノが驚く。

一斉に「誕生日おめでとう」と叫ぶ。そしてリゼがケーキを持ってきた。

「——誕生日?」

チノの困惑した声でお祭り騒ぎだった一同が一気に固まる。

「おいおい、実は誕生日違ったオチとかやめてくれよ」

悠が苦笑いしてカレンダーを持ってくる。

「12月4日——私の誕生日でしたか」

「やっぱり忘れてたのか」

「こんな派手にお祝いしてもらったことはなかったの」

派手に装飾された店内と、豪華な料理を見てチノがいう。

「こんなことまでして——本当にしようがない皆さんです」

「まあそう照れるなよ」

「べ、別に照れてないです!」

そんなチノと悠の会話を見るリゼとシャロ。

「あの2人は相変わらずだな」

「そうですね、先輩」

「さあ、プレゼント渡すよー!」

「プレゼントまで用意してたんですか!?!」

さらに驚くチノ。

「お姉ちゃんからはお手製のぬいぐるみ!」

「——可愛いです。ありがとうございます」

「私からは服だ!サイズ間違えてなければいいんだけど——という

か、本当はハンドガンをプレゼントしたかったんだが」

「——ハンドガンじゃなくて良かったです。ありがとうございます」

「私は甘兎庵の和菓子詰め合わせセットよ！これからも甘兎庵をよろしくね」

「はい、こちらこそ。ありがとうございます」

「私は古物市で見つけたコーヒーカップよ！」

「シャロさん——！コーヒー好きになってくれて嬉しいです！ありがとうございます」

「——本当は衝動買いしちゃっただけなんだけど……」

シャロが苦笑いしてボソツとつぶやくが、目を輝かせるチノ。

「すまん、用意するの、忘れてた」

「私は構いませんよ。むしろ皆さんの方こそこんないいものを——ほんとにありがとうございます」

かなり片言になってしまった気がするが——気付いていない様子だ。

これはサプライズ成功の予感。

「わーっ！」

「どうした、ココア」

「ラッピングリボンが絡まって——チノちゃん！私もプレゼントだよ！」

「——さてはラッピングリボンの入った袋、頭から被りましたね」

「えへへ……」

そのやりとりを見て、リゼがそっぽむく。

「おやおや、どうしたのかな？」

「うるさい！鈍感のくせにこういう時だけ煽りにくるな——！」

「お前に言われたくないぞリゼ——！」

はしやぎ回るリゼと悠を見てシャロも妬いたのはまた別のお話。

誕生日会がお開きになった後、悠はチノを部屋に呼ぶ。

「なんででしょうか」

「プレゼントだ」

「——急ぎで用意してくれなくても良かったんですよ」
「これをすぐに作れると思うか？」

悠はそう言いつて隠していたボトルシップを差し出す。

「——これって」

「ボトルシップだ！」

「すごいです！一人で作れたんですか！」

「ふふーん」

得意な顔をする悠を、遠くから見守っていたココアとリゼが「わかりやすい……」とつぶやく。

「サプライズ大成功だね」

「悠のやつ——苦労した甲斐があつて良かったな」

「すごいです！私たちが船に乗ってます！」

「そうなのー!?!」

「なにーっ!?!」

チノの発言に隠れていたココアとリゼが飛び出す。

「野次馬め——」

ボトルの中の船に、みんなが乗っている。

「これ入れるの大変だったんだぞ〜」

悠がそういうと、チノが悠の手を握る。

「チ、チノ?！」

思わず顔が赤くなるが、チノはこちらを見つめて

「良かったら、これからも私とボトルシップ作りませんか！」

「あ、ああ！こちらこそ！」

「めでたしめでたし〜」

ココアがそう言つて、盛大に誕生日は幕を閉じる——。

「おい、勝手に話を終わらせるな」

「ふえっ？」

「まだあるんですか？」

「2つめのプレゼントはこれだ！」

「——アルバムですか」

悠が引き出しからアルバムを取り出す。——出来立てホヤホヤのアルバムだ。直前まで作っていたことは内緒。

「前にさ、一緒にアルバム整理したじゃん？あの時気付いたんだよね。チノ、最近のアルバム持ってないだろ？」

「——はい……。」

「だから俺が作った」

そつとアルバムを開くチノ。今までの思い出が全て再生される。

「——全く、本当にしようがない悠さんです……。」

嬉し涙を隠すように、チノは背を向けた。

第百八十八話 特製コーヒーとパン

「さあ！一気に焼くよー！」

「パン祭りの時だけは真面目に働くんだな……」

「いつも真面目だよー！」

厨房でパンを作ることになったココアと悠。

だが、しばらくしてリゼが店にくると――。

「2人ともお疲れ。悠、私が厨房で料理作るから、お前はホールに回ってくれ」

「――」

「な、なんだ？」

「理由、それだけ？」

「どういう意味だー!？」

悠がジト目でリゼを追い詰めるが、追い払われてしまった。

「悠さん。リゼさんと交代ですか」

「ああ。全く、リゼも重症だぜ」

「――？」

困惑したチノを置いて、2人で掃除にかかる。

――あと数分もすれば開店時間だ。

今日からパン祭り。それなりに客は来るだろう。

「ラビットハウスがパンのお店にならないでしょうか」

チノが不安そうにつぶやく。

「大丈夫だ。チノのコーヒーもおいしいから」

「またそんなこと言って――褒めてもなにも出しませんよ」

そう言いつつ心なしか少し嬉しそうなチノに思わず頬が緩む。

「やつほー！遊びに来たよー！」

マヤとメグが店にやってきた。

それに続いてシャロと千夜もやってくる。

「私はコーヒーももらえるっ？」

「おい、カフェインで酔うぞ。大丈夫か？」

シャロの注文に悠が心配するが、シャロは

「今日は飲みたい気分なの」

という。

「バータイムのセリフみたい」

「私も飲みたい気分だよ」

シャロの発言にマヤとメグが笑った。

「千夜は？」

「私は抹茶を——」

「コーヒー頼みなさいよ」

抹茶を注文する千夜にシャロがツツコミを入れる。

「はいはい！私モカチーノ!!」

「お前は仕事しろ！」

厨房の方から出てきて注文するココアをリゼが厨房へ連れ戻す。

「今日のために頑張ってブレンドしてみました」

そう言っただけでチノがコーヒーカップを差し出す。

「なんかかわいいのきた」

マヤが思わずそうつぶやいてしまうほど、今回は一段と気合が入っている。

ホイップで花が作られている。

「飲むのがもったいないわね」

「ゆっくり味わっていただきましょ」

千夜とシャロがそう言っただけで口を運ぶ。——次の瞬間、シャロが倒れた。

そして、その後青山と凧も店にやってきてコーヒーを注文する。

「凧さん、コーヒー苦手なのがいいんですか？」

悠が尋ねると、凧は「大丈夫です！」と答える。

「ぶっ倒れるほどおいしいと聞いたので」

「シャロの反応が特殊なだけだぞ!？」

しばらくして、青山と凜の元へコーヒーとパンが運ばれてくる。「おいしい……。苦手でも飲みやすくしてくれたんですね。これなら青山先生の徹夜にも付き合えます」

凜がそう言った直後、青山の手からパンが落ちる。——顔が青ざめている。

「ちよつと拝借——」

「あつ、仕事中に……」

チノのコーヒーをつまみ食い——否、つまみ飲みする悠にチノが注意する。

コーヒーを一口飲んでみると、普段のコーヒーとはまた一つ違った特別な味がした。

「いつもよりおいしいが、いつもと変わらない」

「なにを言ってるんですか？」

妙な悠の食レポにチノが困惑する。

「つまり、チノのコーヒーは昔からおいしいってことだ」

「ココアさんに味覚音痴移されたんですか？しよがないですね」

そう言っつぽを向くチノだが、マヤに

「チノ、なんかにやけてない？」

と言われてしまう。

「にやけてません!!」

「やれやれ。ココアの影響か、感情表現がするようになってきたな」

「リゼさん！」

「あはは、ごめんごめん」

「今日も平和じゃのう」

「そうだな」

一同のやりとりを見て、ティツピーと悠がつぶやいた。

第百八十九話 いかがわしい店

「あれ？ココアは？」

ある日——ラビットハウスのバイトがあるため、ホールにやってきた悠が違和感に気がつく。

そう、やたらラビットハウスが静かなのだ。

そしてだいたいこういうときには、ココアがいない。

「ココアさんは他のお店に浮気してしまいましたよ」

「なんだと!？」

「——なんでお前が驚いてるんだ？」

チノの問題発言に深刻な表情を浮かべるリゼに悠がツツコミを入れる。

「どこの店だ？」

「それが——今日の朝突然『他のお店でアルバイトするから〜!』と言って飛び出してしまつて——聞きそびれてしまいました」

「えー!？」

怪しい。これは何かを隠しているな。

「ココアが他の店でバイトつて——余程のことじゃないか？」

「そうだな」

「困つたものです。帰ったら詳しく聞きましょう」

チノの発言に一同がうなずいた。

だが、本人にバイト先を確かめるまでもなく発覚する。

今日は休日だが、午後は休みなのでまたフルールへ顔を出しに行く。

「シャロ！大変だぞ！またココアが何か企んで——つてどうなつてんだこれ!？」

フルールへやってきた悠は早速、同じ『振り回され隊』であるシャロに報告するが——。

「おいでませー!」

悠を出迎えたのは、シャロではなくココアだったのだ。

「挨拶が違うって言うてるでしょー！あと、必要以上に胸を張るなー！！」

「そうだそうだ！この店の第一印象が『いかがわしい店』になるだろー！」

「なんで胸ー!?」

シャロと悠の言葉にココアが困惑する。

「で、これはいったいどういうことかな?」

「いやあく実はもうすぐ冬だけど、『あれ』は避けて通れないでしょ?」

「——なるほどね」

ココアの一言で理解した。要するに、クリスマスに必要なお金を稼ごうというわけか。

「だけど、バイト掛け持ちする必要あったのか?」

「クリスマスの資金集めもだけど、私今金欠なんだ……」

「古物市でガラクタ大量に買ってきた反動がきたか」

「ガラクタじゃないよー!」

「ドアノブはどう見たってガラクタだろ!」

口論するココアと悠にシャロが「全く……しょうがないわね」と呆れる。

注文を頼もうと店員を呼ぶと、店の奥の方から『そいやー!!』の掛け声の後、『ガツシャーン!!』と爆音がする。そしてシャロの叫び声。

——しばらくしてココアがやってきた。

「はーい！悠くん、ご注文は?」

「鈍器?」

注文を尋ねにやってきたココアの手には、お盆ではなくハンマーが。満面の笑みを浮かべているのが怖い。

「ごめんごめん。貯金箱割ってたの〜」

「びっくりした……」

その日の帰り、ココアが悠に言う。

「あ、悠くん！帰ったらチノちゃんに帰り遅くなるって言っておいて！」

「まだ何かバイトがあるのか？」

「実はここ以外にもバイト掛け持ちするんだー！」

「頑張るわね」

シャロがココアの発言に驚く。——このとき、シャロも悠もこの後『ココア地獄』がやってくるとは思ってもいなかった。

「ただいま〜」

「おかえりです」

「おかえり〜」

悠がラビットハウスへ戻ると、チノとリゼが出迎えてくれる。

「っておいリゼ！どうしたんだこのパン!？」

「えっ？あっ……」

「リゼさん、トーストの注文は受けてないです」

「すまない……あいつが焼いたパンを見ると、騒がしかった頃を思い出してさ……」

「ココアさん……ちよつと寂しいです」

——この重い空気、ココアがフルールにいたことを言い出しづらい。

「フルールですか？」

「ああ、見て驚くなよ。——覚悟はできたか？」

「——やけに慎重ですね」

その日のバイトが終わったので、ココアが働いているフルールへチノを連れてきた。

——この世の中は常に理不尽で不思議なことであふれている。シャロのフルールの制服姿は確かにいかがわしいが、ココアの制服姿

は刺激が強すぎる。

「悠くん！2度目のおいでませー！」

「その挨拶違うだろ！」

「悠くんがシャロちゃんみたい！——つてあれ、チノちゃんもいる——」

「ココアさん——」

「なあに？」

「——なんでもないです」

「チノ……言いたいことはわかるぞ……」

「なにになー？」

わずかに頬を赤くして目を逸らすチノに悠が同調する。

第百九十話 街にココアが大量発生？

その日の翌日。

今日はラビットハウスが休みの日。

久しぶりにチノと2人で街に出かけた。——特に目的があるわけでもないが。

「ココアのやつ、今日もバイトなのか」

「全く……古物市で調子乗るからです」

「ごもつともだな」

そんな話をしながら適当に歩いていると、自然公園にたどり着いた。

「あ、クレープ屋があるぞ。久しぶりに食べるか」

「はい」

自然公園に屋台を出しているクレープ屋の方へ向かう。

「ココアー!?!」

「ココアさん!?!」

「はい！新人のココアです！」

「——」

クレープ屋にココアがいたのだ。一緒にシヤロもいる。

「いや〜掛け持ちすると疲れますなあ〜！シヤロちゃんはいつもこんなに働いてすごいね〜！」

ココアが悠たちのクレープを作りながらシヤロにそう話すと、シヤロは少し顔を赤くして

「べ、別に、慣れれば大変じゃないわよ」

と強がる。

「まあ、ココアちゃんがバイト掛け持ちしてるの？」

「ああ、フルールと自然公園にあるクレープ屋にいた」

「あらあら……うちにも来てくれないかしら」

「——そっちですか」

お昼を食べに甘兎庵へやってきたチノと悠は千夜にココアのことを話す。

注文の品を持ってきた千夜がチノと悠に言う。

「ココアちゃんがないのは寂しいけど、私嬉しいわ。——デートのお食事にうちを選んでくれて」

「別にデートじゃないです」

「そうそう、ただ散策してるだけだ。茶化すな」

茶化す千夜に目を逸らすチノと悠だった。

甘兎庵での食事を終え、悠が大事なことを思い出す。

「しまった！今日の午後から青山さんの新作発売とサイン会があるんだった！」

「すっかりファンです」

「ほら急ぐぞチノー!!」

「待ってください。食べた後に走ると横腹が……」

チノの手を引いて走る悠にチノが止める。

「あら悠。まだチノちゃんとデートしてたの?」

書店へ向かう途中、シャロと遭遇した。

「ああ。シャロはなんで急いでるんだ?」

「今から書店でバイトなのよ!」

「そうでしたか。私たちも書店に行こうと思って」

「なら一緒に行きましょう」

そして書店に到着した。

「今なら青山先生の新作小説を買いとサインつきますよ」

「ココアー!!」

「ココアさん!」

「ヒイツ!」

——なんと、書店にもココアがいたのだ。

さすがにシャロの顔も青ざめる。

「なんでまたあんたがいるのよー!!」

「凧ちゃんさんの紹介でバイトしてるんだ〜」

「凧さん、なんでうさぎの衣装?」

うさぎの被り物をかぶっている凧に悠が聞く。

『うさぎになったバリスタ』です〜!」

凧のかわりに、同じ衣装を身につけている青山が答える。

「青山さんも面白いこと考えるね〜!」

ココアが凧にいうと、凧がきよんとした表情になる。

「凧さんも大変ですね。付き合わされて」

「優しいです」

悠とチノが凧にそう言うのと、凧は顔を赤くする。

「す、すみませ……これ考えたの私……です……」

「凧ちゃんさんの案だった!」

ココアがツツコミを入れた。

「ねえねえ悠くん!リゼちゃんたちにクリスマスプレゼント買おうと思っただけど、どれがいいかな?」

「店員が客に聞くなよ。——そうだな、こっちはどうだ?」

悠が指差した本をココアが手に取る。

「それっぽい!」

「違うわ。先輩はこっちよ」

シャロが間に入ってきた。

「それはチノちゃんぽいよ〜」

「——私っぽい?」

困惑するチノを差し置いて、本選びに熱が入るココアとシャロ。

「あいつら、なんかめちゃくちや仲良くなってるな」

「そうですね」

「って、今買うんじゃないのか!?!」

「今選んでバイト代入ったら買うよ〜！今、私はお財布も胸も寂しいの……」

ココアがそう言うと、シャロが

「あんたの胸は寂しくないでしょー！！」
と怒鳴る。

第百九十一話 思春期の悩み

事件——それは毎回突然起きるものである。

それは、ココアがクリスマスマスの資金集めのために今日もフルールへバイトへ出かけている間に起こった。

「今日も暇だな」

「ああ、そうだな。チノはまだ学校か」

「多分そう」

今日は早めにラビットハウスへやってきたリゼと悠の2人で店番中だ。

チノは学校から帰ってきている途中なのだろう。

「——」

「——なんだよ」

やたらこちらを見てくるリゼに悠が首を傾げる。

「——いや、そういえばチノと悠ってどこまで進んだのかなと思って」

「——?」

リゼの発言に困惑する悠にリゼは少しホツとしたようながっかりしたような、中途半端な表情を見せる。

「奥手と鈍感か——やれやれだな」

「お前が言うな」

「私そんなに奥手か!？」

「お前は鈍感の方だ」

——奥手なのはシャロの方だろう。

「ただいまです」

「おかえり〜」

チノがラビットハウスへ帰ってきた。

「お2人ともお疲れ様です。すぐに着替えてきますね」
「ああ」

リゼが短く答える。

「暇だから倉庫で日向ぼっこするかな」

「ココアみたいなことを言うなよ……」

悠のサボリ発言にリゼが呆れる。

——いつも通りの日常。静かで暇な時間だが、苦痛どころか、この状況が心地よく思えてしまう。

だが、この平和な空気はチノの一言によつて一気に気まづい空気へと変化する。

「あの、リゼさん……ちよつと」

「なんだ？」

リゼがチノの方へ向かう。——悠はこの時、何か嫌な予感がしていた。

チノがリゼの耳元に近づいてから静かに言う。

「——胸は、誰かに揉まれると大きくなるって話、本当なんですか？」

「なななななな、なにー!!?」

「リゼ?」

リゼが顔を真っ赤にして叫ぶ。

「だ、誰からそそそその話を!?!」

「学校でマヤさんが言っていたんです」

「マヤー!!!」

「——なんなんだ」

チノとリゼの会話を知らない悠はただ1人取り残される。

「違どうぞチノ、それは迷信だ」

「何の話？」

「悠!お前だけには絶対に話せない内容だ!」

「俺の悪口か!?!」

「悪口ではないが——チノの今後に関わる話だ」

「進路?」

「——それも違う。悪いことを言わないから詮索するのはやめたほう

「がいいぞ！」

リゼに真顔でそう止められ、悠は困惑したまま買い出しに行くことになった。

スーパーでシャロと遭遇した。

「シャロも買い出しか」

「ええ、そうよ。ココアがクッキーを大量に焦がして在庫が切れたの」「ココア……」

フルールで何が起こってるのか考えるのも躊躇ってしまう。

「それより、どうかしたの？暗い顔して」

「いや……チノとリゼが何か重大な話をしてるみたいでさ。ちよつと気になって」

「先輩が悠に内緒にするってことは、相当のことなんじゃない？」

「やっぱりそうだよな。だから余計に心配なんだよ。まあ、リゼはしつかりしてるから大丈夫だと思うけど」

その後、シャロと別れてラビットハウスへ帰ろうとすると、今度はマヤとメグに遭遇する。

「やつほー！悠、元気？」

「こんにちは」

「マヤとメグか。何気に久しぶりだな」

「お使い？」

「まあな。お前らは？」

「私たちはフルールに行くんだ！」

「ココアちゃんに誘ってもらったの」

「そうか」

悠はラビットハウスでのチノとリゼのやりとりを思い出す。

——マヤが関係してそうだ。

「ところでマヤ。お前、チノに何か言ったか？」

「私？何か言ったわけ……？」

困惑するマヤにメグが「昼休みのことじゃない?」と助言する。

「あー!言ったよ!そういえば悠にも言わなきゃ!」

「なんだ?」

「チノが胸を大きくしたいって悩んでたからアドバイスしたの!」

「それと俺がどう関係するんだ?」

悠は尋ねてから、自分がパンドラの箱を開けてしまったことに気がつく。

「マヤちゃんが『胸は誰かに揉まれると大きくなる』って言う話をチノちゃんに——」

メグの発言で辻褃が合う。

「なななな、なにー!!?」

——こうして、ラビットハウスは定期的にやってくる『気まづい空気』に見舞われることになった。

第百九十二話 気まづい空気と事件前夜

——何ともいえない空気が漂う。

チノは特に気にしていないようだが、リゼに関しては重症だ。相当チノの発言を気にしているらしい。

「リゼ？そのカップは今さつき洗ったばかりだぞ？」

「えっ!? あ、そうだな。すまない」

「おいおい……」

その後も失敗を続けるリゼに、悠が倉庫へ呼び出す。

「すまない……上官の私がこんな——」

『上司』だろ。——それはともかく、本当にどうしたんだ？ さつきのチノの言葉を気にしてるのか？」

「ああ……ちよつとな」

——マヤから聞いたと言う話はするべきなのか悩む。

「私もできればお前を頼りたいが、今回ばかりはチノに関わる話だからさ……」

「胸を揉むと大きくなるって話？」

思っていることが口に出てしまった。案の定リゼは顔を真っ赤にして叫ぶ。

「なぜ知っているんだー!!？」

「静かにしろ。さつき買い出し行っただろ、その時にマヤと会って——」

「なるほど——ならもう話すしかないな。私はどうするべきだと思う？」

悠はしばらく考える。

チノがマヤの発言をリゼに伝えたのはなぜだろうか。

——答えはすぐに出た。

「——なるほどねえ……」

「どこを見てるんだ!」

リゼに軽く叩かれる。

「いやあ、チノがなんでリゼに話したのかなくと思って……」

「どういう意味だ?」

「マヤの理論でいくと、つまりリゼは胸を誰かに——うわあああああ
あ!!!」

「今、倉庫から悲鳴聞こえたような気がしました」

「気のせいじゃろ……。触らぬ神に祟りなしじゃ」

ティツピーが悠の悲劇に目を瞑る。

しばらくしてリゼが倉庫から出てくる。

「リゼさん。倉庫の方が騒がしかったですが大丈夫ですか?」

「心配するな。悠を軽く木箱の山に埋めただけだ」

「喧嘩はほどほどに……」

手を叩いて付着したホコリとゴミを払う。

「ただいま~!!」

満面の笑みでココアが帰ってくるが、すぐに異変に気がつく。

「あれ?どうしたの?」

「別に……」

「なんでもないぞ」

ココアの質問に悠とリゼが視線を逸らす。

「そんなこと言わずにお姉ちゃんに相談してみてー!」

リゼがチラツとこちらに視線を送ってくるが、悠は首を横に振る。

——この件、ある意味ココアに相談するのが一番危ない気がする。

「はあ……」

「どうしたの?チノちゃん」

夕食の途中、ため息をつくチノにココアが首を傾げる。

「いえ、ココアさんはいいなと思ひまして」

「えへへ、いいでしょー!」

ココアの隣に座っている悠が軽く合図を送る。——全く、こいつはいつも天然でやらかす。

「そこは同意するな、バカ!」

小声でココアを牽制すると、ココアは何かを勘違いしたのか、ハンバークを一口、悠に近づける。

「しようがないなくほら、お姉ちゃんのわけてあげるよ! はい、あーん!」

「いらんわ」

悠が払い除けると、ココアは不思議そうな顔をして

「あれ? 悠くんもチノちゃんも、私の方がハンバーグ大きかったから欲しかったんじゃないの?」

「大きいのはそこじゃ——いや、なんでもない」

危うく爆弾発言をするところだった。

その日の晩、チノやココアとこの前見損ねた映画を消化して、そのまま寝ることになった。

「今日はチノちゃんの部屋でお泊まり会だね」

「部屋に戻って寝ればいいのに……」

悠がボソツとつぶやくが、ココアがそれを拾う。

「ダメだよみんな一緒に寝なきや! チノちゃんが怖がつてるよ?」

「別に怖がつてません。ココアさんの方こそ本当は怖くて一人で眠れないんじゃないんですか!」

「ココアはほとんど寝てただろ」

毎回、ホラー系の映画を見た後に行われる会話だ。

床に布団を敷いて中に入る。

「やっぱり布団はいいなあ……」

「そうだね〜ついでに悠くんももふもふ〜!」

「——私も床で寝ます」

「チノが嫉妬してるぞココア。離れろ」

「やだなくチノちゃん、別に悠くん取ったりしないよー！」
「嫉妬してません！」

——この後、事件が起こるとは誰も予想していなかった。

第百九十三話 事情聴取と事件後の処理

翌日。リゼがラビットハウスへやってくると、早速異変に気がつく。

——また何かあったのか。

呆れつつリゼはチノへ事情を聞く。

「な、なあチノ。何かあったのか？」

「い、いえ。大したことでは」

「——」

悠は終始無言だ。黙々とコーヒー豆を補充していく。

「悠？」

リゼが悠を呼ぶと、「なんだ？」とこちらに振り向く。

「何かあっただろ」

「——別に」

「——なぜ視線を逸らす？まあ、言いたくないならいいけど……」

リゼが追及すると、チノも悠も目を逸らす。何かあったのは確かだが、無理に追及することでもないの、あえてしばらく放置しておく、事態は悪化した。

チノはあくまで冷静を保とうとしているが——たまに悠の方をみてはわずかに顔を赤くして目を逸らす。

それとは対照的に、特にいつもより少し口数は少ないものの、あまり変わりはない。

「——」

「——なんだ」

「え？あ、いや、なんでもないぞ！」

リゼの視線に気がついた悠がこちらに聞いてくる。

「チノ、私は厨房の掃除に行ってくる」

リゼはそう言うと、チノが頷いたことを確認してから厨房へ向かう——と見せかけて、扉から顔を少しだけ覗かせて2人の様子を見る。

——しばらく時間が経つても無言の2人。悠は軽口一つ言わない。

「あ、あの……」

ようやくチノが口を開いた。

「き、昨日のことはどうか忘れてください」

「それはちよつと無理かな……」

「無理でも忘れてください！」

「ええー！」

——何があつたんだ。

「確か前も俺が寝てる間にやらかしたよな」

「それも一緒に忘れてください！」

「無防備に見えるかもしれないが、意外と俺はすぐ起きるぞ」

「むう……」

——どうやら寝ている間に何かあつたそうだ。リゼはふと、マヤがチノに告げた一言を思い出す。

『胸は誰かに揉まれると大きくなるらしいよ』

——リゼは大体察しがついた。おそらくこれだろうな……。

「それでそれで？何か変化はあつたのかな？」

「か、からかわないでください！こっちは真剣に悩んでるんですよ」

「そうなの？なら毎日期的に協力してやってもいいぞ」

「もう大丈夫です」

「ちえっ……」

心なしか悠が残念そうに倉庫へ仕入れた品物を入れる。

それに合わせてリゼも倉庫へ入る。

「現行犯で逮捕するぞ。悠！」

「すまんが今荷物を運んでいる途中なんだ。警察ごっこは後でにしてくれ」

「そういうつもりで言ったわけじゃないぞ！」

今度はリゼが顔を赤くした。

「お前、昨日ついに一線を越えただろう」

「俺は超えてないぞ」

「屁理屈を言うな！」

そう言つてまた目を逸らす悠にリゼは追及を続ける。

「昨日、何があつたんだ？」

「いやあ……実は昨日——」

悠が昨晚の事件について語り始めた。

「おやすみなさい」

「うん、おやすみ——」

「おやすみ」

映画を見終わつた後、眠りにつく一同。

そして数時間後。夢でまたマヤの発言を聞いたチノが起き上がる。

「——本当なのかな」

チノがココアの方へ向かうと、布団の中からココアの腕を取り出すと自分の胸に当てる。

「——同性だと効果が薄いでしょうか。で、でもさすがに悠さんには……」

チノはしばらく悠の方を見つめる。——無防備にもぐつすりとは眠っている。

「さすがに起きませんよね……？一回だけ、静かにやってみましょう」
起こさないようにゆっくりと布団から腕を引つ張るチノ。

——腕に異変を感じた悠はこの時点で起きている。
だがチノはそれに気がつく様子もなく——。

「おいおい、それがどうしてこうなつたんだ!？」

悠が一通り説明し終わつた後、リゼがツツコミを入れる。

そう、起きていたとしても黙っていればややこしいことにはなつていないはずだ。

「あの時点で黙つてられるとでも?」

「お前というやつは——」

リゼが木箱に座つて頭を抱える。

「考えてみる！寝てる時に手のひらにその……」

「にやけるな！変態！スケベ！」

「やっぱり俺が非難されるのー!?!」

どうやら、悠は思わず目を開けてしまったらしい。そのまま寝たフリでもしておけば問題にはならなかっただろうに……。

「で、どうするんだ？」

「そうだな——。真剣に悩んでいるようだったから、ここは同じ振り回され隊の仲間として継続的かつ積極的に協力——待って、一旦その銃をしまおうか!?!」

「やれやれ。こうなると思ったからお前に言うのを躊躇ったんだ」

「まあそう言うなよ。——そもそも、その大きさだけで魅力が決まるわけではない！気持ちは分からなくもないが、気にしすぎだ」

「ちやんとまともな発言ができるじゃないか」

「俺をなんだと思ってるんだ……。とりあえず、あんまり気にするなって言ってくるよ。まあ、正直俺は昨日の一件をめちやくちや気にしてるけどさ」

会話を終え、倉庫の外へ出る悠。そしてそのままチノに話しかける。

「な、なあ。昨日のことだけどさ」

「は、はい……」

「その、マヤが直接なんて言ったのか知らんが、あまり気にするなよ。少なくとも俺は今のお前好きだぞ」

「もう……調子いいんですから……」

チノがお盆で顔を隠してボソツとつぶやいた。

第百九十四話 クリスマス前夜

「いよいよクリスマスですね」

「そうだな……」

チノと悠は、クリスマスシーズンに向けて気合の入った街並みを見る。

「去年は賑やかだったんですが……今年は静かなクリスマスになりそうです」

以前、ココアに去年のクリスマスについて聞いたことがあった。どうやら期間限定で特製のパンケーキを出したら店が大盛況になったそうだ。

だが、今年はそうもいかなさそう。

「ココアは、別のバイト先に駆り出され、リゼは部活の助っ人か」

「お、お店ぐらい、2人でなんとかかります……」

「震えておるぞ」

わずかに震えながらそう強がるチノにティップーがツツコミを入れる。

——と、その時。チノの視界が何者かに奪われた。

「だくれだっ!」

「その声は——ココアさん! 仕事中に何して……」

チノが振り向くと、そこにいたのはココアではなくシャロだった。

「今の声シャロさん!」

「似てたかしら」

「欲丸出しの間抜けな雰囲気こそっくりでした!」

「そ、そう……」

辛辣なチノの言葉にシャロが苦笑いする。

悠はそんなシャロの背後に近寄り、シャロの目に手のひらを当てる。

「だーれだ!」

「その凛々しい声はリゼ先輩!?! 少し声を作っても分かりますよ!」

シャロが振り向くとリゼではなく悠。

「全然似てないわよー!!」

「騙されたのに!？」

顔を赤くしてシャロが突っかかってくる。

「チノちゃんも、悠も、こんなところで何して——まさかデート?」

「ココアの迎えだ。もうすぐ雨が降るのに傘を忘れたからな」

「ついでに他のお店を偵察です」

「そう……。チノちゃん、さつきチラツと聞こえたんだけど、2人でお店回すって大丈夫なの?」

「大丈夫です」

「俺がチノに代わって奴隷のように働けば間に合う」

「間に合っていないじゃない!——もう、困ったときは頼りなさいよ。2人ともすぐ溜め込むんだから」

「ありがとうございます」

「そう言うシャロも、バイト詰め込みすぎて倒れるなよー」

シャロと別れた後、すぐにリゼと遭遇した。

「買って買ってー!ねえ買ってー!」

「じゃないとリゼお姉ちゃんって連呼するよ」

「マヤさんとメグさんです」

チノがいち早く3人に気がつく。マヤもメグもリゼを囲んで何か会話をしているようだ。

「悠!助けてくれ!こいつらにしつこく——たかられてるんだあつ!!」

「——嬉しそうだな」

「——嬉しそうです。あ、雑貨店がありました。お店の飾りも買っておきましょう」

「ああ」

「お前らー!!」

たかられて嬉しそうなリゼを放置して雑貨店へ足を踏み入れるチ

ノと悠にリゼが叫ぶ。

「シャロさんも、リゼさんも……みなさん浮かれすぎです」
「そうだな」

雑貨店での買い物が終わり、店から出るとチノが呆れたように言う。

「こっちだよ」

「待ってお姉ちゃん！」

小さい子供がこちらに走ってくる。チノの周りを3周ほどぐるぐると回ると、道端で踊る。

「――」

「――俺と浮かれて踊るか？」

「そういうつもりで見ていたわけではありません！」

そんな会話をしていると、ココアのバイト先へ到着した。

「ココアのバイト先って焼き栗屋だったのか!？」

「サンタさんの格好が評判良くてね〜！」

「――確かにちよつといかがわしい……」

「どういうこと!？」

サンタのコスチュームを見せびらかすココアに悠がそういうと、チノが腕を引っ張る。

「バカなこと言っていないで、早く傘を渡してください！」

「へいへい……」

その後、目的を果たしたチノと悠はラビットハウスへ――。

「あつ、降ってきたな」

「――私たちの分の傘を忘れました」

「そういうえば一個しか持ってなかった！」

今更重大なことに気がつくチノと悠であったが、降っているのは雨ではなく雪だと気がつく。

「走って帰るぞー!」

「走らないでください。転びますよ」

チノがそう言った瞬間、派手に転んだ。

「ほら……調子に乗るからです。——あいたつ……!」

「ごめんごめん……って、チノも転んだ」

「とぼつちり食いました」

そしてラビットハウスへ到着——だが、何やら様子がおかしい。

「あれ、これなんの行列だ」

「繁盛してるお店が近くに……」

やたら長い行列を目撃し、困惑する悠とラビットハウスへの強力なライバルの登場に不安がるチノ。

「これラビットハウスの行列だ!」

悠がラビットハウスからの行列だと気がつくのと、チノが頬を引っ張る。

「あ、ありえない!!」

「自虐?」

中へ入ると、リゼの父親が出迎える。

「タカヒロさん。何があつたんです?」

「青山くんの担当さんが取材に来てね——雑誌に大々的に宣伝してくれたみたいだ」

「このタイミングで!」

チノが青ざめる。——宣伝してくれるのは嬉しいが、タイミングが悪すぎた。

「今月いっぱい忙しくなりそうです」

「うっ……っ、疲れた……」

ベッドに倒れ込む悠にチノは

「あんなに頑張ってくれなくても……私もいるのに」

「いや……チノにはゆっくりいつものペースでコーヒー淹れてもらわないとな……」

悠はそれだけいうと眠りについた。

「制服のまま寝てしまいました」

「今日は一段と忙しかったからのう」

「当日、頑張りすぎて倒れないでくださいね……」

ぐっすりと眠る悠に微笑みながら布団をかけるチノだった。

第百九十五話 カオス・クリスマス

「シークレットサンタ?」

クリスマスまで後わずか——というところで、ココアが一同に提案する。

「そう!くじに書かれた相手にプレゼントを用意するの!クリスマスまで誰が自分のサンタかわからない仕組みだよ」

シャロがココアの手からくじを引く。

「——はっ!!」

くじの結果を見て目を光らせるシャロ。——ココアかりぜのどちらかだな。

次に悠も引く。

「——あーっ!!?」

思わず叫ぶ悠にリゼが「反応でだいたいバレる気がする……」と目を瞑る。

「あつ、これ……似てる」

その後すぐ、雑貨店でシャロに遭遇した。シャロは貯金箱を手にとるとそう言って微笑む。

「ココアへのプレゼントか……」

「ち、違うし!!こつちに来るなあー!」

——そしてついにクリスマス当日がやってきた。

「チノ!最後の料理できたぞ——って魂抜けてるー!」

お盆を持ってブーツと立つチノに悠が叫ぶ。

「おい、しつかりしろ!」

「す、すみません……ココアさんがパーティーまでに帰るって言っていました、遅いなと……」

「大丈夫だ。きつと間に合う」

「悠さん……」

「信じて待ちましょう!」

「千夜さん……」

ココア以外は揃っているのだが、一向にやってくる気配がない。
——と、思った矢先のことだった。

「サンタさんだよー!!」

「ココア!？」

ココアが勢いよくラビットハウスへ入ってくる。

「良い子には出来立ての焼き栗をプレゼント〜!」

「焼き栗屋さんの格好で来るなんて……」

チノがやってきたココアに困惑する。

「おいおい、バイト代、栗で溶けてないだろうな……?」

みんなに栗を分けるココアに悠が心配する。

そして、クリスマスパーティーが始まった。

「私のサンタさん誰かな〜」

ココアがラビットハウス中を駆け巡るが、一向にシャロは名乗り出ない。

「さあ、誰かしらね……」

「――」

「――」

しばらくの沈黙の後、ココアが涙目で

「ねえみんな……」

と訴えかける。

「私よー!!!」

耐えられなくなったのか、シャロが名乗り出た。

「かわいい貯金箱!これ絶対割らない!大切にする!」

「ふふっ。その顔が見たかったのよ」

大喜びするココアにドヤ顔のシャロ。

「シャロ……シャロのサンタは、私なんだ」

「リゼ先輩!?!」

次々とプレゼント交換していく一同。

リゼのサンタはココア。伊達眼鏡だそうだ。

「教師の威厳が増したよー!!」

「ネタに走っただろう!」

「リゼ……嬉しそうだな」

「違う! シャロに喜んでもらえたからだ!」

「私のプレゼントは喜んでくれないの?」

「三角関係!」

リゼを取り合うシャロとココアに悠がツツコミを入れる。

そして――。

「チノのサンタは俺だーっ!」

「えっ……」

「あれ、あまり歓迎されてない……?」

困惑するチノに若干落ち込む悠。

「いえ、私も悠さんのプレゼントを……」

悠のサンタはチノだった。

「よろしければ今後も一緒に……」

「プロポーズ!」

「前に欲しがってたミニチュアのセットだ」

「え、これ値段しますよね?」

「気にするな……」

「さて、シークレットサンタの答え合わせも終わったところで、チノさんと悠さんの力作のケーキが入ります」

「凧ちゃんさん! なんでもうちで働いてるのー!」

店の奥から凧が出てきて驚くココア。

「私が中途半端なタイミニングで雑誌に載せてしまったせいでお2人に大変な思いをさせてしまいました――せめてもの罪滅ぼしです」

「いえ、宣伝していただいてありがたかったです……」

悔しがる凧にチノがツツコミを入れる。

その夜、悠の部屋にチノがやってきた。

「まさか私が枕元にプレゼント置くんなんて想像もしてなかったでしょうね」

「——ふっ」

思わずチノのセリフに吹き出してしまふ悠。また寝たふりに失敗した。

「なんでまた起きてるんですかー!!」

「いやあ、チノの枕元にプレゼント置きに行こうとしたらチノが部屋から出てくるのが見えたからさ」

「むう……寝ないとプレゼントあげませんよ!」

「寝ます!すぐ寝ます!」

「全く……私にも仕掛けようとしてたんですね」

「当たり前だ」

——翌日。悠は物凄い音で目を覚ました。

「うわああああ!!」

「チノ!?!」

慌てて悠の部屋に駆け込んでくるチノに悠が驚く。

「このうるさいの止め方教えてください!」

『おっはよー!朝だよー!さあ!お姉ちゃんと一緒にレッツダンス♪』

大音量で再生されるココアの声とリズムミカルなBGM。

「なんだこの目覚まし!?!」

「えへへ、サプライズ大成功〜!プレゼントでチノちゃんを起こす作戦だよー!」

「うるさすぎますー!」

チノがココアの目覚ましを悠のベッドに叩きつけると、ココアの顔が青ざめる。

「あーっ！私のプレゼントがー!!」

「お前らうるさーい!!」

下で開店準備をしていたリゼまでやってきて、朝からカオスな悠の部屋だった。

第百九十六話 懐かしの制服

クリスマスの翌日。ココアの実家から荷物が送られてきた。

「お姉ちゃんたちからクリスマスプレゼントだ！」

ココアが朝からはしゃぐ。

「中身はなんだろうー！」

ココアがダンボールを開ける。中にはいろんな物が詰まっている。

まず一番上に置いてあった箱を開けると――

「あーっ！お姉ちゃん特製シュトーレンだ！」

「おー……」

思わず悠も歓声をあげてしまう。シュトーレンの下には少し大きめの箱が入っている。

「こっちはなんだろうー」

ココアが箱を開けると、中から制服が出てくる。

「あ！中学校の制服だー!!」

「なぜ!？」

思わず悠がツツコミを入れてしまう。どうしてこれをクリスマスプレゼントとして送ってきたのだろうか。

「この前チノちゃんが中学生の私どんな感じか気になってたでしよー」

「制服が見たいとまでは言ってますん」

「中学生のココアか――今と大して変わってなさそうだが」

「大間違いだよー！」

「じゃーん！懐かしいな〜13歳に戻った気分！」

ココアが中学の制服に着替えて出てきた。

「大して変わらねー……」

「そうですね」

冷たい反応をする悠とチノにココアが驚く。

「そんな!?!少しはお姉ちゃんらしい威厳が――」

「どこにもないぞ」

「何をー！よし、これならどうだー！」
再びココアが着替えてきたのは――

「今度はお姉ちゃんの高校の制服だよー！」

「あれ、この制服どこかで――」

モカが通っていた高校の制服を着るココア。

この制服、どこかで見た記憶があるチノと悠がハモる。

――チノの母親のアルバムだ！

チノが気がついていない様子だが、間違いない。

「さて、開店準備始めるぞー！」

あのあと、リゼもラビットハウスへやってきて開店準備を始める。

「ん〜このシュトーレンおいし〜」

「こらー！早速サボるなー！」

モカから送られてきたシュトーレンをココアと悠が食べていると、リゼが怒鳴る。

「よーし！私もお姉ちゃんに負けないおいしいシュトーレン作るよー！」

「仕事は!？」

リゼがツツコミを入れた。

「あれ、そう言えばチノちゃんは？」

「チノがサボりとは――ココアのせいだな」

「私のせい!？」

悠の発言にココアが驚く。

「おーいチノ、開店準備始まつてるぞーん!？」

チノの部屋に足を運ぶと、チノがココアが通っていた中学校の制服を着ている。

「思ったより似合うな」

「悠さん!？ち、ちが――これはちよつとした出来心で……」

チノが顔を真っ赤にして布団に包まる。

「今更隠しても手遅れだぞ……」

「——みなさんには内緒ですよ？」

「その前にちよつと写真撮っていい？」

「話聞いてましたか!」

布団から出てくるチノ。——もう一度落ち着いてみると、少しぶかぶかだ。

「ちよつと大きいな」

「き、気のせいです。同じサイズですよ」

「いや、ほら、胸元がちよつと——」

「お・な・じ・で・す!」

「——」

あくまでサイズは同じだと言い張るチノに悠が黙る。

「悠、遅かったな。——なんでにやけてるんだ？」

「いやあく朝からいいことあったな〜と思って」

「悠さん、喋ったら許しませんよ」

「ええ〜恥ずかしがらなくてもいいのに〜」

「——?」

チノと悠のやりとりに困惑するリゼとココアだった。

第百九十七話 お手製の目覚まし時計

「そういえばこれ、ココアが作ったのか?」

ふとクリスマスにココアがチノにプレゼントしためざし時計が目
に映る。

悠が質問するとココアは「ううん」と首を横に振っていう。

「これ、アラーム音を録音できるんだー!音は私が作ったの!」

「うるさすぎます。もう使いません」

「そんなー!!頑張つて録音したのに……」

チノの無慈悲な言葉にココアが涙目になる。

「待て待て!これ、音量調節できるぞー!」

悠が慌ててチノを引き止める。このままだとココアが泣きそうだ。

「音量もそうですが——BGMが騒がしすぎるんです。だいたい、な
んですか『お姉ちゃんと一緒にレッツダンス♪』って」

「お姉ちゃんと一緒にダンスを踊れば目が覚めるかなと思って!」

「耳がキーンとなりました」

「まあまあ、2人とも落ち着け。ココアは悪気があったわけじゃない
んだし、そう怒るなよ」

リゼがチノとココアの間に入る。

「なら、リゼさんが使えばいいじゃないですか」

「——えっ?いや、これはココアがチノにプレゼントしたものだろ」

「リゼちゃんの分も作る?」

ココアがそう言ってもう一つ目覚まし時計を取り出す。

「なんでまだ持ってるんだ!」

悠が驚くと、ココアは補足する。

「練習用に2つ買ってたんだ〜!」

「私は——できれば欲しい……かな?」

「よーし!録音するからちよつと待っててね〜」

「リゼさん……聴力落ちますよ」

「大丈夫だ!私は鍛えてるからな!」

その後、録音の準備を始めたココアをのぞき、ラビットハウスの開店準備を始めると、上の階——厳密にはココアの部屋から爆音が鳴り響く。

「うるせえ……」

「近所迷惑です」

「まあまあ……」

そう言っただけで耳を抑える悠とチノにリゼが苦笑いする。

「なんか最近のリゼ、ココアに甘くないか？」

「最近というより、だいぶ前から甘々です」

「そ、そんな訳あるか！」

「本当か？」

「何か隠しています」

悠とチノがリゼを追い詰めると、リゼは慌てて

「お、音を控えめにするようにココアに言ってくるー!!」

とココアの部屋へ逃亡した。

「まあ、そんなことが？」

フルールで今朝のことをシャロに話すと、シャロは

「私も欲しかったな……ココアの目覚まし……」

と小さくつぶやいたが、それが悠にも聞こえてしまう。

「ココアの目覚まし大人気だな——」

「え？他に欲しがってる人いたの？」

「リゼが欲しいって言ってたぞ」

「リゼ先輩……」

——この三角関係がどうなるのか、個人的に興味がある。

「ぼけーっとしてると、ココアにリゼを取られるぞ」

「目覚ましの話でしょー!!」

シャロが顔を赤くして叫ぶ。

その翌日。

「お、おはよう……」

「リゼー!どうした!?!」

ラビットハウスにやってきたリゼは、心なしかボロボロだ。

「ココアの目覚ましを使ったんだが……思ったより強力で……」

「だからやめたほうがいいって言ったんですよ、リゼさん」

「うう……」

「私の目覚まし、そんなにうるさいかな!?!」

「音響兵器として期待できる……」

「兵器!?!」

リゼの言葉にココアが驚く。

第百九十八話 初詣は着物とともに

今年はラビットハウス組の4人で初詣へ行くことになった。

「——この街にも神社があるとは」

悠が部屋で支度を終え、廊下に出るとリゼがいた。

「なんだ、リゼはもう支度終わったのか？」

「ああ、私はココアやチノと違って着物着ないからな」

「——」

「——なんでちよつと残念そうなんだ？」

思っていることが表情に出てしまったのか、リゼが苦笑いする。

——似合いそうなのに。もったいない。

「準備完了〜！さあ、カウントダウンしに行くよー！」

「——正直、結構眠いです」

ココアとチノが部屋から出てくる。

——この日のために、わざわざ千夜から着物を借りたらしい。

「——」

「やっぱり変でしようか……」

チノをじつとみる悠にチノが首を傾げる。

「なんて暴力的なんだっ……!」

「どこが!？」

悠の意味不明な発言にリゼがツツコミを入れる。

「大丈夫か、悠……」

「大丈夫じゃない……」

鼻を抑える悠にリゼが心配する。

「千夜様々だな……」

「拝むな！」

そう言っつてチノに拝む悠をリゼが叩く。

「本当にしようがない悠さんです。ほら、早くいきますよ」

「はい」

チノに腕を引かれるままに神社へ到着した。

「すごい人だね〜」

「ああ。もしかしたら千夜たちも来てるかもしれないな」

ココアが人の多さに驚く。無理もない。歩くスペースすらない混雑度だ。

「はあ……人が多くて疲れます。なんで夜更かししてまで——」

「楽しいからだよ〜!」

不満げなチノに対して、ココアは満面の笑みだ。

「早速おみくじ引いてこよーつと!」

「「カウントダウンは!?!」」

自由気ままなココアの行動に、思わずチノと悠がハモってしまう。何か言いたそうにリゼがこちらをチラチラ見てくる。

「——?」

悠が首を傾げると、リゼがすぐに視線を逸らす。

——なんとなくわかった。

「——リゼ、ココア一人だと危ないからついて行ってやれ」

「し、仕方ないな。悠がそう言うなら——」

「——めんどくせえ奴」

「う、うるさい!」

悠がリゼに苦笑いすると、リゼは顔を赤くして叫ぶ。

「お2人とも、どうかしたんですか?」

「な、なんでもない。悠がココアが心配だって言うから、私が見てくる」

「——そう言うことしておきます」

チノが呆れる。

「リゼさんにも困ったものです」

「全くだ……」

年が明けるのをベンチに座って待っていると、チノが口を開く。

「今年は色々ありましたね」

「——そうだな。本当に色々あった」

思い返してみれば、最悪なこともあったが良いことも多かった。

チノと雑談していると、ココアとリゼが戻ってくる。

「おーい悠！」

リゼがこちらに駆け寄ってくる。

「リゼ。なんだ、変な笑みを浮かべて——なんか怖いな」

悠が一步引くと、チノも一步引く。

「待て待て。超朗報があるぞーっ！」

「——聞いただけ聞いておく」

「聞いて驚くな……私おみくじで——恋愛運が大吉だったんだあつ
!!」

「へー……」

「反応薄いな……」

ジト目でリゼを見つめるチノと悠にリゼが困惑する。

「恋愛運が大吉なんだぞ。これはきつとココア——いや、なんでもな
い！」

「私がどうかしたのー?」

「ココアあつ!?!」

背後からココアに話しかけられ、リゼが飛び退く。——すごいジャンプ力だ。

「リゼの恋愛運が大吉だったから、ココアにこくは——うぐっ!?!」

「それは軍事機密だーっ!!!」

「やれやれです。ココアさん、運勢どうでしたか?」

「私は今年も大吉!2年連続だよー!」

「ここのおみくじ、大吉しか入ってないのか!?!」

大吉と書かれたおみくじを自慢するココアに悠がツツコミを入れる。

——何気に強運なんだよな、こいつ。

そして、無事カウントダウンを迎え、初詣を済ませた帰りにそれは起きた。

「おみくじ——凶でした。はあ……」

「だ、大丈夫だ！凶でもいいことは起きるぞ！」

「そうだよチノちゃん！元気出して！」

「何もそんなに落ち込まなくても……」

おみくじの結果が良くなかったチノを一生懸命励ます悠とココアにリゼが苦笑いする。

「リゼさんはいいです。恋愛運が大吉でココアさんと——」

「だからそれは軍事機密だって——！！」

慌ててチノの口を抑えるリゼにココアが「軍事機密？」と首を傾げる。

「チノも悠も軍事機密をそんな簡単に——っとうわああああ！！！！」

リゼが目の前に現れたそれを見て悲鳴を上げる。

——新年早々から幽霊とは。

「あっ……みんな……」

「シャロさん!？」

幽霊の正体はシャロだった。とてつもない不幸オーラを放っている。

「どうしたシャロー！」

悠が事情を尋ねると、シャロはゆっくりと話し始めた。

「なに？大凶だった上に金運と恋愛運が最悪だった？」

「はは……——面白いわね！かかってきなさいよーっ！！」

「落ち着け！自暴自棄になるな！おみくじの結果なんて——」

やけくそになるシャロをリゼが止める。

「さつき恋愛運が大吉ではしゃいでた奴がいたような……」

リゼの矛盾した発言に悠が小さくツツコミを入れた。

第百九十九話 おみくじ

その後、千夜とも合流した。

「あら、みんな。あけましておめでとう」

「おめでとうございます。千夜さん」

「おめでとー!」

チノとココアが応える。

「千夜ちゃんはおみくじどうだった?」

「ココアがおみくじの話をすると、チノとシャロの頬が膨らむ。

「まあまあよかったわよ。ココアちゃんは?」

「私大吉だったんだ」

「まあ!」

「――」

おみくじの話で盛り上がる2人とは対照的に、チノとシャロは黙る。

「おい、おみくじの話はその辺に……」

リゼが気を遣って止めようとするが、千夜に

「リゼちゃんはおみくじ、どうだったの?」

と聞かれ、

「恋愛運がとってもいい年だってさ」

リゼの言葉を聞いて、千夜は楽しそうにシャロのもとへいく。

「リゼちゃん、恋愛運いいらしいわよ」

「知ってる……でもね千夜……私、恋愛運最悪なの――」

「前途多難ね――」

落ち込むシャロに千夜が目を瞑る。

「悠くんは?」

「俺か?俺は普通だったな」

「恋愛運は!?!」

悠が淡々とそう答えると、ココアが食いついてくる。

「恋愛運か——最高とまではいかないな」

「そんなく！」

「——なんで、お前が悔しがるんだ？」

なぜか悠のおみくじの結果に悔しそうなココアにツツコミを入れる。

「チノちゃんは恋愛運どうだったの!？」

「私ですか？恋愛運は——あまり良くないです。あまり進展しない上に、相手が無自覚で浮気をする可能性がある」と

「——」

一同が悠の方を向く。

「——まあ、悠だもんな……」

「そうですね」

リゼとシャロが納得するが、

「なんでだよ！俺はこう見えて一途だぞ！」

と悠は納得がいかない様子。

ラビットハウスへ帰ろうとしたとき、ティッピーがチノの頭の上で跳ねる。

「ティッピー？どうしたんですか」

「おみくじ引きたいんじゃないか？」

悠がそう言うと、ティッピーは「うんうん」とうなずく。

「おじいちゃん……。皆さん、すみませんが先に帰っててください。すぐ追いつきます」

「ふふっ」

チノの言葉に千夜が微笑む。

「——なんですか？」

「いいえ。悠くんと初詣デート楽しんでね」

「そんなんじゃないです」

そう言ってからかう千夜にチノは背を向ける。

「おーい、ティツピーの分のおみくじ引いてきたぞ。さすがにその体じゃ自分でできないだろ」

「すまないのう」

「しかし、ティツピーになってるとはいえ、一応亡くなってる人がおみくじ引いて意味あるのか？」

悠がそう言ってティツピーに引いてきたおみくじを渡すと、チノが

「——確かに」

と同意する。

「——どれどれ、今年のわしの運勢はく……」

「おみくじよりティツピーのコーヒー占いの方が当たりそうだが——」

「昔はおみくじ代わりに占ってもらおうとやってくるお客さんもいたそうですよ」

「ちよつと静かにしてくれんか」

「へいへい……」

真剣におみくじをみるティツピーの隣でチノと話していたら叱られてしまった。

「なぬ!? どうやら、今年はラビットハウスが繁盛するそうじゃ」

「クリスマスの時を見れば、もうある意味繁盛してるぞ」

「お客さん、増えるんですか？」

「2人とも、今年もラビットハウス繁盛のために頑張るんじや！」

「言われなくともだ」

「そうです」

悠とチノの言葉にティツピーは満足そうにうなずいた。

ラビットハウスに帰ると、リゼの膝でココアが眠っていた。

「帰ってきた途端眠いからって——」

「——」

困りつつも嬉しそうなリゼに、チノと悠がジト目になる。

「——おみくじ、当たりそうですね」

「——そうだな」

「お、お前ら！最近私をからかうのに味をしめてないか!？」

「——気のせいだ」

リゼの言葉に悠とチノが視線を逸らした。

第二百話 ラビットハウス・和菓子騒動

ココアの誘いで、今日はみんなで遊ぶことになったが――。

「この雨じゃ外で遊べないよー!」

「まあまあ、室内でも楽しく遊べるわよ」

雨に嘆くココアを千夜が宥める。

「そんなみんなに差し入れ、持ってきたの!」

千夜が持つてきた風呂敷を広げる。中には緑色の箱と赤色の箱がある。

「――また変なもの持つてきてないだろうな?」

リゼが心配そうにするが、千夜は「いいえ」と否定する。

「甘兎庵で新作出そうと思って、昨日作ってみたんだけど……」

千夜が緑色の箱を開ける。――中には和菓子が詰め込まれている。

「よければ、みんなで食べて感想聞かせてくれない?」

「わーい!!」

大喜びするココアとは反対に、リゼはまだ少々警戒している。

――正直、悠もあまりいい予感がしない。

「こつちの緑色の箱には、お酒を隠し味に使ってるの」

「やっぱりか!? また洋酒でココアたちを酔わせる気じゃないよな!」

「もつと早く言え! 今すぐチノに食べさせよう!」

「おい、悠?」

欲望丸出しの悠にリゼが冷たい視線を送る。

「あ、大丈夫よ。使っているのは洋酒じゃないもの。それに、そんな入れてないから――」

「そういう問題じゃない」

謎の補足をする千夜にリゼがツツコミを入れる。

「まあ、少量なら――」

悠が和菓子を口に入れる。――結構おいしい。

「お、おい……」

「リゼも食べてみるよ、結構おいしいぞ」

「あら、嬉しいわ」

悠がそういうと、みんなも和菓子を手取る。

「俺が毒味——いや、味見してやったんだから大丈夫だ！」

「毒味!」

千夜はロシアンルーレットぼた餅や青汁を盛った前科があるためか、若干警戒していた。

「ほら、チノも！」

「私もですか!」

「チノはダメだ」

「ふーん……ココアはいいんだ?」

「こ、ココアもダメだ!」

悠の追及に慌てて対象者を拡大するリゼ。

「えーっ!?もう食べちゃったよ!」

「そ、それなら仕方ない——?」

「おいリゼ、人のことをあれだけ——」

「リゼ先輩……」

ココアに甘いリゼに悠とシャロが引く。

「でも、なんともないよ?」

「本当に洋酒じゃなかったのか——。ならチノも大丈夫か?」

「あの時は別に酔っていたわけではないです」

「その設定まだ続くのか……」

チノの言葉に悠が苦笑いする。

——リゼは、少し油断していた。前回、洋酒入りのチョコレートで酔ってしまったココアとチノ、そしてカフェインで酔うシャロばかりを注意しており、こうなることは盲点だったのだ。

「ココアあ〜!」

「なあに〜?」

「もつとちようだい……」

「いいよー!!」

「——」
「ココアでもチノでもシャロでもなく、悠が酔ったのだ。」

「ココア、悠にそれあげるのはその辺に……」

「えく?でも悠くん食べたがってるよ?」

「そうだぞリゼ!」

「だつてお前——顔ちよつと赤いぞ?」

「気のせいだ!」

「こんな和菓子で酔うなんてありえない!」

「洋酒入りのチョコレートで酔ったやつがいたような……」

チノの発言にリゼが小さな声でつぶやく。

「千夜あ……その赤い箱はなんだ……」

「え、あらやだ、忘れてたわ。——こっちは、ほぼ同じなんだけど、洋酒を隠し味に使ったバージョンよ」

「やっぱり洋酒入りのお菓子持ってきてるじゃないか!」

千夜の発言にリゼがツツコミを入れる。

「チノ、口あけて?」

「な、なんですか、いきなり」

「おい悠!洋酒入りの方を渡すな!」

「んく?だつてチノ、酔わないんでしょ?」

「そうです。あれは演技ですから」

「そこ強がるどころじゃないぞ!」

頑なに酔ってないと言い張るチノにリゼが叫ぶ。

「——そして今に至るわけか」

あたりを見渡すと、ココア、チノ、悠の3人が酔っている。

「もー!千夜のせいでこうなったのよ!」

シャロが千夜にそういうと、千夜はリゼの方を見て

「ちゃんと止めなかつたりゼちゃんが悪いのよ」

と責任をリゼに丸投げする。

「私のせい!?!」

「リゼちゃんもココアちゃんが酔ってるどころ、みたかったのかしら?」

「そうなんですか先輩!?!嘘だと言ってください!」

「ち、ちが——うう……」

リゼが完全に否定できず、小さくなっていると

「悠さん、いい加減にしてください!!」

「なんだ、どうした!?!」

向こうから聞こえるチノの怒鳴り声で驚く。

チノの方を見ると、顔を真っ赤にして悠にのしかかる。

「な、なんだチノ!?!」

「どうしてココアさんばっか……構うんですか!」

「そんなつもりは——」

「だって本には、好きな人同士だったらき、キスしたりお風呂一緒に入ったりするって書いてあったのに——」

チノの言葉に悠は

「そうか……そんなもんか……」

と納得すると、

「どんな本だ!?!あと、納得するな——!」

リゼが間に入る。

「なんだリゼ!お前には関係ないだろ!」

「あるぞ!お前、前に酔ってない方のチノが承諾するまで手は出さないみたいなこと言ったよな!?!」

「リゼちゃんもふもふ〜!」

「や、やめ——」

「ち、千夜あ!あなたの持ってきた和菓子でこうなったんだからなんとかしなさいよ!?!」

シャロが千夜に突つかかると、千夜はしばらくブーツとした後に

「はっ！」と我に戻る。

「和菓子の名前、思いついたわ！青春の恋を応援する——」
「そんなのどうでもいいでしょー!!」

千夜がメニニュー名を発表するが、シャロに遮られる。

「一旦お前は落ち着け！」

リゼがそう言っつて悠を別室に連れて行く。

「——あれ？なんで？なんで誰もいないのー!?!」

「違う部屋だからだ！しつかりしろ！」

「いるよー……」

「チノ……」

「お前まで入っつてくるな！一瞬ココアだと思っただぞ!?!」

「リゼ先輩ー！ココアと千夜が——」

「なに!?!」

酔っ払いの世話に手が焼けるリゼはもうくたくただ。

「千夜ちゃん……私と耳息吹きかけっこしよ……」

「まあココアちゃん！大歓迎よ！」

「千夜ー!?!」

「悠さん……今だけですよ。皆さんには内緒です」

「うん……」

チノが悠の唇に自分の唇を重ねる。

——そのとき、リゼが部屋の扉を開けると、

「痛っ！」

チノの頭に扉があたっつて目を覚ます。

「す、すまん、大丈夫か？」

「あ、リゼさん。大丈夫ですよ」

「そうか、私はちよつとココアをなんとかしてくる！」

リゼがいなくなったあと、チノはしばらくして、自分が今まで何を
してきたのかを思い出して青ざめる。

「——わわわわ……私、今までなんてことを……」

「チノ……ごめん……俺恋愛とか分からないから——」
「へっ!？」

「チノ、別に俺はココアと仲良くなんて……。だからお前のいう通り、
今後はキスしたり一緒に風呂入ったりしよう!」

「えーっ!!？」

チノの顔が真っ赤になる。

悠が眠ってしまった後、チノは自分の部屋にあるベッドに倒れ込
む。

「あああ……消えてなくなりたいですっ……!」

「わかるわチノちゃん!でも仕方ないわ。そういう時はみんなそうな
るものよ」

枕に顔を埋めてしたばたと暴れるチノをシャロが慰める。

「ううっ……リゼさん!もう私を殺してくださいー!!」

「できるかー!!」

「ならナイフを出してください!ここで切腹します!」

「なんで悠もお前もすぐ切腹しようとするんだ!？」

悠と同じくだりを見せるチノにリゼがツツコミを入れる。

悠が目を覚ましたときには、もう夕方になっていた。

「なんかすごい夢を見たよ」

「どんな夢?」

起き上がった悠にココアが聞く。

「なんかね……よく思い出せないんだけど、チノが俺に這い寄ってき
て、一緒に風呂——」

「わああああああっ!!!」

悠が言いかけたが、チノの叫び声がかき消される。

「夢です!夢の話は夢の中だけにしてください!」

「なにを言ってるんだチノ?」

困惑する悠に、チノは

「いいから！その夢の話はすぐに忘れてください!!じゃないと、許しませんよ！」

「ええー!？」

「やれやれ」

リゼが2人のやりとりに呆れる。

「あ、後まだ続きがあるんだ。チノが俺にキス——」

「わあああああっ!!!だから夢の話は夢の中だけにしてください!!」

チノが慌てて悠の口を塞ぐ。

その翌日から、早速ラビットハウスではまた問題が生じた。

「チノ、ホットココア注文入ったぞ」

「——」
チノからの反応は無い。顔をわずかに赤くして唇を手で撫でていく。

「おいチノ〜?」

悠がチノの顔の前で掌を上下にやると、

「——へっ!?!な、なんですか!?!」

チノがサツと後ろに身を引く。

「注文、ホットココア頼むぞ」

「あ、は、はい」

「——これは重症だな」

厨房から出てきたリゼが2人の光景を見てつぶやく。

「チノのやつ、どうしたんだろうな?疲れたのかな」

悠がリゼに話しかける。

「お前が原因なんだがな……」

「俺?!俺何かしたっけ!？」

ジト目でそういうリゼに悠が驚く。

「あとココア!おきろ!早くパンを焼いてくれ!」

リゼがココアを揺さぶると、

「焼けたらラッパで知らせてねって言ったでしょ……」

「寝ぼけてる……」

「待て。ココアを起こすにはいい方法があるんだ」

「ほう。それはぜひ聞いておきたい」

悠がリゼの耳元に近づいていう。

「耳に息を吹きかけてみる」

「なななな、なにー!!?」

「リゼさん。お客さんがいるのでお静かに——」

「あ、ああ、すまない。——どういうことだ悠!」

「なんだよ? 試しにやってみようか?」

悠がそう言ってココアの耳にふつと短く息を吹き込むと、ココアがビクツと起き上がる。

「うわあっ!? な、なんかすごい感覚が——」

「本当に起きた!?!」

パツと目を覚ますココアにリゼが驚くが、数秒後にハツと我に帰る。

「悠! まさかとは思うけど、毎日これでココアを起こしてないだろうな!?!」

「起こしてるよ?」

「悠さんの画期的な発明で、ここ最近ココアさんが寝坊しなくなりました」

「確かに! 最近のココアは朝の開店準備に遅刻しなくなつたな!」

リゼがそういえば、と最近のことを思い出す。

「えへへくもつと褒めてもいいんだよ?」

ココアがそう話すが、

「つて、お前らー!!」

リゼが頭を抱える。

その後、数日が経ったにもかかわらず、チノの症状は治るどころか悪化する。

リゼはついにカバーしきれなくなり、甘兎庵に訪れた。

「なあ、私はどうすればいいと思う？」

甘兎庵にいる千夜と、遊びに来ていたシャロに相談する。

「そうね……」

「元はあんたのせいなんだからね！」

考え込む千夜にシャロが怒鳴る。

「それで今、どんな状況なんですか？」

シャロがリゼにそう尋ねると、リゼは「ああ、まだ詳しく言っていなかったな」と、今ラビットハウスで起こっていることを2人に説明した。

「まあ！つまりチノちゃんが思春期ってことね——」

「うーん、間違っではないがちよっと語弊があるかな」

千夜の結論にリゼがいう。

「結構深刻な問題でさ——私だけじゃどうすることもできないから、2人に相談したというわけだ。突然すまない」

「いえいえ！私も今日バイトが休みで暇してたので！」

「チノちゃんが悠くんを意識しすぎて、仕事に集中できていないってことだったけど、悠くんは大丈夫なの？」

「ああ、あいつはいつも通りだ」

「また悠が無自覚でやらかしたんじゃない？ココアと同じ感じで」

シャロがそういうと、リゼは「うーん」と考える。

確かにその可能性は否定できないが、何か別のきっかけがあったに違いない。

——あるとすれば、先日之和菓子騒動だろう。

「意識してるって、避けてるとかじゃなくて、恋愛的にってことですよね」

「ああ、その通りだ。実は前にもこんなことがあったんだが、その時は私と悠でなんとか対処することができたが、今回に関しては悠も心当たりがないって——」

「悠が心当たりないんですか!?!」

「それなら尚更困ったわね」
シャロと千夜が驚く。

甘兎庵からの帰り、リゼは考え事をしながらラビットハウスへと向かっていった。

バイトではなく、ラビットハウスがどうなっているか心配だからだ。

——千夜は

『時間が解決することもあるわ。きっとチノちゃん自身も、自分の異変に気がついていいると思うの』

と言っていた。確かにそうかもしれないが、このまま経過を見守るのは正直厳しいところがある。私がバイトでない時は、ココアに任せっきりになってしまうから。

——シャロは

『ココアに協力を頼むのはどうでしょう。同じ屋根の下で暮らしているんですから、何か知っているかもしれないですよ』

と言っていた。あの和菓子騒動がきっかけとすると、ココアはあまり頼りにならない気がする。なぜならココアも酔っていて、記憶がないから。

「うーん……絶対悠が関係しているんだよね……。恋って難しい……」

「なんだ？呼んだか？」

「うわっ！なんだ悠か、ビックリした……」

悠はリゼの驚く反応を見ると、ふっと短く笑ってからいう。

「なんだ、そんな思い詰めた顔して」

「お前のせいだろー！」

「俺ー!？」

「って、お前の方こそ何してるんだ？」

「バイト終わったから散歩でもしようと思って」

悠のその言葉を聞いて、リゼはダメ元でもう一度相談してみようと

決心した。

「——なあ、ちよつと時間もらつていいかな？」

第二百一話 リゼと密会

「なんだ、改まって——」

「お前もチノがおかしくなったことに気がついてるだろう」

リゼがそういうと、悠はうなずく。

「多分、チノはお前のことを気にしているんだと思う」

「だったら、尚更俺にできることはないだろ。俺が何かしたところで悪化するかもしれないし」

悠のごもつともな発言にリゼが「そうだよな……」と納得する。

「ただ、私はお前に何かして欲しいんじゃないよ。知りたんだよ。あの日何があつたのか」

「といつてもな……あんまり記憶が——」

「うーん——」

悠もリゼもしばらく考え込む。

しばらくして、リゼが閃く。

「あつ、お前あのあと『夢』がなんとかって言ってただろう？」

「ああ、そういえば！チノの夢を見たんだよ」

リゼの言葉で悠があの日見た夢のことを思い出す。

そしてその夢の内容を、覚えている限り全てリゼに話した。

「なななな、なんて夢を見てるんだー!!この変態!!」

「夢の内容くらい人の勝手だろー!」

リゼが叫ぶと、それに負けまいと悠も反論する。

「それ、本当に『夢』なのか？」

リゼが悠に問う。

現実と夢の境目というのは、実は曖昧なもので起きた後はよく戸惑うものだ。

果たして、悠が見たというそれは本当に『夢』であって、現実ではないのだろうか。

「考えてみれば、夢にしてはちよつとリアル——というかはつきりし

てたような……」

確かに、『映像』というには少しリアルで、人の温もりを感じたような体験だった。

「でも、落ち着いて考えてみる。あのチノが自分から俺にキスすると思うか？」

「——だな」

悠の一言にリゼも納得する。その通りだ。あの控えめなチノが自ら悠に求めるようなことはしないだろう。

——しかし、それは『酔っていない』ときの話だ。

あの時はチノも悠も酔っていたから、日頃チノや悠に向けている『印象』は通用しない。

「仮に現実だとしたら、酔った勢いでキス魔になったチノが、酔いから覚めて気まずい思いをしていると考えると、確かに辻褄はあう」

「キス魔って言うなー！」

悠の言葉にリゼが叫ぶ。

「なんでだよ、別に間違っていないだろ！」

「キス魔って言葉はちよつと語弊があると思う。——いや、すごく語弊があると思うぞ」

「でも、あの状況でココアが『チノちゃんキスして〜?』って言ったらチノはキスするかもしれないぞ」

悠の言葉に、座っていたリゼが椅子を倒して立ち上がる。

「詳しく!!」

「——」

悠のジト目でリゼは自分が誘導されていたことに気が付き、椅子を元に戻す。

「お前！誘導尋問するつもりか！」

「ん〜？俺はただ具体例をあげてわかりやすく説明したつもりなんだけどな〜……。——人の善意を悪と捉えて過剰反応するのはどうかと思うぞ」

「うっ……」

悠の言葉に反論できず、黙り込むリゼ。

そして一つ「ごほん」咳払いして言う。

「すまないな、取り乱したようだ。——仮にキスしたことが現実だとしたら、確かにチノはお前と顔をあわせづらいだろう」

リゼがそうまとめると、

「まあ、俺はもう詳しく覚えてないんだけどね。——ああー!!なぜだ!こうなったら無理やりにもあの感触を思い出すぞ!」

頭を叩いて思い出そうとする悠をリゼが「落ち着け!」と止めに入る。

「本当に変態だと思われろぞ。——正直私はちよつと変態だっと思ってるけど」

リゼの言葉に悠が反撃を開始する。

「ん?おみくじの結果でココアに告白しようとしたり、ココアとチノがキスする例え話聞いて食いついたり、いつもココアにもふもふさされてるチノを羨ましそうに眺めたりしてる奴がいたような?」

「今その話をするなー!!」

リゼと悠の小規模紛争が幕を閉じた後、リゼは息を整えてから言う。

「とにかく……私は恋愛のことはわからんから、詳しくそんな人を呼んで有識者会議だ……」

「詳しくそくなやつ?——千夜か?」

悠が尋ねると、リゼは首を横に振る。

「明日、一応安全な私の家に来てくれ」

「一応……ね」

リゼの言葉に苦笑いする悠だった。

第二百二話 振り回され隊・有識者会議

その翌日、約束通りにリゼ宅へやってきた。

インターホンを押すと、リゼが玄関まで出迎えてくれる。

「いらっしやい」

「お邪魔します」

リゼの部屋に入ると、シャロも中にいた。

「まさか、有識者って——シャロ!?!」

「悠、なんであんたが?」

「いや、リゼに呼ばれて——」

悠がそう言うと、シャロも「私もよ」と告げる。

「2人に集まってもらったのは他でもない。チノに関してだ。シャロにも悠にも、昨日少し話したと思う」

「チノちゃんの話ですか——でも、なんで私が?」

「シャロが恋愛に詳しそうだと思ったんだ」

「恋愛運最悪の私をこんな会議に呼ばないでくださいー!!」

リゼが理由を話すと、シャロが叫ぶ。

「意外だな。俺は千夜が詳しそうだったから、リゼも千夜を呼ぶのかと思っただが」

「そうですよ。呼んでいただけしたのは嬉しいんですけど……こういう相談は私より千夜の方が——」

シャロも悠の言葉に同意する。

「実は、私も最初は千夜を呼ぼうって思ってたんだけど、私の勤が『恋愛相談はシャロに』というんだ」

「リゼ先輩——！死んでもこの問題を解決して見せます!!」

リゼの言葉にやる気を出すシャロ。——ちよろい。

そして、昨日リゼと悠が話した『夢』のことをシャロに話す。

「あんた、なんて夢を見てるのよ」

「内容は人の自由だろ！」

シャロの冷たい視線に悠が反論する。

「そうですね——。千夜のいう通り、チノちゃんも自分がおかしくなったことにも気がついていと思うんです。ただ、自分の気持ちやそ、その——キスしてしまった恥ずかしさが大きすぎて、逆に混乱しているのかもしれませんが」

「別にキスは初めてじゃないんだけどな……」

悠の爆弾発言にリゼとシャロが「ガタツ」と音を立てて立ち上がり、悠に詰め寄る。

「どういうことだ！悠！」

「近い、近いよりゼ！」

「す、すまない……」

悠は以前、悠が寝ていたときにチノが頬にキスしたことを2人話す。

「それは悠が寝てたからじゃないのか？それに唇じゃなくて頬なんだから、恥ずかしさは今より小さいだろ」

リゼが言うと、シャロも「そうよ」と同意する。

「それもそうか。俺も気付いてたけど、気がつかないフリしてたし」

「お前にそんな気遣いができるとは」

「——俺をなんだと思ってる？」

リゼの失礼な発言に悠がジト目になる。

「それでシャロ、どうしたらいいと思う？」

リゼがシャロに結論を求める。シャロはしばらく考えてから——

「この問題は、チノちゃんが自分の気持ちに素直になって、きちんと向き合えないと解決しないと思います。——それに、私たちが変に動いたところで、逆効果になる恐れもあります」

シャロの言葉に恋愛下手なりゼと悠が固まる。

「——私何か変なこと言ってしまったでしょうか」

シャロが自分の発言に心配するが、リゼは首を横に振る。

「いやあ——シャロがものすごく頼りになると思っ——」

「これから恋愛マスターって呼ぶよ」

リゼと悠の発言にシャロは顔を赤くして

「そんな称号いらないわよー!!」

と叫ぶ。

「リゼは鈍感で恋愛下手だからなく！こう言うのは全く頼りにならないから助かったよー！」

「お前にだけは言われたくないぞ!?」

悠の軽口にリゼがツツコミを入れる。

「――私から見たら2人とも致命的です」

シャロの無慈悲で的確な一言にリゼも悠も固まった。

帰り際、リゼがシャロの両手を掴むとシャロは顔を真っ赤にする。

「ふえっ!?リ、リゼ先輩!」

「自分で呼んでおいてアレだけど、お前がここまで頼りになるとは思わなかったよ！この鈍感な悠とチノのために、今後も相談に乗ってくれ！」

「鈍感は余計だ！」

悠がリゼにツツコミを入れると、シャロは少し悠から顔を逸らして、

「し、仕方ないわね。私がサポートしてあげるわ」

と悠に言った。

第二百三話 相談の答え合わせ

「ただいま〜」

悠がラビットハウスへ帰ってくると、

「おかえり〜!」

とココアが出迎えてくれる。

——チノの姿はない。

「——チノはどうした?」

「チノちゃんは、さっき用事があるって出かけて行ったよ」

「そうか」

チノは、シャロの元を訪ねていた。

「そ、それでどうしたのチノちゃん?」

「すみません、いきなり押しかけてしまっ——」

「ううん、バイト休みだし、問題ないわよ」

シャロが動揺しているのは、チノがいきなりやってきたことではない。
い。

つい先ほどまで、リゼたちとチノについて話していたからだ。

「シャロさんにしか頼る人がいなくて……」

そういうチノにシャロが少し顔を赤くする。

「シャロさんって、酔つてるときの記憶ありますか?」

「微妙ね——。はつきり覚えてることもあるし、逆に何も覚えてないこともある。私の場合はブレンドの仕方なんかで酔い方が変わるらしいから——」

シャロがそういうと、チノは「そうですか……」と俯く。

「——どうかしたの?」

シャロが心配そうに尋ねると、チノはしばらく沈黙を貫いた後、口を開く。

「この前、私酔った勢いでその——悠さんにき、キスしてしまいまして——」

「そういえば——!」

チノの言葉を聞いてシヤロは重大なことを思い出す。

チノの酔いが覚めた後、「消えてなくなりたい」とジタバタしていたチノの姿。

シヤロは、悠が言っていた『夢』が現実であると確信した。

「どうかしましたか?」

「えっ!? いや、なんでもないわ。続けて?」

どうやらボーツとしていたようだ。チノに話を続けるよう催促する。

「——その後、悠さんと顔を合わせるのが気まずいというか、恥ずかしくて……。どうしたらいいんでしょうか」

「シヤロさんなら、どうするかなって思っ——」

チノの言葉を聞いてシヤロは考える。

——悠は『夢』だと勘違いしていた。おそらく、記憶が曖昧だったのだろう。だからあれは夢だと錯覚したのだ。

このことをチノに話すべきなのか、それとも別のアドバイスをすべきなのか。

しばらく考えた後、シヤロは「チノちゃん」と名前を呼ぶ。

「実はね——。さつき、リゼ先輩からそのことで相談があつたのよ」

「リゼさんが?」

チノが驚く。無理もない。悠ならともかく、リゼからシヤロに相談していたとは思ってもみなかった。

「そう。チノちゃんが仕事に集中できてなくて、どうサポートしたらいいのか悩んでたのよ」

「すみません——どうしてもあの時の感覚が頭から離れなくて——。後でリゼさんには謝ります」

チノが申し訳なさそうに縮こまる。

「違うの。チノちゃんを責めたいってわけじゃなくてね——」

「シャロはそう前置きしてから続ける。」

「チノちゃん。どうしてキスしたことを気にしてるの?」

「シャロは直球でシンプルな質問を投げかける。」

「そ、それは——」

チノが言葉を詰まらせる。

「悠が鈍感だからとは言え、一応付き合ってるんでしょ?なら問題はないはずよ!——それとも、嫌だったの?」

「私は嫌じゃなかったです。でも悠さんはどうなのかなって思っ——」。引かれてしまったのではないかって不安で——」

チノがまた俯く。——シャロはいよいよ、悠の『夢』の話と先ほどの会話の内容を伝える決心がついた。

「さつき私とリゼ先輩と悠の3人で話したの。こう言っ——いいのかわからないけど、悠はなんとも思っ——ていないみたいよ。ただ、それが『本当』であるなら——って、むしろ喜んでいたようにも見えるわ」

「そう……ですか……」

一方、ラビットハウスではココアと悠がチノの帰りを待っていた。

「なあココア」

悠がココアの名前を呼ぶと、こちらに振り向く。

「なあに?」

「お前、酔った時のこと何か覚えてるか?」

「なんにも覚えてない!」

「——だよなあ。ココアだもんな……」

「私、今バカにされてる!?!」

悠のつぶやきにココアが叫ぶ。

第二百四話 ティツピーが追い出された話

チノがラビットハウスへ帰ってくると、ココアが悠の髪で遊んでいた。

「ほら、こつちの方が似合うよ〜」

「なんだこれ、女子がつけるやつだろ」

「あの……」

チノがそういうと、ココアと悠はこちらに気がつく。

「あつ！チノちゃん！お帰りなさい！」

「おかえり」

ココアと悠がそういうと、チノは「ただいまです」と答えてからココアに尋ねる。

「——って、何してるんですか！」

「悠くんが髪伸びたって言ってたから、似合う髪飾り探してたの！」

「ココアに『切る』という考えはないらしい」

悠が諦めた様子で答える。

「やれやれです……」

「あつ！これとかどう？お揃いだよー！」

ココアがそう言って自分の髪飾りを悠につける。

「それ、ココアさんのじゃないですか。全然似合いません」

チノが冷たく言い放つと、ココアは「え〜」と少し落ち込む。

「——なんでお前がムキになってるんだ？」

「ムキになってません！もう私は部屋に戻りますね」

それだけいってチノはこちらに背を向けた。

「シャロさんのおかげで、少し心に余裕ができました」
『それならよかったわ！』

チノは部屋でシャロと電話していた。

電話を切ると、早速ティツピーが話しかけてくる。

「チノや……最近わしを置いて外出する回数が増えてるような気がするんじゃないが……」

「き、気のせいです」

「——まさかわしには言えない秘密が!？」

「うっ——お、大きなお世話です。早く出て行ってください」

「うううっ……」

「それで、俺のところを追い出されたと。——そろそろ泣き止めよ」
チノの部屋を追い出されたティツピーが悠のもとにやってきていた。

「わしにちよこちよこついてきてたチノが——もはやわしもこれまでじゃな……」

「大袈裟な爺さんだな……。別に嫌われたわけじゃないだろ」

「お前にわしの気持ちかわかるか！チノを巡ってわしと勝負じゃ！」

「そのぐらい元気があれば、まだまだ大丈夫だな」

「人の話を聞けーっ！」

全く相手にしない悠にティツピーが怒鳴った。

「お風呂沸いたよ！」

「掃除当番ご苦労」

「ふふくん、見て驚かないですよ！今日は一段とピカピカになったの！」
今日の風呂掃除当番はココアだ。いつものように成果を自慢する。
——が、チノの様子がおかしい。

「で、では悠さん先にどうぞ——」

オドオドするチノに悠が「ふっ」と吹き出す。

「な、なんですか」

「一緒にはいら——」

悠が言いかけたが、チノがすぐに

「バカなこと言っていないで早く入ってきてください！」

と叫ぶ。

「へいへい……」

風呂場に入ると、確かにいつもより綺麗になっていた。

「悠くん！私のお風呂はどうだい？」

風呂場の外からココアが話しかけてくる。

「お前の風呂じゃないだろ——いつもよりちよつと綺麗かな」

「そうでしょー！」

「ココアにしては上出来だが、まだまだだな」

「そんなく！」

悠が敢えて辛口な評価をすると、面白いようにのっかかるココア。

「つていうか、何しにきたんだ。覗きか？鍵開いてるから堂々と入ってきてもいいぞ」

「悠さん、あまりココアさんに変なこと言わないでください。誰も覗きません！」

悠が軽口を叩くと、ココアではなくチノが反応する。

「チノもいたのか」

悠がそうつぶやくと、微かにココアとチノの声が聞こえる。

「ほら、チノちゃん、悠くんには見えてないから照れなくてもいいんだよ。」

「扉の向こうで何が起きてるんだ!!？」

意味深なココアの発言に悠が顔を赤くする。

風呂から出ると、着替えと一緒に置き手紙とヘアピンが置いてあった。

『ココアさんののは全然似合わないので、どうせつけるならこっちにしてください』

名前は書いていないが、誰が書いたのかはすぐに分かった。

「やれやれ——素直じゃないな、チノも」

そうつぶやきながら、手紙に添えられていたヘアピンを手にとった。

第二百五話 屋台巡りと命令探し

シャロたち、チノと悠がまた打ち解けられるようにと気を使ったのか、みんな新年の屋台巡りをしようと誘ってきた。

「——そういえば、ココアは新年に実家に帰らなくていいのか?」

「みんなと年越ししたかったから——」

悠がそういうと、ココアは少し照れ臭そうにそう答える。

「——帰るのが面倒なだけでは」

チノが鋭い指摘をすると、ココアは慌てて

「違うよ!!」

と否定する。

「今のみんなとは、今しか思い出作れないもん」

ココアが雪合戦をするみんなを見ながらそうつぶやく。

しばらくして、千夜が袋を抱えてこちらにやってきた。

「みんなく!ガレット・デ・ロワ買ってきたわよ」

「なんだそりゃ」

悠が首を傾げると、千夜が説明をしてくれる。

「新年のパーティーで食べるお菓子よ。切り分けたパイの中に指輪が入ってた人はその年の王様になれるの!」

「なるほど——」

「そして——王になった者はみんなに何か一つ命令できる権利が与えられるわ!」

「命令!?」

千夜の一言にココアと悠がハモる。

「では始めましょう。王の冠を賭けた戦いを!」

「——確認しながら食べるだけよね」

大袈裟で、やたら盛り上がる千夜にシャロが冷静にツツコミを入れる。

「私が当たったらみんなを妹にするんだ〜！」

「私は〜——どうしようかしら！えつとえつと……」

みんなを妹にするというココアと、何を命令しようか悩む千夜に、悠は

「どうかこの2人が王になりませんように——」

と祈る。

「こういうのって、意外と無欲な人が当たるんだよね……」

リゼが食べながらさういふと、隣で「ガキッ!!」と鋭い音がする。

「あ、あはっへひまいまひは……」

チノが口を押さえながら倒れ込む。

「すごい音がしたが大丈夫か!？」

リゼが倒れ込むチノを支える。

「さあ！我々に命令を！」

ココアがさういふと、チノは少し困った顔をして

「いきなりさう言われても——」

と考え込む。

「じゃあ、チノが考えてる間、一回解散して各自お店を回ろう」

リゼがさういふと、一同は「賛成〜！」と同意する。

「ま、チノちゃんの命令なら安心ね」

シャロはさう言つて笑う。——同意だ。ココアと千夜は嫌な予感しかしなかつたから。

「ど、どうでしょう……」

置いていかれたチノが小さくつぶやく。

「王なら民の心に耳を傾けるのもいいかもしれないのう」

ティツピーがさう助言すると、チノは「そうですね」と頷いて、みんなのもとへ向かう。

——まずは悠。

「悠さん、何してるんですか?？」

「チノ！面白そうな雑誌があったから軽く立ち読みしてるんだ」

悠はそう言って読んでいた雑誌をチノに見せる。

『世界のカフェ』というタイトルが目に入る。

「世界にはいろんなカフェがあるんだな〜と思ってさ」

悠がそういう通り、本には『図書館カフェ』や『古城カフェ』など様々なカフェが紹介されている。

「こういうところを冒険するのも楽しいかもしれないな」

「そうですね」

「——ん？なんだこれ」

「どれですか？」

悠があるページに目が留まる。

「祖父の代から続く古き良きカフェ」だったよ」

「うちと被ってます！私たちも負けてません！多分！」

「そうだそうだ！」

次にチノが向かったのは——千夜。

「千夜さんは何してるんですか？」

「チノちゃん、見てみて。珍しいランプとお香がいっぱいある店を見つけたの」

「すごく綺麗です！」

千夜が指差す先にはたくさんランプとお香。

「お香を通して世界の香りがお店のヒントをくれるかも——」

千夜が目を閉じてつぶやく。——脳内は甘兎庵の新メニューの名前をどうするかでいっぱいだ。

「こうやってアイデアを取り入れているんですね——私も感じます。甘い匂い……素敵な世界の匂いです……」

チノもそれに合わせて目を閉じ、匂いに集中する。

道端でリゼを見つけた。——何やらキョロキョロしている。

「リゼさん？何か探し物ですか？」

「チノか。高校の友達と卒業旅行計画してて、必要なものを選んでるんだ」

「卒業旅行——ですか」

「そうだ！都会を探検して新しい刺激を取り入れられないとな。ラビットハウスのためにも」

「なるほど——！」

リゼの発言にチノの目が輝く。

リゼと別れた後、すぐにココアを見つけた。

「——何してるんですか」

雪が積もった道路に大の字で寝転がるココアに、チノは理由を尋ねる。

「一回雪に埋れてみたかったの〜！」

「——その行動力、ある意味尊敬します」

チノが呆れた口調でそういうが、ココアは褒められたのかと勘違いしたのか、顔を赤くしてデレデレする。

「こうやって、街を眺めるの。そうすると、故郷のいいところを見直すことができるの」

ココアがチノを見て、そう言って笑った。

「外の世界を知って、故郷がもつと好きになる——」

ココアの言葉を聞いて、チノは空を見上げた。

第二百六話　チノの命令とイメチエン

チノはシャロの元へ向かった。

「シャロさん、気を遣ってくれてありがとうございます」「いいのよ」

「シャロさんは何してるんですか？」

「私はね——」

「リゼじゃないか。どうしたキョロキョロして。探し物か？」

「それ、さつきチノにも言われたぞ」

「なっ!？」

悠の言葉にリゼが笑うと、悠が若干顔を赤くする。

「友達と卒業旅行に行こうと思ってな。その準備だ」

「大学受かってからにしるよ」

今度は悠がせつかちなリゼに笑う。

するとリゼは、「あっ」と何かを思いついたようにいう。

「ん？」

「実はこの前——私大学受かったんだ」

「ええええーっ!!？」

悠が思わず叫ぶと、みんなこちらにやってきた。

「どうしたの悠くん!？」

ココアが驚く。

「り、リゼがこの前大学受かったって——」

「「「ええええーっ!!」「」」」

一同が驚く。

「——なんで悠と同じ驚き方をするんだ」

困惑するリゼに、ココアとチノが雪玉を投げる。

「初耳だよー!!」

「そんな大事なことはもっと早く言ってください!」

「陰で努力してたわね!このく!」

「おめでとうございます先輩〜！」

千夜とシャロも参戦する。

「何あつさり合格報告してんだよう！」

悠も参戦すると、リゼはいよいよ防ぎきれなくなったのか服が白くなっていく。

「なんだこの祝いかたは!？」

ココアがリゼを押し倒す。

「おめでとー!リゼちゃん！」

「うん……ありがとう……!」

「では——。王の命令を発動します」

チノがそう言つて、歯形のついた王冠をみんなに見せる。

「いよいよか……」

緊張する一同。

「リゼさんが受験終わったということ、お祝いの意味も含め——皆さんと外のセカイに行つてみたいです。これが私の命令です」

「——」

一同がポカーン口を開けたまま沈黙する。

「——い、嫌なら別の命令にしますが……」

沈黙する一同にチノが少し動揺するが——。

「あれ!?お姉ちゃんになって欲しいんじゃないの!？」

「チノ!それは命令じゃなくて提案だ!!」

「リゼのいう通りだ!旅行には賛成だけどな!」

ココアとリゼと悠からツツコミがくる。

「私も大賛成よ!」

千夜も悠に同意する。

「命令は考え直しね!」

「えーっ!？」

シャロの言葉にチノが驚く。

「で、行き先はどうする？都会か？海か？」

リゼが一同に話しかける。——心なしかとても嬉しそうだ。

「チノちゃんがあんな命令を下すなんて……!!」

ココアがチノにそういうと、

「ココアさんの変な影響かもしれない」

「えっ!?!」

「正直まだ実感が湧きません。新しいセカイを知るのは怖いです。——

でも、それ以上にみなさんといろんな景色を見たいと思いました」

チノがそうココアに告げた。

「大学生になったら大人っぽくなるぞ！」

「——いきなりどうした？」

翌日、リゼと千夜に甘兎庵へ呼び出された。

唐突なりゼの言葉に困惑する。

「私が今からリゼちゃんをイメチェンします！悠くんは感想を教えてくださいね！」

「お、おう……」

そして、数十分後に現れたリゼをみて悠は目を見開く。

「こっ……この姿は——!?!」

「え、えっと——どちら様でしたっけ——」

道端で偶然シャロに遭遇し、リゼを紹介するとシャロは困惑する。

——どうやら、あまりの変化に誰なのか認識できないようだ。

「おいおい、シャロ。まさかこいつが誰かわからないのか？」

「シャロちゃんがわからないはずないわよね？」

「試されてる!?!」

シャロを煽る悠と千夜にツツコミを入れる。

「も、もしかして——リゼ先輩く!?!」

シャロが驚きの声を挙げると、リゼは「あはは」と笑う。

「気がつくのが遅いぞ!」

「先輩——!」

変わり果てたりゼの姿に目を輝かやかせるシャロ。

「やっぱり変かな? 誰も私って気がつかなかったり——」

リゼが心配そうにいうと、シャロは

「超絶似合ってます! わからないバカは私だけです!」

と慌てて否定する。

第二百七話 ロゼの一日店員

その後ろに、ココアとチノが通りかかると、こちらに声をかける。

「あーっ！悠くん！千夜ちゃんにシャロちゃん！と——知らない美人さん！」

「学校のお友達ですか？」

「ココアとチノがそう言いながらリゼに近くと、2人とも目を輝かせる。

「あっ！あなたは!?!——ロゼちゃん!?!」

「ロゼさん!!」

「——?」

困惑する千夜とシャロの耳元で悠が説明する。

「なるほど——つまり、別人と勘違いしてるってこと?」

「シャロが確認すると、悠は「うん」とうなずく。

「誤解を解かなくていいの?リゼちゃん」

千夜がリゼにそういうが、リゼは「うーん」と少し照れ臭そうにモジモジする。

「あの時はとっさに自分を偽ってしまっただけ……。いつも会ってるのに気がつかないあいつらもどうなんだ?」

と、逆にココアとチノを疑うリゼ。

「もしかして、気づいてた上で私をからかってるんじゃないかってね——」

「じゃあ、ラビットハウスに潜入して心理戦だな」

悠がそういうと、リゼはラビットハウス潜入を決意した。

「そうだ！今日一日ラビットハウスで働いてみたいわー!」

「うちは大歓迎です!」

リゼの言葉にチノが目を輝かせると、リゼは

「さあ！コーヒーの香りとダンスしに参りましょうー!」

「リゼ——いや、ロゼ先輩!?!なんだかんだ言っただけで楽しんでませんか!?!」
ノリノリなりゼにシャロがツツコミを入れる。

「悠くん！みてみて！リゼちゃんの制服だけど似合うよね！本人みたいー！」

ココアがそういうと、悠は飲んでいたコーヒを吹き出しそうになる。

——なんでこっちまでヒヤヒヤしなきゃいけないんだ。

ココアはリゼ——否、ロゼの耳元に近寄ると、

「——ねえ、CQCって知ってる？」

とささやく。——リゼの顔色が変わった。

「ぐ、軍人さんが使う近接戦闘術ですが……それが何か？」

——素直に言ってしまった。そこは「知らない」とごまかしておくところだぞ。リゼ。

だが、ココアはそれに気がつく様子もなく、親指を突き出す。

「合格だよ！これでラビットハウスCQC部のメンバーだね！」

「——いつの間にかそんなものを結成した!？」

ココアの言葉に悠がツツコミを入れる。

「——悠さん。ロゼさんとはお知り合いですか？」

リゼと今後の作戦会議をした後、チノに話しかけられた。

「そうだ。前に偶然——」

「——そうですか」

少しチノの視線が痛い。

「——まさか嫉妬した？俺が美人な知り合いを勝手に作ったことに怒ってる？」

「違います。調子に乗らないでください」

「び、美人——!？」

悠の発言にそっぽ向くチノと、こちらに赤面した顔を向けてくるリゼ。

その後、少し寂しそうなチノにリゼ——否、ロゼが話しかける。

「チノ……ちゃん、どうかしたの?」

「リゼさんのことを考えてて——最近忙しいせいか来れない日が増えて、ちよつと寂しいです」

チノがそういうと、リゼの顔が赤くなる。

「でも、最近ひなたぼっこにハマってて、ココアさんや悠さんと対決してるんです」

——チノ、その情報をこいつに話してはダメだ。

案の定リゼの顔が険しくなる。今後どうなるのか考えただけで恐ろしい。

「ココア、すまんがちよつとコーヒー豆を持ってきてくれ。今手が離せない」

「は〜い! そうだ、ロゼちゃんにも倉庫をご案内するよー!」

「ええ、お願いするわ」

ココアとリゼが倉庫に入っていく。

「コーヒー豆の入った袋って重いのね……」

と適当にそれっぽいことを言うリゼの声が聞こえた。

「お〜い、手が空いたから手伝うぞ。やっぱり重いだろ?」

悠がそう言つて突然倉庫の扉を開けようとすると、リゼがその気配に気がついたのか

「なんだ!? 不審者か!」

と銃を構える。

「わあああつ!」

驚く悠に、リゼはほつと安堵する。

「驚かせるなよりゼ——」

「すまんすまん。ココアも大丈夫か?」

「——あつ」

思わず本名を言ってしまう悠とリゼに、ココアは腹を抱えて笑う。

「あははははっ! ごめんねリゼちゃん!」

と大爆笑するココアに頬を膨らませるリゼ。

「チノちゃんも何冷静になってるのー!?みんなして私を騙してもーっ!!」

「――?」

ココアがチノの肩を揺さぶるが、チノは困惑した顔を見せる。

「――ところで、ロゼさんは厨房ですか?」

「状況についていけない!」

まだ正体に気が付いていないチノにココアがツツコミを入れた。

第二百八話 ココアとゲームセンター

「悠さん、すみませんが今日の夕飯に使うものを買ってきてもらえますか?」

「ああ。——ところで、さっきからココアが見当たらないんだけど、どこ行ったか知らない?」

「知りません!ココアさんなんか探さなくていいです!」

「——さては喧嘩したな?」

ココアに呆れつつ、街に出かける悠。

「——ついでに床屋も探しておかないとな……」

そう思いつつ、街を歩いていると、路地の方から微かな泣き声が聞こえる。

泣き声の方へ向かってみると、ココアが段ボールの中に入っていた。

段ボールには『捨て姉』と書かれている。

「なんだこれ……」

「うぐっ……悠くん!!」

「抱きつくな!どうした?」

悠に泣きついてくるココアに困惑しつつ、事情を聞く。

「実はね——もうお姉ちゃんに疲れたんだ」

「——えっ!?!」

ココアらしくない発言に悠がココアの額に手を当てる。

「熱ないよ——!」

ココアが数十分前にあつた話を悠にする。

『勉強の息抜きにもふもふ……』

『今始めたばかりです』

『理系でわからないことがあつたら——』

『今日は国語と社会です』

『お姉ちゃんにできることは——』

『早く出ていってください！邪魔です！もう話しかけないでください！』

「よく今までメンタル保ったな……」

「もうお姉ちゃん疲れたー!!」

ココアに悠が苦笑いする。

「うえーん!!もう私家出するく!!」

泣き出すココアに悠が慌ててなだめる。

「泣くな泣くな！仕方ないから俺がココアを拾ってやるー!」

悠がそう言うと、ココアは顔を上げて「ほんと?」と上目遣いで尋ねてくる。

——勢いで『拾う』と言ってしまったが、断りづらい……。

「よーし！今日は二人で思っきり大冒険して遊ぼー!!」

急に元気になるココアに「都合のいい奴……」と呆れる悠だった。

「さあ！私についておいでー!」

「やれやれ……」

ココアに腕を引つ張られるままに街を探検する。

「いつも通らない道!——つてあれ、知らないゲームセンターがあるよー!」

「ん？チノと遊んでるゲームセンターじゃないな……。あの一店舗しかないって聞いたんだけど……」

チノは以前ゲームセンターは一店舗だけと言っていた。チノの勘違いだったのだろうか。

ココアは悠に考える暇も与えない。すぐに腕を引つ張る。

「まあいいや！入ってみよー!」

「えええ〜!」

怪しさ満点だが、ココアに引つ張られるままに入店。

「何これこわ……」

内装を見て悠が思わずつぶやく。

——人気のないゲームセンター、薄暗い店内、不気味なうさぎのピエロのぬいぐるみ。

「あーっ！メリーゴーランドだー！さあ、馬でお散歩しましょう！」

「子供じゃあるまいし、メリーゴーランドで楽しめると思うな……」

ココアの後ろに悠が座ると、メリーゴーランドが動き始める。

「あはははっ！はやーい!!」

「こんなの楽しめるかー！」

大笑いするココアに満面の笑みでいう悠。

「でも悠くんたのしそーだよー！」

「あつ！これ、穴を目掛けてボールを投げるゲームだってー！」

「何これ、レトロすぎない……?」

錆び付いたゲーム機。

「こんなので盛り上がるかー！」

「うおー!!悠くん！負けないうー!!」

なんだかんだ言って盛り上がった。

「クレーンゲーム発見！よーし、たまにはお姉ちゃんが取ってあげるよー」

「ココアにできんの?」

「で、できるよー！」

ココアがそう言ってクレーンゲームにお金を入れる。

「反応遅すぎ！クレーンの力弱すぎ！」

「ココア下手くそすぎ！お前のレベルでこれは無理だぞー！」

「何をー！面白い！闘いはこれからだよー！」

結局、取れたのはあめ玉3つ。数十分も時間がかかった。

「と、取れたああー！」

「あめ玉3つに泣いて喜んでる!?!」

泣いて喜ぶココアに悠がツツコミを入れる。

「じゃあこの袋に入れて持ちかえ——あああ——っ!!?」
「どうしたの!?!」

袋を持って叫ぶ悠にココアが驚く。

「チノにお使い頼まれてるんだった!!」

「そうなの—!?!急いで買って帰らなきゃ怒られちゃう!」
慌ててゲームセンターを後にする2人だった。

第二百九話 迷子の2人

「はあ……おわった……」

「ごめんね、悠くん……頼りないお姉ちゃんで……」

「またお姉ちゃんモチベが下がった!」

ベンチに体操座りして額を膝に当てるココアに悠がいう。

——要するに、完全に迷子になったというわけだ。

「冒険はまだまだ続くというわけか——。武者震いしてくるな」

悠がそう言っただけに震えると、ココアが

「それ寒さと不安への震えだよね!」

とツツコミを入れる。

——先ほどから少しずつではあるが雪が降ってきた。

「別に寒いわけじゃないぞ!」

「お姉ちゃんには強がらなくていいんだよ?」

「——そういうココアも震えてるぞ」

「えへへっ……ちよつとかなり寒いかな……」

「どっちだよ。じゃあこれ首に巻いてろ」

「あ、ありがと……!」

ココアの首にマフラーを巻く悠。

「はあ……なんだか眠くなってきたよ……」

「俺たちの冒険もここまでかな……」

そう言っただけで肩をくっつける2人。

「最期の話し相手がココアか……人生わからないもんだな……」

「私は最期の話し相手が悠くんて嬉しいよ……」

そう言っただけで眠りにつこうとしたとき——。

「携帯使わんかい!!」

背後から何者かにハリセンで叩かれる。

「千夜!?!」

「チノちゃんから2人が帰らないって聞いてね、探してたの」

「悠さん?」

「ひっ！ち、チノ！これには深いわけが！」

背後から恐ろしい気配を感じる。

「最期に言い残すことがあれば——聞きますか？」

「あめ玉攻撃——！」

悠がそう言つて先ほどゲームセンターでの戦利品をチノの口に突っ込む。

「もう——お使いサボつてココアさんとデートして——あめ玉で許してもらえと思つたんですか？」

そう言いつつ、美味しそうに飴をもぐもぐさせるチノにココアが「でもおいしそう！」

とツツコミを入れる。

「ごめんね、チノちゃん。お勉強の邪魔して——」

「私の方こそ、強く言い過ぎてしまいました」

「チノちゃんの受験が終わるまで私、部屋に引きこもるから——！！」

「えーっ!？」

極端なココアの発言にチノが叫ぶ。

「——で、でも、完全に一人になりたいわけではなく……数学の時とかは頼りますから」

チノの言葉にココアの顔がパツと明るくなる。

「えへへ、でも悠くとゲームセンターで遊ぶのに忙しくなっちゃうかもなく」

「えっ……ココアさん、やっぱり部屋に引きこもつててください」

「冗談だよ——！」

「悠くん」

買い物をしたにスーパーへ向かう悠に、千夜が話しかける。

「千夜か。いろいろありがと……」

「ふふつ。いいのよ。——それより、ココアちゃんとデートしてたの？」

「ココアの冗談だぞ」

「あまり浮気してると、チノちゃんが安心して受験できないわよ」
「浮気!？」

そう言って微笑む千夜に悠が驚く。

後日、勉強の息抜きをしたいというチノを、学校帰りに例のゲームセンターに連れて行くことになった。

「この辺にあっただよねー!」

「そうそう」

「いつの間にできたんでしょう——」

ココアと悠が前の場所まで案内するが——廃屋しかなかった。

「——ゲームセンターってどれですか？」

困惑するチノに、近くをうろうろと探し回るココア。

「あれー!？」

「まさか——」

「『幻のゲームセンター!?!』」

見事にハモるココアと悠に呆れるチノ。

「もしかして、あれは異世界!？」

「よーし!今日は2人で幻のゲームセンターの謎を解きに行くよー!」

「おー!」

意気投合するココアと悠に、チノがココアの裾を引っ張る。

「今日数学やります」

「そうなの!?!なら勉強はお姉ちゃんに任せなさい!」

「また嫉妬しちゃって……」

慌ててココアを止めるチノに悠が微笑む。

第二百十話 チマメ隊のPV作り

散歩から帰る途中、ココアと千夜と遭遇した。

「悠くん！お姉ちゃんがないのが寂しくて迎えに来てくれちゃったの!？」

「あらやだ、照れちゃうわ……」

「ココアと千夜の発言に悠が引く。」

「その自意識過剰っぷりにはさすがの俺も引くぞ。ただの散歩だ。お前らは学校帰りか」

「えへへ、せっかくだから一緒に帰ろう！」

「はいはい」

「あら、またチノちゃんが嫉妬しちゃうわね……」

「ココアや千夜としばらく、学校であつたたわいもない話などを聞きながら歩く。」

「なに？ビデオの撮影？」

「そうなの！今日一日お互いの何気ないを撮ってるのよ」

「なんでまた……」

千夜の言葉に困惑していると、ココアが補足する。

「だって今年も一緒のクラスになれるとは限らないからね……」

「そうよ——この後編集して加工して、PV作りましょうね」

「スマホじゃダメなのか……」

そう言つて本格的なビデオカメラを操作する2人に悠が静かにツツコミを入れた。

チマメ隊が橋の上で何かしているのが見えた。

——マヤがスマホを構えている。何かの撮影だろうか。

「チノも変わったよね〜！昔はこんなことしなかったのに！」

「の、のせられただけです！」

マヤの言葉に、チノがわずかに顔を赤くする。

「マヤちゃんは、照れたときの反応が面白くなったよね〜」
「べ、別に動揺してるわけじゃないし!」

メグの言葉に、今度はマヤが顔を赤くしてそっぽ向く。

「メグさんのツツコミは昔だったら見られませんでした」

「そ、それはむしろ褒めて欲しいかな!」

——何の話をしているんだ。困惑していると、ココアが3人に向かって話しかける。

「お姉ちゃんはみんな素敵に変わったと思う」

「成長したってことだな」

「二いつからそこに!?!」

チマメ隊がこちらに気が付く。

「今、なにしてたんだ?」

悠が尋ねると、マヤが

「チマメ隊のPV作り!」

と答えると、ココアと千夜が

「私たちと同じことしてる——!」

とハモる。

そしてまた本格的なビデオカメラを操作する2人にマヤとチノが

「気合入ってるなあ——さすが高校生!」

「——スマホで充分なのは」

とコメントする。

「あつ! そうだ! 私たちが3人を撮ってあげるよ!」

ココアがチマメ隊にそう告げる。

「確かに。そうすれば3人一緒に映れるぞ」

悠がそういうと、マヤが「いいの!?!」と目を輝かせる。

「じゃあ、チマメ隊プライベートって感じでお願い〜!」

「クレープ食べながら歩いてるところがいいなあ〜」

マヤとメグが注文つけるが——。

「ココア監督、どうしましょうか」

ノリノリな千夜がカメラを構えるココアに尋ねる。

「そうだねえ……じゃあ——橋の上で踊ってみようか！」

「「なんて無茶振り!」」

急に踊れと指示するココアにチマメ隊がハモる。

「創作ダンスで鍛えたチームワークを見せる時がきたね！」

そう言いながら上着を脱ぐマヤ。——ノリノリだ。

「柔軟体操しつかりしなきゃ〜！」

そう言いながら準備体操を始めるメグ。——こちらもノリノリだ。

「ココア……監督！アレを使う時が来たようです！」

「うむ……。あつ、今朝届けてもらった手提げ袋の中にそのままあるよ——」

「お姉ちゃんぶってる割に荷物管理は俺が担当なんだな——」

「ごめんね〜！すっかり忘れちゃって……」

今朝ココアが忘れた手提げ袋からアレを取り出そうとすると、

「「アレってなに?!兵器?」」

とチマメ隊の顔が青ざめる。

「これって……」

「ポポロンパーカーだよ！前に作ったものをマヤちゃんやメグちゃんにあげようと思って、家庭科の時間に改良してたの！」

「ついでにチノの分もあるぞ！」

「やれやれです。こういう時に限って準備万端なんですから……」

ココアと悠の発言にチノが呆れる。

第二百一十一話　ときめきポポロン

ティップーパーカー、あんこパーカー、ワイルドギースパーカーの3種類あるポポロンパーカー。

全てココアたちの手作り。信じられないクオリティーだ。

「ふふっ。喫茶店お宣伝CMも作れて一石二鳥ね!」

千夜がそう楽しそうに笑いながらカメラを構える。

ポポロンパーカーを羽織ったチマメ隊が橋の上で踊る——これは神動画になるに違いない。

その後ろからシャロがやってきて——。

「いいダンス。でも何か足りないわね——そう! 恥を捨てきれないのよ!」

「シャロ!?!」

「「いきなり出てきてなに言ってるのー!?!」」

突如シャロから発せられたアドバイスに悠とチマメ隊が驚く。

「シャロも今帰りか」

「まあね。——そのパーカーだけだと寒くてやる気が出ないんじゃない?」

「——確かに」

シャロの言葉に悠が納得する。

「チマメちゃん、これでも飲んでテンション上げて! その屋台で買ってきたわ!」

「ホットワイン!? 酔って恥を捨てろと!?!」

チノが驚く。

そして3人とも、一気に飲み干すと、わずかに顔を赤くして

「よっしやー! 気合入れていくぞー!」

と喝を入れ直す。

「——中身グレープジュースなんだけど……」

心なしか酔っているように見えるチマメ隊にシャロが困惑する。

「さあっ! 私たちが恥を捨てている間に!」

マヤが撮影を催促してくる。

「いいのが撮れる気がします！」

チノもやる気満々だ。

「3人ともすごくいい表情ね」

そう言つてカメラに映るチマメ隊を見るシャロに、ココアが「いつの間にシャロちゃんがカメラ持つてるの？」

と目を点にする。

「なんだが感慨深いなく」

悠がつぶやくその後ろで、聞き覚えのある声があった。

「しかし何かが足りない。——そう！キレだ！」

「おお、リゼー！」

「「これ以上ギャラリ―増えないで！」」

リゼの登場にチマメ隊が悲鳴を上げる。

「よしカットー！」

「一旦休憩ね〜」

悠と千夜がそういうと、チマメ隊が一気に倒れる。

「私たち、なんでこんなに頑張ってるんでしたっけ……？」

目的を見失うチノに、先ほどまでの映像を確認していたココアが意外そうにいう。

「チノちゃんって、マヤちゃんとメグちゃんの前では色んな表情するんだね……」

少し寂しげなココアにチノが

「ココアさんにしか見せない顔もありますよ」

というと、ココアが「えっ!？」と顔を見上げる。

「ほら」

そう言つて嘲笑を見せるチノに、ココアは

「それは嘲笑でしょー！」

とツツコミを入れる。——相変わらずの2人だ。

ガクツと落ち込むココアに、チノが振り向いていう。

「さあ立つてください。監督——いえ、お姉ちゃんなら、私たちが頑張ってるよ、しっかり撮ってくださいね！」

チノの言葉にココアが泣き出しそうになる。

『お姉ちゃん』がそんなに嬉しいのか……」

悠が呆れたようにそういうと、ココアは少し笑って

「それもあるけど——あの3人が同じクラスで本当によかったなあ
〜って！」

「そうか——よし！じゃあ撮るぞー！3・2・1・GO！」

あれから3日後。

「そして、本日。チマメ隊の絆と友情が詰まった記念すべきPV第一作目が完成しました」

「「おー！」」

ラビットハウスにて、撮影日の夜から、ココアと千夜と悠の3人で必死に編集作業に取り掛かり、ついに完成したPVを発表する時がきた。

リゼやシャロ、そして青山ブルーマウンテンやティッピーまでPVを見にきていた。

音楽に合わせて華麗に踊るチマメ隊に、

「上官として誇らしいぞ……」

「仲良いのが伝わってきて、ほっこりするわね！」

「素晴らしいインスピレーションを感じます！」

「チノも随分変わったのう……」

泣き出すリゼと、微笑ましく見守るシャロ、そして筆を手取る青山ブルーマウンテンと、孫の成長に困惑しつつ、それを嬉しそうに見守るティッピー。

「やああっ!!みないてくださいー！この時はどうかしてたんです！」

チノが必死にプロジェクターの画面を隠した。

第二百十二話 キッチン封鎖事件

「今日はこれです」

「——分厚くない?」

「受験本番が近づいていますから」

今日も今日とてチノの受験勉強を手伝う悠。

いつもの2倍くらいあるノルマに思わず首を傾げてしまう。

——もうすぐ、受験だ。

その一方、ココアはリゼやシャロ、千夜をラビットハウスに呼び、何やら計画を立てているようだ。——嫌な予感しかしないが、チノの受験勉強を邪魔しない範囲なら別にスルーして構わないだろう。

そんなことを考えていると、早速ココアがチノの部屋にやってきた。

「チノちゃんに悠くん!今からキッチンを絶対覗いちゃいけないよ!」

扉から顔を覗かせてそういうココアに、チノと悠はジト目になる。

「——バレンタインか」

「——チョコ作ったら後片付けしっかりしてくださいね」

冷めた反応をする悠とチノにココアが

「冷めててつまらない!」

と悲鳴を上げるが、リゼはそれとは対照的に

「私たちのチョコに腰抜かすなよ!!」

と火がついたようだ。

「——あのね、勉強中の糖分の摂取はとてもいいことなんだよ!」

「——それ、昨日俺がさりげなく『チョコ欲しい』アピールで言ったセリフじゃねえか」

ココアの言葉に悠が呆れる。

——そう、悠は数日前からさりげなく「チョコくれ」アピールを飛ばしていたのだ。

だがターゲットはココアではない。チノだ。

しかし、受験勉強に夢中になっているチノにチョコをもらうことは

できるのだろうか。

「チョコにはポリフェノールがたっぷり含まれてるんだよ！」

「脳を活性化させる効果があるのよね〜」

ココアと千夜がそういうと、シャロも便乗する。

「げ、原料のカカオはリラックス効果もあるし、体にいいことづくめ！
本当は毎日差し入れしたいくらいなのよ！」

「だ、大事な時期に体調を崩さない……ようにね……！」

ココアがそういうと、扉から顔を覗かせていた全員が床に崩れた。

「——崩れながら言われても」

チノがごもつともなツツコミを入れる。

「バレンタインというのは、本来親愛なる人に感謝を伝える日なんだぞ！」

リゼがそういうと、千夜たちはワイワイとチノの部屋で話し始める。

「なら、タカヒロさんやティッピーにもあげないとね！」

「でも、もう一つ重要なイベントが——」

「今はチョコに集中だよ！シャロちゃん！」

「あーもう！作戦会議なら外でやってください！」

騒ぐ一同に堪忍袋の緒が切れたのか、チノが一同を部屋の外に追い出す。

「やれやれ……」

「本当にしようがない皆さんですね。さ、勉強再開です」

——こうして、ラビットハウスのキッチンにはココアたちに占拠され、今日は立ち入り禁止になった。

最初こそ静かだったが、次第に下の階——主にキッチンから物凄い声が聞こえてくる。

『チマメ隊の合格は私たちのチョコにかかっている！みんな諦めるな！』

『おー!!』

『さあ！完成したわよ！和菓子風チョコ!!』

『なんだこれえ!?!』

「う、うるさい……」

下から聞こえてくる『お姉ちゃんたち』の声にチノと悠が耳を塞ぐ。

「和菓子風チョコってなんだろう……」

悠の素朴な疑問に、チノは深いため息をついて

「千夜さんのチョコですね。和菓子とチョコって合うんでしょうか」

『ココアあ！なんだこれは！チョコの中にパンが入ってるぞ!?!』

今度は下からリゼの声が聞こえる。

「——チョコの中にパン？パンの中にチョコじゃなくて?」

悠がはてなマークを浮かべると、またチノがため息をつく。

「ココアさんのチョコですね。どうせならチョコパンにしてほしいです」

『うっ……なんだこれっ!!もはやチョコじゃなくてハープ……!』

『リゼ先輩！それ失敗作ですー!!』

リゼの悲鳴が聞こえた後、シャロの叫び声。

「シャロだな」

「シャロさんのですね」

下のキッチンで何が起こっているのか考察するチノと悠は、すっかり受験勉強という目的を忘れていた。

第二百十三話 バレンタイン

その後も、様々なチョコが生まれては消え、生まれては消え。

目の色を変え、血相を変え、体力を限界突破して、究極のチョコを生み出すために『お姉ちゃんたち』は奮闘した。

「——キッチンが心配になってきました」

「だな」

先ほどから、悲鳴や叫び声が途絶え、ドタバタという音と振動だけが伝わってくる。

もはや叫ぶ体力すら惜しいのだろう。

「——ところで、チノはチョコ作らないのか？」

「何を企んでるんですか」

「いや……ひよつとしたらワンチャンあるかなと思って」

「何が!？」

悠の意味深な発言にチノがツツコミを入れる。

「はあ……もうしょうがないですね。ちよつと待っていてください。私もちょうど気分転換したかったので——」

「——?」

チノはそれだけという部屋を後にした。

数分後、チノはお盆持って帰ってきた。

「え、この短時間でチョコを!？」

「さすがにそれは無理だったので、これで我慢してください」

チノはそう言ってホットチョコレートを差し出す。

「勉強中の糖分摂取は大事っていうので——」

「——」

「それと——し、親愛なる人に感謝の日ですし……」

チノが照れ臭そうにそういうと、突然部屋の扉が開いてココアたちが出てくる。

「お二人さんひゅーひゅー!」

「チノ……いいこと言うじゃないか……!」

ココアとリゼの発言に、チノは

「自分たちで言ったこと忘れてません!」

と思わず叫ぶ。

「あれ?悠くん?どうしたの?」

先ほどからフリーズする悠にココアが首を傾げる。

「いやあ——ミルクの模様がハートだったからさ……」

「なっ!た、たまたまです!」

悠がデレデレしながらそう言うと、チノは慌ててカップを掌で隠そうとする。

「たまたまじゃないだろ、だってほら、歪な——じゃなくて!独創的な形してるし!」

「うう——も、もうこれは私が飲みます!!」

「チノが飲むのー!」

「それで——腰を抜かすほどのチョコ作りは順調なんですか?」

チノがココアたちに尋ねると、ギクツと若干険しい表情になる。

「正直そこまでは……」

シャロが自信なさそうにボソツとつぶやくが、リゼがその横から入る。

「いや!問題ない!最強の息抜きになるスペシヤルなチョコを楽しみにしていてくれ!」

「はい……!」

「毒物はやめてくれよ……」

「安全だよ!」

悠の不安げな声にココアがツツコミを入れた。

そしてバレンタイン当日——。

「まあ、そのなんだ?悠のチョコはチノの分の残りで作ったおまけと

「どうか、別にそう言うのじゃないから受け取れ」

「はいはい、よくあるツンデレシチュエーションね」

「ぐっ……後で覚えてろよ……。食べた後に戦争開始だからなっ！」

悠の一言でリゼの顔が真っ赤になる。

「律儀に食べ終わるのを待つのか……」

リゼから義理チョコ戦争の火種を受け取った。

「はいこれ。ハープと組み合わせしてみたの。後で感想聞かせてちょうだいね。あとこれは義理だからね、チノちゃん！」

「——どうして私に報告したんですか」

シヤロの言葉に困惑するチノ。

ふと、リゼの悲鳴が脳裏に浮かぶが、頭をブンブンと振って追い出す。

——きつとこれは完成品だから大丈夫だろう。

シヤロから義理チョコを受け取った。

「じゃーん！お姉ちゃんからは和菓子風チョコでくす！」

「悠くんは私の弟だよー！」

向こうからココアのツツコミが聞こえるが、ここはスルーしておく。

——個人的に気になっていたやつだ。

千夜から和菓子風のチョコを受け取った。

「最後は私！愛情たっぷりのはートチョコだよ！中にパン入ってる！」

「ネタバラシしちゃった!?!」

ココアの発言にリゼがツツコミを入れる。

——いや、君たちが下で騒いでたのを全部聞いてるから。

「見てこれ！しっかりハート型になってるでしょー！これで悠くんもお姉ちゃん大好きっ子になって——」

「ならん」

「そんな!」

ココアからパン入りチョコを受け取った。

「——私も今からチョコ作ります!」

「ココアに対抗しよう!」

チノの言葉にリゼが驚く。

「あつ、これ美味しい」

「そうですね」

「「よがっだああ!!」」

「泣くほどか……?」

悠とチノの言葉に泣き出すココアたちに悠がツツコミを入れる。

「チノ、私たちの努力を無駄にするなよ」

「圧力かけてきた!」

リゼの言葉にチノが驚く。

「——あれ? そういえば今日ってリゼの誕生日じゃね?」

悠がハッと気がつく。

「バレンタインに気を取られていました!」

「今からなんか買ってくるか」

「そうですね」

店を出ようとする悠とチノの腕をリゼが引っ張る。

「本当にそう言うのいいから……私は大丈夫だ!」

「リゼちゃん! これあげるよ! はい、あーん!」

「私からもお菓子攻撃よ!」

「なっ! 2人とも——私だって負けてないわ!」

お菓子を差し出すココアと千夜に対抗してシャロもお菓子をリゼの口元に運ぶ。

「ううっ……さ、先にバイトあがるぞーっ!!」

そう言って店の奥に向かうリゼ。

「あつ……逃げた」

「逃げました」

「はあ……話題をそらしてたのに……。こんな忙しい時にこんなことでみんなに気を使わせてられるか」

リゼがそんなことをつぶやきながら、自分用のクローゼットの前に立つ。

「やばっ……なんかいけないことしてる気分だっ……!」

「変なこと言わないでください」

「痛っ!」

更衣室を覗くことにニヤつく悠にチノが頬を引っ張る。

リゼがクローゼットを開けると、着替えではなく、大きなチョコケーキと『Happy Birthday』の文字。

「――やられた」

リゼがストンと床に座る。

「ぷぷっ。『私たちのチョコに腰を抜かすなよ』って言っていましたけど――」

「実際に腰抜けたのはリゼちゃんだったね」

「腰抜けリゼちゃん、盗撮完了ね」

チノとココアがそう言うと、千夜がカメラのシャッターボタンを押した。

「お、お前ら……全員一列に並べーっ!!」

「「「いえっさ〜!」」」

「にやけるなーっ!!」

顔を真っ赤にしたリゼの叫び声がラビットハウスに響いた。

第二百十四話 受験の幕開け

そして、バレンタインが過ぎるとあつという間に試験日がやってきた。

「チノちゃん、大丈夫かな？」

「大丈夫だ……大丈夫だ……」

チノが部屋で支度をしている間、ココアと悠はダイニングに集まっていた。

「大丈夫！そう！大丈夫なのです！」

「悠くん!？」

突然意味不明なことを言い出す悠にココアが驚く。

「動揺しすぎじゃ……」

「汗すごいぞ、ティツピー？」

「冬毛じゃからな」

「――」

小声で会話するティツピーと悠にも気がつかないココア。何気にチノ本人より動揺しているような気がする。

そして、チノが支度を終えてダイニングにやってくる。

「それでは、行ってきます」

今日、高校は試験実施のために休みになっているため、ココアは学校へ行かない。

「ああ、チノなら大丈夫だ。うん、大丈夫……」

わずかに震える悠に、チノはジト目で

「なんで悠さんが緊張してるんですか」

とツツコミを入れる。

チノがラビットハウスを出ようとすると、ココアが追いかける。

「チノちゃん！待って！」

「なんですか？ココアさん」

ココアはチノを呼び止めると、チノの額に自分の額をくつつける。「おまじないしてあげる!——頭よくな〜れ!よくな〜れ!」

「——なんですかその頭の悪そうな呪文……」

チノが冷えた声でココアに告げる。

しばらくしてチノは「ハッ!」と驚く。おまじないの効果があったのか。

「覚えたこと全部吸い取られた気がする!!」

「そんなばかな!」

チノの発言にココアと悠が驚く。——呪文の効果があつたようだ。

チノが試験に出掛けに行った後、暇なココアと悠はティツピーを連れて散歩に出る。

「ねえ、悠くん……」

突然足を止めるココアに悠が「ん?」と振り向く。

「私のせいでチノちゃんが落ちたら、どうしよう……」

「そんなわけあるか」

悠が笑ってそう言うと、ココアは「そっか!」と顔を明るくする。

「そうだよね。まずはお姉ちゃんが信じてあげないと!——よし!今日は休みだし、縁起のいいことしよう!」

「どうしてそうなった!?!」

余計なことをし出しそうなココアの発言に悠が呆れる。

「さあ!一緒に街をお散歩だよー!」

ココアがそう言って拳を振り上げ、前に進む。

唐突な動きだったせいか、ティツピーが慣性の法則に負けて地面に落下する。

「「落ちた!?!」」

思わずココアと悠がハモる。

ココアがティツピーを拾って顔を近づけ——。

「こらティツピー!落ちるなんて縁起の悪いことしちゃダメ!」

「今のはココアのせいだろ……」

ティップーに無茶を言うココアに悠が静かにツツコミを入れた。

「甘兎神社にようこそ〜！」

甘兎庵に寄り道すると、千夜が巫女の格好をして出迎えてくれる。

「また卑猥な制服を……」

悠が目を掌で抑える。

「今週の甘兎庵は巫女さん週間なの？」

ココアが千夜に尋ねると、千夜は頷いて

「そうなの。お祓いや神頼み、なんでもござれ〜！」

といい、2人（と1匹）を店の奥へ案内する。

「おー！〜ご利益ありそうな祭壇！」

あんこが乗った祭壇に賽銭箱が設けられている。

「お賽銭は甘兎の今後の発展と——シャロちゃんの生活費に寄付され

ます〜！」

千夜の言葉に、シャロが席から顔を覗かせて

「余計なことするなあ！」

と叫ぶ。

第二百十五話 受験と不安はセットでやってくる

甘兎庵を後にしたココアと悠は、自然公園で会話もせずぼーっとベ
ンチに腰をかけていた。

「」
「」
「聞こえるのは微かな吐息と、噴水の音。」

空気を吸い込むと、先の尖ったような空気が入ってくる。

「おまじない、効果あったかな」

先に口を開いたのはココアだった。

「それは——そうだね」

「今の間はなに!?!」

悠の意味深な返答にココアが叫ぶ。

「あのおまじない、昔お姉ちゃんにやってもらったんだ」

——安易に想像できてしまうのが悔しい。

「チノには不評だけど、どうせココアは大喜びしたんだろ」

「なんでわかったの!?!」

「単純すぎるんだよ。お前は」

「そんなことないよー」

悠の辛辣な一言にココアは必死に否定する。

そしてまた、しばらく沈黙の時間が流れる。

「——あのね、悠くん」

また沈黙を破ったのはココアだった。

「ん?」

「私ね、ここ最近悩んでることがあるんだ」

「」
「チノちゃんは——私と同じ学校でよかったのかなって……。怖くて
本人に聞けないの……」

わずかに震えた声でそう言うココア。

悠はしばらく考えて――。

「よしー！」

「ん？」

「ちよつとおでこ出してみ」

「こう？」

前髪を除けるココアに、悠はグツと額をくつつける。

「悠くん？」

わずかに顔を赤くするココアを無視して、悠は続ける。

「聞いちやいなよ〜……思いきつて聞いちやいなよ〜……」

先ほどの『頭よくな〜れ』風にそう言うと、ココアは

「おー！あつー！なんか勇気が湧いてきた気がするー！」

と、まんまと乗せられる。――単純すぎる。

「待ってー！」

「なに？」

おまじない（？）を終えた悠にココアがストップをかける。

「私がお姉ちゃんなのに、なんで悠くんがお兄ちゃんぶってるの!？」

「お前が落ち込んでたからだろー!？」

「そつ……か……？……で、でも気が治らないからもふもふしちゃうよーー！」

「もふもふはティップーだけにしてくれー!!」

その晩の夕食は雰囲気最悪だった。

食事中は自分から話題を振らないチノ。

緊張して硬直するココア。

そしてそれを見守る悠。

――空気が重い。

「おい、ココア。おまじない？みたいなやつかけてやっただろ」
「で、でも……」

「……？」

首を傾げるチノ。だが、すぐに目を逸らす。

——チノもチノで話題を振りづらいのだろう。

悠は「はあ……」とため息をついた後——。

「あ、あつー！これ、このシチューおいしい！」

「悠さん？」

違和感しかない悠の話題提供にチノが困惑する。

「昨日の残りでも申し訳ないです」

「昨日の残りでもおいしいよ」

「あ、ありがとうございます……」

「チノちゃん……！受験中は私が料理担当するって言ったのに」

「ココアさんの変なご飯を食べていたら逆に体調が悪くなりそうです」

「そんなく！」

相変わらず辛辣なチノにココアが叫ぶ。——確かにお腹壊しそう
だ。チノの言葉を否定しきれない。

しかし、チノが食べ終わってしまったことにより、チャンス
を逃した。

「では、私は食べ終わったので部屋に戻りますね」

「あつ……」

「皿洗いは任せろ」

今日の当番は悠だ。

チノがダイニングから出て行った後、悠はココアにいう。

「俺が皿洗ってる間、チノと話してこい」

「悠くん……！」

「ほら、早く行け。またタイミング逃すぞ」

「うん！ありがと！」

ココアがチノの部屋に向かった。

第二百十六話 不安は眠りと共に消えていく

「ココア——聞けたか？」

廊下ですれ違ったので聞いてみると、ココアは静かに首を横にする。

「一緒に来て！」

「世話が焼けるな……」

ココアに腕を引つ張られるがままにチノの部屋へやってきた。

「ココアさん？どうかしたんですか。なんか様子がおかしいです」

「——実はな、チノ——」

悠が代わりに言おうとしたが、ココアが遮る。

「実はねチノちゃん！ずっと——聞きそびれてたことがあって」

「ココア——」

「なんですか？」

しばらく何もな時間すぎた後、ココアが口を開く。

「チノちゃん。マヤちゃんやメグちゃんと一緒に学校じゃなくてよかったの？」

ココアが勇気を振り絞ってチノに尋ねた。

「俺も少し気になっていたんだ。だって、一応合格範囲ではあっただろう？」

「——」

「私と一緒に通いたいって気持ちはわかるけど——私がチマメ隊の仲を引き裂いちやったの!？」

ココアがチノの肩を揺さぶると、先ほどまで黙っていたチノがドン引きする。

「なんて自意識過剰な！」

「ドン引きされた!？」

「——そもそも、お嬢様学校に行くつもりなかったですし、1番のきっかけは文化祭で、雰囲気が入っただけです」

チノが理由を答えると、ココアも悠も啞然とする。

「それに、ココアさんのように外の街から生徒がたくさん来る学校なんですよ？——いろんな人を、知りたいと思いました」

「——」

沈黙するココアと悠に、チノは少し慌てて補足する。

「え、えっと——なんて言うか……。マヤさんとメグさんがわくわくするのはあっちの高校で、私がわくわくするのはこっちの高校——というか……」

「——私と同じ志望動機だああ!!!」

チノの補足を聞いて目を輝かせるココア。

「えっ、そんな!? 偶然ですからね!」

ココアの言葉を聞いて視線を逸らすチノ。

ココアは「ふーっ……」と息を吐き出すと、布団をめくる。

「安心したら、なんだか眠くなってきたよ……」

ココアはそう言って布団に入ろうとする。

「やれやれ——。ココアのやつ、怖くて聞けないくっつて大変だったんだぞ」

「そうなんですか?」

悠がチノにそういうと、チノはクスツと笑って首を傾げる。

「悠くん〜! その話はしないでよー!」

「ココアさん……」

「な、なにかな!」

「——私のベッドで寝ないでください」

「チノちゃんが冷たい!」

相変わらずの2人だった。

その日の晩、悠は自室の布団に身を包んでいた。

「ああ……布団は最高だなく……もふもふ……」

「——悠さん?」

「うわっ! チノ! いつからそこに!」

「さつきからいましたよ。ノックしても返事がないので——」

「男の部屋にいきなり入ってきたらダメだぞ！神聖な儀式を行ってる最中だったらどうするんだ！」

「厨二病——!?!」

悠の発言にチノが驚く。——ツツ^リコミ^ゼがないというのは寂しいものだ。

「——それで、どうかしたのか？」

「——ココアさんは安心していましたが、私はまだ少し不安で……」

「チノ——」

「あ、新しい友達……できるかな？とか」

「なにを言ってるんだーっ！」

悠がチノに頭から布団をかぶせる。

「取り込まれた!?!」

「それでちよつと不安になっちゃって一緒に寝たいと——しようがないなあ〜！」

「まだそこまで言ってますん！」

「まだってことは言うつもりだったのか？もー、いいんだぞ、俺には照れなくて」

「別に照れてません！」

「不安な時は、逆に楽しいことを考えればいいんだ。——例えば、今度みんなで行く旅行のこととか」

「旅行——」

「それで、この街のいいところを知って、新しいクラスメートたちに教えるんだ」

「——私にできるでしょうか」

「わからん。わからないけど——でも、最近チノは積極的になってるからな。もしかしたら秘められたコミュ力が開花するかも」

「またそんなこと言って……」

チノが布団に顔を埋める。

「それに——学校が離れていても大丈夫ってことは、ココアたちが教えてくれただろう」

「そうですね……。——あつ、そうだ、受験も終わったことですし、今度皆さんで行き先について話し合いを——」

「悠さん？」

「——」

「寝てしまいましたか。やれやれです。——おやすみなさい」

第二百十七話 合格発表

「ちよつと、ポスト見てきます」

——高校の合格通知は郵便で届けられるそうだ。

試験日が終わった後、チノはポストの中が気になって仕方ないらしい。

1時間——否、30分に一度はポストの様子を確認すると言って外へ出る。

その光景を見て、ココアが笑う。

「チノちゃんったら、合格発表の予定日はまだでしょ！」

「——まあ、結果は心配してませんけどね。配達ミスがあつたら大変ですから」

チノはココアから視線をそらして言う。そして、ココアに背を向けるとまた外へ足を進める。

「念のため、もう一度見てきます」

「さつき見たばつかでしょ!?!」

ココアがチノを止めようとするが、悠が押さえる。

「まあまあ……しやうがないさ。気が済むまで何度でも確認すりゃいい。減るもんじやないし」

「チノちゃん……」

その後、マヤとメグがラビットハウスへやってきた。

「試験は全力出せた！結構手応えあるよ！」

と言うマヤ。メグもそれにうなずく。

自信満々だ。

「よし、なら3人とも合格確実だな！」

リゼがそう言うのと、チマメ隊は声を揃えて

「「バッチリ〜！（です）」」

と親指を立てる。

そんな話をしていると、あつという間に時間が過ぎていき——。

「じゃー今日はこの辺でー！」

「美味しかったよ〜ありがと!」

マヤとメグがラビットハウスを出て行った。

「私たちの教え方が良かったんだな……!」

「チマメ隊はできる子たちだもの!」

「自分の生徒が巣立つみたいない気分ね」

「感動的〜!」

朝から来ていた高校生組——リゼ、千夜、シヤロ、ココアは誇らしげに言う。

「だいぶ気が早いようだが——」

悠がそう言うと、チノもそれにうなずく。

「そうですね——。ちよつとだけポスト見てきます」

チノはそう言うと、また外へ出て行った。

マヤとメグ——あれは確かに自信満々ではあったが、心は誤魔化しきいていない。

自信満々と言いつつも、どこか自信がなさそうな雰囲気だった。

——否、自信がないというより、「手応えあったよ!」と一生懸命に自分を言い聞かせていたように見える。

あの2人は、言い出しづらいのだろう。

リゼたちをはじめ、高校生組はチマメ隊の受験勉強に多大な時間をかけて付き合っていた。

——あれだけ勉強に付き合ってくれたのに「自信ない」なんて言えないだろう。

リゼたちの対応も甘い。表面的な2人の言葉を聞いて「なら合格確実だな!」とフラグを建設してしまった罪は大きい。

フラグ回収とならなかつたとしてもチマメ隊に対して余計なプレッシャーを与えてしまっている。

——チノに見せてもらったこの間の新聞には、受験の倍率が記載されていた。

新聞を読まないココアは知る由もないだろうが——。
今年の受験は難しかった上に、お嬢様高校は倍率高いらしい。

その数日後、ついにチノ宛の手紙が届いた。

「チノちゃんあああん!!!結果が届いたよー!!!」

朝早くに、ココアの叫び声で起こされる。

「なんでココアさんが先に受け取っているんですか!？」

ココアに対するチノの怒鳴り声も聞こえる。

悠は慌てて支度を済ませ、ダイニングへ向かう。

「結果、届いたのか!？」

「悠さん!はい、今朝ポストに入っていたようです!」

チノが緊張した様子で答える。

「こういうのは先にチノちゃんが一人で見ないとね!」

「ああ、そうだぞ!俺たちは目隠しして待ってるから!」

そういうココアと悠に

「——ラブレターじゃないんですから」

とツツコミを入れると、チノは部屋に入って慎重に開封する。

「なーんてね。こっそり覗いちやおう。笑顔をいち早く見たいもんね
〜」

「やれやれ……」

そう言つてココアと悠はチノの部屋の扉から顔を覗かせる。

しかし——部屋にいたチノは、手紙を持ったまま下を向いていた。

「え……嘘だろ……」

「チノちゃん……?」

「悠さん……ココアさん……」

チノがこちらに振り向く。目には涙が溜まっていた。

第二百十八話 資金問題

「チノちゃん！合格おめでとう！」

「おめでとう」

「チノ……おめでとう……！」

「泣いてる!？」

「シャロと千夜、そして半泣きのリゼがラビットハウスへやって来た。」

「もー、チノちゃんが手紙見たとき深刻な顔してたから心臓バクバクしたよ〜」

「そうだぞ。心臓に悪いジョークはやめてくれ」

ココアと悠が冷や汗を拭きながらさういふと、チノは

「2人が覗いていたのでいたずらしました」

と笑いながらいう。

「ばれてる!？」

——あつさりばれていたようだ。

「さて、無事チノが高校に合格したということ——旅行行こう!!」

「行こう！」

悠の掛け声にリゼが答える。

「まずは資金がいくらあるか、ですな」

チノが旅行のパンフレットを眺めながらいうと、ココアは「ふっふっふっ」と笑みを浮かべて貯金箱を取り出す。

「こんな時のために——」

「まさか！ココア——旅行のためにしっかり貯金してたのか!？」

悠が驚いた様子でいう。

——ココアが、貯金箱を開けた。

「——え、旅行資金、これだけ……?もっと貯まっているかと……」

貯金箱から出て来たのは数枚の硬貨。

その光景を見て、シャロと千夜が呆れる——と思いきや、なんだか
気まずそうな顔。

「どうしよ……全然貯金してない……!」

「私もー」

「ええー!?!」

思わずチノとハモってしまった。

旅行の資金が圧倒的に不足している問題が突如ラビットハウスを
襲う。

「ちよつと出稼ぎに行ってくる!お店は任せたよ!」

「私も行ってくるよ。もうちよつと贅沢したからな」

そう言つてココアとリゼはラビットハウスを出ていく。

「全く——2人とも普段貯金しないから足りなくなるんです」

「やれやれだな。チノは大丈夫なのか?」

「受験勉強してて、あまりお金を使わなかつたので。悠さんは?」

「俺はチノが旅行行こう!って言い出してから貯金してるぞ」

悠の言葉にチノが目を見開く。

「——意外です」

「——俺ってそんなイメージ?」

チノの言葉に少ししよんぼりする悠だった。

「それで、結局旅行の行き先はどうなったんだ?」

「それが……」

チノが大量のパンフレットをテーブルに並べる。

「皆さんの意見がバラバラで——全く決まってもせん!全て私に委ね
られました!」

「そういうえば、さつき丸投げされて困惑してたな!」

まずは、一つ一つ要望をまとめていくことにした。

ココア——『きぐみんランド』——半日で終わりそうだ。

千夜——『ココアちゃんの実家』——確かに、それなら費用も多少は抑えられていいだろうが、ココアや悠は新鮮味に欠ける。

シャロ——『先輩が行くところで!』——何気に困る回答だ。

リゼ——『海』——夏にしろよ。

「これは……ダメだ」

「ダメですね」

悠とチノが頭を抱える。

「チノはどこがいいんだ?」

「そうですね——。老舗カフェや斬新な喫茶店があつて、喫茶店を繁盛させられるように勉強できる場所がいいです」

チノの言葉に「うんうん」とうなづくティツピー。

「要望が多いな……ダメだこりゃ」

「なぬ!？」

悠の言葉にティツピーが反応する。

「田舎はダメだな——。敢えて大都市に行つてみる?——このパンフレットにある『百の橋と輝きの都』とか……」

「旧市街を中心にビルや高級ショッピング——デザイナーや職人で溢れたエリア、遊園地——いろいろありますね」

「楽しそうだろ?」

「でも——このシーズン、都会のホテルはお値段するのでは?」

「そうか——」

と、『大都市』が却下されかけたその時——。

「あつ、ここなら昔お世話になった主人に宿泊料を安く提供していただけるかも——長期滞在が前提ですが」

「青山さん!？」

ラビットハウスでコーヒーを飲んでいた青山ブルーマウンテンに話しかけられた。

「長期滞在——ですか……」

「あーっ、もしかしてチノ、都会は冷たいイメージでホームシックが怖いとか考えてる？」

「そ、そんなわけないじゃないですか！お店の心配をただけです！」
チノが明らかに動揺する。

「なら、お店は私に任せて考えてみてください。——別に小説のアイデアに詰まって、久しぶりに店員やりたくなつたからではありませんよー」

「アイデアに詰まってるのか——」

青山のわかりやすい発言に悠がツツコミを入れる。

第二百十九話 出稼ぎと行き先

その後、ラビットハウスでのバイトが終わって、出稼ぎに行ったココアたちを探すことに。

「長期滞在——」

「チノ、ホームシックが怖いのはわかるが——」

「ち、違いますよ。いきなり難易度が高いと思っただけで——」

「まあまあ、そう心配すんなよ」

「むう……」

まともに話を聞かない悠にチノは頬を膨らませる。

「ココアたちは甘兎庵か、フルールでバイトかのう」

ティツピーが喋る。

「そうですね……。ちよつと寄ってみますか」

「ああ」

まずは甘兎庵へ——と足を進めるが、道端から派手な演奏が聞こえたため、一時停止。

「ん？」

「なんの音でしょう……？」

悠とチノが音の方へ振り向くと、ココアがアコーデオンを演奏し、千夜やシャロが手品などのパフォーマンスを披露していた。

「ストリートパフォーマンス!?!」

思わずハモる。

「こんな人気のないところで……」

チノが呆れる。——ごもつともだ。もつと大きい通りでやるべきなのではないだろうか？

「おひねりもらえないね」

シーンとした空間にココアの虚しい一言が響く。

「これじゃあ旅費が貯まらないよ……」

「もー！稼げるっていうから手伝ったのに！」

「諦めちやダメよ!」

ココアやシャロが不満を露わにすると、千夜がそれを励ます。

「どうみても場所が悪いだろ。表のでかい通りで演奏しろ」

「悠くん!にチノちゃん!」

悠の言葉に一同が振り向く。

「私もそう思ってたー」

ココアが棒読み口調でそういうと、シャロや千夜が「私も私も」と便乗する。

「――さては技で頭一杯でしたね?」

チノの鋭い一言に硬直した。

「大通りを見て来たけど、有名パフォーマーばかりで埋れちやいそうだったわ」

千夜が偵察に行つて来た感想を言う。

「やっぱりここしかないかな〜……」

ココアが諦めかせたその時、悠はいいことを思いつく。

「そうだ!チノ!ココアの演奏にあわせて歌おう!絶対人が集まるぞ!」

「――はあ!?!」

悠の唐突な一言にチノが驚く。

「よし、私がアコーディオンで伴奏するよ!セーのっ!」

ココアが掛け声をかけるが、チノの姿はなくなっていた。

にもかかわらず演奏を始めるココアに

「チノいないし……ココアは気がついてないし……」

悠はジト目でツツコミを入れる。

演奏を初めて数分。急に人が増え始めた。

「急に人通りが増えたな」

「休憩してる場合じゃないわ!」

悠の一言に千夜が立ち上がる。

「甘兎庵をよろしくお願いします！」

そう言つてパフォーマンスを繰り広げる千夜。

「さりげなく宣伝してるし……」

「これが怪盗ラパンで培つたカード捌き！」

千夜に便乗してシャロもパフォーマンスを始める。

「す、すごい……！」

「よーし！私も！渾身のマジックを見せるよー！」

そう言つてココアも手品を披露する。——前に見せてもらった時より上手になっている。

「——なんで急に人が増えたんだらう」

悠が不思議そうに表の通りで出ると——。

「向こうで面白いことやつてるよー」

「チノは顔を隠せば堂々とできるのう……」

チノ——つぽい声とティツピーの声が聞こえる。だいたい察した。

「こんなところでどうしたんだ？」

「リゼ！実はココアたちがこの裏の通りでストリートパフォーマンスしてて——つて、リゼは何してたんだ？」

リゼと遭遇する。

「ああ、私はプロカントで手作りのぬいぐるみを改良して量産して売り捌いていたんだ」

「今日だけでこれぐらい稼げたぞ！」

リゼはそう言つて貯金箱の中身を見せると、一同の目の色が変わる。

「私もやるー！」

「作り方教えて！」

「私も手伝いますー！」

リゼに飛びつくココアや千夜、シャロを見て、思わず悠とチノが「初めからそうしろよー！」

「最初からそうしてください！」
とツッコミを入れる。

第二百二十話 行き先の発表と資金問題の解決

後日、ラビットハウスに旅行メンバー一同が呼び出された。

「それでは——行き先を発表します」

チノが重々しくそう言うと、一同から「おー」と歓声が起こる。

「行き先はこの大都市——『百の橋と輝きの街』で、どうしようか……？」

「ちなみに、ホテルは青山さんが手配してくれるから、ちよつとお得です！——ただ、長期滞在になるけど」

チノと悠が街の写真やパンフレットをテーブルに並べ、一同がそれを覗き込む。

「青山さんがホテルを手配してくれるなら安心だね！」

「春休み予定なかったし、長期滞在OKよ！」

ココアと千夜がそう言うと、チノはホッと安心する。

だがリゼは少し心配そうに、ラビットハウスの店員となった青山ブルーマウンテンに言う。

「ありがたいが——ちよつと安すぎないか？逆に不安だ……」

リゼの言葉を聞いて、青山は「大丈夫」と笑う。

「万が一のことがあっても、私がお財布になります！——都会のカジノでどっかくん!!です」

「余計不安になったぞ!!」

両手を広げて自信満々な青山にリゼと悠がツツコミを入れる。

「——シャロ？どうかしたのか？もしかして、他に行きたいところがあつたか？」

先ほどからパンフレットを眺めたままフリーズするシャロに悠が話しかける。

「——よりによって……どうして……」

パンフレットを強く握りしめて震えるシャロにチノと悠が慌てる。

「あわわわわわ……」

「落ち着けシャロ！今代わりの旅行先を——そうだ！リゼの家とかどうだい！」

「私の家!？」

「あら？確かこの街は——シャロちゃんのご両親の出稼ぎ先だったわよね」

千夜がそう言うと、シャロが「うん」と短くうなずく。

「まあ、大丈夫よ。問題ないわ。ちよつと驚いただけよ」

「それならよかったです……」

「——あれ？そういえば私もお父さんが働いてた大学があるようなないような？」

ココアもパンフレットを眺めながら首を傾げる。

「家族なら覚えとけよ……」

リゼの静かなツツコミがラビットハウスに響いた。

「下調べしとこ〜」

ノリノリなココアは、早速パンフレットを漁る。

「ココアさんの実家も候補にあったんですが……」

チノがそう言いかけるが、ココアは「ううん」と首を横にふる。

「ここがいい！みんなで初めて見る景色で一緒にわくわくしたいもん！」

ココアの言葉を聞いて悠がうなずく。

「そうか。——だけどココア、稼いだ金を早速使つてなかったか？」

「——ココアさん？」

「ふえっ!?!——ば、ばれてる……!?!」

悠がジト目でココアを問い詰めると、チノもジト目になる。

「旅行資金、貯まるんですか？」

ココアはしばらく考えた後、青山のもとへ向かい、

「——青山さーん！私もカジノでどっかーんしたいからやり方教えて！」

と言うと、チノと悠が慌てて止めに入る。——それはまずいだろ。

何はともあれ、具体的なことが次々と決定していき、旅行が楽しみな一同であった。

第二百二十一話 卒業式

「がんどうじだあく!!」

「——なんで悠さんが卒業式に来てるんですか」
泣き喚く悠にチノがツツコミを入れる。

「それがさく、ティツピーがどうしてもってうるさくてね」
「なんじゃと!?お主も行きたがってたじゃろ!」

ティツピーが悠の頭の上で跳ねる。

「べ、別に俺は興味なかったぞ」

「——興味、ないんですか……」

チノが暗い顔になるのをみて、悠は慌てて前言撤回する。

「嘘嘘!興味ある!めちやくちや興味あった!」

「やれやれです……」

「しかし、マヤもメグも受かってよかったな」

卒業式でマヤとメグに会った悠は、早速声を掛ける。

「ほんとだよ〜!」

「苦労したかいがあったね〜」

2人とも安心した表情だ。——しかし、その顔にはどこか寂しさも
うつっている。

そして、マヤが真剣な表情で口を開く。

「さて——」

「——?」

一同が雰囲気が変わってことに首を傾げる。

「チマメ隊、解散!」

「ええ〜!!」

マヤの言葉にチノとメグが叫ぶ。

「おいおい……」

悠もこれには驚きだ。しかし、チノとメグは黙っているわけにもい
かず——「発言を撤回しろ」と言いたそうな、恐ろしいオーラを纏う。

それを感じたと思ったのか、先ほどの悠のように、マヤは「嘘嘘!」と

手を横に振る。

「悪い冗談だよ」

メグの冷たい一言にマヤはため息をついて笑う。

「みんな感傷モードだから、2人にも泣いて欲しかったただだよ！」

「——逆効果です」

「——チマメ隊は永遠……！この絆は誰にも避けないんだから……！」

メグが目を輝かせてそういうと、チノがうなずく。

チマメ隊と別れた後、ティツピーとラビットハウスへ向かっていると、何やら道端が騒がしい。

「3年生の卒業式よがっだねえー!!」

「そして私たちにはまたクラス替えがやってくる!!!」

——この騒がしいのはココアと千夜だな。

「千夜ちゃん！クラスが離れても心は一緒だよ！」

「ココアちゃん！離れても絆を見せつけてやりましょうね！」

「千夜ちゃん——！」

「ココアちゃん——！」

「——もう、ほっとこ」

ある意味いつも通りな2人を放置してラビットハウスに足を進める。

その後ろで、

「あの輝かしい文化祭を！数々の思い出を！私たちは絶対に忘れない！」

と余計に騒がしくなる。——さてはクラスメートたちが集合したな。

「やれやれじゃ……」

「だな」

ティツピーも悠も呆れた。

ラビットハウスに到着後、すぐに支度を済ませてカウンターに立つ。

「ここは今日も平和だな……」

「隠れ家的な、静かでいい店じゃ」

「自分で言うなよ」

ティップピーの言葉に悠がツツコミを入れる。

——その数秒後、ドタドタと振動でラビットハウスが揺れる。

「なんだ、なんだ」

悠が困惑していると、店の扉が「バタン！」と大きく音を立てて開く。

「助けてくれえ〜!!!」

「リゼ!？」

駆け込んできたのはリゼだ。

卒業式の帰りとは思えないほど、リゼの姿はボロボロだ。

荒れた髪の毛、グシャグシャな制服。制服のボタンが全て外され、糸くずが見えている。

——だいたい察しがついた。

「シャロを見なかったか!？」

「シャロか……? いや、見てないな。フルールでバイトしてるんじゃないか?」

「そうか……! シャロのために取っておいた第二ボタン——なんと少しでも届けるぞー!」

「命かけてすることか!？」

リゼの言葉にまた呆れる悠だった。

その後、バイトのためにラビットハウスへ戻ってきたリゼは、より一層ボロボロになっていた。

「ふう……。まさか卒業式がこんなに疲れる行事だとはな」

「それはお前だけだろ」

リゼの言葉に悠がツツコミを入れる。

「――」

チノはその様子をチラチラと見ながらコーヒーカップを磨いていた。

「んじや、また倉庫でサボリ——掃除するのでしょうか」

「おい、今サボりつて言いかけたよな!？」

「気のせい気のせい」

リゼの言葉を背中で受けながら、悠は倉庫に入って行った。

しばらくして、チノが様子を見てくると悠の後を追い、倉庫にやってきた。

「あ、あの……」

「ん？」

「私の第二ボタン、もらってください」

「なん……だと……」

倉庫から物音が激しいため、リゼが様子を見にいくと、悠がトンカチ片手に何かを作っていた。

「悠!?! どうした!?!」

「え? ああ、この第二ボタンを祀ろうと思って、祭壇をね」

「やめてください」

「やれやれ……」

大袈裟な悠とそれを止めようとするチノに呆れるリゼだった。

第二百二十二話 旅行の準備

学校も春休みに入り、いよいよ旅行間近となった。

チノと悠は、旅行に備えて必要なものを購入しに街へ出かけていた。

「まずは何から買う？」

「そうですね……。やっぱり、服からでしょうか。こんな田舎くさい格好、都会の人たちに笑われてしまいます」

「ええ……」

チノの言葉に困惑する悠。

「そんなに気を張らなくても……」

「悠さんは、もともと都会に住んでいた人ですから気にならないかもしれないかもしれませんが、私は気にします。どんな服で行こうか悩みすぎて夜も眠れません」

「そこまで!?!」

——「それ、ただ旅行が楽しみで眠れないだけじゃね!?!」とツツコミが頭をよぎるが、口には出さないのでおく。

その次は雑貨。細々したものを購入していく。

「チノさん?さすがに寝袋はいらないんじゃないかな?」

「遭難したら大変ですから。野宿できるようにしておきます」

「あれ、旅行先ってジャングル地帯だったっけ!?!」

チノの言葉に悠がツツコミを入れる。

「没収だ」

チノのカートから寝袋を取り出す。

「そんな……」

「そんなに警戒しなくても大丈夫だぞ」

「——では、何かあったら責任とってくださいね」

「そのセリフはあらゆる誤解を生んでしまうからやめてね!?!」

チノの言葉に若干顔が赤くなるのがわかる。

「あとは——つて、リゼ？」

雑貨店にリゼがいた。

「悠とチノじゃないか。お前たちも旅行の準備か？」

「リゼさん……」

「リゼ……」

「——な、なんだよ」

チノと悠の視線はリゼの手に釘付けだ。

——否、厳密にはリゼが持っている『手錠』に釘付けだ。

「——なんだ、その手錠は？」

「ああ、お前たちが迷子にならないように、しっかり繋いでおこうと思ってるな」

「——チノも含め、ちよつと話し合いをする必要があるな……」

チノとリゼの過剰な警戒心に頭を抱える悠だった。

「何を買ったんだ？」

リゼがこちらのカートを覗く。

「ああ、チノの服とか、リュックやらキャリーバッグとか」

「リゼさんは？」

「私か？私はこちらだ！」

リゼはそう言いつて袋いっぱい詰まった綿を見せる。

「綿？」

「そうだ。何に使うかは、お楽しみってことで」

チノは首を傾げるが、悠はだいたい予想がつく。が、触れないでおこう。

一通り買い物済ませ、リゼと解散した後、ラビットハウスへ向かう。

「しかし、驚きです。リゼさんはもっと都会慣れしてるイメージでした」

「だな。なんだかんだ言つて、あいつも都会に出かけるのが初めてなんじゃないか？」

」
チノは空つぽの両手を見つめながら、ブーツと歩く。

「どうした？まさかもうホームシックか？」

「違います。だいたい、まだ出発もしてないんですよ」

悠の言葉にチノが少し顔を赤くして言う。

「悠くん！大変よ！シャロちゃんが——！」

「どうした!？」

ラビットハウスまであとちよつと——というところで、何やら慌てている千夜と遭遇する。

「千夜さん、シャロさんに何かあったんですか」

「大変なの。シャロちゃんが——シャロちゃんが——!!」

「——?」

首を傾げつつ、千夜についていくと、シャロの家の前に到着する。

そして、その勢いのままシャロの家の中へ足を踏み入れると、ベッドにシャロが倒れたまま動かない。

「なんだ、どうした!？」

「ば、バイトを詰め込みすぎて——もうだめっ……」

「シャロさん！旅行先でご両親と再会したくないんですか！しっかりしてください！」

チノが慌ててシャロを介抱する。

真面目なシャロは、生活費に加えて旅行の資金まで調達しなければならなかったため、ここ数日はバイト尽くしだったのだ。

その結果がこれだ。バイトが原因で倒れたら、元も子もない。

「シャロ——気持ちわかるが、ちよつとこれはやりすぎだぞ」

「わかってるわよ……でも——どうしても——」

震えた声でそう告げるシャロに切なさを感じる。

「でも——都会でレアなティーカップを手に入れるには、もつとお金が必要なのよ！」

目を輝かせてそう叫ぶシャロに、悠とチノはジト目になる。

「——なんか、心配して損した気分」

「うるさいわね！だいたい、私がベッドで休んでるだけなのに、騒ぎ立てたのは千夜でしょー！」

「シャロちゃんらしいわね〜」

微笑む千夜にシャロは

「話を聞けー！」

と叫ぶ。

第二百二十三話 日常はわくわくとともに

「ここでバイトするのもあとわずかか……名残惜しいな……」

「旅行に行ったまま帰ってこないつもりなんですか……」

悠の発言にチノがツツコミを入れる。

リゼが厨房でまかない料理を作り、チノと悠はホールで接客、ココアは――。

「ココア、いつまで寝てんだ」

「あと20分……」

「やれやれです」

『春は日向ぼつこの季節』などと言って、先ほどからぐっすりだ。

「正直羨ましい。俺も寝たい」

「――心の声漏れてますよ」

口に出てしまった。ここはひとつ「ごほん」と咳払いしてから、先日から店員になった青山ブルーマウンテンに尋ねる。

「青山さん、本当にここで働いてていいの?」

「大丈夫です。皆さんを観察させていただき、小説をネタを提供していただければ!」

「また俺たちをネタにするつもりか!?!」

青山の発言に悠が驚く。――青山ブルーマウンテンの作品には、度々チノやシャロをモデルとした小説がある。

新作のために、再びモデルになってもらおうと企てているのだ。

「まあ、俺はいいけど……」

「私も別に気にしません」

「それでは、新作はお2人の物語を――」

「それはちよつと」

「嫌な予感しかしないです」

「あら……残念ですー」

青山ブルーマウンテンは悠とチノが一步引いたことを確認すると、落ち込んだ様子でそう告げる。

「料理できたぞー」

厨房からリゼが出てくる。

「つて、ココア、まだ寝てたのか!？」

未だにティップピーを枕にして眠るココアに驚きを隠せないリゼ。

「ガツンと言ってやってください」

チノがリゼに指示を出す、リゼはココアの隣に座ると

「ココアの寝顔——」

と意味深につぶやく。

「リゼ——順調に変態への道を歩んでいるな」

「そういう意味で言ったんじゃない!」

悠の挑発に乗って、2人がドタバタと争う。

「はあ……先が思いやられます」

まとまりのない一同に、チノが目を瞑る。

「——さん——悠さん!閉店ですよ」

「えっ?あっ……」

いつの間にか寝てしまったようだ。

「すまない、いつの間にか寝てしまった」

「悠さんまでココアさんに影響されなくてくださいね」

「えへへ、さすが私の弟だね!」

「弟ではないけどね」

「えく……」

悠の冷たい一言にココアがガツクリと落ち込む。

「ほら、お喋りはその辺にして、閉店の準備してください」

「はい……」

開いたばかりの瞼を擦りながら、悠はチノにそう返事をする。

——結局、お客は何人ほどきたのだろうか。

これから始まるであろう大冒険のことより、ラビットハウスの今後が心配だ。

その翌日はラビットハウスに一同が招集された。

『百の橋と輝きの都』までのルートと、向こうの駅についてからホテルまでのルートをまとめておくのだ。

——いわゆる『しおり』作りだ。

「しおりって——修学旅行かよ……」

面倒な作業を渋る悠に、リゼが「まあまあ」となだめる。

「これはある意味、私たちの修学旅行だ！だからしおりもちゃんと作るぞー！」

「修学旅行のしおりに『喫茶店一覧』とか、『都会のカジノで一攫千金する方法』って書く必要あるか!？」

やたら分厚くなっていくしおりの内容に悠がツツコミを入れる。

「では、付録に私の新作小説を——」

「それは早く編集者さんに提出して!？」

付録に自分の小説を追加し始める青山ブルーマウンテンに悠がツツコミをいれる。

——またページ数が増えた。

「よーし！完成だよー！」

「内容がカオスすぎてどこに欲しい情報があるかわからねえ……」

ココアが自慢げに完成したしおりをテーブルに並べるが——内容が濃すぎるといふか、無駄な内容が多すぎて情報を探すのに苦労しそうだ。

喫茶店一覧は百歩譲って認めるとして、都会のカジノで一攫千金する方法や、新作小説の付録はいらない気がする。

「青山さんの新作、確かに気になるが——何もしおりの付録にする必要くない?？」

「えー、移動の時間、結構長いんだから暇つぶしも必要だよー」

「やれやれ」

ココアの発言に呆れる悠だった。

第二百二十四話 旅行前の身嗜み

旅行前に、甘兎庵の和菓子を食べておきたいという悠のわがままで、チノを連れて甘兎庵へやってきた。

「悠さんはこの前、床屋さんで髪の毛切っていましたよね」

「え？ああ、さすがに長いと思ってな。チノは？」

「そうですか。——私は前髪をちよつといじろうかなと」

「そっか」

たわいもない話をしていると、すぐ甘兎庵へ到着した。

しかし——。

「本日臨時休業——どうしたんだろ」

「まさか、体調でも悪いんでしょうか……」

扉の前に『本日臨時休業』と書かれた紙が貼り付けられている。

千夜か、もしくは千夜の祖母が体調を崩したのではないか、と心配する2人だったが、それは杞憂だったようだ。

甘兎庵の隣にあるシャロの家から千夜の声が聞こえる。

「さあ、お客さん。今日はどうします？」

「——いつも通りで」

「はい」

「千夜さん？シャロさん？どうしたんですか」

「どうやら、千夜がシャロの髪の毛を切っているようだ。」

「シャロちゃんが、旅行前になって」

「儉約家だなあ……」

悠がシャロの節約っぷりに感心していると、シャロが少し顔を赤くしている。

「うるさいわね！旅行前でいつも以上に節約してるのよー」

「ふふっ。そんなこと言いながら、昔から私に切ってもらうの好きでしよう？」

シャロの言葉に千夜が微笑みながらいう。

「いいから早く切りなさいよー！」

「はい。——濡らしますよー」
「つめたっ！」

チノがシャロと千夜を羨ましそうに眺めているのが見えたので、悠はひとつチノに提案する。

「——ココアに頼んでみたらどうだ？」

「ココアさんに？——考えただけで寒気がします」

辛辣なチノの言葉に苦笑い。

「さあっ！——緒にもふもふ〜」

「ココアかーっ！」

抱きついてくる千夜にシャロが怒鳴る。

「あんなふうに、動けないのをいいことに、もふもふされそうです」

「——確かに」

甘兎庵訪問は後日に変更したチノと悠はラビットハウスへ帰宅。

「ティツピー!?!」

ラビットハウスでチノと悠の帰りを待っていたはずのティツピー。

出発前と現在で、姿の変化が激しすぎるあまり2人はハモる。

「なんだこれ!?!」

「おじいちゃん、その毛並みはどうしたんですか!?!」

毛並みが整えられ、より『もふもふ感』が強化されたティツピーに悠とチノは驚きを隠せない。

「ココアがトリミングした」

そう一言短くティツピーが返答した。

「もふもふへの情熱が見事に発揮されてる……」

悠のつぶやきにチノが「うんうん」とうなずく。

「もしや、ヘアカットも——」

チノのつぶやきに悠はストップをかける。

「もしかしたら、うさぎ限定かもしれないぞ」

「うーん……」

チノは長い時間悩んだ後、ココアの元に向かった。

「ココアさん、私の髪もトリミングしてください！」

「えー!!？」

チノの言葉にココアが驚く。

「そういえば、ココアも髪伸びたな」

「最近伸ばしてるんだ〜！少しでもお姉ちゃんに近づけたらな〜って！」

「伸ばしたからってモカさんみたいには——うぐっ!？」

喋っている途中でチノに口を塞がれる。

チノは悠の耳元に顔を近づけると——

「待つてください。せっかくココアさんがしつかりしようとしているんです。ここは否定せずにいきましょう」

「なるほど——。ココアならきつとチノの髪を素敵にカットしてくれるから、安心だな！」

「はい。ココアさんに全てお任せします」

「うえっ!?!何このプレッシャー!?!」

悠とチノの言葉に青ざめるココア。

「お客様！痒いところはありますか？」

「——美容院ごっこですか」

「今日の私は一流の美容師だよー！」

ココアが自信満々にそういう。——不安でしかない。

「こうしていると『家族』って感じしない？」

「——美容師設定はどこへ」

あつという間に消失した美容師設定にチノがツツコミを入れる。

「さ、ささささあ！お、お客様！覚悟するんだ！」

そう言って「はあはあ」と呼吸を荒くするココア。——心なしか腕

が震えている。

「変な真似しながら緊張しないでください！」

「悠くん！もし失敗したらピコピコハンマーで私をぶっ叩いてね！」

「失敗前提!?!」

ココアの弱気な発言に、またハモる2人だった。

第二百二十五話 髪の毛のお手入れは慎重に

ココアがチノの髪の毛をお手入れしている間、悠はピコピコハンマーを片手にうとうととしていた。

「お客様、もうすぐ高校生ですが、意気込みはどうですか？」

「そうですね……。やっぱり、マヤさんやメグさんと同じ学校にするべきだったでしょうか」

チノがココアにそう告げると、ココアが硬直し、『ザックツ！』と何かが一気に切れ落ちた音がする。

「——わあああああっ!?!」

「なんだ!?!」

ココアの叫び声でうとうととしていた悠の意識が元に戻る。

「——」

チノは鏡に映る自分を眺めながら目を点にしていた。

ココアは、悠の元へ足を進め、頭をこちらに向けてくる。

「ピコピコハンマーで頭を殴れと!?!」

「——今言うべき冗談じゃありませんでした……」

その後、ココアは自分で椅子に座り、チノに叫ぶ。

「お詫びに私も断髪して!!」

「伸ばすんじゃないんですか」

「——やっぱり、私は私で、髪を伸ばしてもお姉ちゃんになれるわけじゃないよね」

ココアは苦笑いしながらハサミを持つチノに伝える。

「——でも私、いつもの髪型も好きですよ」

「今なんて!?!」

「動かないでください」

「——で、結局この有様と」

「えへへ」

チノとお揃いの前髪になったココアに悠がジト目になる。

「すまない、付き合ってもらっちゃって」

「それはかまわんが——リゼも旅行前に髪いじるのか」

「まあな。旅行もあるけど——ほら、私もうすぐ大学生だろ？これを機にイメチェンしたくて」

翌日、リゼに誘われて街へ。

「リゼと2人きりでデートって何気に久しぶりだな……。なんか照れるな」

「変な言い方するな——！——お前、そんなふうにしてると、いつかチノに襲われるぞ」

「チノに襲われる？——リゼの方こそ変な言い方するなよ！」

顔を赤くする悠にリゼが「えっ？」としばらく考えた後、自分の発言を振り返って叫ぶ。

「べ、別にそう言う意味で言ったわけじゃないぞ!!」

「本当かよ、変態め」

「変態はどっちだ！」

「あつ、リゼはなんだかんだで、こういうヘアアクセとかしてそうだな」

悠がリゼに見せたのは、花卉のヘアアクセ。——一見、ココアが好きそうな部類だが、リゼもなんだかんだこういうものに出してそうなイメージがある。

「あー……私はこう言うの似合わないよ。前に試したんだが、おかしくて自分で笑っちゃったよ」

苦笑いするリゼに悠は「そうか？」と首を傾げる。

「むしろ——」

リゼが意味深にこちらを見つめてくる。

「悠、ちよつとお前もイメチェンしよう」

「俺も？俺は別に——」

「いいからいいから——」

そう言つてリゼが半ば強引に悠を連れ込む。

「最高に不愉快なんだけど——」

鏡に映る自分を見て悠は思わずジト目になる。

「なんでお前は似合うんだよお……」

「泣き出した!？」

「これ、俺がさつきリゼに勧めたアクセじゃないか!？」

「お前になら似合うと思つてな」

「うわすげえ複雑な気分なんだけど!？」

「リゼにはこれかなー」

今度はクローバーのヘアアクセをリゼにみせる。

「うーん、こう言うのは、自分じゃよくわからないな……」

困惑するリゼ。

「悠もこれならどうだ？」

「おい、お前は俺を女装させる気じゃないだろうな？」

「違つて。さつきの色違いさ。黒なら違和感ないだろ？ぶつちやけさつきのも違和感ないけど……」

「ん？」

最後の方が聞き取れなかったので聞き返すと、リゼが慌てて

「な、なんでもないぞー!」

悠が先ほど見せたクローバーのヘアアクセの色違いだ。

「黒か……。まあこれなら」

「私は紫を買うよ」

「——待て、俺とお揃いになるけどいいのか？」

「私がかまわないが——チノがかまいそうだ」

「確かに——。まあ、チノのヘアピンも併用すればチャラにできそう

だし、問題ないだろ」

「なんだそのシステム!?!」

悠のよくわからない発言にリゼがツツコミを入れた。

第二百二十六話 甘兔庵・忍者フェア

「ていつ!」

「やあつ!」

「——腕をあげたな。そろそろ50%の力を出そうかな?」

「望むところよ!私もまだ30%の力しか出してないの」

——甘兔庵へ再度訪れたチノと悠だったが、店内に入って唾然とする。

ココアと千夜がチャンバラしているのだ。ココアも千夜も忍者のよ様な格好をしている。

「あの……」

チノが困惑気味に声をかけると、千夜はこちらに気がついたようで「あつ、いらつしやいませ〜!」

と案内する。

「喫茶店で店員がチャンバラしてます」

「まるで小学校の掃除の時間みたいだな。ホウキでよくチャンバラしたもんだ」

「ちゃんと掃除してください」

千夜に聞いた話だと、甘兔庵は旅行の出発日まで忍者フェアを開催しているらしい。

「そう。時代劇に影響されて、自作してみたの——でござる!」

「——」

「みんなに甘兔忍法を魅せてあげるわ!」

「度肝抜いちやうよー!!」

そう言つて構える千夜とココアに悠が

「——ここ、喫茶店だろ」

とツツコミを入れる。

「注文お願いします」

悠が千夜を呼ぶ。

「やっぱり、忍者のような接客になるのでしょうか……」

「はーい。ご注文は？」

「普通に戻った!?!」

接客はいつも通りの千夜に驚く悠とチノだった。

「やっぱり、いつもとは違う自分になりきるって難しいわね」

「リゼちゃんがシャロちゃんはすごいね〜」

千夜とココアが会話しているのを聞いて、チノがいう。

「でも、よく物真似とかしてたじゃないですか」

「そうなの!?!」

悠が驚くと、

「あれは身内の前だから……」

そう言っただけで恥ずかしがる千夜。

「その格好で宣伝しに行ったら、人目を引けそうだぞ」

「さすがにこのまま外に出るのは勇気が……。——私が本領発揮でき

るのは、甘兎ゾーンだけなの!」

「せっかく店も服装もアレンジされてるのに、もったいなくないか?」

「悠くん……」

「ここの楽しさが広まらないのはもったいないぞ!——だから、自信
持ってチラシを配ってみるんだ」

「悠くん……いえ殿!御意!!——城はお婆ちゃんに任せたわ!いざ出
陣!」

悠の言葉に影響された千夜がものすごい勢いで店を飛び出す。

「忍者なのに忍んでないです」

チノのごもつともな発言に悠が苦笑いする。

甘兎庵の帰り道にチラシ配りに出かけて行った千夜と再会した。

「あら、2人とも。さつきぶりね」

「千夜……?」

「千夜さん!」

振り向く千夜の顔を見て悠とチノの顔から血の気が引く。

「なんだその仮面は!」

「恥ずかしくないように、照れ隠しできるアイテムを用意したの!これでもう恥ずかしくないわ!」

「怪しすぎるー!!」

怪しさ満点の奇妙なお面にチノと悠が悲鳴を上げる。

千夜と別れた後、「ドドドド」と激しい振動を感じて足を止める。

「なんだ?地震——ではないよな」

「何かすごい勢いで迫ってきてますね」

2人が喋っている間に、隣をもものすごい速度で何かが通過する。

——瞬間が見えた。

「シャロじゃないか?怪盗ラパンの格好して——どうしたんだろう」

「あ、あれ見てください!すごいことになってます!」

チノが指差す先を見ると、リゼを先頭に大勢の街の子供たちがシャロを追いかけている。

「さあ!私に続けー!!」

「特攻の練習でしようか……」

「おい、こっちに向かってくるぞ!ぶつかったら危ない。俺たちも逃げよう!」

悠に腕を引っ張られてチノは「えっ!」と驚く。

「で、でもさつき食べてからまだ時間が——横腹が痛くなっちゃいます」

「じゃあおんぶする。早く乗れ!」

「う、うう……やっぱり走ります!」

「よしいくぞー!」

笑顔で迫ってくるリゼから逃げるチノと悠だった。

その後、疲れ果てたシャロを『大泥棒イナバ』が助け、リゼと直接

対決したそうだ。

『大泥棒イナバ』の噂を聞きましたか？」

「ああ、疲れたラパンを助けるために、公園でリゼを足止めして伝説になったという——」

「新作で、新キャラ登場するんでしょうか？」

チノと悠の会話を聞いて、ラビットハウスの店員になっていた青山が「ふふっ」と笑う。

第二百二十七話 出発前夜（お知らせ有）

大泥棒イナバの伝説が街中で噂されるようになってから、数日後のことだった。

ラビットハウスに千夜が持ってきたチラシを見てチノと悠は驚愕する。

『怪盗ラパンシリーズ最新作 義賊対決！怪盗ラパン vs 大泥棒イナバ』と書かれている。

怪盗ラパンのイラストは、やはりどこかシャロを連想させるデザインだが、大泥棒イナバのイラストは、千夜を連想させるデザインになっている。

「もしかして、大泥棒イナバって——千夜か!？」

「千夜さんがモデルってことでしょうか……?」

「甘兎庵とフルールで怪盗コラボ——なんてできるのかしら」

そう言つて微笑む千夜とは対照的に、シャロはご機嫌斜めだ。

「シャロは見ないのか?」

「ふんっ!」

悠の言葉にそっぽ向くシャロに千夜が

「シャロちゃん、もしかしてまだ正体言わなかったこと怒ってるの?」

と尋ねると、シャロはしばらくしてから涙目で叫ぶ。

「——怪盗ラパンより人気になったら許さないっ……!」

そんな話をしていると、厨房にいたココアとリゼがやってくる。

「なになに、みんな揃ってどうしたの?」

ココアがこちらに駆け寄ってきて、チラシを覗く。

「これって——千夜ちゃん!？」

「あれ、これは……この前の——」

「リゼは心当たりありそうだな」

悠の言葉にリゼはうなずく。

「あ、ああ。大泥棒イナバが私に直接対決を挑んできて——公園で大

騒ぎしてしまった」

「私たちも、イメージキャラクターを作るべきだよね！」

「このままだと、甘兎庵やフルールに負けてしまうぞ！」

千夜とシヤロが帰って行った後、ココアとリゼはそう言つてチノと悠にじわじわと詰め寄る。

「何を着せるつもりだ!?!」

「やめてください。仕事してください」

以前、ココアがチノに作った魔法少女の衣装や、ティツピーの被り物をこちらに差し出してくるココアとリゼに猛抗議する2人だった。

「あ、あの——悠さん、起きてますか?」

扉の向こうからチノの声がした。

「ああ、起きてるよ。あつ、もしかして、明日からの旅行が不安で眠れないのか?」

「そんなわけないじゃないですか。逆に悠さんの方こそちゃんと眠れるんですか」

悠の言葉にチノが反論する。

「あれ、そういえばココアは?」

「さつき部屋に行つてみたらぐっすりでした」

「旅行前に眠れないタイプかと思つてたが——意外だな」

「そうですね」

「むしろチノの方が眠れないタイプだったとは」

「だから違うって——」

チノが言いかけるが、悠は「まあまあ」となだめて、チノを座らせる。

「明日、楽しみだな」

「はい。いろんな喫茶店見てまわりたいです」

「そうだな。都会の流行を取り込んでいかないと、ラビットハウスも『古臭い』って言われちゃう」

「なんじゃと!？」

廊下からティツピーの声が出た。

「ティツピー？」

チノが扉から顔を覗かせて、廊下の様子を伺うが、ティツピーの姿はなかった。

「気のせいかな……」

「ティツピーも明日連れて行くんだよね？」

悠がチノに確認すると、チノがうなずく。

「もちろんです。おじいちゃんにも面白い喫茶店や、流行の最先端をいく喫茶店をたくさん見せてあげたいです」

「だなく。頑固な爺さんだけど、コーヒーへの情熱は都会にも負けてないぜ！」

「はい！」

そんな2人の会話を廊下で盗み聞きしていたティツピーの目は、涙で潤んでいた。

第2章 百の橋と輝きの都編 第二百二十八話 ラビットハウス・パニック

「起きてください！このままだと遅刻です！」

チノに激しく肩を揺さぶられ、重い目蓋をこじ開ける。

「なんだ、どうした——？」

「どうしたじゃありません！旅行ですよ！」

「ああ……」

かろうじて脳味噌を起動し、部屋に設置された時計を見ると――。

「やばい！遅刻する!!」

慌てて起き上がる悠にチノが怒鳴る。

「だから言ってるんです！早く準備してください！」

荷物を確認していると、ラビットハウスに「ドカン!!」という爆発音のような鈍い音と振動が響く。

「わーん!!」

爆発音の次にやってくるのはココアの泣き叫ぶ声。

「なんだなんだ!?!」

「ココアさんが荷物を詰め込みすぎてパンクしました！」

ラビットハウスのホールには、ココアの荷物が溢れ出して散乱している。

「そういうチノも積み込めてないじゃないか!?!」

「大丈夫です、これくらいなんとかなります！」

悠のツツコミを否定し、力尽くで荷物を押し込むチノが、当然入らない。

「手品道具なんて何に使うんですか!?!」

「やだーっ！これは絶対必要なー!」

チノがココアの手品道具を没収しようとするが、ココアは泣きなが

ら手品道具を抱える。

「クロスワードなんて見ないでしょー!!」

「見ますー!ココアさんの分からず屋ー!」

今度はココアがチノのクロスワードを没収するが、チノはココアに飛びかかって回収しようと必死になる。

「おいおい、準備整ってるの俺だけか……?」

困惑する悠に、ココアとチノは

「悠くーん!チノちゃんがーっ!!」

「悠さん!ココアさんがーっ!!」

とSOS信号。

「——どっちも置いていけ……」

悠がジト目でそういうと、2人が静かになった。

「ティツピーを連れてきます!」

「俺も行くよ。ココアは早くそれカバンに詰め込め!」

「お姉ちゃんに任せなさい!」

いまだに荷物を整理しきれしていないココアを置いて、チノと悠はティツピーを探しに行く。

ラビットハウスのホールにあるバーカウンターでティツピーは静かに一同の様子を見守っていた。

「おーい、ティツピー!——あつ、いた!」

悠が指差す先にはティツピーの姿が。

「おじいちゃんも一緒に行きましょう!面白い喫茶店とかいっぱいあるんですよ!」

「ああ、そうだぞ!老人だからって流行に乗り遅れると、ラビットハウスが危ない!」

チノと悠がティツピーにそう説得するが、ティツピーはまづ「老人言うな!」

と悠にツツコミを入れてから、静かに口を開く。

「——わしはいかんよ。これは、チノたちの旅じゃ」

「おじいちゃん……」

「——いろんなものを見て、たくさんのことに触れておいで」

ティツピーは優しい口調で静かにそう告げた。

「どうして……」

チノが困惑していると、ティツピーは悠の方を向いて

「チノのこと、頼んだぞ」

「ティツピー……」

「——なんか、俺がすごい旅行を楽しみにしてる人みたいになってるな。まあ、事実なんだけどさ……」

駅のホームで一人、佇む。

あの後、忘れ物を取りに戻ったココアとチノに、先に駅で待っていてくれと言われてきたものの——誰もいない。

「あつ、きたー!」

向こうから駆け寄ってくるリゼの姿を見て、悠が思わず言葉を口に
出す。

「よーし! 私が一番乗りだ!」

「いや、俺いるから!」

「なにーっ!?!」

自慢げに一番乗りを宣言するリゼに悠がツツコミを入れる。

「あれ、ココアとチノは?」

「忘れ物を取りに戻ったぞ。ココアはスマホ、チノはしおり」

「どっちも忘れたら致命的じゃないか!」

今度は、シャロと千夜が走ってきた。

「あら、おはよう2人とも!」

「ああ、おはよう!」

「おはよう——つてあれ、なんか目に隈できないか?」

「ワクワクして寝付けなかったのよね——」
千夜が目を擦りながら悠に言う。

「老舗喫茶店から、最近話題の人気店まで、都会はなんでも揃ってるわ」

「ああ、そうだな！いろいろ吸収してこないと！」

シヤロの言葉にリゼがうなづく。

「——井戸の中のカエルだったことに落ち込まないといいけど」

シヤロの言葉に千夜がガクツと崩れる。

「ありえるー!!」

そう叫びながら頭を抱える千夜に、悠が

「出発前にネガティブにさせてしまった！」

とツツコミを入れる。

第二百二十九話 ステーション・パニック

駅で軽食をとっていると、リゼが携帯を取り出してココアに連絡する。

「もしもしココア？もうすぐ列車出発しちゃうぞ？」

『大丈夫ー！もうすぐ着くよー！』

「そうか、わかった。駅で会おう」

『はい！』

「大丈夫か……？」

電話を終えたリゼに悠が尋ねる。

「わからん……。心配でしかない」

リゼの言葉に悠が「うんうん」とうなずく。

「でも、青山さんがついてくれるなら安心だわ」

「そうね。なんだか、引率の先生みたい！」

シャロと千夜が、頼もしい(?)助っ人に微笑みながらそう安堵する。

——今度はリゼの携帯が鳴った。

「凜さんからだ。——もしもし、どうし——えっ!？」

『青山先生が原稿の締め切りを破って、しばらく合流できそうにないですー!』

泣きながらそう詫びる凜の声。

「ダメな先生だ!——大変だ、青山さんが——」

リゼが一同に事情を説明すると、シャロと千夜が青ざめる。

「大丈夫かしら……」

千夜の不安げな声に、駅のアナウンスが聞こえる。

『発車の準備が整いました。まもなく、列車が出発いたします。ご乗車のお客様は——』

「え……。ココアとチノがまだきてないぞ!？」

悠の声にリゼが

「と、とりあえず一旦乗ろう！」

と呼びかける。心なしか緊張と不安で手が震えている。

「おい悠！急げ！」

「やだあああつ！チノが来るまで待つ！」

「子供みたいなことを言うなーっ！」

駄々をこねる悠にリゼが怒鳴る。

その時、向こうからココアの姿が見えた。

「あつ、ココアがきた！」

悠がいうと、リゼは「急げー！」とココアに叫ぶ。

——チノの姿が見えない。

「もう……私を置いて……行つて……」

走り疲れたのか、バテてよろよろと歩くチノに悠が駆け寄る。

「置いていけるかー！」

背中にチノを担いで、列車の扉へ走る。

『まもなく発車いたします。ご乗車のお客様は——』

駅に鳴り響くアナウンスも、悠の耳には届かない。

列車の扉から差し出しているリゼの腕を掴み、なんとか乗車した。

「間に合つてよかったー！」

列車に響くココアの安堵の声をきき、一同がほっと胸を撫で下ろす。

「なんでこんなギリギリに——忘れ物を取りに行つたんじゃないのか？」

悠がココアに尋ねると、ココアはチノの頭を撫でながらいう。

「チノちゃんが、街を離れるのが寂しくなっちゃって」

「それは私じゃなくてココアさんでしょ！」

「やれやれ……」

2人の会話に呆れる悠だった。

「しよーがないなあ、私がメンタルケアしてやる。——このたびに不安を抱えるものは手を挙げる」

リゼが一同にそう呼びかけると、全員が手を挙げた。

「全員かよ……。もう、順番に来い！」

「よーし！列車の中を探検しに行くよー！お姉ちゃんについておいで！」

「へいへい……」

ココアに腕を引っ張られ、渋々ついていく羽目に。

「チノも行くか？」

悠が窓に張り付いているチノを誘うが、チノからの返事はない。

「素早く変化していく景色に夢中だな。——無理もないか」

「今は、そつとしておこー！」

ココアの言葉に悠はうなずいた。

列車の探検を終えた後、席に戻ってきたココアと悠。

ココアは何か一同に言いたいことがあるらしい。

「さて、みんな！突然ですが聞いてください！重要なお知らせがあります！——」

ココアの言葉に首を傾げる。

「この旅の最中はみんなでの共同生活！つまり家族同然ということですよ！」

「そうだな」

リゼが相槌を打つと、ココアは「ごほん」とひとつ咳払いして——

「ここで、みんなに言っておきたいことがひとつ——」

「なーに？」

千夜が首を傾げると、ココアはドヤ顔でビシッと告げる。

「——私がお姉ちゃんで、あとは全員妹か弟だよ！」

「保護者が必要だな」

リゼのツツコミに一同がうなずいた。

第二百三十話 トレイン・パニック

「言われてみれば、長期滞在で生活も一緒っていうのは初めてだな」
リゼがココアの発言に同意する。

これまで、ラビットハウスでお泊まり会などというイベントはあったが、長い間生活を共にするというの初めてだ。

「でも、一緒に暮らすとお互いのダメなところが見えてくるっていうわよね」

「ココアちゃんたちが順調なもの。大丈夫よ」

シャロと千夜がそういうと、チノは

「確かに、ダメなところ見えまくりで困ってます」
と否定する。

「やだなく照れるからやめてよ」

ココアがチノの言葉にデレデレするが、チノは「褒めてないです」と一蹴する。

「そうだな。チノが実はとんでもない甘えん坊だったり——」

悠が言いかけるが、チノが口を塞ぐ。

「捏造です！真っ赤な嘘です！」

顔を赤くして全力否定するチノに思わずにやけてしまう。

「腹が減ってきた」

リゼがお腹を押さえていう。

「ふっ。この時を待っていたんだよ……」

リゼの言葉を聞いてココアが謎のドヤ顔とイケメンな声で語りかける。

「ココア特製サンドイッチです!!」

「お姉ちゃんっぽいことしてる……だど……」

ココアの気遣いに悠がつぶやく。

「私も実は特製のハーブティーを……」

シャロもココアに便乗して、自分の荷物から水筒を取り出す。

「出す機会を伺ってたわね」

恐る恐る水筒を取り出すシャロに千夜が微笑む。

「じゃあ、私からは手作りの抹茶プリン！」

「初日から贅沢だな……」

贅沢な昼食に悠がつぶやくと、チノも「うんうん」とうなづく。

「サンドイッチが上書きされてるー!!」

ココアの悲痛な叫び声が車内に響いた。

サンドイッチを頬張りながらも窓の外を眺めるチノに悠が話しかける。

「チノは、外の景色に夢中だな」

「景色がどンドン変わっていきますー!——もっと、みんなでいろんな景色が見れたら、家族つばいでしようか?」

チノがそう言って悠の方を振り向くと、悠がチノにもたれかかってぐっすりと眠りについてた。

「——寝てるし……」

「わああああん!!!」

「誠に申し訳ございませんでした……」

泣き出すチノに詫びる悠。

「悠さんが起きなくて降りそびれました……」

「まさかこんなに熟睡できるとは思ってなくてだな!——申し訳ない……」

しよんぼりする悠にチノがジト目で問いかける。

「——で、どうするんですか」

「な、なんとかするよ……」

ひとまず、次の駅で降りてリゼに連絡を入れた。

「悠さんのせいでこうなったんですからね」

「ごめん……」

「もう……本当にしようがない悠さんで——ふあああ!？」

それまで怒っていたチノが、駅の壮大きさに目を輝かせる。

「怒りが治まった!？」

「みてください！天井がドームです！」

「みてるみてる〜」

壮大な景色に興奮するチノに頬が緩んでしまう。

「あつ、喫茶店発見したぞ！次の列車が来る前に休憩しよう！」

「えっ……」

喫茶店の看板を見て震えるチノに悠は首を傾げる。

「ん？」

「都会のチェーン店は意識と敷居が高いと聞くので、警戒しろと……」

「大丈夫だってー」

「で、でも……まだ心の準備が……。あつ！リゼさんからメールで、トラムに乗ればホテルに合流できるそうです！」

「まじか。それならトラムのほうに行ってみよう」

「はいー」

話題をすり替えられたような気がするが、今はリゼたちと合流するのが優先だ。ここはチノに話を合わせておこう。

「さあ、出発です！」

そう言っただけで前を歩き出すチノだが——。

「チノさん？出口はこっちですよ……?？」

「し、知ってましたよ！ココアさんの真似です！」

顔を赤くして悠の後ろについてくるチノだった。

第二百三十一話 百の橋とトラム

トラム乗り場に到着した。

「はあ……はあ……。駅から出るのにもこんなに体力消耗するとは……」

チノが息を切らしながら悠にいう。

「そうだな。思ったより複雑な駅だった。でもここまで来れば大丈夫だ、あとはトラムに乗るだけだぞ！」

「は、はい……」

しばらくしてやってきたトラムに乗り込む。

「トラムから海が見えます！」

先ほどまでバテていたチノだが、トラムから見える景色で元気を取り戻す。

「地域同士が橋で繋がってるのか……」

——『百の橋』とはまさにこのことだ。

なんて思っていると、トラムが混み始める。

「ちよつと混んできましたね」

「そうだな。お互いはぐれないようにしないと——」

「あれっ!? 君かわいいね! どこからきたの?」

チノがついにナンパされた——と思いきや、何人かの女性に話しかけられたのは悠。

「え、俺?」

「悠さんがナンパされています!」

「ねえねえどこからきたの?」

「木組みの街からですが……」

「へえ〜! ずいぶん遠くから——」

チノに裾を引つ張られて振り向くと

「もう……景色じゃなくて悠さんから目が離せません……!」

「え、何それ、照れる」

「そういう意味じゃありません！」

そしてトラムを降りた。

「ここで乗り換えだな。次のは——あれかな？」

トラムを乗り換えると、また景色に海と橋が映る。

「——またナンパされてる」

またもや話しかけられる悠にチノがツツコミを入れる。

「よく知らない人と話せますね。私はまだ人見知りします」

「そうか？チノもココアの影響でだいぶ話せるようになってきたじゃないか」

そんな話をしていると、アナウンスが流れてくる。

——そして、そのアナウンスを聞いてチノが青ざめた。

「——どうした？乗り物酔いか？」

「——いえ。このトラム、反対方向に乗ってしまったかもしれない」

「——あっ」

チノの言葉を聞いて気がついた。——ホームを間違えて逆方向に出発してしまったようだ。

「これでおあいこです」

「まだ駅の出口の件、気にしてたのか……」

心なしか少し嬉しそうなチノに悠がツツコミを入れた。

なんとかホテルの最寄り駅までたどり着いた。

「あー……疲れた……。なんか飲み物ほしいな……」

「そうですね……」

とつぶやいていると、カフェの看板を発見。

「あれは——最初の駅にもあったおしゃやれな喫茶店！」

悠が看板を指差すと、チノも顔をあげる。

「あっ、でもまだ心の準備が整ってなかったら、その辺の自販機で——」

悠が言いかけるが、チノがたくましくも無言で店の中に入る。

「チノー!？」

お洒落な店内には、客で溢れていた。

「お、おい、大丈夫か？」

客の多さに顔を青ざめるチノ。——クリスマスの時でもラビットハウスはここまで客は多くなかった。もつとも、木組みの街とここでは人口に大きな差があるが。

「それで、何をかう？」

「コーヒーとは思えない注文の細かさ——。呪文のようなメニュー名——。甘兎庵とは別のカオスな世界です。これだけあると悩みますね——」

「いらつしやいませ〜!ご注文は何に致しますか？」

店員が笑顔で迎えてくれる。チノはメニューをじつと眺めながら、噛まないようにゆっくりと注文を始める。

店から出てきた。手にはカップひとつ。

——なぜひとつなのかというと、チノがこんなメニュー名のコーヒー信用できないと言い出し、お金がもつたないからまずはひとつだけかうということになったのだ。

『クリーミー・ヘブンス☆ナッツパッション・アイスモカチーノ』なんてふざけた味に決まっています……。悠さん、毒味してください」「毒味!?!——よ、よし、任せろ……」

チノにカップを渡されて恐る恐る口に入れる。

「美味しい……口の中がとろけるような甘さ……」

「そんな!?!——私も飲みます!」

「あつ待って、ストロー変えてな……」

悠がストローを変えようとするが、チノがコーヒーに気を取られてそのまま口に入れてしまう。

「美味しい……ありえない……」

「間接キス……」

美味しさのあまり倒れるチノと恥ずかしさのあまり倒れる悠だった。

「さて——ここでこのミッション最大の難所がやってまいりました」
「迂回しましょう。安全第一です」

目の前に広がる光景——『商店街』だ。そのすごい数の人で溢れかえっている。

「この商店街を通れば近道だが、迂回するとかなり遠回りになる。体力が持つなら迂回してもいいが——」

悠はそう言って視線を横にずらす。

「歩くのに疲れた」とでも言いたそうなチノの表情が目に入る。

「し、仕方ないですね。覚悟しましょう……!」

「なんか今日のチノたくましいな!」

覚悟を決めるチノに悠が叫ぶ。

いざ、商店街へ。

第二百三十二話 商店街と廃墟

「本当に人が多いな。準備はできたか？」

「はい！——あの、はぐれたら困るので手を——」

「よし、一気に突入するぞー！」

チノが言いかけるが、悠が商店街の人混みに突入すると、チノもそれを追って人混みの中に姿を消す。

「待つてください——待つて……！」

チノの切実な声は人混みにかき消されて悠には届かない。

「おいていかないで……！」

チノが必死になつて悠にしがみつく。

「チノ——？なんか今日は本当に大胆というかなんとというか……」

腕に抱きつくチノを見て悠が思わず苦笑いしてしまう。

「あつ、す、すみません……別にそういうつもりでは——！」

顔を赤くして弁解するチノを見て、悠はひとつ思いつく。

「——あつ、手を繋いでおけばいいんだ！」

「そんな世紀の大発見みたいに言わないでください……」

今更な悠に呆れるチノだった。

「ごめん、俺が爆睡したせいで初日から不安にさせて——」

「いえ、大丈夫ですよ。悠さんを見ていたら、なんだか急に街を楽しむ

余裕が出てきました」

「さあ、商店街を抜けたらすぐホテルだ！」

「やっつとです……！」

目的の地まで残りわずかであることを知って、チノの目が輝く。

「俺が言うのもアレだけどさ——」

「なんですか？」

「ここまでハプニング満載だったけど、なんだかんだチノと2人で先に街を探検できてよかつたよ」

「そうですね……。降りそびれずに2人で探検できたらもつとよかつ

たんですが」

「辛辣だけどその通りだ!!」

「よし、お姉ちゃんと一緒に行こう！実は私の妹と弟も迷子で——」

知らない景色に、聞き覚えのある声がした。

「あれ、この声——」

チノも聞き覚えのある声に反応する。

「——2人は今年から高校生？こんな大都会で迷子とは、『前途多難』ってやつだね！」

「ココアだ！」

悠がココアの方を指差すとチノも目を見開く。

だがその驚きも一瞬にして覚める。

「——年下相手だからって調子乗ってます」

「——だな」

チノと悠もココアの元へいく。

ココアの視線の先には、双子だろうか、女性が2人。先ほどのココアの発言からして、チノと同じ年なのだろう。

「ココアさんは道に迷うので、私たちが案内します」

「チノちゃんに悠くん?!——よ、がっだああ!!2度と会えないと思っただよー!!」

「ああ、このいきなり抱きついてくる感じ、間違いなくココア本人だ」「そうですね。この鬱陶しい感じを他の人が再現できるはずがありません」

「本人確認しなくても私は私だよ。お姉ちゃんのこと忘れたの？」

「姉なんかいなかったはずだが（ですが）」

ココアの言葉にハモる2人を見て、ココアが笑う。

「ホテルはここから歩いてすぐだ！」

「ココアさんは、なぜあちらに？」

「2人を探してたんだよー！近くまできたら私がアプローチしてあげようと思つて！——その、ちよつとホテルが……」

「それ、逆に迷子が増えるパターンでは——」

ココアが後半、何かを言いかけたが、双子の片方がごもつともなツツコミを入れる。

見事なホテルの前に到着した。ここでこれから生活を送るのか、という気持ちと同時に、こんな立派なホテルを格安で手配してくれた青山ブルーマウンテンが神のような存在に思えてくる。

「あ、あのね！2人とも——！」

ココアが何か言いたそうだが、人混みに声をかき消される。

「ホテル『ロイヤル・キャッツ』に泊まる同士、よろしくお願いします」
チノの言葉に、双子は眉をひそめる。——なんとなく嫌な予感がある。

「え、えつと——。『ロイヤルキャッツ』って、隣のホテルじゃ——？」
——この立派なホテルの隣には、廃墟のような建物しかないのだが。

悠が恐る恐る振り向くと、華々しい光景とは真逆の雰囲気漂わせた建物が目に入る。

「え……」

「嘘だろ……」

先ほどまで神のような存在に思っていた青山ブルーマウンテンが悪魔に変貌する。

「——神のご加護を……」

「——ご武運を……」

双子がココアたち3人の無事を祈る。

「まさか、ホテルを間違えるとはな……」

「はあ……絶対恥ずかしい人たちだと思われました」

悠とチノが落ち込んだ様子でそうつぶやくと、ココアは申し訳なき
そうに

「ごめんね、もうちょっと早く言えればよかったんだけど……。その、
タイミングが——」

と2人にいう。

——いざ、廃墟へ——ではなく、ホテル『ロイヤル・キャッツ』へ。

第二百三十三話 ホラー・ホテル

「本当に大丈夫なんですか?」

チノがココアに不安を告げる。

「だ、大丈夫だと思うよ!」

「断言はしないんだな……。今日からしばらくここで過ごすって冗談きついで」

ココアの言葉に、さらに不安を感じるチノと悠だった。

「どう見てもホラーハウスです」

「リゼたちは大丈夫なのか?」

扉をゆっくり開くと、メイドのような格好をしたりゼたちが「おかえりなさい」と出迎えてくれる。

「何事?!?!」

チノと悠は一同の姿にハモる。

「もう……2人を探すんだっていきなり飛び出したから心配したのよ」

「シャロちゃん——心配してたのね」

「千夜——」

シャロのツンデレに頬が緩んでしまう。

ホテルの中は薄暗いが、内装はとても豪華だ。だがホコリが溜まっている場所もあり、リゼたちがハウキで掃除をしていた。

「なんで働いてるんだ?」

悠がリゼに尋ねると、リゼは「ああ——」と前置きしてから説明を始める。

「それがさ、このホテルいろいろ問題があつて——」

「問題……?」

リゼの意味深い言葉に悠が震える。——何があつたんだ。

「それに、チノたちを待っている間、掃除でもして少しはインパクトを抑えないと——」

「お、おう……」

「最初はどんな状態だったんですか!？」

リゼの言葉にチノがツツコミを入れる。

——しばらくして、奥から支配人と思われる人が出てきた。

「お待ちしております。そちらのお客様は夫婦ですね」

「そうです」

支配人のボケ(?)に便乗する悠と、

「姉妹です!」

と主張するココアに、チノが頭を抱える。

「どっちも違うんですけど……」

「では、お部屋にご案内いたします」

「え、でもお掃除は——」

チノがリゼたちの方を心配するが、リゼはこちらに気を使ってくれたのか

「ごっちは大丈夫だ。チノたちは少し部屋で休んでおけ」と告げた。

支配人の後ろをついていくチノと悠。

「こちらになります」

支配人が部屋の扉をあけて2人を招き入れるが——。

「えっと——1部屋ですか?」

悠が尋ねると、支配人は首を縦に振って

「——3部屋のご予約と聞いていますが」

「「ええー!?!」」

またチノと悠がハモる。

3部屋しかないということは、2人で1部屋を使うことになる。

「お、俺はいいけど、チノはいいのか……?」

「し、仕方ないですね。3部屋しかないんですから」

心なしか、チノが少し安心して見えるような顔をしている。

「そうだな。2人部屋の方がいいかも。このホラーなホテルでチノを1人にしておくわけには——」

「ココアさんと寝ます」

「そんな!？」

悠が軽口を叩こうとするが、チノに遮られる。

「ああ、すまない」

一階にあるロビーからリゼがやってくる。

「部屋割りを決めたんだが、ココアと千夜、私とシャロ、そしてチノと悠だ」

「ここでチノと俺が同じ部屋になって大丈夫なのか？」

悠がツツコミを入れろとリゼに言うが、リゼの代わりに支配人が答える。

「お2人は夫婦で姉妹なのでしよう？問題は無いかと」

「問題しかないんだが!?!どこからツツコミを入れればいいのか……」

支配人の言葉に悠が叫ぶ。

リゼはその様子を見て苦笑いすると、

「もし、あれだったら私とチノ入れ替わろうか？ほら、私だったら何かあった時すぐに悠を武力制圧できるだろう?。」

「武力制圧!?!」

穏やかではないリゼの言葉に悠が驚くが、チノは冷静に

「大丈夫です。慣れてますから」

「そうか——ん!?!」

さらっと問題発言するチノに今度はリゼが驚く。

「さ、悠さん、荷物置きますよ」

「お、おい、チノ——?。」

廊下にリゼを置いて部屋に入るチノと悠だった。

第二百三十四話 ホラー・ルーム

部屋はなかなかの広さだ。少々古びているが、内装はロビー同様とても豪華に作られている。

「ちよつとお手洗いに——」

「ああ」

チノは荷物を置くと、お手洗いに向かう。

「お邪魔するわ」

千夜が部屋にやってきた。

「千夜か。どうした？」

「いいえ、大した用はないの。このホテル、雰囲気は少しアレじゃない？だから2人がどうしてるか気になつて」

そういう千夜の目は輝いている。——言葉と態度が一致しないのはなぜだろうか。

「チノはともかく、俺は千夜の期待に応えられる反応はできないかな」

悠が苦笑する。悠の言葉に千夜は「ふふつ」と微笑むと

「夜が楽しみね——。青山さんにいいホテル紹介してもらってよかったわ」

「おい、まさか肝試しとか計画してないよな!？」

千夜の意味深な発言に悠がツツコミを入れる。

「開かずの部屋や呪われたトイレ——」

「うわああああ!!!」

千夜が言いかけたところで、トイレの方からチノの叫び声がある。

「チノ!?!どうした!?!」

悠が慌てて駆けつける。

「扉が開かなくて——」

「千夜が変なフラグ立てるからだぞ!」

「あらやだ!まだ昼間なのに楽しくなってきたわ!」

チノのハプニングにテンションが上がる千夜。悠は頭を抱える。

「大変だ!チノがトイレに閉じ込められた!援軍を!」

悠がリゼの元へ向かうと、リゼは「なに!？」と驚く。

「シャロの次はチノか——」

リゼがボソツとつぶやく。どうやら前例があつたようだ。

「鍵が壊れたみたいだな。チノ、大丈夫か？泣いてないか？」

「な、泣いてません！子供扱いしないでください！」

悠の問いかけに扉を叩くチノ。

「今、リゼが受付にいたおばあちゃん呼んでもらってるから安心しろ」

「大丈夫なんですか、それ……」

正直なところ、悠も不安だ。受付のほんわかしたおばあちゃん一人増えたところで事態が好転するとは思えない。

だが——。

「リゼは大丈夫だつて自信満々だつたけどな……」

「チノちゃんの気を紛らわせるために怪談でも——!」

「千夜は一旦部屋に戻れ」

「やだ悠くん！そんな乱暴に——」

「千夜さん!?!——扉の向こうで一体何が起きているんでしょう」

「全く——さつきといい今といい、騒がしいですね。これで何度目ですか」

「誰!?!」

リゼが連れてきたのは受付のおばあちゃん——ではない。

「このホテルの支配人です。扉を開けるコツを教えます」

そう言つて懐からハンマーを取り出す。

「つまり破壊しないと出られないってことか!?!」

ドカドカ音を立てながら扉を破壊していく支配人に悠がツツコミを入れる。

その光景を見てリゼが

「デジャヴ……」

とつぶいた。

「もう——どうなるかと思いました」

チノがホッと一息つくと、ココアが駆けつけてくる。

「チノちゃん!?お姉ちゃんが今助けて——ってあれ?」

「なんだその武器は!？」

鎖で繋がれたトゲ付きの鉄球——モーニングスターだろうか。

そんな武器を片手に駆けつけてくるココアにチノが震える。

「え……?だってこれがないと扉壊せないでしょ?」

「感覚が麻痺してる……」

もはやそれは『扉』と言えるのだろうか。先が思いやられる。

「とりあえず無事でよかった」

「そうだな」

悠の言葉にリゼがうなずく。

「助かりました。ありがとうございます」

チノが2人と支配人にお礼を言う。

「トイレの扉は助かってないけどな……」

木っ端微塵に破壊されたトイレの扉を見て悠は目を瞑った。

第二百三十五話 停電事件

「夜ご飯、おいしかったな」

「そうですね。あとは部屋でゆつくりしましょう」

悠とチノは満腹になった腹を撫でながら部屋へ向かう。

「まさか、料理まで手伝う羽目になるとは思わなかったけど」

悠が苦笑いしてそういうと、チノもうなずく。

——受付のおばあちゃんは目が見えないそうだ。といっても、普通に動けるし仕事もできる。だが、危なっかしくてつい手伝ってしまった。

「私はお風呂に入ります。悠さん、先入りますか？」

「いや、俺は後でにするよ。リゼに呼び出されてるんだ」

「わかりました。ではお先に失礼しますね」

「ああ」

そういつて悠は部屋から出た。

——リゼに呼び出しされているのだが、用件はわからない。

「リゼいるか？」

部屋の扉をノックすると、中からリゼの声がする。

「悠か、入ってもいいぞ」

部屋の中に入ると、リゼが椅子に座るように悠を手招きする。

シャロは、明日の荷物をまとめているようだ。

「明日のことなんだけど、よかったらサイクリングに行かないか？」

「サイクリング？俺は別にいいけど……」

悠がシャロに視線を移す。

「せっかくの旅行なのに、リゼと2人でデートしなくていいのか？」

「デート!？」

シャロに小声で尋ねると、シャロは顔を赤くして

「あ、明日はチノちゃんや千夜とコンサートに行くことになってるのよ」

「ああ、そういえば夕食の時にそんな話してたな」

シャロの言葉で思い出す。そういえば夕食の時にそんな話をして
いた。前々から約束していたのだろう。

「私もチノたちのほうに行こうかなと思ってたんだが、実はココアに
——」

リゼが言いかけたその時、部屋にココアがやってくる。

「あ、リゼちゃん！悠くん誘ってくれた？」

ココアがそういうと、リゼはうなづく。

「実は、ココアに誘っておいてくれて頼まれてたんだ」

「チノちゃんに悠くん取られそうだったから早めに——」

「やっぱりチノの方行くわ」

「そんなー!?お姉ちゃんと一緒にサイクリングしようよー!」

「はいはい、わかったよ」

悠が視線をそらしてそういうとココアが面白いようにのっかかる。

部屋に戻ると、チノがちょうどお風呂から出てきたところだった。

「待て待て！なんでタオル一枚なんだ!?!」

部屋に入った悠は慌てて目を掌で覆う。

「悠さん!?!ちが——これはただ着替えを出すのを忘れただけで——
!!」

チノが慌てて弁解する。

「大丈夫だ、俺は何もみてない。枕に顔埋めてるから安心して着替え
てくれ」

悠はそう言ってベッドの枕に顔を埋める。

——体が顔をあげようとしてくるのを全力で阻止しながら。

と、その時事件は起こる——。

部屋の電気が突然落ちたのだ。悠はまだ気がついていない。
「わっ!」

チノの驚いた声に思わず顔を上げそうになる。

「どうした？」

「部屋の電気が——停電でしようか」

——本当にこのホテル、大丈夫なのだろうか。

「前が見えないです。着替えは——これでしようか。確かベッドの上に置いたはず——」

「待て、それは俺が今着てる服だ。どさくさに紛れて脱がそうなんてチノ——」

「間違えただけです！変なこと言わないでください！」

悠の軽口にチノがチョップを食らわす。

悠はまだ枕に顔に乗せて、その上から手で抑えている。何も見えない。これほど透視能力の需要が上がったことがあっただろうか。

部屋の扉がギリギリと音を立てて開いた。

「うわーっ！」

チノがそれに驚いて悠に抱きつく。まずい、このままでは何かが崩壊してしまう。

「おーい、懐中電灯持ってきてやってやったぞー！設備が古くて時々こういうみたいだ！」

リゼの声だ。——だめだ、このホテル大丈夫じゃなかった。

「こんなタイミングになってしまったが、懐中電灯の他にお前たちにプレゼント——」

リゼが言いかけるが、部屋の電気が元に戻ってリゼが目を見詰める。

「——」

黙り込むリゼに悠が「どうした？」と声をかけるが——。

「わわわわーっ!!違うんです！これは着替えを探して——！」

チノの叫び声。——なんとなく状況がわかってきて、頭から血の気がひいていくのがわかる。

リゼの目には、枕を顔に乗せて手で抑えている悠と、その悠にタオル一枚で抱きつくチノの姿が映った。

第二百三十六話 早とちりはもうしない

「——いつも私の勘違いと早とちりで恥ずかしい目にあっているから、今度は最初に聞いておこう」

リゼはそう前置きすると、着替えたチノと悠に話をする。

「これは偶然だな？」

リゼが確認するとチノと悠がうなづく。

「そうだぞ。停電したのはしようがないとして、そもそもリゼがいきなり扉を開くから、その音でこうなったんだ」

「別に驚いたわけではありませんよ」

チノが強がって最後に補足する。

「そうか——。だけど一応言っておくぞ、旅行でテンションが上がるのはわかるが、ぐれぐれも間違えないように」

「引率の先生みたい……」

「ですね」

「先生!？」

悠の言葉を聞いてリゼが若干顔を赤くする。

「そんな、先生なんて——」

「嬉しそうです」

照れるリゼにチノがジト目でいう。

ひとまず、誤解が解けて何よりだ。

「それで、プレゼントがなんとかって言ってなかったか？」

悠がリゼに確認すると、リゼは「そうそう」と同意して懐を漁る。

「これを渡しておこうと思ってな」

リゼが懐から取り出したのは——

「圧縮ティッピー!？」

思わずチノと悠がハモってしまう。

リゼが懐から取り出したのは、圧縮袋に入れられたティッピー。

「お、おいリゼ……?」

悠が若干震えた声で確認するが、リゼは「違う違う」と掌を横に振

る。

「本物じゃなくて、これはぬいぐるみだ！」

「だよな——。一瞬リゼなら本当にやりかねないと思ってしまった」「私をなんだと思ってる！」

悠の言葉にリゼがツツコミを入れる。

チノは圧縮ティツピーを受け取ると、首を傾げてリゼにいう。

「でも、どうしてこれを？」

「本当は私が旅行中、抱き枕として使おうかなと思っていただけだ——」

「ぷっ」

リゼの言葉に悠が吹き出すと、リゼは顔を赤くして

「何がおかしいんだ！私だってぬいぐるみを抱いて寝たいと思うことぐらいあるぞー！」

と反論する。

「——本物のティツピーが来ないって聞いて、チノにプレゼントしようと思ったんだ」

「ありがとうございます、リゼさん」

「気にするな。本物より少しサイズが小さいが、感触はほぼ同じはずだ」

リゼはそういうと、部屋から出て行った。

「また明日な。チノ、夜に悠が事件を起こしたら、鎮圧しに行くから私を呼んでくれ」

「なぜ俺が事件を起こす前提で話をしている!?!」

「さて、疲れたので早めに寝ましようか」

「そうだな」

こうして、ドタバタの1日目が終了した——。

翌日。まだ日が昇っていないが、早寝したおかげで早起きできた。

チノはまだ夢の中。ティツピーを抱き抱えて寝ている。

『『ティツピーは安眠グッズじゃないです』とか言っておきながら——』
普段からティツピーを抱き抱えて寝ようとするココアにツツコミを入れていたチノだったが——。

「さて、みんな起きてるかな……?」

悠は一人で部屋を出る。——朝は少し肌寒いが、上着を着れば問題ない。

「おつ、悠!早いな!」

廊下でリゼと遭遇した。

「シャロを起こす前に飲み物を調達しようと思って」

「どうやらシャロもまだ寝ているようだ。——無理もない。1日目はドタバタして疲れただろうし、そもそもまだ日が昇っていない。」

リゼの飲み物を購入した後、一緒に部屋へ向かう。

「おーい、シャロ!起きろ、朝だぞ〜」

リゼがシャロを揺さぶる。

「ぷぷっ。シャロ、寝相が面白いことになってる」

シャロのおかしな寝相に悠が笑うと、シャロが起き上がる。

「あっははははは!寝癖もすごい!ここまでひどいのは初めてじゃないか?」

大爆笑するリゼと悠。鏡を見たシャロは、扉破壊用の武器を手にとると2人に

「消しましょう。記憶を」

と告げる。

「——シャロ?寝ぼけてるだけだよな!」

リゼが武器を構えるシャロにツツコミを入れた。

第二百三十七話 早起きは三文の徳

「こんな姿を見られるなんて——！しかも悠！なんであんたがいるのよ——！」

「リゼに連れ込まれたんだよ」

「なっ——！」

悠の意味深な言い方にシャロが硬直する。

「誤解を生む言い方をするな！廊下ですれ違ったから一緒に起こすことにしたんだ」

「そ、そうでしたか……。でも、まだ朝5時ですよ」

シャロが首を傾げる。

「リゼ、今日が楽しみで早く起きすぎたんだろ」

「先輩、寂しがり屋なんですね」

「う、うるさい！」

笑う悠と微笑むシャロにリゼが枕に顔を埋める。

「さあ、まずは朝の体操だ！」

ロビーに出た3人はラジオ体操を流しながら体を動かす。

「リゼ、なんで支配人にマスターキー借りたんだ？」

マスターキーを持つリゼに悠が尋ねると、リゼは

「みんなを起こしに行くんだ！」

「それはいいですね！大賛成です——！」

「シャロ、気が合うな！」

リゼが嬉しそうにいうと、シャロはニヤリと笑みを浮かべて

「みんなの寝相を見て、私のだらしない姿を忘れてもらいます」

「それは無理かも……」

リゼが苦笑いした。——確かにあれはインパクトの強い光景だった。

まずは——チノ。

「まだ起こしてなかったのか」

「まあね。チノにはゆっくり寝てほしいからな」
「保護者か！」

悠の言葉にリゼがツツコミを入れる。

「朝だぞ！起きろ！起床ー!!」

リゼが勢いよく扉を開いて叫ぶ。

だがチノは起きない。

「天使の寝顔！」

「お、起こすのに躊躇いが——！」

「そうだろ、そうだろ！」

起こすのを躊躇うシャロとリゼに悠が同意を求める。

「ふっ。寝顔を撮って後でからかってやろう——！」

リゼがそう言ってカメラを構える。

「その写真いくら？」

「買おうとするな——！」

財布を取り出す悠にシャロがツツコミを入れる。

「ココアさん、しつこいですよ」

チノが寝ぼけてリゼにCQCをかける。

「リゼー!？」

技を固められたリゼだが、すぐに

「寝ぼけるな——！」

と反撃してしまう。

「私と同じで旅の疲れが出ちゃったのね〜」

シャロが微笑みを浮かべながら布団をチノにかけてやろうとするが——。

「シャロ、危ない！」

腕を振り上げたチノを見てリゼが叫ぶ。

「ティツピーが2匹……！」

シャロとぬいぐるみのティツピーを抱きしめるチノ。

「ここはもふもふ天国ですか……!？」

「あー！ずるいぞシャロ！」

「私の時は地獄だったのに……」
シャロを羨む悠とツツコミを入れるリゼ。

「チノはまだ寝かせておこう。昨日俺の失態で疲れただろうし」
「そうだな。最後にまたこよう」

——次のターゲットは、ココアと千夜だ。
「気合が入りますねー！」

腕を振り回して力を入れるシャロに悠が「どうして?」と尋ねる。
「千夜にはいつもいじられてるから、だらしない寝相を見てやるのよ」
「！」

そう言つて扉を開けるシャロ。

「千夜——逆さで寝てる」

布団どころか枕も使っておらず、逆さで寝ている千夜。
その光景を見てシャロがクスクスと笑う。

「シャロひゃん……」

「ん?」

千夜が寝言でシャロの名前を呼ぶ。

「らあいき……!」

大好きだと告白する千夜にシャロの顔が真っ赤になる。
「恥ずかしい寝言言つてんじやないわよー!」

怒りつつもどこか嬉しそうだ。

「ところで——ココアはどこだ?」

リゼが辺りを見渡すが、ココアの姿がない。

「まさか——ホームシックで——!」

「そんなバカな!?!」

シャロの言葉にリゼがツツコミを入れる。

「まさか、またどこか閉じ込められたんじや——」

「どこを探してもいないな……?」

悠がベッドをぐるりと回るが、見当たらない。

「ひっ！ベッドの隙間から手が——!!」

リゼの悲鳴を聞いて駆けつけると、ベッドの隙間には幽霊——ではない。

手をゆっくりと引つ張り上げると、以前チノからプレゼントされたうさぎのぬいぐるみを抱き抱え、よだれをたらしながらグツスリと眠るココアが出てきた。

「「いたー!!」」

思わず3人がハモってしまう。

「ベッドの隙間に落ちていたとはな——」

「間違いなく寝相チャンピオンだわ!」

リゼとシャロが未だ夢の中にいるココアにそう言った。

第二百三十八話 二度寝したら自爆した話

ココアを発見した後、シャロがスマホを取り出して腕を伸ばす。
「なんだ？自撮りか？」

リゼが首を傾げると、シャロは「いいえ」と否定する。

「寝癖チエックです。定期的に復活するので——」

「後ろに何か映ってるぞ」

「黒い影が——」

リゼと悠ががそういうと、シャロはゆっくり顔を後ろに向けると——

「うわー!!？」

3人の後ろには扉破壊用の武器を持った千夜の姿が。

「千夜か……。驚かせるなよ。後2人、びびりすぎ」

冷静な悠に抱きつくリゼとシャロ。

「ふふっ。ココアちゃんに気を取られている隙に隠れてたの。ホラーっぽいでしょ？」

千夜は笑って持っていた武器をしまう。

「これぞ！逆寝起きドッキリ！」

「朝から元気だな——」

朝からはしゃぐ千夜に悠がツツコミを入れる。

「いつから起きてたのよー！」

「内緒」

シャロの質問を躲す千夜。

「でも驚かし疲れたわ。おやすみなさ〜い」

そう言ってココアの腕に頭をおく千夜。

「あーもう……。私もなんか眠くなってきた……。…」

そう言ってベッドに倒れ込むリゼ。

「二度寝かよ」

「あんなに起こすの張り切ってたのに……。…」

悠とシャロのジト目にリゼは

「2人もいいから寝る！」

と腕を引っ張る。

「しようがない先輩ですね！」

「やれやれ……」

シャロとリゼが眠った後、悠は自分の部屋に戻る。

「チノ、起きたか？」

扉を開けて中に入るが、チノがいない。

「悠さん……！悠さんですか、私の寝顔を撮ろうとしたのは……！」

寝ぼけたチノがモーニングスターを持ってこちらに歩み寄ってくる。

「待て待て！それは俺じゃなくてリゼだ！俺はただそれを買おうとしただけで！」

「買おうとしたんですか!?!」

悠の言葉にチノが驚く。

「でも、撮影しようとしたらお前が襲いかかって、結局撮れなかった……」

「そんなガツカリしないでください」

落ち込む悠にチノが呆れる。

「他の皆さんは？」

「リゼとシャロと3人で起こして回ったんだが——結局俺とお前以外全滅した」

「そうですか……」

そして——完全に日が昇った頃ロビーに向かうとココアと千夜が起きていた。

「あら2人とも、改めておはよう」

「おはよう」

「おはようございます」

「チノちゃん、それって——！」

ココアがチノの頭に乗っているぬいぐるみティツピーを指差す。

「ティツピーです。リゼさんにぬいぐるみをもらいました」
「いいなく！」

「リゼとシャロは？」

「まだ寝てるわ」

「そうか……。じゃあそろそろ起こしに行くかな」

悠はそう言つてシャロとリゼのところへ向かう。

「おーい、起きろー！今度こそ本当に朝だぞー！」

「起きてるわよ！寝癖を整えてるのー！」

鏡を前にして必死に寝癖を抑えるシャロ。

「よし、これで大丈夫ね。私ちよつと飲み物買ってくるわ」

「ああ、リゼは俺が起こしておくから、先ロビーに行ってくれ」

悠がそういうとシャロはうなずいて部屋を出た。

悠がロビーに戻ってくる。

「あれ？悠、リゼ先輩は？」

「それがさく……」

首を傾げるシャロに悠がカメラを差し出すと、皆大笑いした。

「お、おはよう……」

リゼがロビーに出てくると、ココアが笑う。

「リゼちゃんが一番遅起きだ〜！」

「今日から街を出歩くのに、情けないぞ〜！」

ココアと悠がそういうと、リゼは顔を赤くして

「シャロに悠！どうして起こしてくれなかつたんだ！」

「だってこんな姿を見たら起こすの悪いなくって」

悠がリゼにカメラの画面を見せる。

そこには、ココアが抱いて寝ていたうさぎのぬいぐるみに顔を埋めてグツスリと眠るリゼの姿。

「なーっ!!?」

写真を見せられたりゼは顔を真っ赤にして叫ぶ。

「今すぐ消せー!! 見るな! 見せるな! 今すぐ消去しろ!」

「私の寝相も頭から消去しなさいよ!」

悠に飛びかかるリゼとドタバタに参戦するシャロに、ココアが

「知らない内に仲が深まってますなく!」

と微笑んだ。

第二百三十九話 朝食会議

「みんな、今日の準備はバッチリかな？」

朝、ココアがパンをくわえながら一同に尋ねる。

今日は二手に分かれて行動することになっている。

まず、チノ・シャロ・千夜の3人は街で開催されるというコンサートへ。

そして、ココア・リゼ・悠の3人はサイクリングだ。

「まずはレンタル自転車で街を偵察だ！」

「リゼに同じく〜」

「私たちはコンサートよ。まずはきれいなドレスに着替えなきゃ」
シャロの発言にチノが

「ドレスコードがあるんですけどよね」

と付け加える。

「ドレスコート？なんでドレスにコート着るの？」

「ココアー!!」

雰囲気無しなココアの発言にシャロが怒鳴る。

「えっ?!ドレスコードあるの!?!」

「今気がついた!?!」

千夜が驚く様子を見て思わずリゼがツツコミを入れてしまう。

「そんな……私……」

落ち込む千夜にシャロが「大丈夫!」と肩に掌を置く。

「ハプニング対策にもう一着持ってきてきてるわ!」

「シャロちゃん……!」

そしてコンサート組は一度部屋に戻って着替えることに。

「それで、俺たちはどうする?」

悠がココアとリゼに尋ねると、リゼは

「まず自転車をレンタルしてこないとな!」

「リゼちゃん、場所わかる?」

「任せろ！すでに下調べしてあるんだ！——まず、ここで自転車をレンタルして、それから——」

用意周到なりゼに悠は「サイクリング、どれだけ楽しみにしてたんだよ」と心の中でツツコミを入れた。

「不安だから一応地図持って行く。ちよつと部屋まで取りに戻るよ」「わかった」

悠はりゼに確認をとって部屋に向かうと、シャロの部屋が慌ただしい。

「大丈夫か？」

悠が扉の開いた部屋を覗くと、シャロとチノが出てくる。

「悠！聞いてよ！」

「悠さん！ちよつと聞いてください！」

「なんだ、なんだ!？」

シャロとチノに囲まれて困惑する悠に、チノと奥から出てきた千夜がいう。

「千夜さんがドレス持ってなくて、シャロさんのを貸したんですけど——」

「胸のところがキツくて——ちよつとこれは厳しいかな……」

「あந்தの胸をこの圧縮袋に入れてやるわー!!」

「シャロ!?!落ち着けー!！」

ぬいぐるみティップーが入られていた圧縮袋を取り出し、千夜の胸の中に入れようとするシャロを悠が止める。

「悠、遅かったな。大丈夫か？」

「あ、ああ……」

ロビーでりゼとココアが出迎えてくれる。

「悠くん、出発前からお疲れ!？」

「いろいろあったんだよ。さあ、サイクリングに行こうか」

街に出ると、朝の通勤時間帯は過ぎてはいるはずだが、人通りが多い。日差しは強くなってきているが、時折涼しい風が体を冷却してくれる。

「ほら急ぐわよ！千夜！」

「ま、待ってえー……」

のんびりホテルの外を歩くサイクリング組をコンサート組が慌ただしく追い抜く。

「はあ……間に合う気がしないです」

「チノ、どうしたんだ？」

「結局、千夜さんのドレス、胸のサイズが合わなくてデパートに行くことに——」

「お、おう……」

巻き込まれるチノに思わず同情してしまう。

自転車をレンタルできるところに到着した。

「私の自転車さばきを見せてあげるよ！」

「ほほう……ぜひ見てみたいものだ」

自慢げにいうココアと、「受けて立つ！」とでも言いたげなりぜを置いて、悠は先に自転車を取りに行く。

だが——。

「自転車、2台しか空気がないってさ」

悠がココアとリゼにさういとうと、リゼは「それなら——」と前置きしてからいう。

「ここは公平に、ジャンケンで決めよう！」

「よーしー」

リゼの言葉にココアが腕を巻く。

ジャンケンの結果——ココアと悠はパー、リゼがグー。リゼの負けだ。

——この後、リゼはジャンケンを提案したことを激しく後悔する
ことになった。

第二百四十話 サイクリングはりゼを乗せて

「ちよつと待てー!!?」

レンタルした2台の自転車を見てりゼが叫ぶ。

「な、なんだこれは!？」

「りゼちゃん、さっき私の自転車さばき見たいって言ってたから、私はこっちの自転車に乗るねー!」

ココアが乗った自転車は、前二輪の三輪車で、前に人が乗れるサイズの大きなカゴがついており、側面にはかわいい猫や花のイラストが描かれている。

「さあ、出発だよー!」

とココアが号令をかけるが、

「これ、本当に私が乗るのかー!？」

出発を渋るりゼ。ココアは

「仕方ないでしょー自転車2つしかないんだから!」

と半ば強引にりゼを前のカゴに乗せると、ゆっくりと自転車を漕ぎ始める。

「ぷっ……笑って事故起こしそうになるな……」

悠がクスクスと笑いながらココアの隣で自転車を漕ぐ。

ココアが前に乗っているりゼを見て微笑みながら

「どうだい、私の運転は〜」

というと、りゼは顔を赤くしたまま

「恥ずかしいから早く漕げー!!」

と叫ぶ。

前のカゴに乗ったりゼは、体育座りしているせいもあってかなり滑稽だ。

「次、俺と交代してくれ」

「悠くんもりゼちゃん乗せたくなくなったんだね!」

交代に前向きなココアと、

「悠！お前、絶対遊ぼうとしてるだろ！」

と暴れるリゼ。

「リゼちゃん、動いたら危ないよ〜」

「うう……」

ココアに言われて落ち着くりゼ。

「おーいリゼ、この辺で少し休憩できる場所ないか、地図で見てくれ」
「くっ……私をナビ代わりに使うつもりか！」

カバンに入っていた地図をリゼに投げると、キャッチして渋々と地図を広げる。

「はあ……ひどい目にあった——。な、なあ、もう一回ジャンケンしないか？」

賑わう喫茶店でリゼがココアと悠に尋ねる。

「次は俺がリゼを乗せる番だ。順番を守れ」

「どんな順番だよ!?!」

悠の言葉に怒鳴るリゼをココアが「まあまあ」となだめる。

「旅はまだまだだよー！みんなで美味しいパフェを食べて疲れを癒そうー！」

そう言って、ココアは買ってきたパフェをテーブルに置く。

「ありがとう、ココア。何気に一番疲れてるだろうに——」

悠がパフェを買ってきてくれたココアに礼をいうと、ココアは

「大丈夫大丈夫、お姉ちゃんに任せなさい！」

と笑う。

「さあ！続きと行くこうか！」

「いえっさー！」

「最悪だ……拷問だ……」

悠の掛け声にノリノリなココアと、全くノリノリでないリゼ。
今度リゼを乗せるのは悠だ。

「ほら、戦車長と同じだよ。車長は自分で戦車操縦しないだろ？」

落ち込むリゼに適切なことを言っつてごまかす悠。

「お前……詳しいんだな。そうさ、私は戦車長——」

自分を無理やり納得させるリゼに苦笑いしつつ自転車を漕ぎ始める。

「見てみて悠くん！立派な建物だねー！」

「そうだなー。でもあんまりよそ見するなよ」

「わかってるよ〜」

「——」

楽しそうなココアと悠。リゼはそろそろこの状態に慣れてきたよ
うだ。

「おっ、リゼ、そろそろ慣れてきたか？よし、そこで自転車レースと行
こうかー！」

「なにー!？」

「楽しそー！」

驚くりゼと悠に便乗してはしゃぐココア。

「悠くんはリゼちゃんハンデ抱えてるから、ちよつと前からスタート
ね」

「ハンデいうなー！」

「こらりゼ暴れると真っ直ぐ進めないぞ！」

「あーもう……」

「ココア……腕を上げたようだな」

「ふっ。悠くんの方こそ——。お姉ちゃん、次は本気出すからね」
「臨むところだ」

「目が回る……三半規管が——」

ノリノリな2人とは裏腹に、リゼは目を回してぐったりとしている。

「私は乗り物酔いしないと思っていたが——」

ここまでかなり激しく運転してきた。目が回るのは無理もないだろう。

ホテルに帰る頃には、リゼはすっかりボロボロになっていたとき。

第二百四十一話 濃縮された1日

「コンサート、どうだった？」

「とつてもよかったです」

「そ、そうか——」

リゼがチノにコンサートへ行つた感想を尋ねると、チノは少し首を傾げる。

「リゼさん、何かあったんですか？」

「な、なにもないぞ！心配するな！」

「そうですか……」

チノは少し不思議そうな顔をしたが、それ以上追求することはなかった。

「でも、シャロさんがコンサートの途中で寝てしまつて……。感想を語り合いたかつたのに」

チノが残念そうにシャロへいうと、シャロは申し訳なさそうに

「ごめんねチノちゃん」

と謝罪する。

「仕方ないわ。とつても心地が良くて、私も寝そうになつたもの」
「そんなに良かったのか!?!」

千夜の言葉に悠が驚く。どうせ自転車2台しかないのなら、コンサートへ行つておけば良かったかもしれない。——といつても、ドレスコードを突破できそうな服は持つていないが。

「ふふっ。シャロちゃん、もつたいないことしたわね。あんな感動的なコンサートを寝過ぎすなんて。私なんか胸がいつぱいではちきれそうになつたわよ」

千夜がそう告げた途端、チノとシャロが硬直した。

夕食を摂りながら、今日あつたことやこの街について話が弾む。
「そういうえば、シャロちゃんのご両親はこの街でなにしてるの?」

ココアがシャロに尋ねると、シャロは「ああ、そういえば言ったな
かったわね」と前置きして答える。

「陶器職人よ。主に作ってるのはこういう感じの食器」

シャロの言葉に千夜以外の全員が「えー!」と声を上げる。

「シャロもいずれは陶器職人に?」

悠がそういうと、シャロは「いいえ」と否定する。

「私は陶磁器愛好家よ。愛でるだけで十分なの——こんなふうに!」

そう言つて夕食の乗った食器を愛おしそうに撫でる。

「シャロが陶器フェチなのはご両親の影響か……」

シャロの変わりようにリゼがつぶやいた。

「じゃあ、シャロは将来どんなものになりたいんだ?」

リゼが尋ねると、シャロは「そうですね……」としばらく考えて

「人を輝かせる仕事つても悪くないな」と最近は思つてますね」

シャロがそう答えると、ココアと千夜が「なにになに!?!」と食いつく。

「シャロちゃんの夢はかわいいものを集めた雑貨屋さん!?!」

「それとも、内から輝かせるハーブティーアドバイザー!?!」

「まだ決まってるわいよ!」

「無事? 2日目終了か……」

「そうですね。どつと疲れました」

ベッドにダイブする悠とチノ。無事と言い切れないのが悔しいところだが、朝っぱらからリゼたちと徘徊、ドレス騒動を鎮圧、自転車1台足りない問題、ココアとの自転車レース——。

「1日が濃すぎるな……」

普段の3倍は落ち着かない1日になってしまった。

だが、楽しさが疲れを上回っているためか、気分はとてもいい。

「チノたちの方はどうだった? ドレスを調達しにデパートに行ったん

だろう?」

悠はベッドに預けた体を動かさず、目線だけチノの方へ向ける。

チノが「はい」と短く答えた。

「疲れましたが、とつても楽しかったです」

チノはそう前置きして今日1日の出来事を悠に語り始めた。

夢中でチノと会話していると、いつの間にか遅い時間になってしまった。

「もうこんな時間ですか。だいぶ早くに起きたようですが、大丈夫ですか?」

「ああ、問題ない!チノと話していれば眠気も吹っ飛ぶ」

「また適当なこと言って……」

悠の発言にチノが枕で顔を隠す。

「ほら、そろそろ寝ますよ。明日は千夜さんも入れて3人で喫茶店巡りです」

「はい」

パチンと音を立てて部屋が暗闇に包まれた。

第二百四十二話 喫茶店巡りに出発!

「起きてください。いつまで寝てるんですか」

チノに揺さぶられて目を覚ます。重いまぶたを開けると日の光が目刺さる。

「ああ……もう朝か——」

ふらつく体を無理やり起こして支度を始める。

「みんなは今日なににするー?」

今日も朝ごはんを食べながらココアが尋ねてくる。

「今日は、私と悠さんと千夜さんで喫茶店を巡ろうかと」

「いいねー!!」

チノの言葉に目を輝かせるココア。

「どの辺を周るんだ?」

リゼがそう首を傾げるので、悠は懐に潜らせておいた本を取り出す。

色分けされた大量の付箋が本から頭を出している。

「これ全部」

悠が短く答えると、チノも千夜も「うんうん」とうなづく。

「喫茶店の跡継ぎとして、勉強は大切よ」

「その通りです!」

意気投合するチノと千夜。

「お、おう……。そうか、健闘を祈る……!」

あまりの量にさすがのリゼも反応に困っているようだった。

「さあ、出発しましょう!」

チノが張り切って先頭に出る。

「チノちゃん、それって——」

千夜がチノのかばんにつけられたティップーのぬいぐるみを指差すと

「あつ、これはリゼさんに作ってもらったティツピーのぬいぐるみです」

「そうなんだ……!」

心なしかホツとしたような口調でそう言う千夜。

本物をそのままかばんに結びつけたのだと思ったのだろうか――。

「千夜、震えてるけど大丈夫か?」

「む、武者震いよ!」

悠の言葉に強がる千夜。

「ずっとあの街で暮らしていたから――都会の喫茶店、どんなところか楽しみだけど緊張してるの」

「そうか――」

無理もないだろう。千夜の言葉を聞いたチノが悠と千夜の手をとる。

「私ですよ。でもこうすれば安心です」

「まあ!今日のチノちゃん、積極的ね、悠くん?」

「なんで俺に振った!」

何かあったのか、とでも言いたそうな千夜の視線を躲す。

「1軒目――この街で有名な老舗カフェだ」

悠が本に乗っている写真と建物を比較する。完全に一致した。

「突撃――!」

千夜の号令とともに中へ――。

内部は恐ろしいほど天井が高く、宮殿のような立派な作りになっている。

「まるで宮殿だな……」

悠のつぶやきに、千夜とチノは

「でも怯まず堂々と!」

「常連のように振る舞いますよ!」

と正々堂々足を踏み入れる。

だが、先ほどの発言は嘘のように消えて無くなる。

「あーっ！見てください皆さん！あんなコーヒー初めてみます！」

「ケーキやパフェも素敵よ！」

「——お前ら、はしやぎすぎだ」

店内を興味深そうに行き来するチノと千夜に引っ張られる悠は静かにツツコミを入れた。

ひとまず、注文を終えて手ごころな席に腰を下ろす。

「なんか千夜、楽しそうだな！」

朝から緊張しつつもニコニコしている千夜に悠が微笑む。

「あらやだ、表情に出てた？」

「別に悪いことじゃないと思うぞ」

悠がそう言うのと千夜は少し笑って「実はね——」と話を始めた。

「昨夜、とつても楽しい夢を見たの」

「夢？」

「そう……！悠くんが私たちと同じ高校で、みんなで生徒会に入るの！」

「生徒会、ですか……？」

「みんなの役職は？」

チノと悠が尋ねると、千夜はさらに夢の内容を語り始める。

「ココアちゃんが生徒会長！」

「ココアさんが生徒会長!？」

チノが驚きの声を上げる。——その学校、大丈夫なのだろうか。夢の話なのに冷や汗を流す。

「それでね、悠くんが副会長で、チノちゃんが会計！」

「私が会計!？千夜さんは？」

「私は書記！」

「なんかゾツとする夢だな——」

悠が背中に走る異様な感覚に震える。

「あら、どうして？とつても楽しそうじゃない？」

「なんかわからないけど、その役職配置はマズいような気がするんだ！」

「それはココアさんが生徒会長だからだと思いますよ」

「そうかなあ……」

よくわからないが、きつとそうなのだろう――。

「ところで、注文はなににしたんだ？」

「まずは『アインシュペンナー』です」

「あつ、噂をすれぱく」

千夜の言葉で振り向くと、後ろから年配の店員が『アインシュペンナー』を持ってきた。

「じゃあ、記念に写真撮りましょうか！」

千夜がシャッターを切った。

第二百四十三話 喫茶店巡りは忙しい

「煌びやかで居心地の良い店内、そして目を引く美味しそうなケーキ……」

「新しくて味わい深い、上質なコーヒー……」

圧倒的な差を見せられガツクリする千夜とチノ。

「1軒目にして2人のメンタルがやばい!!」

悠は慌てて2人を励ます。

「落ち込むな!ラビットハウスや甘兎庵にしかない良さもある!」

悠がそういうと、千夜はパッと顔を上げて

「ほんと?」

とこちらに顔を近づけてくる。

「あ、ああ——クセになる奇怪さ、カオスさ、その他もろもろ!」

「褒められてるの!?!」

悠の中途半端な言葉に千夜が困惑する。

「チノも元気出せ、ラビットハウスにはコーヒーとパンというコラボレーションが——」

「悠さんが語り始めた……」

チノを元気付けようとラビットハウスの良さを力説する悠にチノが思わず頬を緩める。

そして2軒目は——。

「この喫茶店は、最近流行っているらしいわね」

千夜がガイドブックを片手に解説する。

「この店——前に行ったところの別店舗か……」

「そうですね」

悠とチノがそういうと、千夜が頬を膨らませる。

先に街をある程度探索したことへの嫉妬か、焦りか——。

だが、それも店のメニュー表を見た瞬間、一瞬で困惑の表情へと移

り変わる。

「……？」

メニュー表を見て首を傾げる千夜。

「え、えつと——これは……？」

困惑する千夜にチノが「大丈夫です」と声を掛ける。

チノは深く息を吸うと、店員に注文を告げる。

「クリーミー・ヘブンズ☆ナッツパッション・アイスモカチーノ」

「チノちゃん!？」

突然呪文のような、奇妙な言葉を発するチノに千夜が驚く。

「私がお姉ちゃんなのに、エスコートされちゃったわね」

「慣れの問題です。千夜さんもすぐ慣れます」

照れ臭そうな千夜にチノが微笑んだ。

「この店——『ブライトバニー』っていうのか……」

「特に若い人たちに人気のお店らしいわね」

「千夜さんも若い人です」

千夜の年寄り臭い発言にチノがツツコミを入れる。

「あ、向かい側にも喫茶店があるみたいだな。こっちはあまり客がないような——」

悠が『ブライトバニー』の反対側にある店に視線を向けて、一同にそう告げる。

——どうやら、チノはその店が気になるようだ。ラビットハウスと状況が似ているからだろうか。

チラチラとその店の様子を伺うチノ。早く中に入ってみたいが、千夜がまだ『クリーミー・ヘブンズ☆ナッツパッション・アイスモカチーノ』を飲んでいるので言い出せないのだろう。

悠はその様子を見て半ば強引に2人の腕を掴む。

「さあ、次いくぞー!」

「はい!」

「あ、あの、お腹がタプタプ——」

店の中に入ると、1軒目の喫茶店や先ほどの『ブライトバニー』とは異なり、歴史を感じる雰囲気——俗に言う『エモい』雰囲気漂う、落ち着いた雰囲気のお店。

客の年齢層も『ブライトバニー』より高めだ。

「来てみてわかったわ。——それぞれの良さがあるから、お客さんの取り合いにならないのね」

千夜がコーヒーを飲みながら納得した様子でそう語る。悠も「うん」と共感するが、チノは頭を抱える。

「でも、『ブライトバニー』がうちの隣にきたらダメかも……」

震えた声で俯くチノに千夜が「そんなことないわ」と否定する。

「さつき、悠くんも言っていたでしょう？ラビットハウスには、ラビットハウスの良さがある。ラビットハウスのコーヒーは特別な味。しばらく飲めないのが寂しくなっちゃうわ」

「千夜さん……」

「その通り！おまけにココアのパンやりゼの料理、そしてチノのコーヒー——。その絶妙なバランスは他の店には真似できない！」

「悠くんは？」

「俺は——在庫の管理とか……？」

圧倒的な雑用感にチノと千夜がひっくり返る。

「悠さんもコーヒーの勉強してください。最近はかなり上達してきましたが、まだまだです」

「わかってるよ〜」

チノと悠のやりとりを見て千夜が「あらあら、まだ先は長いわね」と微笑んだ。

第二百四十四話 ラビットハウス in ロイヤル
キヤッツ

「結局周りきれませんでしたね……」

チノが落ち込んだ様子で千夜と悠に言う。

すでにホテルの近くまで戻ってきている。——時間的にも体力的にも結構厳しかったため、仕方なく帰ることにしたのだ。

「まだ日はあるわ。残りのお店はみんなで行きましょう」

「そうぞ」

千夜と悠が落ち込むチノを励ます。

ホテルのロビーに入ると、いつもは閉まっていた扉が開いていた。

「あれ、ここは？」

「ずっと使われていない雰囲気ね」

「なんかレストランというか、喫茶店みたいな——」

悠のつぶやきにチノと千夜が驚く。

「確かに、喫茶店っぽいです」

「そうですとも。夜はレストラン、昼はカフェをやっておりました」

「やっぱり……」

受付のおばあちゃんがホウキを手に持ってこちらへやってくる。

掃除のために扉を開けていたのだろう。いつもは閉まっていたので気がつかなかった。

「昔は従業員も多かったのですが、今は古くなってしまっ——人も全然です」

おばあちゃんがチノにそう語ると、チノは「あの……」と少し照れ臭そうに言う。

「ここでコーヒーを入れさせもらえないでしょうか！」

「——！」

チノの言葉に千夜と悠が顔を見合わせる。——大賛成だ。

チノの言葉を聞いてか、支配人がやってきて

「自由に使っていていいと朝伝えましたでしょう?」

「初耳ですが……!?」

支配人の言葉にチノと悠がハモる。

そしてお茶会が始まった。

他のみんなはまだ出かけているので、メンバーは千夜、受付のおばあちゃん、支配人、そして悠。

チノがコーヒーを入れている。

「まさかこのメンバーでお茶会をすることになるとは」

「そうね〜」

悠の言葉に千夜がうなずく。

しばらくしてチノがコーヒーをお盆に乗せる。

「お待たせしました」

チノがコーヒーをテーブルに並べると、支配人らは黙々とカップを口に運ぶ。

「――」

支配人は黙ったままコーヒーを口に入れると、チノをギロつと見つめる。

睨まれたと思ったのだろう、チノが若干怯える。

「コーヒーの淹れ方は誰かに習われたのですか?」

「そ、祖父からです!」

チノが若干震えた声で答える。

「素晴らしいお祖父様に教わったのですね……」

支配人が目を瞑る。頭の上に乗っているのが本物のティップイーだったら泣いているか自慢の孫を自慢していただろう。

チノは突然褒められて激しく動揺しているようだった。

「ただいま〜!!」

ロビーの方からココアの声がする。

「一足先に帰ってきたよ——つてあれ!? コーヒーの匂い!」

ココアが驚いた様子でこちらにやつてくる。

「なにここ?! ラビットハウスみたい! 私もカフェ友に入れて!!」

「許可します」

「支配人!?!」

ココアの参加を許可する支配人にチノと悠がハモる。

「ところでココア、他のみんなは?」

悠が尋ねると、ココアはコーヒーを口にしながら

「まだ街を周ってるよ」

と答えた。

「そうか」

「でも、どうしてここでコーヒーを?」

ココアがここでチノがコーヒーを淹れている理由を尋ねてきた。

「ここ、前は喫茶店兼レストランだったらしい。それを聞いてチノがコーヒー淹れてお茶会することにしたんだ」

「そうだったんだ! チノちゃん、旅行中コーヒー淹れられなくて寂しかったのかな?」

「そうかもな——」

「私もパン焼けなくて欲求不満だよ」

ココアがため息と共に言う。

「戻ったぞ——つて、ここはなんだ!?!」

今度はリゼの声がある。

「おかえり」

「おかえりなさい」

コーヒーカップを持って振り向くココアと悠にリゼが首を傾げる。

「なにをしてるんだ?」

「お茶会だよ。リゼも参加するか?」

「あ、ああ……」

「ところで、何の話してたんだっけ？」

リゼがコーヒーを口に入れてから、ココアが話題を戻そうとする。

「ああ……ココアが欲求不満って話だろ」

「そうだったー！」

悠の問題発言とそれに笑顔で同意するココアにリゼが口に入れていたコーヒーを吹き出す。

「なななな、なにー!!!?」

リゼの叫び声が天井の高い室内に響いた。

第二百四十五話 お風呂トラブル

その日の晩――。

「ギャアアアア!!」

ココアの奇声がホテルに響いた。

「ココアちゃん!」

千夜がココアの部屋へ走る。悠やりゼも何事かと後を追う。

「ココア? 大丈夫か?」

悠が扉をノックすると、バスタオルを巻いたココアが出てくる。

「どうやらお風呂に入っていたようだ。」

悠は反射的に目を掌で覆う。

「水! お湯なのに水が出るの!!」

「とりあえず服を着ろ」

「そっち!」

ココアの珍発言にツツコミを入れず、自らの視界を塞ぐ悠にリゼが反応する。

「支配人に抗議しに行ってくる」

ひとまずココアに服を着させ、悠は支配人がいるであろうロビーへ向かう。

「悠さん、ココアさん大丈夫でしたか?」

「ああ、どうやらお風呂からお湯が出ないらしい」

心配そうにしているチノの頭を撫でる。

「ま、そういうこともあるわよね」

「扉壊れて閉じ込められるくらいですし……」

冷めたシャロとチノの反応に悠が「非常事態に順応してる!」とツツコミを入れる。

支配人に事情を話すと、

「修理を呼んだので明日まで待ちなさい」

「開き直った!？」

「どうしよー!まだ体洗えてないよー!」
泣き喚くココアにリゼが

「この近くにスパがあるらしい。みんなで行こう!」
と提案する。

「サイクリングしたときに見つけたんだ」

「気がつかなかった」

「私もだよ」

リゼの言葉に首を傾げる悠とココアにチノが

「一緒のルートじゃなかったんですか?」

と尋ねると、リゼが「なににも詮索するな……」と目を瞑る。

「と、いうわけでスパに来たわけだが——水着あるのか?」

悠が今更な質問をすると、シャロが

「レンタルできるみたいよ」

と答える。

「どうせ1度しか着ないし、周りも知らない人ばかり——普段着ない水着を着てみない?」

ココアが謎のドヤ顔で一同に提案する。

「つてもな……男の水着なんてそんな種類ないだろ」

悠が頭をかきながらつぶやくと、千夜が「そうだわ!」と何か閃いた様子で水着を選ぶ。

「悠くん、これなんかどうかしら」

「スクール水着じゃねえか!誰が着るか!しかもそれ女子用!」

「あら、残念」

「千夜はなにを企んでるんだ!？」

心底残念そうな千夜に悠が震える。

「では、悠さんはここで待っていてください」

「覗くなよー!」

「へいへい……」

チノとりゼに言われ、適当なベンチに座って待つ。

「悠くん! 私たちの水着姿を評価してね!」

「えー!?!」

ココアの発言に思わず驚いてしまった。評価と言われても困るのだが……。

しばらくして、シャロと千夜が出てきた。

「いつもと違う色にしてみたわ。どうかしら?」

シャロのイメージカラーはオレンジだが、今回の水着は緑だ。

そして千夜もイメージカラーは緑だが、今回の水着はオレンジだ。

どうやら、2人で色を交換したらしいが、意外性は薄い。また、2人ともポニーテールだ。

「うーん、あまり新鮮な感じはしないな」

「100点満点中いくら?」

シャロが点数を聞いてきた。

「60点くらいかな」

「悠くんはあまりこういうタイプではないのね……」

「千夜、なにをメモしてる!?!」

次に出てきたのはココア。

「じゃーん! 私は今回思い切って見たよー!」

大人っぽいワインレッドの水着だ。スカートの左についているリボンが特におしゃれだが——本音を言うと、隙間から見えそうで目のやり場に困る。

「ギャップ萌えはしたが背伸びしすぎだ——50点」

悠の言葉に「厳しい!」と目をくへにするココアだが、すぐにリゼを連れてくる。

「ふふふ……悠くん、ここで真打ちの登場だよ！リゼちゃん出ておいでー！」

ココアがりゼの腕を引つ張るが、リゼは一向に出てこない。

「やめろー!!私はこの手の苦手なんだ！悠！期待するなよ！」

「そう言われると期待する」

「期待するな！」

そう言っ出てきたりゼの姿を見て悠が思わず口元を抑える。

明るい色のフリフリな水着を着て、さらにお団子ヘアーのリゼは、あまりのギャップ萌えに目を疑ってしまう。

「なんだかんだでノリノリじゃないか！」

「点数にすると？」

ココアが自信満々に尋ねてくる。

「あまりの変わりように驚いた。70点」

「そんな……ここまでしても悠くんには敵わないのね……！」

千夜が崩れ落ちる。

「そんなこと言われてもね……」

結局、いつもの格好が一番似合っているような気がする。

「まだだ！まだ最終兵器が残っている！」

リゼがそう言っチノを呼ぶ。

「なんか、落ち着きませんね……」

少し顔を赤らめて出てくるチノに悠が思わず心臓を抑えてしまう。

「死にそう」

「威力高すぎた!?!」

心臓を抑える悠にリゼがツツコミを入れる。

「これはもはや最終兵器というより大量破壊兵器だ……」

「採点は!?!」

「まずポニーテールで100点、そしてフリフリの可愛い水着で400点、合計500点」

「満点オーバーした!?!」

髪型だけで満点を超す結果にリゼがツツコミを入れる。

圧倒的な点数差にシヤロと千夜が不満をぶつける。

「審査が偏ってるわ！ 私たちもポニテなのに！」

「再審を要求します！」

悠の肩を揺さぶるシヤロと千夜に、リゼが

「もう早く行くぞ」

と告げた。

第二百四十六話 チェス勝負

「いつもと違うのを着ると、いつもと違う性格になれる気がするよ」
「——そうか？」

ココアの発言に困惑するリゼ。
それとは対照的に千夜は「わかるわ！」と同意する。

「今日はスポーティーな水着だから泳げる気がする！」

「千夜が溺れそうだ!!」

調子に乗って深いところに入ってしまい、息をするのもやつとな千夜に悠がツツコミを入れる。

「大人っぽい水着のココアさんは、いつもよりちよつと大胆だよ」

ココアはそう言って近くにいた同年代——否、年下であろう2人に話しかける。

「君たちどこかで会ったことない？」

「ナンパするな」

「外のプールに連れていきましよう」

チノが調子乗るココアを外のプールに島流しする。

「そうだな。千夜も泳ぐならあっちにあるプールのほうがいいぞ」
リゼも千夜を引き上げる。

「やっぱり外は涼しいね〜!」

「そうですね」

ココア、チノ、悠の3人は外へ。

「あっちでチェスやってる……」

悠がボソツとつぶやくと、チノが興味ありげに近く。

チノと同じ年くらいの少女が大人を相手に戦っている。

「あの子……私と同じ年くらいなのに大人相手に勝ってます」

「はーい!! 次の対戦相手に立候補します!!」

ココアが手を上げるが、すぐにその手を横へ移動させ
「チノちゃんか」

「私がー!?」

ココアが半ば強引にチノを戦わせる。

「よ、よろしくお願いします」

緊張するチノとは対照的に、少々困惑しつつも冷静な少女。

——若干チノが不利な戦況の中、ココアは

「君いくつ?かわいいね、お姉さんとかいる?」

「勝負中にナンパするな。チノ、ココアはなんとかしておくから集中して頑張ってくれ」

「はい」

「あつ悠くん!まだ話の途中ー!!」

ココアを連行する悠だった。

「ココアちゃん」

「千夜ちゃん!?」

「千夜!?」

千夜の声が出た方に目を向けると、千夜がぐるぐると回転しながら流されている。

「千夜ちゃん!今助けに行くからね!」

ココアがプールに飛び込むが、ココアもぐるぐると回転する。

「——流れるプールかよ。焦って損した」

悠の呆れた声をよそに、ココアと千夜がはしゃぐ。

「呆れるわ。そんなので満足してるなんて子供ね」

シャロの声が出た。シャロは浮き輪ボートに乗って優雅に流れるプールの水流に乗る。

「ずるいずるい〜!」

ココアと千夜がシャロのボートを揺らしてひっくり返す。

「過激！平和に遊んで!？」

軽く紛争地帯になつて流れるプールに悠がツツコミを入れる。

「この勝負私たちの勝ちね！」

勝ち誇る千夜とココアにシャロがまたため息。

「はあ……。そんな子供っぽいものを奪つてはしやぐなんて恥ずかしいと思わないの?」

「——さっきシャロも楽しそうに乗ってたじゃん……」

悠のツツコミにシャロがそっぽ向く。

「悠さん……」

「チノ、勝負はどうだ——どうした!？」

ゾンビのように徘徊するチノに悠が驚く。

「負けました……。同年代の子に初めて……。ははは……」

力なく笑つて膝をつくチノに悠とココアが駆け寄る。

「お姉ちゃんたちが慰めて……」

「ほら、なんかプールが光はじめて音楽が聞こえてきたぞ！」

慌てて慰めたり話題を逸らしたりする2人にチノは

「今は一人にしてください……」

と手を振り払った。